

外交部亞洲司研究室編輯
中央電訊社發行

日本時人辭典

亦相生



褚部長序

語云：「知人論事」，事麗人以行，然不知其人，烏足以扼事之要。在政言政，中庸謂：「人存政舉，人亡政息」，故爲政在人，不知人，事且無能論，更何有於政。其他如學術技藝文章息游等事，罔不其理所是，是乎其人。釋氏萬法唯心，卽古所謂皆由人作也。人爲萬有樞軸，故曰欲通其道，先識其人。

中日同文同種，恒人爲友，知性始親，矧茲提攜左右，以蘄至乎東亞新秩序建設之有成，則彼此相知，必至於化，始可以忠而相謀，恕而相諒。願一人卽廣交，亦詎能竭一國之英賢而盡友之，而盡知之，則時人辭典尙矣。予喜是書之有成，謹誌數言，以彰其用。至於成書元末，他賢已盡之矣，何贅爲哉。

中華民國三十一年天中節

吳興褚民誼謹識

周次長序

我國與日本，壤地相接，種族相同，數千年來，文物制度，交相法則，其關係之深鉅，實非其他各國所可相提並論。洎乎近年，兩國關係，益臻密切，而於日本政治之動態，以及社會之演進，尤爲我國民所深切關心者；顧一國政治社會之動盪演變，必有奇偉非常之士，經綸有用之才，爲之綱維，出而主宰，而所謂綱維而主宰之者，不論其在朝在野，或少壯或元老，皆有思想才力之表現，則知人論世，時人辭典尙矣。然我國對於彼邦名人，至今尙未編有完善之成書，可資攷索，不特于知人論世之道，有所闕然，抑且無以應當前之需要。本部研究室同仁，有鑒及此，創爲是編，雖不能謂爲完備無缺，然于東鄰現代之朝野名流，大部搜集，一經檢索，便得其詳，倘亦爲邦人君子所樂許歟！

中華民國三十一年六月

日

梁溪周隆庠謹識

弁言

一、本書專事採集日本當代人物，如已故之伊藤博文、西園寺公望等，皆不在採集範圍之內。

二、本書包括日本各界人物，其與我國有關者，採集尤爲詳盡。

三、本書內容，什九根據日本書報雜誌，絕無虛構杜撰之處。

四、本書對於日本職制官名，除少數係日本獨有，不得不仍用原字外，餘皆逐譯我國通用名稱，或下註等於我國某某字樣；並另編中日職官等異名對照表，附後備查。

併

五、本書註有姓名日文及英文音，庶不解日本姓名發音者，一覽便知。末後并附是項索引，俾便參照。

六、本書編列，以姓名筆畫多寡爲序，姓名之下，各附現職、生年、籍貫，以期眉目清楚。

七、本書年份，悉用公歷，至於中日年份及現在歲數，另詳對照表。

八、本書校印期內，時人現職，已略有變更，故另編新任重要職官錄，以符現實。

九、本書由本室張副主任南山，協同編纂；專員葛鳴一、汪向榮、潘愚谷、畢道貫、顧公任、程西遠、林文秀，暨同仁韋東年、陸慶明、張四維、汪公溥、張伊珍、陳偉心、陳松英、吳鳳梧諸君，或襄助採集，或負責校勘，均著勞績，并此誌念。

十、本書匆促付梓，掛漏謬誤，在所不免；刻正繼續修編，俟修編完竣，當再出版問世，尙祈大雅君子，不吝指教！

外交部亞洲
研究室主任 薛逢元謹識

中華民國三十一年六月 日

日本時人辭典目次

(頁次上加一補字者、係屬於補遺)

姓 名假名内、點之上爲姓、點之下爲名 頁次

一 畫

- 一 木書徳郎 (イツキ・キトクラウ) 一
- 一 宮房治郎 (イチノミヤ・フサヂラウ) 一
- 一 條實孝 (イチヂウ・サネタカ) 一

二 畫

- 二 見甚郎 (フタミ・ジンラウ) 二
- 二 宮治重 (ミノミヤ・ハルシゲ) 二
- 二 荒芳徳 (アラタラ・ヨシノリ) 二
- 二 七田八郎 (シチダ・ハチラウ) 二
- 二 八代則彦 (ヤツシロ・ノリヒコ) 二
- 三 八田嘉明 (ハツタ・ヨシアキ) 三
- 三 八角三郎 (ヤスミ・サブラウ) 三
- 三 八並武治 (ヤツナミ・タケヂ) 三
- 三 八幡博堂 (ヤハタ・ハクダウ) 三
- 四 十河信二 (トガウ・シンジ) 四
- 四 入江 昂 (イリエ・コウ) 四

三 畫

- 入江貫一 (イリエ・クワンイチ) 四
- 入江種矩 (イリエ・タネノリ) 四
- 入間野武雄 (イルマノ・タケヲ) 五
- 入澤文明 (イリサハ・フミアキ) 補一
- 三 土忠造 (ミツチ・テユウザウ) 六
- 三 毛一夫 (ミケ・カズヲ) 六
- 三 木 清 (ミキ・キヨシ) 六
- 三 木武吉 (ミキ・ブキチ) 六
- 三 木森彦 (ミキ・モリヒコ) 六
- 三 枝茂智 (サエグサ・シゲトモ) 七
- 三 宅川百太郎 (ミヤガハ・ヒヤクダラウ) 七
- 三 宅光治 (ミヤケ・クワウヂ) 七
- 三 谷 清 (ミタニ・キヨシ) 補二
- 三 谷隆信 (ミタニ・タカノブ) 補二
- 三 宣戸敬光 (ミムロト・ケイクラウ) 七

目次 一—三畫

一

三浦武美 (ミウラ・タケミ) 補二

三浦義秋 (ミウラ・ヨシアキ) 八

三輪齋莊 (ミツ・ジュシヤウ) 八

三橋孝一郎 (ミツハシ・カウイチラウ) 八

上月良夫 (カウツキ・ヨシヲ) 九

上村松園 (ウヘムラ・シヨウエン) 補二

上村伸一 (カミムラ・シンイチ) 九

上村清太郎 (カミムラ・セイタラウ) 九

下山琢磨 (シモヤマ・タクマロ) 九

下元熊彌 (シモモト・クマヤ) 九

下中彌三郎 (シモナカ・ヤサブラウ) 九

下田文一 (シモダ・フミイチ) 一〇

下田武三 (シモダ・タケザウ) 一〇

下永壽次 (シモナガ・ノリジ) 一〇

下村正助 (シモムラ・シヤウスケ) 一〇

下村 宏 (シモムラ・ヒロシ) 一一

丸山鶴吉 (マルヤマ・ツルキチ) 一一

久米精一 (クメ・セイイチ) 補二

久村種樹 (ヒサムラ・タネキ) 一一

久原房之助 (クハラ・フサノスケ) 一一

久保田久晴 (クボタ・ヒサハル) 一一

久富達夫 (ヒサトミ・タツヲ) 一一

千石興太郎 (センゴク・コウタラウ) 一二

千葉素一 (チバ・シンイチ) 一三

及川源七 (オヒカハ・ゲンシチ) 一三

大川周明 (オホカハ・シウメイ) 一三

大川内傳七 (オホカウチ・デンシチ) 一三

大口喜六 (オホグチ・キロク) 一四

大久保留次郎 (オホクボ・トメジラウ) 一四

大久保利隆 (オホクボ・トシタカ) 一四

大久保利賢 (オホクボ・トシカタ) 一五

大久保偵次 (オホクボ・テイジ) 一五

大木良枝 (オホキ・ヨシエ) 一五

大内暢三 (オホウチ・チャウザウ) 一五

大矢半次郎 (オホヤ・ハンジラウ) 一五

大田爲吉 (オホタ・タメキチ) 一六

大西 齋 (オホニシ・サイ) 一六

大谷光瑞 (オホタニ・クワウズキ) 一六

大谷大暢 (オホダニ・クラウチャウ) 補三

大谷 登 (オホタニ・ノボル) 一七

大村卓一 (オボムラ・タクイチ) 一七

大村清一 (オホムラ・セイイチ)	一七	大橋忠一 (オホハシ・チユウイチ)	二二
大志摩孫四郎 (オホシマ・マゴシラウ)	補三	大藏公望 (オホクラ・キンモチ)	二二
大河内正敏 (オホカウチ・マサトシ)	一七	大類 伸 (オホルキ・ノブ)	補三
大河内輝耕 (オホカウチ・キカウ)	一八	小川平吉 (ヲガハ・ヘイ・チ)	二二
大和田悌二 (オホワダ・テイジ)	補三	小川郷太郎 (ヲガハ・ガウタラウ)	二三
大坪保雄 (オホツボ・ヤスヲ)	一八	小川貫壺 (ヲガハ・クワンジュ)	補四
大垣 研 (オホガキ・ケン)	一八	小山松壽 (コヤマ・シヨウジュ)	二三
大迫幸男 (オホサコ・ユキヲ)	補三	小口五郎 (コグチ・ゴラウ)	二三
大城戸三治 (オホキド・サンヂ)	一九	小日山直登 (コヒヤマ・ナホト)	二四
大倉喜七郎 (オホクラ・キシチラウ)	一九	小汀利得 (ヲチヨウ・トシトク)	二四
大島 浩 (オホシマ・ヒロシ)	一九	小平權一 (コダヒラ・ゴンイチ)	二四
大麻唯男 (オホアサ・タダヲ)	二〇	小池四郎 (コイケ・シラウ)	二四
大野縁一郎 (オホノ・リヨクイチラウ)	二〇	小住徳三郎 (シズミ・トクサブラウ)	補四
大野龍太 (オホノ・リユウタ)	二〇	小見山恭造 (コミヤマ・キヨウザウ)	二四
大森洪太 (オホモリ・コウタ)	二一	小谷節夫 (コタニ・セツブ)	二五
大森義太郎 (オホモリ・ギタラウ)	二一	小林一三 (コバヤシ・イチザウ)	二五
大達茂雄 (オホダブ・シゲヲ)	二一	小林光政 (コバヤシ・ミツマサ)	二五
大淵三樹 (オホブナ・ミキ)	二一	小村次郎 (コバヤシ・ジラウ)	補四
大熊正吉 (オホクマ・マサキチ)	二一	小林宗之助 (コバヤシ・ソウノスケ)	二五
大橋八郎 (オホハシ・ハチラウ)	二二	小林省三郎 (コバヤシ・シヤウサブラウ)	二六

小林順一郎 (コバヤシ・ジュンイチラウ)	二六
小林躋造 (コバヤシ・セイザウ)	二六
小松輝久 (コマツ・テルヒサ)	二七
小泉又次郎 (コイズミ・マタジラウ)	二七
小泉信三 (コイズミ・シンザウ)	補四
小泉悟郎 (コイズミ・ゴラウ)	二七
小泉親彦 (コイズミ・チカヒコ)	二七
小畑忠良 (ツバタ・タダヨシ)	二八
小畑敏四郎 (ツバタ・トシシラウ)	二八
小原正樹 (ツバラ・マサキ)	補五
小原直 (ツバラ・ナホシ)	二八
小倉正恆 (ツクラ・マサツネ)	二八
小栗一雄 (ツクリ・カズヲ)	二九
小島新一 (コジマ・シンイチ)	二九
小島精一 (コジマ・セイイチ)	二九
小野 猛 (ノノ・タケシ)	二九
小森七郎 (コモリ・シチラウ)	補五
小須田勝造 (コスダ・カツザウ)	三〇
小幡酉吉 (フバタ・トリキチ)	三〇
小磯國昭 (コイツコクニアキ)	三〇

小竹 茂 (コタケ・シゲル)	補四
山川 健 (ヤマカハ・ケン)	三〇
山川端夫 (ヤマカハ・タダヲ)	三一
山下奉文 (ヤマシタ・ホウブン)	三一
山下知彦 (ヤマシタ・トモヒコ)	三一
山下龜三郎 (ヤマシタ・カメサブラウ)	三一
山下魏八郎 (ヤマシタ・ギハチラウ)	三一
山内静夫 (ヤマノウチ・シヅヲ)	三二
山内静吾 (ヤマノウチ・セイゴ)	三二
山田乙三 (ヤマダ・オトザウ)	補五
山田三良 (ヤマダ・サブラウ)	三二
山田良秀 (ヤマダ・ヨシヒデ)	三二
山田純三郎 (ヤマダ・ジュンザブラウ)	補五
山田龍雄 (ヤマダ・タツヲ)	三三
山本五十六 (ヤマモト・イツロク)	三三
山本弘毅 (ヤマモト・コウキ)	三三
山本英輔 (ヤマモト・エイスケ)	三三
山本厚三 (ヤマモト・コウザウ)	三四
山本善治 (ヤマモト・ヨシハル)	三四

山本達雄(ヤマモト・タツヲ)
 山本熊一(ヤマモト・クマイチ)
 山本鶴一(ヤマモト・ツルイチ)
 山西恆郎(ヤマニシ・ツネラウ)
 山形 清(ヤマガタ・キヨシ)
 山住克巳(ヤマズミ・カツミ)
 山岡重厚(ヤマツカ・シゲアツ)
 山室宗武(ヤマムロ・ムネタケ)
 山岡萬之助(ヤマツカ・マンノスケ)
 山浦貫一(ヤマウラ・クワンイチ)
 山崎靖純(ヤマサキ・セイジュン)
 山崎達之輔(ヤマサキ・タツノスケ)
 山崎 巖(ヤマサキ・イハホ)
 山梨武夫(ヤマナシ・タケヲ)
 山脇正隆(ヤマワキ・マサタカ)
 山路 章(ヤマヂ・アキラ)
 川本邦雄(カハモト・クニヲ)
 川本芳太郎(カハモト・ヨシタラウ)
 川西清司(カハニシ・セイジ)
 川岸文三郎(カハギシ・ブンザブラウ)

三四
 三四
 三五
 三五
 三五
 三五
 三五
 三五
 三五
 三五
 三五
 三五
 三五
 三五
 三五
 三五
 三六
 三六
 三六
 三六
 三六
 三七
 三七
 三七
 補六
 三七
 三七
 三七
 三七
 三八
 三八

三七、補六

川面隆三(カハヅラ・リュウザウ)
 川島信太郎(カハシマ・シンタラウ)
 川島義之(カハシマ・ヨシユキ)
 川崎 克(カハサキ・カツ)
 川越文雄(カハゴエ・タケヲ)
 川越 茂(カハゴエ・シゲル)
 工藤 忠(クドウ・チユウ)
 工藤鐵男(クドウ・テツヲ)
 土方成美(ヒヂカタ・シゲミ)
 土田 豊(ツチダ・ユタカ)
 土岐嘉平(トキ・カヘイ)
 土肥原賢二(ドヒハラ・ケンジ)
 土橋勇逸(ツチハシ・ユウイツ)
 土屋計左右(ツチヤ・ケイザウ)
 土肥 巖(ドヒ・タダシ)

四畫

三八
 三八
 三八
 三八
 三九
 三九
 三九
 三九
 四〇
 四〇
 四〇
 四〇
 四〇
 四〇
 四〇
 四〇
 四一
 四一
 四一
 補三
 四二
 四二
 四二
 四二
 四二
 四二

中山健藏 (ナカヤマ・ケンザウ)	四二	中島彌團次 (ナカジマ・ヤダンジ)	四六
中井増太郎 (ナカキ・マスタラウ)	四二	中野正剛 (ナカノ・セイガウ)	四六
中永太郎 (ナカナガ・タラウ)	補七	中野金次郎 (ナカノ・キンジラウ)	四七
中西敏憲 (チカニシ・トシノリ)	四三	中野登美雄 (ナカノ・トミヲ)	四七
中村安次郎 (ナカムラ・ヤスジラウ)	四三	中根直介 (ナカネ・ナホスケ)	四七
中村良三 (ナカムラ・リヤウザウ)	四三	五島慶太 (ゴタウ・ケイタ)	補七
中村孝太郎 (ナカムラ・カウタラウ)	四三	井川忠雄 (キカハ・タダヲ)	四七
中村明人 (ナカムラ・アキト)	四四	井上成美 (キノウヘ・シゲヨシ)	四七
中村勝平 (ナカムラ・カツヒラ)	四四	井上匡四郎 (キノウヘ・タダシラウ)	補七
中村榮次 (ナカムラ・エイジ)	補七	井上忠也 (キノウヘ・タダヤ)	補八
中村撰一 (ナカムラ・センイチ)	補七	井上紅梅 (キノウヘ・コウバイ)	四八
中村豊一 (ナカムラ・トヨイチ)	四四	井上謙吉 (キノウヘ・ケンキチ)	四八
中谷武世 (ナカタニ・タケヨ)	四四	井田盤楠 (キダ・イハクス)	四八
中根貞彦 (ナカネ・サダヒコ)	四四	井口貞夫 (キグチ・サダツ)	四八
中原義正 (ナカハラ・ヨシマサ)	四四	井出宣時 (キデ・ノブトキ)	四九
中原謙司 (ナカハラ・キンジ)	四五	井出鐵藏 (キデ・テツザウ)	四九
中島三郎 (ナカジマ・サブヲウ)	四五	井坂 孝 (キサカ・タカシ)	四九
中島今朝吾 (ナカジマ・ケサゴ)	四五	井野英一 (キノ・エイイチ)	補八
中島知久平 (ナカジマ・チクヘイ)	四五	井野碩哉 (キノ・ヒロヤ)	四九
中島鐵藏 (ナカジマ・テツザウ)	四六	井關隆昌 (キセキ・タカマサ)	四九

今井五介(イマキ・ゴスケ)	補八	太田泰治(オホタ・ヤスヂ)	五二
今井武夫(イマキ・タケヲ)	五〇	太田耕造(オホタ・カウザウ)	五三
今田新太郎(イマダ・シンタラウ)	五〇	天羽英二(アマウ・エイジ)	五三
今吉敏雄(イマヨシ・トシヲ)	補八	日比野正治(ヒビノ・マサハル)	五三
今村均(イマムラ・ヒトシ)	五〇	日高信六郎(ヒダカ・シンロクラウ)	五三
今村新太郎(イマムラ・シンタラウ)	五〇	木下半治(キノシタ・ハンヂ)	五四
今村等(イマムラ・ヒトシ)	五〇	木下敏(キノシタ・ビン)	五四
今松治郎(イママツ・ヂラウ)	五一	木戸幸一(キド・カウイチ)	五四
内山岩太郎(ウチヤマ・イハタラウ)	補八	木内四郎(キウチ・シラウ)	五四
内田五郎(ウチダ・ゴラウ)	五一	木村四郎七(キムラ・シラウシチ)	五五
内ヶ崎作三郎(ウチガサキ・サクサブラウ)	五一	木村兵太郎(キムラ・ヘイタラウ)	五五
内藤熊喜(ナイトウ・クマキ)	五一	木村尙達(キムラ・シヤウタツ)	五五
公森太郎(キミモリ・タラウ)	五一	木村増太郎(キムラ・マスタラウ)	五五
友松圓諦(トモマツ・エンテイ)	五二	木村銳市(キムラ・エイイチ)	五五
及川古志郎(オヒカハ・コシラウ)	五二	水戸春造(ミト・ハルサウ)	五六
及川恆忠(オヒカハ・ツネタダ)	五二	毛里英於菟(モウリ・エオト)	五六
太田一郎(オホタ・イチラウ)	五二	水谷長三郎(ミヅタニ・チャウザブラウ)	五六
太田正孝(オホタ・マサタカ)	一五、補九	水津彌吉(ミヅ・ヤキチ)	五六
太田知庸(オホタ・トモツネ)	五二	水野梅曉(ミヅノ・ウメアキ)	五六
		水野鍊太郎(ミヅノ・レンタラウ)	五七

牛島 滿 (ウシジマ・ミツル)	五七	古賀 峯一 (コガ・ミネイチ)	六二
牛島 實常 (ウシジマ・ミノツネ)	五七	出淵 勝次 (デブチ・カツジ)	六二
手島 榮 (テジマ・サカエ)	五八	平井 出貞三 (ヒラキデ・テイザウ)	六三
犬養 健 (イヌカヒ・ケン)	補九	平生 飢三郎 (ヒラフ・ハチサブラウ)	六三
牛塚 虎太郎 (ウシヅカ・トラタラウ)	補九	平田 正判 (ヒラタ・セイハン)	六三
五 畫		平田 昇 (ヒラタ・ノボル)	六三
市河 彦太郎 (イチカハ・ヒコタラウ)	五九	平出 英夫 (ヒラデ・ヒデオ)	六四
北島 謙次郎 (キタジマ・ケンジラウ)	五九	平沼 騏一郎 (ヒラヌマ・キイチラウ)	六四
北 聆吉 (キタ・レイキチ)	五九	平 貞藏 (タヒラ・テイザウ)	六二
北 勝太郎 (キタ・カツタラウ)	五九	平野 力三 (ヒラノ・リキザウ)	六四
半井 清 (ナカキ・キヨシ)	六〇	平野 義太郎 (ヒラノ・ヨシタラウ)	六五
加田 哲二 (カダ・テツジ)	六〇	平賀 讓 (ヒラガ・ユヅル)	補一〇
加納 芳三郎 (カナフ・ヨシサブラウ)	六〇	平澤 要 (ヒラザハ・カナメ)	六五
加藤 外松 (カトウ・ソトマツ)	六〇	平瀬 愛雄 (ヒラセ・ヨシタ)	六五
加藤 宗治 (カトウ・クワンヂ)	六〇	平塚 廣藏 (ヒラツカ・ヒロザウ)	六五
加藤 武男 (カトウ・タケヲ)	六一	左近 司政三 (サコンジ・マサザウ)	六五
加藤 勘十 (カトウ・カンジノ)	六一	本田 忠雄 (ホンダ・タダヲ)	六六
加藤 隆義 (カトウ・タカヨシ)	六一	本田 増藏 (ホンダ・マサザウ)	六六
加藤 傳次郎 (カトウ・デンジラウ)	六一	本多 政材 (ホンダ・マサキ)	六六
古野 伊之助 (フルノ・イノスケ)	六二	本多 熊太郎 (ホンダ・クマタラウ)	六六

本位田祥男(ホンキデン・ヨシア)	六六	田子一民(タゴ・イチミン)	補一一
本間 精(ホンマ・セイ)	六七	甘粕正彦(アマカス・マサヒコ)	七一
本間雅晴(ホンマ・マサハル)	六七	田川大吉郎(タガハ・ダイキチラウ)	七一
本莊 繁(ホンジヤウ・シゲル)	六七	田中 收(タナカ・オサム)	七二
本野成一(モトノ・セイイチ)	六七	田中重之(タナカ・シゲユキ)	七二
本領信治郎(ホンリヤウ・シンヂラウ)	補一〇	田中武雄(タナカ・タケヲ)	七二
末次信正(スエツグ・ノブマサ)	六八	田村幸策(タムラ・カウサク)	七四
正力松太郎(シヤウリキ・マツタラウ)	六八	田中耕太郎(タナカ・カウタラウ)	補一一
永井松三(ナガキ・マツザウ)	六八	田中 清(タナカ・キヨシ)	七二
永井柳太郎(ナガキ・リウタラウ)	六九	田中都吉(タナカ・トキチ)	七三
永田秀次郎(ナガタ・ヒデジラウ)	六九	田中静壹(タナカ・セイイチ)	七三
永見俊徳(ナガミ・トシノリ)	六九	田中隆吉(タナカ・リュウキチ)	七三
永持源次(ナガモチ・ゲンジ)	七〇	田中穂積(タナカ・ホヅミ)	補一一
永津佐比重(ナガツ・サヒエ)	七〇	田中鐵三郎(タナカ・テツサブラウ)	七三
永野修身(ナガノ・オサミ)	七〇	田中 豊(タナカ・ユタカ)	七四
片山 哲(カタヤマ・テツ)	七〇	田代重徳(タシロ・シゲノリ)	七四
片倉 衷(カタクラ・マコト)	七一	田尻愛義(タジリ・アキヨシ)	七四
片岡 安(カタヲカ・ヤスシ)	補一〇	田知花信量(タチバナ・シンリヤウ)	七四
片桐英吉(カタギリ・エイキチ)	補一〇	田村謙治郎(タムラ・ケンヂラウ)	七五
片野重修(カタノ・ヂユウシウ)	補一一	田島榮次郎(タジマ・エイジラウ)	七五

田 誠 (デン・マコト)	七一	石川 準十郎 (イシカハ・シユンジフラウ)	七八
田結 篋 (タユヒ・ユタカ)	七五	石井 康 (イシキ・カウ)	七九
田邊七六 (タナベ・シチロク)	七五	石井菊次郎 (イシキ・キクジラウ)	七九
田邊忠男 (タナベ・タダヲ)	七五	石田 馨 (イシダ・カヲル)	七九
田邊秀雄 (タナベ・ヒデア)	補一一	石阪 弘 (イシサカ・ヒロシ)	八〇
田邊威武 (タナベ・モリタケ)	補一一	石射猪太郎 (イシイ・キタラウ)	八〇
田邊治通 (タナベ・ハルミチ)	七五	石黒忠篤 (イシグロ・タダアツ)	八〇
白石元治郎 (シライシ・モトヂラウ)	七六	石黒英彦 (イシグロ・ヒデヒコ)	八〇
白石幸三郎 (シライシ・カウザブラウ)	七六	石原莞爾 (イシハラ・クワンジ)	八一
白根竹介 (シラネ・タケスケ)	七六	石原廣一郎 (イシハラ・ヒロイチラウ)	八一
白鳥敏夫 (シラトリ・トシヲ)	七七	石渡莊太郎 (イシワタリ・サウタラウ)	八一
矢内原忠雄 (ヤナイバラ・タダヲ)	七七	石橋湛山 (イシバシ・タンザン)	八二
矢田七太郎 (ヤダ・シチタラウ)	補一二	石澤 豊 (イシザハ・ユタカ)	八二
矢田部保吉 (ヤタベ・ヤスキケ)	七七	立 作 太郎 (タチ・サクタラウ)	八二
矢吹省三 (ヤブキ・シヤウザウ)	補一二	立見豊丸 (タツミ・トヨマル)	八二
矢野仁一 (ヤノ・ジンイチ)	補一二	四手井綱正 (シテホ・カウセイ)	八二
矢野音三郎 (ヤノ・オトサブラウ)	七八	六 畫	
矢野征紀 (ヤノ・セイキ)	七八	伍堂貞雄 (ゴダウ・タクヲ)	八三
矢野恒太 (ヤノ・ツネタ)	七八	伊東政喜 (イトウ・マサキ)	八三
矢野 眞 (ヤノ・マコト)	七八	伊澤多喜男 (イザハ・タキヲ)	八三

伊藤文吉 (イトウ・ブンキチ)	八四	安田武雄 (ヤスダ・タケヲ)	八八
伊藤正徳 (イトウ・マサノリ)	八四	安宅彌吉 (アタカ・ヤキチ)	八八
伊藤秀三 (イトウ・ヒデザウ)	八四	安岡正篤 (ヤスアカ・マサアツ)	八八
伊藤述史 (イトウ・ノブズミ)	八四	安保清種 (アボ・キヨカズ)	八九
伊藤與三郎 (イトウ・ヨサブラウ)	補一三	安倍能成 (アベ・ヨシシゲ)	八九
伊藤賢三 (イトウ・ケンザウ)	八四	安倍源基 (アベ・ゲンキ)	八九
光行次郎 (ミツユキ・ジラウ)	八五	安部磯雄 (アベ・イソヲ)	八九
次田大三郎 (ツギタ・ダイサブラウ)	八五	安達堅造 (アダチ・ケンザウ)	九〇
宇佐美寛爾 (ウサミ・クワンジ)	八五	安達謙藏 (アダチ・ケンザウ)	九〇
宇佐美與屋 (ウサミ・オキイヘ)	八五	安藤正純 (アンドウ・マサズミ)	九一
宇垣一成 (ウガキ・カズシゲ)	八六	安藤狂四郎 (アンドウ・キヤウシラウ)	九一
宇垣 纒 (ウガキ・マトム)	八六	安藤利吉 (アンドウ・リキチ)	九一
宇都宮直賢 (ウツノミヤ・ナホカタ)	八七	安藤紀三郎 (アンドウ・キサブラウ)	補一四
守島五郎 (モリシマ・ゴラウ)	補一三	庄司乙吉 (シヤウジ・オトキチ)	九二
安川雄之助 (ヤスカハ・ユウノスケ)	八七	江口順一 (エグチ・ジュンイチ)	九二
安井英二 (ヤスホ・エイジ)	八七	江藤源九郎 (エトウ・ゲンククラウ)	九二
安井誠一郎 (ヤスホ・セイイチラウ)	八七	江藤夏雄 (エトウ・ナツヲ)	九二
安井藤治 (ヤスホ・トウヂ)	八八	池田成彬 (イケダ・セイヒン)	九二
安江仙弘 (ヤスエ・ノリヒロ)	八八	池田純久 (イケダ・スミヒサ)	九三
安田丈助 (ヤスダ・チャウスケ)	補一三	池田忠孝 (イケダ・タダタカ)	九三

池田 清 (イクダ・キヨシ)	補一四	吉野信次 (ヨシノ・シンジ)	九七
池尾芳藏 (イケブ・ヨシザウ)	九三	吉積正雄 (ヨシヅミ・マサヲ)	補一三
寺内壽一 (テラウチ・ジュイチ)	九四	吉澤清次郎 (ヨシザハ・セイジラウ)	九八
寺西秀助 (テラニシ・ヒデスケ)	九四	多田 晃 (タダ・アラ)	補一三
寺尾 進 (テラヲ・ススム)	補一四	多田 駿 (タダ・ハヤヲ)	九八
寺岡洪平 (テラヲカ・コウヘイ)	九五	多田禮吉 (タダ・レイキチ)	九八
寺島 健 (テラシマ・タケシ)	補一四	成田一郎 (ナリタ・イチラウ)	九八
寺師義信 (テラシ・ヨシノブ)	補一四	早川三郎 (ハヤカハ・サブラウ)	九九
寺崎太郎 (テラサキ・タラウ)	九五	有田八郎 (アリタ・ハチラウ)	九九
寺崎英成 (テラサキ・ヒデナリ)	九五	有末精三 (アリスエ・セイザウ)	九九
寺崎英雄 (テラサキ・ヒデヲ)	九五	有地十五郎 (アリチ・ジフゴラウ)	一〇〇
吉田丹一郎 (ヨシダ・タンイチラウ)	九五	有馬長太郎 (アリマ・チャウタラウ)	一〇〇
吉田政治 (ヨシダ・マサヂ)	九五	有賀武夫 (アリガ・タケヲ)	補一五
吉田益三 (ヨシダ・マスザウ)	九六	有馬 寛 (アリマ・ヒロシ)	一〇〇
吉田 茂 (ヨシダ・シゲル)	九六	有馬頼賢 (アリマ・ヨリヤス)	一〇〇
吉田 茂 (ヨシダ・シゲル)	九六	牟田口廉也 (ムタグチ・カドヤ)	一〇一
吉田 豊彦 (ヨシダ・トヨヒコ)	九六	百武三郎 (ヒヤクタク・サブラウ)	一〇一
吉田 惠 (ヨシダ・シン)	九七	百武源吾 (ヒヤクタク・ゲンゴ)	一〇一
吉田善吾 (ヨシダ・ゼンゴ)	九七	百武晴吉 (ヒヤクタク・セイキチ)	一〇一
吉野弘之 (ヨシノ・ヒロユキ)	九七	竹下義晴 (タケシタ・ヨシハル)	一〇二

竹内可吉 (タケウチ・カキチ)	一〇二
竹内賢久治 (タケウチ・カクヂ)	一〇二
竹中政一 (タケナカ・マサイチ)	一〇二
竹内新平 (タケウチ・シンペイ)	一〇三
竹尾 式 (タケヲ・ハジメ)	一〇三
米内山庸夫 (ヨナイヤマ・ツネヲ)	一〇三
米内光政 (ヨナイ・ミツマサ)	一〇三
羽田 亨 (ハネダ・トホル)	補一五
羽生雅則 (ハフ・マサノリ)	一〇三
白田寛三 (ウスダ・クワンザウ)	一〇四
西山 勉 (ニシヤマ・ツトム)	一〇四
西本 喬 (ニシモト・タカシ)	一〇四
西 春彦 (ニシ・ハルヒコ)	一〇四
西尾善造 (ニシヲ・ジュザウ)	一〇四
西岡竹次郎 (ニシヲカ・タケジラウ)	一〇五
西原一策 (ニシハラ・イツサク)	一〇五
西園寺八郎 (サイオンジ・ハチラウ)	補一五
辻 邦助 (ツジ・クニスケ)	一〇五
那須 皓 (ナス・シロシ)	一〇五

佐久間 信 (サクマ・シン)	一〇七
住山徳太郎 (スミヤマ・トクタラウ)	一〇七
佐方繁木 (サカタ・シゲキ)	一〇七
佐佐木行忠 (ササキ・ユキタダ)	一〇七
佐佐木到一 (ササキ・タウイチ)	一〇七
佐佐木謙一郎 (チサキ・ケンイチラウ)	一〇八
佐佐弘雄 (サツサ・ヒロヲ)	一〇八
佐佐眞之助 (サツサ・シンノスケ)	一〇八
佐伯清一 (サキ・セイイチ)	一〇八
佐野光信 (サノ・ミツノブ)	一〇八
佐藤市郎 (サトウ・イチラウ)	一〇九
佐藤安之助 (サトウ・ヤスノスケ)	一〇九
佐藤尚武 (サトウ・ナホタケ)	一〇九
佐藤秀三 (サトウ・シウザウ)	補一六
佐藤 修 (サトウ・ヨサム)	一〇九
佐藤賢了 (サトウ・ケンレウ)	一〇九
佐藤應次郎 (サトウ・オウジラウ)	一〇九
作田莊一 (サクダ・シヤウイチ)	一一〇
伴 莊一郎 (バン・サウイチラウ)	一一〇
君島清吉 (キミシマ・セイキチ)	一一〇

串田萬藏(クシダ・マンザウ)

一一一

谷口元治郎(タニグチ・モトヂラウ)

一一一

谷口吉彦(タニグチ・キチヒコ)

一一二

谷口恒二(タニグチ・ツネジ)

一一二

谷川徹三(タニカハ・テツザウ)

一一二

谷本馬太郎(タニモト・ウマタラウ)

一一二

谷正之(タニ・マサユキ)

一一一

谷萩那華雄(タニハギ・ナカヲ)

一一一

谷壽夫(タニ・ヒサヲ)

一一一

穴戸好信(シシド・ヨシノブ)

一一二

尾崎行雄(ヲザキ・ユキヲ)

一一二

尾崎秀實(ヲザキ・ヒデミ)

一一三

尾高龜藏(スエタカ・カメザウ)

一一三

尾藤加勢士(ヲフヂ・カセヲ)

一一三

坂本政右衛門(サカモト・マサエモン)

一一四

坂本瑞男(サカモト・ミヅヲ)

一一四

坂本龍起(サカモト・タツキ)

一一四

坂西一良(バンザイ・イチリヤウ)

一一四

坂西利八郎(バンザイ・リハチラウ)

一一四

坂谷希一(サカタニ・キイチ)

一一五

坂谷芳郎(サカタニ・ヨシラウ)

一一五

赤木親之(アカギ・チカユキ)

一一五

赤池 濃(アカイケ・ノウ)

一一六

赤松小寅(カマツ・コトラ)

一一六

赤松克麿(アカマツ・カツマロ)

一一六

村上知行(ムラカミ・トモユキ)

一一七

村上龍太郎(ムラカミ・リュウタラウ)

一一七

村山長舉(ムラヤマ・チャウキヨ)

一一七

村井倉松(ムラキ・クラマツ)

一一七

村田五郎(ムラタ・ゴラウ)

一一七

村田孜郎(ムラタ・シラウ)

一一七

村田省藏(ムラタ・シヤウザウ)

一一八

村岡典嗣(ムラサカ・ツネツグ)

一一八

村瀬直養(ムラセ・チヨクヤウ)

一一八

杉山 元(スギヤマ・ゲン)

一一八

杉山元治郎(スギヤマ・モトヂラウ)

一一九

杉村廣藏(スギムラ・ヒロザウ)

一一九

杉原荒太(スギハラ・アラタ)

一一九

杉森孝次郎(スギモリ・カウジラウ)

一一九

町田忠治(マチダ・チユウヂ)

一二〇

町尻豊基 (マチジリ・カズモト)	一二〇	岡野増次郎 (ツカノ・マスジラウ)	一二五
角田政之助 (ツノダ・マサノスケ)	一二一	岡部直三郎 (ツカベ・ナホサブラウ)	一二六
角尾 晋 (ツノフ・シン)	一二一	岡部長景 (ツカベ・ナガカゲ)	一二六
八 晝		岡 敬純 (ツカ・ヨシズミ)	一二三
來栖二郎 (クルス・サブラウ)	一二二	和久田鐵雄 (ワクダ・テツヲ)	一二六
兒玉友雄 (コダマ・トモヲ)	一二二	和田小六 (ワダ・コロク)	一二六
兒玉秀雄 (コダマ・ヒデヲ)	一二二	和田日出吉 (ワダ・ヒデヨシ)	一二七
兒玉謙次 (コダマ・ケンジ)	一二二	和田專三 (ワダ・センザウ)	補一七
周山滿藏 (スヤマ・マンザウ)	一二三	和知鷹二 (ワチ・タカジ)	一二七
周東英雄 (ストウ・ヒデヲ)	補一七	河相達夫 (カアヒ・タツフ)	補一七
岡本一策 (ツカモト・イツサク)	一二三	坪上貞二 (ツボガミ・テイジ)	一二七
岡本季正 (ツカモト・スエマサ)	一二三	奈良武次 (ナラ・タケジ)	一二七
岡本清福 (ツカモト・セイフク)	一二三	岩井重太郎 (イハキ・デュウタラウ)	一二八
岡田才一 (ツカダ・サイイチ)	一二四	岩田富美夫 (イハタ・トミヲ)	一二八
岡田文秀 (ツカダ・フミヒデ)	一二四	岩田愛之助 (イハタ・イノスケ)	一二八
岡田忠彦 (ツカダ・タダヒコ)	一二四	岩村成允 (イハムラ・セイイン)	一二八
岡田兼一 (ツカダ・ケンイチ)	一二四	岩村清一 (イハムラ・セイイチ)	一二八
岡田啓介 (ツカダ・ケイスケ)	一二五	岩村通世 (イハムラ・ミチヨ)	一二九
岡村留次 (ツカムラ・ヤスジ)	一二五	岩村義雄 (イハムラ・ヨシヲ)	一二九
岡崎清三郎 (ツカザキ・セイザブラウ)	一二五	岩畔豪雄 (イハハセ・タケヲ)	一二九

岩倉道俱(イハクラ・ミチトモ)	補一七	林仙之(ハヤシ・ナリユキ)	一三三
岩崎民男(イハサ・タミヲ)	補一七	林桂(ハヤシ・カツラ)	一三三
岩越恆一(イハゴエ・ツネイチ)	一二九	林博太郎(ハヤシ・ヒロタラウ)	一三三
岸田國士(キシタ・クニヲ)	一三〇	林義秀(ハヤシ・ヨシヒデ)	一三三
岸本綾夫(キシモト・アヤヲ)	一三〇	林銃十郎(ハヤシ・センジブラウ)	一三四
岸 信介(キシ・ノブスケ)	一二九	林頼三郎(ハヤシ・ライサブラウ)	一三四
迫水久常(セマミ・ヒサツネ)	一三〇	林 彌三吉(ハヤシ・ヤミキチ)	一三五
武内文彬(タケウチ・ブンピン)	一三〇	東 武(アヅマ・タケシ)	一五五
武内俊二郎(タケウチ・トシジラウ)	一三〇	東條英機(トウデウ・エイキ)	一三五
武井大助(タケキ・ダイスケ)	一三一	東郷茂徳(トウガウ・シンゲノリ)	一三六
武井羣嗣(タケキ・グンジ)	補一九	東郷 實(トウガウ・ミノル)	補一八
武田徳三郎(タケダ・トクサブラウ)	一三一	東 榮二(アヅマ・エイジ)	一三五
武者小路公共(ムシヤコウヂ・キントモ)	一三一	松下 元(マツシタ・ゲン)	一三六
武富敏彦(タケトミ・トシヒコ)	一三一	松方幸次郎(マツカタ・カウジラウ)	一三六
武部六藏(タケベ・ロクザウ)	一三一	松井太久郎(マツキ・タクラウ)	一三七、補廿一
武部治右衛門(タケベ・ヂュモン)	一三二	松井石根(マツキ・イハネ)	一三七
武藤 章(ムトウ・キヲ)	一三二	松井 命(マツキ・マコト)	一三七
明石照男(アカシ・テルヲ)	一三二	松井春生(マツキ・ハルヲ)	一三八
昌谷 忠(サカヤ・タダシ)	一三二	松井源之助(マツキ・ゲンノスケ)	一三八
林 久治郎(ハヤシ・キウヂラウ)	一三三	松永 材(マツナガ・サイ)	一三八

松平忠久 (マツダヒラ・タダヒサ)	一三八
松平康昌 (マツダヒラ・ヤスマサ)	一三九
松平恆雄 (マツダヒラ・ツネヲ)	一三九
松平頼壽 (マツダヒラ・ヨリナガ)	一三九
松本治一郎 (マツモト・ヂイチラウ)	一四〇
松本忠雄 (マツモト・タダヲ)	一四〇
松本勇平 (マツモト・ユウヘイ)	一四〇
松本重治 (マツモト・ヂユウヂ)	一四〇
松本健兒 (マツモト・ケンジ)	一四〇
松本蒸治 (マツモト・ジヨウヂ)	一四一
松本 學 (マツモト・マナブ)	一四一
松本龜次郎 (マツモト・カメジラウ)	補一七
松田令輔 (マツダ・レイスケ)	補一八
松江春次 (マツエ・ハルジ)	一四一
松村久義 (マツムラ・ヒサヨシ)	一四二
松村秀逸 (マツムラ・ヒデスグ)	一四二
松村 憲 (マツムラ・ススム)	一四二
松村謙三 (マツムラ・ケンザウ)	補一八
松阪廣政 (マツザカ・ヒロマサ)	補一八
松岡洋右 (マツツカ・ヤウスケ)	一四二

松岡駒吉 (マツツカ・コマキナ)	一四三
松延繁次 (マツノブ・シゲジ)	一四三
松宮 順 (マツミヤ・ハジメ)	一四三
松前重義 (マツマヘ・シゲヨシ)	補一八
松室孝良 (マツムロ・タカヨシ)	一四四
松浦淳六郎 (マツウラ・ジュンロククラウ)	一四四
松浦鎮次郎 (マツウラ・チンジラウ)	一四四
松野鶴平 (マツノ・ツルヘイ)	一四四
松隈秀雄 (マツクマ・ヒデヲ)	一四五
板垣征四郎 (イタガキ・セイシラウ)	一四五
河上丈太郎 (カハカミ・ヂヤウタラウ)	一四五
河上弘一 (カハカミ・コウイチ)	一四五
河田 烈 (カハダ・イサヲ)	一四六
河本大作 (カハモト・ダイサク)	一四六
河合良成 (カハイ・ヨシナリ)	一四六
河合榮治郎 (カハイ・エイヂラウ)	一四七
河合 操 (カハイ・ミサヲ)	一四七
河村參郎 (カハムラ・サブラウ)	一四七
河村恭輔 (カハムラ・キヨウスケ)	一四七
河原田稼吉 (カハラダ・カキチ)	一四七

河野一郎(カウノ・イチヲウ)

一四八

阿部房次郎(アベ・フサジヲウ)

一五三

河野 密(カウノ・ミツ)

一四八

阿部信行(アベ・ノブユキ)

一五三

河邊正三(カハベ・シヤウザウ)

一四八

阿部賢一(アベ・ケンイチ)

一五三

河邊虎四郎(カハベ・トラシヲウ)

一四九

阿部勝雄(アベ・カツヲ)

一五三

波田重一(ハダ・シゲカズ)

一四九

直木倫太郎(ナホキ・リンタヲウ)

補一九

波多野乾一(ハダノ・ケンイチ)

一四九

金井章次(カナキ・シヤウジ)

一五四

油谷恭一(ユタニ・キヨウイチ)

一四九

金光庸夫(カネミツ・ツネヲ)

一五四

牧野 元(マキノ・モト)

補一九

金澤正夫(カナザハ・マサヲ)

一五四

牧田覺三郎(マキタ・カクサブラウ)

補一九

長久保俊夫(ナガクボ・トシヲ)

一五四

牧野正迪(マキノ・マサミチ)

一四九

長田常清(ナガタ・ツネキヨ)

一五五

牧野良三(マキノ・リヤウザウ)

一五〇

長谷川如是閑(ハセガハ・ニヨゼカン)

一五五

芳澤謙吉(ヨシザハ・ケンキチ)

一五〇

長谷川 基(ハセガハ・キ)

一五五

花谷 正(ハナタニ・タダシ)

一五〇

長谷川 清(ハセガハ・キヨシ)

一五五

花島孝一(ハナジマ・カウイチ)

一五〇

長谷川 透(ハセガハ・トホル)

一五六

近衛文麿(キノエ・フミマロ)

一五〇

長岡隆一郎(ナガヲカ・リュウイチヲウ)

一五六

近藤英次郎(コンドウ・エイジヲウ)

一五一

長 頭(チャウ・イサム)

一五六

近藤信竹(コンドウ・ノブタケ)

一五二

長島 毅(ナガシマ・ハタス)

一五六

近藤榮藏(コンドウ・エイザウ)

一五二

長野 朗(ナガノ・アキラ)

一五六

近藤壤太郎(コンドウ・シヤウタヲウ)

一五二

門野重九郎(カドノ・チヨウキウヲウ)

一五七

阿南惟幾(アナミ・コレチカ)

一五二

雨谷栞夫(アメヤ・キクヲ)

一五七

雨宮 巽 (アメミヤ・タツミ)	一五七	後藤國彦 (ゴトウ・クニヒコ)	一六二
青木 一男 (アツキ・カズヲ)	一五七	後藤朝太郎 (ゴトウ・アサタラウ)	一六二
青木 泰 (アツキ・ヤスシ)	一五八	後藤隆之助 (ゴトウ・タカノスケ)	一六二
青木 實 (アツキ・ミノル)	補二〇	後宮 淳 (ウシログウ・ジュン)	一六三
青木重誠 (アツキ・ヂユウセイ)	一五八	星野直樹 (ホシノ・ナホキ)	一六三
青柳篤恆 (アヲヤギ・アツツネ)	一五八	柏木秀雄 (カシハギ・ヒデヲ)	一六三
九 畫		相田岩夫 (アヒダ・イハヲ)	一六三
保田次郎 (ヤスダ・ジラウ)	一五九	相馬敏夫 (サウマ・トシツ)	一六四
保科善四郎 (ヤスシナ・ゼンシラウ)	一五九	柳川平助 (ヤナガハ・ヘイスケ)	一六四
前田米藏 (マヘダ・ヨネザウ)	一五九	柳井恆夫 (ヤナギ・ツネヲ)	一六四
前田利爲 (マヘダ・トシタメ)	一五九	柳原傳光 (ヤナギバラ・デンクワウ)	一六五
前田 稔 (マヘダ・ミノル)	一六〇	柳澤 健 (ヤナギサハ・ケン)	一六五
前野 茂 (マヘノ・シゲル)	補二〇	柳澤藏之助 (ヤナギサハ・クラノスケ)	一六五
南 次郎 (ミナミ・ジラウ)	一六〇	泉二新熊 (モトジ・アラクマ)	一六五
南雲忠一 (ナングモ・チュウイチ)	一六〇	洪 思翔 (コウ・シヨク)	一六五
南條金雄 (ナンヂウ・カネヲ)	一六〇	津久井龍雄 (ツクキ・タツヲ)	一六六
室伏高信 (ムロフシ・タカノブ)	補二〇	津田信吾 (ツダ・シンゴ)	一六六
建川美次 (タテカハ・ヨシツグ)	一六一	津田靜枝 (ツダ・シヅエ)	一六六
後藤文夫 (ゴトウ・フミヲ)	一六一	津島壽一 (ツシマ・ジュイチ)	補二〇
後藤悌次 (ゴトウ・テイジ)	一六二	津雲國利 (ツグモ・クニトシ)	一六七

畑 俊六 (ハタ・シユンコク)

一六七

若林 半 (ワカバヤシ・ハン)

一七一

皆川廣治 (ミナガハ・クワウヂ)

一六七

若宮貞夫 (ワカミヤ・サダヲ)

一七一

皆川豊治 (ミナガハ・トヨヂ)

一六八

若槻禮次郎 (ワカツキ・レイシラウ)

一七二

砂田重政 (スナダ・シダマサ)

一六八

苦米地四郎 (トマベチ・シラウ)

一七二

神吉正一 (カミヨシ・シヤウイチ)

補二〇

茂森唯士 (シゲモリ・タダシ)

一七二

神田正雄 (カンダ・マサヲ)

一六八

美濃部洋次 (ミノベ・ヤウジ)

一七二

神田正種 (カンダ・マサタネ)

一六八

美濃部達吉 (ミノベ・タツキチ)

一七三

神尾式春 (カミヲ・イチハル)

補二一

重光 葵 (シゲミツ・マモル)

一七三

秋山邦雄 (アキヤマ・クニヲ)

一六八

重松宣雄 (シゲマツ・ノブヲ)

一七四

秋山定輔 (アキヤマ・テイスケ)

一六九

重藤千秋 (シゲフヂ・チアキ)

一七四

秋田 清 (アキタ・キヨシ)

一六九

風見 章 (カザミ・アキラ)

一七四

秋永月三 (キナガ・ツキザウ)

一六九

俵 孫一 (タハラ・マゴイチ)

一七六

秋月左都夫 (アキヅキ・サトヲ)

補二一

原口武夫 (ハラグチ・タケヲ)

一七七

香月清司 (カヅキ・キヨシ)

一七〇

原田 健 (ハラダ・ケン)

一七七

香阪昌康 (カサカ・マサヤス)

一七〇

原田清一 (ハラダ・セイイチ)

一七七

香椎浩平 (カシヒ・カウヘイ)

一七〇

原田熊吉 (ハラダ・クマキチ)

一七七

若山善太郎 (ワカヤマ・ゼンタラウ)

一七〇

原 守 (ハラ・マモル)

一七六

若尾璋八 (ワカヅ・シヤウハチ)

一七一

原 邦道 (ハラ・クニミチ)

一七六

若杉 要 (ワカスギ・カナメ)

一七一

原 慈兵衛 (ハラ・ソウベエ)

一七六

十畫

原 嘉道 (ハラ・ヨシミチ)
 宮川船夫 (ミヤガハ・フナヲ)
 宮本武之輔 (ミヤモト・タケノスケ)
 宮田光雄 (ミヤタ・ミツヲ)
 宮脇長吉 (ミヤワキ・チヤウキチ)
 宮島清次郎 (ミヤジマ・セイジラウ)
 宮崎正義 (ミヤザキ・マサヨシ)
 宮崎申郎 (ミヤザキ・シンラウ)
 宮崎繁三郎 (ミヤザキ・シンラウ)
 宮崎勝太郎 (ミヤザキ・カツタラウ)
 宮崎龍介 (ミヤザキ・リュウスケ)
 島田俊雄 (シマダ・トシヲ)
 島田繁太郎 (シマダ・シゲタラウ)
 島居庄藏 (シマキ・シヤウザウ)
 唐澤俊樹 (カラサハ・トシキ)
 浮田秀彦 (ウキタ・ヒデヒコ)
 扶間 茂 (ハザマ・シゲル)
 栗山 茂 (クリヤマ・シゲル)
 栗山茂二 (クリヤマ・シゲジ)
 栗本勇之助 (クリモト・ユウノスケ)

一七六
 一七七
 一七八
 一七八
 一七八
 一七八
 一七八
 一七八
 一七八
 一七九
 一七九
 一七九
 一七九
 一七九
 一八〇
 一八〇
 一八〇
 一八〇
 一八〇
 補二二
 補二二
 一八一

栗原 正 (クリハラ・シヤウ)
 栗原美能留 (クリハラ・ミノル)
 桑木崇明 (クハキ・タカアキ)
 桑原重遠 (クハバラ・シゲハル)
 桑島主計 (クハジマ・カズヘ)
 柴山兼四郎 (シバヤマ・カネシラウ)
 根本 博 (ネモト・ヒロシ)
 酒匂秀一 (サカウ・シウイチ)
 酒井忠正 (サカキ・タダマサ)
 酒井 康 (サカキ・ヤスシ)
 酒井 隆 (サカキ・タカシ)
 酒井喜四 (サカキ・キシ)
 酒井端次 (サカキ・カウジ)
 眞方 勳 (マカタ・クン)
 眞崎甚三郎 (マザキ・ジンザブラウ)
 眞崎勝次 (マザキ・カツジ)
 泰 彦三郎 (ハタ・ヒコサブラウ)
 泰 眞次 (ハタ・シンジ)
 荒川昌二 (アラカハ・シヤウジ)
 荒木貞夫 (アラキ・サダヲ)

一八一
 一八二
 一八二
 一八二
 一八二
 一八二
 一八三
 一八三
 一八三
 一八三
 一八四
 一八四
 一八四
 一八四
 一八四
 一八四
 一八四
 一八四
 一八五
 一八五
 一八五
 一八六

荒井誠一郎 (アラキ・セイイチラウ)	一八六	馬奈木敬信 (マナキ・ヨシノブ)	補二二
荒井靜雄 (アラキ・シヅツ)	補二二	馬淵逸雄 (マブチ・ハヤヲ)	補二二
草鹿任一 (クサカ・ニンイチ)	一八七	十一畫	
高山久藏 (タカヤマ・キウザウ)	一八七	副見喬雄 (ソヘミ・タカヲ)	一九二
高木友三郎 (タカキ・トモサブラウ)	一八七	鹿子木貞信 (カノコギ・カズノブ)	一九二
高木陸郎 (タカキ・リクラウ)	一八八	鹿兒島虎雄 (カゴシマ・トラヲ)	補二三
高石真五郎 (タカイシ・シンゴラウ)	一八八	清水安三 (シミヅ・ヤスザウ)	一九二
高松順茂 (タカマツ・ノリシゲ)	一八八	清水行之助 (シミヅ・カウノスケ)	一九二
高津富雄 (タカツ・トミヲ)	一八八	清水光美 (シミヅ・ミツヨシ)	一九二
高島誠一 (タカシマ・セイイチ)	一八九	清水威明 (シミヅ・モリアキ)	一九三
高垣信造 (タカガキ・ノブザウ)	一八九	清水規矩 (シミヅ・キク)	一九三
高須四郎 (タカス・シラウ)	一八九	清水重夫 (シミヅ・シゲヲ)	補二三
高橋三吉 (タカハシ・サンキチ)	一八九	清瀬一郎 (キヨセ・イチラウ)	一九二
高橋定一 (タカハシ・タイイチ)	一八九	清澤 列 (キヨザハ・レツ)	一九三
高橋 坦 (タカハシ・タン)	一九〇	添田敬一郎 (ソヘダ・ケイイチラウ)	一九四
高橋康順 (タカハシ・カウシユン)	一九〇	深井英五 (フカキ・エイゴ)	一九四
高橋龜吉 (タカハシ・カメキチ)	一九〇	深尾隆太郎 (フカヲ・リュウタラウ)	一九四
留岡清男 (トメオカ・キヨヲ)	補二二	淺沼稻次郎 (アサヌマ・イネシラウ)	一九四
馬場恆香 (ババ・ツネコ)	一九〇	淺原健三 (アサハラ・ケンザウ)	一九五
馬場元治 (ババ・モトハル)	補二二	淺野良三 (アサノ・リヤウザウ)	一九五

堀 丈夫 (ホリ・タケヲ)	一九五	船津辰一郎 (フナツ・タツイチラウ)	一九九
淺野總一郎 (アサノ・ソウイチラウ)	補二三	細川護立 (ホソカハ・モリタツ)	二〇〇
堀 公一 (ホリ・コウイチ)	一九六	細萱茂子郎 (ホソカヤ・イシラウ)	二〇〇
堀内一雄 (ホリウチ・カズヲ)	補二三	野口 遵 (ノグチ・ジュン)	二〇〇
堀内干城 (ホリウチ・タチキ)	一九六	野中徹也 (ノナカ・テツヤ)	二〇〇
堀内茂禮 (ホリウチ・シゲタダ)	一九六	野田謙吾 (ノダ・ケンゴ)	二〇〇
堀内謙介 (ホリウチ・ケンスケ)	一九七	野村吉三郎 (ノムラ・キチサブラウ)	二〇一
堀田正昭 (ホツタ・マサアキ)	一九七	野村直邦 (ノムラ・ナホクニ)	二〇一
堀切善次郎 (ホリキリ・ゼンジラウ)	一九七	野原大輔 (ノハラ・ダイスケ)	二〇一
堀切善兵衛 (ホリキリ・ゼンペユ)	一九七	鳥居龍藏 (トリキ・リュウザウ)	二〇一
堀 新 (ホリ・シン)	一九六		
堀 義貴 (ホリ・ヨシアキ)	一九六	喜多壯一郎 (キタ・サウイチラウ)	二〇二
梅津美治郎 (ウメヅ・ヨシヂラウ)	一九八	喜多長雄 (キタ・ナガヲ)	二〇二
荻洲立兵 (ツギハ・リツペイ)	一九八	喜多誠一 (キタ・セイイチ)	二〇二
荷見 安 (ハシミ・ヤスシ)	一九八	堤 康次郎 (ツツミ・ヤスジラウ)	二〇二
威島角房 (モリシマ・スミフサ)	一九八	富井 周 (トミキ・シウ)	二〇三
笠 信太郎 (リン・シンタラウ)	一九九	富田幸次郎 (トミタ・カウジラウ)	二〇三
笠間呆雄 (カサマ・アキヲ)	一九九	富田勇太郎 (トミタ・ユウタラウ)	二〇三
船山信一 (フナヤマ・ノブイチ)	一九九	富田隆治 (トミタ・ケンヂ)	二〇三
船田 中 (フナダ・ナカ)	一九九	富永恭次 (トミナガ・キヨウジ)	二〇四

十二畫

須磨齋吉郎(スマ・ヤキチラウ)

二〇四

湯河元威(ユカハ・モトタケ)

二〇七

森山鏡一(モリヤマ・エイイチ)

補二四

湯澤三千男(ユサハ・ミチヲ)

二〇七

森田 久(モリタ・ヒサシ)

二〇四

渡 正監(ワタリ・マサミ)

補二四

森岡二郎(モリヲガ・シラウ)

二〇四

渡邊千冬(ワタナベ・チフユ)

二〇七

森岡正平(モリヲカ・シヤウヘイ)

二〇五

渡邊彌幸(ワタナベ・ヤサキ)

二〇八

森岡 泉(モリヅカ・カウ)

二〇五

斯波孝四郎(シバ・カウシラウ)

補二四

森重千夫(モリシダ・タテヲ)

補二四

筒井 潔(ツツキ・キヨシ)

二〇八

森島守人(モリシマ・モリト)

二〇五

勝田主計(シヨウダ・カズヘ)

二〇八

森部 隆(モリベ・タカシ)

補二五

勝田貞次(カツダ・テイジ)

二〇九

森 喬(モリ・タカシ)

二〇四

勝 正憲(カツ・マサノリ)

二〇八

森田三郎(モリタ・サブラウ)

補二五

菊池良一(キクチ・リヤウイチ)

二〇九

森 徳治(モリ・トクヂ)

補二四

菊池武夫(キクチ・タケヲ)

二〇九

植田寅太郎(ウエダ・コウタラウ)

補二五

菊池 寛(キクチ・クワン)

二一〇

植木壽雄(ウエキ・ヒサヲ)

二〇五

菱刈 隆(ヒシカリ・タカシ)

二一〇

椎名悦三郎(シヒナ・ユツサブラウ)

二〇六

菱沼 勇(ヒシスマ・イサム)

二一〇

植田捷雄(ウエダ・カツヲ)

二〇五

管波稱事(スガナミ・シヨウジ)

二一〇

植田謙吉(ウエダ・ケンキチ)

二〇六

管原達郎(スガハラ・タツラウ)

補二五

朝比奈策太郎(アサヒナ・サクタラウ)

二〇七

管 健次郎(スガ・ケンジラウ)

二一〇

植原悦二郎(ウエハラ・ユツジラウ)

二〇六

管 晴次(スガ・セイジ)

二一一

朝海浩一郎(アサカイ・カウイチラウ)

二〇七

管 晴次(スガ・セイジ)

二一一

結城清太郎 (ユフキ・セイタラウ)	補二五	奥田新三 (オクダ・シンザウ)	二一五
結城豊太郎 (ユフキ・トヨタラウ)	二一一	奥村喜和男 (オクムラ・キワツ)	二一五
猪野毛利榮 (キノゲ・トシエ)	二一一	園田巖之助 (ソノダ・セイノスケ)	二一六
賀屋興宣 (カヤ・オキノブ)	二一二	園部和一郎 (ソノベ・ワイチラウ)	二一六
進藤誠一 (シンドウ・セイイチ)	二一二	暈峻義等 (テルヲカ・ギトウ)	二一六
飯田貞固 (イヒダ・サダカタ)	二一二	新見政一 (アリミ・セイイチ)	二一六
飯沼 守 (イヒヌマ・マモル)	二二三	楠本實隆 (クスモト・サネタカ)	二一六
飯田祥二郎 (イヒマ・シヤウジラウ)	補二五	源田松三 (ゲンダ・マツザウ)	補二六
飯田清三 (イヒダ・セイザウ)	二二三	福本柳一 (フクモト・リウイチ)	二一七
飯村 攘 (イヒムラ・ジャウ)	二二三	萱場軍藏 (カヤバ・グンザウ)	二一七
飯島幡司 (イヒシマ・ハタジ)	二二三	葛生能久 (クズヲ・ヨシヒサ)	二一七
飯野浩次 (イヒノ・カウジ)	二二三	遠藤喜一 (エンドウ・キイチ)	二一七
飯野毅夫 (イヒノ・タケヲ)	補二五	遠藤柳作 (エンドウ・リウサク)	二一七
黒田長和 (クロダ・ナガトシ)	二二三	郷 誠之助 (ガウ・セイノスケ)	二一八
黒田英雄 (クロダ・ヒデオ)	二二四	鈴木九萬 (スズキ・タダカウ)	二一八
黒崎定三 (クロサキ・テイザウ)	二二四	鈴木久武 (スズキ・ヒサタケ)	補二六
十三畫		鈴木文治 (スズキ・ブンヂ)	二一八
楠 義井 (ハナハ・ヨシキ)	二二五	鈴木貞一 (スズキ・テイイチ)	二一九
塚田 攻 (ツカダ・ツサム)	二二五	鈴木莊六 (スズキ・サウロク)	二一九
塚原二四三 (ツカハラ・ニシザウ)	二二五	鈴木茂三郎 (スズキ・モサブラウ)	二一九

鈴木宗作 (スズキ・ソウサク)

二二〇

鈴木美遠 (スズキ・ヨシミチ)

二二〇

鈴木祥枝 (スズキ・サカエ)

補二六

鈴木貞太郎 (スズキ・クワシタラウ)

二二〇

鈴木梅太郎 (スズキ・ウメタラウ)

補二六

鈴木清秀 (スズキ・キヨヒデ)

二二一

鈴木率道 (スズキ・ヨリミチ)

二二一

鈴木重康 (スズキ・シゲヤス)

二二一

鳩山一郎 (ハトヤマ・イチラウ)

二二一

十四畫

福田良三 (フクダ・リヤウザウ)

補二七

窪田空穂 (クボタ・クウホ)

補二七

十五畫

増田次郎 (マサダ・ジラウ)

二二二

増田義一 (マサダ・ギイチ)

二二二

廣田弘毅 (ヒロタ・コウキ)

二二二

廣瀬忠久 (ヒロセ・タダヒサ)

二二三

徳川好敏 (イクガハ・ヨシトシ)

二二三

徳川家正 (トクガハ・イヘマサ)

二二三

徳川圀順 (トクガハ・クニユキ)

補二八

徳川義親 (トクガハ・ヨシチカ)

二二四

徳永 榮 (トクナガ・サカエ)

二二四

徳富猪一郎 (トクトミ・キイチラウ)

補二八

影佐禎昭 (カゲサ・サダアキ)

二二四

幣原喜重郎 (シデハラ・キジュウラウ)

補二八

澄田暎四郎 (スミダ・ライシラウ)

二二四

潮 惠之輔 (ウシホ・ケイノスケ)

二二四

熊谷憲一 (クマガイ・ケンイチ)

二二五

澀谷三郎 (シブヤ・サブラウ)

補二八

樋口季一郎 (ヒグチ・キイチラウ)

二二五

等貝詮三 (ヒガヒ・センザウ)

二二五

稻田昌植 (イナダ・マサウエ)

二二五

稻垣征夫 (イナガキ・ユキヲ)

二二六

緒方竹虎 (ツガタ・タケトラ)

二二六

蓮沼 蕃 (ハススマ・シゲル)

二二六

駒井徳三 (コマキ・トクザウ)

二二六

十六畫

澤田 茂 (サハダ・シゲル)

二二七

澤本頼雄 (サハモト・ヨリヲ)

二二七

澤田廉三 (サハダ・レンザウ)

二二七

澤田節藏 (サハダ・セツザウ)	二二七	膳 桂之助 (ゼン、ケイノスケ)	二二二
澤村克人 (サハムラ・カウト)	補二九	頼母木桂吉 (タノモギ、ケイキチ)	二二二
橋 孝三郎 (タチバナ・カウサブラウ)	二二七	頭山 満 (トウヤマ・ミツル)	二二二
橋 樓 (タチバナ・ボク)	二二八	館 哲二 (タテ、ラツジ)	二二二
横山助成 (ヨコヤマ、スケナリ)	二二八	龜井貫一郎 (カメキ、クワシイチラウ)	二二二
横山鎮明 (ヨコヤマ、シヅアキ)	二二八		
横尾惣三郎 (ヨコオ、ツウサブラウ)	二二八	十七畫	
橋爪明男 (ハシヅメ、ハルヲ)	二二九	瀬古保次 (セコ、ヤスジ)	補三〇
橋本圭三郎 (ハシモト・ケイザブラウ)	補二九	霜山精一 (シモヤマ・セイイチ)	二二三
橋本欣五郎 (ハシモト・キンゴラウ)	二二九	簡牛凡夫 (カンギウ、ツネヲ)	補三〇
橋本虎之助 (ハシモト・トラノスケ)	二二九	齋藤良衛 (サイトウ・リヤウユ)	二二三
橋本清之助 (ハシモト、セイノスケ)	補二九	齋藤音次 (サイトウ・オトシ)	二二三
橋本清吉 (ハシモト、セイキチ)	二二九	齋藤隆夫 (サイトウ・モイチラウ)	二二三
橋本 羣 (ハシモト、グン)	二二九	齋藤 樹 (サイトウ・イツキ)	二三四
橋田邦彦 (ハシダ・クニヒコ)	二三〇	齋藤彌平太 (サイトウ・ヤヘイタ)	二三四
興津良郎 (オキツ・ヨシラウ)	二三〇		
磯谷廉介 (イソガイ・レンスケ)	二三〇	十八畫	
篠原英太郎 (シノハラ・エイタラウ)	二三〇	濱田吉治郎 (ハマダ、キチヂラウ)	二三五
篠原陸朗 (シノハラ・リクラウ)	二三一	濱本喜三郎 (ハマモト、キサブラウ)	二三五
篠塚義男 (シノヅカ、ヨシヲ)	二三一	織田信恆 (オダ、ノブツネ)	二三五
		豊田利三郎 (トヨダ、リサブラウ)	二三五

豊田貞次郎 (トヨダ、テイシラウ)

二三五

鮎川義介 (アユカハ・ギスケ)

二四〇

豊田副武 (トヨダ、ツヘタケ)

二三六

二十畫

豊保福次 (トヨヤス・フクジ)

二三六

瀧 正雄 (タキ・マサツ)

二四二

豊島房太郎 (トヨシマ・フサタラウ)

二三六

櫻内幸雄 (サクラウチ、ユキヲ)

二四二

豊島愛明 (トヨシマ・アイアキ)

二三六

權藤成卿 (ゴンドウ、セイキヤウ)

二四二

十九畫

寶來市松 (ホウライ・イチマツ)

二三七

蘆野 弘 (アシノ・ヒロシ)

二四三

榑淵館一 (クシヅチ・センイチ)

二三七

蠟山政道 (ラフヤマ、マサミチ)

二四三

藤山愛一郎 (フヂヤマ、アイイチラウ)

二三七

關 桂三 (セキ・ケイザウ)

二四三

藤井啓之助 (フヂキ、ケイノスケ)

二三七

二十一畫

藤井崇治 (フヂキ・ソウヂ)

二三八

鶴見佐吉雄 (ツルミ・サキヲ)

補三一

藤田尚徳 (フヂタ、ヒサノリ)

二三八

鶴見祐輔 (ツルミ・イウスケ)

二四四

藤田利三郎 (フヂタ、リサブラウ)

二三八

額嶺彌三 (コケツ・ヤザウ)

二四四

藤田 進 (フヂタ、ススム)

二三八

二十四畫

藤田榮介 (フヂタ、エイスケ)

二三八

鹽田廣重 (シホダ、ヒロシゲ)

補三一

藤江惠輔 (フヂエ、ケイスケ)

二三九

鹽谷 温 (シホノヤ、ユタカ)

補三一

藤沼庄平 (フケスマ・ツヤウヘイ)

二三九

鹽野季彦 (シホノ・スエヒコ)

二四五

藤原銀次郎 (フヂハラ、ギンシラウ)

二三九

鹽澤清宣 (シホザハ、カウイチ)

二四五

藤野 惠 (フヂノ、メグム)

二三九

鹽澤清宣 (シホザハ、キヨノブ)

二四五

藤澤親雄 (フヂサハ、チカヲ)

二四〇

鹽宮谷清松 (ベツクヤ、キヨマツ)

二四五

藤懸末松 (フヂカケ、スユマツ)

二四〇

(完)

新任重要職官錄

(本書校印期內)

頁次	姓名	新任職官	發表年月
七	三宅光治	滿洲協和會中央本部長兼青少年團總監	一九四一年七月
一四	大口喜六	國民更生金庫理事長	一九四一年七月
二一	大津茂雄	昭南島特別市市長	一九四二年二月
二二	大橋忠一	蒙疆聯合自治政府最高顧問	一九四一年十一月
二二	小倉正恆	戰時金融金庫總裁	一九四二年三月
二八	小栗一雄	全日本漁業聯合會會長	一九四一年一月
二九	小磯國昭	朝鮮總督	一九四一年五月
三〇	山下奉文	馬來方面陸軍最高指揮官	一九四二年二月
三一	土田 豐	駐華公使(常駐北平)	一九四一年 月
四〇	中村孝太郎	東部軍管區司令	一九四一年十二月
四三	內崎作三郎	衆議院副議長	一九四一年十二月
五一	水野鍊太郎	大日本興亞同盟副總裁	一九四二年五月
五七	牛島滿	陸軍士官學校校長	一九四二年四月
五七	古賀峯一	海軍大將	一九四二年五月
六二	本間雅晴	非列濱方面陸軍最高指揮官	一九四二年四月
六七	永田秀次郎	南方派遣軍最高顧問	一九四二年二月
六九	田中武雄	朝鮮總督府政務總監	一九四二年五月
△七二	宇垣一成	人民科學研究所總裁	一九四二年五月
八八	安田武雄(中將)	航空軍司令官	一九四二年六月
八九	安倍源基	企劃院次長	一九四二年一月

新任重要職官錄

九一

安藤利吉

補一四

安藤紀三郎

九四

寺內壽一(伯爵)

九五

吉田丹一郎

九九

有田八郎

九九

有末祐三

一〇三

竹內新平

一〇四

西春彦

一〇八

佐佐木謙一郎

一一八

村田有藏

一二四

岡田忠彦

一二八

岩村清一

一三四

林銑十郎

一三七

松井石根

一四三

林賴三郎

一五三

阿部信行

一五九

前田利為

一六〇

南次郎

一六三

相田岩夫

一六八

砂田重政

一八二

後藤文夫

二一六

新見政一

二二四

徳川義親

台灣軍司令官

國務大臣

南方陸軍最高指揮官

河內總領事

日本貿易振興會會長

華北派遣軍副參謀長

對滿事務局次長

外務次官

南方開發金庫總裁

南方軍政顧問

衆議院議長

經政本部長

大日本與亞同盟總裁

大日本與亞同盟副總裁

人民科學研究所副總裁

暨實政社會總裁貴族院議員

北婆羅洲方面陸軍最高指揮官

樞密院顧問官

普通銀行統治會理事長

南方軍政顧問

暨實會事務總長

香港方面海軍最高指揮官

南方軍政顧問

一九四二年四月

一九四二年六月

一九四二年三月

一九四一年九月

一九四二年三月

一九四一年 月

一九四一年十一月

一九四二年十月

一九四二年三月

一九四二年二月

一九四二年五月

一九四一年九月

一九四二年五月

一九四二年五月

一九四二年五月

一九四二年三月

一九四二年五月

一九四二年五月

一九四二年二月

一九四二年五月

一九四二年一月

一九四二年二月

日本時人辭典

外交部亞洲司研究室編

一 畫

一 木喜德郎 (Ikki, Kikokuro)

帝室經濟顧問，一八六七年生，靜岡縣人。

故樞密顧問岡田良平之弟，竹山純平之兄，以入嗣一木家，故改今姓。帝大法科畢業，復以自費留學德國，歸國後歷任帝大法科教授、內務書記官參與官等兼職，一八九九年獲法學博士，幼年勅選為貴族院議員，一九〇二年任法制局長官兼恩給局長，仍兼大學教授。一九〇八年任內務次官，一九一四年為大隈內閣之文部大臣，旋調內務大臣，一九一七年特任樞密院顧問官，嗣一度任樞密院副議長，及官內省御用掛（相當於秘書長），一九三三年辭職，賜前官禮遇。是年以特旨，列華族，授男爵。一九三四年五月就樞密院議長之職，一九三六年三月辭退，又賜前官禮遇。現為帝國學士院會員、帝室經濟顧問、及大日本報社社長。平居好刀劍，信佛教中之曹洞宗。

一 廣房治郎 (Ichinomiya, Fusajiro)

衆議院議員，一八八六年生，大分縣人。

上海同文書院第一期畢業，近衛文磨之父篤磨之得意門

生。歷任北京順天時報記者、奉天盛京時報編輯、大阪朝日新聞編輯及盛京時報社長，至一九二二年任農商大臣官房秘書科長，一九三〇年任內務省參與官，近衛內閣時升任海軍省政務次官。當選為衆議員，已達七次，原隸政友本黨，因與山本達雄頗相得，乃隨山本轉入民政黨，選為該黨情報部長，不久復舉為總務委員之一。現除衆議院議員外，兼任東亞同文書院理事及共濟火災保險會社董事等職。

△ 一條實孝 (Ichijo, Sanetaka)

公爵，貴族院議員，一八八一年生，京都府人。

前內大臣藤原鎌足之後，舊五攝家之一，氏本為侯爵大炊御門經輝從兄，入嗣於公爵實輝家。早歲畢業海軍兵學校及海軍大學。日俄戰役時，以從軍有功，授五級金鵄勳章。上次世界大戰時，又以功敘勳三等。一九一九年晉級大佐，幼年留學法國，嗣任駐法大使館武官，一九二四年繼入預備役，是年繼承家督，襲受爵位。一九二八年代表貴族院，出席巴黎萬國議員商事會議。現為貴族院議員，屬火曜會，此外又兼國際觀光委員會委員等職。

二 畫

一見甚郎 (Yutani, Jiro)

前駐泰公使，一八九一年生，宮崎縣人。

一九一三年東京帝大法科畢業，越二年，及第外交官領事官試驗，與栗原正、石射猪太郎等同入外務省。歷任駐英法比荷等國公使館二三等書記官，一九二四年辭職，當選為衆議院議員。師事庄次竹二郎，後以床次之介，任南滿鐵道會社囑託。在滿時與松岡洋右過從甚密，頗為松岡所器重，一九四〇年十月擢為駐泰國公使。氏幼年曾投考海軍學校，因落第乃轉考普通學校，期於外交界一顯身手云。

一岡治重 (Ninomiya, Haruhige)

鮮滿拓殖會社總裁，陸軍中將，一八七九年生，岡山縣人。

士官學校第十二期步兵科畢業，後又以第一名畢業陸軍大學。歷任陸軍省軍務局科員，參謀本部英國班班長、近衛步兵第三聯隊長、駐英大使館武官、步兵第二旅團長，後轉入軍令最高機關之參謀本部，由第二部長、第一部長而擢為參謀本部次長，一九三〇年晉級中將。氏與宇垣一成同鄉，一生榮晉，均受宇垣之提掣，一九三二年任第五師團長，一九三四年編入豫備役，一九三六年任鮮滿拓殖會社總裁，以迄於今。

二荒芳博 (Futaba, Yoshinori)

伯爵，貴族院議員，一八八六年生，東京府人。

故北白川宮能久之女芳子，於一八九七年降為臣籍，賜姓二荒，列伯爵，歿後，山氏繼承家督及爵位。一九一三年畢業東京帝大法科政治學系，任靜岡縣理事官，一九一七年赴歐洲留學，一九二一年隨侍皇太子外游。嗣後歷任宮內省書記官、參事官、式部官等職，一九二五年舉為貴族院議員，以迄於今。氏為國維會之主要角色，現除貴族院議員外，兼任日本興業銀行理事及少年團日本聯盟理事長。林銑十郎組閣時，曾有推任為文部大臣之說。

七田八郎 (Shichida, Hachiro)

陸軍中將，一八八七年生，佐賀縣人。

士官學校第二十期步兵科及陸軍大學(一九一九年)畢業，曾以中尉參加青島戰役，一九二四年任教育總監部科員，一九二九年任陸軍省人事局科長，翌年派赴法國考察軍事，一九三一年任教育總監部科長，一九三七年任士官學校幹事，翌年春，以旅團長赴前方，一九三九年升師團長，同時晉級中將，一九四一年任士官學校校長。

八代則彥 (Yatsushiro, Norihiko)

住友銀行總裁，一八七二年生，兵庫縣人。

亦寫作八代祐彦，一八九六年東京帝國大學法科政治學
系畢業。初任日本郵船會社職員，一九二一年轉入住友財團
。現在所任職務，除住友合資會社理事、住友銀行總裁、檀
香山國際信託會社副總理、大阪築港會社、住友生命保險會
社、住友信託會社、住友仲鋼管會社、住友炭礦會社及住友
麥酒會社等董事外，尙兼大阪票據交換所委員長，實爲住友
財團之總帥，其在關西實業界之地位，約與池田成彬之在關
東相似。石渡莊太郎任藏相時，曾與池田成彬同被聘爲大藏
省最高顧問。

八田嘉明 (Hatta, Yoshiki)

前拓務大臣，一八九九年生，東京府人。

一九〇三年東京帝國大學工科土木工程學系畢業，歷任
山陽鐵道及鐵道院技師、秋田建設事務所長、鐵道省線路調
查科長、建設局長，於一九二六年升任鐵道次官，政友會敷
設各地支線之鐵道政策，大都由氏所擬訂，一九二九年辭職
。一九三二年犬養內閣時代，以小川平吉之推荐，出任南滿
鐵道會社副總裁，在任時改組滿鐵機構，增資八萬萬圓，一
九三五年松岡洋右就任總裁後辭職。一九三七年五月樞吉野
信次後，任東北興業會社總裁，一九三八年十一月任第一次
近衛內閣之拓務大臣，辭職後曾被舉爲日本商工會議所會長
，並勅選爲貴族院議員。

八角三郎 (Yasumi, Saburo)

前拓務次官，一八八〇年生，岩手縣人。

氏爲舊南部藩士八角彪一郎之長子，故海軍上將銜內曾
次郎之外甥。一九〇一年海軍兵學校畢業，即任海軍少尉，
一九三〇年晉級至海軍中將。其間歷任磐手、金剛、利根各
艦艦長，第一、第二、各水雷戰隊司令官，海軍水雷學校校
長及大湊要港部司令官等職。一九三一年編入預備役，翌年
由岩手縣當選爲衆議院議員，一九三六年又陸續當選
，隸政友會系。第一次近衛內閣時，任拓務次官，後隨內閣
辭職，一九四一年四月任大政翼贊會中央訓練所長。與米內
光政爲出小學至海軍兵學校之同班友好，別號休山。

八並武治 (Yatsumi, Takeji)

衆議院議員，民政黨總務，一八八〇年生，大
分縣人。

一九〇九年東京帝大法科德法學系畢業，初執律師業，
以素與同鄉箕浦勝人交好，一九一五年箕浦任遞信大臣時，
遂爲隨從祕書，自此遂從事政治活動。一九二〇年當選爲衆
議員，一九二五年入司法省在江木寬下任參與官，一九三一
年在渡邊千冬下任政務次官，歷鈴木、川村、小山諸任，至
一九三四年辭職。氏爲民政黨中若槻禮次郎系人物，性情溫
厚，現除任議員外，仍業律師。

八幡博堂 (Yahata, Hakudo)

大日本生產黨幹事，一八九八年生，高知縣人。

早歲肄業日本大學，因熱心社會主義除名。後與頭山滿相接，交往既久，思想隨之改變。在國士館中途退學後，出國來華，擔任青島新聞記者，不久轉任信濃民報總編輯，自此遂努力於國家主義運動，首先組成者為信州國民黨（一九二九年五月創立），後擴展而為日本國民黨（是年十一月創立），由頭山滿、內田良平任顧問，寺田稻次郎任執行委員長，氏任書記長。此為日本主義政黨之嚆矢，後為發展計，於一九三二年十一月併入大日本生產黨，遂成為日本法西斯陣營中心人物之一。

十 川 田 一 (Togoh, Shinji)

前華北開發會社副總裁，一八八三年生，石川縣人。

一九〇九年畢業東京帝國大學政治科，即入鐵道院，遷升至鐵道省復興局理事及經理部長，並充大東京鐵道及國際蟹工船漁業各會社董事等職。在經理部長時代，以賄索嫌疑，被逮入獄，不久釋放。一九二九年任南滿鐵路公司總務，遷充理事，同時兼任滿洲石油及滿洲炭礦會社理事長。九·一八事變後三四月，氏即改組滿鐵舊有之調查科，召集青年，擴充為經濟調查會，自任會長，一九三三年三月發表之「滿洲經濟建設要綱」，即由該會所設計而成。一九三五年何梅協定成立後，由滿鐵撥出材料二百五十萬圓，作為資本，成立興中公司，由松岡洋右擔任總理。一九三七年春

，林銑十郎組織內閣時，以同鄉關係，擔任組閣參謀長，力舉板垣征四郎繼任陸相，林躊躇未從，乃毅然辭去，歸任原職。一九三八年後，曾任華北開發會社副總裁。

入 江 昂 (Iriye, Ko)

滿鐵道會社理事，一八九六年生，茨城縣人。

一九一九年高等文官考試及第，翌年畢業於東京帝大法學部後，即入大藏省，以財務書記生派駐美國。歸國後歷任主稅局司稅官、營繕管財局事務官及同局書記官，並兼備金部事務官，至一九三四年昇任主計局主計科長。後經調查科長、預算科長、大臣官房文書科長、銀行檢查官、銀行局檢查科長及營繕管財局總務部長等職。於一九四一年六月新任現職。

入 江 實 一 (Iriye, Yanichi)

貴族院議員，一八七九年生，山口縣人。

氏為子爵野村益三之弟，一九〇六年東京帝大法科德法學系畢業後，即入內務省。歷任山梨縣事務官、樞密院議長秘書、內閣恩給局長秘書、宮內省法制局參事、內大臣書記官長、內藏頭、帝室會計審查局長官及日本銀行監事等職，至一九三四年調任滿洲宮內府次長，一九三九年六月勅選為貴族院議員。

入 江 種 矩 (Iriye, Tanekun)

國體擁護聯合會委員長，一八八三年生，秋田

縣人。

士官學校第十七期工兵科畢業，由工兵少尉升至上尉，於一九一六年退役。一九一九年創設製鐵工廠於四平街，製造蒙古天然曹達，旋又於俄領沿海州致力開墾事業，一九二六年回國創立「對支國民同志會」及「東亞聯盟會」等團體。九一八事變後，努力右翼運動，一九三二年與五百木良三等游說各方，聯合全國八十餘愛國團體，結成「國體擁護聯合會」，初被舉為常務委員，後升委員長，並為小林順一郎所主持之「時局協議會」之中心人物。

入間野武雄 (Irumano, Takeo)

第十五銀行總經理，一八八八年生，岩手縣人。

一九一六年東京帝大法科政治學系畢業，即入大藏省，歷任橫須賀、厩橋各稅務署長、名古屋稅務監督局經理科長、神戶海關總務科長、東京稅務監督局經理部長、間接稅部長、銀行檢查官及管轄管理局總務科長等職，至一九三二年任齋藤首相秘書(齋藤為氏之姑丈)兼大藏省書記官，一九三三年九月調滿實局販賣部長。馬場任藏相時，調為大阪造幣局長；結城豐太郎上台後，因與賀屋、石渡等同派，復入大藏省而任存款部長，不久，又轉任銀行局長。一九三九年任第十五銀行副經理，一九四一年升總經理。

三畫

三土忠造 (Mitsuchi, Chuzo)

樞密院顧問官，一八六七年生，香川縣人。

別號壯堂，由青山師範及東京高等師範學校文科畢業，即派赴歐洲留學。歷任東京高師史地學教授、東京日日新聞編輯長、朝鮮教育顧問等職，一九〇八年後，曾當選衆議院議員十二次，曾任文相及藏相四次。田中內閣時，久原房之助挾金錢勢力，入任選信大臣，氏憤而辭職，世以此多之。在政友會中，超然於久原中島兩派，不結小組織，其地位與若槻禮次郎之在民政黨髣髴。帝國人造絲會社賄案時，以嫌疑被拘禁四十九天，事後曾要求國家賠償未果，現充任樞密院顧問官。

三毛一夫 (Miko, Kazuo)

陸軍中將，一八七八年生，東京府人。

士官學校第十五期步兵科及陸軍大學(一九一〇年)畢業，日俄戰爭時，以少尉任仙臺第四聯隊小隊長從軍。戰後歷任參謀本部部員、步兵第十八聯隊大隊長、陸軍大學教育、駐瑞典及蘇俄使館武官、陸軍省新聞班長、步兵第四十三聯長、參謀本部俄國科長、步兵第九旅團長、第一師團司令部附、參謀本部附及滿洲獨立守備隊司令官等職，至一九三五年升任第七師團長，一九三六年北海道秋操時，任北軍總

指揮，一九三七年八月編入預備役。

三木 清 (Miki, Kiyoshi)

評論家，一八九六年生，兵庫縣人。

一九二〇年京都帝大文科哲學系畢業後，曾留學德國，一九三一年歸國任法政大學教授。專門研究海第格爾之學說，著有「唯物史觀與現代意識」「社會科學之預備概念」，以新人道主義者立場，批評馬克斯主義，名聲大著，一時有三木哲學之稱。其任滿洲教科書修正委員會時，因書中插入「如日本加入德意軸心，殊與東亞協同體趣旨相背」等語，致遭人攻擊，現任昭和禁幹事，兼讀賣新聞論說委員。

三木武吉 (Miki, Bukiichi)

報知新聞社長，一八九四年生，香川縣人。

在高松中學時，以午夜起吃饅飽除名，曾一度任某律師家書記，後畢業早稻田政治經濟科。一九二三年由東京市當選爲衆議員，隸民政黨籍，最爲濱口幸雄所信賴，於東京市議會頗有操縱之力，在國會中尤以善辯著名，某次以事被拘，並停止被選舉權甚久。爲城戶元亮好友(報知新聞董事，與軍部甚接近)，一九三九年秋任現職。

三木森彦 (Miki, Morihiko)

海軍大佐，一八九〇年生，神奈川縣人。

一九一三年海軍兵學校畢業，一九一六年入航空隊，一九一八年十二月派赴英法研究高等航空技術。一九二〇年以後，經橫濱航空隊練習部副官、龍登呂航空母艦分隊長、館山航空隊飛行長及大村航空隊副隊長，至一九三五年三月任吳航空隊司令，一九三六年十一月任佐世保航空隊司令，一九三七年八月任華中航空隊司令，一九三八年十二月任橫濱航空隊司令，翌年十一月調回佐世保鎮守府，一九四〇年冬，任新設之博多航空隊司令官。

枝茂智 (Saegusa, Shigetomo)

前駐希臘公使，一八八八年生，山梨縣人。

原駐堀內，一九一四年東京帝大法科畢業，在學時已及第高等文官考試，畢業後初入大藏省。嗣歷任青島守備軍民政部科員、外務省臨時和平條約事務局科員、第一及第二屆國聯會議隨員、駐瑞典公使館一等祕書及外務省祕書，至一九三二年升駐希臘公使館代辦，旋任日本國際協會調查部長。臨時政府成立後，任北京新民學院教授兼國立北平師範大學教授。著有中國之外交財政、極東外交論策、國聯之活動、東亞聯盟等書。

宅川百太郎 (Miyagawa, Hyakutaro)

三菱重工業會社董事，一八六九年生，愛媛縣人。

一八九二年東京高等商業學校畢業，即入三菱合資會社服務，歷任三菱商事部神戸・大阪・漢口・上海・北平各支

店長、高砂製紙所副經理、三菱本社營業部副部長兼若松支店長。及三菱製鐵所成立，任常務理事。後經三菱造船會社常務理事，至一九一九年升任三菱商會社理事長。深通中國經濟情形，三菱商會得與三井物產會社並立者，氏之功居多。近年兼職甚多，其重要者，為日本生絲會社總經理，三菱製鐵、三菱航空機、東亞興業各會社理事，三菱重工業會社董事，商工省貿易局顧問及日華貿易協會理事。一九三六年辭三菱商會社理事長，一九三七年春代表三菱參加赴華經濟考察團，來我國視察。弟保一任三菱信託會社常務理事，兄弟皆為三菱財閥之柱石。

三光治 (Miyake, Koji)

陸軍中將，一八七三年生，三重縣人。

士官學校第十三期步兵科及陸軍大學畢業，日俄戰爭時，以少尉從軍。後歷任第一師團參謀、陸軍省軍務局科員、陸軍大臣祕書、陸軍兵器本廠附、近衛步兵第四聯隊長、第四師團參謀長、滿洲獨立守備隊隊長及步兵第五旅團長。九一八事變時，任關東軍參謀長，一九三二年晉級中將，調任陸軍運輸部長，後升朝鮮龍山之第二十師團長。一九三七年三月調回參謀本部，不久編入預備校。

室戶敬光 (Mimuroto, Keiko)

子爵，貴族院議員，一八七三年生，京都府人。

一八九八年畢業明治法律學校，經高等文官考試合格，

歷任宮內省書記官、帝室會計審查官、內匠寮主事、御歌所主事及主獵頭等職。一九二五年，被選為貴族院議員，以迄於今。在齋藤內閣時，商相中島久萬吉因嘗讚揚足利尊氏，（足利為八百年前之諸候，曾以刀狩天皇，迫其阿從），氏斥為狂妄，迫其辭職。及一九三五年因「團體明後問題」發生，氏與菊池武夫二人，力向岡田首相進攻，致倡「天皇機關說」之美濃部氏所著之書，禁止發售。一九三八年二月議會中以東大教授田中耕太郎所著「法律宗教與社會生活」一書，中有「強制學生參拜神社，未免與憲法上之信教自由抵牾」等語，氏又認為危險思想，請求政府將其著書銷燬，遂目為貴族院中之右翼分子。氏為平沼騏一郎股肱，與鹽野季彥亦頗莫逆。因早歲即供職宮中，對日本歷代天皇陵墓及事蹟，均有甚深研究。此外又兼任東京高等音樂院院長，善歌謠，能檢事。

三浦義秋 (Mura, Yoshaki)

駐墨西哥公使，一八九〇年生，滋賀縣人。

一九一六年東京帝國大學法科政治學系畢業，經外交官領事官考試及第，即入外務省任對華文化事務局科員，一九一九年派任漢口候補領事，一九二一年任青島中日通信業務交涉委員，一九二四年升駐美大使館二等祕書，一九三〇年轉上海領事，是年八月兼任駐華公使館二等祕書，隔一年調為廈門領事，翌年復升任駐華使館一等祕書，一九三六年轉

漢口總領事。中日事變發生後，派任倫敦總領事，未就職即改任情報局副局長，一九三八年冬，繼日高信六郎後任上海總領事，至一九四〇年升任駐墨西哥公使。

三輪壽莊 (Miwa, Jusho)

前社會大眾黨中央執行委員，一八九五年生，福岡縣人。

一九二〇年東京帝大法科畢業，在第一高等學校時代，曾任校風維持團團長及全寮委員長，有小英雄之目。東大畢業前之一年，思想發生變化，加入赤松克麿所組織之新入會，出校後，一方執行律師業務，一方從事社會運動。一九二五年參加政治研究會，並被舉為中央委員，一九二六年，勞動農民黨創立時，任第一屆書記長，一九二九年脫離該黨，協助組織日本勞動黨，又被舉為書記長。一九三二年由全國大眾黨書記長而轉入社會大眾黨，任中央執行委員。一九三六年二月總選舉時，任該黨國策委員長，頗為活動。一九三七年十月以懷疑戰爭，被捕入獄，不久思想改變。氏對農村問題及社會問題，均有相當研究，譯有考茨基之社會民主黨綱領解說等書。

三橋孝一郎 (Mitsuhashi, Koichiro)

朝鮮總督府警務局長，一八九五年生，千葉縣人。一九一八年東京帝國大學法科德法學系畢業，經高等文官考試及格，歷任青森縣理事官、青森、栃木、大阪各府縣

事務官、栃木縣警察部長、朝鮮總督府警務局停保科長。一九三一年任內務省警保局保安科長兼特高科長，因五・一五事件引咎辭職，一九三六年夏，兩次郎出任朝鮮總督，擢充現職。

上月良夫 (Katsuki, Yoshio)

陸軍中將，一八八九年生，熊本縣人。

士官學校第二十一期步兵科及陸軍大學畢業。歷任陸軍省軍務局動員科科員及統制科科長，曾派赴法國研究動員計劃，故對法國情形頗明瞭。任統制科科長時代，爲預算關係，時赴大藏省極力說明整備作戰材料之必要。一九三七年八月任第五師團第十一聯隊長，一九三八年六月繼山脅正降調任陸軍省整備局長，後升師團長。

上村伸一 (Kaminura, Shirichi)

駐英大使館祕書，一八八九年生，千葉縣人。

一九三二年東京帝大法科畢業後，即入外務省，歷任新加坡副領事、駐華使館三等祕書、二等祕書（前後共計五年），至一九三六年升外務省東亞局第一科科長，一九四〇年轉現職，富有綜合的判斷力。

上村清太郎 (Kaminuma, Kyotaro)

陸軍中將，一八八三年生，秋田縣人。

士官學校第十五期砲兵科畢業，歷任朝鮮軍參謀兼重砲兵學校教官、砲兵監附、關東軍高級參謀、重砲兵旅團長、

重砲兵學校教育長、校長及久巢師團長等，至一九三六年四月晉級中將，一九四〇年三月繼兒玉中將後，任西部防衛司令，是年七月，因軍制改革，改稱西部軍司令官，現已他調。

下山琢磨 (Shimoyama, Takumaro)

陸軍中將，一八九〇年生，東京府人。

士官學校第二十一期步兵科及陸軍大學畢業，曾留學德國。歷任第十一師團參謀、陸軍省軍務局科員及教育總監本部科長等職，能背誦步兵操典。至一九三七年一月繼佐佐木到一後，調任滿洲國軍政部最高顧問，一九三九年晉級中將。好飲酒，不娶妻，而尤富於智略云。

F-元熊彌 (Shimomoto, Kumaya)

陸軍中將，一八八三年生，高知縣人。

衆議院議員下元鹿之和之弟，士官學校第十五期步兵科及陸軍大學畢業。歷任步兵第二十四聯隊長及陸軍步兵學校研究部主事等職，至一・二八戰役時，任久留米混成旅團長職，與十九路軍及第五軍戰於江灣廟行一帶。一九三四年任下關要塞司令官，一九三五年十二月由第三師團附，升任弘前第八師團長。一九三六年秋，北海道秋操時，任南軍總指揮。一九三七年七月編入豫備役，一九三八年復出任第一〇八師團長，作戰前線。

下中彌三郎 (Shimonaka, Yasaburo)

大亞細亞協會幹事，一八七九年生，京都府人。

生於以製陶兼農耕且業之貧家，三歲喪父，在小學校肄業三年，即輟學從事製陶工作，以助家計；願彼於勞作之餘，仍苦志自修，未忘讀書。二十一歲至神戸充當小學教師，二十五歲至東京，刊行兒童新聞，旋又發行社會思想雜誌啓明。一九一一年經中等教員檢定考試合格，分發崎玉師範學校服務，自是度其教師生活，至一九一八年始脫離，乃組織教員組合「啓明會」，此為日本最早之新給勞動者組合，而氏之從事社會運動，亦自此始。一九二二年努力於全國勞動組合之總聯合未成，心灰意懶，退而投身出版界，擬立「平凡社」以圖廉價通俗圖書之普及。九·一八事變發生後，法西斯團體勃興，氏怦然心動，謀樹立新黨，會赤松克麿轉向國家社會主義運動，於是與之提攜，籌立日本國民黨。甫告成立，而兩人意見發生衝突，乃另行創立新日本國民同盟，被舉為委員長，然不久即退出，而該同盟之資金，亦因此陷於拮据。一九三三年三月，松井石根、建川美次等發起大亞細亞協會，刊行機關雜誌「大亞細亞」，揭舉「亞洲各國之聯合而推日本為盟主」，以氏素擅文名，使為表面主持人物。著有教育之再建、萬人勞動之教育、再建之原則及天皇政治之本義等書。

上田文一 (Shimoda, Junichi)

前南洋拓殖會社理事。

一九一〇年東京高等商業學校專攻科畢業，初入東京高

田商會，一九一四年至一九一七年，任上海同文書院教授。一九一八年入三井物產會社，歷充台北支店長、奉天派出所主任及香港支店長等職。一九三三年任南洋拓殖會社理事，至一九四一年辭去，為日本熟悉南洋經濟情形之有數人物。

下田武川 (Shimoda, Takezo)

前駐華大使館秘書，一九一二年生，東京府人。

一九三一年東京帝國大學法科畢業，又及第外交官領事官考試，初派任駐法大使館主事，一九三三年升隨員，一九三四年擢充駐荷使館三等秘書，一九三六年六月調回本國充任條約局第一科及情報部科員，一九四〇年三月任駐華大使館三等秘書，移時復他調。

下永巖次 (Shimonaka, Noriji)

陸軍少將，一八九二年生，長崎縣人。

士官學校第二十四期步兵科及陸軍大學畢業。曾任參謀本部中國班班員、地誌班班員、關東軍司令部附、滿蒙班班長及德化特務機關長等職。住蒙十餘年，足跡遍及各地，能說流暢之蒙古語。所著日蒙辭典，篇幅達三千餘頁，取材之豐富，遠出俄人所著同種之辭典云。

下村正助 (Shimomura, Masasuke)

海軍中將，一八八六年生，山形縣人。

故海軍中將日蓮宗信徒佐藤信太郎之婿，父某以罪充戌北海道，少時苦學力行，於一九〇八年及一九一八年先後畢

業海軍兵學校及海軍大學。一九二二年派駐美國，其後歷任軍令部參謀、駐美大使館海軍副武官、第十一戰隊司令官、青島警備司令官及海軍大學教官等職，至一九三八年秋晉級中將，旋調任大湊要港部司令官。生平專攻戰史，深為末次信正所寵愛，為海軍中排美領袖之一。

下村宏 (Shimomura, Hiroshi)

東京朝日新聞副社長，一八七五年生，和歌山縣人。

別號海南，一八九八年東京帝大法科政治學系畢業，曾留學比利時。歷任遞信省書記官、北京郵政局長及遞信省貯金局長，至一九一六年由台灣總督府民政長，升總務長官；一九二一年辭職，漫遊歐美，不久，入大阪朝日新聞，現任東京朝日新聞副社長。於教育方面，曾任東京商科大學、早稻田大學、中央大學、法政大學等財政學教授，並兼任對華文化事業調查會、國立公園委員會、國際觀光委員會及簡易生命保險公積金保管委員會等委員。著有財政讀本、人口問題講話、食糧問題講話及其他隨筆集等書。二·二六事變後，廣田弘毅組閣，遞任遞信大臣，未果。

丸山鶴吉 (Maruyama, Tsurukichi)

貴族院議員，一八八三年生，廣島縣人。

廣島市著名木屐商丸山茂助之弟，一九〇九年東京帝大法科政治學系畢業。歷任警視廳科員，保安科長，內務省書

記官、朝鮮總督府警務局事務官及警務局長等職。在朝鮮時，以工作努力，深為濱藤實所器重。至一九二九年升警視總監，其時東京發生電業罷工風潮，經氏調解，得告解決，一九三一年辭職。濱藤內閣時，勅選為貴族院議員。在社會事業方面，担任相愛會會長（相愛會為日本團體融和日韓民族思想之一種組織）、全國社會事業協會會長、日本青年團理事及天理教幹事等要職。前曾派赴歐美考察警政，並曾任日內瓦軍縮會議全權委員之隨員。平沼內閣初成立時，曾有出任拓相之說。

久村種樹 (Hisamura, Taneki)

陸軍中將，一八八二年生，滋賀縣人。

士官學校第十四期砲兵科畢業，其後又畢業陸軍砲工學校、東京高等工業學校應用化學科及東京帝大工學部化學學系。歷任陸軍科學研究所員、陸軍技術本部部員、造兵火藥工廠廠長及陸軍科學研究所第三部長等職。至一九三一年升陸軍科學研究所所長，翌年，晉級中將。一九三六年八月繼岸本磯夫後，任陸軍技術本部長，傳為日軍中製造湯瓦斯之專家。

久原房之助 (Kuhara, Fusanosuke)

前內閣參議，一八七〇年生，山口縣人。

一八八九年慶應大學高等部畢業。初入森村會社，後又轉藤田會社，當經營小坂礦山之任，於礦業方面，因是積有

三驗，遂獨立創設久原礦業會社，自任總經理，此外又兼數會社之董事。歐戰時，各種礦產物騰貴，遂致富。一九二七年派為經濟調查委員赴歐考察，翌年歸國，投身政界，當選為衆議院議員。氏與田中義一，少同里閭，兼為竹馬之友，田中之得出任政友會總裁，實得力於氏之資助，一九二七年四月田中組織內閣時，即遂任選信大臣。久原既登政治舞台，其經營之久原礦業，則委之妻舅鮎川義介，改稱日本產業會社（簡稱日產），日產承一九三一年金再禁止出口及通貨膨脹潮流，獲利甚巨。氏遂利用其富有，收攬人心，對於請求援助者，有時僅需百元，而以十倍與之，故社會上，有尊為豪俠好義之國士。五、一五事變後，政友會因失統帥，內部分裂，釀成羣龍無首之現象，氏一面與鈴木喜三郎系妥協，並聯絡岡崎邦輔、前田米藏等舊政友會系要人，一面聯絡黨外革新分子，主張「皇道經濟」及「一國一黨」等理論，另組日本生產黨而自任領袖。二、二六事變時，以供給資金嫌疑，被捕入獄，直至一九三八年五月釋放。同時經濟方面，亦因頻年揮霍之故，負債達一億圓以上而宣告破產。一九三九年，被舉為政友會正統派總裁，與中島派相抗，近年曾任內閣參謀及國民精神總動員本部顧問。

久保田久晴 (Kubota, Hisaharu)

前駐天津海軍特務機關長，一八八八年生，鹿兒島縣人。

一九一〇年海軍兵學校畢業，後又畢業海軍大學，曾任第一遣外艦隊參謀，駐華公使館副武官、海軍軍令部參謀兼海軍大學教官。至一九一五年，青島戰役時，任臨時要港司令部附，後任佐世保鎮守府參謀。在軍令部時，任中國班班長，對我國地理會作精密之研究。一九二八年任職關東州，滲變時，聯絡在滿陸軍及關東廳、南滿鐵道各機關，活動甚力。一九三四年任天津海軍特務機關長。

久富達夫 (Hisatomi, Tatsuo)

內閣情報局長。

氏為財界巨頭總誠之助男爵之養子，東京帝國大學工學部造兵科及法學部政治科畢業。一九二五年八月任大阪每日新聞社會部員，不久繼西村公明後，任東京日日新聞海軍外勤記者，嗣由政治部副部長升任政治部部長，去年膺現職。氏在學生時代，以體育選手名世，交游甚廣，軍部及內外務省少壯官僚，尤與之沉湎一氣，而報界中人，無論職位高下，對之均有相當感情。據稱內閣情報局之外交問題，雖由總裁伊藤速史自任，而對內言論及新聞統制政策，則歸歸氏掌管云。

千石與太郎 (Sengoku, Kotaro)

貴族院議員，一八七五年生，島根縣人。

一九〇二年北海道札幌農業學校畢業，初任島根縣立農業學校教師，並無籍籍名。四十五歲時，由產業組合（即合

作社)巨頭故志源太郎之介，始出任產業組合主事，嗣後遷其地位，着着在合作社中，擴張勢力。現所任職務，除日本產業組合中央會副會長外，並兼該會常務理事、全國購買聯合會會長、全國販賣聯合會理事、日本柑橋聯合會會長、產業組合中央會評議員及全國蠶絲聯合會理事。日本全國一萬五千餘合作社及五百五十餘萬合作社員，均歸其一手支配，勢力之大，難以農林省之力，亦無可如之何，純理派往往加以指摘。與有賴(馬)等最莫逆，有馬欲倚之以全國合作社為中心，而組織法西斯新政黨，所謂「國民組織再編成」問題，即暗指此。一九三八年十二月勅選為貴族院議員，在該院會系中，無所屬。

千葉繁一 (Chiba, Shinichi)

駐葡萄牙公使，一八九五年生，東京府人。

一九一九年東京帝大法科畢業，即及第外交官考試。歷任駐華、比、法、義、美、西班牙等國大公使館秘書、外務省通商局第三科科长，至一九三九年三月任台灣總督府外事科長，一九四一年一月升駐南美委內瑞拉公使，旋轉現職。

及川源七 (Okawa, Genichi)

陸軍中將，一八九一年生，東京府人。

士官學校第二十三期步兵科及陸軍大學一九二〇年畢業，曾任各地駐華武官、陸軍省軍務局恩賞科員、人事局補任科科长、第三十三步兵聯隊長及第五師團旅團長，至一九三

九年八月晉級中將。一九四〇年五月任華中連絡部次長，一九四一年四月繼鈴木貞一後，升與亞院政務部長。

大川內傳七 (Okachi, Denichi)

海軍少將，一八八八年生，佐賀縣人。

亦作大河內傳七，一九〇九年畢業海軍兵學校，後又畢業海軍大學。歷任海軍兵學校教官、砲術學校教務長、海軍大學教育、生駒、淺間、比叡各艦艦長、橫須賀鎮守府附等職。一・二八戰役時，任木曾艦長，担任陸軍部隊之輸送。一九三六年十一月繼近藤英次郎後，任駐滬日本海軍特別陸戰隊司令官。一九三八年四月轉任砲術學校校長兼海軍技術會議委員，並晉級少將。

大川周明 (Okawa, Shumei)

前神武會會長，一八八七年生，山形縣人。

出鹿兒島第七高等學校(與重光葵同級)於一九一一年畢業東京帝大文科印度哲學系。一九一九年入南滿鐵道之東亞經濟調查局，一九二九年升任該局理事長。氏為大陸急進論者之先鋒，日本現在各種右翼團體之徒衆，未蒙彼之援助者殆甚鮮，而其名之著，則始自猶存社成立時。時值第一次歐戰末年，馬克斯主義之社會思潮，瀰漫三島，氏深致憂慮，偶於滿川龜太郎處，見僑居滬上之北一輝氏所著之「日本改造法案大綱」一書，大受感動，乃專誠赴滬，迎北氏歸國，共同組織「猶存社」，名稱出自陶淵明「松竹猶存」句，

社之精神；一以北氏法案為本。一九二〇年發行雄叫雜誌，以號召同志，並在士官學校授課外講義，以策勵青年軍人。其後北氏與彼意見發生衝突，猶存社遂於一九二三年解散。翌年糾合滿川組織「行地社」，其名乃取「則天行地」之義，氏任總務委員長，滿川任主事，主張與猶存社同。迨一九三一年，又以行地社青年與津久井龍雄之急進愛國黨、八幡博堂之日本國民黨為中心，結成「全日本愛國共同門爭協議會」。及秋，並與赤松克廣一派提攜，籌設「日本社會主義研究所」。一九三二年總選舉時，與菊池武夫中將、河本大作大佐及實業家石原廣一郎等，本神武建國精神，企圖實行改造日本，而結成「神武會」，自任會長，聲勢甚盛。是年五·一五事變發生，氏因供給資金及武器關係被捕，一九三四年保釋出獄。一九三五年神武會解散。其刑事部分，此數年中，經三審結果，判處徒刑四年。二·二六事變後，開始執行，及第一次近衛內閣成立，即具保釋放。其所著復興亞細亞諸問題一書，最為青年將校所愛讀，此外著作，尙有特殊殖民地會社制度研究（法學博士論文）、日本精神研究、日本及日本人之道、日本之言行、紀元二千六百年史等書。

大口喜六 (Oguchi, Kin'oku)

衆議院議員，一八七一年生，愛知縣人。

早年先後肄業於東京英語學校、東京藥學校及東京帝大藥學科。離校後，除任藥劑師本業外，並被舉為矢作水力、

豐橋電氣及東京化學會社之董事。同時對於政治方面，亦活動甚力。二十七歲時即膺選為故鄉豐橋市長，嗣任愛知縣議員。一九一二年後屢次當選為衆議院議員，一九四〇年被舉為副議長，初隸國民黨，任政務調查會長，旋轉入政友會，與前總裁鈴木喜三郎最相睦；對於財政問題，尤以地方財政，造詣甚深。一九二七年田中內閣時，曾任大藏省政務次官，岡田內閣時，亦有擔任該相之說，以善畫觀音像著名。

大久保留次郎 (Okubo, Tometiro)

東京市長，一八八七年生，茨城縣人。

家世清寒，高等小學畢業後，為其醫生司閹，後由青山師範畢業於東京高等師範學校史地科，及第高等文官試驗。歷任警視廳警視警官、訓練所教官、台灣總督府警務部長、新橋神樂坂署長、新潟福岡警察部長、台灣總督府警務局長及警視廳刑事部長。至一九三一年大藏內閣時，任千葉縣知事，退職後貧若不堪，由鳩山一郎之介，於一九三六年任東京市助役；嗣任中塚、賴母木二市長。在官僚系統上，為政友會之水野鍊太郎系，惟對民政黨中人，亦頗有聯絡，故一九四〇年六月受政友會系四〇票及民政黨系二〇票之擁護，擊敗若槻禮次郎、伍堂卓雄等著名人物，而當選為東京市長。

大久保利隆 (Okubo, Toshitaka)

駐匈牙利公使，一八九五年生，鹿兒島縣人。

一九二一年東京帝國大學法科畢業，先一年，已及第外

交官領事官考試。由外務省亞洲局科員、天津、不魯塞耳領事及駐義大利大使館二等祕書，於一九三四年轉任調約局第二科科長，一九三七年四月任第一科科長，一九四〇年十月，升充現職，並兼駐克羅地亞公使（前南斯拉夫之一部）。

大久保利賢 (Okubo, Toshikata)

橫濱正金銀行總裁，一八七八年生，鹿兒島縣人。

氏爲明治維新元勳大久保利通之三子，重臣牧野伸顯（出繼牧野吉之丞爲養子）之弟。一九〇三年東京帝大法科畢業，卽入橫濱正金銀行，由普通職員歷任倫敦分行經理及橫濱本行經理、理事等職，於一九三三年繼竹內金平之後，任本行副總裁，一九三六年九月繼兒玉謙次後，任總裁。妻係前藏相高橋是清三女，因外匯關係，與普通銀行恆積不相能。與結城豐太郎、小川郷太郎等，均於明治三十六年畢業東京帝大，故有「三六合」之組織。

大久保偵次 (Okubo, Teiji)

華北開發會社理事，一八八五年生，東京府人。

一九〇八年東京帝國大學法科畢業，卽入大藏省，由科員升至銀行局長，在職達二十餘年之久。中以京濱大地震時，奉職頑勁，遂爲上官所垂青。一九三二年帝國人造絲會社賭案發生後，被逮下獄，後經親友積積重遠之出庭辯護，得無罪開釋。賀屋興宣任華北開發會社總裁後，遷任現職，長於會計事務。

大木良枝 (Okii, Yoshie)

陸軍大佐，一八九五年生，東京府人。

士官學校第二十九期砲兵科及陸軍大學畢業，曾任參謀本部地誌班中國班班員、漢口特務機關員、杭州特務機關長，一、二八戰役時任派遣軍參謀，一九三三年調回參謀本部，一九三六年任駐山海關特務機關長。七、七事變發生後，任天津駐屯軍高級參謀，一九三八年三月晉級砲兵大佐。

大內暢三 (Ouchi, Chozo)

前上海同文書院院長，一八七五年生，福岡縣人。

一八九四年畢業於早稻田大學前身之東京專門學校後復赴美，在哥倫比亞大學研習政治及憲法學，曾任近衛篤磨（近衛文麿之父）之私人祕書多年，並當選爲衆議院議員三次，一九二七年就任上海同文書院院長，一九三九年辭職。

大矢半次郎 (Oya, Hanjiro)

勸業銀行理事，一八九二年生，岩手縣人。

原姓佐佐木，因入嗣富森大矢馬太郎爲養子，故改今姓。一九一八年東京帝大法科德法學系畢業，經高等文官考試及第，於翌年入大藏省。歷任各地稅務署署長、稅務監督局部長、銀行檢查官及祕書等職，至一九三五年任國稅科科長，一九三六年升主稅局長。近年增稅計劃，胥出其策劃，爲石渡莊太郎系之紅人。一九四一年一月調勸業銀行理事。

大田正孝 (Ota, Masataka)

衆議院議員，一八八七年生，靜岡縣人。

一九一二年東京帝大法科經濟學系畢業。歷任板橋稅務署長、神戶稅關總務科長及大藏省主計官等職，至一九一九年以其妻翁報知新聞社長三木武吉之關係，遂辭去官職，任該報副社長。以雄健之筆，撰述社論，同時又聘菊池寬、久米正雄等第一流小說家爲特約撰述，與東京朝日、東京日日兩新聞社相競，後退社，自行發刊雜誌。一九三〇年後，連續當選爲衆議員，與堀切善兵衛、大口喜六等，同稱爲政友會之財政專家。一九三一年十二月任大藏省參與官，一九三八年任該省政務次官，翌年任大政翼贊會政策局局長。現除議席外，兼任早稻田、中央大學等校講師。前曾兩渡歐美，著有保稅倉庫論、經濟讀本等書。

大田爲吉 (Ōta, Tametichi)

前駐俄大使，一八八〇年生，鳥取縣人。

早歲家貧，以苦學生畢業於日本大學法律科。一九〇三年及一九〇七年，先後及第高等文官及外交官領事官考試，派任香港領事，不久調充關東都督府事務官及紐約領事。嗣後歷任中美墨西哥、加拿大諸國大公所館二三等秘書總領事及參事官，至一九二五年擢爲西班牙兼葡萄牙公使，一九三二年轉廣田弘毅後任駐俄大使，一九三六年秋辭職。性格純重，在外交界派別，與廣田同系。

大西 齋 (Onishi, Sai)

東京朝日新聞論說委員，一八八七年生，大阪府人。

上海同文書院政治科畢業，一九〇二年入東京朝日新聞社，一九〇七年一月轉大阪朝日新聞之通訊科，是年十二月調外部科，一九〇八年三月調任上海特派員，翌年一月歸國，後升爲北京通訊部主任，一九二四年回東京朝日新聞中國部服務，一九〇五年升部長，一九二九年十二月調任倫敦軍縮會議特派員，一九三〇年後轉任論說委員兼東亞問題調查委員會常任幹事。聞對於我國人情風俗之熟悉，日本人中鮮有出其右者，著有現代中國及行進中之中國等書。因身體虛弱，殊少執筆。

大谷光瑞 (Ōtani, Kozui)

內閣參議，一八七七年生，京都府人。

氏爲明如上人，大谷光普之庶子，法號銳如，故拓相大谷尊由之兄。早年卒業於學習院，留學歐洲歸國後，居六甲山研究內外之經典多年。一九〇三年明如上人逝世，繼爲京都西本願寺方丈，並兼真宗本願寺派管長，一九一四年辭職。家財甚富，曾遊歷我國、泰國、安南及南洋等處，住我國尤久，深通漢文，自謂漢文程度較高於日文。近年任佛教團體光壽會總裁，日本佛教勢力之深入滿洲，卽由彼所首創。會斥巨資，先後在大連飼養蛤蟆，在南洋經營橡膠皮等事業，均告失敗，幾瀕破產。後乃聯絡住友會社，從事南進。著書甚

多，有帝國之將來、人民之覺醒、與興計畫等書。平時短篇論文，亦屢有發表，其關於佛教者，多載光壽會之機關雜誌「大乘」中。妻壽子爲皇族女，於一九一二年逝世。近衛第二次內閣成立後，遞任現職，以迄於今。

大谷 登 (Ogari, Noboru)

日本郵船會社社長，一八七四年生，福井縣人。

一八九六年東京高等商業學校畢業，即入日本郵船會社，服務於倫敦澳洲等處。其後由新嘉坡駐在員、香港支店副經理、加爾各答、紐約、倫敦各地支店長，於一九二三年任專務理事，一九二九年任副社長，一九三六年繼各務謙吉後升社長，以迄於今。曾於世界船主會議及世界海事委員會，擔任日本船主代表，並參加國際商會及國際海法會議等。現除郵船會社社長外，兼任東京商工會議所常任議員、資源會議會委員、大日本航海會社社長、及近海汽船、日清汽船、海外興業各會社理事。氏資性靈敏，富商業手腕，在商乘時，學校當局擬留校使任教職，然彼終願充郵船會社之一小職員，經四十餘年之努力，卒達今日之地位，其間得各務謙吉之援助獨多，故處世任事之態度，一取法於各務。

大村卓一 (Omura, Takuchichi)

南滿鐵道會社總裁，一八七三年生，福岡縣人。

一八九七年畢業札幌農科大學土木工程系。初任北海道炭礦鐵道會社技師，一九〇三年派赴歐美及西伯利亞等處視

察鐵道事業。歸國後歷任帝國鐵道院技師、北海道鐵道管理局工務科長、技術科長、代理局長及鐵道監察官等職。一九一八年：日本出兵俄國時，任西伯利亞鐵道監理官。一九二〇年以來，曾先後擔任中國交通部顧問、膠濟鐵路車務處長、並充該路返還時之日本代表，極力揮其政治手腕。一九二五年任朝鮮總督府鐵道局長，九、一八事變後，調關東軍交通部長；一九三五年以松岡洋右之汲引，任南滿鐵道會社副總裁兼計劃部長，一九三九年奉升總裁，以迄於今。

大村清一 (Omura, Seiichi)

華北開發會社調查局長，一八九一年生，岡

山縣人。

東京外國語學校德語科及東京帝大法科德法學系畢業，一九一七年復入大學院專攻民法，後經高等文官考試及第，入內務省。歷任東京府主事、京都府事務官、東京府財務科長、復興局書記官、內務省警保局警務科長、地方局地方科長、財務科長及長野縣知事等職，至一九三七年河原田稼吉任內相後，擢升警保局長。一九三八年十二月，轉任神奈川縣知事，一九三九年阿部內閣時，河原田繼荒木貞夫任文相，復升爲文部次官，一九四〇年派充現職。幼年家境清寒，在外國語學校時，嘗於課暇担任東京府立農林學校講師，藉補膏火。

大河內正敏 (Okochi, Masatoshi)

子爵，理化學研究所長，一八七八年生，東京府人。

氏原為上總三萬戶諸侯後裔，一九〇三年東京帝國大學造兵科畢業。曾任東京帝國大學教授及內閣勸任參與官，一九一九年辭參與官職，當選為貴族院議員。後又任理化學研究所所長，並創辦理化學興業會社（簡稱理研），自任董事。理研為各大財閥共同設立之「康載倫」，資本一千萬圓，實權操於野村財閥之手，共能運用之基金，達二億圓左右，近年以軍需工業關係，大獲厚利，氏亦遂與鮎川義介、森羅親、野口遵及中野有禮等齊名，而為新興財閥領袖之一。著有資本主義工業與科學主義工業一書，力言：「資本主義雖以擁護資本為唯一目的，而有消極積極兩種，消極的資本主義，以減低工資維持利益，固不足取，積極的資本主義，則用大量生產方法，博取厚利，但遇生產過剩，亦無法自救；惟科學主義則在應用新發見新發明於工業，生產價廉物美之必需品，大量供給於世界人類，資本家勞動者與需要者，交受其益，實不當非難之」。又云：「欲達到科學主義之工業，其第一條件，須謀農村工業化，蓄都市物價昂貴，成本太高，故一切工業品，應在農村製造，祇須送交都會配合，付諸販售可也」。氏在貴族院為研究會之要角，曾得工學博士學位，風貌韻修，妻亦頗以賢淑見稱，以一人之身，而兼學者、政治家、資本家、貴族、美男子，更得賢淑之女子為內助

，世人多以日本第一之幸福者稱之。

大河內輝耕 (Okochi, Hiko)

子爵，貴族院議員，一八八〇年生，東京府人。

大河內政敏之弟，早歲肄業學習院，一九〇五年畢業於東京帝大法科政治學系。出校後，即供職大藏省，歷任主計局主計科長、專賣局主事、大藏省參事官兼專賣局參事、東京地方專賣局長等職。其間又嘗派赴歐美考察財政。一九三一年後，當選為貴族院議員，承統屬研究會，為貴族院中之財政通。平時篤好讀書旅行，妻國子，為公爵德川慶光之倩姑。

大坪保雄 (Otsubo, Yasuo)

島取縣知事，一八九八年生，佐賀縣人。

一九二三年東京帝大法科英法學系畢業，即任廣島縣社會局科員，嗣由高知縣保安科長、兵庫縣調停科長、大阪府社會科長、警視所調停科長及山口縣學務部長，於一九三四年赴滿任國務院要職。一九三七年三月，任內務省圖書科長，履任後數日，即頒令禁傳河合榮治郎所著「帝國主義下之台灣」等書。一九三八年三月調石川縣總務部長，是年九月又調任警視所刑事科長，一九四〇年七月，任內務省保安科長兼精神總動員協會常務理事，十二月升島取縣知事。時人多目為革新官僚之巨頭，為安井英二系健將。

大垣 研 (Ogaki, Ken)

南滿鐵道會社理事，一八八八年生，兵庫縣人。

一九一二年神戶高等商業學校畢業，即入山東淄川炭礦公司用度科。一九一八年任南滿鐵道經營之鞍山製鐵所科員，越二年擢爲撫順煤礦公司採辦科長，一九二六年轉經理科長，一九三〇年五月任庶務科長，一九三一年任總公司經理部主計科長，翌年四月升撫順炭業公司副經理，一九三五年繼市川健吉後，任總公司經理部長，一九三八年升經理局長，隱然爲滿鐵高商系之重鎮。

大城戸三治 (Ojiko, Sanji)

陸軍少將，一八九三年生，山形縣人。

士官學校第二十五期步兵科及陸軍大學畢業。一九二五年任參謀本部地誌班班員，一九二八年派駐北平，擔任特務工作，翌年升任駐華使館副武官，一九三一年調充參謀本部中國班班員，旋升滿蒙班班長，一九三三年一月轉天津特務機關長，同年八月任陸軍省軍務局高級科員，一九三五年八月轉步兵第三十四聯隊附，一九三七年五月繼雨宮巽後，任駐華大使館武官，是年十二月轉任第七師團聯隊長，一九三八年參加張鼓峯戰役，一九四〇年任陸軍省功績調查部長。

大倉喜七郎 (Okura, Kichichiro)

大倉財閥總經理，一八八三年生，東京府人。

氏爲大倉財閥之主人，祖父大倉千之助，係越後新發田之豪商，父大倉喜八郎，即大倉財閥之創始者。喜八郎於一

八六五年走東京開設大倉屋於和泉橋畔，經營槍砲，時值幕府末葉，勤王倒幕，兵戈倥傯，遂獲巨利。其後內亂弭平，喜八郎遂決心改變營業方針，先於一八七二年赴歐美考察，歸國後創立合名會社大倉組，經營進出口業，旋兼營土木建築業，晚年乃致力於對華投資。日本財閥中，與我國關係最密切者爲大倉，而喜八郎與我國達官貴人，結交之廣，殆爲日人所罕見，彼於一九二八年以九十二歲之高齡逝世。喜七郎爲其長子，嘗留學英國，雅好輿曲，對於高等數學及歷史哲學，亦有相當研究。一九二四年繼承父業，任大倉組總經理，統轄全般事業，輔之者爲門野重九郎。現除任大倉組總經理外，更兼任帝國旅館、大倉製紙工場、大倉蘇門答臘農場各會社理事長，帝國劇場、秋田木材、日本皮革、日本電池各會社理事，朝鮮麥酒、宇治川電氣各會社董事及日本工業俱樂部監事等職。

大島浩 (Oshima, Hiroshi)

駐德大使，一八八七年生，岐阜縣人。

前陸軍大臣現任貴族院議員大島健一之子，士官學校第十八期砲兵科及陸軍大學畢業。曾任參謀本部歐洲班班員、班長。在小學時，其父即令其暗記德語，能背誦普通德文辭典，德語之嫻熟，日本陸軍中，殊無出其右者。一九三四年三月調任駐德武官，與里賓特洛夫最稱莫逆，德日防共協定之訂立，即氏與白鳥敏夫兩人奔走所致。一九三八年十月升

任駐德大使，一九三九年秋以平沼內閣躊躇加入軸心同盟辭職，一九四〇年冬仍回原任，並兼駐斯洛伐克公使。

大庭唯男 (Otsu, Tadao)

大政翼贊會議局議事部長，一八八八年生，熊本縣人。

父勇次為日本第一流劍客，兄博之亦輩聲吟壇。一九一四年東京帝大法科政治系畢業，即入內務省。歷任山梨、山形、神奈川等縣警視、理事官及警保局外事科長，同鄉清浦奎吾首相之隨從秘書。一九二四年當選為衆議院議員，初隸政友本黨，後轉入民政黨。一九二九年濱口內閣時，任文部省參與官，曾被舉為民政黨幹事長。總務及常任顧問等職，與町田總裁最為莫逆。又熱心於維持政黨政治，新體制運動發生後，遂任現職。

大野錄一郎 (Ono, Ryukichiro)

朝鮮總督府政務總監，一八八七年生，埼玉縣人。日本勸業銀行參事大野榮三之弟，一九一二年畢業東京帝大法科，經高等文官考試合格，入內務省。歷任秋田、香川各縣理事官及內務省社會書記官。一九二三年派赴歐美各國考察社會事業，歸後經社會局社會部職業科長、德島、岐阜兩縣知事、內務省社會部長、中央勸業介紹所事務局長及內務省地方局長，至一九三二年以四十六歲之壯年，升任警視總監。在任僅數月，以一五事變關係，引咎辭職。氏

與長岡隆一交情甚篤，二人於東京設有經濟研究所，專事研究日滿統制經濟。長岡為南次郎幕下唯一親信，在關東局長任內，以大野介於南氏，聘為關東軍顧問。後長岡轉任滿洲國務院總務廳長，氏即繼為關東局長，旋長岡辭總務廳長，又由氏補其遺缺，然在任均不久。一九三六年八月南次郎出任朝鮮總督，調為政務總監，以迄於今。氏常識豐富，處事穩健，向稱能與各方合作；對於勞動問題亦有相當研究，前曾充日內瓦第十五次國際勞動會議日本政府代表。平時好釣魚，善圍棋，並崇信佛教。

大野龍太 (Ono, Ryuta)

大藏省顧問，一八九二年生，兵庫縣人。

氏為樞密院副議長原嘉道之婿，一九一七年東京帝國大學法科政治學系畢業，經高等文官考試及格，即入大藏省。歷任主稅局、理財局事務官及銀行局特別銀行科長等職。向與賀屋興宣、石渡莊太郎、青木一男、津島壽一同稱為大藏省之四金剛。三土忠造任藏相時，次官黑田英雄以帝國人造絹絲會社賄案（簡稱帝人事件，帝國人造絹絲會社將股票數百萬元，押入台灣銀行，逾期不贖，後人造絹絲出口，突飛猛進，股票大漲，台銀當局暗將出售股款所得之利益朋分於大藏省三藏要人），事後被人告發，三土、黑田均因此獲咎，氏以特銀科長關係，亦遭牽連。及賀屋上台，委為臨時政府顧問，不久內調理財局長。平沼內閣成立，石渡升藏相，

氏繼任大藏次官。一九四一年三月辭職，任藏省顧問。平時好讀書旅行，宗教方面，信淨土宗。

大森洪太 (Omori, Kota)

大審院次席部長，一八八五年生，三重縣人。

一九一二年東京帝大法科畢業，經法官考試及第，於一九一四年派任東京地方裁判所候補推事，一九二〇年五月升任檢察官，並兼司法省參事官，一九二四年八月任日內瓦國聯會議臨員，一九二五年任倫敦國際稅務會議委員，一九二六年任東京控訴院刑庭推事，隔一年任大審院推事，一九三三年四月任司法省民事局長，一九三九年九月任名古屋控訴院長，一九四一年一月任現職。

大森義太郎 (Omori, Gitaro)

評論家，一八九八年生，東京府人。

一九二二年東京帝國大學經濟學部畢業，即任該校助教，後派赴歐美留學，一九二七年回國，翌年辭助教職，任勞農雜誌主筆。氏為大內兵衛之得意門生，否定所謂日本的經濟學，與土方成美意見最抵牾，同時對小泉信三、青野季彦等擁護資本主義之論客，亦不時加以痛罵。一九三七年冬，以人民陣綫關係，與大內兵衛同時被捕入獄。著有唯物辯證法讀本及其他論文多種。

大達茂雄 (Odachi, Shigeo)

前臨時政府顧問，一八九一年生，東京府人。

一九一六年東京帝國大學法科畢業，是年即獲售高等文官考試。歷任內務省事務官、書記官、神奈川縣地方部長及福井縣知事。在福井縣任內，以師範學校轉移問題，與山本達雄內相、潮惠之輔次官、安井英二地方局長等，意見抵牾，憤而辭職。平素厭惡政黨，不肯遷就。一九三四年八月出任滿洲國務院法制局長官，不久復轉任總務廳長，一九三七年冬辭職。一九三八年三月，與湯澤之平男同時就任前臨時政府顧問。在未發表前，末次信正本擬選任內務次官，會氏已受諾就職，遂作罷云。

大淵三樹 (Obuchi, Mikio)

帝國燃料興業會社副總裁，一八八五年生，福岡縣人。

一九一一年東京帝大法科畢業，由學校之推薦，同年即入南滿鐵路東京支社任事。後轉入滿鐵總公司地方部任勸業科長，一九二四年重回東京支社，由庶務科長升任支社次長。一九二九年任上海事務所長，翌年調任東京支社長，一九三二年十月選任為滿鐵理事，一九三七年任現職至今。

大熊正吉 (Okuma, Masachichi)

海軍中將，一八八八年生，愛知縣人。

一九〇九年與一九一八年，先後畢業海軍兵學校及海軍大學。曾以伊吹號艦員，參加青島戰役。歷任海軍兵學校教官、水雷學校教育長、山城艦艇長、第五及第二水雷戰隊司令

令官及軍令部出仕等職，至一九四〇年十一月，任大瀨要港部司令官，以迄於今。

大橋八郎 (Ohashi, Hachiro)

前內閣書記官長，一八八四年生，富山縣人。

一九一〇年東京帝大法科政治學系畢業，經高等文官考試及格，即入遞信省。歷任郵便貯金局事務官、遞信省書記官、遞信大臣秘書官、文書科長、郵務局長及經理局長，於一九三一年升任遞信次官。一九三五年岡田內閣時，菊池武夫等標榜所謂國體明徵問題，圍倒內閣，其時法制局長官金森德次郎，以夙主張天皇機關說，被迫去職，遂委氏繼任，二、二六事變後辭職。是年九月勅選入貴族院，一九三七年林銑十郎組閣，氏與林弟白上佑吉，因係同窗好友，經白上之推薦，出任內閣書記官長，六月隨林辭職。氏性情開朗，處事細心，在遞信省任職達二十五年之久，勢力甚厚，因有「大橋系」之結成，與田邊治通之「通信系」、今井田清德之「郵政系」，互相並立。

大橋忠一 (Ohashi, Chuichi)

前外務次官，一八九三年生，岐阜縣人。

華名柯夢嵐，一九一八年東大法科英法學系畢業，即及第外交官考試。歷任西雅圖及羅斯安第領事、外務省通商局第三科長、華盛頓會議隨員、駐華公使館二等秘書官、哈爾濱總領事等職。滯變後，攝為滿洲外交次長，一九三八年轉

任國務院參議。一九四〇年五月派赴南洋視察，歸後任近衛內閣之外務次官。

大藏公望 (Okura, Kimochi)

貴族院議員，一八八三年生，東京府人。

故陸軍中將大藏平三之第三子，一九一一年襲男爵。初畢業於東京帝國大學工科土木系，後復渡美實習鐵道工程四年，至一九〇八年歸國。嗣後歷任鐵道院技師、靜岡站副站長、新橋站運輸事務所長、鐵道省運輸局貨物科長及神戶鐵道管理局運輸科長等職，於一九一九年入南滿鐵道會社任運輸部次長，後被舉為理事，直至一九三一年改任顧問。一九三二年起，互選為貴族院議員，以迄於今。氏為日本最著名之滿洲通及蘇俄通，以私費設一大藏研究所於大阪，搜集材料，至為豐富。現除滿鐵顧問、滿洲移住協會理事長及昭和熱帶任理事外，所任公私職務，達三十餘種。著有蘇聯之真相、日滿統制經濟論等書。

小川平吉 (Ogawa, Heikichi)

前鐵道大臣，一八六九年生，長野縣人。

一八九二年東京帝國大學法科畢業，即入司法省，不久改業律師。一九〇三年後，連次當選為衆議院議員，隸政友會籍。一九一九年原(敬)內閣時，被舉為國務院總裁；一九二四年加藤(高明)聯立內閣時，繼橫田干之助後，任司法大臣；一九二七年田中(義一)內閣時，任鐵道大臣；一九

二九年因賄索關係，被逮入獄，後以證據不足獲釋。早歲與我國民黨要人，交往頻繁，時來華游歷。現除律師職外，並任東亞同文會、大東文化協會及南洋協會理事等職。

小川郷太郎 (Ogawa, Gotaro)

前鐵道大臣，一八七六年生，岡山縣人。

一九〇三年東京帝國大學法科政治學系畢業，即任京都帝大法科講師，旋升助教。一九〇六年被派留學德國，後又轉學法、比、奧、意諸國，研究財政經濟，留居海外六年，歸任京經帝大教授。一九一三年得法學博士學位，一九二二年任經濟學部長，一九二四年辭職。氏之政治生涯，始於一九一七年之當選為衆議員，初不隸黨籍，後由政友本黨轉入民政黨，連續被選多次。濱口內閣時，任大藏省次官；一九三六年三月廣田內閣成立，代表民政黨入閣之川崎卓吉，不久病故，由氏繼任商工大臣；一九四〇年任第二次近衛內閣之鐵道大臣，未幾去職。氏為有名之財政學家，著作豐富，在京都市大時，與神戸正雄並稱為「租稅學博士」。

小山松壽 (Koyama, Shoin)

衆議院議長，一八七六年生，長野縣人。

幼年師事中江兆民，一八九五年畢業於早稻田大學前身之東京尚門學校法律科。出校後，任大阪朝日新聞記者，游歷華南一帶，其所寄關於中國情形之通信稿，為時所稱。後轉任該報名古屋支局長，一九〇六年買收當地之中京新聞，

改稱名古屋新聞，自任社長，獨力經營。一九一五年以來，屢次當選為衆議院議員，隸民政黨籍，為若槻（體次郎）系人物。一九二四年加藤（高明）內閣時，曾任農林省政務次官，并兼都市計劃中央委員會委員及米穀調查委員會委員等職。一九三〇年十二月被舉為衆議院副議長，後升議長。氏頭腦清晰，體格壯健，演說時聲音宏大，從事政治工作，雖已歷多年，猶保持新聞記者之風度。

小口五郎 (Kouchi, Goro)

名記者，一八九〇年生，福岡縣人。

上海同文書院畢業，歷任順天時報、青島日報及濟南新聞記者，後在北平辦通信社，自任社長。著有蘇俄對華赤化運動一書。事後入外務省，曾任該省情報部囑託。

小日山直登 (Tohiyama, Naoto)

昭和製鋼所社長，一八八六年生，山形縣人。

一九一〇年東京帝國大學法科畢業，即入南滿鐵路公司，累升至撫順煤礦公司庶務科長。一九二一年以研究社會政策，派赴歐美視察，時某煤礦公司發生訟案，氏亦被累，後辦國際運煤會社，自任代表董事。一九二七年任滿鐵理事，一九二九年任銑鐵共同販賣會社專務理事，不久與銑北滿金礦公司，被舉為董事長。一九三七年春，昭和製鋼前社長伍堂卓雄，出任林內閣之商相，氏經松岡洋右推薦，升任現職。性情瀟灑，雅好歌詠，為女詩人與謝野晶子之門人。

小汀利得 (Ocho, Toshitoku)

中外商業新報編輯長，一八八九年生，神奈川縣人。

早稻田大學商科第一名畢業。初任島田三郎之私人秘書，後入增田商會，從事進出口貿易事務。不久又入三井之東京中外商業新報，由普通編輯升至現職，並兼任中央物價委員會委員。氏為日本新聞界中屈指之演說家，發表關於時事、經濟之論文甚多；與高橋龜吉、小島精一、勝田貞次及山崎純純等，同稱為最時髦之經濟記者，深為池田成彬所器重。生平手不釋卷，惟時好批評。

小正權 I (Kodaira, Gonichi)

前農林次官，一八八四年生，長野縣人。

一九一〇年及一九一四年先後畢業東京帝國大學農科農政學系及法科政治學系。歷任農商務省事務官、臨時產業調查局事務官、農商務省技師兼文部省督學官。一九二四年農商務省改為農林省後，又歷任農務局長、農政科長、米穀科長、蠶絲局長及農務局長等職。至一九三二年升經濟更生部長。氏對於救濟農村，夙主運用產業合作社以達到農村工業化之地步，惟在蔣五載，成績殊鮮；於是轉而提倡移民滿洲，為解決農村問題之關鍵。及一九三六年秋間，被關東軍聘為經濟顧問，專司研究移民問題。在農林省時，與蠶絲局長井野碩哉、山林局長兼關東軍經濟顧問村上龍太郎、

米穀局長高見安、農政科長田中長茂及調查官和田博雄等，均為後藤文夫部下之健將，農林省新官僚系之代表人物，氏以思想銳進，尤被推為傑出。二·二六事變時，紛傳真崎(甚三郎)內閣、建川(美次)內閣等說，而小平農相之謠，亦甚囂塵上。一九三八年有馬賴孫出膺農林大臣，氏因同級好友，升任農林次官，一九四〇年辭職。著有農業金融論、產業組合論等書，曾得農學博士學位。

小池四郎 (Kojke, Shiro)

衆議院議員，一八九二年生，東京府人。

由開成中學、第一高等學校而畢業東京帝大工科探礦學系。一九一七年入鈴木商店，任九州木屋瀨炭礦長；一九二二年加入日本工人俱樂部，得與安部磯雄相識；一九二六年社會大眾黨成立，被舉為該黨常委；一九三二年由福岡縣第四區當選為衆議員，是年隨赤松克唐脫離社大黨而另組國家社會黨，遂成為革新陣營中之人物。在學校時代，以柔道馳名，管力斥軟性文學，謂足以敗壞風紀，時與文藝作家齟齬。

小兒山恭造 (Koni-yama, Kyuzo)

陸軍中將，一八八五年生，京都府人。

士官學校第十七期步兵科及陸軍大學畢業。歷任士官學校教官、台灣軍參謀、步兵第七十八及第四十九聯隊長、宇品(日本軍港)陸軍輸送部輸送科長、福山聯隊區司令官、步

兵第六旅團長、第八師團司令部附，至一九三八年冬晉級中將。

小谷節夫 (Kotani, Seisuo)

大青島日報社長，一八八五年生，岡山縣人。

一九〇八年上海同文書院畢業。初任古河礦山會社濟洲支店社員，一九一六年自在青島創辦天佑貿易公司。一九二二年任吳佩孚之顧問，吳失敗後，任青島新報社長。一九二八年由岡山縣當選為衆議院議員，隸前政友會籍，並兼任同和興業會社董事。一九三八年創辦大青島日報，自任社長。

小林 川 (Kobayashi, Ichizo)

前商工大臣，一八七四年生，山梨縣人。

氏爲小林甚八之長子，一八九二年畢業慶應大學，入三井銀行，服務甚久。一九〇七年創辦阪(大阪)神(神戸)急行電鐵會社(簡稱阪急)。嗣後歷任該會社之專務理事、總經理等職。氏以阪急之成功，聲譽驟著，遂爲池田成彬所垂青，由阪急總經理而任爲東京電燈會社(簡稱東電)之副經理。東電擁有資本四億二千九百萬圓，爲日本電氣業界之領袖，三井雖非其最大股東，然以東電債權多經三井銀行之手，故握有支配權力。一九三三年十一月東電總經理鄉誠之助辭職，由氏補其遺缺，遂成爲東電之獨裁者。先是，氏嘗創辦寶塚歌劇場，間亦自寫劇本上演，及任東電副經理時，

又建立寶塚劇場、日比谷劇場、有樂座劇場(均在東京)等，因有「娛樂業大王」之別名。除東電外，兼任阪急理事長，東京寶塚劇場代表理事，飯山鐵道、山陽中央水電、目黒蒲田電鐵及東京橫濱電鐵各會社理事，昭和肥料會社及第一生命保險會社董事，松竹興行會社及東洋製鐵會社顧問等職。渡溝橋事變發生後，氏著「華北事變天佑論」，謂「此問題解決，不特日本之軍需資源，從此可以無虞匱乏，而對蘇俄作戰，亦立於有利地位，故雖費一二十億圓之國帑，亦所不惜」。一九四〇年第二次近衛內閣成立後，任商工大臣；是年秋間，派赴荷印參加日荷經濟談判，翌年四月辭職。性好書畫、骨董，著有雅俗山莊漫筆等書。

小林光政 (Kobayashi, Mitsumasa)

前高知縣知事，一八八三年生，栃木縣人。

一九一七年東京帝大法科畢業，卽入警視廳，後由東京淀橋署長、朝鮮總督府警務科長、台灣總督府保安科長、警視廳官房主事及特高科長，於一九三一年七月任福岡縣內務部長。一九三三年脫離政海，任讀賣新聞副社長；不久因山本內相之選，復出任埼玉縣內務部長，一九三四年任青森縣知事，一九三七年任高知縣知事。在官僚系統上，屬民政黨人物。

小林宗之助 (Kobayashi, Sonosuke)

海軍中將，一八八六年生，長野縣人。

一九〇七年海軍兵學校畢業，後又畢業海軍大學。歷任海軍省軍務局科員、駐法及駐英大使館武官、島風・長良・羽黑等艦艦長、海軍大學校教官、海軍省人事局長、第五戰隊及第四戰隊司令官、日內瓦軍縮會議委員、皇族武官等職，至一九三七年春，伴秩父宮雅仁親王赴英參加慶賀英皇卽位典禮，一九三八年十一月升任鎮海要港部司令官。平素好乘馬盆菽，並信佛教。

小林省三郎 (Kobayashi, Shosaburo)

海軍中將，前滿州方面海軍司令官，一八八三年生，神奈川縣人。

小林長三之第五子，原籍新潟。一九〇四年考入海軍兵學校，時值日俄戰爭前夕，反俄空氣，瀾漫三島，氏欲借學友從戎，因年齡學力關係，未蒙學校當局允准。及該校畢業，卽以少尉任官，一至九三四年十一月，累進至中將。其間又畢業海軍大學，歷任橫須賀鎮守府參謀、利報・鳳翔等艦長、航空本部教育部長、霞浦航空隊司令官及鎮海要港部司令官等職。五・一五事變後，轉任滿洲方面海軍司令官。在滿時與小磯國昭，並稱「一海一陸」之大人人物。氏為平沼騏一郎之親信，為人富有機智，尤善籠絡人心，故青年將校，多依歸之，自號「越海居士」。一九三六年春，與澤田靜枝、松下元、今村信次郎等，同時編入預備役，宗教方面，崇信神道。

小林順一郎 (Kobayashi, Junichiro)

陸軍大佐，一八八一年生，東京府人。

士官學校第十三期砲兵科畢業，與建川美次同期。建川以騎戰著，而氏則砲兵戰術及射擊法等，有獨特研究，並為世稱。妻為法國人，久任駐法武官及日內瓦軍縮會議日全權代表隨員，以輸入法國所產特殊鋼鐵致富。一九二四年退入預備役後，大肆政治活動，與橋本欣五郎同稱為軍人中之革新分子，著有「非常時救國外交政策」一書，極力指摘歐戰後日本外交之失敗，主張根本改革外交機構。前曾創辦「自衛雜誌」，一九三四年易名「一九三六年雜誌」，大唱一九三六年危機之說，並組織「三六俱樂部」，以號召同志。後任琦玉縣川口市愛國勞動農民同志會會長，新體制運動發生後，任大政翼贊會委員。

小林西造 (Kobayashi, Seizo)

海軍大將，前台灣總督，一八七八年生，廣島縣人。

氏為廣島縣藩士早川龜太郎之第三子，以入嗣小林時之助，故改今姓。一八九八及一九一一年先後畢業海軍兵學校及海軍大學，一九三三年升任海軍大將。日俄戰爭時，任第三艦隊參謀，以功受金鵒勳章。嗣後歷任駐英及駐美大使館武官、擊手副艦長、海軍大學教官、海軍省及海軍技術本部副官、平戶艦長、海軍省軍務局長、第三戰隊司令官、騎習

艦隊司令官、艦政本部長、海軍次官及第一艦隊司令官兼聯合艦隊司令官等職。於一九一五年曾任出席巴黎馬運河開通式日本代表出羽大將隨員，一九二七年又隨齋藤大將出席倫敦第三次軍艦會議，故在海軍中，被目爲「條約派」之領袖。一九三六年春，編入預備役，一九三七年春調任台灣總督，一九四〇年冬辭職。

小松輝久 (Komatsu, Teruhisa)

華中海軍最高指揮官，海軍中將，一八八八年生，東京府人。

北白川宮能久親王之第四子，以侯爵降入臣籍，賜今姓。一九一〇年海軍兵學校畢業，其後復留學英國。歷任軍令部參謀、海軍大學教官、五十鈴長門等艦副艦長、嚴島、迅鯨、木曾、那智等艦艦長及第一戰隊司令官，至一九三七年升少將。旋任海軍大學教務長，一九四〇年十一月任旅順要塞司令官，昇中將，翌年七月任華中海軍最高指揮官。

小泉又次郎 (Koizumi, Matajirō)

前遞信大臣，一八六五年生，神奈川縣人。

氏爲小泉由兵衛之次子，曾任中學教師、橫須賀貿易新聞編輯、橫須賀市議會議員及議長、神奈川縣議會議員、橫須賀市長。當選爲衆議院議員，迄今已達十餘次，並常被舉爲副議長。在民政黨之困苦時期，任幹事長職，奮鬥不屈。一九三九年濱口內閣成立，擢爲遞信大臣，若槻內閣時仍留

任，一九三一年十二月辭職，一九三四年六月重任橫須賀市長，旋即告退。每遇民衆運動發生，氏輒忘其年事，爲之先驅。林銑十郎內閣時，氏常提出質問，何以要求入閣者脫離黨籍，致林氏窮於應付，僅答爲係適應日本特獨之立憲政治。居恆自稱「野人」，間亦出入交易所，作投機事業。

小泉悟郎 (Koizumi, Gorō)

大政翼贊會監察部長，一八九五年生，大阪府人。

一九二二年東京帝大法科德法學系畢業，卽入內務省社會局，担任翻譯健康法，不久出任山形縣警視。後由熊本縣經濟部長、福岡縣警察部長，於一九四〇年任國民精神總動員會常務理事，既又任大政翼贊會國民協力會部長兼監察部長，最爲末次信正所器重。

小泉親彥 (Koizumi, Chikahiko)

厚生大臣，一八八四年生，福井縣人。

一九〇八年畢業於東京帝大醫科，初任陸軍二等軍醫，一九三四年昇軍醫總監。後歷任近衛師團軍醫部長、陸軍軍醫學校校長、陸軍省醫務局長等職，至一九三八年編入預備役，一九二一年受醫學博士之學位。對戰時日本之厚生問題，夙具卓見，於工業衛生軍隊衛生，造詣尤深。最近曾以第七委員會(國民生活)委員長資格，活躍於首次中央協力會議。第三次近衛內閣任現職，一九四一年十月東條氏組閣，仍留任。

小畑 正良 (Obata, Tada-yoshi)

前內閣企劃院次長，一八九四年生，大阪市人。

一九一七年以東京帝大法科英法學系第一名畢業，即入住友會社，由普通社員升至商工科長、經理部長及電線部常務董事，最為川田順住友財閥之中國通所器重。一九四〇年八月以同班好友星野直樹之邀，任企劃院次長，一九四一年三月辭職。氏性情磊落，夙以實業界之指導者自命；婦翁藤野藤太郎，為大阪有名之富豪，昆仲如小畑英良陸軍少將、小畑信良輜重大佐、小畑董良外務省書記官，均蜚聲於時。

小畑 敏四郎 (Obata, Toshihiko)

陸軍中將，一八八六年生，東京府人。

貴族院議員男爵小畑大太郎之弟，元田襲之婿，士官學校第十六期步兵科及陸軍大學軍刀組畢業，與永田鐵山及岡村真次同稱為十六期之三傑（名次永田第一，小畑第二，岡村第三）。曾留學德國，歷任參謀本部部員及作戰科長、步兵第十聯隊長、步兵學校研究部主任、陸大兵學教官等職，至一九三〇年升參謀本部第三部長，不久任近衛步兵第一旅團長，一九三四年任陸軍大學幹事，旋升校長。是年秋季陸軍特別大演習時，荒木貞夫與阿部信行分任兩軍總司令，氏任荒木之參謀長，擊敗其假想之敵（任阿部之參謀長為飯田貞固），頗得好譽，因此「小畑戰術」之名，遂為日本軍人所矚稱。一九三六年八月，編入預備役，曾傳將出任陸軍航

空本部長及總力戰研究所長等要職。

小畑 直 (Kohara, Naon)

前司法大臣，一八六八年生，新潟縣人。

一九〇二年東京帝國大學法科畢業。歷任東京地方裁判所推事、千葉及東京裁判所檢察官、司法省參事官、長崎控訴院首席檢察官、大審院檢察官等職，至一九二二年派赴歐美考察司法制度，一九二七年四月升任司法次官，一九三一年轉任東京控訴院長。一九三四年七月岡田內閣成立，邀任司法大臣，二、二六事變發生，隨岡田辭職，旋即勅選為貴族院議員。當一九三五年國體明徵問題未發生前，曾傳出任宮內省大臣，一九三七年林銑十郎內閣成立，又嘗有重任司法大臣之說。阿部內閣時，任內務大臣，及米內內閣去辭。

小倉 正恒 (Okura, Masatsune)

前大藏大臣，一八七六年生，石川縣人。

舊舍澤藩士小倉正路之子，一八九七年東京帝國大學法科畢業，即獲售高等文官考試。曾任內務省土木監督局事務官及山口縣參事官。一八九九年由政界轉入住友家，不久派赴歐美，考察商務，陸續任職於輪船倉庫方面，至一九三〇年，繼湯山寬吉勇後，升任總經理。佳友為日本最古財閥，財富僅次於三井、三菱，而在關西方面，勢力尤為雄厚，幾佔實業界中之第一把交椅。氏好聯絡政界，除西園寺之秘書原田熊雄，原屬住友社員外，其他如近衛文麿、宇垣一成、

伊澤多亥男及安岡正篤等，咸有相當聯絡。其支配之事業，除金融部分外，最注意重工業之發展，近年軍需工業勃興，獲利甚厚。一九三三年勅選為貴族院議員，一九四一年四月任無任所大臣，一九四一年七月第三次近衛內閣時，任大藏大臣，是年十月，東條氏組閣去職。

小栗一雄 (Oguri, Kazuo)

前警視總監，一八八六年生，靜岡縣人。

一九一一年東京帝大法科德法學系畢業，歷任文部內務兩省大臣隨從秘書（均在一九一四及一九一五年）木喜德任該兩省大臣時）、京都、東京各府理事官、奈良、長崎各縣警察部長、警視廳保安科長兼衛生科長及大阪府警察部長。後由兵庫縣內務部長轉任大阪府內務部長，時田中義一組閣，氏因政府干涉選舉過甚，憤而辭職。一九三〇年任奈良知事，翌年任台灣總督府內務部長，復翌年五月齋藤內閣成立，因農相後藤文夫之推薦，由福岡縣知事擢為警視總監。其時承五·一五事變之後，法西斯潮流，瀰漫全國，氏曾極力檢舉云。

小堀新一 (Kojima, Shinichi)

前商工省次官，一八九二年生，茨城縣人。

一九一八年以東京帝國大學法科第一名畢業，即入農商務省。一九二五年商工省獨立後，任商工大臣高橋是清之秘書，其後歷經野田、片岡、藤澤、中橋四相，留職未動。一

九二八年派赴歐美考察工政，翌年歸任該省工務科長，後由文藝科長、特許局審判部長，於一九三五年二月升礦產局長，一九三六年七月後，任工務局長、燃料局長及貿易局長等職，至一九四一年一月升任次官。商工省內，近年似分岸信介系與東榮二系，而氏資格較高，又獨超然其間，故得繼岸後而升任，是年十月，以內閣改組去職。

小堀精一 (Kojima, Seichiro)

經濟評論家，一八九五年生，東京府人。

一九一九年東京帝國大學經濟學部畢業，即任九州帝大助教，後派赴歐洲留學，專攻工業經濟及國際經濟問題，著有鋼鐵業發展史論、企業集中論、工業集中論、工業政策、產業合理化、世界經濟論等書。後轉任東京法政大學教授，並開設「小島經濟研究所」，自任所長，發表鋼鐵經濟讀本、自由與統制、國營與民營、日本計劃經濟、戰時經濟等書。與高橋顯吉、山崎靖純、野田豐等，同稱為時髦經濟學者。

小堀猛 (Oro, Takeshi)

日本發送電會社副總裁，一八九〇年生，大分縣人。

一九一五年東京帝國大學法科德法學系畢業，經高等文官考試及格，即入遞信省，歷任管船局庶務科長、海員科長、管理科長及熊本遞信局長，於一九三五年升任管船局長，一九三七年復升遞信次官。年來電力國策問題，遞信省與電

方會社方面，相持不下，氏在第七十三議會中助力永井柳太郎，使電力國家管理法案，得以通過，深為軍部器重。一九三九年春，日本發送電合社成立，任為副總裁。

小須田勝造 (Kosuda, Katsuzo)

陸軍遠兵廠長官，一八八七年生，長野縣人。

士官學校第十九期砲兵科、砲工學校高等科及東京帝大理工科畢業。歷經陸軍省兵器局科員、駐美大使館武官、十條兵器廠廠長、東京手鎗製造所長及小倉兵工廠長，至一九三五年任為陸軍省技術本部第一部長，翌年八月轉調第二部長，一九三八年十二月晉級中將，同時升造兵廠長官。

小幡國吉 (Obata, Torikichi)

前駐華公使，一八七三年生，石川縣人。

一八九七年畢業東京帝國大學法科，翌年獲售外交官及領事官考試，即派委天津隨習領事。嗣後歷任新嘉坡、維也納、倫敦各地候補領事、駐華公使館三等秘書（一九〇五年一月）、芝罘領事（同年八月）、天津領事（一九〇七年）及總領事（一九〇九年至一九一四年）、駐華公使館一等秘書及參事等職。至一九一六年歸國，任外務省政務局長兼捕獲審檢所評定官，一九一八年升任駐華公使，一九二五年調駐土耳其大使，一九三〇年轉任駐德大使，一九三三年復調回外務省，明年勅選為貴族院議員，以迄於今。氏駐華甚久，民國四年之二十一條件交涉（時任一等秘書），民國八年

之山東交涉（時任公使），民國十四年之關稅會議，均當折衝之任。一九三七年林銑十郎內閣時，因同鄉舊知關係，曾促其出任外相，氏以體弱為詞，堅辭未受。（小幡亦作小畑）

小磯國昭 (Koiso, Kuniaki)

陸軍大將，一八八〇年生，山形縣人。

士官學校第十二期步兵科及陸軍大學畢業，一九〇四年日俄戰爭時，以少尉從軍於摩天嶺戰役，受知於黑木為楨司令。嗣後歷任參謀本部中國班班員及班長、海參崴及伯力特務機關長、步兵第五十一聯隊長、參謀本部科長、航空本部總務部長、陸軍省整備局長及軍務局長，至一九三二年荒木貞夫任陸相時，升陸軍次官。其後武藏信義任關東軍司令官兼駐滿大使，邀為參謀長，與駒井德三、山內靜夫、多田駿及宇佐美與屋等，以同鄉及姻戚之關係，作成「小磯綱」，預日本內地資本家對滿之投資，故一時曾為財閥所側目。一九三四年調任廣島第五師團長，明年十二月晉級大將，升任朝鮮軍司令官。一九三八年七月板垣征四郎任陸相時，調回參謀本部，不久編入預備役。一九三九年四月，平沼內閣改組，繼八田嘉明後任拓務大臣，一九三九年辭職。氏在幼年時代，即崇拜其故鄉英雄雲井龍雄，中年致力研究佐藤信淵之「宇內混同策」及上杉藤山之「國家經營論」，在軍人中最高於政治手腕，有口才，有膽略，且解歌曲。

山 健 (Yamakawa, Ken)

貴族院議員，一八九二年生，東京府人。

山川健次郎男爵之四子，出嗣山川廉家，襲投男爵。一八一八年東京帝大法科政治學系畢業，卽及第高文試驗。歷任千葉、靜岡等縣警視理視官、文部省普通學務局庶務科長、專門學務局學務科長、官房體育科長兼文書科長、社會教育局長及專門學務局長等職，至一九三九年當選爲貴族院議員。富於革新意識，善籠絡部下，前曾有任文部次官之說。

山川端夫 (Yamakawa, Tadao)

貴族院議員，一八七四年生，長崎縣人。

一八八八年東京帝大法科政治學系畢業，復入大學院專攻國際法，經高等文官考試及格。歷任海軍省參事官、橫須賀捕獲審檢所評定官、鐵道院理事、海軍大學教官等職。一九一九年得法學博士學位，翌年任外務省條約局長兼和平條約事務局長，旋任法制局長官，一九二六年勅選爲貴族院議員。又曾屢次派赴國外，於一九〇七年任海軍第二次和平會議日本全權代表隨員，明年任倫敦海軍法規會議專門委員，一九一九年任巴黎和合日本全權委員隨員，一九二九年任倫敦海軍軍縮會議日本全權顧問，一九三六年任美國舉行之太平洋會議日本代表。時在報端發表外交問題意見。

山下泰文 (Yamashita Hobun)

陸軍中將，一八八五年生，高知縣人。

士官學校第十期步兵科及陸軍大學一九一六年畢業，後

派赴德國留學四年。歷任參謀本部部員、陸軍省軍務局科員、陸軍大學教官、駐奧匈使館武官，一九二六年後，任步兵第三聯隊長及陸軍省軍務局軍事科長（山岡厚重、永田鐵山任軍務局長時代），至一九三四年八月升少將。明年三月任陸軍省調查部長，旋轉第四〇步兵旅團長，一九三七年八月任北平警備司令，明年任華北駐屯軍參謀長，晉級中將。一九四〇年七月繼東條英機後，升陸軍航空總監，是年十二月任軍事考察團團長赴歐。

山下知彥 (Yamashita, Chihiko)

男爵，一八八七年生，三重縣人。

山下源太郎大將之養子，海軍兵學校及海軍大學畢業。大佐時編入預備役，曾任末次信正之私人祕書；末次在內相時，一切改革計劃，大都由氏所手定。末次擬組織新黨，以缺乏政治資金，由氏游說石原廣一郎，組織某公司以接濟之，遂爲石原入幕之賓云。

山下龜三郎 (Yamashita Kamesaburo)

山下汽船會社社長，一八六七年生，愛媛縣人。

早歲肄業某中學校及明治大學前身之明治法律學校時，因各運留級三次，乃輟學而入富士製紙會社，後從事石炭及船舶業。在日俄戰爭時代，已積資甚厚；及歐洲大戰，隨船價及運費之高，頓成巨富，家財近億，與前鐵相內田信也，同爲著名之「船舶暴發戶」。問好與政界人士來往，如松方

幸次郎、已故之伊藤博文、桂太郎、山縣有朋、田中義一、床次竹二郎、後藤新平及西園寺公望等，皆頗有淵源。一九三三年會以百萬圓捐贈陸海軍，作為航空設備費。現除任山下汽船會社及阪（大阪）神（神戶）築港會社社長外，並兼任渡川水力電氣社代表理事、扶桑海上保險會社及滿洲海陸運送會社董事。

山一魏八郎 (Yamashita, Gihachiro)

海軍中將，一八七九年生，石川縣人。

一九〇〇年海軍機關學校畢業。歷任筑波、石見、河內等艦機關長、海軍教育司部員、駐英武官、海軍機關學校學生科長、第一艦隊兼聯合艦隊機關長、海軍機關學校校長、燃料廠廠長、海軍省軍需局局長等職，至一九三三年編入豫備役後，從事政治活動，任皇道會幹事長，為右翼陣中健將。

山内静夫 (Yamanouchi, Shizo)

陸軍中將，一八七六年生，京都府人。

士官學校第九期工兵科及陸軍炮工學校，東京帝大土木工學系畢業。歷任陸軍省士官學校教官、大本營附、野戰高等電信部副官、青島守備司令部附、交通兵團副官、陸軍砲兵學校教官、參謀本部及陸軍技術本部部員、兵器局器材科長、陸地測量部長、陸軍技術本部第二部長及築城本部長等職，至一九二八年累進至中將。一九三二年編入預備役，任

滿鐵顧問，一九三三年滿洲電信會社成立，被舉為總裁。

山内三三 (Yamada, Otozo)

陸軍大將，一八八二年生，長野縣人。

士官學校第十四期騎兵科及陸軍大學畢業。歷任騎兵學校教官、騎兵第二十六聯隊長、駐俄武官、朝鮮軍參謀、參謀本部科長、陸軍大學兵學教官、騎兵學校教務長、陸軍通訊學校校長、參謀本部第三部長及總務部長、士官學校校長（一九三三年）等職，至一九三七年三月調任隔岡第十二師團長。事變發生後，轉戰各地，後升為華中派遣軍總司令。一九三九年轉任陸軍教育總監，兼軍事參院參議官，翌年八月晉級大將。一九四一年九月日本新設防衛總司令部，會兼任第一任之總司令官。身材短小，長通信士官兩軍校時，發揮行政手腕，確立革新教育方針，世以此多之。

山内良 (Yamada, Saburo)

前京城帝國大學校長，一八七〇年生，奈良縣人。

一八八九年時畢業東京法學專門學校，入東京帝大選科，經檢定試驗及格後，始改入正科，一八九六年畢業該校英法科，即在大學院專攻國際私法，翌年派赴歐美留學。一九〇一年起任母校教授，一九三〇年任京城帝大總長，一九三四年辭職，主編日蓮宗發刊之「法華雜誌」，一九三八年會出任軍大總長之說，手段圓滑，在東大時，多以「大學之外交官」稱之。

山田國太郎 (Yamada, Kunitaro)

陸軍少將，一八九三年生，愛知縣人。

士官學校第二十七期及陸軍大學一九二八年畢業。歷任陸軍省軍務局科員、陸軍大學研究部主事、駐法使館副武官、參謀本部部員兼陸軍大學教育、兵務局兵務科長及防備科長，一九三九年調往前線參加諸門望戰役，累功升少將，一九四一年調任陸軍機甲本部附。

山田禮雄 (Yamada, Taisuo)

選信次官，一八九三年生，高知縣人。

一九一八年東京帝大法科德文法學系畢業，在校時，即及第高等文官考試。歷任水戶京橋各稅務署長、名古屋稅務監督局間接稅科長、東京稅務監督局經理部長、間接稅部長、大藏省銀行檢查官、存款部監理科長等職，至一九三四年五月繼賀屋興宣而任主稅局預算科長。一九三六年三月馬場鎮一出任藏相，升為主稅局長，空前之三大增稅案，即氏所草擬。一九三七年結城豐太郎上臺後，改任造幣局長官。第一次近衛內閣時，曾傳將出任大藏省次官，一九四〇年應村田之選而任現職。氏為熱烈之日本主義者，生平遵行元氣、本氣、根氣、和氣等四氣說，又為電力開發案之起草人。早歲喪父，母為學校教師，在學生時代，已早結婚，故至今兒孫滿堂云。

山本五十六 (Yamamoto, Isoroku)

聯合艦隊司令長官，一八八五年生，新潟縣人。

海軍兵學校及海軍大學畢業。日俄戰爭時，以少尉服務日進軍艦，在對馬島受俄艦砲擊，失去二指。戰後歷任軍令部參謀、霞浦海軍航空隊副隊長、駐美大使館武官、五十鈴及赤城艦艦長、倫敦軍縮會議日本全權委員隨員、航空本部技術部長、海軍技術會議員及第一航戰隊司令官。至一九三四年任海軍省等駐外特派員，一九三五年任海軍航空本部長，米內光政任海軍大臣，擢升海軍次官，一九四〇年榮膺聯合艦隊司令長官，晉級大將。父名高野貞吉，氏為其第六子，生時年已五十六，因以為名，後入繼山本家，故改今姓。胆氣豪放，且具政治手腕，此次大東亞戰爭中，海軍之節節勝利，即由其指揮。

山本弘毅 (Yamamoto, Koki)

海軍中將，一八八五年生，和歌山縣人。

海軍兵學校及海軍大學畢業。由伊吹軍艦參謀、海軍大學教官、艦政本部技術會議員、第二水雷戰隊參謀、耶摩伊勢等艦艦長、橫須賀海軍工廠造兵部長及艦政本部長，於一九四〇年十一月晉級中將，翌年三月任馬公要港司令官。

山本英輔 (Yamamoto, Eishu)

陸軍大將，一八六五年生，鹿兒島縣人。

薩開領袖山本權兵衛之姪，財部彪之弟，父吉藏於西南戰役時，從西鄉降盛戰死，二歲即孤，賴母以女工撫養成

人。由慶應義塾普通部於一八九七年畢業海軍兵學校，至一九三一年進級海軍大將。其間歷任三笠艦長、海軍大學教務長、練習艦隊司令官、航空本部長、橫須賀鎮守府司令官、第一艦隊及聯合艦隊司令官等職，一九三二年編入預備役。二、二六事變後，曾傳將出租內閣，一九三七年八月與一條實孝、頭山滿等發表長篇聲明書，傳檄各方，提倡「一國一黨運動」，冀徹底毀滅既成政黨。一九三七年秋，任新設之內閣參議，旋即辭職。

山本厚川 (Yamamoto, Kozo)

衆議院議員，一八八一年生，長野縣人。

一九〇三年東京高等商業學校畢業，初經營海運水產農業，嗣任北日本汽船會社及小樽倉庫會社理事、小樽信託會社社長、小樽市會議員、小樽商業會議所會長。一九二〇年以來，由北海道區連續當選為衆議員，曾代表民政黨任鐵道省參與官（一九二九年）文部省政務次官（一九三七年）等職。氏係北海道財主（年納直接稅一、五八一圓，為該地多額納稅者之一），性情豁達，好書畫古董。一九三九年任議會中，曾提出日俄漁業問題之對策，要求政府實行。

山本善治 (Yamamoto, Yosuharu)

台灣銀行理事，一八八八年生，千葉縣人。

一九二二年東京帝國大學法科英文法學系畢業，翌年入台灣銀行，一九一九年升任倫敦分行代理副理，不久轉任東

京分行調查科長及庶務科長，一九二四年任香港分行經理，一九二八年任東京分行稽核科長，翌年任台北總行經理，一九三四年任東京分行經理，一九三六年擢為現職。好運動，并為台灣銀行中精通中國金融事情者之一。

山本達雄 (Yamamoto, Tatsuo)

男爵，貴族院議員，一八六七年生，大分縣人。

慶應義塾畢業。歷任大阪商業學校教務長、日本郵船會社總理、日本銀行營業部長、正金銀行董事、日本勸業銀行總裁、日本銀行理事及總裁等職，至一九〇三年勅選為貴族院議員，嗣任第三次西園寺內閣之大藏大臣、第一次山本（權兵衛）內閣及原敬內閣之工農商務大臣，一九二〇年授男爵，一九三二年齋藤內閣時任內務大臣，至一九三四年辭職。氏原隸政友會，一九二四年另組政友本黨，一九二七年與憲政會合作，成立民政黨，舉為顧問。氏在民政黨之地位，向與政友會之故高橋是清相當，二人同為財政專家，又同為黨之長老，政民兩黨之財閥背景為三井、三菱，此為世人所熟知，而氏為三菱之代理人，高橋則為三井之代理人，此又其相似之點也。濱口雄幸在世時，民政黨之一切政策，氏頗有決定之勢力。岡田內閣時為內閣審議會委員，與故齋藤實同為代表重臣系統者。年來因年事已高，悠然度其餘生，不復如前時之活躍。

山本熊一 (Yamamoto, Kumaiichi)

代理外務次官，一八八八年生，東京府人。

上海東亞同文書院畢業，初以考取行政科，服務農商務省。一九二〇年入外務省，歷任駐華使館、駐英使館秘書及外務省亞洲局通商局事務官，一九三九年十二月任通商局長，一九四〇年繼擢內干城後轉東亞局長，一九四一年七月任代理外務次官，爲有名之中國通。

山本鶴一 (Yamamoto, Tsuruchi)

陸軍中將，一八七六年生，島根縣人。

士官學校第六期步兵科及陸軍大學畢業，曾參加日俄戰役，受四等金鵄勳章。歷任教育總監部附、陸軍戶山學校校長、步兵學校校長、第十八旅團長及第十六師團長，至一九三三年三月編入預備役。在陸軍中，以任校長多年，故門下弟子，顯達者甚多。

山西恆郎 (Yamanishi, Tsunero)

華北開發會社副總裁，一八八六年生，三重縣人。

一九一一年東京帝大法科畢業（與華北交通會社總執事佐美寬爾同期），即入南滿鐵道會社，積資升至撫順炭礦公司副經理。林博太郎長該會社時，擢充理事；松岡洋右時代，出爲滿洲礦業會社理事長，並兼任滿洲產金公司理事。滿洲之礦業法規，大部由氏所手訂。一九三八年十一月華北開發會社成立後，調任現職，以迄於今。

山形清 (Yamagata, Kiyoshi)

前駐哥倫比亞公使，一八九二年生，茨城縣人。

一九一七年東京帝大法科政治學系畢業，翌年考入外務省。歷任事務官參事官歐美局第一科科長、駐比大使館一等祕書、日內瓦軍縮會議隨員，至一九三五年任官房文書科長，一九三七年任通商局幫辦，一九三九年五月升駐哥倫比亞兼委內瑞拉公使，一九四〇年十一月調回本國，爲外交官中之精通通商貿易情形者。

山岡重厚 (Yamaoka, Shigeatsu)

陸軍中將，一八八二年生，高知縣人。

士官學校第十五期步兵科及陸軍大學畢業，曾留學法國，專攻動員計劃。歷任士官學校本科生徒隊長、步兵第二十二聯隊長及教育總監部第二科長，至一九三二年荒木貞夫任陸相時，擢爲軍務局長兼資源局審議會幹事，一九三四年轉任陸軍省整備局長兼軍事參議院幹事，翌年十一月升任第九師團長，一九三八年編入豫備役。

山室宗武 (Yamanuro, Munetake)

陸軍中將，一八八〇年生，熊本縣人。

士官學校第十五期炮兵科畢業。日俄戰爭時，以少尉從軍，歷任野戰重兵學校教育、教育總監部附、野戰重砲兵第四及第八聯隊長、陸軍技術本部部員，至一九三三年調任陸軍野砲兵學校幹事，不久升任校長。一九三六年調充砲兵監，一九三七年繼多田駿後任第十一師團長，一九三八年春，

任士官學校校長。氏兄山室宗文，任三菱信託會社社長，爲三菱財閥之巨頭。

山浦貫一 (Yamaura, Kanichi)

政治評論家，一八九三年生，長野縣人。

中學畢業後，卽入新聞界，歷任東京日日新聞、時事新報、國民新聞等記者，新愛知新聞東京支店通信部長等職，現任讀賣新聞論說委員。氏曾投身政友會巨頭森恪門下，以森之介，師事犬養毅，極力擁護政黨政治。犬養死後，爲鳩山一郎所羅致，而與久原房之助一派相左，現轉向入革新陣營。著有政局人物、政治家動向等書。

山崎靖純 (Yamasaki, Seijun)

經濟評論家，一八九七年生，東京府人。

一九二一年慶應大學經濟科畢業，初任時事新報經濟記者，專事研究金融，其所撰之外匯論文，極力反對金之輸出解禁，理論整然，文筆犀利，遂得該報大股東曾任藏相池田成彬之青睞，資遣歐美考察。歸國後以正力松太郎之拉攏，擔任讀賣新聞經濟部長，日操干言，力主通貨膨脹政策，並指摘通貨收縮之不當及其矛盾，素未引人注目之讀賣經濟新聞，至此遂聲動全國耳目，爭以先覩爲快矣。其後更得石原廣一郎之補助，在東京自設山崎經濟研究所，嘗倡言中日經濟提攜，應以中國爲日本之原料供給地與貨品銷售地爲前提。一九三五年由滿鐵總裁松岡洋右遣派滿洲及華北視察，歸

後被關東軍聘爲經濟顧問。一九三七年夏間，復游歷平津晉綏京滬各地，歸後著排日的中國觀（見日滿支評論第一卷第二號）一文，闡述中國之現狀，謂「中國今日排日之性質，已由支配階級的排日，轉爲大眾的排日，由經濟的排日，轉爲思想的排日；中國之命運，只有二途，非親日即親俄，惟親俄則大不利於日，故日本應把握中國人之心理」云云。現氏除担任讀賣經濟部局長、關東軍顧問、池田成彬及藤原銀次郎之私人經濟顧問外，更自設山崎經濟研究所分所於上海，專事蒐集時事經濟資料。

山崎達之輔 (Yamasaki, Tatsunosuke)

前農林大臣，一八八〇年生，福岡縣人。

一九〇六年京都帝國大學法科德法學系畢業，家素富有，早歲深好數學，常立志欲爲數學教師，後因擅長演說，故改習政治。畢業後任台灣總督府參事官，不久，轉入文部省任書記官、參事官及第一次實業學務局長（在原內閣中、橋德五郎文相時代，該局係由氏建議而設立者），繼又轉任普通學務局長。自此以後，遂成爲文部之中心人物，被認爲未來之次官及大臣，然後不願以官場生活終老，其妻峯子亦力勸氏投身政黨，山野田卯次郎之介，入政友會，自一九二四年後，連續當選爲衆議院議員，曾一再担任政務調查會會長，深爲大養毅所器重。一九三三年岡田啓介以舉國一致之名，組織內閣，政友會中以鈴木喜三郎總裁爲中心之一派，卽

力主推翻，並決議與之絕緣，然岡田竟能利用手段，以氏及床竹二郎、內田信也三政友會要角，分任農林、選信、鐵道三閣員。入閣後，以遠背黨之決議，被開除黨籍。一九三五年底，氏與後藤文夫一派，組織「昭和會」，持支岡田內閣，不久，二・二六事變發生，氏隨岡田辭職，昭和會亦無形解散。林內閣時代，復出任農相。

山崎 巖 (Yamasaki, Iwao)

前內務省土木局長，一八九四年生，福岡縣人。

山崎達之輔之弟，橫濱財閥有吉忠一（前駐華大使有吉明之兄）之婿，一九一九年東京帝大法科德法學系畢業，在學時已及第高等文官考試。畢業後，派赴長崎縣，由地方、社會、農林各科科長，於一九二三年轉任大阪府社會科長。一九二六年升任內務省社會局保護科長，一九三一年轉文書科長，翌年就任會計科長；一九三四年後藤文夫內閣時代，擢為隨從秘書；廣田內閣成立後，重返社會局；一九三八年一月厚生省成立時，升任社會局長；翌年，轉內務省土木局長。氏為兒童虐待防止法之起草人，對於社會立法，頗有研究，在內務省官僚系統上，屬潮惠之輔派云。

山梨武夫 (Yamanashi, Takeo)

滿洲實業部商業司長，一九〇二年生，靜岡縣人。

東北帝大文學部英法科畢業。初以新聞記者來華，後入南滿鐵道會社調查局，派駐北平。滿變後任駐滿財務官；不

久入滿洲政府任經濟部稅務司長，現調實業部商業司長。搜集中國農業經濟之材料甚多，時在報端發表論文。

山崎正隆 (Yamazaki, Masataka)

陸軍中將，一八八六年生，高知縣人。

士官學校第十八期步兵科及陸軍大學優等畢業。歷任參謀本部部員、上原勇作元帥副官、駐俄使館武官、陸軍大學兵學教官、參謀本部科長、教育總監部科長、步兵第二十二聯隊長，并三任駐波蘭武官。在波蘭時，因與前該國史密格利茲元帥交好，秘密參加對俄作戰，故不特為日本著名之波蘭通，且於俄軍作戰力，亦有相當之研究。一九三五年七月升任陸軍省整備局長，一九三八年七月轉教育總監本部長，同年十二月繼東條英機後，升任陸軍次官，一九三九年十月任團團長，一九四一年四月任陸軍大學校長。

川本邦雄 (Kawanoto, Kunio)

拓務省拓南局科長，一九〇一年生，熊本縣人。

一九二六年東京帝國大學法科畢業。翌年，入朝鮮總督府地方局，後由咸鏡北道地方科長，慶尙北道學務科長及地方科長，於一九三三年四月調任拓務省官房文書科科員，一九三六年升任南洋科長。一九三八年秋，派赴菲律賓、婆羅洲、馬來亞、暹羅、安南等地考察；一九四〇年，任小林二三之助員，赴荷屬東印度。為安井誠一郎之心腹。

川本芳太郎 (Kawanoto, Yoshitaro)

陸軍大佐，一八九七年生，廣島縣人。

士官學校第三十一期步兵科及陸軍大學畢業。歷任參謀本部中國班班員（由喜多誠一任科長時起，中經永津佐比重至影佐禎昭時止）、天津駐屯軍參謀（一九二九年香椎浩平任司令官時，在科長竹內義晴下任職）、陸軍省中國班班長。興亞院成立後，調任總務部科長，與影佐禎昭同鄉，對於我國政治、經濟、文化等，均積有相當研究。

川西清司 (Kawanishi, Seiji)

軍需工業家，一八八九年生，兵庫縣人。

神戸財閥川西清兵衛之長子，一九一四年於慶應大學理財科畢業，即赴澳洲研究羊毛問題。歸後任伊丹製絨所營業次長，後任日本毛織會社專務董事兼共立毛絲綸會社長，此外關係事業，並包有飛機機械製革各方面，為大阪神戸著名之軍需工業家。

川岸文二郎 (Kawagishi, Bunzaburo)

陸軍中將，一八八四年生，羣馬縣人。

士官學校第十五期步兵科及陸軍大學畢業。歷任參謀本部中國班班員、侍從武官、近衛步兵第四聯隊長、兵器本廠附、第十二師團司令部附、滿洲獨立守備隊司令官、第二十六旅團長及第二十師團長等職，駐紮熱河甚久。一九三八年五月升任東部防衛司令官，一九三九年去職。

川岡隆三 (Kawazura, Ryuzo)

內閣情報局官房科長，一九〇三年生，長野縣人。

一九二六年東京帝大政治科畢業，即入遞信省，歷任長岡市及北海道郵政局長。九·一八後，與奧村喜和久同入滿洲交通部，一九三八年入內閣情報局任現職，隱然握局長之權，一九四〇年秋兼任大政翼贊會理事，為革新陣營中之有數人物。

川島信太郎 (Kawashima, Sintaro)

東京商科大學講師，一八八八年生，京都府人。

一九〇七年高等商業學校專攻部領事科畢業，及第外交官與領事官考試。初入外務省担任修正通商條約事務，一九一二年派任駐美大使館祕書，一九一八年歸國，任外務省事務官、書記官及參事官，在臨時調查部主管修正條約及戰後經濟調查事務。一九一二年任駐英大使館一等祕書，並派為歐美考察專員。嗣後歷任臨時和平條約事務局長及漢堡總領事等職。一九二六年升任駐希臘全權公使，後調回外務省任通商局顧問。數以隨員資格參加國聯及國勞會議，又被舉為國聯經濟諮問委員會常任委員，現任東京商科大學講師。

川島義之 (Kawashima, Yoshiyuki)

陸軍大將，一八七九年生，愛媛縣人。

士官學校第十期步兵科及陸軍大學（一九〇九年）畢業，會赴德研究軍事。歷任教育總監部科員、步兵第六十五聯隊附、步兵第七聯隊長、參謀本部歐美科長、教育總監部第

一科長、陸軍省人事局長（白川義則任陸相時）、陸軍省作戰資料調查會幹事長、第十九師團長、教育總監本部長及朝鮮軍司令官。一九三五年永田鐵山事件發生後，陸相林銑十郎既以責任關係去位，而部內荒木與宇垣兩派政見相左，氏以派調關係較淺，繼為陸軍大臣。當時以強化國防、澈底團體明徵及擴大軍事費；為入閣條件，於林前陸相，仍為齋規曹隨。在位未及半載，而二、二六事變爆發，岡田內閣解體，氏亦去職，退入預備役。氏一生循規蹈矩，無逸事可記，惟宦途至為順利。

川崎 克 (Kawasaki, Katsu)

衆議員，一八八〇年生，三重縣人。

東京外國語學校畢業，一九一七年後，屢次當選為衆議院議員，曾任陸軍省遞信省參與官（一九二五——二六年）及司法省政務次官（一九二九年）。善演說，精研財政，為民政黨中次於小川郷太郎之財政專家，著有經濟界之黎明一書。平素主張政黨政治，與宇垣一成交誼甚篤。

川越文雄 (Kawago, Takeo)

前大藏次官，一八八四年生，鹿兒島縣人。

一九一〇年東京帝國大學法科政治學系畢業，即及第高等文官考試，入大藏省。經專賣局副參事、大藏省書記官、主計局預算決算科長（在職十年）、營繕管財局理事、存款部長等職，至一九三四年升任銀行局長兼商工省貿易局參與官

。一九三五年對滿事務局成立，任為事務局次官。一九三六年廣田內閣時代，馬場鎮一出任藏相，擢為次官，近衛內閣時辭職。一九三八年六月任維新政府顧問，一九三九年歸任庶民命庫理事長。氏久經度支，尤精通軍艦事務，口材便捷，在議會答辯詞，條理井然，娓娓動聽，深為少壯軍人派所讚許。

川越 茂 (Kawago, Shigeru)

外務省顧問，一八八一年生，宮崎縣人。

前議員川越進之長子，一九〇八年畢業于東京帝大法學部法律科，及第文官高等考試後，一九一二年又及第外交官領事官考試。歷任哈爾濱領事、外務省事務官、亞洲局第三課長、駐德瑞諸國公使館三等書記官、大使館一等書記，至一九二五年晉任總領事，歷駐吉林青島等地。一九三一年歸國，一九三二年任滿洲大使館參事官，翌年任廣東總領事兼台灣總督府事務官，復明年轉天津總領事，一九三六年四月特命為駐華全權大使，一九三八年十二月退職，至一九四一年東總茂德掌外務，出任現職。

川藤 忠 (Kudo, Chu)

滿洲宮內府侍衛處長，一八八二年生，青森縣人。

一九〇〇年畢業東奧義塾後，由釜山步行至俄領濱海州，遂留居北滿。日俄戰爭時，借橫川省三等駐居哈爾濱，担负特殊使命，後至中國北部，調查回教情事，達三十年之久

。濟變後，曾侍滿洲皇帝赴日，旋以陸軍大將派充現職。

工藤鐵男 (Kudo, Tetsuo)

衆議院議員，一八七五年生，青森縣人。

早歲畢業日本大學，歷任二六新聞及日本新聞記者，一九一一年赴英、法、德、美、俄諸國考察新聞事業，一九一四年留學倫敦大學，研習政治經濟，歸國後任日本大學、東京齒科醫專及公立女子職業學校等講師。一九二四年以來，屢由其故鄉青森縣選爲衆議員，隸民黨籍。一九三一年若槻內閣時，任文部參與官。後被選爲黨中總務，爲町田總裁之直系人物，通曉經濟情形，在歷屆議會之豫算總會中，時提出極詳細之質問。每年歲首，必歷訪鄉民，以資聯絡，時青森縣本爲政友會地盤，而彼竟能連獲勝利，蓋證是之由。

十五 成美 (Hijikata, Shigemni)

前東京帝大經濟學部長，一八九〇年生，兵庫縣人。

町田猛郎之子，因出繼前東大法學部長土方壽，故改今姓。一九一五年東京帝大法科經濟學系第一名畢業，即在母校大學院研究，一九一七至一九二二年派赴英、美、法諸國留學，一九二二年任東京帝大財政教授，一九二四年得經濟學博士學位。一九二九年重赴歐西考察，一九三三年升任經濟學部長，同時兼任高等文官試驗委員、經濟審議會幹事、中央統計委員會委員、交易所調查制度委員會委員、教育刷

新評議會評議員、內閣調查局專門委員、臨時資金調整會委員、大藏省匯兌局參、議企劃廳委員、重要肥料專業委員會委員、日本學術振興會常務委員等職。一九三七年，以排斤大內兵衛教授，辭去經濟學部長；一九三九年春，平賀讓繼任東京帝大校長後，與河合榮治郎教授，同時去職。著有財政學之基礎概念、法西斯主義、日本經濟研究等書，爲主張經濟的日本主義者之領袖，一九三五年曾有充任我中央銀行顧問之說，現任臨時資金調整委員會委員。

十五 豐 (Tsuchida, Yutaka)

駐華大使館秘書，一八九八年生，東京府人。

一九二二年東京帝國大學法科法學系畢業，卽入外務省。由廣東候補領事，歷任國聯隨員（日本退出國聯時）、駐埃及公使館秘書、阿比西尼亞觀察員、上海領事、外務省通商局第二科長及官房會計科長等職，至一九三八年十一月轉任東亞局第一科長，一九三九年冬，調充現職。妻澄子爲「妖怪學」著者井上圓了博士之女。

十六 嘉平 (Tokki, Kabei)

前京都市長，一八七四年生，和歌山縣人。

東京帝大法科畢業，卽入內務省。歷高知及石川兩縣知事、關東廳總務部長、大阪府知事及北海道廳長官等職，至一九三四年當選爲京都市長。一九三七年有充任東京市長之說，平沼內閣成立後，一度會傳將任爲拓務大臣。

土肥原賢二 (Doihara, Kenji)

陸軍大將，一八八四年生，岡山縣人。

士官學校第十六期步兵科及陸軍大學畢業，與板垣征四郎、磯谷廉介及岡村斡次同期，稱為中國通之四金剛。初任參謀本部中國班班員，後隨坂西利八郎來華，一九二八年任張作霖之軍事顧問，張學良繼父執政，被辭退，任為奉天特務機關長。九·一八事變後，任瀋陽市長，極力活動，故日人以滿洲國之孕婦稱之。自此以後，如民國二十二年之塘沽協定、二十四年五月之豐台事件、同年秋之察東事件、土肥原案德純協定、以及冬間之成立冀東自治政府，均由氏從中參加。二·二六事變後，晉級中將，並陞任第一師團留守司令官，一九三七年三月調任宇都宮第十四師團長，一九四〇年調充士官學校校長，翌年晉級大將。氏駐華幾三十年，通四五種中國方言，並懂蒙古語，對於我國軍政要人，往來最密，故世多目之為遠東之勞倫斯。

土橋勇逸 (Tsuchihashi, Yuitsun)

駐法大使館武官，一八九二年生，佐賀縣人。

士官學校第廿六期砲兵科及陸軍大學畢業，為櫻會重要分子。歷任陸軍省軍務局局員、駐法大使館副武官、陸大兵學教官、對滿事務局科員、第十六師團參謀長等職，後以砲兵聯隊長從軍。至一九三九年九月升駐法大使館武官，一九四〇年十二月調駐華使館武官，與蔭江惠輔、西原一策等，同稱為陸軍中之法國通。

土屋計左右 (Tsuchiya, Keizo)

實業家，一八八八年生，東京府人。

一九一〇年東京高等商業學校畢業，即入三井銀行，一九一六年三井在上海開設分行，被任為襄理，後升經理。一九二三年派赴歐美考察，一九三〇年任東京總行外國營業部長，一九三四年辭職。現任鈴木三榮株式會社常務理事及東朝鮮礦業會社董事，此外更兼任外務省囑託及明治大學講師，著有中國經濟研究等書。

中山齋人 (Nakayama, Yasuo)

陸軍中佐，一九〇一年生，熊本縣人。

士官學校第三十三期步兵科及一九二九年陸軍大學畢業，小櫻會會員。歷任參謀本部部員及駐美大使館副武官，至一九三四年任中國派遣軍參謀，一九三八年轉任航空總監本部部員，一九四〇年曾任小林一三特使隨員，赴荷領印度出席日荷談判。

中山龍次 (Nakayama, Ryuji)

前北京政府交通部顧問，一八七四年生，新潟縣人。

一八九二年逕信省電氣試驗所畢業，即服務該省，前後派赴歐美考察電信事業四次。一九一三年至一九二六年任北京政府交通部電政顧問。雙橋無線電台工事之歸由三井財閥承辦，即由其力向交通總長梁敦彥建議而成。一九二八年任日本放送協會理事，現任電氣通信協會會長。

中山善 (Nakayama, Shigeru)

陸軍中將，一八八二年生，長野縣人。

原姓中村，因入嗣中山家，故改今姓。士官學校第十五期騎兵科及陸軍大學畢業，一八八三年以少尉任官，一九三六年晉級中將。其間曾任參謀本部部員兼陸大兵學教官、駐俄大使館武官、騎兵第十三及第七聯隊長、朝鮮軍參謀、騎

兵監附及騎兵第一旅團長，至一九三六年三月升軍馬補充部本部長，兩年八月轉任騎兵監。

中山優 (Nakayama, Masaru)

評論家，一八九五年生，熊本縣人。

一九一四年上海同文書院畢業，即入電報通訊社任駐華通訊員，並擔任上海日報編輯；後與波多野乾一諸人同入外務省，任該省情報部高級科員。其言論深為石原莞爾、中野正剛、風見章等所器重，著有再認識下之中國、對華政策之本質等書。一九三八年任滿洲建國大學政治教授。

中川健藏 (Nakagawa, Kenzo)

前台灣總督，一八七五年生，新潟縣人。

一九〇四年東京帝大法科法學系畢業，經高等文官考試合格。歷任北海道廳事務官、法制局及拓務省參事官、選信省書記官、通信局長、南滿鐵道會社理事、北海道廳長官、東京府知事及文部省次官等職，至一九三二年特任台灣總督，一九三六年秋，因日政府實施武官總督制辭職，與朝鮮總督府政務總監今井清德，同勅選為貴族院議員。氏在台灣總督任內，主張懷柔政策，深為台民所愛戴云。

中井增太郎 (Nakai, Masutaro)

陸軍中佐，一八九九年生，鳥取縣人。

士官學校第三十一期步兵科及陸軍大學畢業。歷任參謀

本部中國班班員、第二師團參謀、上海特務機關室武官及華中宣撫班指導主任等職，至一九三九年調升參謀本部附。

中西敏憲 (Nakanishi, Toshinori)

南滿鐵道會社理事，一八九四年生，福井縣人。

一九一九年東京帝大法科畢業，在學時已及第高等文官考試。出校後，即入南滿鐵道會社，在各地事務所任職，後被派出洋，歸後歷任人事股主任、地方科長、人事科長、文書科長及地方部長，至一九三五年九月升任總務部長，一九三六年十月舉為理事。九·一八事變後，曾任瀋陽自治會指導員，活動甚力，日人以「滿鐵之石原莞爾」稱之。好騎馬，愛打高而夫球。

中村安次郎 (Nakamura, Yasujiro)

前新潟知事，一八八八年生，京都府人。

一九一六年東京帝大法科畢業，即任京都府事務官，後升至保安科長、警務科長等職。一九二〇年辭職入實業界，一九二五年復入政海，任內閣警保局科員。後由石川新潟等縣警察部長，於一九三〇至一九三二之三年間，任秋田、高知、茨城等縣內務部長，一九三四年任京都府總務部長，一九三六年升鹿兒島知事，後轉任新潟縣知事，一九三九年去職。

中村良三 (Nakamura, Ryozo)

海軍大將，一八七九年生，青森縣人。

氏為中村春臺之次子，一九〇一年及一九一〇年先後畢業海軍兵學校及海軍大學。歷任第二艦隊參謀長、第一水雷戰隊司令官、海軍軍令部參謀、海軍大學校校長、第二艦隊司令官及佐世保鎮守府司令長官，至一九三四年五月升任軍事參議官兼艦政本部部长，同時晉級上將。一九三六年三月編入預備役。氏與末次信正同期畢業海軍兵學校，關於用兵作戰，尤以空中戰爭，自稱為海軍中之第一人，與末次之潛艦戰術，並稱水戰雙壁。

中村孝太郎 (Nakamura, Kotaro)

陸軍大將，一八八一年生，石川縣人。

氏與林銑十郎、阿部信行同鄉，士官學校第十三期及陸軍大學畢業。一九〇二年任步兵少尉，至本年五月累升至陸軍上將。其間歷任陸軍大臣副官、朝鮮軍參謀長、陸軍省人事局長、步兵第三十九旅團長、天津駐屯軍司令官（長城戰役前後）及第八師團長。二·二六事變後，調任教育總監本部長並兼代總監職。林銑十郎組織內閣時，曾繼寺內壽一後任陸相，以宿疾勃發，不三日即辭職。一九三八年五月就任朝鮮軍司令，一九四一年轉任軍事參議院參議官。氏於武職外，曾任文官，在任旅團長之前，曾任官幣社神職、高等試驗委員會統計主任、普通文官懲戒委員、高等軍法會議推事等職。軀幹瘦小，酒量甚宏，在日本軍人中，常諷最稱豐富云。

中村明人 (Nakamura, Akito)

陸軍中將，一八九〇年生，東京府人。

原姓平野，山仙臺陸軍幼年學校，畢業士官第二十二期步兵科及陸軍大學。歷任第六聯隊附、步兵學校教導隊附、第三師團司令部附、教育總監部附、步兵第六聯隊長、教育總監部科員、軍務局科員兼陸軍大學兵學教官、陸軍省人事局恩賞科長等職，至一九二五年派赴德國，研究軍事，一九二八年二月返國。一九三六年八月調任福岡步兵第二十四聯隊長，一九三八年五月繼町尻兼基後，升任陸軍省軍務局長，後升第五師團長，指揮南滿戰事。

中村勝平 (Nakamura, Katsura)

海軍省高級副官，一八九四年生，富山縣人。

一九一七年及一九二五年先後以優秀成績畢業海軍兵學校及海軍大學校。一九二九年派任駐義大使館武官，一九三二年調充海軍省特派員兼海軍省副官，一九三四年任軍務局科員，閏一年任第三艦隊參謀。中日事變發生後，在瀝指揮作戰，被彈擊傷左腕，一九三八年歸任海軍大學教官，翌年任沖島艦長，一九四〇年三月，隨阿部大使來京，是年十一月，調任現職，以迄於今。

中村豐一 (Nakamura, Toyokazu)

駐華大使館參事，一八九四年生，大阪府人。

現駐越大使芳澤謙吉之婿，一九二一年東京帝大法科畢

業。翌年考入外務省，由東亞局事務官、駐美大使館秘書，於一九三五年升福州總領事，一九三七年七月轉廣東總領事，一九三九年任外務省電信科長，不久任香港總領事，一九四〇年十二月升現職。

中谷武世 (Nakatani, Takeyo)

大亞細亞協會代表人。

氏為上杉慎吉門下健將，前興行地社、日本興國同志會等，均有關係。一九三〇年與高島門下之津久井龍雄等，共創愛國勤勞黨，後高島系分子因與氏意見不合，先行退出，氏仍留任論說部長，但不久亦離黨。一九三二年一月，平凡社社長下中彌三郎組織日本國家社會黨準備會，氏任宣傳部長，五月下中創立新日本國民同盟，氏為中央常務委員之一，是年並擔任法政大學講師，恆於各雜誌上發表論文，宣揚國家社會主義。後入松井石根門下，與下中成為大亞細亞協會之幹部人物，該會標榜大亞細亞主義，其機關雜誌，亦名大亞細亞主義。

中根貞彥 (Nakane, Sadahiko)

三和銀行總經理，一八七七年生，大阪府人。

一九〇五年東京帝大法科畢業，即入日本銀行，由普通職員升至理事及大阪分行長。一九三三年，大阪之山口、鴻池及三十四三商業銀行合併，易名三和銀行，被舉為第一任總經理。現除三和銀行外，尚兼任日本銀行理事、參議及大

阪票據交換所理事等要職。與前首相廣田弘毅，係由一高至東大畢業之同班好友。廣田組閣時，曾傳將出任大藏大臣，及日本銀行總裁，蓄一關西實業界中之領袖人物。

中原義正 (Nakahara, Yoshimasa)

海軍大佐，一八九二年生，山口縣人。

一九一三年海軍兵學校畢業。歷任海軍省人事局科員、名取及摩耶等艦艦長，駐美大使館武官、軍令部參謀兼參謀本部聯絡參謀、海軍技術會議議員等職，至一九三四年升大佐，一九四〇年八月以海軍省軍務局附，隨小林一三特使赴荷領東印度，是年十一月升海軍省人事局長。

中原謹司 (Nakahara, Kinji)

衆議院議員，一八八九年生，長野縣人。

早稻田大學文科哲學系畢業。曾任信濃日報主筆兼長野縣議會議員，至一九三六年當選爲衆議院議員，與平野力三、山下魏太郎等，從事右翼政治活動，自任信州鄉軍同志會幹事長。

中島二郎 (Nakajima, Saburo)

陸軍中將，一八八二年生，岡山縣人。

士官學校第十三期砲兵科及砲工學校畢業。歷任教育總監部部員、重砲兵射擊學校、航空學校及工兵學校等教官、重砲兵學校教育部長、橫須賀重砲兵聯隊長、陸軍造兵廠總務部長、陸軍技術本部總務部長等職，至一九三二年任陸軍

技術本部第一部長兼陸軍軍需審議會委員，一九三四年升中將，一九三五年擢爲旅順要塞司令官，翌年編入預備役。

中島今朝吾 (Nakajima, Keisago)

陸軍中將，一八八三年生，大分縣人。

士官學校第十五期砲兵科及陸軍大學畢業，後留學法國，以法國式砲兵戰術及放射毒瓦斯馳名。歷任陸軍大學兵學教官、野砲兵第七聯隊長、東京要塞司令部參謀長、舞鶴要塞司令官等職，至一九三六年三月由烈志野學校校長，繼升後轉任東京憲兵官。一九三七年八月，升任第十六師團長，一九三八年春，擔任中部防衛司令官，不久，編入預備役。

中島知久平 (Nakajima, Chikubei)

內閣參議，一八八四年生，羣馬縣人。

早歲畢業於海軍機關學校，遞升至海軍上尉。一九一五年銜命派赴美法諸國考察飛機事業，因鑒於日本飛機，悉爲他國所造，乃辭去職務，於一九一七年創辦中島飛機製造所，而自任經理，現日軍所用鐵鳥，廿九均係該廠及三菱公司出品。近年軍需工業勃興，日獲淨益五六萬圓，一躍而成巨富，與勳川義介、森島旭並稱，聲名躍起，幾婦孺皆知其爲新興財閥。十年前當選衆議員，隸政友會；大饗內閣時，任商工省政務次官，與前總裁鈴木喜三郎最相契合，以資金供給政友會，年達四五百萬圓之巨，有該會後台老圃之稱。氏

本為軍人，而其經營之中島公司中島飛機製造所，又與陸海軍有密切之關係，松井石根主持之大亞細亞協會，亦半賴其資力，故與軍部感情融洽。一九二八年時曾召集一部分政友會會員，設立國策研究會，旋被擢為第一次近衛內閣之鐵道大臣，一九四〇年政友會分裂，被舉為革新政友會（亦稱政友會中島派）總裁。第二次近衛內閣時，舊有政黨，悉行解散，氏與民政黨總裁町田忠治，政友會久原派總裁久原房之助及國民同盟總裁安達謙藏，同遞任現職。

中島鐵藏 (Nakajima, Teisuzo)

陸軍中將，一八八七年生，山形縣人。

士官學校第十八期步兵科及陸軍大學畢業，後又留學法國陸軍大學。歷任陸軍大學兵學教官、參謀本部科員科長、及平壤第七聯隊長，九·一八事變時，隨嘉義旅團戰於嫩江兩岸。一九三三年七月調任侍從武官，一九三七年三月轉參謀部總務部長，明年三月晉級中將，十二月繼多田駿後，升任參謀次長，一九三九年冬辭職。

中島彌次 (Nakajima, Yadanji)

民政黨參眾議員，一八八七年生，高知縣人。

一九一二年畢業東京帝國大學法科政治學系，經高等文官考試及第，即入大藏省。由專賣局書記官及副參事，於一九二八年任濱口幸雄藏相之隨從祕書，一九三一年若槻內閣成立，轉任鐵道參與官，是年十二月辭職，一九三六年馬場

鏡一藏相時，擢任該省政務次官。當選為衆議院議員已達六次，曾任民政黨總務。平素熱心研究經濟問題，為該黨有數之財政通。

中野正剛 (Nakano, Seigorō)

衆議院議員，一八八六年生，岩國縣人。

氏早歲入玄洋社，即好議論國家大事；早稻田大學政治經濟科畢業後，復留學歐美。初任東京朝日新聞記者，以雄勁之筆，論列時事，不久自行創刊東方時論，以社長而發主筆，同時開始從事於政治活動。自一九二〇年以後，連任衆議員，初隸憲政會，後屬民政黨，且為民政黨創立人之一，民政黨立黨之宣言綱領，大部分成於氏手，並代表該黨任大藏省參政官、遞信省政務次官等職。遞信省所屬之遞友同志會，即由氏手創，而擔任其統領。帝變發生後，思想銳變，一九三二年八月首與安達謙藏等脫離政黨，而組織國民同盟，是年十二月國民同盟正式成立，標榜革新政治，與軍部及國本社之平沼騏一郎一派，互通聲氣，終於獲得第三黨之地位。其後國民同盟中，山道襄一派，傾向於維持現狀，而氏之一派，則始終堅持打破現狀，互相軋轢，至一九三五年十二月七日，氏遂脫離國民同盟，而主張一國一黨。一九三七年德意日防共協定成立後，以國民使節名義赴德意慶祝，一九四〇年任大政翼贊會理事，翌年辭職。氏議論縱橫，有喻為飛翔空中之重轟炸機者，亦有以其善於豹變，而譬之為

夏日之飲冰室冬天之燒芋店者。弟中野泰介，早稻田大學政治科畢業，任福岡市議會議員及九州日報社常務董事，亦有聲望。

中野金次郎 (Nakano, Kinjiro)

東京商工會議所副會長，一八八二年生，昌勝(岡縣)人。

中學畢業後，即投身實業界，以二十歲之青年，即為九州筑豐鐵道之重要人物。二十五歲時赴門司營運送業，不久被選為該地市會議員及商會會長，後復由海運業推及煤礦業，業務大振，不特成為九州實業家領袖，更進而為關西財界之要人。現除任東京商工會議所副會長外，兼任國際通運會社社長、帝國運送協會會長、日本交通協會理事及十餘公司之董事，有「運輸業王」之稱。富於策略，幾操縱東京商工會議所，政治團體，參加者亦多，著有海峽大觀、小運送論等書。

中野登美雄 (Nakano, Tomio)

評論家，一八九一年生，北海道人。

一九一六年早稻田大學政治經濟科畢業，一九一八年自費赴歐美留學，又先後畢業美國霍布斯金及德國海登彼路大學。一九二三年，歸國任母校憲法學教授，一九三六年以「統帥權之獨立」一文，得法學博士學位，此外更兼讀賣新聞撰述，一九四〇年冬被擢為大政翼贊會中央協力會議議員。

著有國家原理、提要國法、國法史之研究等書。

中根直介 (Nakane, Naosuke)

前駐華大使館隨員，一八九八年生，東京府人。

一九二一年東京外國語學校中國語科畢業，是年四月任赤峯領事館通譯，一九二二年十月轉朝陽領事館，旋升書記生，一九二六年重至赤峯，不久調至外務省東亞局第一科服務。瀋陽發生後，轉任專事於瀋陽牛莊錦州各領館，一九三三年擔任赤峯領事，翌年八月升承德領事，一九三五年十二月轉張家口領事，至一九三九年十一月調上海總領事館，翌年六月隨阿部大使為隨員來京，及本多任大使時他調。

井川忠雄 (Ikawa, Tadao)

日本產業組合中央金庫理事，一八九三年生，島根縣人。

一九一七年東京帝大法科經濟學系畢業，經高等文官考試及格，即入大藏省，不久派至北平上海，研究對華借款事務。嗣後歷任駐俄財務官、駐美財務官、代理哥倫比亞大學講師、四伯利亞政務部司稅官、銀行檢查官、產業組合金庫監理官、大藏省匯兌部審查科長及門司稅關長，至一九三六年任產業組合中央金庫理事兼該中央會參事。著有日本財政制度、日本銀行制度(英文本)、及國際金融等書。為近衛文磨及有馬賴壽之心腹，國策研究會中之重要角色。

井上成美 (Inoue, Shiseyoshi)

海軍航空總監本部長，一八九〇年生，岩手縣人。
一九〇九年海軍兵學校第二名畢業歷任軍令部參謀、軍務局第一科科長、比歐艦艦長、駐意大利大使館武官等職，至一九三五年米內光政任橫須賀鎮守府長官時，以同鄉關係，擢為參謀長。其後米內入閣，任海軍省軍務局長，一九三九年十一月，任駐華艦隊參謀長，明年十月任海軍航空總監本部長。

井上紅梅 (Inoue, Kobari)

文藝家，一八八一年生，東京府人。

曾任上海同文書院教員，一九一三年受日清輪船公司津貼，即來我國，飲食起居，無不模仿華人，足跡幾徧及全國各城鎮，專描寫煙、賭、娼、酒等社會弱點。著有支那風俗、酒、阿片、麻雀、匪徒、青紅幫、綠省與赤士、浸漬在支那社會之人、中華萬幸境、金瓶梅、支那社會狀態等書。

井上謙吉 (Inoue, Kenkichi)

前 國父之顧問，一八七五年生，兵庫縣人。

士官學校第十期畢業（與前關東軍總司令植田謙吉同期），日俄戰爭時以中尉從軍。一九一四年至一九一七年任保定軍官學校教官，一九一九年後，任 國父之顧問及李烈鈞之參謀；一九二七年回國，以預備役大佐任參謀本部囑託。現任國學院大學講師及東洋協會理事，時在報端雜誌發表有關中國軍事之論文。

井口貞夫 (Iguchi, Sadao)

外交官，一八九九年生，和歌山縣人。

一九二〇年畢業東京高等商業學校，後又留學英國倫敦大學。一九二六年任駐華公使館隨員，一九三〇年任上海副領事，一九三三年以後，任紐約及詩家各領事，一九三六年十二月外務省調查局內新設第五科，專司對華經濟工作，以氏通曉我國經濟情形，委為第一任科長。一九三八年春轉前報部第一科科長，及第二次近衛內閣時，各省情報事務，均併入內閣情報局，遂調駐美大使館，在野村吉三郎大使下，任參事官。

井田盤楠 (Iida, Iwakusu)

貴族院議員，一八七六年生，靜岡縣人。

為明治中葉陸軍少將駐奧公使井田謙之子，大山岩之婿。妻久子，即「不如歸」小說中，信子之姊。生於維亞納，由學習院中等科，畢業於士官學校砲兵科。日俄戰爭時以大尉從軍，一九一九年因病編入預備役，入東京帝大文科聽講，不久，以男爵互選為貴族院議員。生平痛惡政黨政治，在國會中曾作五小時之反對普通選舉演說，及三小時之反對自由主義演說。與小林順一郎尤為莫逆，兩人共發起「國際反共聯盟」，聘平沼麒一郎為顧問，以太田耕造、五來辰造等為幹事，政治基金則全由小林一人負擔。家貧無子女，雅好音樂，實為右翼分子中之特殊人物。

井出宣時 (Ide, Nobutoki)

陸軍中將，一八八四年生，京都府人。

愛知縣前田德次之子，後出嗣京都井出家，故改今姓。
士官學校第二十一期步兵科及陸軍大學畢業。歷任陸軍省副官兼陸軍大臣隨從祕書、步兵第一〇及八〇聯隊附、陸軍省軍務局科員、步兵第三聯隊長、參謀本部科長，至一九三七年三月升任步兵第十八旅團長，是年七月晉級中將，並升任旅團要務司令官，現已他調。

井田鐵藏 (Ide, Tetsuzo)

陸軍中將，一八八五年生，山梨縣人。

士官學校第二十一期輜重兵科及陸軍大學畢業。曾任陸軍省軍務局科員、輜重兵第一大隊長、駐美大使館副武官、印度駐劄武官、第十九師團參謀長、輜重兵監附及陸軍自動車學校校長，至一九三九年三月升任輜重兵監，並晉中將，曾赴歐美視察軍事三年，爲關於汽車及燃料研究之權威。

井坂孝 (Isaka, Takashi)

東京瓦斯會社社長，一八六九年生，東京府人。

一八九六年東京帝國大學法科英法學系畢業後，即入東洋汽船社，由橫濱派出所主任，升至董事，並被舉爲橫濱商工會議所會長。現除東京瓦斯會社社長外，兼任橫濱交易所、橫濱生命保險會社、橫濱旅社及其他銀行公司等董事等職，實爲京（東京）濱（橫濱）屈指之實業界領袖。性情溫厚。

，好以謙接後進自任，與樞誠之助齊名。一九三七年被舉爲日本興業銀行參議，時有被舉爲東京商工會議所會長及出任商工大臣之說。一九三九年曾代表實業界訪德。

井野碩哉 (Ino, Hiroya)

農林大臣兼拓務大臣，一八九一年生，東京府人。

一九一七年東京帝國大學法科德法學系畢業，即入農商務省，由水產科長、會計科長、文書科長，於一九三三年升任蠶絲局長。在任內時，適值世界經濟恐慌，絲價大跌，氏手定蠶絲國家管理法、蠶繭處理統制法、絲價安定法等，着着實行，頗著勞績。一九三五年轉任內閣調查局調查官，一九三七年升任企劃廳次長，性情敏捷，在議會之答辯詞，條理井然，聽者感服。與前商工大臣吉野信次，最稱莫逆。一九三八年，以鮎川義介之邀，任日本水產會社社長；一九四〇年，繼荷見安後任農林次官；一九四一年七月近衛三度組閣，擢升農林大臣；是年十月東條氏組閣，留任並兼拓務大臣。

井關隆昌 (Iseki, Takemasa)

陸軍中將，一八八三年生，廣島縣人。

原姓鈴木，後入繼井關源太爲養子，故改今姓。士官學校第十八期砲兵科及陸軍大學畢業。曾任陸軍省軍務局科員、整備局科員、陸軍大學兵學教官、野戰軍砲兵第三聯隊長、第四師團參謀長、野戰軍砲第二旅團長及自動車學校校長。

，至一九三五年八月晉級少將，一九三七年八月升砲兵監，是年十一月晉級中將，不久升任師團長。

今井武夫 (Imai, Takeo)

陸軍大佐，一八九七年生，長野縣人。

士官學校第三十期步兵科及陸軍大學畢業。曾任吉林及熱河駐在員、參謀本部中國班班員(根本博任班長時)、奉天特務機關輔佐官(土記原任機關長時)，至一九三五年繼高橋坦後調駐華大使館副武官，與天津駐屯軍密切聯絡。七·七事變發生後，調任參謀本部中國班長，一九三九年三月升任科長，一九四〇年二月繼馬淵逸雄後，任駐華陸軍總司令部報道部長。

今田新太郎 (Imada, Shintaro)

前滿洲國軍事顧問，一八九八年生，東京府人。

士官學校第三十期步兵科及陸軍大學畢業，歷任參謀本部中國班研究員(一九二七年)、北平張家口特派員(一九二九年)、遼寧軍事顧問及關東軍司令部附(一九二九年至一九三一年)、地誌班班員(一九三一年)、中國班班員(一九三一年至一九三三年)、一九三三年冬季借辻政信、佐方繁木二人，派赴新疆視察，一九三四年一月調充步兵第四十九聯隊附，一九三六年派任關東軍參謀兼滿洲國軍事顧問，現已他調。

今井均 (Imamura, Hitoshi)

陸軍中將，一八八七年生，官城縣人。

士官學校第十九期步兵科及陸軍大學第一名畢業。歷任上原元帥副官、駐英大使館副武官、步兵第五十七聯隊長、參謀本部作戰科長、步兵第四十旅團長，至一九三六年轉任關東軍副參謀長。與板垣征四郎、東條英機，同為當時植田謙吉之心腹。一九三七年三月，調任陸軍省兵器局長，後以師團長轉戰各地，一九四〇年升教育總監部本部長，明年他調。

今村新太郎 (Imamura, Shintaro)

海軍中將，一八八〇年生，山形縣人。

一九〇二年及一九一一年先後畢業於海軍兵學校及海軍大學。歷任海軍省副官、海軍大臣秘書、駐德及駐英大使館海軍武官、軍令部參謀、第一艦隊參謀、新高艦艦長、橫須賀鎮守府附、海軍大學教官及教務長、海軍技術本部技術會議議員、日向艦艦長、東宮武官、舞鶴要港部司令長官，至一九三七年編入豫備役，現任扶父官諮詢。氏在日俄戰爭時，以少尉從軍於三笠旗艦；歐戰時入英國大艦隊觀戰。平素超然於財部(彪)及加藤(寬治)兩派。

今村 等 (Imamura, Hitoshi)

愛國政治同志會會長，一八九五年生，長崎縣人。小學畢業後，即投身為煤坑夫，遼廿餘年，時藉勞資問題，與礦主作劇烈之鬥爭。一九三三年時思想轉變，努力於

日本主義之勞動運動，自任愛國政治同志會會長，並被選爲長崎市議會議員，隱然爲九州革新運動之中心人物。

今松治郎 (Inamatsu, Jiro)

前臨時政府顧問補助官，一八九八年生，愛媛縣人。

一九二一年東京帝大法科德法學系畢業，即入內務省，曾任千葉、長崎兩縣內務部長及內務省警保局科員等職。其後在愛知縣事務官任內，以袒護法西斯分子，大爲當地民政黨派報紙所攻擊，而聲名却由是雀起。臨時政府成立後，隨湯淺三千男任行政顧問輔佐官，歸後派任內務省地方局振興科長，一九四〇年三月，任北海道土木部長。

內田五郎 (Uchida, Goro)

外交官，一八八八年生，山形縣人。

一九〇九年選信省講習所外國郵務科畢業，派任上海北平等處日本郵政局職員。一九二一年經外交官領事官考試及格，入駐華公使館服務，一九二六年充汕頭領事，卅年調滬陽領事，一九三二年又調芝罘領事，一九三六年七月由駐齊齊哈爾領事，升任昌州總領事，一九三八年五月任廈門總領事，至一九四〇年他就。

內崎作三郎 (Wachigasaki, Sakusaburo)

衆議院議員，一八七八年生，宮城縣人。

一九〇一年東京帝大英文科畢業，即任早稻田大學講師

，一九〇八年由校派赴英國牛津大學留學，歸後担任文明史及文化史教授。一九二四年後屢次當選爲衆議員，隸民政黨籍。一九二九年任內務省參與官，一九三七年任文部省政務次官，一九三九年繼櫻田兵五郎後，任民政黨幹事長。氏爲基督教徒，生平不近酒色，淡於榮利，在民政黨本部及各地方議會中，門徒甚多，故深爲總裁町田忠一所器重，而爲複町組（指町田之親信者）之紅人云。

內藤熊喜 (Naito, Kumaki)

實業家，一八八一年生，熊本縣人。

上海同文書院畢業。青年時曾放浪於中國各地，後入東邦電力會社任名古屋支店長，現任日本電力會社副社長，朝鮮各電力會社之專務董事及朝鮮民營鐵路之社長，致與野口運並駕齊驅，而稱爲朝鮮實業界中之王者。

公藤太郎 (Kimori, Taro)

朝鮮銀行副總裁，一八八二年生，岡山縣人。

一九〇八年東京帝大法科政治學系畢業，即入大藏省任稅務局事務官。一九一四年日軍攻青島時，任膠州關對辦；一九一八年隨阪谷男爵任北京政府之財政顧問，建議施行金本位制；一九一九年以海外財務官名義，留駐北京；一九二二年任解決山東懸案之財政專門委員，卅年回國任專賣局參事；一九二五年派赴歐美考察，同年以代表名義出席中國關稅會議，並繼續任駐華財務官；一九三〇年以結城豐太郎之

推轂，任日本興業銀行理事，一九三七年升任理職。

友松圓枝 (Tomomatsu, Maruye)

青年佛教運動領袖，一八九五年生，愛知縣人。

大正大學畢業，以校費留學德國哈德森森法國桑納等大學校，歸國後担任母校教授及慶應大學文科講師。一九三四年秋，設立東京真理青年會，自任幹事，時在報端鼓吹佛教革新之論文，實為青年佛教運動之領袖。

及川古志郎 (Okawa, Koshiro)

海軍大將，一八八三年生，岩手縣人。

源三位賴政之後裔，祖父均儒醫，生於新潟。由盛岡中學於一九〇三年畢業海軍兵學校（與長谷川清同期），後又畢業海軍大學。歷經軍令部參謀、華南艦隊參謀、海軍兵校教務長、吳鎮守府參謀長、海軍兵學校校長等職，至一九三五年十一月任第三艦隊司令官長，一九三六年十二月調任海軍航空本部長，一九三八年冬升為對華海軍作戰總司令，一九四〇年繼吉田善吾後，任海軍大臣，並晉級大將，翌年十月東條氏組閣去職。氏在日本海軍界中以篤好文藝著名，在華二十餘年，稱為中國通之前輩。

及川恒忠 (Okawa, Tsunetada)

評論家，一八九〇年生，岩手縣人。

一九一三年慶應大學政治科畢業，即派至中國研究，歸後担任中國事情講座；一九一七年赴歐留學，閱一年回國，

仍任教母校。一九三二年創辦武藏高等學校，著有東洋外交史、支那法制等書。對於我國民國以來制憲事業之經過，尤多所論列。

太田一郎 (Ota, Ichiro)

外交官，一九〇二年生，茨城縣人。

一九二四年東京商科大學畢業，由外務省派至中國留學。一九二七年任駐華公使館隨員，翌年調任駐英大使館三等祕書，後派為洛桑總領事，一九三五年任外務省文化事業部第一科科長，一九四〇年隨阿部大使來華任祕書職。

太田知庸 (Ota, Tomotane)

外交官，一八九七年生，島根縣人。

在一九二四年東京商科大學肄業時，已及第外交官考試，翌年派任駐華使館三等祕書。其後歷任天津營口哥倫比亞領事，一九三七年擢升南非公使館一等祕書，一九三八年轉外務省通商局第六科科長，一九三九年升該局事務官，以迄於今。在一九四〇年八月會以首席隨員，隨小林一三赴荷印談判。

太田泰治 (Ota, Yasuji)

海軍中將，一八八七年生，岡山縣人。

一九二二年海軍兵學校畢業，後又畢業海軍大學校乙種科。歷任海軍省人事局局員、棧名艦副艦長、洲崎特務艦艦長、大井艦艦長、淺間艦艦長、軍務局第二科科長及橫須賀鎮

守府人事部長，至一九三六年十一月轉海軍軍令部辦事，一九三八年三月任海南島海軍特別陸戰隊長，一九四〇年七月任興亞院華中連絡部長官。

太田耕造 (Ota, Kozo)

貴族院議員，一八八五年生，福島縣人。

一九二〇年東京帝大法科英法學系畢業，在學時已與神兵隊案犯天野辰男等參加上杉慎吉之七生社右翼運動。一九二三年虎之門事件後，偕內賀久治翼助平沼騏一郎創立國本社，選爲幹事，自是急進隨平沼擔任國本雜誌之主幹，而總攬國本社之一切事務。畢業後，初執律師業，於一九三八年四月起，任法政大學行政法教授，五·一五及其他右翼分子之犯罪案件，多由彼擔任辯護。平沼組閣後，隨任首相秘書官長；一九三九年八月，勅選爲貴族院議員。

天羽英二 (Amata, Eiji)

前駐意大利大使，一八八八年生，德島縣人。

一九一二年畢業東京高等商業學校專攻部，後及第外交官領事試驗。歷任安南領事官、駐英大使館三等秘書官、瑞士公使館二等秘書官、外務省事務官、巴黎和平條約實施員、華盛頓會議日本全權代表隨員、廣東（一九二三、四年）及奉天總領事，嗣又出駐華公使館一等秘書及駐蘇聯大使館參事官，晉升外務省情報部長。氏在外期間，以留華最爲久

。一九三四年四月十七日，代表外務省發表聲明稱：「日本所處之地位，足以盡其力之所能，履行其在東方之使命，日本對華之地位，與各國不同，故有退出國聯之舉。日本認爲由自己力盡維持東方和平，乃當然之舉動，……故日本不能不反對中國有與東方和平抵觸之行為；即他國方面，任何舉動有礙及東方和平者，日本亦反對之。日本聞他國有共同襄助中國之說，故不得不說明日本之地位。」即世所謂天羽聲明或四·一七聲明是也。一九三七年調任駐瑞士公使並兼國聯之日本事務局長；一九三九年繼白鳥敏夫後，任駐意大利大使，一九四〇年九月辭職。

日比野正治 (Hibino, Masaharu)

海軍中將，一八八五年生，愛知縣人。

一九〇六年及一九一六年先後畢業海軍兵學校及海軍大學校。歷充海軍軍令部參謀、第一次歐戰時攻南洋委任地之軍官、駐美大使館副武官、海軍大學兼陸軍大學教官、鬼怒副艦長、大井・淺間及日向艦艦長，至一九三二年繼澤澤後，任海軍省第二任軍事普及部委員長，一九三五年升第十一戰隊司令官，偕及川古志郎駐滬，游弋長江。一九三六年十一月晉級中將，翌年一月調駐滿海軍部司令官，是年十二月調任海軍大學校長。一九三九年七月任華北海軍最高指揮官，一九四一年調任軍事參議院參議員。

日高信太郎 (Nataka, Shinrokuro)

駐華大使館參事，一八九四年生，關岡縣人。

原姓高橋，一九一九年東京帝國大學政治科畢業，在學時已及第外交官考試。歷任駐法瑞典及中國公使館二三等祕書，至一九三二年以總領事兼一等祕書駐南京，翌年調任外務省官房人事科長，一九三七年林內閣時，升任駐華大使館參事。興亞院成立，入為經濟部長；一九四〇年春復任現職，一九四一年春，加公使銜。

木下平治 (Kinoshita, Hanji)

大東文化學院教授

東京帝國大學畢業後，赴德研究獨裁政治學，時在報端發表納粹政治之理論及外交批評。第二次歐戰初起時，極言英德必陷於長期戰，而德俄亦難免衝突，頗具卓見；著有日本法西斯政治論等書。

木下 敏 (Kinoshita Bin)

陸軍中將，一八八六年生，和歌山縣人。

一九〇八年一九一七年先後畢業士官學校及陸軍大學。初以少尉任官，歷任駐法大使館輔佐武官及軍縮會議隨員（一九三一年），一九二五年後，轉航空本部任第一第二科長，至一九三五年任航空本部第一部長，一九三七年任所澤飛行學校校長，一九三九年三月晉級中將。

木戶幸一 (Kido, Koichi)

侯爵，內大臣，一八九〇年生，山口縣人。

明治維新元勳木戶孝虎之孫，孝正之子（孝正為來原良藏子，以入嗣木戶家，故改姓），一九一五年京都帝大法科政治學系畢業。一九一七年入農商務省，由臨時產業局事務官、農商務省參事官、水產局書記官，升至農工省工務局工務科長、大臣官房會計科長及文書科長等職，一九二〇年陞授侯爵。一九二九年以貴族院代表名義，出席萬國議院會議，同時並以商工省代表出席國際經濟會議；一九三〇年任牧野內大臣之祕書，後升為宮內省秩察總裁；一九三七年十月第一次近衛內閣時，繼安井英二任文部大臣；一九三八年一月兼任厚生大臣，明年一月任平沼內閣之內務大臣，後隨平沼辭職，一九四〇年六月任現職至今。氏與近衛同畢業京都帝大，並為華族中新人之代表，一九三五年時，發起早餐會，邀集各方中心人物聚商要政，近數年協助近衛解決種種重大問題，故實為近衛最親信之密友。內大臣一席，自元老西園寺公望逝世，已不啻為內閣產生之母體，氏於前首相米內提出辭呈後，召集林銑十郎、近衛文磨、若槻禮次郎、岡田啓介、廣田弘毅、平沼騏一郎諸前總理大臣及樞密院議長原嘉道等七人決議後，以內閣後繼人選，提呈日皇任命，自此以後，殆將為日本政治之慣例。

木内四郎 (Kuchi, Shiro)

前駐華財務官，一八九五年生，長野縣人。

一九二二年東京帝國大學法科英法學系畢業，即入大藏

省。歷任理財局事務官及國民貯蓄獎勵局長、次長、局長等職，歷結城、賀屋、石渡、青木、櫻內五任藏相之久。一九四〇五月，繼湯木武雄後任駐華財務官，後調回任主計局長。

木村四郎七 (Kimura Shiroshichi)

外交官，一九〇二年生，東京府人。

一九二七年東京帝大法科畢業，一九三〇年及第外交官領事官考試。初以書記生派赴駐美大使館服務，一九三四年升哈爾濱領事，一九三六年調任外務省東亞局第三科科員，一九三九年十月派為上海總領事館領事，一九四一年一月任香港領事，現已他就。

木村兵太郎 (Kimura Heitaro)

陸軍中將，一八九二年生，崎玉縣人。

士官學校第二十期砲兵科及一九一六年陸軍大學畢業。初以少尉任官，至一九一九年任砲工兵學校教官；閱三年，以陸軍省軍務局員派赴德國研究軍事，一九二五年回國任參謀本部參謀兼陸軍大學兵學教育；翌年任野砲兵聯隊大隊長，一九二九年以隨員出席倫敦軍縮會議；嗣由陸軍省整備局統制科長，升任兵器局局長；一九三九年三月晉級中將，以師團長派赴前方；次年十月任關東軍參謀長，一九四一年四月繼阿南惟幾後，任陸軍省次官。

木村尚謙 (Kimura, Shotatsu)

前司法大臣，一八七九年生，熊本縣人。

一九〇六年京都帝國大學法科德法學系畢業，一九一一年又留學德國。歷任東京地方裁判所檢察、司法省調查科長（任至八年之久，有萬年科長之稱）、行刑局長、刑事局長、大審院檢事次長、大審院部長等職，至一九三六年轉東京控訴院長，近年發生之要案，如血盟團事件、五・一五事件、明糖事件（明治製糖會社賄案）、國鐵事件（國有鐵道賄案）及大本教事件等，皆其經手辦理。酷好圍棋及杯中物，與鹽野季彥最稱莫逆，並為平沼派內之有數人物，（小原直任法相時，有升任次官之說，其後小原擢用長島毅為次官，會為平沼派不悅）。米內內閣時，任司法院大臣，一九四〇年七月辭職。

木村增太郎 (Kimura, Masutaro)

中央儲備銀行顧問，一八八四年生，石川縣人。

一九〇八年京都帝大法科經濟學系畢業，即入台灣總督府任事。後任山口高等商業學校教授，一九一七年時，曾一度任南洋勸業會會長，一九三一年轉任法政大學教授。其間曾兼任內閣企劃所參事官、農林省經濟更生部參事官、經濟團體聯盟理事及東京商工會議所理事等職。著有中國財政論、外國匯兌論等書，得經濟學博士學位，中央儲備銀行成立後，聘任現職。

木村說市 (Kimura, Eichi)

台灣拓殖會社顧問，一八七九年生，島根縣人。

一九〇六年東京帝大法科政治學畢業，即入外務省。歷任外務省參事官、書記官、駐比及駐法大使館二三等秘書、凡爾賽和會華盛頓會議全權隨員、外務省亞細亞局長等職，至一九二九年任南滿鐵道會社理事，一九三五年曾任荷印通商代表顧問，現任台灣拓殖會社顧問。

毛里英於菟 (Mori, Etsu)

前與亞院經濟部科長，一九〇二年生，福岡縣人。

筆名鎌倉一郎，一九二六年東京帝大政治科畢業後，即入大藏省任主計局事務官。濰變後，借星野直樹赴滿，入財政部與阪谷希一、田中恭等，共同改革滿洲之財政金融制度。一九三七年冬，至北平任大野龍太之助理，創設聯合準備銀行。一九三九年十二月任大藏省預金科科長，不久任與亞院經濟部第一科科長，翌年三月，日高信六郎辭職後，代理部長並兼企劃院調查官，現任企畫院總務室第一科長。

水江春造 (Mito, Haruzo)

海軍中將，一八八六年生，廣島縣人。

一九〇八年海軍兵學校畢業。曾任吳鎮守府及練習艦隊參謀、馬公要港部參謀長、加古、榛名艦艦長、第二艦隊參謀長、吳鎮守府警備司令官、馬公要港部司令官、軍令部辦事等職，至一九三九年任與亞院廈門連絡部長，現已他調。

水谷長太郎 (Mizutani, Chozaburo)

衆議院議員，一八九八年生，京都府人。

一九二一年京都帝國大學法律科畢業，繼又入大學院研究。出校後，執行律師事務，以迄於今。氏在青年時代，即參加社會運動，一九二六年勞動農民黨成立時，被舉為中央執行委員；一九二八年因內部意見不合，率其一部分黨員，另行組織勞農大眾黨，被推為中央執行委員長；現則担任社會大眾黨中央委員兼京都支部執行長。其間曾任大原社會問題研究所顧問、立命館大學講師及日本農民組合顧問。初當選為京都市議會議員，今已三次當選為衆議院議員。平素主張廣義國防，對於無產大眾課稅之加重，在議會中曾力肆攻擊，然以氏個人言，為京都府之多額納稅者，年納直接稅一三九二圓，其擁有鉅額財產可知，乃願從事於無產運動，足證其為一熱血漢。

水津彌吉 (Mizu, Yachi)

台灣銀行總裁，一八七五年生，京都府人。

家世業酷，一九〇三年京都帝大法科德法學系第一名畢業，本由學校留任助教，以志在實業，轉推佐佐木惣之助繼任而入正金銀行。歷任漢口上海紐約大阪等行經理，至一九三三年升任常務理事，一九三七年繼大久保利隆後任該行副總裁；一九三九年五月轉任台灣銀行總裁，以迄於今。為銀行界大帝之領袖人物，富於政治手腕。

水野梅曉 (Mizuno, Umekis)

支那時報社社長，一八七八年生，廣島縣人。

十三歲出家，同文書院畢業後，在上海從事曹洞宗傳教事業，以受知於大谷光瑞，乃收入本願寺為知客。一九二四年，創辦「支那時報社」，自任社長，著有中國佛教史及其他政治論文甚多，現任外務省文化事業部囑託。

水野鍊太郎 (Mizuno, Renfaro)

貴族院議員，東洋協會會長，一八六九年生，秋田縣人。

一八九二年東京帝大法科畢業，一八九四年任內務省參事官，嗣後歷任內務大臣秘書官、內務省神社局長、土木局長、地方局長及鐵道院理事等職，至一九一六年寺內內閣成立，擢升內務次官，旋升內務大臣。一九一九年轉朝鮮總督府政務總監；一九二二年加藤友三郎內閣時，再任內務大臣；一九二四年青浦奎吾內閣時，三任內務大臣；一九二七年田中內閣時，任文部大臣，翌年辭職。曾得法學博士學位；一九二二年勅選為貴族院議員，為交友俱樂部之重鎮。氏曾任大臣，今日位居要津之內務省人物，大都出其拔擢，故聲勢力甚大，自成水野一系。現除議席外，兼任東洋協會會長。該會係一九〇九年時，由台灣協會改組而成，目的在調查中國、朝鮮、台灣及其他東洋各地之一般狀況，並灌輸日本海外殖民思想。其主辦事業有東京拓殖大學、大連商業學校、大連女子商業學校、奉天商業學校及台灣商工學校，以培

植殖種人物為宗旨。刊物有「東洋月刊」，迄今已有四十年之歷史，此外尚有刊載調查資料及學術調查報告之「東洋學報」，並於每月舉行「東洋現勢講習會」二次，每年夏季在各地舉行「海外事情講習會」一次。

牛島滿 (Ushijima, Mitsuru)

陸軍中將，一八八七年生，鹿兒島縣人。

士官學校第二十期步兵科及陸軍大學畢業，中尉時曾從軍西伯利亞，其後歷任近衛步兵第四中隊長、步兵學校教官、同校研究部員、步兵第四十三大隊長、下關要塞司令部參謀及戶山學校教育長，至一九三二年荒木任陸相時，擢任為高級副官。後值二·二六事變，人心惶惶，氏獨攜機密文件，搬移安全之地，大為上官賞識。不久調升步兵第一聯隊長，一九三七年七月晉級少將，同時升任第三十六旅團長，是年七月調回本國，十二月任士官學校幹事，一九三九年三月充士官學校預科校長兼戶山學校校長。平生研究日本精神，最為荒木貞夫所器重，七月升中將。

牛島寬常 (Ushizima, Minorune)

前台灣軍司令，一八八〇年生，北海道人。

原籍福岡縣嘉穂郡，隨父遷居北海道，曾肄業札幌英語中學校，徵兵期滿後，考入士官學校，畢業於該校第十六期工兵科。歷任近衛師團參謀、陸軍大學教官、工兵第五大隊長、工兵監部部員、第十一師團參謀長、工兵學校幹事及教

育長、工兵監附、工兵學校校長等職，至一九三七年三月，升任工兵監。翌年春，以師團長來華作戰，一九三九年十月任台灣軍司令官，一九四一年三月辭職。

平島 榮 (Tashima, Sakaye)

遞信省經理局長，一八九六年生，鳥取縣人。

一九二二年東京帝國大學法科英法學系畢業，經高等文

官考試及格，派至內務省任職，不久轉入遞信省。歷任大臣官房祕書、會計科科長、經理局主計科科長等職，至一九三七年五月擢為經理局局長。氏任主計科長時代，因預算關係，內則與各局調停，外則與大藏省折衝，處事果敢，大見譽同僚。經理局長例為升任次官之階梯，其同輩之在內務省者，猶多滯留於地方下職，足見其飛黃騰達，為一傑出人物。

五 畫

市河彦太郎 (Ichikawa, Hikotaro)

駐伊朗公使，一八九六年生，靜岡縣人。

一九二〇年東京帝國大學法科畢業，即及第外交官考試，由天津、倫敦、加爾各答、詩家谷等地領事，至一九三三年任駐瑞典公使館二等祕書，一九三六年任駐芬蘭公使館一等祕書，翌年四月調充外務省文化事業部第三科科長，一九三八年轉第二科科長。在任中，與印度巴西等訂立文化協定，頗為時所稱道，且熟悉中歐情形，故一九四〇年十一月繼中山群一後，升任現職。

北 聆吉 (Kita, Reikichi)

衆議院議員，祖國同志會常務理事，一八八六年生，新潟縣人。

氏爲日本法西斯領袖北一輝之弟，畢業早稻田大學文科後，赴德留學，歸任母校哲學教授，後辭職，任學苑雜誌編輯，以講演及文字向青年鼓吹國家思想。一九二五年被聘爲日本新聞主筆（該報現已停刊），一九二六年辭去，乃專心編纂右翼雜誌「祖國」。翌年集合祖國之讀者，正式結成祖國同志會之右翼團體，內分研究、調查、講演諸部，氏任常務理事，高倉憲任幹事長，以熱烈之雄辯，發揮其右傾思想，不久竟獲得十萬人以上之會員。至一九三二年四月因有所

感觸，忽將祖國停刊，飄然游歷歐美。年來仍任該會常務理事，並任帝國美術學校名譽校長，表面已不若前時之活躍，一九三六年二月當選爲衆議院議員。

北 勝太郎 (Kita, Katsutaro)

衆議院議員，一八八九年生，北海道人。

北海道空知農業學校畢業，曾任北海道會議員、空知郡農會會長等職。一九三二年以來，屢次當選爲衆議院議員。氏家兩世從事合作社運動，現除担任衆議員外，並主持革新農業協會，意氣甚銳，世多以急進派人物目之。

北 島謙次郎 (Kitajima, Kenjiro)

前南洋廳長官，一八九七年生，佐賀縣人。

一九一七年東京帝國大學法科政治學系畢業，經高等文官考試及格，即入大藏省任銀行局職員及兩島稅務署長，一九一九年轉任內閣拓務局書記官。一九二七年拓務省成立後，由書記官、文書科長、管理局第一科科長，於一九三二年升任拓殖局長。氏爲日本最先親往南洋委任統治地之調查員，生平數往滿洲、朝鮮、南洋、歐、美等地視察，除殖民地行政事務外，兼通國際經濟，其主張之南進政策理論，軍部中人，亦深爲佩服。永田秀次郎任拓務大臣時，調任南洋廳長官，近已他調，妻爲三井財閥巨頭山本條太郎之姪女。

半井 清 (Nakarai, Kiyoshi)

前北海道廳長官，一八八八年生，岡山縣人。

前代鹽土福井三郎之長子，因入繼半井家，故改今姓。

一九一三年東京帝國大學法科大學畢業，由大阪府社會科長，歷任朝鮮總督府學務科長、文書科長、內務省社會局第二科長、滋賀縣警察部長、福島、栃木、大阪各府縣內務部長及佐賀、栃木、宮城各縣知事，於一九三五年一月升任社會局長官，翌年三月轉神奈川縣知事，一九三八年十二月繼石原英彥後任北海道廳長官，翌年去職。好乘馬溜冰，為伊澤多喜男部下之健將。

加田哲二 (Kada, Tetsuji)

評論家，一八九五年生，神奈川縣人。

原名忠臣，歐戰後改今名。一九一九年慶應大學政治科畢業，即任該校豫科助教，一九二三年以校費派赴德國，四年後歸國升經濟學部社會學校教授。初時服膺英人摩利斯 (William Morris) 學說，後轉而潛心德人斐希特 (Johann Gottfried Fichte) 納粹黨之國家理論，於是遂成爲革新理論之指導家。著有經濟價值論、近世社會學成立史、社會學概論、民族及民族意識等，一九三六年得經濟學博士學位，近與土方成美、本位雅男等，努力擬成日本主義之經濟學。

加納芳三郎 (Kano, Yoshisaburo)

日越經濟談判委員，一八八八年生，大阪府人。

東京高等商業學校畢業後，即入三井物產會社，一九二三年辭職，被舉爲實業同志會理事。濤變時入滿，一九三七年後，以興中公司囑託住河北，任華北產金公司及華北雜土公司董事，一九三九年兼任華北開發公司囑託。翌年十月隨松宮順赴俄，爲日越談判之首席經濟委員。

加藤外松 (Kato, Gotohatsu)

駐法大使，一八九〇年生，富山縣人。

一九〇九年及一九一一年先後畢業神戶、東京高等商業學校，一九一四年投考外交官領事官及第，即派赴紐約總領館服務。嗣後歷任溫哥華及天津領事。濟南事件發生時，任歐美局第二科科長。一九二三年後，任羅馬尼亞意大利使館二等祕書，駐美大使館參事、駐滿大使館參事及加拿大公使。此次事變發生後，以無任所公使，繼谷正之後來華主持一九三九年秋間之日英會商，後派赴新大陸視察，一九四一年一月任駐法大使。英語流利，外表頗似歐人，爲日本外交界中之有名人物。(於本辭典付印時，卒於巴黎。)

加藤完治 (Kato, Kanji)

滿洲移民團長，一八八四年生，山形縣人。

一九一一年東京帝國大學農科畢業(與前農相有馬頼壽同級)。由山形農會囑託、內務省囑託、愛知縣立農林學校教師及山形縣自治講習所所長，於一九二一年派赴歐美考察農業教育，一九二六年歸國，在茨城縣西茨城郡之實戶村前

設日本國民高等學校，招收高小畢業之農家子弟，徵收既饒地三十町步及未墾地百町步為校田，使學生起居其間，半耕半讀，學科側重修身及擊劍兩項，尤注重於灌輸皇道精神，以寬克彥（東京帝大教授）所著神佛研究及國體精華等書為教本，預備作為農村指導之中心人物。一九二八年以一千圓之經費，率十數名青年至朝鮮，從朝鮮總督府領得荒地數百畝，頗著成績。及九·一八事變發生，氏率領其訓練之青年移植吉黑諸省，一面並與東宮鎮男（預備役陸軍大佐）協力組織自衛移民團，以十數中國村落，夾一日本村落，大舉移入其東北六縣之人民於滿洲，遂被稱為「移民之父」，聲名幾與板垣征四郎、鮎川義介並著。

加藤武男 (Kato, Takeo)

三菱銀行董事長，一八七七年生，栃木縣人。

一九〇一年慶應大學理財科畢業，即入三菱合資會社；由神戶支店襄理、京都大阪等支店經理，至一九一九年升任三菱銀行常務董事，一九三八年被推為該行董事長。此外更兼任三菱信託、明治生命保險、東京海上火災保險、三菱海上火災保險、三菱製紙、旭硝子、日本電池及昭和銀行董監事，勢力始與池田成彬之在三井財閥相拚。

加藤勘十 (Kato, Kanju)

衆議院議員，勞動組合全國評議會委員長，一八九三年生，愛知縣人。

氏為國民同盟所屬衆議院議員加藤綱一之胞弟，日本大學法科專門部畢業。十四歲至東京，奉職某商店為學徒，苦學力行，通學夜校。後入岐阜聯隊充當兵役，任滿重返東京，入東京每日新聞任勞動版采員之職。自一九一九年加入勞動組合運動，參加東京各大新聞社總罷工以來，此後如一九〇二年之八幡製鐵所罷工（被捕入獄）、一九二五年之鑛山罷工、一九二七年之尾澤岩城等煤礦罷工，均直接參加。一九二六年參加日本勞動黨之組織，任日本勞動組合同盟之幹事。一九三六年之總選舉，與社會大眾黨書記長藤生久同得全國最高點之選舉，各在五萬票以上。同年五月之特別議會中，對「思想犯保護監督法」一案，辯論甚為熱烈，以為此種法案，依其運用之如何，難保不使共產主義之轉向者陷於絕望，蓋與其繩之以法，毋寧導之以情也。一九三七年八一三戰事發生後，來滬勞軍，以有鼓動反變戰嫌疑，被捕入獄。著有走向階級戰之第一線、罷工戰法等書。

加藤隆義 (Kato, Takayoshi)

軍事參議院參議員，一八八四年生，東京府人。

男爵船越光之丞之叔，娶前海軍上將加藤友三郎之女為妻，加藤無子，因入繼改宗，並襲子爵。一九〇三年畢業海軍兵學校，即以少尉參加日俄戰役。嗣任東宮武官、霧島艦長，並以國聯陸海軍問題常任委員日本海軍代表資格，留駐法國。一九三〇年倫敦海軍會議時，氏在海軍軍令部，任作

戰科長，與軍令部長加藤寬治、次長末次信正同以反對軍縮條約辭職。其後由第一航空戰隊司令官、海軍大學校長、航空本部長及軍令部次長，於一九三五年升第二艦隊司令官，一九三九年晉級大將，任軍事參議院參議官，以迄於今。

加藤傳次郎 (Kato, Penjiro)

外交官，一八九二年生，福井縣人。

一九一六年東京外國語學校法語科畢業，由兵庫縣政廳通譯，神戸市警察所巡長，於一九一八年隨軍赴西伯利亞担任翻譯。一九二〇年及第外交官考試，歷任駐法使館及駐華使館秘書等職，至一九三六年升漢口總領事。事變發生後，調充駐滿使館一等秘書，一九三九年春任青島總領事。一九四一年調升斯洛伐克（前名捷克）公使館，在公使大島浩中將下，任一等書記官。

古野伊之助 (Iruno, Inosuke)

同盟通信社社長，一八九〇年生，三重縣人。

早稻田大學專門部及國民英學會肄業。早歲即入美國聯合通信社任送信雜役，後轉英文日本太陽士報担任記者，一九二八年任新聞聯合社外訊局長，一九三九年任同盟通信社社長，翌年十月兼任大政翼贊會幹事。氏並為昭和塾幹事，與近衛首相交誼甚篤，第一次近衛內閣時坂垣之就任陸相，開由氏奉命勸駕所致；近衛第二次組閣時，曾有出任內閣書記官長之說，近年常出資供給鄉里清潔膏火。

古賀隆一 (Koga, Mineichi)

中國方面艦隊司令長官，一八八七年生，佐賀縣人。

氏與航空本部長片桐英吉中將，同於一九〇六年畢業海軍兵學校，後又畢業海軍大學。歷任海軍省副官軍令部參謀、海軍大學教官、聯合艦隊參謀、伊勢青葉各艦艦長、軍令部第二部部長、第七戰隊司令官、練習艦隊司令官，至一九三六年晉級中將，一九三七年任軍令部次長，一九三九年十月轉任第二艦隊司令長官，開二年擢騰現職。

出淵勝次 (Debuchis, Katsuji)

前駐美大使，一八七八年生，岩手縣人。

一九〇二年東京高等商業學校畢業，同年經外交官領事官考試及格，即任京城候補領事。後由外務省政務局第一科科長，於一九一四年升任駐華公使館一等秘書，一九一八年任駐美大使館一等秘書，不久升參事，一九二〇年調赴德國，翌年派為國聯第二屆會議日本代表隨員及華盛頓會議日本委員隨員，又翌年任外務省亞細亞局長，兼對華文化事業部部長，一九二四年加藤高明內閣時任幣原外相之次官，一九二八年任駐美大使。日本退出國聯時，曾電請當局慎重。一九三五年秋間歷訪澳洲、菲律賓、新西蘭及荷屬印度等處，是年十二月辭職，一九三六年，勅選為貴族院議員。

平 貞藏 (Taira, Teizo)

評論家，一八九六年生，福岡縣人。

一九二三年東京帝國大學法科政治學系畢業。在學時參與吉野作造主宰之新入會，曾任「社會思想」雜誌編輯及東京法政大學教授，後入南滿鐵道調查，一九三二年改任滿洲日日新聞及滿洲評論記者，從事活動協和會。一九三八年春，復入南滿鐵道，以參事名義，駐東京擔任後藤隆之助主宰之昭和熱滿洲問題講師，與佐佐弘雄、笠信大郎等並稱。

平井出貞川 (Hiraike, Teizo)

前逕信省電氣廳長官，一八九一年生，山梨縣人。東京帝國大學法科德法學系畢業，即入逕信省，由事務官書記官，任至札幌市逕信局長。滿洲政府成立後，以同鄉田邊治通之介，一躍而任滿洲交通部次長，在任三年，主持全滿之船舶、通信、航空、鐵路、電氣等業務，深為關東軍所信賴，一九九年歸任電氣廳長官，翌年去職。

平生凱三郎 (Hirao, Hachisaburo)

前文部大臣，一八六七年生，兵庫縣人。

一八九〇年東京高等商業學校畢業。歷任朝鮮仁川海關關員、兵庫縣立商業學校校長、東京海上保險社大阪支店及倫敦支店長、神戸商工會議所顧問、川崎造船所及川崎汽船會社社長、大福水火保險會社董事長、兵庫縣教育會會長、文政會議會委員及其手摺之甲南商業學校長。(氏極力補助貧寒學生，因此畢業醫校而得有醫學博士學位者，曾有數人

，於是另設甲南醫院，為大阪神戸開設備最完全之醫院。)一九二七年金融恐慌時，川崎造船所幾類破產，氏應擲誠之助及土方徵久之請，以無報酬出任總裁，使行將破產之公司，得以重整旗鼓，轉獲厚利，世多稱之。一九三五年四月以日本商業代表名義，赴巴西解決兩國間之商業關係，大為廣田弘毅所信服；然氏在南美擁有廣大之土地，種植咖啡，此去亦為參加其咖啡園之十周紀念，此為人所鮮知者。一九三六年一月擢為貴族院勅選議員，是年三月廣田內閣成立，因軍部要求徹底明徵國體及刷新文藝，乃繼潮惠之助後，任文部大臣。林內閣時轉任日本製鐵會社社長，近衛新組閣時，遂任商工大臣未就。一九三八年，任臨時政府最高顧問，不久辭職。氏又為關西財閥代表之一，軍需工業重鎮。

平田正判 (Hirata, Masahan)

陸軍少將，一八九二年生，島根縣人。

士官學校第廿四期步兵科及陸軍大學畢業，由參謀本部科員、歐美班長科長、陸軍大學教育、第三師團參謀長等職，於一九三六年調任駐美大使館武官，一九三八年九月以鹿兒島旅團長參加上海戰事，一九四〇年三月歸任陸軍省習志野學校幹事。

平田昇 (Hirata, Noboru)

海軍中將，一八八五年生，東京府人。

平田東助伯爵之次子，一九〇六年海軍兵學校畢業，歷

任駐廣西武官、潛水學校教頭、佐世保人事部長、第一潛水戰隊司令官等職，一九三五年調任侍從武官，一九三九年十一月升任佐世保鎮守府司令長官，一九四一年他調。

平出榮夫 (Hirade, Hideo)

前大本營海軍報道部長，一九九四年生，青森縣人。

森縣人。

海軍兵學校畢業，由耶摩、春日等軍艦士官，於一九二七年派任駐法大使館副武官，一九三三年調充軍令部部員，一九三七年春任駐義大利大使館武官，一九四〇年後，接充大本營報道部長，并升大佐，為海軍中著名之中歐通。

平沼騏一郎 (Hiranuma, Kiichiro)

前內閣總理，一八六八年生，岡山縣人。

舊津山藩士平沼言之次子，一八八八年東京帝國大學法科畢業，即任司法省參事官。嗣後歷任東京地方裁判所推事、千葉橫濱各地方裁判所庭長、東京控訴院推事部長及檢察官、司法省民刑局長兼大理院檢察官。於一九〇七年派赴駐美考察司法制度，得法學博士學位。一九一一年任司法次長，一九一二年任總檢察長，至一九二二年升任大理院長。一九二三年，山本內閣成立，任司法大臣，旋任樞密顧問官。一九二六年陞樞密院副議長，同年十月晉授男爵，一九三六年三月，繼一木尊德郎任樞密院議長。性情奇特，自青年時代與妻離婚後，獨身至今。一九二三年娶於皇太子在虎之門

被刺事件，深慨國民思想之動搖，組織國本社，網羅各界有力人物，以排斥左翼思想。會員中如荒木貞夫、真崎甚三郎、松井石根、菊池武夫、小畑敏四郎、大角岑生、鈴木喜三郎、後藤文夫及池田成彬等，皆為中心人物，今會員達二十餘萬人，勢力遍及全國。氏任國本社社長外，又任修養團團長。國本社以軍人為中心，而修養團則以小學教師及青年等為中心。十餘年來，氏埋頭於革新勢力之培養，而並不反對議會，嘗謂議會乃憲法所規定，反對議會，即不啻反對憲法，而為大逆不道之行為，惟極力主張天皇政治及昭和維新，而反對政黨內閣。五·一五事後，每屆政潮，屢有平沼組閣之說，然屢以故未果，直至一九三九年一月，始繼近衛後組閣，是年九月歐戰發生，以對加入軸心同盟問題，閣議未能一致辭職。一九四一年一月，出任第二次近衛內閣之國務大臣（即內務大臣）。是年七月第三次近衛內閣成立，任無任所大臣，十月東條氏組閣去職，賜內閣總理大臣禮遇。

平野力三 (Hirano, Rikizo)

衆議院議員，一八九九年生，岐阜縣人。

一九二〇年及一九二二年先後畢業拓殖大學及早稻田大學政治科。在學生時代，即參加建謨者同盟，從事政治活動。畢業後，加入日本農民組合之關東同盟，任山梨縣聯合會主事，一九二四年被選為日本農民組合中央委員。一九二六年於日本農民組合大會開會時，因被少數會員彈劾，乃率領

綱岡及山梨兩部分同志，退出大會，加入須貝快天之北日本農民組合，結成全日本農民組合，擁北澤新次郎及高橋龜吉爲會長，而自任幹事，後改組爲日本農民黨，於一九二八年合併於日本大衆黨，不久脫退日本大衆黨，加入社會民衆黨。一九三二年與赤松克麿等一派之國家社會主義派結合，又由社會民衆黨而另組國家社會黨。一九三三年揭發皇道主義，以各地在鄉軍人爲中心，設立皇道會，被推爲幹事長，一九三七年五月當選爲衆議院議員。

平野義太郎 (Hirano, Yoshitaro)

評論家，一八九七年生，東京府人。

一九二一年東京帝大法科德法學系畢業，即任母校助手，一九二三年升任助教，並在中央、法政、日本各大學担任民法講座。一九二七年派赴德法兩國留學，一九二九年回國，翌年辭去母校教職，潛心著述，著有法律上之階級鬥爭、民法中之羅馬思想及日耳曼思想、日本主義社會之機構等書。一九三七年以參加人民陣線派，被捕下獄，釋放後，思想轉變，從事淺譯納粹全書。

平澤 聖 (Hirazawa, Kaname)

華中振興公司副總裁，一八九一年生，長野縣人。一九一七年東京帝國大學法科德法學系畢業，經高等文官考試及格，入遞信省郵匯儲金局之簡易生命保險科，一九二〇年轉入電氣局，歷任文書科長、業務科長及電氣局長，

掌理電氣行政，達十四年之久，現行之電氣事業法規，即由彼所起草，而官民合組之電氣事業調查會會長，亦由彼所兼任。永井柳太郎就遞相時，新成立保險院，欲以院長一席授之，後以內閣書記官大橋八郎（遞信省大橋系勢力甚大，參照大橋八郎條）之介，升任遞信省次官，一九三八年冬任現職。

平瀬愛雄 (Hirase, Yoshio)

日本銀行理事，一八八四年生，大阪府人。

一九〇八年東京帝大法科德法學系畢業，即入日本銀行。一九二七年金融恐慌時，氏在營業局長永池長次下，充調查役，奮勉異常，即爲上官所矚目。後歷任北海道、小樽、門司、名古屋等處分行長，一九三五年由審查部主事擢爲營業局長，翌年夏升理事，爲前總裁深井英五所器重。

平塚廣藏 (Hiratsuka, Hirozo)

貴族院議員，一八七五年生，山形縣人。

一九〇二年東京帝大法科畢業，即入內務省，歷任福井縣參事官、栃木縣知事、東京府知事、台灣總督府總務長官（南弘中川健次郎時代），一九三六年辭職。與永田秀次郎及河田原稼吉交好，至一九三九年十二月阿部內閣時，勅選爲貴族院議員。

左近司政三 (Sakonji, Masazo)

前商工大臣，一八七八年生，岩手縣人。

舊米澤藩士左近司政記之三子，一九〇〇年海軍兵學校卒業後，一九二八年晉級海軍中將。其間曾任練習艦隊參謀、駐英德武官、矢矧、長門各艦長、海軍省人事局長及軍務局長等職。一九二八年被派為出席倫敦海軍軍縮會議全權委員隨員，一九三一年任練習艦隊司令官，後在大角海相下任

次官，既又任第三艦隊司令長官、佐世保鎮守府司令長官等職。至一九三四年，編入預備役，一九三五年被選為北樺太石油公司社長。第三次近衛內閣成立，任商工大臣，及東條氏組閣去職。

本多忠雄 (Honda, Tadao)

前駐華海軍武官，一八八九年生，熊本縣人。

一九一〇年海軍三學校及海軍大學畢業，曾留學英國二年。一九二八年任第一遣派艦隊參謀長，派至我國長江一帶；一九三一年任對馬艦長，仍繼續停留我國；一九三三年擢任海軍軍令部中國科長；一九三五年在華主持海軍武官會議；一九三六年十一月繼佐藤修後，調任駐華海軍武官，並晉級少將。氏前後在華達十年，為海軍中之「中國通」。

本田增藏 (Honda, Masuzo)

海軍主計中將，一八八五年生，福島縣人。

一九一二年海軍經理學校畢業，歷任艦政本部部員兼航空本部部員、艦政本部造艦造兵監督會計官、佐世保鎮守府經理部第一科科長、航空廠會計部長、聯合航空隊主計長，

橫須賀鎮守府經理部長、艦政本部會計本部長，至一九四一年任海軍經理學校校長。

本多政材 (Honda, Masaki)

陸軍中將，一八九一年生，長野縣人。

士官學校第二十三期步兵科及陸軍大學畢業。歷任步兵第四聯隊附、參謀本部科員、駐德大使館副武官、陸軍大臣宇垣一成隨從秘書、陸軍大學教官、參謀本部及教育總監部科長。七七戰役發生後，以松山聯絡長在晉級諸省作戰，歸後任教育總監部部長，一九三九年七月繼岡崎登後，任步兵學校校長，不久升任駐華派遣軍副參謀長。

本多熊太郎 (Honda, Kunataro)

前駐華大使，一八七一年生，和歌山縣人。

早歲肄業於東京專門學校及東京法學院，一八九四年及第外務省書記官試驗，以主事服務於元山牛莊等處；一八九七年又獲售外交官及領事官試驗，派駐華使館服務，後調駐比國公使館。一九〇一年小村壽太郎任外相時，擢為隨從秘書，出席日俄講和會議。後歷任駐華駐英使館秘書參事、哈爾濱總領事、駐瑞士公使，至一九二三年升任駐土耳其大使，嗣轉駐德大使，一九二六年辭職。以國本社關係，與平沼騏一郎最稱莫逆，素主自主外交，於幣原前外相，攻擊甚力。一九四〇年冬，繼阿部信行任駐華大使，本年底去職。

本位田祥男 (Honiden, Yoshio)

前大政翼贊會經濟部長，一八九二年生，岡山縣人。

一九一七年東京帝大法科經濟學系畢業，即入農商務省（今農林省），後以辭心於章白所著之消費合作運動一書，乃辭職而潛心研究羅卜脫阿溫之事業，担任母校助教，旋派赴歐洲留學，歸後升任教授。滿洲事變後，思想劇變，遂與土方成美派協同，而反對大內兵衛一派，成爲東大革新派之中心人物。平賀讓長東京帝大時，以肅學問題離校，於是投入有馬執事主宰之革新農業協會，任爲物價協力會議理事長，又因大河內正敏之介，任文部省囑託，專事研究新中國經濟建設問題，一九四〇年十月任大政翼贊會政策局經濟部長，翌年去職。

本間 精(Horima, Sei)

福岡縣知事，一八九五年生，新潟縣人。

一九一七年東京帝國大學法科畢業，即入內務省，歷任郡馬、山口、長崎等警察部長，栃木、廣島等縣內務部長，至一九三五年任警視廳警務部長，以二・二六事變關係，左遷爲北海道總務部長；一九三八年三月擢升秋田縣知事，一九三九年二月調福岡縣知事。思想銳進，辦事幹練，夙爲河原田稼吉、安井英二等所器重，時人多以少壯官僚之紅人稱之。

本間雅晴(Horima, Masaharu)

陸軍中將，一八八八年生，新潟縣人。

與北一輝同爲新潟縣之佐渡島人，士官學校第十九期步兵科及陸軍大學畢業，久任秩父宮之隨從武官。歐戰前派充駐英大使館副武官，戰事發生後，投入英國軍隊中參戰。其後歷充陸軍省新聞班班長（九・一八事變時），步兵第一聯隊長及和歌山旅團長。一九三七年春，借小林宗之助（海軍中將）隨秩父宮渡英，釀案發生前之三日返國，即調任參謀本部第二部長，一九三八年三月晉級中將，一九四一年三月調任台灣軍司令官。氏嘗製陸軍軍歌，與海軍之關根郡平，同稱爲軍人中之文學家。

本莊 繁(Honjo, Shigeru)

男爵、陸軍大將，一八七六年生，兵庫縣人。

亦作本庄繁，士官學校第九期步兵科畢業，日俄戰爭時以中尉從軍，戰後又畢業陸軍大學。歷任參謀本部中國班班員、滿蒙班班長、中國科科長、陸軍大學兵學教育，至清季任駐華使館副武官（武官爲青木空純），後任張作霖之軍事顧問（奉直戰時）。嗣經步兵第十一聯隊長、步兵第四旅團長、駐華公使館武官（副武官爲板垣征四郎）、第十師團團長，於一九三〇年升任關東軍司令官。九・一八事變後辭職，一九三三年晉級大將，並授男爵，旋任侍從武官長。二・二六事變後自請編入預備役，一九三八年春任傷兵院總裁。

本野盛一(Motono, Seichi)

駐法大使館秘書，一八九五年生，東京府人。

讀賣新聞編輯人本野盛亨之孫，前外務大臣本野一郎之子。一九二一年東京帝國大學法科畢業後，即入外務省任翻譯官，一九二九年升任駐比利時大使館三等秘書，一九三一年任上海領事，一九三三年兼任駐華公使館三等秘書，旋升任二等秘書，一九三七年調任外務省情報部第二科長，一九四〇年任駐法大使館一等秘書。日本脫退國聯時，任全權委員隨員，佐松岡洋右折衝樽俎，以長於語學，頗為松岡所稱道，引與伊藤述史並美。

末次信正 (Suetengun, Nobumasa)

海軍大將，一八八一年生，山口縣人。

末次操九郎之次子，由德山中學畢業海軍兵學校砲兵科及海軍大學。歷任海軍砲科學校教官、常盤艦砲術長、海軍軍令部參謀、第一艦隊及聯合艦隊參謀、第一潛水戰隊司令官、海軍省教育局長、軍令部次長、舞鶴要港司令、第二艦隊司令長官、橫須賀鎮守府司令長官、聯合艦隊司令長官、軍事參謀官等職，於五年前晉升海軍大將。氏在海軍中所以成為青年將校崇拜之的者，一面固由於於軍艦中砲塔之裝置及潛水艇之戰術，具有獨特之技能，一面實由於極力反對倫敦海軍條約中五·五·三之比率，不惜棄職以貫澈主張（倫敦海軍會議時，任職海軍軍令部次長），故遂與荒木同稱為一海一陸之大人物。一九三七年十月編入預備役，同月任內閣

參議，十二月繼馬場鎮一後，就任內相，一九三九年一月辭職，再任內閣參議。後被舉為東亞聯盟建設會長，一九四〇年至四一年曾任大政翼贊會中央協力會議議長，對於日本主義，主張盡力。

正力松太郎 (Shoriki, Matataro)

讀賣新聞社長，一八八五年生，高山縣人。

東京帝國大學法科畢業後，即入內務省，積資升至警視廳官房主事兼特高科長及警務部長。一九二三年時，因虎之門事件，負責辭職，入讀賣新聞社，後被舉為社長，並兼編輯局長、營業局長、照相部長，廣告及販賣部長等職，致稱為新聞界之墨索里尼。會以事被人襲擊幾死，與前商相藤原銀次郎，頗為莫逆。氏初入讀賣時，該報僅發賣五萬份，迄一九四〇年，則超過一百三十萬份，足見其努力之一斑。

永井松三 (Nagai, Matsuzo)

前駐德大使，一八七七年生，愛知縣人。

文藝家永井荷風之從兄，一九〇二年東京帝國大學法科畢業，經外交官及領事官考試及格，即任天津候補領事，翌年轉調紐約總領事館，一九〇七年任駐美大使館三等秘書，一九〇八年升舊金山總領事，一九一四年調任外務省書記官兼大臣隨從秘書。嗣經電訊科長、駐英大使館參事及外務省通商局長，至一九二四年升任駐瑞典兼挪威、丹麥、芬蘭公使，一九二八年擢充駐比利時大使，一九三〇年任警原喜重

郎外相之次官，一九三三年繼小幡西吉後，任駐德大使，與年秋辭職，嗣勅選爲貴族院議員，並任日本體育會長。

永井柳太郎 (Nagai, Ryutaro)

前逕信大臣，一八八二年生，石川縣人。

早歲因練習劍術，膝部受傷，致成跛足。由關西中學同志社大學，而轉學早稻田大學政治經濟科，在早稻田二年級時，演說勞動問題，議論縱橫，辟易千人，乃受知於該校校長大隈重信，一九〇五年畢業，以校費派赴留學倫敦牛津大學，越四年歸國。其時大隈創辦新日本雜誌，選爲主筆，兼任早大殖民政策教授。一九一八年當選爲衆議員，受安達謙藏之邀請，入民政黨，在議會肆力攻擊政友會，罵爲西有列毒，東有原敬，迄今猶資爲談助。一九二四年任加藤（高明）內閣之外務省參事官，一九二九年七月，濱口內閣成立，擢爲外務省政務次官，是年銜命來華，訪我當局於首都，語多贊爾，一九三一年辭外次職，一九三二年任齋藤內閣之拓務大臣，一九三四年隨齋藤辭職，一九三六年四月，民政黨總幹事川崎卓吉病故，遂由氏繼之。一九三七年二月林銑十郎組閣，與氏以同鄉鄉里，選任逕信大臣，第一次近衛內閣時仍連聯。氏歷遊歐美，數來我國，著有支那大觀、殖民原論、殖民問題與社會問題等書。其思想頗受大隈重信氏之影響，辯才既能相仿，面顏亦頗相似，故有小大隈之稱。

永田秀次郎 (Nagata, Hideo)

前拓務、鐵道大臣，一八七八年生，兵庫縣人。

生於士族之家，東京高等師範學校畢業後，又及第高等文官考試。初任縣視學、中學校長、縣理事官、內務省書記官、警保局長等職，至一九二三年後藤新平任東京市長，選任市助役，後兩任市長。氏在一九一八年已勅選爲貴族院議員，其在政界之系統，殆爲後藤新平系，後藤任南滿鐵道總裁時（日本第一任滿鐵總裁，彼即在幕下任顯職，其後後藤入爲內務大臣，亦隨之任警保局長。後藤以移民滿蒙發展大陸爲平生唯一宗旨，故躬辦拓植大學，自兼校長，今在滿任職之日系官吏，大都以該校出身爲中心，後藤歿後，即由氏承其衣鉢，兼長斯校。廣田內閣時任拓務大臣，滿洲五年移民計劃，即其在任內所草成，後隨廣田辭職。氏雖非國本社社員，而與平沼驥一郎亦甚契合，前時一般笠舊人物，因欲捧平沼組閣，會有平沼會之組織，氏身任幹事而爲之奔走活動。一九三九年十二月又任阿部閣內之鐵相，現任教育審議會委員。平素長於居間調停，不作官僚架子，因是頗爲一部分人所信賴，又長俳句，嗜弈棋，別號青嵐居士。

永見俊德 (Nagami, Toshinori)

陸軍中將，一八八八年生，東京府人。

士官學校第二十一期步兵科及陸軍大學畢業，初任參謀本部中國班班員及滿洲守備隊大隊長。一九二五年至二七年，奉參謀本部之命，與松室孝良同時取得我國西北軍軍專顧

問名義：時與鮑羅廷面洽機宜，一日，過濟南車站，疑為南方間諜，幾遭褚玉璞槍決。一九三三年任關東軍司令部附兼滿洲國軍政部高等顧問，後充大瀛會議代表，一九三五年十一月繼酒井降後，升任天津駐屯軍參謀長，明年八月，調豐豫要塞司令官，一九三九年任華遊寺留守師團長。

永持源次 (Nagamochi, Genji)

前陸軍造兵廠長，一八八八年生，東京府人。

士官學校第十六期砲兵科畢業，即以少尉參加日俄戰爭。歸後歷任重砲兵學校教官、陸軍省兵器局銃砲科長、砲兵監附、駐法大使館武官、巴黎和約委員會技術駐在員。三次被派赴歐，先後留駐達十年之久。嗣由陸軍大阪工廠長、砲兵學校校長，升陸軍造兵廠長官，一九三八年冬他調。

永津佐比重 (Nasaton, Sachie)

陸軍少將，一八九〇年生，愛知縣人。

士官學校第二十三期步兵科及陸軍大學畢業。歷屆職務與中國有關者：爲一九二二年任天津駐屯軍參謀，翌年任參謀本部中國班班員，一九二五年奉派來華，至北平。張家口、熱河、太原等處考察，一九二七年又回任中國班班員，一九三一年至一九三二年任駐華使館副武官，參加一、二八戰役，一九三三年調關東軍情報科長，隨岡村寧次簽訂塘沽協定，一九三四年兼日滿經濟共同委員會幹事，一九三六年四月轉任參謀本部中國班班長，一九三七年八月調第十二師團

聯隊長。爲人思慮周密，管着華服，深入我國各層社會，而又嫻於中國語言，實爲最著名「中國通」之一。一九三八年，會任前臨時政府之軍事顧問。

永野修身 (Nagano, Osami)

海軍大將，一八八〇年生，高知縣人。

一九〇〇年畢業海軍兵學校，日俄戰爭時，以陸戰隊重砲隊中隊參加旅順戰役。嗣後歷任日進、擊手各副艦長、海軍省人專局科員科長、平戶艦長、駐美大使館武官、兩次海軍司令部參謀（一九二〇及一九二四年）、第三艦隊司令官、遣外艦隊司令官、練習艦隊司令官、海軍兵學校校長及海軍軍令部次長等職，至一九三四年晉級海軍大將，并升任軍事參謀官。又會兩次參加日內瓦軍縮會議，嗣於一九三五年充倫敦海軍軍縮會議代表，力言日本爲東亞之守衛者，海軍比率應與英美相等，以遭英美反對，宣告退出會議，一九三六年三月返國，即任廣田內閣之海軍大臣，辭職後，任聯合艦隊司令長官，一九四一年三月任軍令部長。氏爲日本海軍中之美國通，一九二六年時，以第一遣外艦隊司令官名義，駐紮上海，首先廢止中國引水人制度，俾軍艦不藉華人之手，亦得行駛。性情剛強，無酒色之好，以處世較久，手段圓滑，並長於辯才。

片山 哲 (Katayama, Tetsu)

日本社會大衆黨中央執行委員，一八八七年

生，和歌山縣人。

一九一二年東京帝大法科畢業，即回故鄉，執律師業，一九一八年以基督教徒關係，與星島二郎共設中央法律顧問所於東京帝大之教會內，對貧苦工農階級，予以法律上之援助，不收任何費用，一面並被刊雜誌，努力於法律之社會化。一九二〇年就任勞動總同盟之法律顧問，一九二三年星島脫離顧問所而從事於政治活動，彼仍單獨樂此不倦。至一九二六年，社會民眾黨成立，被舉為書記長。一九三〇年及一九三六年，先後由神奈川縣第二區當選為衆議員。氏賦性淳重，頗有聲望，有「安部磯雄第二」之稱，現除社會大眾黨中央執行委員外，兼任日本農民總同盟會長。

片倉 衷 (Katamura, Makoto)

陸軍大佐，一九〇一年生，福島縣人。

陸軍士官學校及陸軍大學卒業。初任參謀本部部員，對滿事務局科員及滿蒙班長等職，至一九三一年調關東軍參謀，擔任調查「中村震太郎大尉事件」，一九三三年調回參謀本部服務。因與南次郎有翁婿關係，曾參加林銑十郎派之滿軍運動。一九三四年十一月二十日（即所謂十一月事件），一部分青年將校，如中村孝次、磯部淺一（均爲二、二六事變之主動人）等，聯絡西田稅及其他軍人，擬於議會開會時，「以齋清君側，誅劊曲解國體之元兇」之名義，襲殺元老重臣及其他要人，樹立軍政府，氏於事前，密使士官候補生

佐藤勝郎等，值得真相，呈報陸軍當局，暴動計劃，遂告破案，中村等亦因此褫職。二、二六事變時，被磯部在陸軍省門前，擊傷頭部，即係出於報復行爲。一九三七年任關東軍高級參謀，一九四〇年升聯隊長。

甘粕正彥 (Amakasu, Masahiko)

滿洲映畫會社社長，一八八九年生，山形縣人。

士官學校第二十四期步兵科畢業，一九二三年京濱大地震時，適以憲兵大尉奉職東京警備司令部，以詭言朋與，爲防患未然計，擅將共產首領大衫榮一家殺死，事後免職。一九二七年渡歐研究社會學，一九二九年歸國。渡變後，任滿洲民政部警務司長，後任協和會總務部長兼企劃部長。曾隨韓雲階赴歐，任訪義使節團副團長。一九三八年以五百萬圓創立滿洲映畫會社，自任社長，此外投資之礦山公司，達五十個之多云。

田 誠 (Den, Makoto)

華中交通會社副社長，一八九一年生，兵庫縣人。

前吉瀨總督田健次郎男爵之次子，一九一六年東京帝大法科德法學系畢業。即入鐵道省，由副參事參事，於一九二九年晉級祕書，一九三四年升任國際觀光局長。在任時召集東洋觀光會議，設立觀光旅館十五次，致游客雲集，而觀光收入一年間會達一億日圓，一九三九年調現職。

田川大吉郎 (Tagawa, Daikichiro)

衆議院議員，一八六九年生，長崎縣人。

一八八九年畢業於早稻田大學前身之東京專門學校政治科，即入報界任都新聞及郵報報知記者。尾崎行雄任長東京市時，任市助役兼第三部長，後隨尾崎任司法省參政官。一九〇八年以來，九次當選爲衆議員，先後兼任日本大博覽理事及商科大學講師，現兼任明治學院總長。曾赴美考察三次，赴歐遊歷二次，爲基督敎信徒，平生主持各會派之聯合，於中國情形，亦相當熟悉。一九四〇年六月在大阪講演生活問題，軍部以其違犯陸軍刑法第九十九條，捕之入獄，不久釋放。著有英國之皇室及議會、社會改良史論、都市政策演說等書。

田中 收 (Tanaka, Osamu)

陸軍大佐，一八九八年生，長野縣人。

士官學校第三十期工兵科及東京帝大工學部畢業。一九二六年任陸軍科學研究所所員，一九二九年任陸軍省整備局科員，一九三二年派赴法國研究軍事工程，一九三六年任兵器局科員，一九三九年任同局機械科長，至一九四一年三月任陸軍機甲部器材科科長。

田中 重 (Tanaka, Shigeyuki)

前文部省社會敎育局長，一八九八年生，埼玉縣人。

一九二二年東京帝國大學法科德法學系畢業，經高等文

官考試及第，即入內務省，初任千葉縣警視、福島縣特高科長，受安井英二之殊遇，派赴德國留學，歸後任該省文書科長。內閣調查局成立，派任調查官，與鈴木貞一、東村喜和男諸人，同倡國家社會主義，深受吉田茂之器重。一九三七年復由內務省庶務科長轉任警務科長，不一星期，安井英二出任文部大臣，擢升社會敎育局長，安井辭去後，鈴木貞夫、河原田稔吉、橋田邦彥相繼膺文部大臣，氏咸留任，至一九四一年去職。

田中武雄 (Tanaka, Takeo)

前拓務次官，一八九一年生，京都府人。

一九二二年明治大學法科畢業，即任兵庫縣警視，後由熊本長野縣警視，於一九一九年調任朝鮮總務府警務局偵探副科長，一九三二年任外事科長，一九三六年五月升任警務局長，發隨宇垣辭職。一九三八年，來華任新民會監察次長。及小磯國昭任拓相，繼狀原彥之後，攝任次官；嗣歷金光庸夫、秋田清兩拓相，至一九四一年去職。

田中 清 (Tanaka, Kiyoshi)

陸軍少將，一八九五年生，北海道人。

田中新一之弟，士官學校第二十七期及陸軍大學軍刀組畢業，櫻會會員。歷任陸軍省軍務局科員、近衛騎隊隊附、陸軍省調查班班員、政策班班員等職。在陸大時，曾熟讀馬克思之資本論，於各種思想，均有相當研究，尤以農村問題

，最有深切之瞭解，曾加入經濟國策研究所，實爲少壯軍人中理論的指導人物。床次遞相受賄事件及野島某之頒發怪文書事件，以氏有嫌疑，被罰『重謹慎』三日。至一九三五年三月，調任步兵第三十九聯隊長，一九三七年三月，任關東軍高級參謀，一九四〇年晉級少將，同時任新設之台灣軍報道部長。

田中都吉(Tanaka, Tokichi)

中外商業新報社長，一八七七年生，京都府人。

一八九八年東京高等商業學校領事科畢業，卽入外務省，初任京城候補領事、新嘉坡香港西雅圖等領事，一九二二年後，調任通商局第三科長及第二科長，一九一六年任駐美大使館參事，一九二〇年任通商局長，一九二二年任外務次官，翌年春辭職，任英文日本泰晤士社長。一九二五年日俄復交後，出任駐蘇大使，一九三〇年辭去，担任三井財閥機關報之「中外商業新報」社長，由三井給予年俸二萬元，並兼任同盟通訊社及如水會理事。

田中靜豐(Tanaka Seichi)

陸軍中將，一八八七年生，兵庫縣人。

士官學校第十九期步兵科及陸軍大學畢業，歷任參謀本部部員、奧保肇元帥副官、駐美大使館武官、關東軍憲兵司令官、憲兵司令部總務部長、步兵第五旅團長，至一九三八年任東京憲兵司令官。一九三九年調任師團長，參加宜昌會

戰，一九四〇年十月復任東京憲兵司令官。向例師團長職位，率在憲兵司令官之上，氏以其時東條陸相依畀甚殷，故重任舊職。本年秋季新設防衛總司令部，氏任東部軍管區司令官，未幾他調。

田中隆吉(Tanaka, Ryukichi)

陸軍少將，一八九〇年生，島根縣人。

士官學校第二十六期砲兵科及陸軍大學畢業。一九二五年任參謀本部中國班班員，一九二七年派至北平張家口活動，一九二九年回部任地誌班班員，一九三〇年派駐上海，任輔佐陸軍武官，一九三四年任關東軍司令部附，翌年任關東軍第二科科長兼張垣特務機關長，一九三七年八月轉任第七師團聯隊長，一九三九年任陸軍省軍務局科長，翌年升兵器局長。

田中鐵三郎(Tanaka, Tetsusaburo)

滿洲中央銀行總裁，一八八四年生，佐賀縣人。

一九一〇年東京帝大法科畢業，經高等文官考試及格，卽入大藏省任事務官。閱二年，轉入日本銀行，一九一六年派赴該行倫敦代理店服務，一九二〇年歸國，作成「戰後英德等國經濟情形之報告書」，大爲當局所器重。一九二九年後以倫敦代理店監名義，派至英國，旋被任爲日本出席國聯財政委員會委員、海牙賠償會議對德金融委員會委員、國際清算銀行理事等職。一九三五年調任現職。滿洲金融之改革

，即由其一手策劃。

田中 豐 (Tanaka, Yutaka)

大藏省國稅科長，一八九七年生，愛媛縣人。

一九二三年東京帝大法科畢業，即入大藏省，初任理財局銀行檢查官、主稅局科員及企劃科長、稅務監督局總務部長，至一九三八年六月任國稅科長，一九四一年一月調任名古屋稅務監督局長。與松隈秀雄、山際正道，同稱為前藏相石渡莊太郎幕下之租稅專家。

田代 重德 (Tashiro, Shigenori)

滿洲國外交次長，一八九〇年生，栃木縣人。

東京有名外科醫生田代義德之子，一九二〇年東京帝大法科德法學系畢業。在學時已及格外交官領事官考試，初任瑞士意大利中國各使館二等秘書。萬寶山事件發生時，任長春領事，後調任情報部第三科科長，一九三八年春升天津總領事，一九三九年夏主持在天津之日英談判，翌年春改任現職。氏為時局懇談會之外務省發起人（少壯軍人及官僚交換意見之集團），世多以白鳥彥德將目之。

田尻 愛義 (Tajiri, Akiyoshi)

外交官，一八四六年生，島根縣人。

東京高等商業學校商業教員養成所畢業。初任外務省東亞局第二科長及天津領事，一九三五年八月繼根準三後代理青島總領事，旋調回本省，一九三六年五月川越茂升任駐華

大使時，暫代天津總領事，後任駐華使館一等書記官。中日戰事發生後，轉外務省調查部第五科科長，一九三八年十月繼中村夫吉後，任香港總領事，一九四〇年調任駐華大使館參事官。

田知 花信量 (Tachibana, Shinryo)

前大阪每日新聞上海支局長，一九〇四年生，

宮山縣人。

一九二二年畢業上海東亞同文書院後，即入大阪每日新聞社東亞部，翌年調充北平支局特派員，一九三一年轉長春通信部副部長，翌年九月，繼吉岡文六後轉任大阪每日及東京日日兩新聞社上海支局長。（本書排印時墜機限命）

田村 幸策 (Tamura, Kōsaku)

評論家，一八八八年生，山口縣人。

田村熊之助之長子，早歲畢業山口高等商業學校，一九一〇年及弟高等文官考試，一九一四年又獲舊外交官領事官考試。嗣後歷任外務省事務官、大使館秘書、領事、總領事等職，在華甚久。一九二五年入日本生命保險會社，任該社經理，一九三一年辭職。一九三六年以外交協會幹事資格，被選為太平洋會議之日本代表，一九三八年任東亞振興會幹事。著有中國外債史及其他論著多種，於一九四一年得法學博士學位。

田村謙治郎 (Tanura, Kenjiro)

前遞信省電氣廳長官，一八八九年生，千葉縣人。中學畢業後，因家境寒素，以每天兩角之津貼，服務於東京郵局，夜間就學日本大學夜科，至二十二歲及第高等文官考試，入遞信省。因同事多東京帝大出身，時受揶揄，一九一八年憤而辭職，就任大阪鐵工所之庶務科長，時值歐戰終了，營業衰落，頗感抑鬱，後由今井田清德之介，服務於關東廳遞信局，在任時著「歐洲戰後之列強財政政策」巨著，至今井田任次官時，升為遞信省之電務局業務科長，電話民營案、滿洲電訊電話以及國際電話會社之設立等，皆由其一手草擬。後轉航空局監理科長，一九三八年繼平澤要後，升電務局長。電氣廳成立後，又升任該廳第二任之長官，一九四一年辭職。

田島榮次郎 (Tajima, Eijiro)

陸軍中將，一八八三年生，愛知縣人。士官學校第十八期步兵科及陸軍大學畢業。曾任哈爾濱特務機關員、第六高等學校軍事教官、步兵第四十一聯聯長、第五師團司令部附及第三十三旅團長，事變後調下關要港司令官，旋又他調。

田結 穰 (Taketzu, Minoru)

海軍少將，一八九〇年生，岐阜縣人。明治四十四年海軍兵學校第一名畢業。歷任大角及水野

西海軍大臣隨從祕書、軍務局科員、軍令部參謀、襟裳口向等艦長，至一九三八年任大亞灣（在廣東）上陸作戰之指揮官，一九四〇年秋任駐滿海軍武官。

田邊七六 (Tanabe, Shichiroku)

衆議院議員，一八七四年生，山梨縣人。

原姓小林，為小林一三商相之弟，甲州中學畢業後，即繼承家業，從事釀酒。一九一五年當選為縣議會議員，並任山梨縣政友會支部長。一九二四年以後，六次被舉為衆議員，一九三六年出任農林省政務次官。氏為甲州財閥之代表，其關係之事業，計有富士水電、千代田製紙、京濱電力、姬川電力、昭和肥料等會社。政治上則屬於政友會之中島系，任該系之幹事長。

田邊忠男 (Tanabe, Tadao)

前東京帝大教授，一八九一年生，東京府人。

由第一高等學校於一九一六年畢業東京帝大法科經濟系，與安井英二石渡莊太郎同期，畢業後即任母校教授，一九二〇年派赴歐洲留學，歸後擔任經濟學部經濟原理及交通政策講座，思想銳進，與土方成美等同為該校教授革新派之巨頭。一九三八年，平賀讓任總長時，辭職任立教大學經濟學部長。星野直樹任企劃院總裁後，以同窗關係，適任該院囑託，專事研究國土計劃問題。

田邊治通 (Tanabe, Harumichi)

前內務大臣，一八七九年生，山梨縣人。

一九〇五年東京帝大法科畢業，經高等文官考試合格，歷任逓信省監理局書記官及事務官、逓信省參事官兼匯兌儲金局事務官、大阪逓信局長、東京地方海員審判所長、東京逓信局長等職，至一九二七年田中內閣時代，因鈴木（喜三郎）之推荐，任大阪府知事。一九三二年以其在交通方面，積有相當之經驗，被關東軍選任滿洲國參議府參議。一九三七年二月林銑十郎組閣時，選任逓信大臣，未就。一九三九年以國本社要角關係，出任平沼內閣之書記官長，後轉遞相。第三次近衛內閣，轉任內務大臣，一九四一年十月東條氏組閣去職。

白石元治郎 (Shirashi, Motojiro)

實業家，一八六〇年生，新潟縣人。

原姓前山，以入嗣白石武兵衛，故改今姓。一八九二年東京帝大法科英法學系畢業，初以月薪二十五圓入淺野商店，不久即為店主淺野總一郎所賞識，委為該店石油部主任，並以次女妻之。一八九六年，淺野創辦東洋汽船會社，擢為經理，一八九八年派赴歐美考察運輸狀況，旋轉任舊金山分店經理，一九〇二年歸國，使任理事兼經理。近年除任日本石油礦業及日本鋼管會社社長外，復兼帝國人造肥料、日支炭礦汽船、日本瑛瑯、中央製鐵、川崎鑛業，日本白雲石工業、昭和礦業等會社經理，及其他許多會社之理事董事，然

其中心事業則為日本鋼管會社。該社創於一九一二年，業務平淡，大正末年更形不振，至一九二九、三〇兩年，竟至折開，自濫變發生後，因軍需工業之抬頭及金本位之再停止，鋼材市價暴騰，獲利遂年達十倍以上，一躍而為鋼鐵業界之第一富豪。

白石幸二郎 (Shirashi, Kozaburo)

日本紡織聯合會理事，一八八九年生，島根縣人。

一九〇六年大阪高等商業學校畢業，即入住友銀行外國科。一九一九年轉新聞界，任大阪朝日經濟記者，一九二二年任東京德田銀行行長，不久復任東京朝日新聞經濟部長。一九三七年因交易所記事問題辭職，經津田信吾之介，任日本紡織聯合會專務理事。

白根竹介 (Shirane, Takeuke)

貴族院議員，一八八三年生，山口縣人。

一九〇八年東京帝大法科政治學系畢業，經高等文官考試及格，即入內務省。歷任靜岡縣理事官、山梨、山形各縣警察部長、岐阜、京都、東京各府縣內務部長、岐阜、石川、富山、埼玉、靜岡、廣島、兵庫各縣知事。至岡田內閣時，擢為內閣書記官長，後隨岡田辭職，一九三六年九月勅選為貴族院議員。氏係政友會系官僚，前鐵道大臣內田信也之心腹，與久原房之助，因屬同鄉，關係尤為密切，久原之事

業，大都參加其間，以辦事幹練著稱。

白鳥敏夫 (Shiratori, Toshio)

前駐義大使，一八八八年生，千葉縣人。

白鳥敏夫之次子，文學博士白鳥庫吉與子爵石井菊次郎之姪。一九一二年外交官及領事官考試及格，一九一四年畢業東京帝大法科經濟學系。初歷任奉天隨習領事、駐美大使館三等祕書、華盛頓會議日本全權代表隨員、駐華公使館二等祕書、外務省大臣官房文書科長、駐德大使館一等祕書等職，至一九三〇年升任情報部長。氏任職駐華使館時，與公使芳澤謙吉政見互殊，及芳澤任外相，氏已在部，擬予外調，會五·一五事變起，芳澤辭職而罷。在情報部時，與亞細亞局長（等於亞洲司長）谷正之二人，力主退出國聯（芳澤謙吉、川淵勝次、佐藤尙武諸代表，均主張須慎重。），因與外相有田八郎衝突，致有田憤而辭職，氏亦外調為瑞典公使。嗣後往來柏林，與大島浩（現任駐德大使）坂西一良（前駐德武官）日相過從，德日防共協定之成立，實由彼活動所致。一九三七年三月回國，一九三八年九月調任駐義大利大使，一九四〇年任外務省新設之顧問，期年去職，英語流暢，與故駐美大使齋藤博並稱外務省語學之雙璧。

矢内原忠雄 (Yanaibara, Tadao)

前東京帝大教授，一八九三年生，愛媛縣人。

一九一七年東京帝大法科政治學系畢業，並留學英德等

國，歸國後任母校經濟學部殖民政策教授。夙留心台灣朝鮮事情，因係基督教徒，嘗以人道主義的立場，批評日人在該兩地之行為。其對中國關係，曾在一九三七年二月號之中央公論中發表一文，題為中國問題之所在，謂「中國現在向民族國家發展而趨於統一之過程中，而擔當此統一事業者，則為國民政府，故日本對華政策，如能與此種認識相應，則始能助中國，助日本，並助東亞之和平；倘強行相反之獨斷政策，則徒貽禍將來，苦中國，苦日本，並苦東亞之和平，此為兩國國交調整之一大鐵則」。中日戰事發生後，又發表國家之理想、及民族與和平兩論著，暗譏近衛內閣，致大遭人所嫉視，將其著作禁止發售，乃辭去教職。臨別時發表告學生書謂：「大學之目的，在闡明學理，教授安能無批評之自由，古人有言，肉體雖滅而精神長存，願與諸君共勉」。著有殖民及殖民政策、殖民政策之新基調、帝國主義下之台灣、人口問題、滿洲問題等書。

矢田部保吉 (Yatabe, Yasukichi)

前駐泰公使，一八八二年生，山口縣人。

一九〇七年東京高等商業學校畢業。歷任安東、倫敦、汕頭、雪特尼、孟買、廈門等領事、盤谷外交特派員、駐義大使館一等祕書、外務省情報部第三科科長、青島總領事，後升任駐泰（即暹羅）特命全權公使，前後駐泰八年，一九三六年秋辭職。

矢野音三郎 (Yano, Oosaburo)

陸軍少將，一八八九年生，山口縣人。

士官學校第二十二期步兵科及陸軍大學畢業。初任第八聯隊附、步兵學校教官、步兵學校研究部主事，至一九三五年八月升任步兵第四十九聯隊長，一九三八年七月晉級少將，同年十二月調充駐滿使館武官。

矢野征記 (Yano, Seiki)

外交官，一九〇〇年生，廣島縣人。

一九二三年東京帝大法科英法學系畢業，翌年及第外交官試驗。一九二五年派任駐美大使館服務，一九二九年任駐華使館職員，旋調廣東總領事館副領事，一九三七年任外務省情報部第二科科长，明年轉任內閣情報部委員，是年十二月調充興亞院政務部第三科科长，一九四〇年復隨阿部大使來華，升任香港總領事，現已他就。

矢野恒太 (Yano, Tsuneta)

前第一生命保險會社總經理，一八六七年生，

岡山縣人。

別號一言居士，一八八九年畢業第三高等學校醫學部（現九州帝大醫學部之前身），即入片岡直溫所經營之大阪日本生命保險會社為醫師，在社三年，因意見不洽辭職。是時痛感股份公司組織保險業之不合理，遂發刊題曰「設立非射利主義生命保險相互會社之希望」之小冊子，安田財閥之游

始者——安田善次郎獲閱後，深為感佩，遂採納氏之意見，創設共濟生命保險會社，延為經理。一八九五年赴歐專事研究德國之保險制度，又列席在比利時舉行之第一次國際保險會議，一八九七年任農商務省保險事務官兼保險法起草委員。一九〇〇年保險業法實施後，擢升保險科長，一九〇二年氏按其理想，創立第一生命保險相互會社，自任專務董事，至一九一五年被選為總經理，竟成為日本壽險業界之第一人。除專心致力於第一生命保險會社及第一相互儲蓄銀行（儲蓄會性質之銀行）外，公私兼職，會達七十以上，近年以年邁退休。著作最馳名者，為月刊國勢圖會（並於每年刊行日本國勢圖會），其他單行本則有袖珍論語、藝妓論、日本人生命之研究、複利表、稅制改革案等書。

矢野 眞 (Yano, Makoto)

前西班牙公使，一八八四年生，福岡縣人。

石井菊次郎之婿，一九一一年東京帝大法科政治學系畢業，復先後及第高等文官考試及外交官領事官考試。一九一四年任駐英大使館隨員，嗣後由外務省事務官書記官、駐華公使館二等祕書、駐比大使館一等祕書，至一九二八年升廣東總領事兼台灣總督府事務官。一九三〇年調駐華公使館一等祕書兼參事，一九三三年升任智利兼玻利維亞全權公使，一九三六年後，會調駐西班牙公使，通西班牙語兼能拳術。

石川準十郎 (Ishikawa, Junjuro)

大日本國家社會黨首腦，一八九九年生，岩手縣人。

一九二四年早稻田大學政治經濟學部畢業。在學生時代，已出入於高島素三之門下，崇奉國家主義。出校後任鈴木文四郎主幹之內外社會問題調查所所員，並加入社民黨。一九三一年與大川周明、赤松克廣等組織「日本社會主義研究所」，發刊國家社會主義雜誌，氏任主幹。一九三二年創立「日本國家社會主義學盟」，一九三四年三月，結成「大日本國家社會黨」，此為日本法西斯團體中，理論主張最為整備者。該黨黨誓曰：「基於光輝燦爛之建國本義，以期建設君民一致而無榨取關係之新日本」，綱領之重要者，有「天皇制之尊重、改廢資本主義組織、實行集中的統制經濟、土地資源之平等、有色人種之解放」等項。是年十二月又組織「大日本勞動組合協議會」，吸引大眾以為該黨之基礎。氏善於辭令，今高島門下之人物，多由國家社會主義轉向為日本主義，其尚確守高島學說之孤懸者，惟彼一人而已。

石井 康 (Ishii, Ko)

內閣情報部第三部長，一八九五年生，千葉縣人。

石井菊次郎之子，一九一九年東京帝大法科德法學系畢業。初任駐德大使館三等祕書、溫哥華領事、巴達維亞領事、外務省官房會計科長等職，至一九四〇年八月調升舊金山總領事。內閣情報擴大組織後，伊藤述史遷留現職。氏通曉

國際情形，被稱為外務中嫻於辭令之第一人。

石井菊次郎 (Ishii, Kikujiro)

子爵，樞密院顧問官，一八六八年生，千葉縣人。原姓白鳥，為現任駐義大使白鳥敏夫之叔父。幼時嘗為千葉縣政府之小使，縣令石獻井令奇其才，妻之以女（後離婚），且收為養子，故改今姓。一八九〇年東京帝大法科畢業，歷任公使館祕書、領事、外務省電報科長、通商局長、外務次官、駐法駐美駐英大使及外務大臣等職，並曾任歷屆國聯會議代表，一九二七年華盛頓海軍會議及一九三三年倫敦經濟會議全權代表。日韓合併時，授男爵，青島戰役後，晉授子爵，日本外交界之香宿也。庚子義和團時，氏適任駐華使館祕書，北京被圍，担當使團蒐集糧食之任。日俄戰後，兩國開和會於樸資茅斯，其時日本對俄原無割讓領土之奢望，氏與英使稔熟，偶至其臥室，聞得俄皇致英王願讓樺太半島一半之密電，乃急電出席會議之小村（壽太郎）而取得之。一九一七年氏以特使之名赴美，與美國務卿藍辛訂立藍辛石井協定，一九二九年特任為樞密院顧問官，以迄於今。

石田 馨 (Ishida, Kaoru)

警防協會常務理事，一八八五年生，山口縣人。

一九一三年東大法科英法學系畢業。由新潟縣警視，歷任東京府理事官、青森縣警察部長、栃木、岡山等縣內務部長、警視廳官房主事、保安科長、宮崎千葉等縣知事。至一

九三三年升內務省神社局長，一九三五年又出為神奈川縣知事，二、二六事變後，調升警視總監，一九三七月辭職，一九四〇年六月被選為警防協會常務理事。為大川周明之好友，在官僚系統上屬潮惠之輔系。

石阪 弘 (Ishisaka Hiroshi)

前滿洲產業部司長，一九〇二年生，熊本縣人。

一九二四年東京帝國大學法科畢業，即任東京朝日新聞記者，年餘辭職，入農林省農務局，後調農業更生部科員。濰變後入滿，積資升至產業部農務司長及特產局長，滿洲之農林政策，多由其一手草定。一九四〇年以後，曾歸任大政翼贊會總務部副部長。

石射猪太郎 (Ishii, Taro)

駐巴西公使，一八八七年生，福島縣人。

氏為前衆議院議員實業家石射文五郎之長子，二十二歲即畢業東京文書院商務科，任南滿鐵道會社社員，一九一三年及一九一五年又先後考取高等文官及外交官領事官試驗。其後歷任廣東天津舊金山等處隨習領事及副領事，駐墨西哥公使館美國大使館二三等秘書，外務省通商局第三科長，華盛頓會議時日本代表讀員，至一九二七年升任駐英大使館一等秘書，一九二九年調駐吉林總領事，萬寶山案即由其經手辦理。旋調廣東總領事，一九三三年轉任上海總領事，在滬時周喜獎勸運動，日橋曾以「運動總領事」稱之。一九三

六年春，升任駐泰國公使，不久調為東亞局長，一九三八年冬，又出任駐荷蘭公使，一九四〇年九月繼桑島主計後，調任現職，以迄於今。曾受我國政府以藍色大綬采玉勳章及泰國國君勳章。

石黑忠篤 (Ishiguro, Tadaatsu)

前農林大臣，一八八五年生，東京府人。

氏為樞密顧問官石黑忠惠之長子，一九〇八年東京帝大法科德法學系畢業，當年即入農商務省供職。初任農務局事務官、山林局事務官、農商務省書記官參事官及副業、農政、佃田各料科長，至一九二四年升農務局長，一九二七年轉為蠶絲局長，一九二九年復調農務局長，一九三一年若槻內閣時，擢為農林次官，一九三四年七月曾隨齋藤內閣總辭職掛冠。後任產業組合中央金庫理事長兼農林省米穀顧問，一九四〇年任近衛第二次內閣之農林大臣，翌年去職。

石黑英彦 (Ishiguro, Hideo)

前文部省次官，一八八四年生，廣島縣人。

一九〇一年東京帝大法科德法學系畢業，即入內務省，初任秋田、羣馬等縣理事官、朝鮮總督府內務局地方科長、台灣總督府文教局長、奈良縣知事等職，至一九三一年調任岩手縣知事。該縣承一九二八年金融恐慌之後，連遭雪災，農民生活，困苦萬分，氏設立道場多處，鼓吹精神更生，達七八年之久。生平服膺寬克彥之神道國體學說，一九三八年

多荒木貞夫任文相時，特攝任文部次官，阿部內閣時去職。

石原莞爾 (Ishiwara, Kanji)

陸軍中將，一八九〇年生，山形縣人。

士官學校第二十一期步兵科（第一名爲町尻煇基，氏係第二名畢業）及陸軍大學軍刀組畢業。初任若松聯隊小隊長，參謀本部中國班班員，陸軍大學兵學教官及駐法大使館武官，以研究拿破崙戰史著名，凡有關拿破崙之文件書冊，無不具備。所謂「速戰速決」及「中央突破者」，即由彼所主唱，故世人亦稱爲「石原戰術」。濛濛前，自請調往滿洲，就關東司令參謀，担任作戰科長，後隨松岡洋右出席國際聯盟，主張退出國聯。歸國後轉任高田聯隊長及關東軍高級參謀，一九三七年一月調參謀本部任作戰科長，八月擢爲作戰部長，閣二年升任第十六師團司令部附，晉級中將，未幾，編入預備役。生平不吃烟，不喝酒，不嫖女人，信仰日蓮宗。留學德國時，即與里見岸雄共著「日本國體批評」一書，近年日本軍人之提出「國體明徵問題」，即受此書之影響。氏待下極厚，凡有一技一能者，苟有所託，無不極力向人推荐，因是頗爲部下所愛戴。近年提倡東亞聯盟甚力，辦有東亞聯盟協會，東亞聯盟月刊，即其機關雜誌。

石原廣一郎 (Ishiwara, Hiroichiro)

大實業家，一八九一年生，京都府人。

一九一三年京都立命館大學夜學部畢業。原係一普通行

商，在南洋時，見鋪路之小石，爲赤鐵礦石，乃由松方幸次郎之介，向台灣銀行借款六十萬圓，承購德人經營之新加坡鐵礦資產，從事開採，竟成巨富。近年除担任石原合名會社及石原產業海運會社代表社員之外，兼爲南洋倉庫會社顧問。新加坡、蘇門答臘、婆羅洲等鐵礦，多爲氏所經營，所出鐵礦，專售諸八幡製鐵所，近年軍需工業勃興，氏遂成爲關西之著名財閥。據稱氏並爲荷領柔佛之最高納稅人，日本鋼鐵業百分之五十之原料，係由氏所供給，一九三六年又設南洋航路會社，思想右傾，明倫社國本社等團體，無不受其資助云。

石渡莊太郎 (Ishiwatari, Sotaro)

大政翼贊會事務總長，一八九二年生，東京府人。

故樞密顧問石渡敏一之長子，一九一六年東京帝大法科畢業，初任稅務監督局副司稅官及事務官，旋升幸橋稅務署長、大阪東京各稅務局間接稅部長、大藏省理財局國債科長及主稅局長，二十年來均在在大藏省服務，向爲藤井眞信所器重。一九三四年七月藤井任藏相時，曾使任國債科長兼大臣官房秘書，嗣後藤井一系之人物，如賀屋興宜、青木一男及氏等，均居要津，成爲大藏省之中心勢力。廣田內閣時，馬場兼一出任大藏大臣後，調氏爲內閣調查局調查官。一九三七年二月，結城豐太郎藏相時，復調爲主稅局長，使當修正增稅案之重任。賀屋興宜登臺，升任大藏次官。一九三九年

審，一躍而膺大藏大臣，是年十二月米內閣成立，改任內閣書記長，後隨米內辭職。一九四一年三月，繼有馬頼甫後，任大政翼實會事務總長，以迄於今。

石橋湛山 (Ishibashi, Tanzan)

東洋經濟新報主幹，一八八四年生，神奈川縣人。一九〇七年早稻田大學文科哲學系畢業。初任東京每日新聞記者，後由東洋時論於一九一一年轉入東洋經濟新報社，一九二五年該報變更組織，自任主幹並兼董事，氏為自由主義之論客，以英國之經驗主義的哲學為基礎，鑽研羅斯氏之金融論。數年前中日外交形勢險惡，氏嘗著論謂日本對於法幣政策，不當加以阻撓，而走私毒品等問題，亦當幫助中國取締。又謂中日國交之日趨險惡，其罪大半由華北之日鮮法人所釀成。著有新農業政策之提倡，金解禁之影響與對策、通貨膨脹之理論與實際、日本最近之經濟與財政等書。

石澤 豐 (Ishizawa, Yutaka)

外交官，一八九六年生，奈良縣人。一九二一年外交官考試及第，翌年畢業東京帝國大學法科。初任廣東候補領事，駐英美使領館職員，第十六屆國聯合議隨員，日內瓦軍縮會議隨員，倫敦經濟會議隨員，至一九三五年任巴達維亞領事，與荷印訂立石澤哈爾特協定，一九三七年歸任歐亞局第三科科長，以迄於今。

立 作太郎 (Tachi, Sakutarō)

國際法學家，一八七四年生，東京府人。

一八九八年東京帝大法科政治學系畢業，復入大學院研究，一九〇〇年派赴英德法諸國研究國際法及外交史，一九〇二年回國任母校助教，一九〇四年升教授，翌年得法學博士學位。一九〇八年及一九一八年兩次赴歐考察，一九二一年任華盛頓會議全權代表顧問，一九二三年及一九二七年又兩次赴歐，一九三四年以年老脫離教職，著書甚多，為日本最有名之國際法學家。

立見豐丸 (Tatsumi, Toyomaru)

子爵，貴族院議員，一八八〇年生，三重縣人。立見尚文之子，先後畢業士官學校、砲兵學校及陸軍大學。初任陸軍士官學校教官、東京灣要塞司令部附、橫須賀鎮守府參謀、山砲兵第一聯隊長及野戰重砲第七聯隊長，至一九三二年當選為貴族院議員，隸研究會系。一九三六年寺內壽一就任陸相時，擢為陸軍次官，翌年隨寺內去職。

四手井綱正 (Shidei, Kōsei)

陸軍少將，一八九五年生，京都府人。士官學校第七期步兵科及陸軍大學畢業，一九二六年派任駐德大使館副武官，歸後歷任陸軍大學教官、參謀本部部員、侍從武官等職。至一九三八年升任聯隊長，參加諾門戰役，一九四〇年晉級少將，是年十二月繼西原一策後，任陸軍大學校幹事。

六 畫

任堂卓雄 (Goto, Takuo)

前商工大臣，一八七六年生，石川縣人。

氏爲石川縣金澤市軍醫正任堂卓爾長子（日本姓伍堂者全國祇彼一家），與林銑十郎同鄉，兼爲小學時同級友好。

一九〇一年畢業東京帝國大學工學部造兵科，即任海軍造兵廠技士，一九二六年累進至海軍造兵中將。其間歷任吳兵工廠砲壇部員及部長、製鋼部長、砲壇實驗部長、廣島工廠飛機部長等職，派赴歐美考察技術四次，至一九二四年升吳海軍工廠廠長，後轉經政本部特派員。一九三七年轉商辦之神戶製鋼所長。一九二八年南滿鐵道會社實施製鋼計劃，山本社社長，德氏協助，派送歐美考察新製鋼術，翌年，歸任該社理事。本溪湖鐵礦之利用撫順煤炭以製鍊鋼鐵，卽由氏計劃。

一九三四年理事任滿，改就顧問，同時就任滿鐵傍系公司昭和製鋼所所長。一九三〇年提出論文，得工學博士學位。在吳工廠時代，首先實行工廠管理之合理化，故有譽爲合理化博士者。氏爲一純粹技術家，以產業國策——尤其重工業問題，在日本現狀下急須解決，故林銑十郎組閣時，邀任商工大臣。嫻於德語，一九三七年冬以國民使節名義，赴德慶祝防共協定之成功，一九三八年四月返國。一九三九年阿部內時復任商工大臣，一九四〇年辭職。公餘雅好歌曲及運動。

伊東政喜 (Ito, Masaki)

陸軍中將，一八八二年生，大分縣人。

士官學校第十四期砲兵科及陸軍大學一九一二年畢業。

日俄戰爭時，曾以野砲第十七聯隊附，受金鷄勳章。其後歷任陸軍省兵器局科員、野戰砲射擊學校教官、第六師團參謀、兵務科長、近衛野砲兵聯隊長、野砲第十七聯隊長、野砲第一旅團長、野戰砲兵學校教育長及校長等職，至一九三三年升任砲兵監，並晉級陸軍中將。一九三六年三月調任第三師團長，一九三七年八月編入預備役。一九三八年春轉任第一〇四師團長，是年十月，作戰受傷。氏性情素樸，處事細心周密，老而無子，以子增相原兵太郎之次男爲螟蛉，聊慰寂寞云。

伊澤多喜男 (Izawa, Takio)

貴族院議員，一八七〇年生，長野縣人。

一八九五年東京帝大法科政治學系畢業。歷任山梨岐阜福井等縣參事官及警察部長和歌山愛媛等縣知事，至一九一四年大隈內閣時，任警察總監，閱一年，勅選爲貴族院議員，一九二四年出任台灣總督，一九二六年調任東京市長。氏爲一政治家，民政黨內閣及民政黨內部之最高政策，昔時幾無不參劃，然非民政黨黨員，與民政黨之關係，遠在憲政會

時期，憲民與加藤高明素處友善；加藤組閣時，嘗選之入閣，彼拒絕曰，吾非黨員，不宜為大臣也。與濱口幸雄為同學好友，濱口組閣，得力於彼之活動者甚多，及濱口遭難後，警原代理首相於政局上之種種善後方策，盡出其謀劃，嗣後齋藤岡田兩內閣之成立，亦均為助成之有力分子，故有「內閣製造家」之稱。岡田組織內閣審議會，任為委員之一，在貴族院中，屬同和會系。

伊藤文吉 (Ito, Bunkichi)

貴族院議員，一八八五年生，山口縣人。

伊藤博文之養子，一九〇八年派赴英德諸國考察，一九一二年歸國任內閣總理大臣隨從秘書，後改任農商務省特許局事務官，一九一七年以財政經濟委員名義赴美，一九一九年升為商務局商工科長，不久脫離政界，從事實業。現除貴族院議員（男爵互選）外，並任日本礦業合同土地及橫莊鐵道等社社長。處事圓到。與近衛首相為舊交。

伊藤正德 (Ito, Masanori)

評論家，一八八九年生，茨城縣人。

一九一三年慶應大學理財科畢業，即入時事新報。曾任該報歐美特派員、董事兼編輯長、社會事業部長等職。後任同盟社參事及英文日本太晤士報董事。著有美國海軍之正體、南進論、與打倒英國等書。以海軍通馳名。

伊藤秀三 (Ito, Hideo)

上海自然科學研究所長。一八九一年生，東京府人。

一九一五年東京帝大醫學部畢業。一九一九年任傳染病研究所技師，一九二二年派赴法德美諸國研究細菌及血清學，一九二六年以細菌及色素結合之研究一文，得博士學位。一九二八年任東京帝大教授。此外更兼內務省技師、傳染病研究所所員，結核研究所顧問、日法協會理事等職，一九四一年一月任現職。

伊藤述史 (Ito, Nobuhumi)

前情報局總裁，一八八四年生，愛媛縣人。

一九〇九年東京高等商業學校卒業後，及第外交官領事官試驗。歷任義法瑞士及我國大使館書記官、參事官、國際聯盟日本事務局次長。至一九三三年升任駐波蘭特命全權公使。一九四〇年七月，第二次近衛內閣成立後，內閣情報部擴充為情報局，氏任第二任總裁，第三次近衛內閣仍蟬聯，後與近衛同時掛冠。

伊藤賢三 (Ito, Kenzo)

前海軍報道部部长，一八九四年生，和歌山縣人。

一九一三年海軍兵學校畢業。歷任軍令部參謀，駐智利、阿根廷、巴西等國武官，第三艦隊司令部參謀，妙高、洲崎等艦艦長，海軍省特派員，軍令部第三部第六科科長（主

管中國事務)及南京駐在武官(維新政府時代)。於一九四〇年十一月升任海軍報道部部长，旋即他調。

光行次郎 (Mitsuyuki, Jiro)

貴族院議員，一八七四年生，佐賀縣人。

一九〇二年東京帝大法科英法學系畢業。歷任長崎神戶等地方裁判所檢察官，司法省人事局長，大審院檢察官，京城大阪各控訴院檢察長，至一九三五年五月升檢察總長，一九三九年六月勅選為貴族院議員，以迄於今。

大田大二郎 (Tsugita, Daisaburo)

貴族院議員，一八八二年生，伊國縣人。

一九〇九年東京帝大法科政治學系畢業後，即由內務省派赴茨城縣服務，一九一一年委為石川縣事務官，旋升理事官。其後歷任內務省書記官、鐵道院參事、內務省社會局健康保險部長、茨城縣知事、內務省土木局長、地方局長及警保局長，警察講習所所長等職。於一九三〇年任警保局長時，濱口內閣舉行總選舉，氏受內相安達謙藏指示，使民政黨獲得二百七十三名之最多數議席，以功勳選為貴族院議員。一九三六年廣田內閣時，任為法制局長官，後隨內閣辭職。氏為民政黨系官僚，與宇垣一成同鄉，妻父江口定條，為三菱財閥之要人。

宇佐美寬爾 (Usami, Kanji)

華北交通會社總裁，一八八五年生，岐阜縣人。

由熊本第五高等學校於一九一一年畢業東京帝大法科政治學系，在校時因兄弟同時在學，富於學資，曾兼就家庭教師，以補膏火。初任門司鐵道局職員，一九一七年轉入中島礦業會社任炭礦部長，一九二〇年經大藏公望之介，任南滿鐵道公司運輸部營業科長，後由貨物科長升任鐵道部長，一九三〇年因與滿鐵總裁不合，於改正聯制時，左遷為哈爾濱事務所長。滿洲政府成立後，東北幹線鐵道，悉委託滿鐵經營，升為鐵道總局局長兼滿鐵鐵道部長。一九三四年七月又以關東軍之推薦，舉為理事，一九三五年九月滿鐵修改聯制，規定以副總裁兼任鐵道總局長，於是原任總局長一職，讓諸副總裁大村卓一。一九三八年春，任南滿鐵道公司華北總局長，不久改任現職。氏長於政治手腕，富有統率力，於鐵道局，勢力甚大。前曾以日本代表名義，出席國際鐵道會議；並代表滿鐵，接收中東鐵路。

宇佐美與屋 (Usami, Okie)

陸軍中將，一八八一年生，東京府人。

士官學校第十二期及陸軍大學二十五期(一九二三年)畢業。少尉時曾參加日俄戰役。嗣任第三師團參謀及參謀本部歐美班班員。前次歐戰時，任荷蘭公使館武官觀戰，歸後歷任陸軍省騎兵科長、騎兵第六聯隊長、東京警備司令部參謀長、騎兵監附、騎兵第三旅團長、騎兵學校校長、騎兵監等職，九、一八事變時，率軍轉戰吉黑諸省，至一九三四年

晉級中將；一九三五年任第七師團長，一九三六年三月繼本莊繁後，任侍從武官長，一九三九年四月調任軍事參議官。

宇垣一成 (Ugaki, Kazunihisa)

陸軍大將，一八九九年生，岡山縣人。

一八八九年陸軍士官學校第一期步兵科畢業，後服務於陸路旅團。甲午中日構兵時，任近衛聯隊中尉，屢駕駐廣島大本營，目見軍隊自該地出發，數次謁見參謀次長川上操六，求赴前線，會和局已成，未果。後入陸軍大學，深為當時動員計劃教官後任大隈內閣陸相之岡市之助所器重。畢業後，經岡氏推薦，派赴德國執贊與登陸門下，日俄戰爭時歸國，服務教育總監部，獲交田中義一。一九〇八年時，大隈重信召開町村長講習會於早稻田私邸，集各方面專家，擔任演講，氏被委為陸軍代表，演詞中力說：「今後之戰爭，不能單恃軍隊，國民全體，實有協力之必要」，寥寥數語，深為大隈心折，謂余向以為陸軍自成一特殊勢力圈，今有此草見，殊堪嘉許，宇垣歸而語諸同僚，復由田中義一轉呈當時首相桂太郎。桂即利用此機會，邀大隈擔任軍人後援會會長，且由桂集合大隈左右之大部分而組織立憲同志會（民政黨之前身），其動機實確於此，氏與田中，自此益相接近。田中在寺內內閣（一九一六——一九一八年）任參謀本部次長，氏任第一部部长；田中於第二次山本權兵衛內閣（一九二三——一九二四年）任陸相時，氏任次官；及田中辭去清浦

內閣（一九二四年一月）陸相，推氏後繼，自是連任清浦第一次第二次、加藤、若槻四內閣之陸相，達三年有餘。一九二七年四月，田中繼若槻出組內閣，復邀任陸相，氏以久任民政黨內閣閣員，不便重任反對黨（時田中為政友會總裁）內閣之閣僚為辭，婉言謝絕。一九二九年，濱口內閣成立，又出任陸相，一九三一年辭職，賜前官禮遇，并任軍事參議官。是年六月編入預備役，旋任為朝鮮總督，直至一九三六年八月辭任。一九三七年一月廣田內閣辭職，西園寺以氏握軍部實權多年，寺內（壽一）杉山（元）古莊（幹部）諸人，均共誓部，政界方面，如湯淺倉平、伊澤多喜男、鈴木喜三郎、後藤文夫、唐澤俊樹、松本學、民政黨方面如富田幸次郎、依孫一、川崎克、田村秀吉，政友會方面如砂田重政、岡田重彥，財界方面如三菱、住友、辰馬、森森祖、野口遵等，又均為熱心擁護宇垣者，乃推薦出組內閣，然奉命以後，卒以軍部不肯推薦後任陸相，而致流產。中日事變發生後，內閣新設參議官制，邀集各方領袖，担任斯職，氏遂與荒木貞夫、山本英輔、安保清種等共膺新選。一九三八年五月，廣田弘毅辭職，繼任外相，因對英外交及與亞院問題，與閣員意見未能一致辭職。

宇垣 纏 (Ugaki, Matomu)

海軍少將，一八九二年生，岡山縣人。

氏為陸軍大將宇垣一成之姪，一九一二年海軍兵學校畢

業。歷任駐英大使、駐美大使館武官、練習艦隊入雲艦艦長、海軍省軍務局長、聯合艦隊高級參謀等職，至一九三八年十二月升任軍令部第一部部长。氏精通國際情形，與岡新、山口冬間、阿部勝雄等，同稱為該期畢業生之四金剛。

宇都宮直賢 (Utsunomiya, Naokata)

前駐華副武官，一八九七年生，鹿兒島縣人。

士官學校第三十二期砲兵科及陸軍大學畢業。初任近衛步兵聯隊小隊長，後轉參謀本部歐美科服務，不久派任駐香港武官。一九三三年調駐天津北平，一九三六年任駐華大使館副武官，在滬活動。

安川雄之助 (Yasukawa, Yunosuke)

東洋拓殖會社總裁，一八七〇年生，京都府人。

一八八九年大阪高等商業學校畢業，即入三井物產會社，歷任神戶、天津、大連等支店長及本店之營業部長，一九一八年被舉為常務董事，一九三二年又被舉為三井合名會社理事，後以購買美圓及出售鋼釘於十九路軍等問題，致遭非難。一九三四年被迫辭三井理事職，就任三井傍系之東洋人絹會社理事長。此外合辦日本製粉、日本電氣、東亞興業、芝浦製作所及全福鐵路各會社理事。於一九三六年以泰國經濟考察團名義，赴泰活動，歸後任東洋拓殖會社總裁及日本貿易協會理事。氏思慮周密，見機敏捷，富於經營商業之才能，向與池田成彬同稱為三井財閥之二大巨頭，生平不好酒

色，著有產業貿易觀一書。

安井英二 (Yasui, Eiji)

教育審議會委員，一八九一年生，東京府人。

一九一六年東京帝國大學法科德文法學系畢業，畢業前一年，即及第高等文官考試。曾任東京府部事官、內務省督保局事務官、內務省書記官、地方局行政科長、內務大臣祕書官、岡山縣知事及內務省社會局勞動部長，至一九三一年升任地方局長，與唐澤俊樹並稱為後藤文夫之左右手。一九三三年出為大阪府知事。與近衛文麿係第一高等學校時代之同班好友，一九三七年第一次近衛內閣時擔任文相，是年十二月辭職，勅選為貴族院議員，並為近衛擔任各黨各派之聯絡人；一九四〇年第二次近衛內閣時，復出任內務大臣，翌年一月辭職。氏在社會局事務官時代，熱心研究社會問題，著有勞動運動之研究及勞動協約法兩書，立說新穎，當時頗目為急進主義者。至任地方局行政科長後，陸續發表地方自治之研究、地方制度講話、楠木正成傳等著作，思想似有改變。與池田成彬、小倉正恆等財閥，頗有交誼。

安井誠一郎 (Yasui, Seichiro)

前新潟縣知事，一八九三年生，岡山縣人。

一九一七年東京帝大法科德法學系畢業，經文官考試及格，入內務省。歷任兵庫、福岡、茨城等縣警察部長，東京

市社會局長，朝鮮總督府祕書、專賣局長及京畿道知事等職，至一九三六年，調任拓務省拓務局長，最爲宇垣一成所器重。小磯任拓相時（小磯任關東軍參謀長時，氏充祕書）出爲新潟縣知事，一九四〇年辭職。

安井藤治 (Yasui, Toji)

陸軍中將，一八八四年生，富山縣人。

士官學校第十八期步兵科及陸軍大學畢業。曾任陸軍省參謀本部部員、整備局科員兼陸大兵學教官、動員科科長、駐俄大使館副武官（革命發生後回國）、參謀本部科長、近衛步兵第二聯隊長、講和實施委員會布利亞劃境委員，至一九三六年三月升東京警備司令部參謀長，不久改任東京防衛司令部參謀長，一九三七年十二月晉級中將，一九三八年任師團長。

安江仙弘 (Yasue, Norihiro)

陸軍大佐，一八八八年生，秋田縣人。

士官學校第二十一期步兵科畢業，少尉時即派至小亞細亞各地，調查猶太人與回教之關係。後復入東京外國語學校肄業，屢赴歐美及近東英國屬領，專研猶太人問題，著書甚多。一九三七年晉級大佐，曾任大連特務機關長。

安田武雄 (Yasuda, Takeo)

陸軍少將，一八九〇年生，福岡縣人。

士官學校第二十一期工兵科及陸軍大學畢業。出校後，

復在東京帝國大學工科聽講。曾任駐意大利大使館武官、陸軍通信學校主事、關東軍司令部附、工兵第一聯隊長，至一九三七年八月晉級少將，並升任航空本部第二部長，爲精通無線電工程之武人。

阿部正篤 (Abe, Masahide)

貴族院議員，一八七三年生，石川縣人。

一八九五年東京高等商業學校畢業，即入日下部商會經營進出口貿易，一九〇四年自設安宅商會，一九三七年被舉爲大阪商工會議所會長，此外，更曾兼任大阪商船、朝鮮無烟炭、大阪證券交易所各會社董事，南滿鐵道會社監察，以及大藏省關稅調查委員會委員，匯兌局參議，遞信省船舶管理委員會委員，商工省貿易局顧問等職。與前商相伍堂卓雄，最稱莫逆，與阿部信行，又爲同鄉，一九三九年十二月經阿部伍堂及永井柳太郎之推荐，勅選爲貴族院議員。

安岡正篤 (Yasutaka, Masahide)

金雞學院院長，一八九八年生，高知縣人。

一九一九年畢業東京帝國大學法科政治學系。在學生時代，即著有關於論語之書籍數冊，畢業後供職文部省。當時鑒於吉野作造一派德謨克拉克西運動之熱烈，深表不滿，乃入猶存社，與北一輝、大川周明等從事於愛國運動。然大川等爲偏重行動之人物，氏與若輩性格不合，卒分道揚鑣。一九二二年秋漸與酒井忠正伯爵交往，繼創立金雞學院，講授關

於論語及以王陽明學說爲中心之東洋思想，從者日衆，聲譽由是鶴起。一九三一年一月國維會之成立，氏又爲其理論之指導者。該會爲一政治思想團體，其綱領主在網羅人材，以期更張國維，振興政教，發展經濟，匡正輕佻激進思想，而圖日本精神之實現。中心會員如前首相近衛文麿、前內務大臣後藤文夫、前厚生大臣吉田茂、前警保局長松本學、前首相廣田弘毅、以及酒井忠正、岡部長景、田澤義輔、香阪昌康，皆爲貴族與官僚出身。當一九三四年岡田內閣成立時，如內相後藤、外相廣田及藏相藤井眞信（已故），均屬該會會員，故一時有「國維會內閣」之稱。著有東洋倫理概論、王陽明研究、日本精神研究、東洋政治哲學等書，荒木貞夫嘗譽之爲昭和時代之由井正雪。

安倍清種 (Abo, Kiyokazu)

海軍大將，一八七一年生，佐賀縣人。

佐賀藩士澤野種鐵之第三子，以入嗣廣島縣富安保清康中將，故改今姓。海軍兵學校（一八九四年）及海軍大學畢業後，歷任海軍大學教官、秋津洲艦長、第二艦隊參謀、駐英海軍武官、海軍軍令部次長、海軍艦政本部長、吳鎮守府海軍司令長官、橫須賀鎮守府司令長官及軍事參議官等職，至一九三〇年之濱口內閣及一九三一年之若槻內閣時，任海軍大臣，是時并晉級上將。氏與加藤寬治同班肄業三田小學及海軍兵學校，日俄戰後時，又先後任三賀艦砲術長，故

倫敦海軍會議時，加藤特推氏爲海軍最高顧問，使爲監督，後倫敦條約深爲一部分少壯軍人所不滿，致發生帷幄上奏問題，氏亦被累而辭去大臣職務。一九三四年一月編入預備役，一九三七年內閣參議制成立，出任內閣參議，以迄於今。

安倍能成 (Abe, Yoshinige)

第一高等學校校長，一八八三年生，愛媛縣人。

一九〇九年東京帝大文科西洋哲學系畢業。即執教鞭於慶應、法政、日蓮宗、東京農業等大學，女子英學塾及第一高等學校。一九一五年由文部省派赴德義諸國研究哲學，一九二六年任朝鮮京城帝大教授，一九四〇年秋繼橋田邦彦後任現職。生平主張日本主義，著有道德哲學概論、西洋古代中世哲學史、康德之宗教哲學、靜夜集等書。

安倍源基 (Abe, Genki)

前警視總監，一八九四年生，山口縣人。

一九二〇年東京帝國大學法科畢業。歷任沖繩縣理事官、高知縣水產科長、內務省駐上海派遣官、山形縣學務部長。在山形任內，適五·一五事變之後，警視廳新設特高科總監，藤沼莊平求人於安井英二，安井荐氏充任。一九三七年六月，近衛內閣成立，任爲內務省警保局長，是年十二月升任警視總監，一九三九年去職。

安部磯雄 (Abe, Isao)

前社會大眾黨委員長，一八六五年生，福岡縣人。

原姓岡本，以入繼安部家，改今姓，一八八四年畢業京都同志社大學，一八九五年復畢業於美國哈佛特（Harvard）大學之神學院。初任同志社中學校長，後轉早稻田大學担任經濟學社會學教授兼政治經濟學科及野球部長，直至一九二八年始脫離該校。氏爲日本從事社會運動最早之一人，一八九八年日本共產主義領袖片山潛組織「社會主義研究會」，彼襄助甚力，一九〇〇年改組爲「社會主義協會」，被推爲會長，翌年與片山等發起「社會民主黨」，致遭彈壓，而協會亦自此解體，然秘密活動，仍繼續進行。及日俄戰爭時，前協會重要人物幸德秋水等力倡非戰論，輿情譁然，斥爲國民公敵，素重道德觀之氏，至是終於退出社會主義之陣營。自大正初年（一九一三年左右）轉而從事無產政黨運動，歷任勞動農民黨顧問及社會民衆黨中央執行委員會議長，至一九三二年被舉爲社會大眾黨（簡稱社大黨）中央執行委員長。該黨事務，夙由巖生久主持，一九三九年春藤生連絡中野正剛，擬與中野率領之東方會合併，成立革新之政黨，氏設法阻止，合併企圖，遂成泡影。一九二八年及一九三六年，當選爲衆議院議員，一九四〇年辭職。社大黨亦以一九四〇年秋六政翼贊會成立，趨於解體。著有社會問題、成爲社會主義者以前等書。

安達堅造 (Adachi, Kenzo)

日本內燃機工業會社社長，一八八一年生，東

京府人。

士官學校第十四期步兵科畢業，一九二三年中佐時轉入空軍，歷任航空大隊附陸軍航空本部部員、關東戒嚴司令部航空科長、選信省帝國飛行協會囑託等職。一九二七年後，三次赴歐考察航空及汽車事業，對於內燃機之製造，具有特別研究。著有世界航空之現勢、國際航空公私法研究、與登堡傳等書。現任內燃機工業社長，爲軍需工業界之第一人。

安達謙藏 (Adachi, Kenzo)

內閣參議，一八六八年生，熊本縣人。

早歲肄業熊本清治書院，師事佐佐某，兼入其所統率之熊本國權黨，隨之共渡朝鮮，創辦朝鮮時報及漢城新報，因牽涉閔妃事件離韓，立志欲活動中央政界，由國權黨轉入國民協會大同俱樂部，及一九〇九年桂太郎組織立憲同志會，遂入其麾下，其後該會演變而爲憲政黨，又變而爲民政黨，氏在黨內地位，因歷史關係，乃益見增高，一九三一年率其同志中野正剛、風見章、加藤綱一等卅餘人，脫離民政黨而另立國民同盟，被舉爲總裁。國民同盟爲打破既成政黨之一革新團體，其成立宣言有云：「國民同盟在擴充日本建國之精神，外而檢討正義，以定不受屈服之永久和平之基準，內而確立統制經濟，建立無所搾取之正義社會」，然成立以後，因內部意見紛歧，有則復歸民政黨，有則另組東方會，黨員寥寥，在議會中，亦僅有數名之議席，故不甚爲世人所注

意，一九四〇年七月近衛第二次內閣成立，倡行新體制，該團體遂首先自動解散。氏自一九〇二年後，當選為衆議員，迄今已達十五次。曾任外務省參與官，一九二五年之加藤內閣與一九二六年若槻內閣之遞信大臣，一九二九年濱口內閣與一九三一年若槻第二次內閣之內務大臣。從事政治生活，垂四五十年，久積經驗，頗有敏於預測世變之能力，且與久原房之助，同以善蒐集情報著名，故兩人最早脫離既成政黨，而投入革新陣營。近雖年邁，奮發猶昔，國民同盟解散後，出任內閣參議，以迄於今。

安藤正純 (Ando, Masazumi)

衆議院議員，一八七六年生，東京府人。

東洋大學，及早稻田大學政治經濟科畢業後，復入外國語學校肄業。初任日本新聞、大阪朝日新聞、明教新誌及政教新聞記者，後轉入東京朝日新聞社，担任編輯部長，達九年之久，文筆口才，皆所擅長，頗有名於時。因曾兼任東京帝大講師、真龍女學校及東京勞動學校校長，故教育方面，亦有相當經驗。田中內閣時，任為文部省參與官，犬養內閣成立后，升任政務次官。氏之政黨生活，已垂三十餘年，當選為衆議員，亦達二十載，在政友會中，與曾任衆議院副議長之岡田忠彥及故山口義一，同為前鈴木總裁幕下之三健將。岡田內閣之成立，政友會自始即表示反對，而主張與岡田絕緣者，則由氏倡之。二・二六事變後，政友會幹部，應時

勢之變更，實行改革，曾被選為幹事長。氏又嘗游歷歐美及我國，軀幹短小，而膽氣豪放，至今猶有「不知老之將至」之概。

安藤狂四郎 (Ando, Kyoshiro)

前內務省警保局長，一八九三年生，大分縣人。

林彌三年中將之婿，一九一八年東京帝國大學德文法學系畢業，即任新潟縣事務官。嗣後歷任若手廳警察部長、警保局高等科長、東京府學務科長、靜岡縣及東京府內務部長、茨城三重兩縣知事，至一九三七年十一月升任內務省土木局長。在任時，對利根川放水、淀川改修、關門海底國道之防砂工事等多年懸案，均一一為之解決，頗著勞績。木戶幸一任內相後，調警保局長，旋即他就。氏平素好研究皇道政治，在茨城知事任內，著有水戶學之溯源一書。

安藤利吉 (Ando, Rikichi)

陸軍中將，一八八五年生，宮城縣人。

士官學校第十六期步兵科及陸軍大學畢業，歐戰時又留學英國三年。初以少尉任官，一九三六年四月累進至中將。其間曾歷任駐英大使館副武官、哈爾濱特務機關長、參謀本部附、陸軍省兵務科長、步兵第五聯隊長、步兵第一旅團長及戶山學校校長等職，至一九三七年八月調升教育總監本部長，一九三八年十月繼古莊幹部，任華南陸軍最高指揮官，一九四〇年十二月歸任參謀本部附。

庄司之吉 (Shoji, Ooikichi)

大日本紡織聯合會會長，一八七三年生，秋田縣人。

一八九七年東京高等商業學校畢業，即入三井物產會社，翌年派赴孟買，專司調查印度棉花產消情形，一九三一年歸任大日本紡織聯合會書記長，一九二二年改任大阪紡織株式會社董事，因合併三重紡織，將該會社改稱為東洋紡織會社，自任社長，現並兼任大日本紡織聯合會會長。氏又曾於一九一九年參加第一次國際勞工會議，一九二五年參加中國特別關稅會議。其在關西財界之地位，與津田信吾齊名，好作漢詩，別號杜峯，著有紡織慘業短縮史等。

江口順一 (Enchi, unichi)

前東洋拓殖會社理事，一八八九年生，佐賀縣人。一九一七年東京帝大法科政治學系畢業，即入大藏省，歷任大阪及玉造兩稅務署長，熊本稅務監督局經理部長，橫濱及神戸海關總務科長，東京稅務監督局間接稅長，該省銀行檢查官、會計科長、文書科長、營繕管財局總務部長，至一九三九年五月，積賞升任為東洋拓殖會理事，一九四一年去職。

江藤源九郎 (Eto, Genkuro)

日本主義門爭協議會委員長，一八八〇年生，奈良縣人。

士官學校及陸軍大學畢業。歷任步兵第三十聯隊附、副官，士官學校區隊長、中隊長，第五十三及三十八聯隊長，第十師團軍法會議判士，參謀本部副官，關東都督府副官，新發田聯隊區司令官，第十六師團司令副等職。一九二八年普選施行後，屢擬組織獨立黨，一九三二年投身政友會，當選為衆議員，一九三四年脫離政友會，旋另組大日本生產黨，任執行委員。一九三六年仍當選衆議員。一九三七年二月十日，聯絡全國革新分子，如大日本青年黨之橋本欣五郎、三六社之小林順一郎、時局協議會之建川美次、東方會之田中養達及松谷與二郎、日本勞動組合聯合會之高山久藏、新日本國民同盟之宮崎龍介及陶山篤太郎等，組織「日本主義門爭協議會」，圖革新勢力之集合團結，由氏為委員長。氏在思想方面，最信仰平沼騏一郎，一九三五年曾因國體明微問題，在衆議院提議懲辦主信天皇機關說之美濃部博士，結果美濃部所著憲法書冊，悉被禁止發售。

江藤夏雄 (Eto, Natsuo)

興亞院總裁室秘書，一九〇四年生，佐賀縣人。

明治維新志士江藤新平之孫，由佐賀中學、第五高等學校，於一九二七年畢業京都帝大經濟學部，即入南滿鐵道會社調查局，受知於松岡洋右及大川周明。興亞院成立後，任為總裁室秘書。

池田成彬 (Ikeda, Seihin)

大藏省顧問，一八六八年生，山形縣人。

慶應大學（一八八八年）及美國哈佛大學（一八九四年）畢業。初任時事新報編輯，旋入三井銀行，以忠於職務不久即擢為三井足利分行長，一八九八年派赴歐美考察金融業，歸後轉任總行營業部次長，旋升營業部長，一九〇九年被推為常務董事。此外所兼重慶職務，有三井合名會社首席理事、三井信託代表董事、日本銀行參議及交訊社理事等。
二・二六事變後，三井實行停年制，氏乃告退。一九三七年結城豐太郎就任藏相，力邀出山，遂繼深井英二後，就日本銀行總裁，一面改革內部體制，一面擴張保證準備發行額，戰事中日本經濟機構，得以安然應付者，未始非由其努力所致。一九三七年九月與各務錄吉代表三井、三菱兩大財閥，同時兼任內閣參議。一九三八年五月繼賀屋與宜及吉野信次之後，出任大藏大臣兼商工大臣。氏為國本社社員，各種思想團體，受其資金供給者頗多。一九三二年團琢磨被刺前後，革新勢力高漲，指斥財閥染指滿蒙，三井尤為衆矢之的，氏提議實行減少政黨方面之補助金，而以一部分供給革新團體，以三千萬圓，設立三井報恩會，從事社會事業，不以圖利為目的而壓迫中小產業及大眾等——三大方針，世遂目為財閥轉換方向，對之疾視之空氣，亦稍和緩。一九三九年初，辭去大藏大臣兼商工大臣，若石渡莊太郎自代，而任大藏省最高顧問，以迄於今。

池田純久 (Ikeda, Suminisa)

陸軍大佐，一八九五年生，大分縣人。
士官學校第二十八期及陸軍大學畢業。歷任陸軍省軍務局徵募班班員、班長及第三聯隊中隊長。夙加入小林順三郎之「三六會」及「新經濟國策研究所」，與前內閣資源局長松井春生，尤稱莫逆。一九三五年八月，調任天津駐屯軍調査科科長並兼任通訊班班長，內閣企劃廳成立後，任參議。

池田忠孝 (Ikeda, Tadataraka)

軍事評論家，一八九二年生，滋賀縣人。

氏為岡山縣赤木辰三郎之次子，娶滋賀縣池崎小三郎女為妻，乃入嗣池田家，故改今姓。早年由第六高等學校升入東京帝國大學，畢業法科德文法學系。出校後任萬朝報編輯；一九一三年回大阪，繼養父業，經營織襪廠；一九三三年以後，專事評論軍事外交問題。翌年任大阪時事新報編輯顧問，名聲鶴起。氏著作甚多，尤以美國不足懼、日美潛水艇戰二書，最受社會之歡迎，其他以筆名赤木栢平發表之著作，亦復不少。一九三六年至今，受一般知識份子之支持，二次當選為大阪區之衆議員。其間曾於一九三七年任文部省參與官，一九三九年去職，中日事變發生後，不時發表南進論策。

池尾芳藏 (Ikeo, Yoshizo)

日本發送電力會社總裁，一八七八年生，滋賀

縣人。

一九〇四年東京帝大法科政治學系第二名畢業，初入選信省，不久投身實業界，任住友鑛銅會社庶務科長，一九一二年轉大阪商船會社任會計科長，頗得當時社長中橋德五郎（原敬內閣之文部大臣，歐戰時以汽船暴富，為關西有數之財閥）及董事山岡暉之助之信任。一九一九年慈惠山岡創立日本發送電力會社（簡稱日電），後繼山岡為該社社長。該社在日本五大電力會社中，歷史本屬最短，因氏之努力，以大阪為根據，勢力遂與東京之東邦電力會社（簡稱東電）相埒。一九三六年廣田內閣時賴母木選相力主「電力國營」，氏曾代表電力界反對，及一九三九年四月「電力國營」實現，政府新設「日本發送電力株式會社」，氏於一九四一年繼增田次郎之後，任該會社總裁。在學生時代，曾參加我國革命運動，與先烈黃克強、宋鈍初等交往。現除任發送電總裁外，並兼大阪建築、箱根溫泉、東亞電力、中部共同火力發電會社董事，箱根登山鐵道、日本電解製鐵所、關西電力各會社社長，關西土地、日本拓業各會社理事，以及電氣協會會長等職。在政治系統上，以前較接近民政黨。

寺內壽一 (Terachi, Juchi)

陸軍大將，一八八〇年生，山口縣人。

氏為已故陸軍元帥寺內正毅之長子，士官學校第十期步兵科及陸軍大學畢業。歷任駐奧武官、駐德武官、參謀本部

部員兼陸大兵學教官、近衛師團參謀長、獨立守備隊司令官、廣島第五師團長、大阪第四師團長等職，至一九三四年升陸軍上將，出任台灣軍司令官。二・二六事變後，廣田內閣成立，出任陸相。初入閣時，提出四項要求：①國體明徵之徹底，②國防之迅速充實，③自主積極外交之樹立，④國民生活之安定，並積極推行「肅軍」以安國內人心。首將參加事變之下級官佐十八人免職查辦；次將民間不穩分子大加檢舉，多至一百五十餘人；是年七月五日復將事變要犯十七名判決死刑，於是日本社會，遂譽之為「明朗將軍」。然氏之措施，不僅此數端而已。五月十八日宣布：「此後擔任陸軍大臣者，限於現役陸軍上將及中將，擔任陸軍次官者，限於陸軍中將或少將」，「對於政治上之意見，須經由陸軍大臣方得代表軍部。」自此以後，其已退出預備役者均無法重掌軍權，而一切急進派之越軌言論，亦不能再生效力，後隨廣田辭職。一九三七年中日事變發生後，充任華北軍總指揮，翌年轉任軍事參議院參議官，以迄於今。

寺西秀助 (Teranishi, Hidesuke)

前段祺瑞顧問，一八七〇年生，岡山縣人。

士官學校第一期畢業，滿季即借阪西利八郎等來華任保定軍校教官，後任段祺瑞之軍事顧問，在華達四十餘年之久，北洋軍人多與之交往。現任住友財閥顧問，並在北平開辦恢弘塾。

寺岡洪平 (Terazaka, Kohei)

上海工部局總務次長，一九一一年生，東京府人。一九三四年東京帝大法科政治學系畢業，經外交官領事官試驗及第，即入外務省，歷任駐英（一九三四年十月）駐義（一九三五年）駐德（一九三七年）各大使館三等祕書、外務省歐美局科員（一九三八年），至一九四〇年八月任上海領事，一九四一年二月繼指宿秀彦後任現職。

寺崎太郎 (Terasaki, Taro)

外務省美洲局局長，一八九七年生，東京府人。一九二二年東京帝國大學法科法學系畢業，經外交部領事官考試及格，即由外務省派赴法國留學。歸後歷任駐美駐法駐英駐比駐義等大使館祕書，至一九三八年任駐羅馬尼亞代理公使，一九四〇年春派任外務省通商局審議會首席幹事，是年八月任美洲局局長，以迄於今。富於鬥志，為該省革新派中之有數人物。

寺崎英成 (Terasaki, Hidenari)

駐美大使館祕書，一九〇〇年生，東京府人。

外務省美洲局長寺崎太郎之弟，一九二四年東京帝大法科畢業，即入外務省。歷任上海總領事館副領事領事，駐美大使館三等祕書及駐華使館二等祕書，一九四一年一月，由滬調升現職。妻為美籍，以性情豪放著稱。

寺崎英雄 (Terasaki, Hideo)

蒙疆銀行副總裁，一八八八年生，佐賀縣人。一九一五年東京帝國大學法科政治學系畢業，即入大藏省，由主稅局稅務官累升至札幌稅務署監督局總務部長。辭職後任滿洲監察院審計部長，一九三八年秋，以金井章次之選，任現職。

寺田丹一郎 (Yoshida, Tanichiro)

前馬尼拉總領事，一八九二年生，栃木縣人。一九一五年慶應大學理財科畢業，一九一九年及第外交官領考試。歷任詩家谷檀香山副領事及領事、駐荷蘭公使館祕書、國聯出席代表隨員、對德賠款會議日本代表、香港廣東兩處代理總領事，一九二九年調任歐美局第二科長。一九三六年廣田內閣時，因積極推進南進政策，新設南洋科，置科長一人，科員六人，以調整南洋委任統治地與英美法荷西葡之南洋各屬島之政治關係，及保護此等地方之日僑企業，以氏熟諳南洋情形，調為第一任南洋科長。一九三八年秋轉馬尼拉總領事，一九四一年他調。

寺田政治 (Yoshida, masaji)

三菱銀行參事，一八九一年生，兵庫縣人。一九一四年東京高等商業學校畢業，即入三菱銀行。歷任總行營業部存款股匯兌股會計科行員及大阪分行副經理，一九二九年調任三菱銀行上海分行長，翌年被選為上海日本

商工會議所副會長。一九三六年以後，會繼米里紋吉，而任會長，現任三菱銀行參事。好打高而夫球，能圍棋，著有上海之金融及匯兌一書。

和田益川 (Yoshida, Masuzo)

大日本生產黨領袖，一九〇五年生，長崎縣人。

開西大學中途退學，即投拜頭山滿及內田良平等門下。

一九二三年，內田創立黑龍會關西支部於大阪，邀為支部長。氏一面努力天皇主義運動，一面更辦經濟新聞，從事鼓吹。九·一八事變後，追從內田組織大日本生產黨，使成爲革新運動之中心勢力，由氏任總務委員長，及內田逝世，繼承主持該黨，於黑龍會，則仍非常活躍。一九三六年末，以建川美次、小林順一郎等爲中心而結成之日本主義運動統一戰線，揭「政治組織之皇道化、國防之絕對安全及國民生活之安定」等口號，以撲滅既成政黨，爲鬥爭方針，氏亦其中最有力量之一。

吉田 茂 (Yoshida, Shigeru)

前駐英大使，一八七九年生，高知縣人。

一九〇六年東京帝大法科政治學系畢業，及第外交官領事官考試後，由奉天副領事，歷任倫敦、安東、濟南等領事、駐英、美、義大利大使館秘書、外務省政務局長，於一九二四年升任天津總領事，不久復調奉天總領事及駐瑞典兼挪威、丹麥、芬蘭特命全權公使。一九二八年擢升外務次官

，一九三〇年調駐義大利大使，一九三四年以事復由本國出遊歐美。一九三六年廣田弘毅組閣時，以氏爲組閣本部之參謀長，曾有出任外務大臣之說，後派任駐英大使，一九三八年七月辭職。氏爲重臣牧野伸顯之婿，日本退出國聯時，與小幡魯吉諸人，聯絡牧野圖加阻止。平生居心坦白，好直言徑行，故謗輒隨之。

和田 茂 (Yoshida, Shigeru)

貴族院議員，一八八五年生，大分縣人。

與前駐英大使吉田茂同名，一九一一年東京帝大德文法科畢業，經文官考試及第，即入內務省，歷任石川縣警視三重縣理事官、明治神宮營造局書記官、復興局書記官及東京市助役，於一九二七年任內務省神社局長，一九二九年轉社會局長，一九三四年一躍而任岡田內閣之書記官長，明年調內閣調查局長，在任時領導少壯官僚建樹甚多。第一次近衛內閣時，勅選爲貴族院議員，以迄於今。其間曾任厚生大臣，爲甲州財閥廣瀨爲久之妻舅，風貌頗似商夥，然滿腹計劃，領袖大分系官僚，時謀活動，實日本政界中之奇人。

吉田豐彥 (Yoshida, Toyohiko)

陸軍大將，一八七五年生，鹿兒島縣人。

士官學校第六期砲兵科及陸軍大學畢業，會派赴德國研究重兵器。歷任陸軍省副官、兵器局軍務局科員科長、駐英德美各大使館武官、重砲兵射擊學校校長、造兵廠監督官、

及陸軍技術本部長，至一九三〇年八月升大將，同時編入預備役，翌年任關東軍特務部顧問。濬後入滿任滿洲電業及滿洲鑛業會社社長。一九四〇年秋，日本機械化國防協會，以氏係日本最先研究重兵器之運用者，舉爲該會會長。

和田 憲 (Yoshida, Shin)

陸軍中將，一八八七年生，東京府人。

士官學校第二十期騎兵科及陸軍大學（一九一七年）畢業，歷任騎兵聯隊附、參謀本部部員、賀陽宮恆憲王武官、騎兵聯隊長、陸軍省馬政科長、馬政局資源科長，至一九三七年七月，升馬政局次長。一九三九年三月以師團長派赴前方，同時晉級中將，是年十月復升教育總監本部騎兵監，一九四一年四月，任陸機甲本部長。

和田善助 (Yoshida, Nengo)

海軍大將，一八八六年生，佐賀縣人。

氏原爲佐賀縣士族峯與八之弟四子，後入繼爲吉田祐次郎之養子，故改今姓。一九〇四年海軍兵學校畢業，由少尉於一九四〇年累進至海軍上將。其間歷任第三艦隊參謀、水電學校教官、第一水電戰隊參謀、練習艦隊參謀、海軍省教育局第二科長、平戶艦長、舞鶴要港部參謀長、海軍省軍務局第一科長、金剛及陸奧各艦艦長、海軍軍令部參謀、聯合艦隊兼第一艦隊參謀長等職，至一九三四年九月由海軍軍令部附兼海軍省特派員，轉任海軍省軍務局長。一九三六年

三月永野修身任海相後，訓練習艦隊司令官。一九三八年三月，升任聯合艦隊司令官。阿部內閣時任海軍大臣，一九四〇年第二次近衛內閣成立後，調任軍事參議官。

和田弘之 (Yoshino, Hiroyuki)

陸軍大佐，一八九九年生，兵庫縣人。

士官學校三十一期步兵科及陸軍大學一九三〇年畢業，曾任參謀本部中國班班員班長、關東軍參謀、駐南樺武官、北平武官、維新政府軍事顧問、及興亞院調查官等職，至一九四〇年三月，會繼監澤清宣，任該院政務部第二科科長。

和田信次 (Yoshino, Shinji)

前商工大臣，一八八八年生，宮城縣人。

氏爲故東京帝大教授民本主義論倡導者吉野作造之弟，一九一三年畢業東京帝大法科德文法學系，卽入農商務省，不久派赴美國。歸後歷任兵庫縣理事官、臨時產業局事務官、農商務大臣祕書、農商務省及商工省祕書、大臣官房文書科長及統計局局長，一九二四年派赴歐美考察，一九二八年任工務局長，一九三一年升任商工次官，一九三六年廣田內閣時，出爲東北興業會社總裁，近衛內閣成立，遂爲商工大臣，一九三八年五月辭職。同年十二月應鯉川義介、松岡洋右及伊藤文吉男（日本鑛業會社社長，吉野進農商省時，伊藤時任科長，受其薰陶，故兩人交誼頗深）之敦聘，就任滿洲重工業會社副總裁。該社爲日本之國策會社，經營業務

，除煤、鐵造、船、飛機外、並括製油、火柴、肥皂、硫酸、橡膠、水產、火災保險等十九種，實收資本達七億餘圓。氏以曾任商相之大員，就任此職，該社地位之重要，於此可見一斑。氏為新官僚中之中心人物，好瀏覽外國經濟書籍，對於德國之統制經濟政策，尤有特別之研究，近年各種產業計劃，大都由彼一手擘劃。任商工次官達六年之久，因之有「吉野系」之稱。岸信介、竹內可吉、井野碩哉等，皆其一系之健將。

吉澤清次郎 (Yoshizawa, Seijiro)

駐加拿大公使，一八九三年生，長野縣人。

前鐘淵紡織社長關西實業界領袖武藤山治之婿，一九一七年東京帝國大學經濟學系畢業，即及第外交官領事官考試。曾任舊金山及倫敦陸補領事、駐英大使館三等祕書、關東廳事務官、濟南領事、台灣總督府事務官、駐德大使館二等祕書、駐滿大使館一等祕書、紐約總領事兼駐美大使館二等祕書，不久復升任參事，在美前後達十三年之久。一九三七年繼岡本季正後，歸任美洲局長，一九四〇年九月升駐加拿大公使，以迄於今。

阿田 駿 (Tada, Hayao)

陸軍大將，一八八三年生，宮城縣人。

士官學校第十五期炮兵科及陸軍大學畢業。少時即與土肥原等，同受先聲「中國通」坂西利八郎之薰陶，滯變前除

任兵務局科長及野戰重砲兵第四旅團長外，其餘大都在中國活動。滿洲政府成立後，任第一任之軍政部最高顧問；一九三五年繼梅津美治郎後，任天津駐屯軍司令官。來津後，於九月二十四日發表一小冊子，題曰「日本對華之基礎觀念」，主張：◎徹底消滅華北之反滿抗日分子，◎華北之經濟獨立，◎華北五省之共同防共，即世所謂「多田聲明」是也。一九三六年五月，調任第十一師團長。一九三七年八月繼今井清後，任參謀本部次長，一九三九年任駐華北軍總指揮，至一九四一年七月事變四週年時，晉級大將，調回任軍事參議院參議官。

多田禮吉 (Tada, Reikichi)

工學博士，陸軍中將，一八八四年生，靜岡縣人。

原姓鈴木，以入嗣多田家，故改今姓。士官學校第十五期砲兵科、陸軍砲工學校及野戰重砲兵學校畢業後，又畢業東京帝國大學理學部實驗物理學科，以發明觀察器，於一九二六年，得工學博士學位。歷任陸軍技術本部部員及陸軍科學研究所第一部部長，一九三四年轉任陸軍兵器局局長，一九三六年晉級中將，並升任陸軍科學研究所所長，一九三九年三月就技術本部長，好運動，信佛教。

阿田 一郎 (Narita Ichiro)

前石川縣知事，一八九四年生，宮城縣人。

由京都府立第三中學畢業橫島高等師範，以立志欲在政

界活動，復入京都帝大法科，一九二〇年畢業，即入內務省。一九二二年任琦玉縣郡長，一九二三年任警視廳警視，一九二五年任本鄉富士署署長，一九二六年任內務省社會局勞務科科員，一九二九年隨湯淺三千男出席國際勞動會議，即派在歐洲留學，歸後任內務省官房庶務科科長，追潮惠之輔出膺內相，任隨從秘書兼人事科科長，河原田稼吉膺內相時，升勞動局長，一九三九年四月出任石川縣知事，現已他

早川三郎 (Hayakawa, Saburo)

前新民會指導部次長，一八八九年生，神奈川縣人。

一九一五年東京帝大法科德文法學系畢業。在學時，已獲售高等文官考試。歷任官崎縣警視、郡長、及理事官，崎玉縣理事官、香川、岡山、廣島各縣書記官及警察部長，內務省事務官，警保局警務科長，奈良縣內務部長，佐賀三重鹿兒島各縣知事。至一九三七年一月，繼石田馨後升任警視總監，在任僅三十四日，以內閣更迭，自請辭職。一九三八年春由湯澤三千男選任華北新民會指導部副部長。不久辭職他就。

有田八郎 (Arita, Hachiro)

前外務大臣，一八八五年生，新潟縣人。

氏原為山本桂之第六子，故政友會現狀改革派要角山本

悌二郎之弟，後入繼有田家，因改姓。一九〇九年東京帝國大學法科德文法學系畢業，即及第外交官領事官考試，歷任我國、加拿大、美國、泰國等領事、總領事、大公使館一等秘書等職，至一九二七年由駐德大使館參事官調任外務省亞細亞局長，一九三〇年任奧地利兼匈牙利全權公使，同年又升外務次官。一九三三年出任駐比利時兼盧森堡大使，一九三六年一月調為駐華大使，蒞位不久，搗為廣田內閣之外務大臣。氏就任後，宣布積極自主外交方針，翌年二月隨廣田內閣辭職。同年七月，勅選為貴族院議員。宇垣一成任外相時，與佐藤尚武二人，同選任為外務省顧問，十一月初復任外務大臣，嗣經平沼、阿部、米內、三內閣，至一九四一年七月始辭職，任事之久，在近十餘年來歷屆外相中，首屈一指。氏在外務省中，與前駐韓大使堀田昭，同為出淵勝次郎部下健將。處事細心，兼具政治手腕，號稱覆關中國通之一，妻為同鄉富豪佐藤嘉十郎之女。

有末精三 (Arizae Seizo)

陸軍航空兵大佐，一八九八年生，北海道入。

士官學校第廿九期步兵科及陸軍大學畢業，曾任參謀本部部員、陸軍大學兵學教官、陸軍大臣隨從秘書（荒木貞夫及林銑十郎時代），至一九三六年一月以陸軍航空大佐調任駐義大利使館武官，在任時促成訂立日德義防共協定，一九三九年六月回國任陸軍省軍務科長，受有義大利空軍勳

章。

有地十五郎 (Arichi, Jugoro)

海軍中將，一八八四年生，東京府人。

故海軍中將男爵有地品之子，海軍兵學校及海軍大學校畢業。歷任軍令部參謀，榛名及霧島艦艦長，第十二驅逐隊司令官。一八八戰役時，任第一水雷戰隊司令官，旋調第二艦隊參謀長及水雷學校校長，一九三六年晉級中將，升任第三戰隊司令官，一九三七年十二月調充鎮海要塞司令官，著威廉式勳，信日連教，曾派駐歐美考察。

有馬長太郎 (Arima, Chotaro)

正金銀行理事，一八八五年生，鹿兒島縣人。

一九〇七年東京高等商業學校畢業，即入正金銀行（即橫濱正金銀行），由新加坡分行經理及香港分行經理，於一九二七年升任總行東洋科長，一九三〇年轉任免科長。時值世界通貨，陷入混亂時代，氏發揮手腕，銳意整頓，頗為時人稱頌。後由橫濱總行副經理於一九三六年升任經理。一九三八年二月舉為理事，以迄於今。氏與該行總裁大久保利賢同鄉，兩人均為日本金融界中研究國際匯兌之有數人物。

有馬寬 (Arima, Hiroshi)

海軍中將，一八八五年生，和歌山縣人。

有馬良橋海軍大將之督塔，一九〇五年海軍兵學校畢業。曾任駐俄使館武官、皇族武官、春日艦副艦長、木曾古鷹

等艦長、海軍大學校教務長及佐世保海軍艦船部部長等職，至一九三四年晉級中將，編入預備役，現任東京「鐵絲會社」常務監察人，平素好讀書，信神道，且為軍需工業募集發戶之一。

有馬賴寧 (Arima, Yoriyasu)

大政翼贊會顧問，一八八五年生，福岡縣人。

世為福岡縣久留米藩主，父有馬賴寬，嘗供職典禮寮及農商務省。氏於一九一〇年畢業東京帝大農科後，即任母校助教，並兼農商務省諮議。一九二四年清浦（奎吾）內閣成立，氏以打破特權階級及貴族院改革為號召，歸返故鄉，當選為衆議院議員，一九二七年製授伯爵，一九二九年八月勅選為貴族院議員。前隸政友會，曾被舉為農林省政務次官兼任南美拓殖、武藏中央電氣各會社理事。後任產業組合、中央金庫理事長等職，並於餘暇從事水不運動，自兼同愛會會長——所謂水不運動者，為日本「穢多」「非人」等特殊部落，要求解放而與普通人民享受平等待遇之運動——此外又設立農村問題調查所，研究佃農問題，創辦信愛中學，盡力教育事業，故被稱為華胄界中之新人。林銑十郎組閣時，選任文相未就。與木戶幸一、岡部長景、佐佐木行忠等，同為近衛文磨在貴族院之好友。在一九三七年二月間，屢邀後藤文夫、前田米藏、中島知久平、永井柳太郎、山崎達三輔輩，於茨窪私宅籌議創立新黨，實行一黨專政之制，其理想

之黨首，即爲近衛。迨第一次近衛內閣成立後，即出任農相，開一年，隨近衛辭職。一九四〇年大政翼贊會成立時，任事務所總長，翌年三月，改任顧問。

牟田口廉也 (Mutaguchi, Kadoya)

陸軍中將，一八八八年生，佐賀縣人。

士官學校第二十二期步兵科及陸軍大學畢業。歷任士官學校小隊長、第一師團司令部及參謀本部部員，至一九三四年八月升任參謀本部科長。一九三〇年前，即加入少壯軍人所組織之櫻會及讀書會等團體，研究國體明徵問題，深爲眞崎甚三郎所器重。二二六事變後，調任天津駐屯軍聯隊長，爲七七事變之直接當事人，一九三九年任士官豫科學校校長，未幾，晉級中將，一九四一年他調。

田武三郎 (Hyakutake, Saburo)

海軍大將，一八七三年生，佐賀縣人。

海軍兵學校(一八九二年)及海軍大學第一名畢業。甲午戰爭時，供職旗艦松島，參加黃海威海衛之戰，松島之炮塔，受清軍轟擊，全部被毀，士卒大半傷亡，獨氏倖免。日俄戰爭時，任日進鱗水雷長及第三艦隊參謀，以功授四級金鵄勳章。戰後留學德國三年，旋任駐奧公使館輔佐武官，一九一〇年歸國。嗣後任朝日副艦長、海軍省軍務局科員、伊勢及榛名艦長、第二艦隊參謀長、佐世保鎮守參謀長、教育本部第二部長、鎮海舞鶴兩要塞司令官、佐世保鎮守府司令

官，至一九二六年升軍事參議官，一九二八年晉級大將，編入預備役。二二六事變時，前侍從長鈴木實太郎受亂軍鎗傷，薦野村吉三郎自代，野村不就，乃攝氏爲侍從長。處事謹慎，雖好弈棋，其兄弟源吾晴吉等，亦均居軍界顯職。

田武源吾 (Hyakutake, Gengo)

海軍大將，一八八二年生，佐賀縣人。

百武三郎之弟，海軍兵學校畢業，一九〇三年以少尉任官，至一九三七年累進至大將。其間又畢業海軍大學，派駐美國考察，歷任海軍大學校教官、軍令部特派員、陸軍大學校兵學教官、多摩春日各艦艦長、海軍省教育局第一科科長、海軍大學教務長、海軍軍令部參謀、艦政本部技術會議議員、第五戰隊司令官、軍令部次長、海軍大學校校長、練習艦隊司令官、舞鶴要港部司令官、第四及第三艦隊司令長官、佐世保鎮守府司令長官及艦政本部長等職，至一九三六年任橫須賀鎮守府司令長官兼將官會議議員，一九三八年四月調任軍事參議官。當一九二五年在日內瓦舉行關於武器藥彈交易及管理之國際會議時，曾派充出席該會議代表之隨員，此外又曾任國際聯盟陸海空軍問題常設諮詢委員會之日本海軍代表。

田武晴吉 (Hyakutake, Seikichi)

陸軍中將，一八九〇年生，佐賀縣人。

海軍大將百武三郎及百武源吾之弟，士官學校第二十一

期步兵科及陸軍大學（一九二二年）畢業。歷任步兵第五十七聯隊附、參謀本部中國班班員、關東軍參謀、參謀本部科長兼陸大教官等職，至一九三六年担任廣島陸軍幼年學校校長，翌年調陸軍通信學校校長，一九四〇年晉級中將，並升師團長，一九四一年四月回陸軍省任通信兵監。

竹下義晴 (Takeshita, Yoshinaru)

陸軍中將，一八九二年生，廣島縣人。

士官學校第二十三期步兵科及陸軍大學畢業，在參謀本部地誌班，服務甚久。一九二六年後，迭任上海、南京、濟南、哈爾濱、長春等地武官。九·一八事變發生時，以參謀充任關東軍司令部第二科長，擔任調查工作。一九三二年八月調哈爾濱特務機關長，後轉山海關特務機關長，一九三六年四月回關東軍司令部任第三科長，並兼日滿共同經濟委員會委員。一九三七年八月轉第六師團之鹿定島聯隊長，轉戰各地，翌年七月晉級少將，八月繼楠本實隆後，任上海特務機關長，一九四〇年繼酒井隆中將後，任與亞院蒙疆連絡部次長，一九四一年晉級中將，仍任原職。

竹內可吉 (Takeuchi, Kakichi)

前企畫院總裁，一八八九年生，鹿兒島縣人。

一九一五年東京帝國大學經濟學系畢業，經高等文官考試及第，即入農商務省。歷任該省事務官、書記官、參事官、食糧局調查科長、農務局農務科長及工務局工政科長。其

後商工省出農商務省，分隸獨立，升任工務局長及特許局長。一九三六年升任工商次官，不久，關東軍聘為經濟顧問，一九三七年八月任燃料局長官，十二月調任臨時物資調整局次長。其間曾任日內瓦國際勞工會議政府代表隨員及義大利萬國農事協會第六屆大會日本代表。氏自負甚高，與村爾直養等，同為吉野系之健將。一九四〇年米內閣時，任企劃院總裁，迨近衛第二次內閣成立去職。

竹內賀久治 (Takeuchi, Kakuji)

日本發電會社監事，一八七七年生，岡山縣人。

早歲會授考士官學校未取，改入法政大學，畢業後即業律師。後當選為母校理事，一九三八年春提出特許法之論文，得法學博士學位。氏以同鄉關係，久師事前首相平沼麒一郎，平沼組織國本社，社中雜務，多由氏以總幹事名義，為之處理，故平沼內閣出現時，會傳將出任內閣書記官長。一九三九年夏間，日本發電會社成立，任該社常任監事。

竹中政一 (Takeraka, Masachi)

滿洲重工業開發會社理事，一八七六年生，兵庫縣人。

庫縣人。

神戶高等商業學校畢業後，即入南滿鐵道會社，一九〇九年派赴歐美考察礦山鐵路工廠，一九一二年回國。嗣後歷任該會社總裁室文書科科長、奉天分局局長、北平分所所長、總公司經濟部長等職。曾任前北京政府交通部顧問，一九

三七年以來，供任現職，足跡遍及我國各地云。

竹內新平 (Takeuchi, Shinpei)

大藏省理財局長，一八九四年生，靜岡縣人。

一九二一年東京帝大法科德文法學系畢業，經文官考試及第，即入大藏省。由長野縣高崎市稅務署長及大阪府稅務監督局經理部長，於一九三五年派赴英法等國留學，歸後歷任大藏省主稅局特別調查科長等職，至一九三九年三月任與亞陸華北連絡部經濟局長，是年十二月改任現職至今。

竹尾 式 (Takeo, Hajime)

評論家，一八九六年生，千葉縣人。

一九一八年東京外國語學校俄文科畢業，即被派為西伯利亞遠征軍翻譯，後留學蘇聯，一九二四年歸國任報知及東京每日新聞記者。一九三一年至三四年辦日俄通報社，自任主幹。年來潛心研究俄國問題，著有極東利權研究、新五年計劃、蘇聯讀本、蘇聯與日本、蘇聯社會史等書。

米內山庸夫 (Yonaiyama, Tsuneo)

外務省文化事業部中國系主任

一九〇九年同文書院畢業，即派往川滇諸省調查，後經外交官領事官考試及格，入外務省。歷任廣東副領事、杭州濟南海拉爾等領事及廣東哈爾濱等總領事，一九三五年調回外務省任現職。著有雲南四川踏查記、中日之將來及其他論文甚多。一九三九年冬在報章上發表不滿依照近衛宣言解決

中日事變之論文，致受軍部及議會譴責。

米內光政 (Yonai, Mitsumasa)

前內閣總理，海軍大將，一八八一年生，岩手縣人。

海軍兵學校及海軍大學校畢業，即任職少尉，參加日俄戰役。其後歷任春日營手扶柔陸奧等艦艦長、第二艦隊參謀長、鎮海要塞司令官、海軍軍令部辦事、駐俄大使館武官、俄國班長、第一第二遣外艦隊司令官、第二艦隊司令長官、橫須賀鎮守府司令長官等職，至一九三六年十一月升任聯合艦隊司令長官，翌年四月晉級大將。氏遇下甚厚，深為青年將校所信服。曾駐英三年、美五年，歐戰時駐彼得堡研究俄國軍事。其對我國於任遣外艦隊司令官時，五次自吳淞上溯三峽（某次在蕪縣附近，觸礁險江，賴英艦救起，得慶更生）。一九三七年林銑十郎組閣時，本擬末次任海相，以海軍幹部調才次係最適合於非常時之實戰將材，不當置於中央部之軍政方面，乃推氏繼任。嗣近衛第一次內閣及平沼內閣時，仍舊蟬聯，一九四〇年一月繼阿部信行後組閣，是年七月辭職，賜內閣總理大臣禮遇，平居好研究易理。

羽生雅則 (Hata, Masarori)

前內務次官，一八八九年生，東京府人。

一九一六年東京帝大法科英文法學系畢業，在學時已及最高等文官考試，歷任台灣總督府事務官、復興局事務官、

東京學部次長、北海道廳拓務部長、愛知縣內務部長，至一九三五年安井英二任氏為大阪府經濟部長，以熟悉經濟情形而又為安井所親信，當時有經濟關官之稱，一九三六年升福井縣知事，末次內相時，以安井之介，擢為內務次官，一九三八年六月辭職。

田田實川 (Tanda, Kanzo)

陸軍少將，一八九三年生，長野縣人。

士官學校第二十五期步兵科及陸軍大學畢業。一九二六年以後，歷任參謀本部中國班班員、北平南京武官、關東軍參謀、參謀本部地誌班班長、廣東武官等職，至一九三六年春，仍回參謀本部，是年八月轉步兵學校主事兼教官，一九三七年八月，以航空兵大佐，任下志津飛行學校教官。一九四〇年晉級少將，並升朝鮮軍參謀長。

西 春彦 (Nishi, Haruhiko)

外務省次官，一八九三年生，鹿兒島人。

一九一八年東京帝大法科德文法學畢業，經外交官考試及格，即入外務省，派任駐香港隨習領事。藤越飛談判日蘇復交時，任隨員職，後以三等祕書名義赴蘇，不久調回該省，任歐亞局第一科長及歐美局第一科長，於一九三四年升青島總領事，一九三五年秋派為駐蘇大使館參事，一九三九年八月升為外務省歐亞局長，在任時與次官谷正之、條約局長三谷隆信、美洲局長吉澤次郎等，主張慎重加入軸心同盟

。氏為日本外交界中著名之蘇聯通，尤其對於日蘇漁業條約，具有特別之研究，故一九四〇年十月建川美次使蘇後，特調為無任所公使，常川留駐莫斯科，助理建川以當折衝之任。一九四一年樺天羽英二後，就任現職。

西山 勉 (Nishiyama, Tsutomu)

駐美財務官，一八八六年生，高知縣人。

一九〇七年東京高等商業學校畢業，即入橫濱正金銀行。歷任香港正金分行副經理及經理、總行歐美科副科長、匯兌科科長，至一九三八年後任大連、神戶、紐約等分行行長，一九三六年九月升任大阪分行行長，兼正金銀行董事。一九三九年四月，以氏在美甚久，通曉該國經濟情形，調任現職。氏在學校時代，即以頭腦優秀馳名，處事積極，富進取心，實為日本金融界中有數人物。

西本 喬 (Nishimoto, Takashi)

大日本青年黨書記長

東京帝國大學法科畢業，原為該校新人會中堅份子，曾入社會問題調查所，助理山本宣治從事左翼運動，後因思想銳變，投入橋本欣五郎門下，前時橋本所發表之宣傳品，大都出彼手筆。現任大日本青年黨書記長，兼該黨別動隊之日本革新青年隊隊長，在東京市江東工業區方面之青年層中，頗佔勢力。

西尾壽造 (Nishio, Juzo)

陸軍大將，一八八二年生，鳥取縣人。

士官學校第十四期及陸軍大學軍刀組畢業。二十三歲任步兵少尉。歷任陸軍大學兵學教官、田中義一陸相秘書、步兵第四十聯隊長、教育總監本部第一科長、步兵第二十九旅團長、陸軍兵器本廠副廠長、陸軍省軍事調查部長及參謀本部第四部長，至一九三三年升陸軍中將，一九三四年任關東軍參謀長，輔佐南次郎，掌理用兵作戰事務。一九三六年三月轉任參謀本部次長，一九三七年三月調近衛師團長，一九三八年四月，任陸軍教育總監，一九三九年四月晉級大將，是年秋，日本改革駐華軍制，擢任第一任之中國派遣軍總司令，一九四一年三月調歸任軍事參議院參議官。

西岡竹次郎 (Nishioka, Takejiro)

衆議院議員，一八九一年生，長崎縣人。

一九一六年早稻田大學法律科畢業，一九二一年留學倫敦大學，後以研究議會政治與社會政策，復游歷德、法、義、美諸國，一九二四年歸國，担任都新聞記者、青年雄辯雜誌社社長及長崎民友新聞主筆，一九二五年創辦我等晚報，自任社長，以迄於今。當選爲衆議院議員已達七次，前在政友會中，雖屬後進，然與生田和平、肥田塚司等二十餘人，自成一「革新派」，主張改造政友會，以收拾已失之人心，世亦稱爲「鐵道旅館組」，以彼等多寄寓該處故也，性好觀劇讀書。

西原一策 (Nishihara, Issaku)

陸軍少將，一八九三年生，廣島縣人。

士官學校第二十四期騎兵科及陸軍大學軍刀組畢業，後又在東京帝國大學修習政法三年。初任駐法大使館武官及陸軍省軍務局高教科員，於一九三二年隨松井石根出席日內瓦軍縮會議，即留居歐洲，一九三三年担任軍縮會議之日本陸軍委員長。一九三七年八·一三戰役時，任松井之副幕僚長，翌年晉級少將，調歸任陸軍大學幹事，一九四〇年夏，日軍封鎖瀋陽國境，委爲瀋陽鐵路運華貨物檢查長，十二月調充騎兵學校校長，以迄於今。氏爲松井石根氏之心腹，與藤江惠輔、土橋勇逸，同稱爲陸軍中之法國通。

辻邦助 (Tsuji, Kunisuke)

陸軍中將，一八八四年生，和歌山縣人。

士官學校第十七期步兵科及陸軍大學畢業，後轉入航空兵科，曾任陸軍省人事局科員、陸軍兵器本廠附、參謀本廠附、第十三師團參謀、航空本部附、陸軍飛行學校教官、飛行第五聯隊長、所澤飛行學校幹事等職，至一九三六年八月，任陸軍航空技術學校校長，一九三八年晉級中將，編入預備役，現任中華航空會社副社長。

那須 皓 (Nasu, Shiroshi)

農學博士，一八八九年生，東京府人。

一九一一年東京帝大農業經濟系畢業，曾在大學院研究

，一九一八年任母校助教，一九二〇年派赴歐洲留學，同時以日本委員資格，參加羅馬萬國農業協會總會。翌年又以日本勞工代表顧問資格，參加第三屆國際勞動會議，一九二二年底回國，次年春任母校教授，得農學博士學位。一九二七年以來，屢次參加太平洋會議，一九二九年曾被選列席美國詩家谷大學舉行之人口問題會議，一九三四年參加日本在長

春舉行之農業移民會議。九·一八事變後，首先獻議謂日本農村之破產，已無法救濟，且亦不必救濟，應大規模移民滿蒙，以爲百年永久之計。故一切移民計劃，多由氏參加制定。一九三八年三月委爲新民學院農學部長，著有農村問題與社會理想、經濟政策原理、公正之佃租、中小農保護政策、人口食糧問題、農村社會問題、日本農業論等書。

住山德太郎 (Sumiyama, Tokutaro)

海軍中將，一八八七年生，東京府人。

一九〇六年海軍兵學校畢業，後又畢業海軍大學校，歷任待從武官、榛名艦長、吳鎮守府參謀長、第八戰隊司令官、海軍省教育局長等職，至一九三六年晉級中將，明年十二月任海軍兵學校校長，一九三九年十月繼山本五十六後，任海軍次長，一九四〇年十月任佐世保鎮守府司令長官，以迄於今。

佐久間信 (Sakuma, Shin)

無任所公使，一八九三年生，千葉縣人。

一九一七年東京帝國大學法科德文法學系畢業，即入外務省，歷任安東、火奴魯魯等地領事，駐瑞士及德國使館三等秘書、外務省歐美局及條約局科員、條約局第一科科长，駐比及駐德使館二等秘書、外務省大臣官房電報科長、駐德使館參事等職，至一九三六年十二月升任駐拉脫維亞公使，一九四一年二月以無任所公使名義調駐德國，輔佐大島大使。

佐方繁木 (Sakata, Shigeki)

陸軍大佐，一八九五年生，熊本縣人。

士官學校第三十期騎兵科及陸軍大學畢業。歷任參謀部中國班班員、關東軍及天津軍司令部附等職，曾至新疆蒙古

等地，專門研究中蘇關係。一九三六年變十二事變時，獨身赴陝，對軍部作詳細之報告。一九三七年七·七事變前後，曾任駐華使館副武官。

佐佐木行忠 (Sasaki, Yukitada)

貴族院副議長，一八九四年生，東京府人。

先世高知藩士，明治維新時，以勤王有功封侯爵（即薩長、土、肥四閩中之土閩）。由學習院，於一九一七年畢業京都帝國大學法科（兩校均與近衛同班），後復肄業東京帝大文科，專事蒐集貴族院之史料，主張改革貴族院，曾為火曜會理事，與細川謹立、松平康正，同為近衛之親信。一九三七年七月任現職至今。

佐佐木到一 (Sasaki, Toichi)

陸軍中將，一八八七年生，廣島縣人。

士官學校第十八期步兵科及陸軍大學畢業。歷任參謀本部中國班班員、廣東駐在武官及南京駐在武官等。一、二八時，任白川義則之參謀，後繼多田駿轉任關東軍司令部附，兼滿洲軍政部最高顧問。氏夙與土肥原同隸阪西利八郎麾下，清季少尉時代，坂西供職北洋新軍，派氏加入國民黨，達三十年之久。濟南事件時，猶在我國軍隊任事。據稱對於國民黨及我國政治經濟情形之熟悉，在日本陸軍中，罕有及之

者。與重藤千秋最稱莫逆，一九三七年八月升任旅團長，一九三八年三月晉級中將，不久編入預備役。

佐佐木謙一郎 (Sasaki, Kenichiro)

南滿鐵道會社副總裁，一八九二年生，東京府人。前第一銀行總經理佐佐木勇之助之長子，一九一五年東京帝國大學法科畢業，經高等文官考試及格，入大藏省，由文書科長會計科長等職，升至專賣局長官。松岡洋右初任滿鐵總裁時，時滿鐵股票大為跌價，松岡無法，乃邀氏為理事，使專當金融關係之職。氏就任以後，擴張公司債發行限度，確立政府現金繳付制度，以及規定大藏省存款部資金之對滿投資額，不數年間，滿鐵發行之公司債，增至五億日圓，占全國公司債總發行額四分之一以上，近年升該會社副總裁，性情沈默，不修邊幅，世人多畏懼之云。

佐佐弘雄 (Sasaga Hiroo)

評論家，一八九七年生，熊本縣人。

佐佐友房（與安達謙藏同在朝鮮辦報惹起閔妃事件）之子，一九二〇年東京帝大法科政治學系畢業。初任東京朝日新聞記者，旋任九州帝大教授，以思想左傾，致與石濱知行風牛八十二等同受排擠辭職，而任九州日報編輯，並為各雜誌撰述論文。因與緒方竹虎同鄉關係，一九三四年復入朝日新聞擔任論說委員。昭和塾成立後，與平貞藏同任該塾政治理論講。

佐佐眞之助 (Sasaga, Shinnosuke)

陸軍少將，一八九四年生，福岡縣人。

山熊本及中央陸軍幼年學校，畢業士官學校第二十七期步兵科，後又於一九二五年畢業陸軍大學。歷任第五師團參謀、士官學校教官、陸軍省人事局恩賞科員及行賞股股長，至一九三七年七月繼及川源七後升任科長，一九三九年出任聯隊長，一九四〇年晉級少將，一九四一年三月任西部軍參謀長。

佐伯清一 (Saeki, Seichi)

陸軍中將，一八八五年生，山口縣人。

士官學校第十七期步兵科及陸軍大學畢業，曾任步兵學校教導、聯隊大隊長、研究部部員及幹事、第二十師團司令部附、步兵第三十二聯隊長、步兵第二十旅團長等職，至一九三七年三月調任東京灣要塞司令官，八月晉級中將，翌年升任師團長，未幾編入預備役。

佐野光信 (Sano, Mitsunobu)

陸軍中將，一八八二年生，三重縣人。

士官學校第十八期步兵科及陸軍大學畢業，一九一九年派赴歐突研究航空，一九二五年轉航空兵科。曾任參謀本部部員、步兵第三十二聯隊附、陸軍航空學校教官、下志津飛行學校教育部長兼同校研究部員、本部第二科科長、所澤飛行學校教官、濱松飛行學校校長等職，至一九三八年十二月

督級中將。

佐藤市郎 (Sato, Ichiro)

海軍少將，一八八九年生，山口縣人。

一九一一年畢業海軍兵學校，一九一四、五年從軍出征，一九二〇年又畢業海軍大學校。在海軍兵學校畢業時，平均分數達九十八分，為該校創辦成績之最優秀者，因榮受恩賜長劍。其後歷任第二艦隊參謀、駐法大使館武官、第十戰隊參謀兼聯合艦隊參謀、倫敦軍縮會議隨員、奈良艦長、海軍軍令部參謀兼技術委員、國聯海軍會議代表、海軍教育局第一科及局長，至一九三八年十一月晉級中將，升任旅順要塞司令官。通英法語，專門研究重兵器之運用法。

佐藤安之助 (Sato, Yasunosuke)

陸軍少將，一八七二年生，東京府人。

陸軍士官學校第三期畢業，由少尉遞升至少將後退職。甲午戰爭時，中彈失右足。日俄戰爭發生，任駐華公使館副武官，與青木宣純等出入於張北蒙古一帶，刺探帝俄軍情。義和團事起，活動於北京天津等處，後曾轉入南滿鐵道會社，任總裁後藤新平之顧問。精通中國事情，與已故之田中義一最為莫逆，田中兼攝外相時代，大連所開之東方會議及濟南出兵事件，氏獻策甚多。通中英德法四國語言，並能俳句，著有以滿蒙問題為中心之中日問題等書，現兼任大阪每日新聞及東京日日新聞特約撰稿員。

佐藤尚武 (Sato, Naotake)

駐蘇大使，一八八三年生，青森縣人。

氏原為琉球人田中坤六之子，一九〇三年出嗣前駐美大使佐藤愛麿為子，故改今姓。一九〇四年畢業東京高等商業學校，即獲售外交官領事官考試。歷任大公使館三等及二等祕書、哈爾濱領事及總領事、駐法大使館一等祕書及參事、日內瓦事務局長、日內瓦海軍縮會議日本委員、駐比大使、一般軍縮會議日本全權委員、第十二屆第十三屆國聯理事會日本代表、以及駐法大使等要職，至一九三七年三月林銑十郎內閣時，遞任外相。曾在議會力說「日本不可壓迫中國過甚」，迨近衛登臺，辭職。一九三八年八月宇垣一成任外相，及一九四一年十月東條氏組閣，先後遞任外交顧問，嗣繼建川美次後，出膺現職。

佐藤修 (Sato, Osamu)

前駐華海軍武官，一八八六年生，神奈川縣人。

一九〇七年及一九一六年先後畢業海軍兵學校及海軍大學。曾任桃、夕風等艦艦長、海軍軍令部科員、第三艦隊參謀、佐世保鎮守府參謀等職，至一九三二年調任駐華大使館海軍武官，一九三七年四月他調。在華二十餘年，為海軍中著名之中國通。

佐藤賢了 (Sato, Kenryo)

陸軍大佐，一八九六年生，石川縣人。

石川縣金澤市僧侶之子，士官學校第二十九期砲兵科及陸軍大學畢業（一九二五年）。歷任砲兵第一聯隊中隊長、野戰重砲兵第八聯隊大隊長、駐美大使館副武官、陸軍省整備局科員兼陸大兵學教官、軍務局軍務科副科長，至一九三八年七月繼原守初後，調升新聞班長。氏性情剛直，每好議論時政，廣田內閣時，既惹起齋藤隆夫對寺內陸相之詰責（參照齋藤隆夫條），一九三八年二月提出總動員法案時，氏以政府委員資格出席議會說明，亦致惹起波折。一九三九年奉轉任軍務科長，一九三九年任華南軍報道部長，一九四一年三月，仍回該省供職。

佐藤應次郎 (Sato, Ojiro)

南滿鐵道會社副總裁，一八八一年生，山形縣人。東京帝大工科土木工程學系畢業後，即入南滿鐵道會社，因線路土木關係，沿線實地視察，頗積經驗。後歷任鞍山製鋼所營繕科長、撫順炭礦土木科長、古城子採炭所長，至一九三一年八月因村上理事之推薦，繼鈴木二郎後，任鐵道部次長。是年濞變時，委為關東軍囑託，一九三三年任鐵道局建設局長，一九三五年升任理事，翌年九月，滿鐵改制，以氏與宇佐美寬爾分任鐵道局總次長，一九三九年三月，大村卓一繼松岡洋右氏任總裁，升任現職，仍兼鐵道總局副總裁，性情疎放，不拘小節云。

佐田莊一 (Sakuda, Shoichi)

評論家，一八七八年生，山口縣人。

一九〇五年東京帝大法科畢業，一九〇九年被聘為湖北省法政學堂教習，一九一二年歸國任山口高等商業學校教職，一九一九年派赴英法美諸國留學歸後，任京都帝大助教，一九三〇年升任教授，一九三一年舉為經濟學部部長，並兼任帝國精神文化研究所所員，一九三八年任滿洲建國大學副校長。著有自然經濟與意志經濟、世界經濟學、日本經濟學等書，時在報章雜誌，發表時論，為經濟學者中之中國通。

伴莊一郎 (Ban, Soichiro)

興亞院華中連絡部部員

士官學校第廿四期步兵科畢業，曾任第三聯隊尉官及廣應義塾軍事教官，一九三〇年以少佐編入預備役。八·一三時，任楠木部隊之高級副官，後任畑部隊上海辦事處（出張所）主任及維新學院教官，一九三九年冬任現職。

伊島清吉 (Kimishima, Seikichi)

產業報國會中央本部總務局長，一八八九年生，栃木縣人。

一九一七年東京帝國大學法科畢業，即任奈良縣事務官，後由國務院事務官，調任內務省社會局科員，一九二四年及一九三〇年兩次派任國務勞工局委員，一九三一年以後，歷任茨城、香川、宮崎、福島、新潟等縣知事，一九四一年一月任現職。

串田萬藏 (Kushida, Manzo)

三菱合資會社總理事，一八六七年生，東京府人。串田孫三郎之長子，十二歲時，即入其會任理事之第十三銀行分行爲學生，業餘就學共立中學，嗣升東京帝大之豫備科，乃受知於高橋是清，遣之赴美，學習銀行經濟諸學，一八九〇年畢業賓夕法尼亞大學經濟科後，在各大銀行，實習四載，一八九四年歸國，入三菱銀行前身之第一百十九銀行，翌年該行改稱爲三菱合資會社銀行部，繼續供職，一八九七年升大阪分行副經理，一八九九年調神戶分行副經理，一九〇一年又升總行副經理，一九一八年任銀行部長，翌年銀行部獨立，改組爲三菱銀行，續掌幹部事務，一九二一年繼東主岩崎小彌太之後，任三菱合資會社理事，後合資會社總理專木村久壽彌太病故，任現職。此外並兼三菱系十餘會社之要職，及日本工業俱樂部常務理事、東京商工會議所職員等。性善理財，部下對之有慈母嚴父之稱。

谷 正之 (Tani, Masayuki)

情報局總裁，一八九〇年生，熊本縣人。

一九一二年高等文官考試合格，翌年畢業東京帝國大學法科政治學系，又獲舊外交官及領事官考試，即入外務省。歷任駐歐大使館三等秘書及二等秘書，一九三三年回國，調任外務省參事官秘書及亞細亞局第一科科長等職。一九三〇年升任亞細亞局長。在任時，與白鳥敏夫力勸內田康哉主張

退出國聯，並發起「每日外陸同人午餐會」，以交換情報及意見。一九三三年調爲駐滿大使館參事官，一九三五年升任駐奧地利全權公使，一九三七年回國。一九三八年春，以無任所公使駐華，是年冬，有田重任外相，升外務次官，經平沼內閣、至阿部內閣時，以外交主張不合辭職，一九四一年十月東條氏組閣，出任現職。

谷 壽夫 (Tani, Hisao)

陸軍中將，一八八三年生，岡山縣人。

士官學校第十五期及陸軍大學畢業。一九一五年任駐英大使館副武官，一九一七年隨英軍參戰，至一九二〇年調任印度駐在武官。嗣經步兵第六十一聯隊長及第三師團參謀長，於一九三〇年又被派赴歐，任國聯陸海空軍問題常設諮詢委員會日本陸軍代表，及日內瓦軍縮會議日本全權委員隨員，一九三三年由步兵第二旅團長調任東京灣要塞司令官，翌年晉級中將。近年曾任師團司令部附及師團長等職。

谷 元治郎 (Taniguchi, Motojiro)

陸軍中將，一八八五年生，東京府人。

士官學校第十六期砲兵科及陸軍大學畢業。歷任西伯利亞派遺軍參謀、參謀本部科長兼軍令部參謀、野戰重砲兵第五聯隊長、重砲兵學校幹事、野戰重砲兵第三旅團長、陸軍教育總監部附，至一九三六年升任習志野砲兵學校長，一九三七年晉級中將，一九三八年任師團長。

谷口吉彦 (Taniguchi, Kichihiko)

京都帝大教授，一八九一年生，和歌山縣人。

一九一六年京都帝大經濟科畢業，即任該校助教，一九二二年派赴英德美等國留學，歸後，升任教授，並兼九州帝大教授。著有恐慌理論、貿易管理、關於東亞經濟協同體等書。少時曾受大阪富榮栗本勇之助供給膏火，近年栗本常欲推薦氏為大阪市商工會議所書記長云。

谷口恒二 (Taniguchi, Tsuneji)

大藏省次官，一八九四年生，和歌山縣人。

谷口吉彦之弟，一九一九年東京帝大法科政治學系畢業，即入大藏省。歷任主稅局司稅官、大津市稅務署長、長崎海關監視部長、港務部長、大藏省主稅局關稅科長、大臣官房秘書科長、營繕管財局理事等職，一九三七年五月升任大藏省主計局長，後又升該省次官。近年之稅制改革，大都由氏起草。

谷川徹三 (Tanikawa, Tetsuzo)

評論家，一八九五年生，愛知縣人。

一九二二年京都帝大文科哲學系畢業，為西田幾多郎之得意門人。曾任同志社龍谷兩大學及京都繪事專門學校講師，一九二八年轉任法政大學教授。著有歌德研究、感傷與反省、生活哲學之藝術。享受輿批評等書。現兼任滿洲教科書之審查委員。

谷本馬太郎 (Tanimoto, Umataro)

海軍中將，一八八六年生，廣島縣人。

由福山中學校於一九一一年一九一七年先後畢業海軍兵學校及海軍大學。曾任南清艦隊安宅號（前清末年輕長為鈴木貫太郎，時在上海僅有巡洋艦二艘）砲手，由良、烏海等艦艦長，海軍大學兵學教官，吳鎮守府參謀長，第八戰隊司令官等職，於一九三六年十一月繼日比野正治後，調任第十一戰隊司令官來華，一九三八年十一月晉敘中將，並升任練習艦隊司令官。

吉田好信 (Shinido, Yoshinobu)

海軍少將，一八九〇年生，山口縣人。

一九〇九年海軍兵學校畢業，海軍中將穴戶二郎之族弟。歷任安藝、朝日、要剛等艦長，海軍大學校兵學教官，鎮海要港參謀長及吳海兵團司令，至一九三六年十二月晉敘少將，任海軍軍令部聯絡參謀。一九三八年四月，調任上海陸戰隊司令官，一九四〇年編入豫備役，翌年三月任拓務省主辦之折南塾塾長。

尾崎行雄 (Ozaki, Yukio)

衆議院議員，一八六二年生，三重縣人。

三重縣土族尾崎行正之長子，早歲畢業慶應義塾，後進工業大學研習數理，出校後，由報知新聞記者轉任新潟新聞主筆。迨大隈重信任大藏卿，乃於其下擔任統計職務，不久

，從事著作，於讀賣新聞及朝鮮新聞，大發表其堂堂之論文，一八九六年任外務省參事官，一八九八年任大隈內閣之文部大臣，一九〇三及一九〇八年兩度任東京市長。一九一四年第二次大隈內閣時任司法大臣，自此以後，屏絕仕途，專為議會政治而奮鬥。在二十餘歲時，即與犬養毅林有造，從事民權運動，嶄露頭角。一八八五年十二月之保安條例，係應付此項運動而頒布。其在議會，自一八九〇年第一屆議會當選為議員，蟬聯至今，已達二十一次，為今日議員中資格最老者，日本議員，無須運動者，祇氏及已故之犬養毅諸人，至被稱為「憲政之神」或「議會之父」。近十年來，氏在議會中，從不發言，一九三七年召開第七十屆議會時，突然打破緘默，登壇演說，頗為當時自由主義者所熱烈贊稱。氏嘗著論勸告日人謂：「明治維新前，日本之學術政教，無不崇奉中國，故當時尊視華人無所不至，甚至本州人之旅居九州者，以其所居已較接近聖人故鄉，引為榮耀，不意甲午戰役，博取意外之勝利，竟一反故常，蔑視華人，倘此種心理，不加改變，兩國感情，決難和洽」。一九三二年游歐返國，作「代墓誌銘」一文，以寄感慨，號學堂，故人稱尾崎學堂或學堂翁，著有政談三十年，學堂全集等書。

尾崎秀實 (Ozaki, Hiemi)
昭和塾幹事，一八九七年生，東京府人。
父某以研究台灣史馳名，一九二三年東京帝大法科畢業

，即入東京朝日新聞。後被派至滬，見知於川越茂，委為使館囑託，川越之中國再認識一文，即氏執筆。一九三七年歸國，任朝日新聞東亞問題調查會會員，除撰述社評外，並主持編纂亞細亞問題講座，近年為近衛文磨所羅致，委為內閣囑託。東亞協同體等理論，傳出於氏主筆者為多。現任昭和塾幹事，著有現代支那、暴風雨下之支那、從國際關係上觀察支那問題等書。

尾高龜藏 (Shetaka, Kamezo)

陸軍中將，一八八四年生，佐賀縣人。

原姓大谷，一九三六年改今姓。士官學校第十六期步兵科畢業。日俄戰爭時，以十三聯隊之少尉從軍，一九一六年又畢業陸軍大學。嗣後歷任教育總監部科員、十四師團參謀、英國陸軍派遣員、關東軍兵站參謀、步兵第六十一聯隊長等職，至一九三二年五一五事件後，調任東京警備司令部參謀長，一九三六年晉級中將，翌年三月，任第十九師團長。一九三八年參加張鼓峯戰役，任諾門罕事件之指揮官，一九四一年三月歸任軍事院參議官。氏為日本陸軍中最先研究坦克戰術者，以悍勇馳名。

尾藤加勢士 (Otsuji, Kaseo)

陸軍中將，一八八六年生，熊本縣人。

士官學校第十九期砲兵科及陸軍大學畢業。曾任陸軍省兵器局局員，大阪陸軍造兵廠技術科科員、科長，陸軍科學

研究所所員，駐美大使館陸軍武官以及砲兵第三聯隊長等職。至一九三六年十一月，升任陸軍科學研究所第三部長，一九三九年三月復升任該所所長，同時晉級中將。

坂本政右衛門 (Sakamoto, Masemon)

陸軍中將，一八八〇年生，高知縣人。

士官學校第十三期步兵科及陸軍大學畢業，至一九三一年累進至陸軍中將，一九三四年編入預備役。歷任步兵學校教官、步兵第五十五聯隊長、第八師團參謀長、教育總監部第一科長、步兵第五旅團長，步兵學校教育長、士官學校幹事及校長等職，長城戰役時，任第五旅團長。前有出任陸相等說，然自一九三六年五月，陸軍大臣及次官之資格，規定限於現役軍人，實現較難。(坂亦作阪，下同。)

坂本瑞男 (Sakamoto, Mizuo)

外務省歐亞局長，一八九四年生，東京府人。

一九二〇年東京帝大法科畢業，經外交官領事官考試及格，即派為奉天候補領事。後由駐比大使館及駐法大使館秘書，於一九三三年調任條約局第三科科長。一九二三年任駐美大使館一等秘書，一九三八年任駐美大使館參事，至一九四〇年八月樞西春彥後任現職。氏在駐法使館秘書時，協助松岡脫離國聯，在義時，又見信於白鳥敏夫，其得任現職，實有由也。一九四一年三月曾隨松岡赴歐。

坂本龍起 (Sakamoto, Tatsuki)

駐秘魯公使，一八九四年生，福岡縣人。

一九一七年東京帝大法科畢業，即入外務省通商局。後由美國阿根廷及廈門領事，於一九二九年升任通商局第三科長，一九三二年兼第二科科長。一九三四年調美洲局第一科科長，不久轉該局第二科科長，一九三五年任台灣總督府外事科科長，一九三七年升駐比利時大使館參事，一九三九年五月任興亞院華北連絡部文化部長，同年十二月任現職，並兼駐波黎維亞公使。

坂西一良 (Banzai, Ichiryo)

陸軍中將，一八九一年生，鳥取縣人。

稻田清淳之長子，以入坂西利八郎為養子，故改今姓。士官學校第二十三期步兵科及陸軍大學畢業，曾留學德國並任駐德大使館武官多年(一九三一—一九三三年)，致力於國社主義之研究。嗣歸任參謀本部調查班班長。林銑十郎任陸相時，於在鄉軍人集會時，曾乘酒大呼謂「目下時局嚴重，諸君何默默乃爾？」以有煽動嫌疑，予以停職半年之處分。後調關東軍高級參謀第一科科長，一九三七年三月隨坂垣征四郎離滿，調充步兵第五十九聯隊長，一九三九年任陸軍大學校幹事，一九四一年晉級中將，復任駐德武官。

坂西利八郎 (Banzai, Rihachiro)

前我國大總統顧問，一八七一年生，鳥取縣人。

士官學校第三期砲兵科畢業，於一八九二年任砲兵少尉

，至一九二一年累升至陸軍中將。歷任參謀本部部員、野砲兵第一聯隊附、野砲兵第九聯隊長、參謀本部附、駐華公使館武官等職。至一九二七年編入預備役，勅選為貴族院議員，晉授男爵。日俄戰爭，在平津担任特務工作。清季袁世凱練新兵時，氏即在其幕下，充任教官。民國後，任歷屆大總統顧問，並改革名為班志越，自稱為半中國人。現時日本陸軍中之「中國通」，大半受其薰陶。一九三六年曾列席太平洋會議代表。無子，以稻田清淨之長子一良為養子。

坂谷希一 (Sakatani, Kichi)

聯合準備銀行最高顧問，一八九二年生，東京府人。

澁澤榮一之外孫，前大藏大臣阪谷芳郎之子。一九一四年東京帝大法科畢業後，即入日本銀行。一九二〇年派赴倫敦任該行代理處董事室幹事，一九二四年辭職，轉任關東廳財務科科長，一九二九年任拓務省秘書官。九·一八事變前，適奉派駐滬，兼東拓(東洋拓殖會社)及滿鐵(南滿鐵路會社)監理官，一九三三年任滿洲財政部總務司司長，幣制改革及鴉片專賣等事，均由其建議施行。一九三五年任滿洲中央銀行擔任監事，一九三六年秋舉為滿鐵理事兼產業部長及經濟調查會委員長，主以担任對華接洽為職責。一九三八年春轉現職。氏在大學時代，以其父任我國財政顧問，即注意中國財政狀況，後任關東廳財務科長，於東北財政，又積

有相當研究，故遂成爲財政金融方面活動之中心人物。妻壽子，係故日本銀行總裁三島彌太郎之女，現貴族院議員子爵三島通陽之妹。

坂谷芳郎 (Sakatani, Yoshiro)

前我國財政顧問，一八六四年生，東京府人。

氏爲幕末鴻儒阪谷素之第四子，澁澤榮一之婿。一八八四年東京帝大法學部政治經濟科第一名畢業，即入大藏省，歷任該省書記官、參事官、主計局長、總務長官及次官等職，於一八九九年得法學博士學位，至一九〇六年升任西園寺內閣之大藏大臣，一九一二年任東京市長，一九一七年參加巴黎舉行之聯合國經濟會議代表，同年當選爲貴族院議員。在院內爲公正會爭之領袖。近年革新思想甚盛，氏獨保持自由主義者之態度。現除任貴族院議員、專修大學校長、東京商工會議所顧問及中央統計委員會中央滿蒙協會等十數會長外，兼任箱根溫泉供給會社理事長，淺野水泥、沖電氣、磐城炭礦各會社理事，日本航空輸送、東京地下鐵道各會社顧問及澁澤同族會社監事等職。氏在日俄戰爭時，任大藏次官，以籌措戰費有功，封授男爵民國初元，曾爲我國財政顧問。學識俱豐，實日本當代理財家之著稱。(最近逝世)

赤木親之 (Akagi, Chikenyuki)

上海工部局日本警察部長，一八九八年生，廣島縣人。

一九二一年京都帝國大學法學部政治科畢業。歷任東京府屬吏、靜岡縣保安科科長、山口兵庫兩縣特高科科長及外事科科長，至一九二八年奉派來滬，以逮捕佐野案件馳名。至一九三三年歸國，任高知縣警察部長。一九三五年三月升任拓務省警務科長，旋調文書科長，一九三八年四月復來華担任駐華使館參事官，旋調任上海工部局日本警察部長。通華英語，熟悉共黨內幕，為取締思想犯之能手。

赤池 濃 (Akaike, No)

貴族院議員，一八七九年生，長野人。

一九〇二年東京帝大法科畢業，同年經高等文官考試及格，歷任福島・兵庫・滋賀・愛知各縣事務官、內務省書記官及參事官、靜岡縣知事、朝鮮總督府內務局長土木局長及警務部長、內閣拓殖局長官及警視總監等職，至一九二三年勅選為貴族院議員，屬同和會系。向研究孔子學說，一九二九年會因此獲得啓明會之津貼，對中俄問題，亦有相當之研究。除公職外，兼任海製作所及廣瀨產業會社理事。

赤松小實 (Akamatsu, Kōta)

前京都府知事，一八九〇年生，靜岡縣人。

故海軍中將赤松則良之第三子，貴族院議員男爵赤松龍一之弟。一九一五年東京帝大法科政治學系畢業，由長崎、三重、山梨等縣理事官，入內務省任社會局書記官，不久轉任福井山口兩縣警察部長。一九二七年派任日內瓦國際勞動

會議政府代表，一九三一年擔任高知縣知事，一九三二年復入社會局任勞動部長。林銑十郎內閣時，調土木局長，不久任靜岡縣知事，一九三九年四月升任京都府知事。氏風度瀟灑，精研勞動政策，為近衛文麿之政學親，與廣瀨久忠尤為相得。

赤松克麿 (Akamatsu, Katsumaro)

衆議院議員，一八九五年生，山口縣人。

祖父赤松連城，任山口縣德山町之西本願寺之執行長官，有名於時；兄智城，文學博士，現任京城市大教授；妹常子，曾在無產陣營中活動，一家以英才聞世。氏早歲肄業德山中學時，成績冠羣，全校師生，無不器重之，然在三年級時，因揭「賦予學生自治權」之標語，鼓動罷課風潮，致為校方除名。嗣由第三高等學校，升入東京帝大法科，受吉野作造博士之指導，於一九一八年與麻生久、宮崎龍介、佐野學、石渡春雄等，結成新入會，研討無產運動。畢業後，任解放雜誌記者，又入東洋經濟新報服務。一九二一年轉入礦夫組合，至是遂正式從事無產運動之實際工作。後任日本勞動總同盟調查部長、出版部長，並兼週友同志會會長。當三菱礦業總罷工時，氏策劃指導，活動異常，幾被捕入獄。然自此以後，氏之思想，漸次改變，一九二四年勞動總同盟關東支部內部發生糾紛，氏因此轉入社會民衆黨，任中央執委。一九三〇年繼片山哲後，任該會祕書長（書記長）。一九

三一年後，主唱國家社會主義，翌年脫離社會民衆黨而結成「日本國家社會黨」，自任黨務長。一九三三年該黨分裂，氏乃進而提倡日本主義，與松岡洋右組織「青年日本同盟」。一九三七年四月當選爲衆議院議員，九月以陸軍大佐之軍屬名義，來滬從軍。妻明子，卽其業師吉野作造之女。

村上知行 (Murakami, Tomoyuki)

評論家，一八九五年生，福岡縣人。

幼小貧寒，小學畢業後，爲學徒、侍者、速記員、妓樓書記及新聞團員，飄浪各地，後以讀實新聞特派員來華，娶我國婦人爲妻，卽僑寓燕京，從事文筆生涯。著有舊中國與新中國人、華北風土記、日文三國志演義等書。對於我國社會情形之熟悉，鮮有出其右者，思想合於革新潮流。

村上龍太郎 (Murakami, Ryutarō)

日本義馬會副理事長，一八九二年生，愛媛縣人。一九一七年東京帝大法科政治學系畢業，卽入農商務省。歷任東京高知鹿兒島各大林區署科員、農林省秘書、大臣官房文書科長、山林畜產等局局長及馬政局次長，至一九三七年升該局局長，翌年一月去官，就任日本義馬會副理事長。氏與山本情二、潮貝一甚契合，對於農林行政，積有相當之研究。

村井倉松 (Murai, Kuramatsu)

外交官，一八八八年生，青森縣人。

一九一一年東京高等商業學校專攻部領事科畢業，卽任上海同文書院教職，一九一四年考取外交官，派爲長春副領事。其後歷任駐華使館三等秘書、哈爾濱火奴魯魯紐約等領事，通商局第一及第二科科長、駐英大使館二等及一等秘書、加爾各答上海雪特尼總領事，至一九三七年四月升任駐泰公使，一九四〇年辭職，現任北平日本僑民會會長。氏任上海總領事，適爲一·二八事變後，曾在虹口公園，被朝鮮人尹奉吉狙擊受傷。

村田五郎 (Murata, Gorō)

羣馬縣知事，一九〇〇年生，愛知縣人。

田中光顯伯爵之孫婿，一九二三年東京帝大法科畢業，經高等文官考試及格，卽入內務省。歷任警視廳官房主事、厚生省體育科長、福岡縣總務部長、內務省警保局外事科長、地方局振興科長及企劃院書記官等職，至一九四一年冬東條內閣成立後，由警保局保安科長，出任羣馬縣知事，爲當於革新意識之少壯官僚。

村田孜郎 (Murata, Shiro)

蒙古善鄰協會調查部長，一八九〇年生，佐賀縣人。

上海同文書院政治科畢業，曾任大阪每日新聞中國特派員及東京日日新聞東亞科長，好以餘暇研究中國戲劇，與梅蘭芳相交甚厚，一九一八年梅氏赴東京演劇時，手草存梅傳

一書。九一八事變前；著論痛罵幣原外交爲宋襄之仁，七七事變後，發起協和會；嗣加入蒙古善鄰協會，任調查部長。時作蒙古之行，著有中國之左翼陣線、蒙古與新疆等書。

村田省藏 (Murata, Shozo)

前逕信大臣鐵道大臣，一八七九年生，東京府人。

亦作村田省三，一九〇〇年東京高等商業學校畢業，即入大阪商船會社，由普通職員、漢口支店襄理、總社台灣科長及遠洋科長，於一九二九年升總社副社長，一九三四年復升社長。當其初任副社長時，日本海運業，因受世界經濟恐慌影響，營業不振，均採緊縮方針，氏獨一反所爲，一面開關紐約大連間之新航線，一面買收國際汽船及日清汽船兩會社之股票，一九三七年更建五萬噸之新船十三艘，於是大阪商船會社之勢力，遂與日本郵船會社，並駕齊驅，而其聲名亦駁駁在各務錄吉之右矣。第二次近衛內閣時，出任逕信大臣，並兼鐵道大臣，第三次近衛內閣，仍連任，迨東條組閣辭職。

村岡典嗣 (Muraoka, Tsunetsugu)

評論家，一八八四年生，東京府人。

一九〇五年與杉森孝次郎同期畢業早稻田大學文科哲學系，即任 Japan Daily Herald 及日德郵報記者，一九一五年任早大講師，翌年兼陸軍士官學校教授，一九二四年赴歐留學。歸後，任東北帝大日本思想史教授，兼東京帝大及京

京文理科大學講師。著有本居宜長傳、日本思想史研究、日本文化概況等書。

村瀬直養 (Murase, Chokuyo)

前法制局長官，一八九〇年生，愛知縣人。

洲本中學校長村瀬七三郎之子，由第五高等學校，於一九一二年畢業東京帝大法科德文法學系。少時嗜嗜文藝，後改習法律，攻究寬克彥所倡之海格爾法理論。畢業後，即入農商務省，不三年，轉內閣法制局參事，除研究商事法制外，更入俄文夜校，能直讀馬克斯之資本論，後受吉野信次之汲引，由礦山監督官、工場監督官及特許局事務官，升至商工局長，在任時，整理馬利斯式金融機關。一九三六年任特許局長官，不久，小川鄉太郎任商相，氏繼吉野後，升商工次官。伍堂、吉野數商相時，均留任。七七事變發生後，兼任臨時物資調整局總務部長。在商工省派系關係中，介乎吉野系與反吉野系之間。一九四〇年第二次近衛內閣成立，擔任法制局長官，翌年七月第三次近衛內閣成立，仍蟬聯，十月東條組閣辭職。

杉山 元 (Sugiyama, Gen)

陸軍大將，一八八一年生，福岡縣人，

士官學校第十二期步兵科及陸軍大學畢業。二十二歲時任陸軍少尉，嗣後歷任陸軍省軍務局軍事科長、航空本部補給科長、駐法大使館武官、國聯陸海軍問題常設諮問委員會

陸空軍代表、日內瓦軍縮會議隨員、軍務局局長及軍事參議院幹事長等職，至一九三〇年南次郎任陸相時，升任陸軍次官，一九三二年調任第十二師團長，旋任航空本部長，一九三四年轉參謀次長兼陸軍大學校長，一九三六年八月晉級大將，同時調任陸軍教育總監。一九三七年林銑十郎組閣時，擢任陸相，第一次近衛內閣成立，仍蟬聯，翌年五月轉軍軍參議院任參議員，一九三九年繼寺內壽一後，任華北陸軍最高指揮官，翌年多歸國，即繼閑院宮後，任陸軍省參謀本部參謀總長，以迄於今。

杉山元治郎 (Sugiyama, Motojiro)

衆議院議員，一八八六年生，大阪府人。

大阪農業學校畢業後，復於一九〇九年畢業仙台東北學院神學部。出校後，任東番町教會之牧師，旋因肺病，養病於和歌山縣之湯崎溫泉，愈後傳道於福島縣之小高町教會，並出其所學，指導農民，改良農業，達十年之久。一九二〇年「都市農民運動」勃發，氏乃適返故里，任職大阪市之弘濟會育嬰部，專心研究農民運動。一九二二年與賀川豐彥結成日本農民組合，被舉爲組合長。一九二五年以後，組織勞動農民黨，任中央執行委員會。一九二六年任日本勞農黨顧問及全日本農民組合長，一九二八年農民組合及勞動農民黨統一後，任全國農民組合中央委員長，有日本農民組合之父之稱。一九三二年及三六、三七年，三次當選爲衆議院議員

。氏在日俄戰爭時，以在和歌山演說非戰論，被斥爲俄探，其家亦被搗毀。中日事變發生，曾一度被捕入獄。氏於傳教外，兼業齒科醫師，著有農村經營之理想、農村經營之實際、農村教化之研究等書。

杉村廣藏 (Sugimura, Hirozo)

經濟博士，一八九五年生，北海道人。

一九二〇年東京高等商業學校畢業，一九二四年任母校助教，旋派赴德國留學，一九二七年歸任教授，一九三六年辭職，一九三八年九月舉爲上海日本商工會議所書記長，以經濟論理之構造一書，得經濟學博士學位。

杉原荒太 (Sugihara, Arata)

前南京總領事，一八九九年生，佐賀縣人。

一九二二年大阪高等商業學校畢業，一九二四年及格外交官考試，即派赴駐美使館服務。一九二九年調任外務省條約局事務官，一九三二年任駐華使館三等祕書，翌年任上海總領事館領事，一九三六年任條約局第一科科長，翌年轉第二科科長，一九三九年十一月任駐華使館一等祕書，翌年十月繼三輪義敬後，任南京總領事，一九四一年冬歸國。富研究心，頭腦明晰。

杉森孝次郎 (Sugimori, Kojiro)

早稻田大學高等學院院長，一八八二年生，靜岡縣人。

杉森熊太郎之次子。一九〇六年早稻田大學文學部哲學系畢業，翌年任母校助教。一九一三年至一九一九年，以校費派赴德英美三國研究倫理學，歸國後任母校教授。一九三四年升任現職。近年會應非列賓大學之聘，担任交換講師。與中正野田友善，皆為國民同盟，著法西斯日本之原理一書，實為日本最先否認議會政治之論客。此外又著有論理學、社會學、國家道德之原理、社會進步之純粹原則等書。

町田忠治 (Machida, Chuji)

內閣參議，一八六五年生，秋田縣人。

早歲畢業東京帝國大學豫備科，因金子賢太郎之薦，供職內閣法制局，不二年辭職，改任朝日新聞編輯，旋轉報知新聞，後與天野為之助等辦辦東洋經濟新報，以是受知於大隈重信、犬養毅、尾崎行雄等，派赴留學歐洲，歸國後，入日本銀行，不久轉任山口銀行總經理。民政黨之以山口銀行為金庫，即由彼之關係而來，一九一二年被選為衆議院議員，初隸國民黨，後以國民黨分裂，轉入民政黨前身之立憲同志會。一九一四年大隈內閣時，任農商務省參事官，一九二〇年以議員落選，尚任報知新聞社長，一九二五年加藤高明之憲政會單獨內閣成立，選任鐵道省政務次官，未就，翌年加藤病故，若槻禮次郎出組第一次內閣，出任農林大臣，一九二九年濱口內閣及一九三一年若槻第二次內閣時，均重任農林大臣，一九三四年在岡田內閣任商工大臣，二、二六事

變高橋是清被刺後，會暫代大藏大臣，不久辭職。一九三七年九月，代表民政黨就新設之內閣參議，平沼組閣時，選任農相，薦櫻內幸雄以自代。氏在民政黨中，有悠久之歷史，一九三四年十一月總裁若槻禮次郎以故辭職，遂由氏繼任。迨近衛第二次內閣，因新組大政翼贊會，民政黨宣告解散，復選任內閣參議，以迄於今。為人思慮周密，向主好人政治，為布爾喬亞之民主主義者。著有財政學及憲法評論二書。無子，以同縣那波忠治為嗣。

町尻覺基 (Machijiri, Kazunoto)

陸軍中將，一八八九年生，京都府人。

町尻量弘子爵之養子，壬生基義伯爵之弟，賀陽宮恆憲王之嫡子，士官學校第二十一期砲兵科及陸軍大學第一名畢業。歷任陸軍省軍務局科員、參謀本部部員、駐法大使館武官侍從武官、野砲兵第一聯隊大隊長及近衛野砲兵聯隊長等職，至一九三六年調任軍務局軍事科長。翌年繼後宮淳後，任軍務局長兼軍事參議院幹事長，晉級少將。一九三八年四月任華北陸軍副參謀長，十一月回軍務局長原任，一九三九年八月升任師團長。一九四一年四月復晉級中將，任新設之化兵監。氏氣質剛強，雅好提攜後進，營務彷彿如宿舍，來客不斷，與石原莞爾最稱莫逆，石原嘗謂為陸相之材。

角田政之助 (Tsunoda, Masanosuke)

陸軍少將，一八八二年生，齋馬縣人。

一九〇三年畢業陸軍士官學校後，即任陸軍步兵少尉，至一九二九年，累升為少將，其間曾參與日俄戰役，第一次世界大戰時，以駐英武官從軍。嗣後歷任駐印度武官、第七十九聯隊長、教育總監部第二科長、陸軍將校生徒試驗常務委員、及步兵第二十八旅團長等職，一九三一年編入預備

役。

角尾 晉 (Tsunoo, Shin)

長崎醫科大學長，一八九二年生，富山縣人。

一九一七年東京帝大醫科畢業，一九二三年留學歐美各國，回國後初任長崎醫科大學助教授，一九二五年任該大學附屬醫院長。一九二七年獲醫藥博士，一九三三年派赴歐美各國考察，一九三六年七月，升任現職，並兼教授。

八畫

來栖三郎 (Kirusu, Saburo)

駐美特使，一八八九年生，神奈川縣人。

來栖壯兵衛之第三子。一九〇九年東京高等商業學校專政部領事科畢業，經外交官及試合格，歷任漢口、檀香山、紐約、芝加哥各地副領事領事，馬尼刺總領事，智利公使館一等秘書，希臘公使館一等秘書，義大利大使館一等秘書及漢堡總領事等職。至一九二八年升任祕魯公使，一九三〇年調外務省通商局長，一九三六年三月又升任駐比大使，一九三九年調任駐德大使，翌年辭職歸國。一九四一年冬，以特使名義，赴美折衝。大東亞戰事爆發後，與野村大使等，同於日美交換外交官時歸國。妻阿麗亞，係美國女子。

兒玉友雄 (Kodama, Tomoo)

陸軍中將，一八八一年生，山口縣人。

兒玉秀雄之弟，前關東軍司令官中村雄次郎之婿，士官學校第十四期步兵科及陸軍大學畢業。歷任近衛師團參謀、步兵第三十四聯隊長、參謀本部科長、步兵第二旅團長、朝鮮軍參謀長(林銑十郎任司令官時)、下關要港司令官及駐滿獨立守備隊司令官等職，至一九三三年晉級中將，一九三六年十二月升任京都第十六師團長，一九三七年八月調任西部防衛司令官，翌年七月，編入預備役。

兒玉秀雄 (Kotama, Hideo)

前拓務、選信、內務大臣，一八七九年生，山口縣人。

氏爲長閑領袖兒玉源太郎之長子，承父蔭襲子爵，後陞伯爵，一九〇〇年東京帝大法科畢業。日俄戰爭時，以上尉職伴父於軍次。嗣任大藏省書記官、朝鮮稅監府秘書(伊藤博文任統監時)、總督府總務局長兼鐵道局參事等職，至寺內(正義)內閣時，任爲內閣書記官長。後山實勳局總裁(原敬內閣時)、關東廳長官及朝鮮總督府政務總監，於岡田(啓介)內閣時，升任拓務大臣，旋隨岡田辭職。林銑十郎內閣成立，任選信大臣；阿部內閣時，任內務大臣。數次當選爲貴族院議員，屬研究会系。女弟四人，長嫁寺內壽一，次嫁穗積重遠，幼嫁木戶幸一，弟友雄、當雄、國雄、亦皆致身樹道，故在政界，具相當勢力。

兒玉謙次 (Kodama, Kenji)

華中振興會社總裁，一八七一年生，東京府人。

一八九二年東京高等商業學校畢業，卽入正金銀行供職，其後累升至印度及我國上海正金分行行長，在印凡十七年，在華十四年(在滬十年)，對於白銀問題，學驗之豐富，在日本銀行界中，可稱爲首屈一指。一九二二年後，升任正

金銀行總裁，一九三六年辭職，此外曾舉爲橫濱商業會議所顧問、商工審議會委員及貴族院議員等職。岡田及近衛內閣時，曾選任大藏大臣未就。一九三六年秋，我實業界一部人士，倡議中日經濟提携，組織經濟考察團赴日；日本實業界中，亦組織日華貿易協會，櫻氏爲會長，於一九三七年春，率領會員多人，歷訪我國朝野領袖，五月歸國。一九三八年夏，任華中振興會社總裁，以迄於今。該會社俗稱華中公司，日本列爲特殊會社之一，其子會社(分公司)，有華中礦業、華中水電、華中電氣、上海恆產、大上海瓦斯、華中鐵道、華中都市公共汽車、中華輪船、上海內河輪船、華中水產、淮南煤礦、華中鹽業、華中蠶絲等，皆在總裁統轄之下。

周山滿藏 (Suyama, Manzo)

陸軍中將，一八八三年生，山口縣人。

士官學校第十六期步兵科及陸軍大學畢業後，又留學歐洲。歷任陸軍省軍務科員、參謀本部部員、步兵第十八聯隊長、步兵第五旅團長、陸軍省兵器局長及第三師團司令部附等職，至一九三六年晉級中將，升任旅順要塞司令官，一九三八年調任參謀本部附，未幾，編入預備役。

周東英雄 (Suto, Hideo)

前農林省米穀局長，一八九八年生，山口縣人。

一九二一年東京帝國大學經濟學部畢業，即入農林省，由農物局水產局事務官，於一九三二年升任農村經濟更生部

金融科長。後由產業組合科長及大臣官房會計科長，繼荷見安後，又升任米穀局長，一九四〇年辭職。氏爲井野碩哉之親信，米穀配給統制法，大部由其草定。

岡 敬純 (Oka, Yoshizumi)

海軍少將，一八八九年生，東京府人。

一九一一年及一九二一年先後畢業海軍兵學校及海軍大學。初以少尉任官，由軍令部兼海軍省特派員，迅陞艦艇長及軍務局科員等職，至一九三七年任軍務局第一科科長，一九三九年春任軍令部部長，一九四〇年晉級少將，升任軍務局局長，以迄於今。氏性情恬淡，善能聽取他人意見，至今猶抱獨身主義。

岡本季正 (Okamoto, Suemasa)

前駐英大使館參事，一八九二年生，京都府人。

一九一七年東京帝國大學法科政治學系畢業，經外交官領事官考試及格，即入外務省。歷任駐英大使館三等祕書、駐美大使館三等祕書及二等祕書、西雅圖領事、外務省歐美局第一科及第二科科長、大臣官房會計科科長等職，至一九三六年升任美洲局局長，一九三七年春轉任上海總領事，一九三八年冬調派駐英大使館參事，一九四〇年他就。

岡本清福 (Okamoto, Seichiku)

陸軍少將，一八九六年生，新潟縣人。

士官學校第廿七期步兵科及陸軍大學畢業。曾任天津駐

屯軍參謀、參謀本部部員、滿洲皇帝之侍從武官、陸軍省軍務局科員、關東軍參謀等職，後以聯隊長，參加諸門軍戰役。一九四〇年十一月，以少將繼河邊虎四郎後，任駐德大使館武官，兩年他調。

岡田十一 (Okada, Saichirō)

日本銀行理事，一八八八年生，三重縣人。

一九一〇年東京高等商業學校畢業後，即入日本銀行。初任國庫局及營業局局員，至一九二七年金融恐慌時，升豐稟據處理委員會幹事，翌年任特別融通整理部主事，悉心擊劃，以勞績卓著，授給旭日章，實為銀行界所僅有。後轉神戶分行長，一九三三年調紐約分行監督，兼事調查美國經濟恐慌發生後之補救方策，故對金融應變方策，頗有經驗。一九三七年選為日本銀行理事，以迄今日。

岡田文秀 (Okada, Fumihide)

前厚生省次官，一八九二年生，岡山縣人。

一九一七年東京帝國大學法科畢業，由東京市市政府局吏，轉入內務省之土木局，任河川科長，達七年之久（該科在內務省中事務最為複雜），後升土木局長。山崎達之輔任內相時，出任千葉縣知事。一九三七年春，轉長崎縣知事，時適中日戰事發生，傷兵之由溫運回，道經長崎者，氏極誠照料，頗得軍人歡心，一九三八年四月傷兵院成立，委為副總裁。同年一月平沼內閣時，升任厚生省次官，經阿部內閣

至一九四〇年米內閣辭職。氏平素雖與民政黨人交往，而對政黨政治，根本懷疑，頗足以代表一般新官僚之共同心理。好讀書，書法亦有相當工夫。

岡田忠彥 (Okada, Tadahiko)

衆議院議員，一八七八年生，岡山縣人。

一九〇三年東京帝大法科政治學系畢業，一九〇六年及最高等文官考試。初任靜岡縣事務官，山口、熊本各縣警察部長，及琦玉、熊本各縣知事（任琦玉縣知事時，年僅二十九歲，為日本過去所罕有），至一九二三年山本（權兵衛）第三次內閣時，擢為警保局長，以虎之門事件，隨內閣辭職。翌年得同鄉大養毅之助，當選為岡山縣選出之衆議員，初登壇第一次演說，即大膽倡貴族院改革論。時中村是公任東京市長，氏以後藤新平之介，出任市助役，凡一年有半年會一度舉為衆議院副議長。體軀肥胖，父為宗教家，幼承庭訓，以謊語為戒條，故頗能言行一致云。

岡田兼一 (Okada, Kenichirō)

前駐南非聯邦公使，一八八一年生，山形縣人。

早歲以苦學生畢業東京外國語專門學校，即任東京府立第二中學校教師，至一九一六年考取外交官領事官試驗，派為倫敦總領事館候補領事，嗣先後調任駐英大使館三等秘書及牛莊領事兼關東廳事務官，一九二九年升任間島總領事兼

朝鮮總督府事務官，一九三二年調任檀香山總領事，一九三四年七月歸國任外務省文化事業部長，一九三八年冬，攝磨第一任駐南非聯邦公使，一九四一年歸國。

岡田啓介 (Okada, Keisuke)

前總理大臣，一八六八年生，福井縣人。

海軍兵學校（一八八九年）及海軍大學畢業。甲午戰爭時，任浪速號之機關隊長，作戰北洋。日俄戰爭時，充朝日艦隊副艦長，參加戰役。歐戰時，任第二艦隊水雷戰隊司令，攻擊青島。嗣後歷任海軍省人事局長、艦政本部長、海軍次官（一九二三年財部彪海相任內）、第一艦隊司令官、橫須賀鎮守府司令官等職，至一九二七年田中內閣時，升海軍大臣，一九二八年轉軍事參議官。一九三一年齋藤實內閣成立，復任海軍大臣，兩年辭職，旋編入豫備役。一九三四年繼齋藤實之後組閣，至一九三六年，發生二二六事變，時內大臣齋藤實、大藏大臣高橋是清及教育總監渡邊錠太郎，均被戕身死，元老西園寺公望、宮內大臣牧野伸顯及侍從武官長鈴木實太郎，亦險遭捐軀，氏因叛兵不識其面貌，伏匿複壁中，與戕其妹婿而任私人秘書之松尾大佐，幸得免禍。亂平後，傳已離離開弔之岡田首相，忽而出現，重行辭職，成爲慘變中之一幕喜劇。氏雖久縮軍符，而秉性淡泊，不好阿諛，奉命組閣時，僅有四百金，爲招待新聞記者之游藝費，且假自他人，可謂廉潔自好之至。

岡村寧次 (Okamura, Yasuji)

陸軍大將，前孫傳芳顧問，一八八五年生，東京府人。

世居東京市之四谷町達二百餘年，爲東京士族。士官學校第十六期步兵科畢業，在學時，與永田鐵三、小畑敏四郎，同以成績優異見稱。後又畢業陸軍大學，並留學歐洲。歷任參謀本部中國班班員、地誌班班員、新聞班班員、戰史科長、步兵第六聯隊長、中國科長、孫傳芳軍事顧問、陸軍省人事局科長、軍事調查部長、上海派遣軍副參謀長等職，至一九三三年任關東軍副參謀長兼駐滿大使館武官。一九三四年十一月調參謀本部第二部長，一九三六年三月充任第二師團長，一九三九年以軍團長來華作戰，翌年歸國就軍事參議官。一九四一年四月，與土肥原同時晉級大將。氏在華甚久，稔知我國事情，九·一八及一二·八事變，以功授金鷄勳章。

岡崎清三郎 (Okazaki, Seizaburo)

陸軍少將，一八九三年生，島根縣人。

士官學校第二十六期步兵科及陸軍大學（一九二一年）畢業，歷任陸軍省軍務局科員、秩父官武官、參謀本部部員、上原元帥副官、第五師團高級參謀及步兵學校幹事，於一九四一年三月以陸軍少將任教育總監部總務部長。

岡野增次郎 (Okano, Masujiro)

前吳佩孚顧問，一八八三年生，岡山縣人。

一九〇五年上海同文書院第一期畢業，日俄戰爭前，任烟台駐在員，從事偵察俄情，與我北洋軍相聯絡，後回國經營業。一九三二年至一九三四年，任吳佩孚之顧問（時吳為直魯豫巡閱使），著有吳佩孚傳一書。

岡部直川郎 (Okabe, Natsaburo)

陸軍中將，一八八七年生，廣島縣人。

士官學校第十八期砲兵科及陸軍大學畢業。歷任野戰重砲兵第十四、第一聯隊大隊長及聯隊長、砲兵工學校陸軍大學校教官、駐波蘭公使館副武官、駐俄大使館武官、參謀本部科長部長、陸軍大學校幹事及研究部主事。八・一三時，任松井石根之副幕僚長，歸後於一九三七年三月任陸軍省技術本部總務部長，十一月晉級中將，一九三九年又以師團長轉戰各地，一九四〇年十二月歸任陸軍省技術本部長，以迄於今。

岡部長景 (Okabe, Natsakage)

子爵，貴族院議員，一八八四年生，東京府人。

前司法大臣岡部長織之子，前首相加藤高明之婿。一九〇九年東京帝大法科政治學系畢業，同年入外務省，以候補領事，派赴美國服務。嗣後歷任駐英大使館秘書、外務省書記官、參事官、文化事業局事務長、駐德大使館參事、及外務省文化事業部長等職，至一九二九年任內大臣秘書長兼式部次長。翌年九月，被選為貴族院議員，以迄於今。當一九

三五年川島義之任陸相時，曾出任陸軍省政務次官，二二六事變後辭職。氏為新日本主義之信奉者，嘗謂：「從來之日本主義，為獨善的排他的，故應放大眼光，對西洋文化無妨捨短取長，使之日本化」。自信力極強，凡所信以為是者，必力求貫徹主張，如反對米突法案及日文羅馬字法，其著例也。在貴族院中，與酒井忠正、織田信恆，同為研究會重要角。與近衛文磨尤好合無間，故一九三六年使任東亞同文會會長，一九三九年會長一職，由近衛自兼，氏改任官方政治團體——國民精神總動員中央本部之事務總長。（該本部總裁，例由首相兼攝。）

和久田鐵雄 (Wakuda, Tetsuo)

警視廳經濟保安科長，一九〇四年生，東京府人。

一九二八年京都帝大法科畢業，經高等文官考試及第，即入內務省。初任新潟靜岡橋本等縣警視，至一九三五年任內務省警察講習所教官，一九三八年八月任臨時政府高等警官學校教官，一九三九年九月任大阪府地方科科長，一九四〇年八月任現職。

和田小六 (Wada, Koroku)

工學博士，一八九〇年生，東京府人。

木戶幸一之弟，因出嗣和田家，故改今姓。一九一五年東京帝大工學部造船科畢業，復入大學院研究，後由母校助教於一九二〇年派赴英德兩國留學。一九二三年升任教授。

一九二七年得工學博士學位。一九三一年以改良飛機機翼及其裝置，獲恩賜發明獎勵金。日本陸軍長距離機，悉由氏所設計。一九三七年兼任東京帝大航空研究所所長。

和田日出吉 (Wada, Hideochi)

滿洲新聞社社長，一八九二年生，東京府人。

一九二〇年慶應大學經濟學部畢業後，即入時事新報社，積資升該報社社會部長，後轉中外商業新報社會部長。滿變後，以與關東軍頗有淵源，赴滿任滿洲新聞社社長，兼滿洲通信社董事，一九三九年更兼大新京日報（即滿洲新報之後身）社長，以在報端舉發帝國人造絲賄案及番町會之真相一文，馳名於世。

和知鷹二 (Wachi, Takaji)

前維新政府顧問，一八九三年生，大分縣人。

、故紡織界巨頭和田豐治之侄，在中學時已留意中國問題。士官學校第二十六期步兵科及陸軍大學畢業後，初任參謀本部中國班班員，一九三〇年任關東軍司令部參謀，一九二二年調駐廣東武官，一九三五年十一月任天津駐屯軍司令部參謀，不久委為駐太原特務機關長，一九三六年八月調任參謀本部附，一九三七年三月以第十一師團第四四聯隊長，轉戰淞滬等地，翌年担任特務工作，嗣就維新政府軍事顧問，往來滬粵之間。一九四一年晉晉級少將，升台灣軍參謀長，善於說詞，日人稱之為「土肥原第二」。

坪上貞二 (Tsubogami, Teiji)

駐泰大使，一八八五年生，佐賀縣人。

一九〇九年東京高等商業學校專攻部畢業，一九二二年考取外交官及領事官試驗。初任海參崴、齊齊哈爾、香港等領事，駐俄大使館及駐英大使館秘書等職。至一九二三年歸國，轉任外務省亞細亞局第二第三科科長、大臣官房會計科科長及對華文化事業調查會幹事等，於一九二九年升任外務省文化事業部長。一九三四年，岡田內閣成立，任拓務次官；閱一年，任滿洲拓殖會社社長。該社為日本對滿經營移民事業之機關，其第一期計劃，於三江省及濱江省取得百萬町步（註一）土地，先行農業移民，使於此等地帶，形成集團式之部落，現方為移民計劃實施之第二年，聞已有集團移民及青少年移入者，約五萬人云。一九四〇年任滿洲政府參議，一九四二年攝膺現職。

（註一）一町步合我國一六·一五畝。

奈良武次 (Nara, Takeji)

陸軍大將，一八六八年生，栃木縣人。

一八八九年士官學校第一期砲兵科及陸軍大學畢業。歷任軍務局科員科長、陸軍省副官、天津駐屯軍司令官、青島守備隊參謀長、陸軍省軍務局長等職，至一九二〇年任東京武官長，一九二二年任侍從武官長，一九二四年晉級上將，一九三〇年任軍事參議官，一九三三年，退入預備役，因功

封爵。前曾參加甲午及日俄兩戰役，兩任駐德武官及凡爾賽和會日本陸軍代表。一九三六年秋舉為在鄉軍人會會長，辭不就。在鄉軍人會成立於一九〇〇年，為長閑領袖寺內正毅及田中義一所創設，以對於日本退伍軍人養成皇室中心主義之思想為目的，一九三六年寺內壽一任陸相時，曾修改會章，使成為戰時之一重要機關。

岩井重太郎 (Iwais, Jutarō)

前日本興業銀行理事，一八七二年生東京府人。

慶應義塾高等科畢業後，即赴美從事貿易，不久回國入北濱銀行，由放款科長及神戶分行經理，升至東京總行行長。後轉入日本興業銀行，攝為理事；嗣又創立帝國商業銀行，自任董事。此外更兼日興證券會社社長及日本信託會社副社長，於證券業務，積有豐富之經驗。一九三七年春又舉為日本興業銀行參與理事，去年辭去該職。

岩田富美夫 (Iwata, Tomio)

大化會會長，大和新聞編輯部長。

一九一五年畢業日本大學，即赴滿洲，後與北一輝交往，井共同參加中國革命運動，一九一九年隨北氏歸國，加入猶存社，又同出入於高島素之門下，研究思想問題，翌年前立大化會，為猶存社傍系之革新團體。一九二〇年前後，兩次潛入蘇聯，曾被捕入赤塔監獄。氏富實力，精拳術，熟悉中蘇情形，於遠東局勢，亦具相當之智識。大化會本擔任經

驗學盟中武力行動部之職務，其分子多為猶存社之青年部隊，皆活躍一時，今已不甚引人注目。氏除擔任該會會長外，并任大和新聞編輯部長。

岩田愛之助 (Iwata, Ainosuke)

愛國社社長，一八九〇年生，東京府人。

東北帝大中途退學。一九二八年創立愛國社，自任社長。愛國社之綱領，為愛國社對華問題及思想問題之研究者，每當問題發生之時，遵照其會員會議之決定，而作種種運動；愛國社以大陸政策之實行與思想問題之研究為目的。一九二九年開辦愛國村塾，以培養將來在大陸活動之人物。與近衛文麿係屬舊交，嘗為其座上客。

岩村成允 (Iwamura, Seiin)

宮中掌儀官，一八七六年生，茨城縣人。

一八九七年入外務省，即派赴中國留學，以書記生供職中國各地領事官。其後歷任奉天南京鐵嶺等領事、駐華公使館二等秘書、外務省文化事業部科員、駐華公使館一等秘書等職，一九三三年退職，一九三六年五月任宮中掌儀官，以迄於今。好書畫，長華語，常任日皇通譯。

岩村清一 (Iwamura, Seichi)

海軍中將，一八八九年生，佐賀縣人。

前貴族院議員岩村定高之第五子，二十一歲時，畢業海軍兵學校，三十三歲時又畢業海軍大學。歷任海軍省副官、

駐英大使館副武官，軍令部參謀，第一及第三艦隊參謀，樺、矢矧、阿武隈、扶桑等艦艦長，倫敦軍縮會議全權委員副員；至一九三五年晉級中將，任第三艦隊參謀長。一九三七年任佐世保鎮守府參謀長，一九三九年以後，任航空本部技術部長及總政本部總務部長。曾參加上次歐戰時之青島戰事及淞滬戰役。

岩村通世 (Iwanura, Michiyo)

司法大臣，一八八三年生，高知縣人。

前農商大臣野爵岩村通敏之子，一九一〇年東京帝大法律科德文法學系畢業。歷任東京區裁判所及地方裁判所檢事，司法省大臣官房秘書、科長、保護科長，司法大臣隨從秘書，名古屋地方裁判所檢事正；至一九三五年任司法省刑事局長。一九三七年三月任大審院檢察次長，是年十二月任司法次長，一九四〇年一月繼木村尚達後，任大審院檢察長，一九四一年七月擢升司法大臣。是年十月東條組閣仍留任。

岩村義雄 (Iwanura, Yoshio)

陸軍中將，一八八五年生，愛知縣人。

士官學校第十七期步兵科及陸軍大學畢業。歷任參謀本部部員、中國各地駐在武官、台灣步兵第二聯隊長、第五師參謀長、參謀本部科長、步兵第廿一旅團長、台灣守備司令部官等職，至一九三七年八月晉級中將，即以師團長在華作戰。一九三九年三月任中部防衛司令，一九四〇年八月改稱軍

管區中部軍司令官，未幾他調。

岩畔豪雄 (Iwahaze, Takeo)

陸軍大佐，一八九四年生，北海道人。

士官學校第二十九期步兵科及陸軍大學畢業。曾任參謀本部歐陸班班員，駐義大利大使館副武官，陸軍大臣林銑十郎之隨從秘書，關東軍參謀等職。一九三三年南滿鐵道改組案，即由氏與沼田多稜吉、東福清次郎三人所共同草成。一九三四年調回陸軍省任兵務科高級科員，一九三八年十二月繼田中新一後，升任陸軍省軍務局軍事科長，以研究軍機保護法著名。

岩越恒一 (Iwagoe, Tsunehichi)

陸軍中將，一八七九年生，大阪府人。

士官學校第十二期工兵科畢業。一九〇一年任工兵少尉，至一九三二年累升至陸軍中將。曾參加日俄戰役，馳驅於普蘭店及首山堡一帶。一九一二年又畢業陸軍大學。其後歷任士官學校教官、海軍大學及陸軍大學教官、參謀本部科長、電信第二聯隊長、工兵學校及砲兵學校校長、佐世保要塞司令官、工兵監、第三師團長等職，至一九三二年晉級中將。一九三四年任北滿警備司令，一九三六年三月由第三師團長調任參謀本部附，是年五月又調任東京警備司令兼東部防衛司令官，翌年八月，編入預備役。

岸 信介 (Kishi, Nobusuke)

商工大臣，一八九七年生，山口縣人。

松岡洋右之表弟，一九二〇年東京帝國大學法學部畢業。初任商工省書記官及失業問題委員會幹事，旋升商工省工務局長兼臨時產業合理局第一部長，草定各種經濟統制法案，至一九三六年十月，聘為滿洲實業部次長。一九三八年結納同鄉鮎川義介，從關東軍方面，以經營滿洲重工業之權利，讓諸鮎川，並創定滿洲經濟五年計劃，遂與松岡、鮎川同稱為經營滿洲之三傑（三人名字，均為S.S.S.，故亦稱為滿洲三Suke）。一九四〇年升任商工次官，翌年以與小林三齋辭，一度辭職。十月間，東條氏組閣，攝任商工大臣。

岸田國士 (Kishida, Kunio)

大政翼贊會文化部長，一八八〇年生，愛知縣人。由陸軍省名古屋幼年學校，畢業於士官學校第廿一期步兵科，任少尉官，嗣辭職而入東京帝國大學文科法文學系，後復留學德法諸國。著有劇本多種，生平主張日本主義之文藝，一九四〇年十一月担任現職。

岸本綾夫 (Kishimoto, Ayao)

陸軍大將，一八七九年生，岡山縣人。

士官學校砲兵科畢業，以有志研究陸軍技術，於一九〇三年一九〇九年復先後畢業陸軍砲兵學校及東京帝大工學部造兵科。歷任陸軍兵器本廠檢查官、陸軍技術審査部附、陸軍砲兵學校教官、陸軍省副官、臨時軍事調查會委員、陸軍

省軍務局科員、野戰重砲兵第四聯隊長、陸軍科學研究所第三部長、陸軍兵器局砲術科長局長、陸軍科學研究所附造兵廠附等職，至一九三一年八月升任陸軍造兵廠廠長。一九三四年調陸軍技術本部長，一九三六年八月晉級大將，不久，攝入預備役。

迫水久常 (Semami, Hisatsune)

大藏省理財局金融科科長，一九〇一年生，宮崎縣人。

氏為前首相岡田啓介之婿，一九二六年東京帝大經濟學部畢業，經高等文官考試及第，即入大藏省。歷任主計局事務官、內閣調查局企劃院及興亞院調查官，現任理財局金融科長。與毛里英於兔、美濃部洋次及奧村喜和男，同稱為鈴木貞一中將幕下之四大金剛。

武內文彬 (Takeuchi, Bunpin)

大政翼贊會經濟部長。

東京帝大經濟科畢業後，即入大阪朝日新聞。歷任北京、大連、上海、瀋陽、日內瓦（日本脫退國聯時）、倫敦（國際經濟會議開會時）特派員及大阪本社經濟部長等職，一九四〇年十月任現職。平素主張少議論而重實幹。

武內俊二郎 (Takeuchi, Toshiro)

陸軍中將，一八八八年生，愛媛縣人。

士官學校第廿三期輜重兵科畢業，歷任奧保榮元帥副官

駐墨西哥公使館武官、輜重兵監附、陸大兵學教官、參謀本部部員、天津駐屯軍高級參謀及輜重兵聯隊長，至一九四〇年八月晉級中將，並升教育總監部輜重兵監，以迄於今。

武井大助 (Takei, Daisuke)

海軍主計中將，一八八七年生，茨城縣人。

一九〇九年東京高等商業學校畢業。初以海軍主計少尉任官，歷任海軍駐美經理局派遣員、海軍大學及海軍經理學校教官、華盛頓會議議員、海軍技術研究所會計科長、艦政本部第一科科長、佐世保橫須賀各鎮守府主計長，至一九三七年晉級海軍主計中將，明年五月，升任海軍省經理局長，以迄於今。此職向由東京帝大出身者担任，東大以外，氏尙爲第一人。與前內閣書記官長風見章爲上浦中學同學，最稱莫逆云。

武田徳一郎 (Takeda, Tokusaburo)

衆議院議員，一八七三年生，新潟縣人。

早歲畢業於法政大學前身之和佛(日法)法律學校，歷任福岡日日新聞、日本新聞、高田日報、關川電力及京成鐵道會社理事。現任中央電氣會社董事及高田日報主幹。一九二〇年後，屢次當選爲衆議員，隸政友會黨，一九三六年被選爲該黨財政經濟部長。田中內閣時，任農林大臣祕書官，平居喜研究財政經濟問題。

武者小路公共 (Mushukoji, Kintomo)

前駐德大使，一八八二年生，東京府人。

人道主義派文藝家武者小路實篤之兄，一九〇六年考取外交官試驗，翌年畢業東京帝大法科德文法學系。歷任上海候補領事、外務省書記官、政務局第二科科長、駐德大使館三等祕書、駐比利時大使館參事、駐羅馬尼亞兼塞爾維亞、瑞典挪威丹麥及芬蘭全權公使等職，至一九三三年升任駐土耳其大使，一九三三年冬調駐德大使。一九三六年十一月二十五日，德日兩國間成立防共協訂，氏與有力焉，一九三八年辭職。前曾屢次出任國聯及一般軍縮會議日本代表隨員與代表。妻不二子，爲前外相本野之女；子爵本野盛一，乃其妻舅。

武富敏彦 (Takeomi, Toshiniko)

前駐土耳其大使，一八八四年生，佐賀縣人。

貴族院議員前民政黨最高顧問武富時敏之長子，一九一〇年東京帝大政治學系畢業，經外交官及領事官考試及第。歷任長春領事、駐墨西哥公使館三等祕書、外務省通商局第二科長兼農商務省書記官、駐法駐美大使館祕書、里昂總領事、外務省通商局長、駐美大使館參事官及任駐荷蘭公使，於一九二七年升任駐土耳其大使，一九四〇年辭職。前駐比大使安達峯一郎，係其妻父，自稱祖先爲華人後裔。

武者六藏 (Takebe, Rokuzo)

滿洲國務院總務長官，一八九三年生，石川縣人。

前文部省恩務局長現任帝國教育會理事武部欽一之弟，一九一六年東京帝國大學法科德文法學系畢業，即入內務省，由地方局事務官、內務大臣（中橋內相時）秘書官、大臣官房文書科長，以三十九歲之青年出任秋田縣知事。一九三四年受長岡隆一之選，就任關東廳司法部長，辦理撤廢日本赤滿之治外法權。一九三六年繼長岡後，任滿洲國務院總務廳長，一九三八年奉任華北開發華中振興兩會社之籌備委員。青木一男升任企劃院總裁後，以近衛之介，擢充該院次長，一九四〇年七月繼星野直樹後，任現職。

武部治右衛門 (Takebe, Jienon)

南滿鐵道會社理事，一八八七年生，岡山縣人。

由東京北中學於一九一〇年畢業神戶高等商業學校，在學時以成績優異見稱。出校後，即入南滿鐵道株式會社（簡稱滿鐵），任運輸販賣等科職員。嗣歷任哈爾濱、馬尼拉、新加坡各辦事處主任，於一九二〇年升總公司興業部販賣科長。一九二三年及一九二六年兩次赴歐美公幹，一九二五年任參事，一九二七年任監察人兼典科科長。後由殖產部次長、地方部次長及商事部長，於一九三六年十月日滿商事會社成立後，轉任該社經理，是年十一月當選為滿鐵理事，仍兼前職，此外並兼滿洲化學工業會社董事。

武藤 肇 (Muto, Akira)

陸軍少將，一八九三年生，熊本縣人。

士官學校第二十五期步兵科及陸軍大學畢業後，復留學德國，除軍事外，對勞動問題及教育問題，亦有相當之研究。曾任陸大兵學教官及陸軍省軍事科高級科員多年，富於政治意識，主張廣義國防最力。一九三六年六月，調任關東軍第二科科長，一九三七年三月任參謀本部作戰科科長，一九三八年任華北陸軍總指揮部幕僚長，至一九三九年八月以少將任陸軍省軍務局長，以迄於今。

明石照男 (Akashi, Terno)

第一銀行總經理，一八八二年生，岡山縣人。

澤澤榮一子爵之婿，一九〇六年東京帝大法科畢業，即入三菱銀行。嗣又赴國外留學，以澤澤之介，入第一銀行，由大阪分行副經理、京都分行經理及總行營業部部長，於一九一四年，繼石井健吾後，任澤澤財閥大本營第一銀行之第四任總經理。以迄於今。兼職甚多，東京銀行公會及票據交換所，事實上由彼所主宰。

田代 忠 (Tadaya, Tadashi)

駐芬蘭公使，一八八七年生，東京府人。

一九一四年東京帝大法科法學系畢業，即任日德戰爭之陸軍通譯，後調為青島民政部鐵道事務官。一九二〇年及第外交官領事官考試，派任奉天副領事，不久調任駐德大使館三等秘書。前後在德達十七年之久。一九三七年由駐德一等秘書，轉為海南島第一任總領事。一九三九年任外務省文書

料科長；一九四〇年九月升駐芬蘭公使，以迄於今。

林 久治郎 (Hayashi, Kyujiro)

前駐巴西大使，一八八三年生，栃木縣人。

氏爲林三左衛門之次子，一九〇三年早稻田大學政治科畢業，一九〇七年及格外交官及領事官考試，翌年委爲吉林領事。嗣後歷任天津濟南各地領事、青島守備軍民政部事務官、駐美大使館二等及一等祕書、福州總領事、台灣總督府事務官、駐暹羅公使等職，至一九二八年轉任奉天總領事，一九三〇年冬升任駐巴西大使，一九三五年回國。一九三六年有吉明辭職時，曾有出任駐華大使之說。

林 仙之 (Hayashi, Nariyuki)

陸軍大將，一八七七年生，熊本縣人。

一八九七年一九〇八年先後畢業於士官學校及陸軍大學。日俄戰爭時，以中尉從軍，其後歷任陸軍砲工學校及陸軍大學教官、步兵第三聯隊長、山口聯隊區司令官、步兵學校教育部長、步兵第三十旅團長、朝鮮軍參謀長、陸軍士官學校校長、教育總監部本部長、第一師團長、東京警備司令官等職，至一九三三年晉級大將，翌年編入豫備役。曾改竊步兵操典，崇信神道，在陸軍中爲中間派人物，現任傷痍軍人委會長。

林 桂 (Hayashi, Katsura)

陸軍大將，一八八一年生，和歌山縣人。

士官學校第十三期步兵科及陸軍大學（一九〇九年）畢業。日俄戰爭時，以近衛步兵聯隊少尉從軍，旋升中尉，任近衛第二旅團副官。其後歷充駐德及丹麥武官、參謀本部附、陸軍步兵學校陸軍大學海軍大學教官、近衛步兵第一聯隊長、陸軍省軍事科長、步兵第一旅團長、陸軍省整備局長、參謀本部第四部長、軍事調查會委員長、教育總監本部長等職，至一九三五年調升第五師團長，一九三七年八月晉級上將，同時編入預備役。氏爲宇垣派之重鎮，因其前妻爲三井財閥總帥團琢磨之女，後妻爲大倉財閥大倉喜八郎之女，富有資財，故世人多以諛稱之。

林 博太郎 (Hayashi, Hirohoro)

貴族院議員，一八七四年生，山口縣人。

舊山口藩士林友幸之孫，友幸有功明治維新，晚年又任樞密院顧問官及宮中養育主任，封伯爵，氏繼其後，襲受爵位。一八九八年東京帝大文科畢業，復留學歐洲。歸後歷任學習院及東京高等商業學校教授，一九一九年轉東京帝大教授，同年得文學博士學位。一九一四年後，當選爲貴族院議員。一九三二年循齋藤首相之請，出任南滿鐵道會社總裁，至一九三五年辭職。現除貴族院議員外，兼任東亞產業協會名譽總裁及教育審議會委員。

林 義秀 (Hayashi, Yoshinide)

陸軍少將，一八九三年生，和歌山縣人。

士官學校第二十六期步兵科及陸軍大學畢業。一九二四年任參謀本部地誌班班員，一九二四年任天津日駐屯軍司令部附，一九二七又調回地誌班，一九二九年任一九三二年任關東軍司令部附，派在齊齊哈爾服務。一九三五年任天津日駐屯軍參謀，一九三六年五月調為調查班班長，一九四〇年八月晉級少將。

林 銑十郎 (Hayashi, Senjuro)

前內閣總理，陸軍大將，一八七六年生，石川縣人。

士官學校第八期步兵科及陸軍大學一九〇三年畢業。翌年日俄戰爭發生，以大尉任金澤第九師團第六旅團副官，在乃木希典大將麾下，參加圍攻旅順要塞。是年八月下旬，盤龍山東舊砲台一役，曾受重傷。其後歷任朝鮮駐軍司令部附、步兵第三聯隊附、步兵第五十七聯隊長、陸軍士官學校豫科長，教育總監部附、步兵第二旅團長、東京要塞司令官、陸軍大學校長、教育總監本部長及近衛師團長等職，嗣出任朝鮮軍司令官，時值濛濛變爆發，氏將駐紮朝鮮之第二十師團第三十九旅團調渡鴨綠江援助多門師團，進佔吉黑，故日人稱之為越境將軍，或「現在之西鄉隆盛」。一九三二年四月晉級大將，五月轉任教育總監兼軍事參議官，一九三四年一月繼荒木貞夫後，任陸軍大臣，是年七月閣內閣成立，仍繼

聯。氏在陸相任內，大展手腕，勵行肅軍，罷免教育總監巖崎甚三郎及第二師團長秦真次等，故被目為統制派之領袖，而居中策劃之軍務局長永田鐵三，遂因是而被相澤三郎中校刺死於官署，事後引咎辭職，而由川島義之繼任。一九三六年二、二六事變時，與真崎甚三郎、阿部信行、荒木貞夫及川島義之等五大將，同時退入豫備役。一九三七年二月繼廣田弘毅後，出任總理大臣，在任時，標榜祭政一致之政治思想，於預算案通過後，忽而解散議會，後總選舉結果，議會獲勝，乃自請辭職，賜國務大臣禮遇。生平篤信佛教，謂：「必有宗教思想，始能獸身保國，並可得上天呵護」。年來頗致力於聯絡回教及喇嘛教徒，自任回教會長。日本本無回教，近年始於東京建立清真教寺，招集土耳其緬甸印度等回教教友，講演摩舉教義。

林 賴三郎 (Hayashi, Raishuro)

樞密院顧問，一八七八年生，琦玉縣人。

氏原為武州忍藩三輪壽三之四子，後入贅林有禮家，故改今姓。幼時因家境清貧，曾充郡公所工役，其後刻苦自勵，於一八九七年畢業於中央大學前身之東京法學院，並曾得法學博士學位。歷任東京、仙台各地方法院控訴院推事檢事，司法省監獄局長及刑事局長，并任司法次官，達七年之久，至一九〇〇年任大審院庭長，一九三二年任檢察總長，旋升大審院院長。一九三六年三月，廣田內閣成立，繼小原直後

爲司法大臣。翌年一月，勅選爲貴族院議員，三月辭大臣職，十二月充任樞密院顧問，以迄於今。氏以二十餘年之法官生活，對於司法行政及審判案件，均有豐富之經驗，所著刑事訴訟法，亦頗馳名。

林 彌三吉 (Hayashi, Yamitrich)

陸軍中將，一八七七年生，石川縣人。

士官學校第九期及陸軍大學畢業，曾留學德國。日俄戰爭時，以中尉從乃木希典大將攻旅順，受傷卹地，謠傳陣亡，家中且爲之設奠致祭。其後歷任山縣有朋元帥之副官、陸軍大學兵教官、參謀本部科長、陸軍省軍事科長、步兵第三十七聯隊長、第十四師團參謀長、駐華使館武官、步兵第三旅團長、步兵學校校長、第四師團長及東京警備司令等職，至一九二七年晉級中將，一九三五年編入預備役。日本出兵西伯利亞時，轉戰各地，頗負盛名。

東 武 (Azuma, Takeshi)

衆議院議員，一七〇年生，北海道入。

原籍奈良縣吉野郡十津川，一八九〇年東京法學院畢業。當畢業之前一年，故鄉受洪水巨災，人畜漂流，室廬蕩然，氏適歸家園，建議籌黨，移住北海之石狩川樺戶郡，率二千六百人以往，開墾荒地，建立新村曰新十津州，今已人口二萬，年生產達二百餘萬圓，世多稱之。氏除盡瘁於建立新村外，復往營北海時事及北海太晤士各新聞，北海太晤士爲

日本第一流之地方報，氏爲大股東，今尙任顧問之職。後由北海道第二區當選爲衆議員十次，隸政友會籍，在會中獨立孤行，索然不阿。對農事問題，積有相當研究，爲政友會中唯一之「農政通」，一九二六年田中內閣時，曾任山本第二郎下之農林次官，別號牧堂。

東 榮二 (Azuma, Eiji)

前商工省燃料局長，一八九四年生，鹿兒島縣人。

早歲曾隻身赴墨西哥，任領館侍者，因感移民生活之苦，回國出都文中學第一高等學校，於一九二〇年畢業東京帝國大學法科，即入農商務省。歷任該省統計局科員、特許局登錄科長、貿易局通商科長、官房會計科長、文書科長及東京礦山監督局長等職，至一九三五年任商務局長，一九三七年六月任礦山局長，十月任內閣企對廳產業部長，一九三八年七月任工務局長兼臨時物資調查總務部長，一九三九年任燃料局長官，一九四一年他調。以在商工省甚久，隱然爲一省內之領袖人物。

東條英機 (Tojo, Eiki)

內閣總理大臣兼陸軍大臣，一八八五年生，岩

手縣人。

東條英機之子，士官學校第十七期步兵科第一名及陸軍大學畢業，(士官畢業之期間，遲板垣一年，而畢業陸大，則較板垣早一期。)曾留學德國。歷任陸軍省軍務局科員、

整備局動員科長、陸軍技術會議議員、步兵第一聯隊長、參謀本部作戰科長兼陸軍通信學校研究部部員、陸軍軍需會議委員、陸軍兵器本廠附、士官學校幹事兼教務長、陸軍調查部長、步兵第二十四旅團長、關東軍憲兵司令官、至一九三七年三月繼板垣征四郎後，任關東軍參謀長；一九三八年五月（第一次近衛內閣時代）板垣任陸相後，調任陸軍次官兼陸軍航空總監；一九四〇年七月第二次近衛內閣成立，升任陸相。兩年七月第三次近衛內閣時代，仍蟬聯，是年十月繼近衛後組閣，並晉級大將，初兼內務陸軍兩大臣，旋內務大臣一職，由湯澤三千男担任。氏才情並茂，處事果敢，組閣後，於十二月八日即發動大東亞戰爭。

東松茂德 (Togo, Shigenori)

前駐蘇大使，一八八三年生，鹿兒島縣人。

一九〇八年畢業東京帝國大學文科德文學系。一九二二年獲取外交官領事官考試，即以隨習領事名義，派赴奉天服務。嗣後歷任駐瑞士公使館三等秘書、駐德大使館二等秘書、外務省歐美局第一科科長、駐美大使館一等秘書、駐德大使館參事，至一九三三年升任歐美局長。在歐美局第一科長時，廣用私設任局長，日俄復交之談判，即由氏主持，故深為廣田所器重。歐戰末年，德日二國尚未脫離敵對關係之際，氏隻身深入德境，調查戰後該國之政治經濟，歸而作極詳情之報告，極得外務當局贊許。此項報告書之材料，據云係

其未婚妻德國女子愛琪所供給，至今猶為世人所詬稱。一九三七年三月升任駐德大使。一九三八年張鼓峯事件發生後，繼重光後任駐蘇大使，一九四〇年辭職歸國。氏常識豐富，對內政問題，尤為關心，綽號博士，貌如學究，不多說話，而能把掘問題要點，於厚重之中，帶有強強之氣魄及攻擊之膽量，為今日日本外交界中唯一之「德國通」。

松元 (Matsuhita, Gen)

海軍中將，一八八四年生，福岡縣人。

一九〇三年海軍兵學校畢業，即任出雲艦分隊長、第一艦隊長及滿洲分隊長等。至一九〇九年及一九一〇年，又先後畢業海軍大學校及海軍砲術學校高級班。其後歷任高雄砲術長兼分隊長、薩摩分隊長、第一艦隊參謀、阿蘇砲術長、艦政本部部員、造兵監督官、第四戰隊參謀、海軍省副官、駐英大使館武官、海軍省人事局第一科科長、金剛艦長、第三戰隊司令官、海軍兵學校校長等職，至一九三四年晉級中將，調舞鶴要港司令官。翌年以海軍特使名義，訪問德義兩國，宣稱「日本海軍，無論如何，須掌握遠東之制海權，佔有一定必要之經濟」。一九三六年三月繼百武源空後，任佐世保鎮守府司令長官，是年十一月編入預備役。氏在海軍省人事局長時代，對倫敦條約問題，即力主採取強硬態度。

松方幸次郎 (Matsukata, Kojiro)

日蘇石油販賣所總理，一八六六年生，兵庫縣人。

氏爲明治元勳日本第一任大藏大臣松方正義公爵之第三子，東京帝國大學畢業後，復留學牛津、巴黎、耶魯等大學、曾任東京帝國大學講師、總理大臣秘書、川崎造船所、神戶瓦斯、神戶製鋼各會社經理及神戶商業會議所特別議員。是時松方一門，一方面以十五銀行爲中心，握有濠昌銀行、國際信託會社等金融機關，一方面又擁有川崎造船所、川崎國際汽船、常盤商會、帝國製糖等各重要事業，遂形成所謂松方財閥。一九二七年，受金融恐慌影響，陸續倒閉，遂告沒落。一九三〇年九·一八事變後，軍需工業勃興，氏利用時機，遂於一九三三年五月，遠赴蘇俄，簽定販賣蘇產石油契約，並得鄉誼之助之援助，成立日蘇石油販賣所，松方財閥，於是重見繁榮。廣田初任外相時，以氏與羅斯福大總統同學友善，曾被派赴美，從事側面工作，一時傳將任爲駐美大使，一九三八年又代表鮎川義介之滿洲重工業會社赴美。氏爲主張實施八小時工作制之第一人，嘗以日本資方代表資格，出席勞工會議。善收攬人心，某次見一工人，倦坐路隅，引與同車，送之歸家，於此可見一端。性好洋繪，在倫敦巴黎時，曾購入洋繪，達二三千萬圓之多云。

松井太久郎 (Matsui, Takuro)

陸軍中將，

士官學校第二十二期步兵科及陸軍大學畢業，久任參謀本部地誌班班員及蒙古特派員。九·一八事變時，任關東軍

第四科科長，與向田寬三二人，專司對外宣傳工作，長於文筆，並嫻英語及蒙古語。後調任駐熱河大隊長、大阪聯隊區司令官及承德特務機關長等職，至一九三六年十一月繼松室孝良後，充駐北平特務機關長。蒙疆政府成立後，任最高軍事顧問，一九四〇年轉滿洲國治安部最高顧問。

松井石根 (Matsui, Iwano)

陸軍大將，一八七九年生，愛知縣人。

士官學校第九期步兵科及陸軍大學畢業。日俄戰爭時，適就學陸軍大學，即以步兵第六聯隊中隊長從軍，戰後重復入校，於一九〇六年以第二名畢業。其後歷任參謀本部中國班班員、步兵第三十九聯隊長、奉天特務機關長、海參崴派遣軍參謀、關東軍司令部附、步兵第三十五旅團長、駐廣東武官、駐上海武官、駐華公使館武官、參謀本部第二部長(專司中國情報事務)、第八師團長、第十一師團長、日內瓦軍縮會議陸軍代表及軍事參議官等職，前後駐華達十三年。曾組織大亞細亞協會，自任會長。於一九三三年晉級大將，一九三五年八月編入預備役。一九三七年八月充任上海方面派遣軍陸軍部隊最高指揮官，是年十二月十三日攻下南京，一九三八年三月辭職歸國，其後曾任內閣參議。軀幹瘦小，能操華俄法三國語言。與其弟松井七夫(曾任張作霖之軍事顧問)，並以「中國通」著名。

松井 命 (Matsui, Makoto)

陸軍中將，一八八三年生，福井縣人。

士官學校第十六期工兵科畢業，曾任航空學校研究部主事、陸軍通信學校研究部幹事、電信第一聯隊長、陸軍省兵器局材料科科長、陸軍技術本部第二部部长及築城本部長工兵監等職，至一九三六年晉級中將，翌年三月升任第四師團長。事變發生後，轉戰各地，一九三八年秋，調為中部防衛司令官，一九四〇年辭職。

松井春生 (Matsui, Haruo)

前內閣東北局長，一八九二年生，三重縣人。

一九一六年東京帝大法科政治學系畢業，同年即供職內務省。一九一八年轉任千葉縣理事官及視學官，一九一九年因得橫田千之助之介，轉任法制局參事官，一九二七年內閣創設資源局，任該局書記官兼法制局書記官，以研究資源對策，派赴歐美視察。一九二八年歸國，仍服務資源局，歷任該局事務官、總務部長兼計劃部長。後又兼東北振興事務局局長。岡田內閣時，根據廣蔭國防之主張，調查國情，樹立國策，以突破內外之非常局面，乃設立內閣調查局，以氏著有經濟參謀本部論，對此夙有研究，任為首席調查官。一九三六年廣田內閣成立後，任為資源局長，仍兼東北振興事務局局長。入秋，東北振興事務局改組為東北局，辭去資源局職務，專任東北局局長，一九三八年担任全日本絹織工聯理事長，翌年兼日本商工會議所理事。

松井源之助 (Matsui, Gennosuke)

陸軍少將，一八九一年生，廣島縣人。

士官學校第二十二期步兵科及陸軍大學畢業，久任參謀本部中國班班員。一九二四年派至漢口長沙等地，担任特工，一九二九年派駐迪化，一九三二年任關東軍參謀，翌年調駐承德，後派為張家口特務機關長，在日本陸軍中號稱「蒙古通」。一九三六年派充廣島文理科大學軍事教官，後轉任某聯隊長，一九三八年七月編入預備役，並晉級少將。

松永 材 (Matsunaga, Sai)

維新制度研究會委員長，一八九二年生，高知縣人。

一九一九年東京帝大文科哲學系畢業。一九二〇年任早稻田大學哲學講師，一九二三年兼任國學院大學哲學教授，以迄於今。年來日本之革新團體，雖大多標榜「日本主義」，然所謂「日本主義」者，其具體內容，又因團體主持者主觀之不同，而不無差異。故氏以為欲求「日本主義」陣線之統一，先應求「日本主義」內容之統一，因有「維新制度研究會」之創設，氏現任該會委員長，本此理論，力事鼓吹，其中心人物，有木島完之（血盟團事件首領，井上日昭之盟友）、及赤松克麿等，與橋本欣五郎所指揮之「大日本青年黨」，為互相呼應之姊妹團體。

松平忠久 (Matsudaira, Tadahisa)

外交官，一九〇四年生，長野縣人。

一九二五年東京外國語學校中國語科畢業，一九二七年留學廣東嶺南大學，並擔任該校日本語講師，後赴北平漢口等處。一九三一年及第外交官領事官考試，派赴駐美大使館服務，一九三六年任廣東副領事。一九三九年升汕頭領事。

松平康昌 (Matsudaira, Yasunasa)

侯爵，內大臣府祕書官長，一九九三年生，福井縣人。

氏爲德川家康後裔，代爲福井縣之富豪，公爵德川家達之婿，娶受侯爵。一九一九年京都帝大法科畢業，後復留學英國倫敦大學。曾任米穀調查局委員等職，一九三八年任現職至今，此外復兼明治大學教授及貴族院議員。氏爲近衛公爵好友，公爵三條公輝、德川家達，侯爵德川義親，伯爵廣橋真光，子爵加藤泰造、酒井忠英、竹屋春光、戶田康保、鍋島直庸、藤波茂時、松平慶明，男爵伊達宗克、三井高公、毛利元良，以及顯宦梅原逸太郎、西邑清……等，皆其親姪。在貴族中，最富有革新意識，好打網球。

松平恒雄 (Matsudaira, Tsunoo)

宮內省大臣，一八七七年生，東京府人。

氏爲舊會津藩主松平容保之子，子爵松平保男之兄，伯爵山田英夫之弟，一九〇二年畢業東京帝大法科政治學系，經外交官領事官考試及格，翌年派任駐英使館三等祕書，一

九一〇年參與修訂條約事務，一九二二年（民國元年）任駐華使館二等祕書。其後歷任天津總領事、西伯利亞派遣軍政務部長、外務省歐美局長、華盛頓會議全權委員之事務部長及外務次官等職，至一九二四年擔任爲駐美大使，一九二八年轉任駐英大使，一九三六年春辭職，是年三月繼湯淺倉平後，任宮內省大臣。氏以全權代表資格，担任重要交涉者凡三次：一爲一九二二年，關於日俄復交之長春會議，能使兩國交涉，漸入正軌。二爲一九三〇年之倫敦海軍會議，三爲一九三四年之倫敦海軍預備會議，氏任首席代表，宣告廢棄華盛頓海約。體軀肥碩，善交際，在學生時代，爲擊劍之主角，游泳之選手，後經磨練，乃成面面周到之人物，長女爲皇弟秩父宮雅仁寬妃。

松平賴壽 (Matsudaira, Yoritaga)

貴族院議長，一八七三年生，東京府人。

氏爲高松藩主松平賴聰伯爵之子，一九〇二年東京專門學校法律科畢業，後舉爲貴族院議員，經副議長，繼近衛文麿後，而任議長，隸研究會系，氏在舊貴族中，最富實力。第十五銀行倒閉後，貴族中人，間以存款無着，生活拮据，氏能慷慨解囊，予以資助；對於鄉里清寒子弟，亦肯力爲援手，故人望頗佳。現其兼任之職務有：早稻田大學維持會會長，本鄉中學校校長，大東文化學院總長，大日本蠶絲會、大東文化協會、帝國馬匹協會各會頭，日本中央蠶絲會、帝國

水難救濟會各會長，救生會副會長以及恩賜財團軍人後援會顧問等職。

松本治一郎 (Matsumoto, Jichiro)

衆議院議員，一八八四年生，福岡縣人。

氏爲「水平運動」之急進份子。水平運動，起於歐戰後，本爲日本特殊部民「穠多」「非人」之自己解放運動，要求與日本普通人民，取得平等待遇，至一九二五年轉而與無產黨接近。氏爲主持該項運動之水平社之中央委員長，當一九三六年秋，發生無產團體運動，企圖結成人民陣線之時，負責拉攏「勞農無產協議會」與「社大黨」者，即爲氏與全國農民組合長黑田壽男二人。後雖未能實現，而氏之思想，似依然未有變更。爲人富於熱情，早歲從事土木承攬業，一九三六年二月以後，出福岡縣二次選爲衆議院議員。

松本忠雄 (Matsumoto, Tadao)

衆議院議員，一八八九年生，長野縣人。

一九〇九年上海同文書院政治科畢業，初任大和新聞記者。在記者時期，以能華語，管仲加藤高明游歷中國，遂被信任。一九二四年加藤出任總理大臣，擢爲隨從祕書，一九二六年改任東京市助役。自一九二四年以來，連續當選爲衆議院議員。曾參加國際商業會議及列國議會同盟會議，游歷歐美諸國，一九三七年春，任外務省參事官，一九三八年辭職。

松本勇平 (Matsumoto, Yuhai)

陸軍少將，一八七七年生，石川縣人。

士官學校第十期砲兵科畢業。歷任金澤砲兵第九聯隊附、砲兵學校教官、野砲兵第五聯隊大隊長、第一師團兵器部長、奄美大島要塞司令官、仙台野砲兵第二聯隊長、廣島陸軍兵器分廠廠長等職，至一九三一年以少將編入豫備役。曾參加日俄戰役及西伯利亞戰役，一九三六年左右，任小川順一郎所創立之「愛國勞動農民同志會」會長及「新經濟國策研究社」幹事。

松本重治 (Matsumoto, Junji)

同盟通信社局長，一八九九年生，兵庫縣人。

陸奧宗光之外甥，松方七次郎之婿，父某創辦九州電氣鐵道會社。氏由東京第一高等學校，於一九二三年畢業東京帝國大學法科後，留學英國劍橋大學（與西園寺公一同班）。一九二八年歸任東京帝大助教，兼法政、中央及日本女子大學講師，至一九三二年轉入新聞聯合通訊社，一九三五年又轉入同盟通信社任上海局長，翌年升任華南總局長。一九三九年十一月調任東京本社總局長，兼任昭和塾幹事。字垣外相時代，曾擔任某外交要職，未就。一九四〇年十月會傳將出任駐美國大使。

松本健兒 (Matsumoto, Kenji)

陸軍中將，一八八六年生，佐賀縣人。

士官學校第十九期步兵科及陸軍大學（一九一六年）畢業。歷任近衛步兵第四聯隊第一大隊長、參謀本部部員、陸大兵學教育、陸軍省軍務局軍事科副科長、天津駐屯軍參謀長、步兵第四十三聯隊附、步兵學校研究部主事及參謀本部歐美科科長，至一九三三年調任第二十師團第七十八聯隊長，一九三四年任駐美大使館武官，一九三六年轉陸軍大學研究部主事，一九三七年三月繼秦雅尚之後，任近衛步兵第一旅團長，一九三九年三月晉級中將。

松本蒸治 (Matsunoto, Jōji)

前商工大臣，一八七七年生，岐阜縣人。

一九〇〇年東京帝大法律學系畢業，即任母校助教，不久派赴英德法諸國研究商法，歸國後，升任教授，一九一〇年得法學博士學位。其於政界，歷任商工省參事官、法制局長官、南滿鐵道會社副總裁、關西大學校長等職，至一九三二年勳選為貴族院議員，一九三四年二月繼中島久萬吉後，任商工大臣，是年七月辭職。現除貴族院議員外，兼任帝國學士院會員、中央大學教授及東京復興助成會會員，此外又兼東京瓦斯、安田保險、安田保善、川崎信託等各會社顧問。性情溫厚，關於商法之著作甚多。一九三七年二月，林銑十郎內閣時，曾傳將軍任商工大臣。

松本 學 (Matsumoto, Marabu)

貴族院議員，一八八六年生，岡山縣人。

一九一一年東京帝國大學法科畢業，即入內務省，由事務官、書記官，歷任神社局長（一九二五年）、靜岡縣知事（一九二六年）、鹿兒島縣知事（一九二八年）及福岡縣知事（一九二九年）等職，至一九三一年調為社會局局長。齋藤內閣時，轉任警保局長，後隨齋藤內閣辭職，曾與林房雄等革新派文人，組織日本中央文化聯盟，發行小冊子，倡導新日本主義，欲以此活動於政界，因與宇垣一成同鄉，故常出入其門。

松江春次 (Matsue, Haruji)

南洋興發會社社長，一八七五年生，福島縣人。

由會津中學於一八九九年畢業東京高等工業學校應用化學科，初入大日本製糖會社，不久以農商務省實業練習生之名，留學美國 Iowa 大學，畢業後，進美國某糖廠，於聖誕節之夜，潛入試驗室，密取塊糖製造祕法以歸，即升大阪糖廠工務長。後於台灣創立斗南製糖會社，自任專務董事，一九二五年轉入新高製糖會社。時當歐戰爆發，營業大振，願蔗田問題，不易解決，於是隻身赴南洋之羣班島 (Saribini) 在關島東北，親歷燻煙瘴氣之鄉，尋求適於植蔗之地，設立南洋興發會社，先從斬伐林木着手，於一九二三年開辦最新式之糖廠，著著成功。其後一九三五年又在巴拉汪 (Palawan I.) 及新畿內亞 (New Guinea) 地方，領得絕大面積之土地，栽培甘蔗及棉花，豫定不久之將來，不但日本

製糖原料；可以無慮匱乏，即其棉花需要量三分之一，亦可取給於該會社。除此以外，氏并在南洋兼營橡膠、採珠、鑄鐵、海運、造船等事業，日本在南洋七萬餘僑民中，四萬餘僑民，係屬於氏主宰下南洋興發會社之職員工人，因之遂以「南洋王」自稱。

松村久義 (Matsumura, Hisayoshi)

前衆議院議員，一八九九年生，宮城縣人。

一九二三年及一九二五年先後畢業東京帝國大學法學部暨經濟學部。曾任東京名古屋兩地方裁判所推事，後辭職執律師業。一九三一年當選爲衆議院議員，長於辯才，爲民政黨中之急進分子。對於農村問題，頗有研究。

松村秀逸 (Matsumura, Hidesugu)

陸軍大佐，一九〇一年生，熊本縣人。

士官學校第三十二期砲兵科及陸軍大學畢業。歷任關東軍新聞班班員、陸軍省軍務局科員及天津駐屯軍新聞班班長，至一九三九年冬，繼清水盛明後，任大本營報道部長。

松村 壽 (Matsumura, Susumu)

興亞院文化部部长，一八八五年生，岡山縣人。

一九一六年東京帝大醫學部衛生科畢業，一九一九年任千葉醫科大學助教，一九二二年派赴歐洲留學，一九二四年升任母校衛生學主任教授，好與中國留學生交往，並担任樹

德會會長，專事指導學生之精神生活。一九三五年派赴中國、泰國及南洋各地考察衛生行政。興亞院成立後，任現職，會得醫學博士學位。

松岡洋右 (Matsuoka, Yosuke)

前外務大臣，一八八一年生，山口縣人。

幼年以遭幕府之亂，家業蕩然。十四歲隨其從兄渡美，寄寓某蘇格蘭人家，以苦學生畢業於Oregon州大學法科。二十五歲時返國後，應外交官及領事官考試，以第一名獲售，當以候補領事派赴上海。其後歷任福州上海總領事，關東都督府外事科長、秘書、文書科長及外務省情報部長。嗣又游歷美蘇諸國，以不憚於內田康哉之柔備，脫離外務省，由三浦觀樹（陸軍中將）之介，任南滿鐵道株式會社（簡稱滿鐵）理事。在滿鐵任內，甚爲努力，吉敦及鄭洸兩鐵道之建設，氏之功居多。後由田中義一之推薦，升爲副總裁。一九三〇年及一九三二年兩次當選衆議員。一九三三年日本脫退國際聯盟時，係任赴會首席代表，回國從事政黨解消運動，未成。一九三五年九月重入滿鐵，任總裁職，至一九三八年改任內閣參議，一九四〇年七月，任近衛第二次內閣之外務大臣兼拓務大臣，一九四一年七月辭職。在職僅一年，而成立中日條約，調停泰越糾紛，手訂三國同盟，渡歐聘問德義，歸途又與蘇聯訂立中立條約，魄力雄偉，造成今日日日本外交之局面。平素富於理想，能言善辯，人比諸後藤新平。若

有滿蒙運動、遼東之櫻探、昭和維新等書。

松岡駒吉 (Matsukata, Komakichi)

日本勞動總同盟會長，一八八八年生，鳥取縣人。

十七歲入舞鶴海軍工廠，後轉入室蘭製鐵所充「熟練工」，一九一二年會指導製鋼所之罷工，一九一四年任友愛會支部會計，一九一七年受鈴木文治之邀請，入友愛會本部任主事及會計，一九二六年鈴木以日本勞方代表名義，赴歐出席國際勞動會議，邀充顧問同往。及社會民衆黨成立，被舉爲中央執行委員。一九二九年以勞方代表，重赴歐洲出席國際勞動會議。現任「全日本勞動總同盟」(簡稱全勞，一九二〇年由友愛會改組)及「日本勞動組合會議」會長。全勞有加盟組合六十八，會員五〇五四六人，係支持社會大衆黨之有力無產團體。一九三六年秋，勞農無產協議會擬與社會大衆黨，合併而結成人民陣線之時，社大黨書記長藤生久與氏，均力加反對，卒致決裂，復唱「資本奉還論」，其思想已與革新派一致。兼營公寓，故非之者，譏爲公寓組。著有野田大勞動爭議、勞動組合論等書。

松延繁次 (Matsunobu, Shigeji)

大日本赤忱會會員。

早稻田大學政治科中途退學，即從事社會運動。一九二四年任大川周明主持之行地社專門部長。一九三一年創立日本社會主義研究所。大川之與赤松克麿一派聯合，並與高島

素之門下之石川埠十郎津久井龍雄等，互相提攜，皆出氏斡旋之力。一九三二年二月大川組成神武會，氏任勞動部長，始與橋本欣五郎相知，力勸橋本致力於「昭和維新」之運動。一九三五年神武會解散後，與橋本之關係，遂更趨密切。一九三六年八月肅軍運動時，橋本與建川美次，同時退出現役，據聞即出於氏之懇請。橋本解職後，即創立大日本青年黨，提倡「天皇歸一主義」，即舉一切所有，歸於天皇，深引起各方之注意，傳亦由彼從中策劃。彼之於橋本，與近藤榮藏之於小林順一郎，蓋相類似。一九四〇年大政翼贊會成立，該黨乃改組爲思想團體，取名「大日本赤誠會」，由橋本主持，氏仍參與其間。

松田順 (Matsumiya, Hajime)

無任所大使，一八九三年生，滋賀縣人。

一九一六年東京帝國大學法科畢業，經外交官領事官考試及第，即入外務省。歷任外務省歐洲局科員、大臣官房文書科科長、會計科科長(此時白鳥敏夫任情報部科長)、駐義大利大使館參事(白鳥任大使時代)及駐匈牙利代理公使，至一九三八年十一月任外務省調查部長。一九四〇年七月繼谷正之後，代理外務次官。是年十月以無任所大使名義，派赴越南，擔任日越經濟談判代表。氏經白鳥提掇，飛黃騰達，成爲外務省少壯派之中心人物。第二次歐戰初起時，與栗原正等力主加入軸心同盟，迨貿易省問題發生，又首先提

出辭表，故與正統派人，似頗相左，然今後恐將繼松岡白鳥而為覆轡之巨擘。

松田孝良 (Mitsunori, Takayoshi)

陸軍中將，前西北軍軍事顧問，一八八七年生，東京府人。

士官學校第十九期騎兵科及陸軍大學畢業，曾任參謀本部中國班班員、滿蒙班班員、蒙古特派員、中國西北軍軍事顧問、關東軍司令部附及旭川第七師團參謀長等職，於一九三三年春，與白川軍曹同乘「滿洲號」飛機赴熱河，失事，不久被救，任駐熱河特務機關長。一九三六年繼土肥原後，升充駐北平特務機關長，一九三七年奉調任騎兵旅團長。大民會成立後，任高等顧問。

松浦淳六郎 (Matsura, Junrokuro)

陸軍中將，一八八四年生，福岡縣人。

故陸軍中將松浦實威之弟。士官學校第十五期及陸軍大學一九一二年畢業。歷任參謀本部部員、步兵第十三聯隊長、教育總監本部庶務科長、陸軍省副官、步兵第二十旅團長、陸軍省人事局長及步兵學校校長等職，至一九三五年晉升中將，調任第十師團長，一九三七年編入預備役。一九三八年新編一〇六師，又出任師團長。

松浦鎮次郎 (Matsura, Chinziro)

貴族院議員，一八七二年生，愛媛縣人。

一八九八年東京帝大法科政治學系畢業。曾任東京府參事官、文部省科長、秘書及專門學務局長，並會兼學習院評議員、維新資料編纂局長、震災預防評議會會長、普通文官考試委員長及學校衛生調查會會長等職，至一九二四年升任文部省次官，一九二七年任朝鮮京城帝大總長，一九二九年調九州帝大總長，翌年又兼勅選之貴族議員。九州帝大學生之思想，向甚複雜，氏任總長時，運用手腕，循循誘導，咸為翕服，一九三六年辭職，專任貴族院議員。一九三九年出膺米內內閣之文部大臣，一九四〇年辭職。會游歷德國，好研究漢文。

松田鶴平 (Matsuno, Tsurubei)

前鐵道大臣，一八八三年生，熊本縣人。

野田卯太郎（別名野田大塊，以一豆腐店主，努力於政黨運動，而獲任原敬內閣遞信大臣）之婿。早歲投身實業界，一九二〇年後，屢次當選為衆議院議員，隸政友會籍。曾任大隈內閣之內務次官。一九三二年舉為政友會之幹事長，一九三六年轉任總務，在派系上，雖屬鈴木喜三郎系，但性情圓通，對其他諸人，亦能相處翕然，與三井財閥，關係尤密。平沼內閣初成立時，會傳將出任無任所大臣，後任米內內閣之鐵道大臣，一九四〇年辭職。現除貴族院議席外，兼任菊池電鐵、再製樟腦會社社長及同盟通訊社、朝鮮紡織、滿州製麻各會社董事等職。

松隈秀雄 (Matsukuma, Hideo)

大藏省主稅局長，一八九六年生，神奈川縣人。

一九二一年東京帝大法科英文法學系畢業，經高等文官考試及第，入大藏省。歷任稅局科員、國稅科科長、大臣官局文書科科長、內閣調查局及企劃廳調查官，至一九三八年任營繕管理局總務部長。一九四〇年三月繼入間野武夫後，任銀行局長，是年十二月又繼谷口恆二後，轉主稅局長，以迄今日。氏為國策研究會會員，馬場錫一以後之各種稅制改革計劃，以及資金運用令特許銀行法等，均由氏負責起草，最為石渡莊太郎所器重。

板垣征四郎 (Itagaki, Seishiro)

朝鮮軍司令，一八八六年生，岩手縣人。

盛岡市舊南郡藩家臣其之第四子，士官學校第十六期步兵科及陸軍大學畢業。自少尉時起，除曾任廣島第五師團聯隊長一年半及游歷倫敦柏林等處半年外，其一生所任職務，無一不與中國有關。歷任參謀本部中國班班員、中國邊防軍參謀、雲南(會駐該處三年，時當唐繼堯雲南起義前後)漢口奉天等處特務機關長及公使館副武官(一九二四年在武官本莊繁之下)，足跡遍及我國各地，與岡村(壽次)土肥原(賢二)磯谷(廉介)，同稱為士官第十六期畢業生中，「滿洲通」之四金剛。九：一八時，任關東軍高級參謀，後由滿

洲國軍政部最高顧問、關東軍副參謀長、參謀長及第五師團長，至一九三八年五月，繼杉山元後，升任陸軍大臣。一九三九年八月調任駐華派遣軍參謀長，一九四一年七月七日，晉級大將，並任朝鮮軍司令官。

河上丈太郎 (Kawakami, Jotaro)

翼贊會常務幹事，一八八九年生，東京府人。

一九一五年東京帝大法科德文法學系畢業，由立教大學講師及關西學院教授，轉任神戶勞動學校講師，乃開始參加社會運動。由某研究會支部長，加入社會大眾黨，曾被舉為該黨中央執行委員。氏自學生時代，即以雄辯馳名，每登壇演說，大聲疾呼擊桌，宛如獅吼。一九二八年以來，屢次由神戶市當選為眾議員，若干小黨分立之無產陣營，得以聯合團結，氏奔走鼓吹之功居多。現除議席外，担任大政翼贊會之常務幹事，兼業律師，并於事務所內，附設一財政研究所，為政界中之精通財政經濟者。

河野正一 (Kawakami, Koichi)

日本興業銀行總裁，一八八六年生，山口縣人。

一九一〇年東京帝國大學法科德文法學系畢業，即入興業銀行。任鑑定科長時，適發生金融大恐慌，氏竭力襄助總裁結城豐太郎，以七千萬圓之鉅款，貸與幾瀕絕境之商家，使得復興。事後結城名聲鵲起，氏亦遂大為結城所器重，由

副理事於一九三六年擢升副總裁，一九四〇年十二月繼實木市松而任總裁，以迄於今。

河田 烈 (Kawada, Taro)

前大藏大臣，一八八四年生，東京府人。

祖先為淡路國河田莊地頭(官名)，父杰以詩文名，嘗任東京市助役。氏於一九〇八年畢業東京帝大法科政治學系。在學時已考取高等文官試驗，出校後，供職大藏省，初任稅務監督官、大藏大臣秘書官及大藏省書記官等，至一九一四年奉派為駐英法法務官，一九一六年歸國。後由主計局預算、決算科長、主計局長，於一九二九年在井上準之助藏相下，任大藏次官，一九三二年轉拓務次官。岡田內閣時，任內閣書記官長，以親任(特任)待遇，一九三四年十月辭職，勅選為貴族院議員。林銑十郎組閣時，嘗參預機密，有重任內閣書記官長之說。一九四〇年第二次近衛內閣成立，繼池田成彬而任大藏大臣，一九四一年七月辭職。

河本大作 (Kawanoto, Daisaku)

滿洲炭礦會社理事長，一八八四年生，兵庫縣人。

由中央幼年學校畢業於士官學校第十五期步兵科及陸軍大學(一九一四年)，初任第三十九聯隊小隊長，參謀本部中國班班員，海參崴派遣軍參謀，駐華使館副武官，陸軍大學兵學教育、步兵第十四聯隊等職，至一九二六年晉級上校。

，任關東軍高級參謀。一九三〇年在第九師團聯隊長任內，編入預備役。先是肄業士官學校時，荒木貞夫任該校區隊長，隊員三十三名，有「荒木會」之組織。氏即為其中堅分子，推宇都宮太郎及明石元次郎為首領，參加者有武藤信義、真崎甚三郎、荒木貞夫、岡村南次及板垣征四郎等。九·一八事變後，任關東軍囑託，並以濤海鐵路保安維持會監事之名，擔當整理西安煤礦之職。一九三二年十月選任為滿鐵道會社(滿鐵)理事，不久，繼十河信二後，兼任滿鐵經濟調查會會長。一九三五年理事任滿，經濟調查會亦併入新設之產業部，遂轉任滿洲炭礦公司理事長。氏與大川周明、菊池武夫等，俱為神武會之發起人。

河合良成 (Kawai, Yoshinari)

前滿洲國務院總務廳顧問，一八八六年生，富山縣人。

一九一一年東京帝大法科政治學系畢業，即入農商務省，至任高工局科長後，轉入東京證券交易所，被選為理事。一九二四年以其弟為川崎八右衛門之婿，復受總誠之助之汲引，轉任日華及福壽生命保險會社專務理事，遂成為川崎財閥之重要人物。「帝人斯案」發生時，氏因兼任帝國人絹(人造絲)會社理事，致為所累。一九三七年任滿洲國務院總務廳顧問，旋即辭去。現担任福壽及日華兩生命保險、帝國火災保險、菊池電氣鐵道、中央羊毛紡織各會社理事。以

前又曾任東京帝大經濟學部交易所講師，及東京商工會議所議員，著有國家改造之原理等書。

河合榮治郎 (Kawai, Eijiro)

評論家，一八九一年生，東京府人。

一九一五年東京帝大法學部政治學系畢業，即入農商務省。初任工廠監督官及臨時產業調查局事務官，一九一八年派赴美國考察，歸後升任農商務省參事官，一九二〇年辭職，轉任東京帝大助教，不久又留學歐美諸國，一九二六年升任教授，一九三六年又升為經濟學部部長。氏為自由主義信徒，對馬克斯主義與法西斯主義，均表示反對，一九三八年春辭職，曾被捕入獄。著有勞動問題研究、社會政策原理、格利因之思想體系、英國勞動黨之意識形態、學生思想問題、第二學生生活、歐洲最近之動向、法西斯主義批判等書。頭腦綿密，長於演說，在學生時代，辯才與鶴見祐輔齊名。

河合 操 (Kawai, Miso)

樞密顧問官，一八六六年生，大分縣人。

士官學校最早畢業生。由陸軍少尉，於一九二一年累升至陸軍上將。歷任士官學校及陸軍大學兵學教官、台灣總督府參謀、監軍府參謀、日俄戰爭時第三軍參謀長、陸軍省軍務局軍務科長、人事局長、步兵第七旅團長、陸軍大學校長、第一師團長、關東軍司令官、軍事參議官及參謀總長等職，一九二六年編入預備役。一九二七年動任為樞密顧問官。

氏為日本陸軍耆宿，現在高毅將校，殆無不出其門下，故二、二六事變時，曾擬推舉組閣，以病辭未果。（本書付印時逝世）

河村參郎 (Kawamura, Saburo)

陸軍省軍務局軍務科長

亦為作川村三郎，士官學校第二十九期步兵科第一名及陸軍大學畢業。歷任駐德大使館副武官及陸軍大學教官、陸軍省政策班班員、對滿事務局科員、軍務局高級科員，至一九三七年十二月調任天津駐屯軍高級參謀。一九三九年夏，助武藤辛出席天津日英會議，是年十月繼田中隆吉後，任現職，為人富於常識，善於聯絡各方。

河村恭輔 (Kawamura, Kyosuke)

陸軍中將，一八八四年生，山口縣人。

與寺內壽一同為山口縣茨市出身，士官學校第十五期砲兵科及陸軍大學畢業。曾留學德國，歷任參謀本部部員及庶務科長、西伯利亞派遣軍參謀、野炮兵第二十二聯隊長、野戰重炮兵第四旅團長、炮兵學校校長、津輕要塞司令官、日內瓦軍縮會議全權委員隨員、重炮兵學校校長以及京都第十六師團司令部附等職，至一九三五年八月，晉級中將。翌年二、二六事變發生後，繼堀丈夫後，任第一師團長，一九四〇年八月，舉為機械化國防協會會長。

河原田稼吉 (Kawarada, Kakichi)

大政翼贊會總務，一八八七年生，福島縣人。

原爲岡山縣人，與村就宥之第三子，後入嗣福島縣議會議長河原田盛美，故改今姓。一九〇九年畢業東京帝大法科政治學系，即入內務省。初任福島縣事務官、福岡縣理事官、熊本長崎各縣警察部部長、內務省書記官、警務局保安科長、內務大臣秘書官、社會局第一科長等職，一九二〇年、一九二三年及一九二八年，三次以政府代表資格，出席國際勞動會議，於一九二五年升任社會局勞動部長。一九二七年川村竹治任台灣總督時，選任總督府總務長官。一九三〇年擢爲內務次官，經中橋鈴木兩內相始行辭職，與政務次官松野鶴平，頗相契合，其時犬養內閣之書記官長森恪，亦深器重。一九三二年，五・一五事變發生後，引咎辭職，轉任勞資協調會理事。氏在內務省內，夙號爲水野鍊太郎幕下之要角，富融通力，好採納人言。一九三七年二月林銑十郎內閣成立，出任內務大臣。未幾隨林內閣辭職，入冬，勅選爲貴族院議員。一九三九年阿部內閣時，又任文部大臣，翌年大政翼贊會成立後，就現職，與近衛文麿，頗爲莫逆。

水野 一 郎 (Kono, Ichiro)

衆議院議員，一八九八年生，神奈川縣人。

一九二三年早稻田大學政治經濟科畢業，初任東京朝日新聞記者，一九三二年脫離該社而任農林大臣隨從秘書，

不久辭職，一九三三年以來，恆當選爲衆議院議員，隸政友會籍，對農村問題，頗有研究。平沼內閣成立後，曾在議會痛論時政，性愛運動，爲前政友會中新銳分子，前途有望之人物。

河野 密 (Kono, Misu)

衆議院議員，一八九七年生，千葉縣人。

一九二二年東京帝大法科畢業，即入東京朝日新聞社，翌年轉入大阪朝日新聞社，以與新人社同人從事社會運動被解職。一九二四年參加大阪市電氣總罷工事件，繼乃任京都同志社大學講師，兼從事學生運動。一九二六年辭去教職，與麻生久樹立日本勞農黨，被舉爲調查部長。後日本大衆黨成立，任書記長，不久被舉爲社會大衆黨中央常務執行委員。一九三七年二月以來，二次當選爲衆議員，是年四月，又會以日本全國勞動總同盟副會長名義，出席國際勞動會議。著有神聖家族、馬克斯之歷史社會及國家學說、功利主義論、反杜林論、唯物史觀經濟史等書。性好戲曲，常能袍笏登場云。

河野 密 (Kawabe, Syozo)

陸軍中將，一八八六年生，富山縣人。

前駐德武官河邊虎四郎少將之兄，士官學校第十九期步兵科及陸軍大學畢業。歷任步兵學校教導隊長、教育總監部第一科科长、駐德大使館武官(前後兩次)、步兵第三十

二聯隊長等職，迨一九三六年五月，日本擴充天津駐屯軍，以旅團長隨田代皖一郎來華。七七事變發生時，田代適臥病於醫院，一切均由氏主持，一九三九年一月升任教育總監本部長，四月晉級中將，現任滿洲方面某要職。

河邊虎四郎 (Kawabe, Torashiro)

陸軍中將，一八九一年生，富山縣人。

河邊正三中將之弟，士官學校第二十四期炮兵科，及陸軍大學畢業，櫻會會員。曾任駐俄使館副武官、參謀本部科員及科長等職，一九三八年，繼大島浩後，以少將任駐德大使館武官，明年兼任駐匈牙利使館武官。日德關係之能緊密，氏出力甚多。一九四〇年十二月歸任陸軍大學教官，旋調華南方面某部隊長，晉級中將，一九四一年九月升防衛總司令部參謀總長，大東亞戰事發生，調任他職。

波田重一 (Haba, Shigekazu)

陸軍中將，一八八五年生，廣島縣人。

士官學校第十八期步兵科及陸軍大學畢業。曾任陸軍省軍務局科員、教育總監部部員、天津駐屯軍步兵隊長及第九師團參謀長，至一九三五年三月升任步兵第三旅團長，翌年三月調任第十師團司令部附，一九三七年三月調任台灣守備司令官，不久，晉級中將並升師團長。日本之學校軍訓方案，係氏在軍務局任科員時，與科長永田鐵三所共同草擬。

波多野乾一 (Hadano, Kenichi)

東京朝日新聞囑託，一八九〇年生，大分縣人。

上海同文書院政治科畢業。初任東京日日新聞及時事新報編輯，後入外務省任囑託。當時外務省發行之小冊子，多由氏執筆。嗣任上海日報主筆，去年轉現職。對於我國政界人物性情之研究，在「中國通」中，實無出其右者。

油谷恭一 (Yutani, Kyōichi)

華中振興會社理事，一八八七年生，山口縣人。

一作湯谷恭一，上海東亞同文書院畢業。初任職日清汽船會社。一九二〇年日本國內及在華實業界巨頭，創設日華實業協會，選氏任秘書，旋升為秘書長。一九三五年冬，日華貿易協會成立，選為日方之常務理事。一九三六年六月，以東京商工會議所會員資格，策動對我提出減低進口稅之要求，後又來滬主持設立不動產銀行。一九三九年十月充任華中振興會社（俗稱華中公司）理事，時在報端發表關於我國財政金融等問題之意見，著有東亞同文書院沿革史等書。

牧野正迪 (Makino, masamichi)

陸軍中將，一八八〇年生，鳥取縣人。

士族開野繁五郎之三子，以入嗣牧野誓順家，故改今姓。士官學校第十七期騎兵科及陸軍大學畢業。由參謀本部部員、騎兵學校及陸軍大學兵學教官，于一九二五年轉入航空隊，歷任航空兵第一聯隊長、第十二師團參謀長，航空本部

檢査部長及總務長，一九三七年晉級中將，同年九月，轉任濱松飛行學校校長。

荻野良三 (Makino, Ryozo)

衆議院議員，一八八五年生，岐阜縣人。

刑法學家牧野英一之弟，東京帝大法科畢業，經高等文官考試及格，入遞信省，以才能出衆，見賞于中橋德五郎，遂入中橋門下。中橋任原內閣文部大臣時，擢爲隨從祕書兼簡任參事官。後以政友會黨代表資格，任商工省參事官及遞信省政務次官。一九二〇年以來，當選爲衆議員，已達七次，聲如洪鐘，長於雄辯，在會議之演詞，與永井柳太郎齊名。兼業律師，能作歌，有願曲癖。

芳澤謙吉 (Yoshizawa, Kenkichi)

駐越南特使，一八七五年生，新潟縣人。

芳澤襄良之長子，大養毅之婿，東京帝大文科英文學系畢業，卽及第外交官及領事官考試，以候補外交官，派赴朝鮮服務，嗣後歷任廈門、上海、牛莊、倫敦各地領事、外務省參事官、書記官、政務局第一科長、駐英大使館一等祕書、漢口總領事、大臣官房人事科長、外務省政務局長，及亞細亞局長兼代歐美局長等職，一九二三年後，任駐華公使凡七年，任內與俄方會談七十七次，成立芳澤加拉罕協定。一九三一年滬變勃發，時任駐法大使，卽派充國際聯盟理事會議代表。會內對滿洲問題，遭十三對一之否決，而氏仍能沈

着應付。迨大養毅組閣，歸任外務大臣，迨五。一五事件爆發辭職，勅選爲貴族院議員。嗣因鈴木喜三郎及鳩山秀夫之介，入政友會操政黨生活者多年。一九三六年代表日本出席太平洋會議。一九四〇年派赴荷印，主持日本荷印會議，一九四一年九月，轉任現職。氏爲日本外交界耆宿，承霞關（外務省所在地）前輩之遺教，常謂「外交卽內政」。

花谷 正 (Hanagata, Tadashi)

陸軍少將，一八九四年生，岡山縣人。

士官學校第二十六期步兵科及陸軍大學畢業。一九二三年任參謀本部地誌班班員，一九二五年至二六年派至北平、漢口、長沙、九江等處擔任工作，一九二八年充參謀本部中國班班員，旋調爲關東軍參謀，一九三〇年在奉天特務機關任事，一九三二年十二月調回參謀本部，後派爲駐濟南武官。一九三五年冬，復調關東軍內任職。一九四一年晉級少將。

花島孝一 (Hanajima, Koichi)

海軍中將，一八八六年生，靜岡縣人。

海軍機關學校及東京帝大造兵科畢業。曾任海軍航空本部駐美造兵監督官、名古屋艦政本部造兵監督官、橫須賀海軍工廠實驗部部长、及發動機部部长等職。一九三八年十一月晉級海軍中將，同時升任海軍航空廠廠長。一九三九年十二月調任海軍中央航空研究所所長。

近衛文麿 (Konoe, Fumimaro)

前內閣總理大臣，一八九二年生，京都府人。

氏爲日本五大攝家之一藤原鎌足之後，前貴族院議長上海同文書院勸辦人明治時代主張大陸急進派領袖篤磨之長子。十四歲時，即繼乃父之後，襲受公爵。自學習院中等部畢業後，考入東京帝大預科之第一高等學校，初擬究習哲學，後以閱讀河上肇所著之貧乏物語一書，深佩河上之同情無產階級，感而轉入京都帝國大學法科政治學系，親炙河上門下，二十七歲畢業。一九一八年以牧野伸顯之介，入內務省，在舊師瀧正雄下學習地方行政事務。是年歐戰結束，氏發表一文，題爲排斥英美本位之和平主義，力言：「歐洲戰禍，不過爲現狀維持國與現狀打破國之爭。德國因資源不足，故欲打破現狀，起而與英法諸國爭衡。英法諸國占地球上三分之二以上之大陸，亟於維持現狀，乃以違反正義人道及破壞和平之罪名，加諸德人。現德雖敗，然須知和平主義，未必合於正義人道，而軍國主義，亦未必違反正義人道。日本所處地位，與德國相同，吾人實應追隨德國，予以深切之同情」。一九一九年二月，隨西園寺公望任凡爾賽和會全權委員隨員，担任西園寺之私人秘書，因得接交列國外交界人士。一九一七年繼任貴族院議員（公爵議員係世襲）。一九二七年任大禮長官，主持日皇即位典禮。一九三一年任貴族院副議長。一九三三年繼德川家達後，任貴族院議長。翌年五月，外相廣田弘毅標榜協調外交，代表廣田赴美，游說

朝野。氏平素雅好延攬人物，如貴族院之二荒芳德、酒井忠正、木戶幸一、有馬頼寧、大谷尊由，政界之廣田弘毅、後藤文夫、吉田茂、安井英二、唐澤俊樹、河原田豫吉、石渡莊太郎、賀屋興宣、吉野信次，軍界之荒木貞夫、東條英機、石原莞爾，政黨之永井柳太郎、中野正剛、中島久平，財界之池田成彬、小倉正恆、有賀長文，以及民間各種團體之志賀直哉、岩田愛之助、龜井貫太郎等，皆其認爲知交者。五·一五事變後，思想劇變，物情騷然，氏與後藤隆之助等，設立國策研究會於霞山會館（霞山爲其父篤磨之別號），一時全國革新派人物，紛紛奔走其門，擁爲推進國策之領袖。一九三七年六月三日繼林銑十郎後，就任內閣總理，是年十二月辭職，任樞密院副議長兼平沼內閣之無任所大臣。一九四〇年七月復膺命組閣，是爲第二次近衛內閣，內則成立大政翼贊會，自兼總裁，外則訂立日德義三國同盟、中日基本條約及日俄中立條約，以確立日本國策。明年七月重行組閣，是爲第三次近衛內閣，至十月間，以內閣對於國策實行之意見，未能一致爲由辭退，賜前官禮遇。此外公私團體中，担任主持之名義者復有日泰協會、大東亞聯盟、東亞研究所、東亞同文會、與亞國體聯合聯合會、國際學友會、國語協會、及同仁會……等，實爲日本朝野之一中心人物。

近藤英次郎 (Kondo, Eijiro)

海軍少將，一八八八年生，山形縣人。

一九〇一年海軍兵學校畢業，其後又畢業海軍大學。曾任第一遣外艦隊參謀、赤城加賀及鳳翔等艦隊長、館山航空隊司令官，至一九三三年調派上海，任陸戰軍司令。一九三八年五月及川古志郎升任艦隊司令後，委為參謀長，一九三九年編入豫備役。

近藤信竹 (Kondo, Nobutake)

海軍中將，一八八八年生，大阪府人。

一九〇七年海軍兵學校及海軍大學畢業。曾任軍令部參謀、海軍大學校及陸軍大學校教官、第一艦隊參謀、駐德大使館海軍武官、金剛艦長、聯合艦隊參謀、海軍大學教務長、聯合艦隊參謀長等職，至一九三五年十一月升任軍令部第一部長，一九三七年十二月晉敘中將，未幾繼鹽澤幸一後，升任華南海軍司令官，一九三九年歸國任軍令部次長。

近藤榮藏 (Kondo, Eizo)

愛國勞動農民同志會幹事，一八八三年生，東京府人。

小學畢業後，隻身赴美，從事苦讀生活，一九一九年返國，投拜大杉榮門下，加入社會主義同盟。一九二二年及二三年，因參與曉民共產黨與第一次共產黨事件，被警察檢舉，逃入蘇聯，遇一九二六年大赦，乃潛回日本。滯留後，思想轉變，發表糾正無產黨之小冊子，遂成為革新陣營中之重要分子。一九三二年，任下中彌三郎所結成之「新日本國民

同盟」之中央常務委員，兼組織部長；一九三三年七月，以與崇奉皇道主義之本部派（氏為東京府聯合會派），意見衝突，宣告脫離。一九三四年四月與松本與次郎創立「勤勞日本黨」，松本任總理，氏任黨務長。迨一九三六年十一月革新派軍人小林順一郎，組成「愛國勤勞農民同志會」，企圖以勞農團體為基本，結成一種新式愛國政黨，該會會員，計有農民一萬八千人，工人五千人，名義上之會長，雖為松本勇平少將，實際上之統率者，則為小林，而居中策劃，則又為近藤，蓋已由國家社會主義更轉變而為日本主義。著有無產階級政治學、可恨之蘇聯等書。

近藤壤太郎 (Kondo, Jofaro)

滋賀縣知事，一八九四年生，長野縣人。

一九二〇年東京帝大法科德文法學系畢業，即入內務省，歷任鳥取縣屬吏、奈良青森兩縣警視及北海道廳科員。一九二七年因黨禍一度脫離政界，翌年復任埼玉縣事務官。後由宮城岡山等縣學務部長、羣馬香川等警察部長、高知縣總務部長、內務省社會局轉業科長、大阪府經濟部長，以及北海道經濟部長，於一九四〇年升任滋賀縣知事，以迄於今。氏性情傲岸，博辯宏辭，善於體察民情，鄉黨多以俤器目之。

阿南惟幾 (Arami, Korechika)

陸軍中將，一八八七年生，大分縣人。

士官學校第十九期步兵科及陸軍大學畢業，歷任步兵第

一聯隊附、步兵第四十五聯隊附、參謀本部部員、侍從武官兼軍事參議院幹事，及近衛步兵第三聯隊長，至一九三三年擔任廣島陸軍幼年學校校長，一九三五年調任陸軍省兵務局長，一九三七年三月陸軍定期調動時，以氏性情穩重，與陸軍上下層，多所聯絡，乃繼後官淳後委任陸軍省人事局長。一九三八年晉級中將，升任師團長，翌年十月，又繼山脇正隆後，一躍而登陸軍次官之要位，一九四一年四月辭職。

阿部房次郎 (Abe, Fusajiro)

東洋紡織會社社長，一八六七年生，滋賀縣人。

原姓辻，幼時家境清貧，會為吳服店學徒，後入阿部家，改今姓，送入東京就學，於一八九二年，畢業慶應義塾高等科。初營製油製藥工廠，後開毛巾製造廠，更進而經營紡織工廠，歲獲巨利，遂為近江實業界中領袖。一九一四年後，任東洋紡織社長，并兼大日本紡織聯合會會長。其關係之事業，不下十餘，一九三七年以關西財界長老資格，選為日本興業銀行參與。

阿部信行 (Abe, Nobuyuki)

陸軍大將，一八七六年生，石川縣人。

士官學校第九期砲兵科畢業。日俄戰爭時，以獨立重砲兵旅團司令部部員從軍，後於出兵西伯利亞時，又以野戰砲兵第三聯隊長，開赴前方，但均未遭遇實戰。歸後歷任陸軍重砲兵射擊學校教官、參謀本部部員、陸軍大學兵學教育、

參謀本部科長、陸軍大學校幹事、參謀本部總務部長及軍務局長，至濱口內閣時，在宇垣一成陸相下，任陸軍次官，旋宇垣得病，代理陸相。後由參謀本部附，轉任第四師團長暨台灣軍司令官，一九三二年晉級大將，升任軍事參議官。二二六事變發生，以責任關係，與荒木真崎等，同時編入預備役。一九三九年繼平沼騏一郎之後，出而組閣，一九四〇年三月派任駐華大使，是年十二月辭職。氏曾派赴德國研究軍事，與故金谷範三及現任朝鮮總督南次郎，同稱為宇垣系之三傑。與財界亦頗通聲氣，三菱顧問井上秀二，為氏之孀姪（長娘為木戶幸一之女），前住友會社總理小倉正恆，與氏有同鄉之誼，並為其熱心支持者。待人和藹，無論何人，一與把晤，即有接觸陽春之感，故頗為部下所愛戴云。

阿部賢一 (Abe, Kenichi)

大阪每日新聞主筆，一八八九年生，德島縣人。

氏為德富猪一郎之婿，由同志社大學畢業於早稻田大學政治經濟科，復留學英國，歸後任早稻田大學教授及東京國民新聞記者。後轉東京日日新聞，由副主筆升任主筆，並兼讀賣新聞及各大雜誌撰述員。關於財政學之著書甚多，伍堂卓雄任商相時，曾有出任東京商工會議所理事之說。

阿部勝雄 (Abe, Katsuo)

海軍少將，一八九一年生，岩手縣人。

一九一二年海軍兵學校畢業（名次第三，與岡新、山口

、多聞、稱為該期之四金剛。歷任第二艦隊參謀、海軍大學校教官、軍務局第一科科長、倫敦軍縮會議全權隨員、及軍令部歐洲部部长、至一九三八年十一月晉級少將，同時繼井上成美後，升任軍務局局長。一九四〇年任軍令部主任，氏通曉軍令軍政兩面之事務，夙為吉田善吾所器重，與米內光政及川古志郎，同稱為岩手海軍人才中之三傑。

金井章次 (Kanai, Shoji)

前蒙藏政府最高顧問，一八八七年生，宮城縣人。

由第二高等學校於一九一二年畢業東京帝國大學醫科，整年任母校附屬醫院助理醫師。一九一七年改入北里傳染病院，研究連鎖狀菌球，在職三年，後赴英法諸國留學。一九二二年得醫學博士學位。歸國後，任慶應義塾醫科助教授及衛生試驗所所長。一九二七年入滿，任關東廳衛生研究所顧問，後轉南滿鐵道會社，任衛生科長兼滿鐵青年聯盟理事長，因得與板垣東條相識。滿洲政府成立後，歷任奉天省總務廳長、濱江省總務廳長及間島省長等職。一九三八年轉任蒙疆自治政府最高顧問，一九四一年多他就，日人以現在之後藤新平稱之。

金光庸夫 (Kanemitsu Tsuneo)

前厚生大臣，一八七七年生，大分縣人。

家世業酷，高小畢業後，即任小學代用教員。後經普通文官考試及第，任福岡縣稅務局局員及長崎海關徵收員等職

。於三十四歲時，入神戶鈴木商店，不久被舉為太陽生命保險社經理，此外更兼大正生命、日本火災海上、日本教育生命等保險會社董事，及東亞烟草會社理事，積資甚厚。一九二一年當選為衆議員。一九三一年日內瓦第十五次勞工會議時，任日本資方代表。一九三七年推舉為衆議院副議長。阿部內閣時，代表政友會入閣任拓務大臣。氏在政友會中，於久原中島兩派之外，自樹一幟。久原房之助倡解散政黨時，氏首先表示贊成，與近衛文麿，亦相當接近，故一九四〇年十月第二次近衛內閣成立，選任厚生大臣，翌年七月辭職。

金澤正夫 (Kanazawa, Masao)

海軍少將，一八八九年生，山口縣人。

一九一二及一九二二年先後畢業海軍兵學校及海軍大學。歷任日向陸奧等艦砲術長、軍令部參謀、前海軍大臣末次信正副官、聯合艦隊司令部參謀、倫敦軍縮會議全權委員之隨員、軍令部科長、天龍霧島鳳翔等艦艦長，及大本營海軍部參謀兼報道部長等職，於一九三八年十月，晉級少將，一九四〇年十月，繼井上成美後，任在華艦隊參謀長，受打高而夫球。

長久保俊夫 (Nagakubo, Toshio)

興亞院華北聯絡部科長，一八九六年生，福島縣人。

一九二四年東京帝大工科土木系畢業，由東京市復興局

科員及內務省土木局技師，於一九三四年任大阪府工營科科長，一九三六年轉道路科科長，一九三八年派赴海牙，出席國際道路協會，並奉命考察各國公路事業。一九三九年六月任現職。

長谷川 基 (Hasegawa, Ki)

陸軍少將，一八八四年生，島根縣人。

日俄戰役時，以二等工兵從軍，嗣累升至曹長。與野田謙吾同期畢業於士官學校第二十四期工兵科，既又畢業陸軍大學。出校後歷任參謀本部部員、陸軍省整備局科員、戰備科科長、勳員科科長等職，至一九三八年以近衛師團團長，轉戰於贛鄂諸省。一九四〇年十月，陸軍省新設燃料局，以氏充任該局局長。

長谷川 清 (Hasegawa, Kiyoshi)

台灣總督，一八八四年生，福井縣人。

與岡田啓介、加藤實治同鄉。一九〇三年及一四年先後畢業海軍兵學校與海軍大學。日俄戰爭時，以少尉供職三笠旗艦。青島之役，任第二艦隊長官加藤定吉之幕僚，授功四級。其後歷任海軍省副官、駐美大使館武官、第三艦隊參謀、第三水雷戰隊長、海軍省人事局科長、長門艦長、橫須賀鎮守府參謀長、第二潛水戰隊司令官、艦政本部第五部長、吳海軍工廠廠長及日內瓦軍縮會議全權代表等職，至一九三四年五月，大角岑生任海相時，擢為次官。二、二六事變後，永野修身繼大角為海相，仍留原任。一九三六年十一月繼及川古志郎後，調任第三艦隊司令。八、一三時，任海軍總司令，一九三八年四月調任橫須賀鎮守府長官，旋晉級大將，一九四〇年冬升任台灣總督，以迄於今。

伊谷川 如是郎 (Isegawa, Iyozekar)

評論家，一八七五年生，東京府人。

本名萬次郎。幼時執贊坪內追遙門下，後由東京英語學校，於一八九八年畢業中央大學法律科。在學時，已從事文筆生涯，一九〇二年任日本新聞記者。一九〇六年與三宅雪嶺等辦「日本及日本人」雜誌，翌年入大阪朝日新聞，不久派赴歐洲留學。一九一八年以攻殼當局，被迫辭去該報撰述，翌年與河上肇創辦「我等」雜誌，極力鼓吹民主主義思想，致目為民治派之巨頭。文筆雄健，思想銳利，除評論以外，復擅長劇作，著作不下二十餘種，實為論著界之著宿。

長谷川透 (Hisegawa, Toru)

產業報國會中央本部常務局長，一八九七年生，京都府人。

一九一七年及一九二〇年各以第一名畢業第一高等學校及東京帝大法科。初入農商務省，後轉內務省。一九二八年派任日內瓦國際勞動會議代表。嗣由大阪府總務部長、內務省社會局科長及大臣官房文書科長，於一九三六年出任宮崎縣知事，一九四一年一月任現職。

長岡隆一郎 (Nagaoka, Ryūichirō)

前滿洲國務院總務長官，一八八五年生，東京府人。

一九〇八年與後藤文夫同時畢業於東京帝國大學法科。歷任佐賀・神奈川・和歌山各縣事務官及警察部長、內務省書記官、參事官、都市計劃局長、土木局長及社會局長，至一九二九年田中內閣時代，繼宮田光雄後，任警視總監，不久隨內閣辭職，勅選為貴族院議員，隸交友俱樂部。滯變後，自設統制經濟研究所於丸之內大樓，日集少壯軍人與青年官僚，討論經營滿蒙之方策，並一面退出政友會。深為南次郎所器重，會選任關東局長官，不久轉任滿洲國務院總務長官，一九三六年辭職。性情豪邁，酒量甚宏。

長勇 (Chō, Isamu)

陸軍少將，一八九七年生，福岡縣人。

士官學校第二十五期步兵科及陸軍大學軍刀組畢業。歷任參謀本部中國班班員及漢口駐在武官。生平疾視社會主義甚力。一九三一年之十月事件，與建川美次、橋本欣五郎等，會擬團員名單，擔任警視總監，後以上官躊躇，遂無形消弭。一九三七年參加張鼓峯事件，一九四〇年晉級少將。

長嶋毅 (Nagashima, Hatachi)

大審院院長，一八八〇年生，岐阜縣人。

一九〇六年東京帝大法科德文法學系畢業。曾入橫濱正金銀行。一九一一年及第司法官考試，由東京橫濱等地裁判所推事、大審院檢事、司法省民事局長、及札幌廣島兩地控訴院院長，於一九三五年升任司法次官。一九三七年調大政機關二新龍後，升任現職。在法界系統上，屬小原直系，以研究民法馳名。

長野朗 (Nagano, Akira)

評論家，一八八八年生，福岡縣人。

士官學校第二十期步兵科畢業。曾任天津駐屯軍參謀及西伯利亞派遣軍中隊長。大尉時即脫離軍籍，供職中央社及國民新聞，嗣任拓殖大學教授及東亞經濟調查局理事，并經營通信社，創立中國問題調查所，從事於中國政治經濟社會等各項問題之研究，著作達三十餘種，尤其關於我國社會情形之熟悉，與橋樑並推為首屈一指之人物，因之有謂關於對

華政策之決定，其力最幾得乎行政當局之上者。近年更經營農村新聞，以與村治派同盟聯合，而從事於「日本主義之農村救濟運動」。

門野重九郎 (Kadono, Chokynuro)

大倉倉名會社副總理，一八六八年生，三重縣人。由慶應義塾高等科，而畢業東京帝大土木科後，復赴歐美考察。歸國之初，供職山陽鐵道會社，後轉入大倉組（合名會社），由倫敦支店長，累升至該社副總理。當大倉喜七郎留學英國時，氏以父執資格任輔導，並以職務關係，駐英國達十年以上。善交際，外國實業家赴日考察者，大抵由氏翻譯，並任招待，故其名聲播揚於國際間，實不亞於鄉誼之助。大倉事業，大部在華，故氏對於中國問題，亦甚為注意，中央滿蒙協會，即為其所主動創立。一九三三年日印商業會議時，曾任日本方面顧問。近年留任英國，代表政府活動借款。現所任職務，除大倉倉名會社外，尚有東京商工會議所常任議員，日本車輛製造會社理事，滿洲棉花會社董事，日本放送會社關東支部理事，北海道拓殖銀行監查等二十餘職。為人儉樸，富於常識，待人嚴而不猛。

聖谷菊夫 (Ameya, Kikuo)

前大政翼贊會青年部副部長，一八九九年生，茨城縣人。

由水戶高等學校畢業東京帝大文科哲學系，初任內務省

社會局囑託。濠變後入滿。旋與橋本欣五郎相識，代橋本主持新黨計劃，任為大日本青年黨組織部長。一九四〇年大政翼贊會成立後，曾任該會青年部副部長。

陸軍少將 陸軍少將 (Armeniya, Tatsumi)

陸軍少將，一八九二年生，山梨縣人。

士官學校第二十五期步兵科及陸軍大學畢業，曾任參謀本部中國班班員、滿蒙班班員、及漢口九江特務機關長等職，一九三五年繼楠木實隆後，調任南京駐華使館副武官。一九三七年轉任陸軍省新聞班副班長。一九三八年任商工省資源科長，著有中國之我見一書，一九四〇年晉級少將。

青木十男 (Aoki, Kazuo)

經濟委員會顧問，一八九〇年生，長野縣人。

一九一六年東京帝大文科德文法學系畢業（與安井英二、黑田禮二、杉浦武雄等同級），經高等文官考試及格，即入大藏省理財局供職。歷任理財書記官，派駐英法兩國調查。一九二一年歸國，其後歷任理財局調查科長、國庫科長、秘書官、存款部營業科長、大臣官房秘書科長、外國匯兌管理科長等職。一九三四年藤井真信任藏相時，升任理財局長，與賀屋興宣、津島壽一及石渡莊太郎等，同稱為大藏省新官僚中之四金剛。氏為通貨政策及匯兌政策之專家，第二次匯兌管理法，即為氏依據德國匯兌管理法所草成。一九三六年任對滿事務局次官。一九三七年十月企劃廳成立後，任

企劃院次官，一九三九年一月升任該院總裁，九月任阿部內閣之大藏大臣，翌年四月以大藏省顧問隨阿部來華，與犬養健等，向由我國聘為經濟委員會顧問。一九四一年春又兼外務省顧問。

青木 泰 (Aoki, Yasuaki)

上浦航空隊司令，一八九一年生，東京府人。

一九一三年海軍兵學校畢業，翌年以少尉參加日德戰爭。嗣後歷任砲術學校教官、春日艦砲術長、加賀號砲術長、能登呂航空母艦副艦長、霞浦航空隊教官、木更津航空隊副隊長、加賀艦副艦長等職，至一九三九年任霞浦航空隊附，仍兼任教官。一九四〇年十一月日政府新設上浦航空隊，任為第一任司令官。

青木重誠 (Aoki, Jusei)

陸軍少將，一九〇〇年生，石川縣人。

士官學校及陸軍大學畢業，會從軍西伯利亞。歸國後，歷任陸軍軍務局科員、資源局事務官、陸相祕書（南及荒木時代）、陸軍大學教官、參謀本部員、步兵第八聯隊長及陸軍省補任科長等職，一九三八年，以旅團長來華作戰，翌年晉級少將，一九四一年歸任習志野騎兵學校長。氏久任陸軍務局，頗熟悉預算之編製事宜云。

青柳篤恒 (Aoyagi, Atsutsume)

前北京政府顧問，一八七七年生，東京府人。

華名柳士廉，高田早苗之姪婿。一九〇六年早稻田大學畢業，即在該校擔任中國問題教席。一九一三年隨有賀長雄來華，任北京政府顧問，歸後除仍掌母校教職外，並兼任陸軍大學及東京外國語學校講師。著有新支那、世界之支那史、支那近代治亂誌等書。

九 畫

保田次郎 (Yasuda, Jiro)

前台灣銀行行長，一八七三年生，岡山縣人。

一九〇三年東京帝大法科政治學系畢業，即入日本銀行，歷任京都、門司、名古屋各分行行長，後擢為國庫局長。一九二七年轉任日本興業銀行（簡稱興銀）副總裁，一九二九年藏相井上準之助，因金準備弛禁已漸就緒，商於興銀總裁鈴木島吉，要求該行對多年受通貨緊縮影響瀕於破產之實業界，盡力予以救濟，鈴木拒之，因被迫辭職，氏亦辭去。一九三五年春，出任台灣銀行行長，至一九三九年辭職。台灣銀行為日本對南洋及華南方面之金融機關，一九〇六年創辦時，資本僅五百萬圓。一九三三年增至六千萬圓，後因整理，減資一千五百萬圓，歐戰後，營業不振，幾至倒閉，幸賴日本銀行特別貸與巨款三千八百萬圓，始得維持。氏在金融界歷資頗久，性好弈棋、擊劍、登山、游泳、書繪、和歌及俳句等，為一雅多興趣之人物。

保科善四郎 (Yasuhira, Zenshiro)

海軍少將，一八九一年生，宮崎縣人。

一九一四年海軍兵學校畢業，即以伊吹艦艦員，參加青島戰役。嗣後歷任駐美大使館副武官、海軍大學教育、海軍省軍務局第一科科长、中國派遣軍司令部副參謀長、及妙高

島海陸軍等艦艦長，至一九四〇年十一月晉級少將。是年十二月，海軍省新設兵備局，任為第一任局長。

前田米藏 (Maeda, Yonezo)

大政翼贊會總務，一八八三年生，和歌山縣人。

父業布販，以苦學生在一九〇二年畢業於中央大學前身之東京法學院。初業律師，兼任各公司董事理事，一九一七年後，屢次當選為衆議員，隸政友會籍。田中內閣時，任法制局長官，田中武人，不解法律，外則濟南出兵問題，內則樞府（樞密院）不諮詢問題，迭受兩院詰責，均賴氏協助，得以應付。犬養組閣，舉為商工大臣。廣田內閣成立，復與島田俊雄，代表政友會入閣，任鐵道大臣。第一次近衛內閣時，復以黨代表資格，擔任內閣參議。一九四〇年任大政翼贊會議會局長，旋改任該會總務。氏在以前之政友會中，夙與岡崎邦輔、山本條太郎，同稱為長老，自山本逝世後，岡崎又年邁，遂成一中心人物，曾一度舉為幹事長總代行委員。性情沈默，嘗謂「處世要訣，在不發無意義之談話。」

前田利為 (Maeda, Toshitame)

陸軍中將，一八八五年生，石川縣人。

氏為加賀百萬石大名（諸侯）前田利昭之第五子，早歲出嗣前田利嗣，一九〇〇年繼承家業，襲侯爵。經學習陸先

發以優秀成績畢業士官學校（第十七期步兵科）及陸軍大學（一九一一年）。嗣留學德國Dresden大學，歸國後，歷任參謀本部部員、巴黎和會陸軍隨員、陸軍大學兵學教官、駐英大使館武官、參謀本部科長、近衛步兵第二聯隊長、參謀本部第四部長、及陸軍大學校長等職，至一九三七年，調充第八師團長，大東亞戰事發生後，任某方面指揮官。此外自一九〇五年以來，尙兼貴族院議員。公爵近衛文麿、侯爵鍋島直映、伯爵酒井忠正、子爵岡部長景，皆其姻婭。子前田利弘，亦封子爵。又爲日本銀行之大股東及北海道之大地主，平素與阿部信行，頗爲接近。

前田 稔 (Maeda, Minoru)

海軍少將，一八九三年生，鹿兒島縣人。

一九一三年海軍兵學校畢業，翌年以少尉參加青島戰役。其後擔任比良及八雲艦艦長，兩任駐俄使館武官、鎮海要港部參謀、軍令部科長及第三部長，至一九四〇年五月任練習艦隊參謀長，十二月調大本營海軍報道部長，旋升少將。

好讀書旅行，爲海軍中屈指之蘇聯通。同僚因其門前有石刻之熊，應接室內，又敷熊皮，其他木刻磁器之熊，更不止數百頭，性情幽靜，亦頗似熊，故稱爲「熊之前田」。

南 次郎 (Minami, Jiro)

朝鮮總督，一八七四年生，大分縣人。

士官學校第六期步兵科（投考時坐無貨車到東京）及陸

軍大學（一九〇三年）畢業，士官畢業後，以少尉參加甲午戰役。日俄戰爭時，以騎兵第一聯隊中隊長，參加圍攻旅順，不久調爲大本營陸軍幕僚。其後歷任陸軍大學兵學教官、關東都督府參謀、陸軍騎兵學校教官、騎兵第十三聯隊長、軍務局騎兵科長、天津駐屯軍司令官、騎兵第三旅團長、騎兵學校校長、騎兵監、第十六師團長、參謀本部次長、朝鮮軍司令官及軍事參議官等職，一九二九年晉級大將。翌年四月若槻第三次內閣成立，代宇垣一成而任陸相，是年十二月隨若槻辭職。迨林銑十郎任陸相，出任關東軍司令官兼駐滿大使。一九三六年二、二六事變發生後，編入預備役退職，是年八月，繼宇垣後，任朝鮮總督，以迄於今。氏以中年會患耳炎，微有重聽，在軍人系統中，屬宇垣系。前數年南內閣之聲，甚爲塵上。擁之者除小野寺長治郎、長岡隆一郎等外，軍人則爲建川美次，政客則秋田清、佐孫一、宮田光雄、富田幸次郎諸人，而最熱心者則爲後藤文夫、吉田茂云。

南雲忠一 (Nanuno, Chūichi)

海軍中將，一八八八年生，山形縣人。

一九〇八年海軍兵學校畢業。曾任海軍大學校教官、軍令部作戰科長、宇治高雄山城等軍艦艦長、水雷學校校長、及水雷戰隊司令官等職，一九三九年晉級中將，一九四〇年十二月任海軍大學校校長。

南條金雄 (Nanjo, Kaneo)

三井總社顧問，一八七六年生，羣馬縣人。

一八九二年東京高等商業學校畢業，即入三井物產會社，由一分店員，累升至神戶、大阪、倫敦分店經理，一九三一年由倫敦分店經理，擢為總店常務理事。二、二六事變後，三井經臨時股東大會之決議，董事理事均實行停年制，三井王國之獨裁者池田成彬告退，遂由氏繼任三井合名會社首席常務理事。所謂三井合名會社者，雖不過三井十一家股份公司之一，然實為三井財閥之總管理處。一九四〇年該合名會社，改組為總元方（總社），氏在議長之下，理事長之上，任相談役（顧問）之職。三井直接支配之資本，據一般估計，約為三十五億至四十億圓，誠不愧為日本財閥之冠，其經營方法，自團圓廢被刺以後，已一度轉換，以迎合政治潮流；一九三六年之實施停年制，可謂第二度之轉換。氏於三井總社外，兼任其子會社（分公司）大正海上火災保險、東洋鋼鐵各會社理事長，東洋棉花、東洋人造絲等各會社理事。不素雅好洋畫，搜藏甚多。

建川美次 (Tatekawa, Yoshitsugu)

陸軍中將，前駐蘇大使，一八八一年生，新潟縣人。

野崎美孝之第三子，以入嗣建川周平，故改今姓。士官學校第十三期騎兵科及陸軍大學畢業。日俄戰爭時，任騎兵第九聯隊之小隊長，曾率六名之斥候，深入俄軍中三百餘里

，從事偵察，時而遇敵，時而絕糧，歷二旬之久，卒得達成使命，遂大為長官奧保登上將所激賞。嗣後歷任駐印度武官、參謀本部中國班班員、騎兵第五聯隊長、參謀本部作戰科長、駐華使館武官、日內瓦軍縮會議陸軍代表之高級隨員、參謀本部第二部長及第一部長等職，至一九三二年晉級中將，閱一年，林銑十郎任陸相時，調為姫路第十師團長，後轉任大阪第四師團長。一九三六年八月編入預備役。一九四〇年應松岡之選，出任駐蘇大使，閱一年春，辭職歸國。妻敏子為森岡守成大將之養女，妻姊嫁在鄉軍人會會長鈴木莊六大將，三人並以騎兵戰術著名。

後藤文夫 (Goto, Fumio)

大政翼贊會中央協力會議長，一八八四年生，

大分縣人。

一九〇八年東京帝大法科政治學系畢業。由福島、神奈川、青森等縣事務官，入充內務省書記官兼參事官。一九一七年奉派赴歐考察戰情，歸後任內務大臣秘書及警保局長等職。一九二四年任台灣總督府參事官，旋調為總務長官，一九三〇年，勅選為貴族院議員。齋藤實組閣時，擢任農林大臣，迨岡田內閣，改任內務大臣，言聽計從，號為智囊。二、二六事變時，一時謠傳岡田首相被害殞命，循例代理閣揆，後隨岡田辭職。一九四〇年任翼贊會常務理事，明年九月遷任現職。氏之畫聲政界，始於任警保局長時代，當時關東

發生大地震，遭遇空前奇禍，社會情形，混亂不可名狀，氏態度鎮靜，處事井然，卒能於極短期間，恢復常態。其後任台灣總務長官時，值台灣銀行倒閉，亦能以敏捷手段，立使復業，評為一般人所稱頌。台灣總務長官下任後，任大日本聯合青年團理事長。又於日比谷之市政會館，擬設新日本同盟，而自任常務幹事，時與農村青年接觸，研究各種問題，若就任農林大臣後，即擬定農村更生計劃，以農村之自治與互助，為抵抗資本主義侵入之方策，一九三五年十二月，為維護岡田內閣，與望月圭介輩，另組「昭和會」之新黨，藉以分化政友會勢力。未幾發之十一月二十日事件，曾被視為襲擊目標之一。與同鄉民政黨前輩山本達雄，私交甚篤，與元老重臣，亦多聯絡，尤以伊澤多喜男，最為相契云。

後藤悌次 (Goto, Teiji)

華北交通會社副總裁，一八八一年生，東京府人。一九一〇年東京帝國大學法科畢業，經高等文官及第，即入鐵道院。歷任鐵道院書記官、監察官、鐵道省經理局長等職，至一九三三年任東京市財務局長，後轉任電氣局長及企劃局長，華北交通會社成立後，任現職。

後藤國彦 (Goto, Kunihiko)

京成電氣鐵道社長，一八九一年生，大分縣人。中學畢業後，以家境清寒，於通學法政大學時，兼在東京販賣牛乳，以補學費。後入讀實新聞任編輯，將升經濟部

長時，以受鄉誼之助之邀，出任東洋製鋼會社庶務科長，不久，派赴歐洲考察。一九二九年與日華生命保險會社及國際信託會社發生關係，旋將池上電氣鐵道會社，改組成爲京成電鐵公司，自任社長。少時每日於夜半十二時後就寢，六時起床。對於經濟界之觀察力，甚為敏銳，善演說，能使聞者感動，思想急進，人比諸實業界中之永井柳太郎。

後藤朝太郎 (Goto, Asataro)

評論家，一八八一年生，岡山縣人。

一九〇七年東京帝國大學文科言語學系畢業，曾任文部省國語調查委員會、台灣及朝鮮總督府囑託。初時研究我國金石文，後更致力我國一般問題；每年來華考察，足跡所至，遍及我國都市及重要鄉村。在其本國，不但飲食起居，完全模倣華俗，即其室內之陳列，以及舉止動靜，亦均效法華人。其生活費用，除以日本郵船會社及日清汽船會社顧問名義，取給於財閥外，一部分仰賴於出賣中國古董。前曾任職拓殖大學教席，一九二〇年後，專任日本大學教授。中日事變發生後，曾兩次因事被捕，不久釋放。著有關於中國問題之書，凡四十餘種。

後藤隆之助 (Goto, Takanosuke)

翼贊會常務幹事，一八八八年生，千葉縣人。

中學畢業後，得志賀直方之助，肄業第一高等學校，復由志賀之介，得識近衛文麿。後畢業京都市帝大法科，任近衛

主幸之青年聯合團副主事（團長爲志賀），嗣派赴歐洲考察，歸而組織壯年團，一九三四年任國策研究會幹事，一九三七年後任昭和塾總幹事，一九四〇年八月任現職。氏一生追隨近衛，性情孤僻，在一高及京大肄業，達十二年之久，因此同學倍於他人。自言不要錢、不要名、不要命，故有稱爲千葉縣之西鄉隆盛者。

後田 淳 (Tshirogu, Jun)

陸軍中將，中國派遣軍總參謀長，一八八六年生，京都府人。

士官學校第十七期步兵科及陸軍大學（一九一七年）畢業。曾任第三、第五師團參謀，參謀本部部員，第四十八聯隊長及第四師團參謀長等職；至一九二七年任關東軍司令部附。九·一八事變發生後，兼任鐵路總局顧問。一九三四年三月轉任參謀本部第三部長，同年八月林銑十郎出任陸相，以其派關係較淺，擢爲陸軍省人事局長。寺內任陸相時，仍予留任。一九三六年內，日本陸軍人事調動，其人數之多，範圍之廣，爲前時所未有，均由氏一手主持，使成爲日本極大問題之肅軍工作，漸底於成。氏久在關東軍，與該軍上下，多所聯絡；以其精通交通業務，咸譽爲陸軍中之運輸權威。一九三七年三月繼磯谷廉介後，任陸軍省軍務局長，一九三八年三月升任第十六師團長。一九四〇年十月繼安藤利吉後，任駐華南陸軍最高指揮官，同年七月調任現職。

星野直樹 (Hoshino, Naoki)

內閣書記官長，一八九二年生，神奈川縣人。原籍長野，父光多，在橫濱充當基督教牧師，故生長札幌之神奈川縣。一九一七年東京帝大經濟科畢業，即入大藏省，歷任北稅務署長、熊本大阪等稅務監督局經理部長、東京稅務局間接稅部長等職。密變後，入滿任總務部固有財產科長及財政部總務司幫辦、司長，一九三二年七月繼長岡壽一郎後，任國務院總務長官。在任時，手定滿洲產業五年計劃，改革協和會組織。第二次近衛內閣成立後，升企劃院總務，旋即辭職，迨東條氏組閣，出任現職。氏與前大政翼贊會東亞部長龜井貫一郎，爲同班好友，性好讀書，明瞭國內外經濟情形。

柏木秀雄 (Kashiwagi, Hideo)

正金銀行副總裁，一八七二年生，三重縣人。一九〇六年東京帝大法科畢業，即入正金銀行，曾任該行倫敦紐約分行行員、紐約分行行長、橫濱總行外國科科長及東京分行行長，至一九三七年升任總行業務董事，兼商工省貿易專門委員，一九四〇年十二月任現職。屢經派赴歐美考察經濟，故能洞悉國際金融情形。

相田岩夫 (Aida, Iwao)

大藏省銀行局長，一八九二年生，山形縣人。

故濱口惟幸首相之婿，一九一九年東京帝大法科政治學系畢業，經高等文官考試及第，即入大藏省。歷任主計局事務官，及各地稅務署署長，一九三四年任特銀科長時，以台灣銀行人達絲財案問題，與黑田英雄大野龍太等，同入羈執。一九三八年宣告無罪，後經賀屋興宜之提舉，升任大藏省理財局長，一九四〇年十二月調現職。

相馬敏夫 (Soma, Toshio)

諱駐上海財務官，一八九八年生，長野縣人。

由第八高等學校，於一九二二年畢業東京帝大法科德文法學系，即入大藏省。京濱大地震後，借津島壽一以財務書記官名義，派往倫敦募集外債，一九二八年歸國。嗣後歷任橫須賀稅務署長、大藏省銀行檢查官、及日本稅務署長等職，至一九三二年任專賣局事業科及販賣科科長。烟草之漲價，即由氏主持。一九三九年任上海財務官，籌劃以軍票代替日本銀行券，而流中市場，一九四〇年三月調專賣局參事，兼台灣總督府參事，是年十二月任專賣局總務課長。

柳川平助 (Yanagawa, Heisuke)

陸軍中將，前勳賞會副總裁，一八八〇年生，

佐賀縣人。

原籍長崎，姓楠木，後入嗣佐賀縣柳川家。士官學校第十二期騎兵科及陸軍大學軍刀組畢業。歷任參謀本部中國班班員科長、騎兵第一旅團長、騎兵學校校長、騎兵監、第一

師團長、陸軍次官、及軍司令官等職。當任參謀本部科長時，荒木貞夫適為參謀本部第二部長，氏為之代擬作戰計劃，頗得信任。後荒木任陸相，即擢為陸軍次官，較諸他人之由軍事科長、軍務局長而遞升者，迥然不同，且日本陸軍省職員由師部調任者，向例甚少，舊異數之拔擢也。任次官時，多引用部隊中有經驗之人，斃望因之日盛。一九一七年七月至一九二〇年六月，曾任中國陸軍大學教官，後奉命視察歐洲，至一九一四年一月歸國，一九三一年升中將。一九三五年十二月由第一師團長轉任台灣軍司令官，明年八月調參謀本部附，一九三七年十月委為某某方面軍軍長，率師由金山衛登陸。一九三八年十一月與亞院成立，任該院總務長官。一九四一年一月升任司法大臣，是年三月兼任大政翼贊會副總裁。七月近衛第三次組閣，調任無任所大臣，十月東條氏出膺首相，辭大臣職，未幾，副總裁一席，亦辭去。

柳井恆夫 (Yanai, Tsuneo)

駐哥倫比亞公使，一八九五年生，東京府人。

一九二〇年東京帝大法科德文法學系畢業，經外交官領事官考試及第，歷任駐暹羅法國及比利時等國大使領館館員、濟陽總領事館領事(九一八時)，至一九三四年調任東亞局第三科科長兼第二科科長，一九三六年任駐德使館一等秘書，不久升為參事，一九三九年任國際聯盟局長。一九四〇年春，繼日高信六郎後，任與亞院經濟部長，是年十二

月，調升現職。

柳原傳光

(Yanagisawa, Denko)

海軍燃料局長，一八八九年生，東京府人。

伯爵柳原義光之弟，海軍機關學校及海軍大學畢業，曾任駐英大使館武官、聯合艦隊參謀、軍縮會議全權代表隨員、內閣資源局事務官、燃料廠事務官、製油部部長、軍醫局第二科科長，及艦政本部駐紐約造船監督長，至一九四〇年春調任海軍燃料局第二部長。爲研究石油之專家。

柳澤 健

(Yanagisawa, Ken)

前駐義大利大使館一等祕書，一八八九年生，福島縣人。

一九一六年東京帝大法科法文學系畢業，即入遞信省，不久任東京朝日新聞記者，後經外交官考試及第，歷任法國瑞士墨西哥等國領事及祕書，至一九三八年九月駐義大利一等祕書，翌年他調。著有文藝書冊多種。

柳澤藏之助

(Yanagisawa, Kuranosuke)

海軍大佐

一九一五年海軍兵學校畢業。歷任駐法大使館武官、軍縮會議全權代表隨員、海軍航空隊隊長、及華南艦隊高級參謀等職，一九四〇年五月派任駐越運華貨物檢查員，爲海軍中著名之法國通。

泉二新熊

(Motoji, Arakuma)

前大審院院長，一八七六年生，鹿兒島縣人。

一九〇二年東京帝大法科畢業，又入大學院研究。一九〇五年任東京地方裁判所檢察官兼司法參事官。其後歷任東京控訴院檢察官、大審院推事、東京帝大法科及早稻田、明治、中央等各大學講師、司法省行刑局長、及刑事局長等職，至一九三六年任大審院部長，翌年一月任檢察總長，一九三九年二月升大審院院長，一九四〇年辭職。嘗於一九一一年派赴歐美考察，一九一六年得法學博士學位，一九二五年任倫敦第九次國際刑法會議委員。氏資質平庸，因孜孜學業，遂成著名之刑法學者，與牧野英一、林賴三郎齊名。牧野採主觀說，林採客觀說，氏則折中其間，主張相當因果關係說。在大審院部長時代，曾辦理共產黨案件及小川（平吉）前鐵相暗案，並爲五·一五事件之審判長。

洪 思翊

(Ko, Shiyoku)

前興亞院上海聯絡官，一八九二年生，長崎縣人。

士官學校第二十六期步兵科及陸軍大學一九二八年畢業，久任參謀本部中國班班員，一九三七年十二月任上海特務部經濟建設科長，一九三九年三月晉級大佐，同時任興亞院上海連絡部經濟第一局長，專司國策會社之統制事務，一九四〇年八月調回參謀本部任事。

津久井龍雄 (Tanuki, Tatsuo)

政論家，一九〇一年生，栃木縣人。

會肄業早稻田大學英文科。早歲即投身高島素之門下，以高島之國家社會主義為指導精神。後嘗參加赤尾敏之建國會（一九二六年），任書記長，以與赤尾之純日本主義不相容，於一九二八年退出該會。追上杉慎吉與高島合組之經綸聯盟（一九一九年創立），因兩巨頭意見參差，而宣告解體，氏遂與上杉門下之中谷武世、天野辰夫等，於一九三〇年，創立愛國勤勞黨。未幾，與中谷不合，又憤而脫黨。先是，當氏退出建國會之第二年，與伊地知義一、福島佐太郎等，組織急進愛國黨及急進愛國勞動者總同盟，氏自任執行委員長。一九三二年與大日本生產黨合併，舉為該生產黨執行委員之一，同時復另組大日本青年同盟，為生產黨之前衛。一九三三年因神兵隊事件，被生產黨除名，乃與赤松克廣攜手，會同擬立國民協會，赤松任委員長，氏任常任理事。而大日本青年同盟，則與日本通信從業員組合（赤松系）合併，改稱為青年日本同盟，以赤松為顧問，而氏為會長，以為國民協會之行動隊。一九三三年該協會改組為政治團體，青年日本同盟，亦改稱為國民青年隊。氏於革新人物中，與松本德明，並稱為有數之理論家，著有法西斯主義之意大利與墨索里尼、國家社會主義問答、日本社會主義之提倡等書。一九三七年由神奈川縣選為眾議院議員，此外並在昭和塾講師。

津田信昭 (Tsuda, Shingo)

鐘淵紡織會社總經理，一八八二年生，愛知縣人。

氏原為西山芳六之第四子，後出嗣津田於菟為養子，故改今姓。一九〇七年畢業慶應大學理財科。在學時代，已立志服務紡織界，其畢業論文，即為關於紡織事業者。畢業後入鐘淵紡織會社（簡稱鐘紡），自願充任兵庫工場學習員，實習工場事務，後由庶務科科員、科長，升織布試驗工場主任，始發揮其經營之手腕。當任岡山縣西大寺工場長時，以長於管理職工，為總經理武藤山治所賞識。將該會社新設之澁川工場，一切創設計劃，悉委氏負責，而攝為工場長，自此氏與職員同甘苦，起臥於工場內，拮据經營，卒成一模範工場。一九三〇年武藤辭職，以副經理長尾掘升經理，而副經理一席，即舉氏任之。是年六月，該社發生罷工風潮，長尾無法支持，迫而辭職，遂由氏繼其遺缺，以迄於今。一九三七年林銑十郎組閣時，以其已為關西實業領袖，邀任商工大臣，未就。同年中日事變發生，飛機全國，主張率領紡十萬社員，應募戰債一百萬圓。性情熱烈，自信極強，有智慧，有謀略，精力絕倫，雖二夜不寢不寐，亦毫無倦容云。

津田靜枝 (Tsuda, Shizue)

海軍中將，翼贊會與亞同盟總務，一八八四年生，東京府人。

一九〇三年海軍兵學校畢業，歷任隅田艦長、海軍軍令

部參謀、常務、香取等艦副艦長、第二艦隊副官、福州上海天津等地特務機關長、駐華公使館武官、海軍司令部副官、及第二遣外艦隊司令官等職，至一九三三年調任海軍軍令部參謀，旋升第三部長（專司中國方面事務）。一九三五年繼小林省三郎後，任駐滿海軍司令官。一九三五年三月，與小林同時編入預備役。一九三九年出任興亞院華中聯絡部長官，一九四一年轉任現職。氏之海軍生活，三分之二，均與我國有關，深通華情，活動力亦甚大，故頗有稱爲海軍中之「土肥原」者。不娶妻，好飲酒，常發表其對華之意見。

津雲國利 (Tsunumo, Kunitoshi)

衆議院議員，一八九二年生，東京府人。

早年服務安田保善社、安田銀行及古河銀行，並曾於宇都宮市經營新聞事業，一九二八年以來，數次當選爲衆議員，爲政友會久原系之健將。氏與秦真次交好，曾因秦氏聯絡荒木貞夫，使荒木與久原接近。二、二六事變發生後，會與久原，同時入獄判罪。氏演說流暢，使人動聽，柔道亦頗有名。

畑 俊六 (Hata, Shunroku)

陸軍大將，中國派遣軍總司令，一八八〇年生，福島縣人。

氏爲前會津藩士畑能實之子，前關東軍司令故陸軍上將畑英太郎之弟。一九〇〇年畢業士官學校砲兵科，後以第一

名畢業陸軍大學。歷任參謀本部課長兼海軍軍司令部參謀、駐德大使館武官、習志野教導隊隊長、野戰重砲兵第四旅團長、參謀本部第四部長及第一部長，於一九三一年八月升砲兵監，繼而在職二年，能使砲兵之戰鬥力，增加二倍。一九三三年繼松本直亮後，任第十四師團長。一九三五年十一月調陸軍航空本部長，翌年八月，繼柳川平助之後，調任台灣軍司令官，一九三七年晉級大將，升任陸軍教育總督兼軍事參謀官，一九三八年二月出任華中派遣軍最高指揮官，攻陷徐州漢口等地，翌年一月歸國，五月任侍從武官長，八月以後，連任阿部米內兩內閣之陸軍大臣，至一九四一年三月陸軍定期調動時，繼西尾大將後，復來華任中國派遣軍總司令官，以迄今日。

皆川廣治 (Minagawa, Koji)

建國大學理事長，一八七五年生，東京府人。

一九〇三年東京帝大法科法學系畢業，經司法官考試及格，適逢日俄戰爭，即以國際法顧問名義，於役軍中。戰後任檢察官，服務於大阪東京各地裁判所。一九一〇年奉派參加不魯塞爾舉行之國際刑法會議，後即留居歐陸，游學法、德、比、瑞諸國。一九一三年任司法省書記官，充大臣官房典職科長。一九二一年任大審院檢察官，翌年調司法省人事局長，一九二三年調廣島控訴院首席檢察官，翌年奉命出差歐美各國；一九二七年任名古屋控訴院長，一九三一年擢升

司法省次長。岡田內閣成立後，轉任東京控訴院長兼反省院長，一九三七年十二月退職，翌年四月就滿洲方面之建國塾大學理事長。氏為鈴木喜三郎手下之健將，好交際，富政治手腕，林銑十郎組閣時，有出任司法大臣之說。

皆川雙治 (Minagawa, Toyoji)

奉天省次長，一八九四年生，山形縣人。

一九二〇年東京帝大德文法科畢業，初入南滿鐵道東亞經濟調查局。一九三七年轉入司法界，任東京盛岡及仙臺各地方裁判所檢察官。濰後，因駒井德三之介，任滿洲國務院總務廳秘書，後調恩賞局人事處長，一九三六年任錦州省次長，翌年任民生部次長，一九三八年繼甘粕彥太郎後，任協和會總務部長，兼滿洲通信社董事，一九四一年任現職。

砂田重政 (Sunada, Shigemasa)

衆議院議員，一八八四年生，愛媛縣人。

砂田重治之長子。一九〇四年畢業中央大學法科，經推事及檢察官試驗合格，歷任東京、京都、神戶各地方裁判所司法官、農林省參與官及政務次官，後執行律師業務，當選爲衆議院議員，迄今已遷八次。初與大義毅同隸革新俱樂部，後入政友會，爲山本悌二郎派直系人物，今接近舊政友系。曾二次任政務調查會副會長職，在山本會長之下，主持各種事務。一九三六年五月以來，升任會長，本年四月轉任政友會幹事長，與宇垣一成爲腹孀親，屢擬擁之組閣，政友會之

擁護宇垣一派，氏即其領袖。其律師事務所，在政友會所之附近，常與會內同志，共同研究財政經濟問題，於農林水產智識，亦頗淵博。一九三六年一月，日本高週波重工業會社成立後，舉爲董事長，此爲日本最新興之事業，以電擊製煉法，應用於軍需工業方面，係菊池秀三所發明，舉世甚爲注目，今氏已由此而成爲鉅富之一。

神田正雄 (Kanda, Masao)

「海外」雜誌社長，一八八〇年生，栃木縣人。

一八九八年畢業於早稻田大學前身之東京專門學校，後留學美國哥倫比亞大學及英國牛津大學，研究政治經濟。清季曾任四川省法律顧問及法政學堂教習。一九〇八年任朝日新聞北京特派員，一九一七年調回本社。嗣後歷任該社中國部長，外事部長及政治部長等職，現任「海外」雜誌社社長兼主筆，此外又兼海外事情研究會會長。曾兩次當選爲衆議院議員。

神田正種 (Kanda, Masatane)

陸軍少將，一八九〇年生，愛知縣人。

士官學校第廿三期及陸軍大學畢業，曾任駐俄大使館武官、參謀部俄國班班長、科長、第四部部长、第六師團聯隊長、及陸軍教育總監部第一部部长等職，至一九三九年任參謀本部總務部長。

秋山邦雄 (Akiyama Kunio)

陸軍大佐，一八九九年生，熊本縣人。

士官學校第三十二期步兵科及東京外國語學校畢業。歷任步兵第十聯隊附、參謀本部附、駐法大使館副武官、陸軍省大臣官房附、步兵第三聯隊參謀、華北駐屯軍參謀、大本營幕僚、及關東軍報道班員等職，於一九三八年七月任軍務局局員，一九四〇年十二月任內閣情報官，一九四一年一月駐華陸軍報道部長。在日本陸軍中，以富於諧學天才著名。

秋山定輔 (Akiyama, Teisuke)

近衛文麿之顧問，一八六九年生，岡山縣人。

幼時因家計貧寒，苦學力行，與石井菊次郎，床次竹二郎等同期畢業於東京帝國大學法科（第一名爲原嘉道，第二名即秋山）。畢業後，因不願仕進，除任聯合會計檢査院一年外，即投身報界，經營二六新聞。一九〇二年起，歷次當選爲衆議院議員，一九二二年退隱。數來我國，與國民黨頗有淵源，爲近衛篤磨（近衛首相之父）之舊交，其適町住宅，即由篤磨所贈送，秋田清、松岡洋右、及中野正剛等，均見事之云。

秋山昱禮 (Akiyama, Tsuki)

三菱合資會社參與，一八八三年生，山梨縣人。

秋山晋次郎之長子，一九〇四年東京外國語學校中國語科畢業，一九〇九年入三菱會社，一九一八年三菱商會社成立，派赴該社服務。一九二〇年升北京支店長，不久轉任

漢口支店長，一九二二年又轉任上海支店長，一九二六年擢升總公司肥料部長，以得岩崎信任，於一九三六年擢爲三菱合資會社參與，一九三七年春，曾參加經濟考察團來華。

秋田清 (Akiya, Kiyoshi)

前厚生、拓務大臣，一八八二年生，德島縣人。

東京法學院及日本法律學校畢業，經推事及檢察官試驗合格，出爲高知地方裁判所推事，後辭職而執律師業。一九一一年與秋山定輔等，創辦二六新報，自任社長，翌年當選爲衆議院議員，其後連續當選，達十次之多，氏於政黨，初無所屬，一九二一年與犬養毅商談之結果，始入國民黨。後與犬養同由革新俱樂部（一九二二年由國民黨與憲政會、脫離黨員合組而成）而轉入政友會。一九二四年舉爲政友會總務委員，自是遂居黨中重要之地位，一九二七年至二九年之田中內閣時期，曾任逓信及內務兩省政務次官。一九三二年選爲衆議院議長。一九三七年以老友秋山定輔之力，獲任內閣參議。一九三九年冬任阿部內閣之厚生大臣。一九四〇年第二次近衛內閣時代，又出任拓務大臣，嗣年七月辭職。在政界中，以策士馳名。

秋永月三 (Akinaga, Tsukizozo)

陸軍少將，一八九三年生，熊本縣人。

士官學校第二十五期步兵科及陸軍大學畢業，後轉入航空隊。曾任軍務局科員、參謀本部滿洲班班長、對滿事務局

事務官、及關東軍第三科長（主管經營）等職，一九三七年事變發生後，任商工省物資局總務科長兼企劃院調查官，專司戰時經濟統制之職。一九四一年三月繼沼田稼吉後，以少將升企畫院第一部部长。該部掌軍軍法案大綱之審查、重要預算之統制、國家總動員法總動員警備計畫、及關於國土計劃等事項，地位甚為重要。

香月清司 (Kazuki, Kiyoshi)

陸軍中將，一八八九年生，佐賀縣人。

士官學校第十四期步兵科畢業。日俄戰爭時，以少尉從軍。後又畢業陸軍大學。歐戰發生後，曾赴法國研究步兵戰術五年。歷任第十三聯隊中隊長、陸軍省副官、陸軍大學兵學教官（前後達九年之久）、步兵第六十七及第八聯隊長、陸軍省兵務科長、步兵第十旅團長、步兵學後校長、及參謀本部附等職。於一九三三年晉級中將，至一九三六年三月繼橋本虎之助後，任近衛師團長。一九三七年三月轉教育總監部本部長、宇垣組閣時，本預定為陸軍大臣，以內閣流產，未果。七·七事變後，升天津駐屯軍司令，並兼總指揮，一九三八年七月，編入預備役。

香阪昌康 (Kasaka, Masayasu)

前大日本聯合會青年團理事長，一八八一年生，山形縣人。

一九〇八年東京帝大法科畢業。歷任愛媛縣理事官、岡

山、熊本各縣警察部長、秋田・埼玉各縣內務部長、福島・愛媛・岡山。愛知各縣知事，至一九三二年擢升東京府知事，為國維會之重要角色，與伊澤多喜男，亦取得相當聯絡。嗣繼田澤義鋪後，擔任半官機關之大日本聯合會青年團理事長，一九三八年春辭職。

香椎浩平 (Kashii, Kohhei)

陸軍中將，一八八二年生，福岡縣人。

士官學校第十二期步兵科及陸軍大學畢業。歷任駐德使館武官、第四十六聯隊長、第十旅團長、天津駐屯軍司令官、教育總監本部長、及第六師團長等職，曾參加日俄青島兩戰役，在陸軍中以戰術家馳名。氏早歲即隸玄洋社，又為荒木貞夫所信任，一九三一年晉級中將。二·二六事變時，遭任東京警備司令官，奉命兼任戒嚴司令官，其所發告叛兵書，詞意動人，頗為日人傳誦，後以資任關係辭職，是年八月編入預備役。

若山善太郎 (Wakayama, Zentarō)

陸軍中將，一八七九年生，愛知縣人。

士官學校第十一期工兵科畢業。日俄戰爭時，以小隊長於一九〇四年五月二十五日率敢死隊，夜襲全州城負傷，大為司令官與保章所賞識，予以褒狀。戰後入陸軍大學，一九一〇年畢業。嗣後歷任近衛工兵大隊長、陸軍工兵學校教育長、第十九師團參謀長、陸軍省軍務局工兵科長、陸軍工兵

學校校長、工兵監、及第三師團長等職，於一九三〇年晉級中將，一九三五年八月編入預備役。

若尾璋八 (Wakao, Shozachi)

貴族院議員，一八七三年生，山梨縣人。

氏爲若尾財閥創始人若尾民造之養子，前厚生大臣廣瀬久忠之兄，神戶辰馬財閥之姻姪。東京法學院畢業，曾任若尾銀行行長、水戶市瓦斯公司董事、東京電燈公司董事長、及東京證券交易所理事等職，爲若尾財閥之中心人物，中年三次當選爲衆議院議員，隸政友會議籍，一九三一年以黨代表任鐵道省政務次官，翌年辭職，勅選爲貴族院議員。在政友會中，與鳩山一郎相齟，鈴木喜三郎死後，曾提議總裁任期應縮爲一年，而由中島鳩山兩人輪流充當，未成。

若菜要 (Wakasugi, Karame)

駐美公使，一八八四年生，熊本縣人。

二十四歲畢業上海東亞同文書院，及取外務省書記生，即派赴奉天、牛莊等處服務。後留美國，於三十二歲時畢業 Oregon 州立大學法科，三十二歲更畢業於紐約大學政治經濟專攻科。一九一六年重入外務省，翌年考取外交官領事官試驗，派任副領事，服務於上海、哈爾濱、及俄國伊爾庫次克等處。嗣後歷任駐法及駐華英大使館三等祕書、美國竊安洪領事、外務省情報局第一科科長兼第二科科長、英國大使館二等祕書、一等祕書、及舊金山總領事。九、一八及一、

二八戰役時，極力在各地活動，辯明日本之態度，以緩和美國對日空氣。一九三四年調任駐華使館一等祕書，旋升大使館參事，一九三七年三月派任紐約總領事。一九四〇年以公使銜，派駐華盛頓協助野村大使，當折衝之任。

若林半 (Wakabayashi, Han)

東京同教協會幹事。

早歲加入黑龍會，受頭山滿、內田良平之指導，研究回教問題。一九一二年，隨緬甸回僧奧達曼赴印度，翌年並遣其弟若林九滿，赴長沙聯絡該地回教徒。後受村田省藏之補助，於一九二四年偕田中逸平，赴美加聖地，并歷游近東、南洋、澳洲諸地，九三年隨松岡洋右出席國際聯盟。前後赴印度五次，留居各地甚久。一九三五年仲土耳其回教長老來西特、伊拉姆回日，著有回教世界與日本一書。

若宮貞夫 (Wakamiya, Sadao)

衆議院議員，一八五五年生，兵庫縣人。

一八九九年東京帝大法科政治學系畢業，經高等文官考試及格，翌年任海軍官兼遞信省書記官，派在遞信省管船局辦事。一九〇三年奉派赴美，一九〇五年兼任地方海員審判所理事官，一九〇六年又派赴歐洲各國。嗣後歷任管船監理科長、北海道遞信局長、海軍局長兼地方海員審判所長、管船局長、商等海員審判所長及戰時船舶管理局長等職，至一九二二年升任遞信省次官，翌年轉航空局長官。一九二四年

以後，屢次當選為衆議員，以迄於今。氏在政友會中，素受大養毅之青睞。大養組閣時，選任陸軍政務次官，并任政友會之政務調查會長及幹事長。一九三六年五月，被舉為該會總務六人之一，向不屬於任何小系，自任幹事長以後，稍接近鈴木及鳩山，故亦有日為鳩山系人物者。

若 細 禮 次 郎 (Wakatsuki, Reijiro)

前總理大臣，一八六七年生，島根縣人。

一八九二年東京帝大文法學科畢業。由大藏書記官、主稅局長釀造試驗所長、臨時國債整理局長及大藏次官，於一九一一年勅選為貴族院議員。一九一二年至一九一四年任桂(太郎)內閣及大隈(重信)內閣之大藏大臣，一九二四年任加藤(高明)內閣之內務大臣，一九二六年繼加藤後組閣，並兼內務大臣，同時被舉為民政黨總裁，一九二七年辭職，特賜內閣總理大臣禮遇。一九三二年四月繼濱口雄幸之後，二次組閣，是年八月辭職。一九三〇年時，以日本首席代表名義，出席倫敦軍縮會議，訂立五、五、三比例之倫敦軍縮條約，事後晉封男爵。一九三四年齋藤(實)內閣辭職時，元老西園寺推薦岡田啓介組閣，特開軍臣會議，氏亦被邀參加，反對者謂若槻既列席軍臣會議，即應辭去政黨領袖，至是卒辭去民政黨總裁之職。氏在黨政兩界，均有悠久之歷史。手段靈敏，辦事幹練，善能利用三菱財閥云。

若 米 地 田 郎 (Tomabechi, Shiro)

陸軍中將，一八八七年生，青森縣人。土官學校第十八期步兵科及陸軍大學畢業，曾任參謀本部中國班班員、中國公使館副武官、及福州、九江、杭州等地特務機關長。在華先後達八年之久，嗣由第七師團參謀、大正大學軍事教官、及第三十五聯隊長，於一九三五年升任步兵第二十九旅團，一九三七年八月編入預備役，是月派往華北轉戰各地，昭和十二年歸國，不久晉級中將，并升任師團長之職。

茂 野 唯 士 (Shigemori, Tadashi)

駐俄大使館囑託，一八九五年生，東京府人。

外國語學校俄文科畢業，即從事文筆生涯，以左翼鬥士鳴世，後思想銳變，與青野秀吉同入建川美次之門，研究俄國問題。一九三八年任天津軍囑託，在燕窩備新中國社、中國印書館、及華北文化書局，隱然為一大商人模樣。一九四〇年十月以使館囑託名義，隨建川大使赴蘇。

美 濃 部 洋 次 (Minobe, Yoji)

前商工省纖維局科長，一九〇〇年生，兵庫縣人。

美濃部達吉博士之姪，一九二二年東京帝大英法科畢業，即入商工省。歷任工務局事務官、滿洲實業部文書科長、內閣調查局及企畫院事務官、商工省物價局第一部總務科長兼企畫科長、纖維局總務科長兼棉業科長等職，進出口聯繫制，即由彼所手創。手腕敏銳，富於革新意識，在調查局時

，與奧村喜和男、迫水久常、毛里英於菟三人，同稱爲鈴木貞一手下之四金剛。

美濃部達吉 (Minobe Tatsutchi)

法學博士，一八七三年生，兵庫縣人。

滿洲交易所理事長美濃部俊吉之弟，一八九七年畢業東京帝大法科政治學系，同年及格高等文官考試。閱一年，派赴英、德、法各國留學，研究法制，一九〇二年歸國，任母校教授。一九二二年又奉派赴歐，參加比利士學院一百五十週年紀念式，一九二四年又兼任九州帝大法文學部教授，一九三五年退職，改任東京帝大名譽教授。氏著作豐富，其所著憲法撮要、憲法精義、及憲法之基本問題三書，卽爲引起前數年來「天皇機關說問題」或「國體明徵問題」之導火線。蓄日本之憲法學說，向有二派，當憲法制定前後，穗積八東力倡主權在君說，一木喜德郎則以自由主義之見地，主張天皇機關說，兩派論爭甚烈。其後經過甲午、日俄兩戰役，上杉愷吉承穗積之餘緒，氏則宗一木之思想，二人又引起劇烈之論爭，其辯論之文字，多發表於國家學會雜誌及太陽二刊物中，宗之者各持己見，互事齟齬。會戰告終，上杉亦於斯時逝世，氏之學說，遂風靡一世，幾視爲定論矣。自九一八事變發生以來，革新思想勃興，於是此久經擱置之論爭，乃舊事重提，而視爲打倒自由主義之工具。一九三四年二月，貴族院議員菊池武夫，於六十五議會作排擊天皇機關說

之演說，要求取消美濃部高等文官試驗委員之資格。迨一九三五年二月之第六十七議會，此問題俄然惡化，菊池之演說，甚爲強硬，斥氏之學說思想，爲叛逆之思想，而又大罵氏爲叛逆學匪。氏以貴族院議員資格，出席辯論，不意此一席辯論，更激起反對者之怒潮。貴族院方面井上馨楠、三室戶敬光，衆議院江藤原九郎輩，均羣起攻擊，江藤且將氏訴不敬罪，政友會以久原房之助一派之策動，經全體決議，提出國體明徵決議案，此外軍人及革新團體，亦羣起排擊，議會結束後，政府迫於情勢，禁止發賣前述三書，並發表國體明徵聲明。九月林陸相辭職，國體明徵問題，隨新陸相川島義之之登台，而更見緊張，各革新團體及政友會，又推波助瀾，極力攻擊政府，一時並涉及樞密院議長一木喜德郎（氏係一木氏之弟子）與法制局長金森德次郎之進退問題，於是一面有氏之辭退貴族議員，一面有政府之國體明徵再度聲明。一九三六年三月廣田內閣成立，於新政綱中，亦嘗闡明國體明徵之旨，陸相寺內壽一，並宣布澈底明徵之要求，此事在政治上掀起如此軒然大波，實日本政治動向之一大關鍵。

重光葵 (Shigemitsu Mamoru)

駐華大使，一八八七年生，大分縣人。

氏爲工學博士重光族之弟。二十五歲時畢業東京帝國大學，獲復外交官領事官考試及高等文官考試後，與堀內謙介、酒匂秀一、桑島主計等同入外務省。初充駐德大使館辦事

員，旋調駐英大使館三等祕書及美國Portland領事。一九一九年充巴黎和會日本全權代表隨員，後任外務省條約局第一科第二科長及參事官等職。一九二五年任駐華公使館一等祕書，携日俄條約批准書至北京，是為至中國之第一次。曾參加我國召開之關稅會議、治外法權會議、及鹽稅會議等。一九二七年升任駐德大使館參贊，一九二九年調上海總領事兼公使館參事官。一九三〇年專任公使館參事官。是年繼芳澤謙吉後，代理駐華公使。在代理公使任內，因中日關稅協定交涉，與我前外交部長王正廷、財政部長宋子文，會見達三十八次之多，始得成立空協。一九三一年正式升任公使。翌年，一・二八事變結束，參加上海虹口公園閱兵典禮時，遭朝鮮人尹奉吉之狙擊，彈傷右足，於病牀中代表日方，簽訂淞滬停戰協定。後經醫生截去右足，始慶更生。一九三三年為外務次官，一九三六年七月升任駐蘇大使。一九三八年張敬峯事件發生後，調任駐英大使。一九四一年十二月繼本多熊太郎後，重行來華，任駐華大使。

重松宣雄 (Shigematsu, Nobuo)

外務省文書科長，一八九六年生，鳥取縣人。

家世研究漢學，一九二〇年東京帝大經濟學部畢業，在校時，即加入該校革新團體七生社，深為上杉慎吉教授所寵愛。曾任駐華使館祕書及情報部歐洲科長，一九三八年任調查部第二科科長，主管德義諸國。一九四〇年八月任大臣房

文書科長，以迄於今。氏在調查部時代，常着和服到署辦公，力主加入軸心同盟，與與瀨貞一、水野伊太郎（現通商局長）、及藤村信雄（前美洲局長），同被稱為松宮順部下之四大金剛。

重藤千秋 (Shigetaji, Chikaki)

陸軍中將，一八八六年生，福岡縣人。

士官學校第十九期步兵科及陸軍大學畢業。一九一九年及一九二六年，先後任參謀本部中國班班員，一九一四年為駐廣東武官，一九二七年及二八年為駐上海武官，一九二九年任中國班長，旋升中國科長（班長為根本博）。九・一八事變後，調任朝鮮羅南道龍山第七十六聯隊長，不久任善通寺第十一旅團長，一九三六年十二月任等五師團司令部附，一九三七年八月任第十一師團之旅團長，一九三八年三月晉升中將，一九三九年編入預備役。與佐佐木到一最相善，深得真崎甚三郎及建川美次之信任。

風見 章 (Kazami, Akira)

大政翼贊會總務，一八八七年生，茨城縣人。

氏為風見力三郎之次子，一九〇八年畢業早稻田大學政治經濟科。曾任東京兜町證券買賣業山栗商店職員、大阪朝日新聞記者、國際通信社主筆、信濃每日新聞社董事兼主筆等職。一九三〇年後，歷次當選為衆議院議員。氏於各種社會、政治、經濟問題，素有相當研究，尤其關於佃農問題，

以從事於農民運動，深憐農民苦况，嘗能以農民之立場，在議會及報章，發抒中肯之見解，其追隨橋本三郎而參加五一五事件，主因實由於此。嗣後受權藤成卿村治運動之影響，思想更爲急進，變爲純粹之日本主義論者，於是遂與中野正剛共同組織東方會及國民同盟，而隱然爲一革新巨頭。後

脫退國民同盟，以國策研究會會員關係，得與近衛接近，並受其器重。故第一次近衛內閣時，選任內閣書記長官，第二次近衛內閣時，任司法大臣，一九四一年一月辭退，是年三月轉任大政翼贊會現職。

十畫

俠原 孫一 (Tawara, Masochi)

前商工大臣，一八七〇年生，島根縣人。

一八九五年東京帝大法科畢業。曾任朝鮮總督府參與官、學部次官、臨時土地調查局副總裁、三重宮城各縣知事、北海道廳長官、拓殖事務局長等職，至一九二五年由鐵道次官、轉內務次官。一九二九年四月濱口內閣成立，擢為商工大臣，一九三一年四月辭退。當選為衆議院議員，已達七次。初屬政友會，一九一五年後轉入民政黨，歷任該黨幹事長、顧問等職。在黨中與若槻系較近，前曾煊赫一時，在財界方面，則與三菱財閥較有聯絡。一九三九年六月任燃料國策研究會會長。

原 守 (Hara, Manoru)

陸軍少將，一八九三年生，大阪府人。

士官學校第二十五期步兵科及陸軍大學畢業，曾駐歐洲多年。中尉至少校時，任陸軍大臣官房祕書，掌理機密，後轉軍務局擔任國外情報組長。一九三六年調充關東軍司令部高級參謀；翌年八月，繼秦彥三郎後，升任陸軍省新聞班長；一九三八年七月調聯隊長，一九四〇年晉級少將。

原 邦道 (Hara, Kunimichi)

前對滿事務局次長，一八九一年生，島根縣人。

一九一六年東京帝大經濟科畢業，即入大藏省，歷任小倉橫濱等稅務署署長、銀行局銀行檢查官、存款部監理科科長、運用科長、大阪東京等稅務監督局局長及關東軍顧問等職，至一九三七年十月，任對滿事務局次長，一九四〇年辭職。其時該局總裁，為板垣征四郎、畑俊六等。

原 嘉道 (Hara, Yoshimichi)

樞密院議長，一八六七年生，長野縣人。

東京帝大英文法科畢業，初任農商務省參事，及礦山監督局長官等職。二十八歲時，即辭職執業律師，兼任學習院及中央大學之商法、礦山法及民事訴訟法教授。一九〇七年得法學博士學位，同時被舉為中央大學校長及律師公會會長。一九二七年田中內閣時，任司法大臣，治安維持法，即由其任時公布施行。一九三一年任樞密院顧問；一九三八年繼荒井賢太郎後，任樞密院副議長；一九四〇年六月，繼近衛文麿後任現職。與平沼勲一郎，同為國本社之發起人。

原 惣兵衛 (Hara, Sobei)

衆議院議員，一八九一年生，兵庫縣人。

一九一九年日本大學法科畢業，復留學德國柏林大學及明興大學。歸國後，任東京每日新聞記者，不久改業律師，兼任日本大學幹事學監。六次當選為衆議院議員，隸政友

實籍。二十餘年來，時往來我國。並與兄某，在大連合股經營原田商店。

原口武夫 (Harasuchi, Takeo)

大藏省匯兌局局長，一八九五年生，東京府人。

一九一九年東京帝大經濟學部畢業，經高等文官考試及第，即入大藏省。歷任理財局事務官、主計局事務官、駐紐約財務官、及銀行局特種科長等職。至一九三九年任內閣企業院第五部（主管貿易問題）部長，一九四〇年八月調現職，夫婦並以交際家馳名。

原田健 (Harada, Ken)

駐梵蒂岡教廷公使，一八九二年生，熊本縣人。

前同志社大學校長原田保之子。一九一八年畢業東京帝大法科，即入內務省。翌年任國聯事務局職員，一九三〇年轉入外務省，嗣派駐國聯，達十九年之久。一九三九年三月調任外務省情報部次長，十一月派任駐法大使館參事，最近日政府與羅馬梵蒂岡教廷，互換使節，攝氏任現職。

原田清一 (Harada, Seichi)

海軍少將，一八九〇年生，岩手縣人。

一九一一年海軍兵學校畢業。曾任濱風天龍等艦航海長，富士艦副官，及襟裳艦艦長。一九三七年十二月，任大本營海軍報道部第三科科長；一九三八年九月，任出雲艦艦長；一九三九年十一月，任日向艦艦長。未幾，晉級少將。

原田熊吉 (Harada, Kumakichi)

前維新政府顧問，一八九一年生，東京府人。

士官學校第二十二期步兵科及陸軍大學軍刀組畢業，初任參謀本部地誌班班員，其後派駐長沙等地多年，一九三一年調任關東軍第三科副科長，與板垣、石原諸人，身歷九一八戰事；一九三四年轉近衛師團步兵第四聯隊長，一九三六年十二月又調充關東軍高級參謀，與武藤章等主持綏遠戰役，一九三七年晉級少將，翌年任維新政府軍事最高顧問，一九四〇年晉級中將。

宮三船夫 (Miyagawa, Fumao)

駐蘇大使館參事，一八九一年生，山形縣人。

東京外國語學校俄文科畢業，經外交官領事官考試及第，即入外務省。歷任駐蘇大使館一二三等秘書、伯力領事、海參崴總領事等職，於一九四〇年十月升任駐蘇大使館參事。富活動力，在蘇廿七年，為外交界中，著名之蘇聯通。

宮平武之輔 (Miyamoto, Takesuke)

前企畫院副總裁，一八九二年生，愛媛縣人。

由錦城中學及第一高等學校，於一九一七年畢業東京帝大工學部土木工程系，即入內務省土木局，一九一九年任技師，一九二五年任第二科科長。屢次來華考察，與亞院成立後，任技術部長，未幾就企畫院職。氏曾以鐵鋼凝土論文，得工學博士學位，兼長文藝。（本書付印時逝世）

宮田光雄 (Miyata, Mitsuo)

貴族院議員，一八七八年生，三重縣人。

一九〇五年東京帝大法科畢業，即任貴族院書記官，後以臨時議院建築局理事，受知於原敬。於一九一八年任福島縣知事，一九二〇年加藤友三郎內閣時，升內閣書記官長，不久勅選為貴族院議員。一九二八年田中內閣時，任警視總監。生平以中國通馳名，田中之對華政策，多經其參預。近年任政友會顧問，隸中島系。著有有色民族之復興及其經濟白次一書。

宮島清次郎 (Miyajima, Seijiro)

日清紡織會社總經理，一八八〇年生，栃木縣人。

一九〇六年東京帝大法科畢業後，即奉職日清紡織會社。現除任日清紡織、日清人造絲兩會社總經理，東亞製麻、川崎信託、日本團體生命各會社理事，及南洋貿易、大日本麥酒、遠州機械各會社董事外，更兼日本經濟聯盟之常務委員，日華貿易協會理事，關東紡織聯合會及大阪常任市議會議員等要職。遇有經濟上重要問題，常代表民間，與政府折衝，實為關西財閥之重鎮。林銑十郎組閣時，曾傳將出任商工大臣，一九三七年三月參加訪華經濟考察團，來我國考察。平素對大義毅執，頗為心折。

宮崎長吉 (Miyazaki, Chokichi)

衆議院議員，一八八一年生，香川縣人。

政友會要人前藏相三土忠造之弟，士官學校第十六期工兵科畢業。曾任士官學校教官，及所澤氣球隊隊長等職，一九二六年升至航空上校，一九二八年編入預備役。自後即從事政治活動，連續當選為衆議院議員，隸政友會籍。近年曾任該會之國防部長，在七十至七十三次議會內，屢向政府質問國防費、肅軍、軍人干政及中日戰事等問題。政黨以外，兼任高松硫黃鑛業、及朝日建材等各會社理事。性好運動角力。

宮崎申郎 (Miyazaki, Shinro)

駐伊拉克公使，一八九六年生，大阪府人。

一九二〇年東京帝大法科畢業，即及第外交官領事官考試。歷任天津、滬哥華、西雅圖等領事館領事，駐瑞士公使館三等秘書，及駐義大利大使館二等秘書；至一九三七年調回外務省，任文化事業部第二科科長，一九三九年轉任興亞院華北連絡部秘書，一九四〇年十二月升駐伊拉克公使，以迄於今。

宮崎正義 (Miyazaki, Masayoshi)

內閣囑託，一九〇三年生，石川縣人。

士族，一九一一年石川縣立第二中學畢業後，以該縣海外研究生，留學莫斯科。一九一四年歸國，是年復以滿鐵留俄學生，重赴莫斯科，後畢業莫斯科大學，供職南滿鐵道會社，達十餘年。滯變後，活動於協和會方面，並參加起草滿

洲產業五年計畫。著有東亞聯盟論一書，近衛以其精通蘇聯情事，邀為內閣囑託。

宮野繁太郎 (Miyasaki, Shigesaburo)

陸軍少將，一八九四年生，岐阜縣人。

士官學校第二十五期步兵科及陸軍大學畢業。歷任參謀本部中國班班員、關東軍司令部附、及駐哈爾濱上海等處武官，至一九三六年冬，任廣東特務機關長，一九四〇年十二月，繼前田正實後，任上海特務機關長。

宮野勝太郎 (Miyazaki, Katsutaro)

前駐羅馬尼亞公使，一八九二年生，東京府人。

一九一七年東京帝國大學法科畢業。初入農商務省，任臨時產業調查局科員。一九一九年經外交官領事官考試及第，派任駐英大使館三等祕書，後調任歐美局第一科科長，一九三二年任駐法大使館一等祕書，一九三六年任駐土耳其大使館一等祕書，旋升參事。一九三九年十二月調升駐羅馬尼亞公使，一九四一年辭職。

岡田龍介 (Miyazaki, Ryusuke)

前社會民衆黨中央執委，一八九三年生，熊本縣人。

宮崎滔天（別名白浪滔天）之子。滔天贊助我國革命，與國父孫中山，及唐才常、黃克強、宋教仁諸公，往來尤密。氏少時即與克強先生之子一歐等，共同起居。一九一九

年畢業東京帝國大學法科，在學時已與赤松克麿等擬設新社會，為學生運動之先驅，後業律師。一九二六年發起社會民衆黨，任中央執行委員。一九三〇年合併於全國大衆黨，競選衆議員未成，因而專門研究中問題。國父奉安葬時，

曾代表日本民間故舊，來京致祭，嗣後數來我國。一九三二年時，倡議以中國承認滿洲國為條件，由日本撤廢對華之一切不平等條約，並返還租借地，實行兩國之真正親善。夫人柳川輝子，別號白蓮女史，係柳川伯爵之妹，才華冠世。

宮田俊雄 (Shimada, Toshio)

前內閣參議，一八八三年生，島根縣人。

一九〇〇年東京帝大法科政治學系畢業，立志欲業律師，以政治科出身，無法取得資格，故復入該校法科英文法學系，畢業時已三十四歲。一九一二年以後，連續當選為衆議院議員。曾任東京市教育科長，臨時市政調查局長，中央大學、法政大學、早稻田大學、日本大學等講師，及我國雲南省之法政學校教習（前清宣統元年）。以原敬、望月圭介之介，加入政友會，歷充該會幹事、總務、政務、調查會長及顧問等職，在會內有「島田集團」，隱然自成一派。長於辯才，田中義一常譽為馳騁於千軍萬馬之政治家，氣魄毅力，亦有過人之處。一九三六年廣田內閣時，以氏於農漁山村情形，頗有研究，選任農林大臣，後隨廣田辭職。一九三九年平沼內閣成立時，繼前田米藏後，任內閣參議，一九四〇年

辭職。在實業界方面，兼任朝鮮信託會社、吾妻川電力會社及中央新聞社等董事。

島田繁太郎 (Shimada, Shigetaro)

海軍大臣，一八八五年生，熊本縣人。

築筑熊七中將之婿，一九〇五年海軍兵學校畢業，即以和宗艦長，參加日俄戰事。一九一三年又畢業海軍大學，嗣復歷任駐義大利使館、武官軍令部參謀兼海大教官、日向艦副艦長、多摩比叡等艦艦長、第七潛水戰隊司令官、第三艦隊參謀長（一・二八戰役時，代表海軍簽訂上海停戰協定）、聯合艦隊參謀長、潛水學校校長、及軍令部第一部長等職，至一九三四年晉級中將，升任軍令部次長。一九三七年任第二艦隊司令官；一九三九年任吳鎮守司令長官；翌年五月任中國方面艦隊司令官，十月中日事變海軍第十四次論功行賞時，與吉田善吾、山本五十六，同時晉級大將。一九四一年六月調充橫須賀鎮守府司令官，是年十月東條氏組閣，繼任現職。

島田莊藏 (Shimai, Shozo)

日本銀行理事，一八八九年生，廣島縣人。

一九一〇年長崎高等商業學校畢業，即入日本銀行，并上準之助任行長時，擢為秘書。後由考査部主事，累升至紐約代理行長、倫敦代理行監督、門司分行行長、及國債局局長、四十八歲時，擢為本行營業局局長。在倫敦時代，因派

乘國際清算銀行理事，日與各國銀行家，交換各種意見，故頗通國際金融情形。一九三七年五月，當選現職。

唐澤俊樹 (Karasawa, Toshiaki)

貴族院議員，一八九〇年生，長野縣人。

一九一五年東京帝國大學法科政治學系畢業，在學時已及第高等文官考試。畢業後即入內務省，歷任內務省事務官、茨城縣理事官、警察講習所教官、內務大臣秘書官、警保局保安科長、和歌山縣知事，及內務省土木局長等職，至一九三四年後藤文夫任內相後，擢為警保局長。與當時之地方局長安井英二，並以新官僚中堅人物著稱，後藤之計畫與行動，殆無不由二人所建白。後安井出為大阪府知事，氏遂為後藤幕下唯一之智囊。二・二六事變後，後藤下野，唐澤亦行退職。一九三九年四月，平沼內閣改組時，有出任內閣書記官長之說。阿部內閣時，任法制局長，一九四〇年一月勅選為貴族院議員，屬研究會系；此外兼任東亞研究所常務理事及興亞院幹事。

狹間 茂 (Hazama, Shigeru)

警贊會組織局長，一八九三年生，岡山縣人。

一九一九年東京帝大英法科畢業，即入內務省。歷任和歌山神奈川等縣事務官、內務大臣官房文書科科長、人事科科長、社會局社會部部長、中央職業介紹所所長等職。至一九三六年升任衛生局長，一九三八年出任茨城縣知事，一九三

九年一月任土木局長，是年四月調地方局長，地方稅制改革案，卽由其草定。一九四〇年七月，安井英二上台後，任內務省次官，翌年調現職。氏以善於設計馳名，與安井內相、藤原警保局長、留岡地方局長，同稱爲內務省岡山系之主要人物。

栗山茂 (Kuriyama, Shigeru)

駐越南大使館首席隨員，一八八六年生，福井縣人。

栗山俊一之弟，一九一三年東京帝大法科法文法學系畢業。是年卽與白鳥敏夫、谷正之、加藤外松、及矢野眞等，同以外交官領事官考試及第而入外務省，初任香港、牛莊及里昂等領事，嗣經駐比利時大使館三等祕書、駐美大使館二等祕書及華盛頓會議全權代表隨員，於一九二二年回國，任條約局第一及第三科科長。一九二七年復出任駐法大使館一等祕書，一九三〇年升任參事。一九三三年調爲外務省條約局長，一九三七年三月繼白鳥敏夫後任駐瑞典公使，未幾升駐比利時大使。迨松岡外相時代人事風潮發生，退職歸國。一九四一年九月芳澤謙吉使越時，得天羽英二之推轂，出任首席隨員，以親任官待遇。氏長於法語，通曉法國文學，其外交經歷，亦以駐劄法國爲較久；身材短小，天資穎敏，與其中學時代以來之老友末弘嚴太郎博士相似。妻房子，係大地主內藤政道子爵之女。

栗本勇之助 (Kurimoto, Yunosuke)

大阪實業家，一八八五年生，和歌山縣人。

一八九八年東京帝大法科畢業，卽創辦栗本鐵工所，自任董事長。一九一九年被舉爲大阪商工會議所副所長；一九三〇年以資本家代表名義，出席國際勞工會議。現除鐵工所董事長外，並兼任大阪鐵工業共益會社、昭和飛行機會社、及鞍山鋼材會社社長等職。家財數千萬，爲關西軍需工業界之有名人物。

栗原正 (Kurihara, Sho)

駐土耳其大使，一八九一年生，茨城縣人。

氏爲栗原俊太郎之第三子，一九一四年高等文官考試及第，翌年畢業東京帝國大學法科，又及第外交官及領事官考試。歷任奉天里昂各地隨習領事、駐西班牙公使館三等祕書、巴黎和會全權委員隨員、外務省事務官、福州及長春領事、駐比大使館一等祕書、外務大臣官房文書科科長兼翻譯科長，至一九三一年派爲駐滿大使隨員，同年任長春總領事兼大使館一等祕書。一九三三年轉天津總領事，一九三五年調任外務省調查部長，翌年十一月升任羅馬尼亞公使。一九三八年十月以白鳥敏夫之薦，轉任東亞局長，一九四〇年又升駐土耳其大使，以迄今日。氏爲一富於趣味之人，善運動，長晉律，通英法語，而法語尤爲流暢。妻爲故文學博士菊池武夫女，前駐美大使出淵勝次之襟兄也。著有皇道外交原理一

書：極力排斥協調外交，主張以皇道精神為基礎，而實行自主之國家主義外交。

栗原美能留 (Kurihara, Minoru)

大日本青少年團副理事長，一九〇六年生，長野縣人。

野縣人。

一九二四年東京帝大法科政治學系畢業，又經高等文官考試及第，先後曾任福井縣理事官、內務省社會局工場調停官、及社會局總務局科員。後入國維會，投拜後藤文夫、香阪昌康門下。一九三四年任滿洲民政部文書科長及人事科長，一九三六年任內閣調查局調查官，一九三七年十二月任大日本青少年團副理事長，到任後極力整頓內部，今已有青少年團員達五百七十餘萬人云。

桑木崇明 (Kuwaki, Takaaki)

陸軍中將，一八八五年生，東京府人。

哲學家桑木嚴翼之從弟，士官學校第十六期砲兵科及陸軍大學畢業。曾任駐土耳其及蘇俄大使館武官、參謀本部俄國班班長、演習科科長、台灣軍參謀、野戰重砲兵第二聯隊長、第三旅團長、野砲兵學校幹事、及參謀本部第一部部长，至一九三六年晉級中將，是年十二月充任兵器本廠附，一九三八年八月升任師團長。

桑原重遠 (Kuwabara, Shigeharu)

駐南京海軍武官，一八九六年生，熊本縣人。

一九一八年海軍兵學校畢業。歷任軍令部參謀、第一遣外艦隊司令部副官、駐上海武官室海軍武官、軍令部出仕、駐華使館副武官、及軍令部部員等職。至一九三九年任興亞院調查官，一九四〇年三月，任阿部大使隨員，是年十二月，繼金澤正夫處，任駐南京海軍武官。

桑島正計 (Kuwajima, Kazue)

前駐巴西大使，一八八五年生，香川縣人。

一九〇六年早稻田大學政治經濟科畢業，即及格外務書記考試，以主事派赴駐華使館服務。一九〇八年及一九一一年又先後及第高等文官考試及外交官領事官考試。嗣後歷任奉天、漢口、舊金山、詩家谷、檀香山領事，外務省書記官，駐美大使館一等祕書及參事，至一九三〇年調任天津總領事；一九三三年轉任外務省亞細亞局長，翌年六月，亞細亞局改為東亞局，仍繼任局長。氏之外交生涯，幾盡在中美兩國，對中國情形，尤熟悉異常，民情風俗，無不研究，關於研究中國之資料，搜羅亦至豐富，據稱一九三五年對華提出之所謂廣田三原則，即由氏所草擬。川越茂未來華之前，曾傳為駐華大使人選之一。一九三七年三月轉任駐荷蘭全權公使，一九三八年繼澤田節藏後，升任駐巴西大使，一九四〇年辭職歸國。一九四一年秋與極端風次、飯泉良三、岩田愛之助等，同任興亞同盟特別委員，專司研究南洋對策。

柴山兼四郎 (Shibayama, Kaneshiro)

陸軍少將，前張學良軍事顧問，一八九〇年生，茨城縣人。

士官學校第二十四期輜重科及陸軍大學畢業。初任參謀本部地誌班班員，一九二五年派至北平鄭州一帶活動，一九二七年，調回原任。一九二九年張學良聘為軍事顧問，並兼滿東軍司令部附。其後歷任地誌班班長，駐華公使館副武官，及輜重兵第十八聯隊長等職，一九三七年三月後官停繼任平務局長，以氏熟悉華情，調為軍務局軍事科長，一九三八年任漢口特務機關長，一九四〇年調陸軍教育總監部附。

根本博 (Nemoto, Hiroshi)

陸軍少將，一八九二年生，福島縣人。

由仙臺陸軍幼年學校畢業士官學校第二十三期步兵科及陸軍大學。早歲以精於代數，譽為天才。久任參謀本部中國班班員，為櫻會及五日會（為打倒軟性文學，激發愛國思想，鼓勵革新運動之文學團體）之幹事。一九二七年國民軍攻入南京，氏適以公使館副武官名義，駐南京鼓樓總領事館內，轉傳會受亂軍襲擊，腹部臀部均受槍傷，自露台跌下，幾死。後調回參謀本部任事。淞變時，充該部中國班長，旋轉陸軍省新聞班長。一九三五年任旭川步兵第二十七聯隊長；一九三七年七、七事發生後，調駐北平；翌年春，繼喜多誠一後，任駐北平特務機關長。一九三九年七月晉級少將。

酒田秀一 (Sakai, Shuichi)

前駐芬蘭公使，一八八八年生，鹿兒島縣人。

一九一一年東京高等商業學校專攻部畢業，經外交官及領事官考試合格，歷任鐵嶺長春領事、關東都督府事務官、外務省祕書、通商局第一及第二科科長、駐蘇大使館一等祕書、代理參事、及加爾喀答總領事等職，一九三三年重任駐蘇聯大使館參事。廣田弘毅頗器重之，對於蘇聯各種經濟問題，輒使當折衝之任。前華盛頓會議時，曾任全權委員隨員；日俄通商會議時，充任日方代表。一九三六年冬新設芬蘭使館，以其精通俄情，擢為首任公使，一九三九年辭職。

酒井忠正 (Sakai, Tadamasa)

伯爵，貴族院議員，一八九七年生，愛媛縣人。

阿部正直（氣象學家）伯爵之弟，出嗣於姫路藩士酒井忠興為養子，故改今姓。一九一八年京都帝大法科畢業，翌年襲受伯爵。一九二〇年任司法及鐵道大臣祕書官，一九二三年選為貴族院議員，以迄今日。其間曾兼任內閣調查局參與官、國有財產調查會委員、米穀調查會委員、及帝國農會會長。在貴族院為研究會（伯爵爵團體）之新興巨頭，常與岡部長景取得聯絡。岡部為主張反米突刺及反羅馬字法之國粹主義者，氏居於幕後，為其策劃。岡部會開放其私宅之一部份，創設金鷄學院，自任院主，聘請岡正篤擔任教職，努力於精神教化運動。其所講授，雖以論語為唯一教材，然目的則在養成改造日本之指導分子。支持者除氏外，尚有後

藍文夫、結城豐太郎、赤池濃等，驗講者多爲軍人官僚財界貴族，蓄一修養性質之革新團體。家素富有，好繪畫，養妹菊子，嫁侯爵陸軍中將前田利爲爲妻。

酒井 康 (Sakai, Yasushi)

陸軍少將，一八九〇年生，東京府人。

士官學校第二十四期砲兵科及陸軍大學(一九二〇年)畢業。曾任參謀本部部員、軍事調查班班員、陸軍大學教官(兩次)、駐義大利使館武官、及重砲兵聯隊長等職，至一九三八年七月晉級少將，翌年十月升任旅團長，一九四一年三月任陸軍省兵器本部企畫部長。

酒井 隆 (Sakai, Takashi)

陸軍中將，一八八八年生，廣島縣人。

原姓二宮，士官學校第二十期步兵科畢業。歷任步兵第二十三聯隊及第二聯隊大隊長、第二十三聯隊長、第六師團參謀、濟南武官、參謀本部中國班班長科長等職，至一九三四年任天津駐屯軍參謀長。與高橋坦同爲促成何梅協定之當事人。七七事變發生後，以二十八旅團長，戰於華北各省。一九三九年任興亞院蒙疆連絡部部長，一九四〇年辭歸。一九四一年十二月大東亞戰爭發生，擔任香港方面陸軍最高指揮官，使百年來，英國據以侵略中國之香港，終於失陷。

酒井 高四 (Sakai, Kishin)

前商工省燃料局石炭部長，一九〇一年生，北

海道人。

一九二三年東京帝大法科政治學系畢業，即入商工省，歷任工務局科員、礦山局燃料科長、燃料局第一部油政科長、及第二部資源科長。至一九三七年九月，任關東軍經濟顧問；一九三八年十一月，任燃料局總動部總務科長；一九三九年十一月，任該局石炭部長。年遠不惑，尙獨身未娶。

酒井 錫次 (Sakai, Kohji)

陸軍中將，一八八八年生，東京府人。

士官學校第十八期步兵科及陸軍大學畢業。曾任第八師團參謀、陸軍大學兵學教官、陸軍大學研究部主事、士官學校幹事、教育長、及步兵第二十二聯隊長等職，至一九三六年十二月升任二十七旅團長，一九三八年十一月晉級中將，同時調任第七師團長。氏在第一次歐戰時，曾在法從軍，達三年之久。

眞方 勳 (Makata, Kun)

興亞院調查官

士官學校三十二期步兵科畢業。曾任參謀本部中國班班員、雲南及廣東武官、及陸軍省情報部部員等職，至一九三九年任興亞院政務部高級科員。未幾，晉級大佐，調任該部第二課調查官，以迄今日。

眞崎 甚三郎 (Mazaki, Jinzaburo)

陸軍大將，一八七六年生，佐賀縣人。

眞崎要七之長子，海軍中將眞崎勝次之兄，於一八九七年與荒木貞夫、松井石根、本莊繁、阿部信行同期畢業士官學校步兵科。日俄戰爭時，以上尉任步兵第四十六聯隊中隊長從軍。一九〇七年又畢業陸軍大學，不久派赴德國留學。歸後初任步兵第四十聯隊大隊長，一九一七年任教育總監部第二科長，自此青雲得志，歷任陸軍省軍事科長、近衛步兵第一聯隊長、第一旅團長、士官學校（簡稱士官）校長。日本陸軍學生，向例不與聞政治，自歐戰終止後，反戰反帝之社會主義學說，瀰漫全國，士官學生亦漸被沾染，氏長士官四年，多方教導，日以日本主義相號召，卒使信仰轉變，遂被青年軍人，擁爲領袖。一九二七年先後任第一師團及第八師團長。宇垣一成任陸相時，調爲台灣軍司令官。一九三二年一月，任參謀本部次長，兼軍事參議官、宮內省御用掛等。一九三三年晉級大將，翌年，轉任陸軍教育總監。一九三五年，林銑十郎高唱「肅軍」方針，被迫辭職，易以渡邊錠太郎，結果引起少壯派之反動，而主持肅軍之軍務局長永田鐵山，遂被相澤三郎白晝刺死於陸相公署。一九三六年二月，永田事件數次審判，氏亦被召到庭受質，詢及該案內容，氏默不作聲，憤然退庭，其後二日，震駭一世之二、二六事變，遂隨之發生，一時樹立軍政府及眞崎內閣之說，轟然塵上，事後與荒木、阿部（信行）、林（銑十郎）、川島（義之），同以責任關係，編入預備役，旋逮捕入獄，八、一三

戰事發生後，始告釋放。

眞崎勝次 (Masaki, Katsuji)

海軍中將，一八八四年生，佐賀縣人。

眞崎善三郎之弟。一九〇六年海軍兵學校畢業，一九三六年累升至海軍中將。其間歷任天龍敷島等艦砲術長、第五及第六戰隊司令部附、第三艦隊司令部附、軍令部參謀、駐蘇大使館武官、橫須賀鎮守府附、隱戶特務艦長、大湊要港參謀長、橫須賀防衛司令、及橫須賀鎮守府人事部長。氏爲有名之「俄國通」，曾熱烈參加國體明徵問題，與小林省三郎同爲海軍中之革新分子，一九三六年冬，編入預備役。

秦彦三郎 (Hata, Hikosaburo)

陸軍少將，一八九一年生，三重縣人。

士官學校第二十三期步兵科及陸軍大學畢業，歷任哈爾濱特務機關員、參謀本部俄國班班員、駐波蘭兼羅馬尼亞武官，及駐俄大使館武官。先後留居蘇俄十二年之久，對於蘇俄情形之熟悉，少壯軍人中，無出其右者。在上尉時代，曾至參觀龐克習，並參加大藏省之財政研究会聽講，對於各種社會問題，均肯細心研究。一九三六年五月調任陸軍省新聞班長，一九三七年八月任聯隊長，一九三九年冬任關東軍副參謀長。

秦眞次 (Hata, Shinji)

陸軍中將，一八七九年生，福岡縣人。

士官學校第十一期步兵科及陸軍大學畢業，曾任陸軍省軍務科員，駐法大使館武官、新聞班班長（新聞班原係宣傳班，係氏於荒木長軍務局時建議而成立者，故改為第一任該班班長），調查班班長、步兵第二十一聯隊長、第三師團參謀長、東京警備司令部參謀長、步兵第十五旅團長、陸軍大學步兵學教育、關東軍司令部附、第九及第十四師團司令部附、東京憲兵司令官等職，至一九三一年晉級中將，一九三四年升任第二師團長。翌年八月林銑十郎陸相時代，勵行肅軍，將氏編入預備役，其時教育總監真崎甚三郎表示異議，而真崎亦被迫辭職。氏在一九二五年任調查班班長時，曾乞假二年，研究日本思想，又與堺利彥、森戶辰男、長谷川如是閑等，討論社會問題，並借荒木貞夫就教日本精神於大川尚明及安岡正篤，因之遂成爲軍人中之思想家。編入預備役後，親赴伊勢神宮之皇學館，執弟子禮聽講。

荒三郎 (Arakawa, Shoji)

對滿事務局次官，一八九二生，神奈川縣人。

一九一六年東京帝國大學英文法科畢業，即入大藏省。歷任理財局事務官、主計局司計科長、及銀行局檢查科長等職，至一九三五年任關東軍經濟顧問，一九三六年任大藏省匯兌管理局長，不久派任駐倫敦財務官。一九四一年一月任現職。

荒木貞夫 (Araki, Sadao)

男爵，陸軍大將，一八七六年生，東京府人。

由和歌山縣遷居江戶，故著籍東京。幼時家境清寒，曾爲千葉縣銚子某醬油店之學徒，後畢業士官學校第九期步兵科，並以第一名畢業陸軍大學。日俄戰爭時，任福澤旅團副官，頗著戰績。一九〇九年任駐俄大使館副武官，一九一五年復赴帝俄。歐戰起後，即在俄軍中參戰，迨革命發生歸國。嗣後歷任海參崴派遣軍參謀長、參謀本部歐美部長、步兵第八旅團長、憲兵司令官、參謀本部總務部長、陸軍大學校長、及熊本第六師團長，至一九三一年三月任教育總監本部長，同年十二月繼南次郎後，任陸軍大臣，一九三四年一月辭職，翌年授男爵，並晉級陸軍大將。二、二六事件後，以軍之長老責任攸關，自請編入預備役。一九三七年九月，第一次近衛內閣時代，成立內閣參議制，與宇垣一成同被邀爲參議。翌年五月又遷任文部大臣，經平沼內閣，至一九三九年阿部組閣時辭職。氏爲日本陸軍中之「俄國通」，又以精神家馳名。

荒井誠一郎 (Araki, Seichiro)

日本興業銀行副總裁，一八八七年生，東京府人。

一九一四年東京帝大法科畢業。即入大藏省，歷任主計局司計法長、井上藏相隨從祕書兼官房文書科長，東京名古

屋稅務監督局長、存款部長、及銀行局長等職。至一九三六年任專賣局長官；一九四〇年二月轉任勸業銀行理事，是年十二月繼河上弘後，任現職。氏最爲井上準之助所器重，革新派得勢後，頗鬱不得志，故大藏大臣一席，終讓諸後輩賈三、石渡諸人。

草鹿任一 (Kusaka, Ninichi)

海軍中將，一八九〇年生，石川縣人。

一九〇八年海軍兵學校畢業，後又留學歐美。歷任軍令部參謀、海軍學校及海軍大學教官、海軍省教育局第三科科長、扶桑艦艦長、及第三艦隊參謀長等職，至一九三六年十二月晉級少將，一九三八年四月升任中國方面艦隊司令官，一九三九年冬，歸國任教育局長，一九四〇年調人事局長，一九四一年四月以中將任海軍兵學校校長。

高山久藏 (Takayama, Kyuzo)

勞動組合總聯合會長，一八九五年生，東京府人。

小學畢業後，以機器工人轉供職各工廠。迨一九一九年與松浦啓一組織「機械技工組合」，指導池員，共立、明治電氣工廠及大塚鐵工所等之罷工，是爲從事勞動運動之第一步。一九二〇年及一九二二年，先後結成本（所）芝（區）勞動組合、光學技工組合、及工團主義之關東機器工人聯合會，被舉爲常務委員。一九二六年與大阪鐵工組合，合併成立爲「日本勞動組合總聯合」，常推爲中央執行委員，此

「日本勞動組合總聯合」，爲次於「日本產業勞動俱樂部」之有力革新工會，以重工業方面之勞動者爲基礎，初支持勞動大衆黨，至一九三一年轉而支持國家社會主義之「新日本國民同盟」，入爲幹部。一九三二年任國際勞動代表隨員赴歐，一九三五年四月，繼坂本後，任「日本勞動組合總聯合」會長，更宣言信奉日本主義，揭舉以皇道日本之完成與國家產業之發展爲宗旨，計有加盟組合四一，組合員二七、一二人。一九三六年四月東京有「愛國勞動組合全國懇談會」之結成，參加團體凡二十五，會員十萬人，其中心團體，即爲前述之俱樂部與總聯合，氏被舉爲常務委員之一。十一月諸有力革新團體，於東京召集「時局協議會」，籌劃創設統一革新陣線之「維新政黨」，氏與橋本欣五郎，小林順一郎，均列名爲發起人。

高木友三郎 (Takagi, Tomosaburo)

前內閣企畫廳參與，一八八七年生，富山縣人。

一九一四年東京帝大法科畢業，由不動貯金銀行及增田經紀銀行行員，一九一七年任大阪每日新聞社經濟部，一九一八年入母校大學院研究，一九一九年任法政大學教授；一九三六年派赴歐洲視察，歸後任該校經濟部部長。一九三七年任企畫廳參謀，未幾企畫廳擴爲企畫院，即行辭退。著有日本經濟之實際生活，經濟哲學等書。與高橋龜吉小島精一等，同稱爲時髦經濟評論家。

高木陸郎 (Takagi, Rikuro)

中日實業公司副總裁，一八八一年生，新潟縣人。早歲畢業東京商工中學校，初入三井物產會社服務，一八九九年由該會社派遣為第一期之中國留學生。庚子拳亂時，任陸軍翻譯官，事平後，重入三井物產會社，服務於滬甯等地。一九〇八年及一九〇九年，開辦高昌號及凸版印刷所於漢口。清季宣統二年，我漢陽鐵礦萍鄉煤礦，合併為漢冶萍公司，因與日本有債務關係，氏辭三井職，被派為日本商社代表來華，一九一三年日本設立漢冶萍公司代理店性質之京通商會社，氏任為該社經理。一九二二年後，又兼任中實業公司副總裁，南滿鐵業及南滿汽車交通各會社經理，滿洲棉花製鐵、滿洲鑛山藥材及日興商事各會社理事，滿蒙毛織、滿蒙百貨店及高木合會社代表社員。曾受我國政府一等大綬嘉禾章。所謂中日實業公司者，成立於民國初年，係由中日合辦，設東京麹町區丸之內。日本方面之大股東，為三井、三菱、大倉等財閥，總裁一席，素歸華方担任，現任總裁為費乃寬。一九三六年中日外交形勢險惡時，曾著論一「只以對中國人，論列日本對華政策，足使日本誤入歧途，希望日本人士，從新認識中國」。七七事變發生後，提倡開發中國產業實力。

高石實五郎 (Takashi, Shingoro)

大阪每日及東京日日新聞社理事會會長，一八七八年

生，千葉縣人。

一九〇一年慶應義塾法科畢業，即任大阪每日新聞社社長秘書，翌年派赴倫敦大學留學，兼任駐英通訊員。一九〇六年任大阪每日駐俄京特派員，明年復赴英國。一九一〇年後任墨西哥特派員，兼在美國活動，達八年之久。一九一八年任巴黎和會特派員，一九二二年歸國任大阪每日新聞、東京日日新聞主筆，兼大阪每日新聞總幹事，並創刊英文每日，一九二九年又赴歐洲考察。中日事變發生後，於一九三七年山近衛內閣，特派為赴美宣傳員，一九三九年九月，被選為該新聞社理事會會長，此外並兼富民協會清交社等理事長。

高松順茂 (Takamatsu, Norinige)

前與亞院經濟部科長，一九〇二年生，富山縣人。一九二四年東京帝大法科英文法學系畢業。經高等文官考試及第，即任朝鮮總督府遞信處科員。一九二八年任京城郵政局長，一九三三年派赴歐美考察，一九三六年任遞信省管船局高級科員，一九三七年任熊本遞信局監督科科長，一九三九年任與亞院經濟部科長，現又回遞信省管船局，任近海科長。

高津富雄 (Takatsu, Tomio)

廣州總領事，一八九四年生，東京府人。一九二〇年東京帝大文學部畢業，即任大正日日新聞編輯員，一九二二年經外交官領事官考試及第，入外務省，歷

任香港盤谷等總領事館領事、外務省情報部第三科科員及科長等職，至一九四〇年十二月任廣州總領事，平素主張日本主義。

高島誠一 (Takashima, Seichi)

日本經濟聯盟會常務理事，一八八六年生，兵庫縣人。

一九〇九年東京高等商業學校畢業，即任大阪商船學校教授；一九一四年留學法國巴黎大學法科，一九一九年回國，任神戶高等商業學校教授。以通曉經濟情形並擅長外國語，由鄉誼之助選任日本經濟聯盟會主事，一九二九年升任常務理事，以迄於今。其間又曾任日英日美通商評議會理事、歐美經濟考察團代表、及國際經濟會議委員隨員。態度謙和，辦事忠實，故能久於其任。

高野信造 (Takagaki, Nobuzo)

阿富汗國政府顧問，熊本縣人。

日本大學商科畢業後，渡美入哥倫比亞大學研習經濟。一沉與印度亡命客交往，曾由頭山滿等介紹，聘為印度泰戈爾大學日本史教授。一九三一年任阿富汗國政府顧問，並版依回教，取名為阿布得拉（由該國陸軍部長代為取名），阿政府曾頒給最高勳章。

高橋四郎 (Takasu, Shiro)

海軍中將，一八八七年生，茨城縣人。

一九〇七年海軍兵學校畢業。歷任磐手五十鈴等艦艦長、駐英大使館武官、五一年件時憲判長、第三艦隊參謀長、軍令部第三部長、海軍技術會議員、練習艦隊司令官、及駐滿海軍司令官等職，至一九三八年晉級中將，一九三九年繼任藤信竹後，任華南艦隊司令官，指揮欽州登陸作戰。一九四〇年調歸任海軍大學校長，旋又他調。

高橋三治 (Takahashi, Sankichi)

海軍大將，一八八二年生，東京府人。

父由岡山縣遷居東京，一九〇一年海軍兵學校畢業，以少尉任官，至一九三六年晉升大將。其間歷任扶桑艦長、海軍軍令部參謀兼本部技術會議議員、第一艦隊兼聯合艦隊參謀長、第一航空戰隊司令官、海軍大學校長、軍令部次官、第一艦隊司令官、及聯合艦隊兼第一艦隊司令官等職。一九三六年春，氏率聯合艦隊訪美，大唱資源分割之論。與末次信正、中村良三，同為加藤（寬治）手下之三傑，管謂日本之南進政策，須以台灣及南洋委任統治諸島為根據地，而擴張至荷屬新畿內亞、婆羅洲、美屬菲律賓羣島，及英屬馬來半島，實足代表一般南進論者之共同理想，一九三七年冬，升軍事參議官，一九三九年春，編入預備役。大日本與亞同盟成立後，總裁林銑十郎大將，選氏與松井石根大將、水野鍊太郎博士，同任副總裁之職。

高橋正一 (Takahashi, Teiichi)

華北交通會社總務局長，一八九九年生，山口縣人。

一九二一年東京帝大法科畢業。經高等文官考試及第，即入鐵道省，歷任經理局事務官、門司鐵道局庶務科長、東京運輸局汽車科長、及陸軍省囑託等職。至一九三八年任滿洲華北事務局總務部次長，一九三九年任華北交通會社總裁總務局長。

高橋坦 (Takahashi, Tan)

陸軍少將，一八九三年生，香川縣人。

士官學校第二十七期砲兵科及陸軍大學(一九二六年)畢業。歷任海參崴派遣員、參謀本部中國班班員、陸軍大學士官、及駐華使館副武官。與酒井隆，同為促成何梅協定之當事人。至一九三六年調回參謀本部，一九四〇年任聯隊長。一九一四年任朝鮮軍參謀長。

高橋康順 (Takahashi, Kojun)

前滿洲國實業部總務司長，一八九一年生，秋田縣人。

一九一六年東京帝大法科德文法學系畢業，翌年入商工省之產業調查局，一九一九年派赴歐美考察，升為商工省事務官。一九二三年，派至中國及西伯利亞調查。歸後歷任鐵道監督局特許局科員、礦山局鑛政科長、商務局商政科長、奉天大臣官房文書科長。一九三二年滿洲政府成立後，任該政

府實業部總務司長。在任時，與岸信介二人，致力於特殊公司之設立及產業統制之實現；後被選為滿洲生命保險會社理事長。氏忠慮周密，頗為其同鄉町田忠治所器重。

高橋龜吉 (Takahashi, Kamekichi)

經濟評論家，一八九〇年生山口縣人。

幼時家貧，曾充朝鮮陸軍御用其雜貨舖學徒，後畢業早稻田大學商科，供職久原鑛業會社，旋任東洋經濟新報社編輯。一九一九年赴歐調查經濟情形，一九二一年回國，專事研究日本經濟現況，同時又從事社會運動。一九二三年冬，參加政治研究會之組織，任該會中央委員。一九二六年任日本農民黨顧問及全日本農民同盟會長。一九二八年志趣轉變，辭去日本勞動黨顧問及大眾黨顧問等職，創辦高橋經濟研究所，銳意研究經濟國策。關東軍及朝鮮總督府，均聘為經濟顧問，並代表日本出席太平洋會議(論文為日貨之廉價並非由於 Social Dumping)。著有經濟學之實際智識、金融之實際智識、明治大正產業發達史、日本經濟之飛躍及世界經濟之前途、支那經濟危機論、公債論、長期戰下之財政經濟等書，尤以一九三〇年出版之「金幣禁止論」，風靡一時。與近衛為舊識，一九三七年內閣企畫廳成立後，曾擔任參與官。現任內閣價格形成中央委員會委員，時在報章雜誌，發表經濟論文。

重場恒吉 (Baba, Tsunego)

政治評論家，一八七八年生，岡山縣人。

由京都第三中學升入仙台第二高等學校理工科，修業滿期之正月，患感冒，臥於宿舍，萬感交集，對理工一類物質方面之學問，深表懷疑；遂決退學而轉入京都同志社大學之神學部，時年二十三歲。氏之入神學部，志在為一牧師，蓋其先已皈依基督教，對聖書之一字一句，奉為金科玉律。然入神學部後，即安部磯雄新神學之理論，對聖書又發生疑問，終乃信新神學為真理，故在學未及一年，又隨安部轉早稻田大學之政治科。明年（一九〇一）退學 入日本太晤士報

編輯部，至一九一〇年辭職。嗣赴紐約，並任 *Oriental*

Review（東洋新聞）記者凡三年，歸國後任國民新聞總編輯，一九一九年出席巴黎和會，一九二三年後，脫離國民新聞，潛心研究，為各大雜誌及新聞之特約撰述。所著論文，多關於政治及人物方面，而對政界人物之評論，尤膾炙人口。著有議會政治論、現代人物評論、政界人物風景、政界人物評論、國民政治讀本、國家與人物、時代與人物等書。氏為擁護自由主義之評論家，故對共產主義、法西斯主義及納粹主義，均多微詞。

十一畫

副見喬雄 (Soemii, Takeo)

駒鳥取縣知事，一八九六年生，岐阜縣人。

由第三高等學校於一九二〇年畢業東京帝大法科。即入內務省，不久派赴英、德、法、美諸國，調查警察制度。嗣後歷任埼玉縣警察部長、兵庫縣經濟部長，長崎縣總務部長等職。一九四〇年三月任鳥取縣知事（日本之縣，直屬中央，較我國之縣為大），一九四一年他調。

鹿子木員信 (Karakogi, Kaminobu)

評論家，一八七九年生，長崎縣人。

氏為舊肥後藩主故西子木小五郎之弟，一九〇四年畢業海軍機關學校。日俄戰爭時，以海軍機關中尉從軍，以救助行將溺斃之敵兵，受上官叱責，憤而辭職，自是立志研究宗學哲學。一九〇七年留學美國，一九一〇年留學德國，歸後任慶應義塾文科教授。一九二一年得文學博士學位。一九二三年又赴歐洲各國研究，一九二六年任九州帝國大學教授。翌年赴德，担任柏林大學日本宗教講師。其後一度任九州帝國大學文學部長及北平新民學校之東洋政治講師。曾數往印度，以有運動印度獨立嫌疑，被逐出境。居嘗倡導日本主義，加入大川周明之行地社，並曾作擁立平沼內閣運動。著有政治與倫理之混合改革、皇道亞細亞等書。

清水安三 (Shimizu, Yasuzo)

北平崇貞學園園主，一八九二年生，滋賀縣人。

一九一五年京都同志社大學畢業，即來中國。初任雜誌「我等」之駐華通信員，後與其妻栞立崇貞學園於北平朝陽門附近，專招收貧苦子弟，故與北方勞工界，接觸甚多，時在報端發表文章。北京政府時代，曾頒給勳章。

清水行之助 (Shimizu, Konosuke)

大行社社長，靜岡縣人。

二十歲前後即來華，在上海活動，常與岩田富美夫同出入北一輝之門。一九一九年偕北氏回國，加入猶存社，翌年襄助岩田栞立大化會，後退出。一九二四年另自組織大行社，自任社長，以迄於今。一九二五年，日美問題緊張時，曾仗劍殺入帝國飯店舞場；又當大倉喜八郎祝壽時，大倉以財閥身分，大事鋪張，氏遞決議文，促其停止舉行，遂為世人所注目。但自一九二九年以後，似已不復如前時之活躍。

清水光義 (Shimizu, Mitsuyoshi)

海軍中將，一八八八年生，長野縣人。

一九〇八年海軍兵學校畢業。歷任迅鯨艦副艦長、佐世保鎮守府參謀、軍務局第二科科長、多摩艦長、伊勢艦長、人事局第一科科長、及佐世保鎮守府參謀長，於一九三六年

秋，米內光政爲海相時，任海軍省人事局局長，頗發揮手腕。一九三八年十二月任某戰隊司令官；一九四〇年十月以中將繼野村通邦後，任華北海軍最高指揮官；一九四一年七月，調回軍令部任事。氏與鹽澤幸一、小林宗之助、細萱戊子等同爲長野出身，海軍中之重鎮。在松本中學時，每日步行四里，來回通學，其苦幹精神，自少即異乎常人。

清水盛明 (Shimizu, Moriaki)

陸軍大佐，一八九七年生，愛知縣人。

士官學校第二十九期砲兵科、砲工學校、及陸軍大學畢業（均與佐藤賢了同班）。歷任參謀本部部員、陸軍省人事局科員、國際聯盟軍縮會議全權委員隨員、及山砲兵第十一聯隊大隊長，至一九三六年任陸軍省新聞班班員，兼內閣情報局局員。一九三七年大本營成立後，轉任陸軍報道部員，並晉級砲兵大佐（上校），一九三八年十二月繼佐藤賢了任報道部長，一九三九年冬調充駐法大使館武官，旋又他調。氏曾加入國策研究會及政治經濟研究會等團體，主張管理通貨及擴張軍備，陸軍省頒布「國防之本質及其強化」之小冊子，即由其執筆。生平兩至歐洲，通英法語，兼長辭令。

清水規矩 (Shimizu, Kikun)

陸軍中將，一八九〇年生，福井縣人。

士官學校第二十三期步兵科畢業，以參謀本部部員駐華，一九一七年又畢業陸軍大學。後歷任參謀本部部員、陸軍

省軍務局科員、陸大兵學教官、駐法駐德大使館陸軍武官、陸軍大臣副官、軍務局高級科員、及參謀本部科長等職，一九三六年八月調任羅南第二十師團第七十三聯隊長，一九三八年秋任侍從武官，一九四〇年晉級中將。

清水一郎 (Kiyose, Ichiro)

法學博士，一八八四年生，兵庫縣人。

一九〇八年畢業京都帝國大學法科，試補司法官，後辭職，執律師業，以求知慾甚強，復留學英法德諸國，研究法學，得法學博士學位，爲日本今日特許法之權威。一九二〇年以來，歷次當選爲衆議院議員，以迄於今。一九二七年至一九二九年，曾被舉爲衆議院副議長，原屬民政黨籍，後與安達謙藏，組織國民同盟，遂成爲該派健將。國民同盟自出道襲一復歸民政黨，中野正剛另組東方會後，頗有孤城日落之勢，惟氏仍協助安達，熱心支持。一九四〇年七月，近衛提倡翼贊運動時，該黨解散，氏遂改任翼贊會理事，旋又調任該會總務之職。

清澤 冽 (Kiyozawa, Retsu)

評論家，一九〇〇年生，長野縣人。

生長美國，曾任日僑主辦之北美時事日報編輯（大正末年華盛頓發行）、中外商業新報外國新聞部長、報知新聞駐美記者及社論委員。著作甚多，其重要者，爲美國不大打日本、革命期之美國經濟、東亞門羅主義等書。時發表短篇論

文於各大雜誌，謂日本欲達到日滿兩國不可分之目的，須得中國方面之理解。一九三七年受大倉喜七郎之補助，以日本作者代表之名義，赴英法美諸國宣傳，翌年歸國。

添田敬一郎 (Soeda, Keichiro)

衆議院議員，一八七二年生，福井縣人。

一八九八年東京帝大法科畢業。歷任兵庫縣參事官，大分、熊本、山梨、滋賀各縣事務官，埼玉、山形等縣知事，及內務省地方局長等職。在地方局長任內，改設護科爲社會科，並擴張其範圍。蓋舊時日人，咸以爲社會事業，不外救濟事業；自經氏之改稱，使省內官吏對於社會事業之認識，爲之一新。後創立協調會，任該會常務理事；不數年，又當選爲衆議院議員，隸民政黨籍。岡田內閣時，曾任松田源治支相之次官。近年除任議員、民政黨顧問及協調會理事外，又任中央社會事業協會理事。嘗與河原田稼吉、大藏公望等，組織國家研究同志會，爲前民政黨之要角。

深井英五 (Fukai, Eigo)

樞密院顧問，一八七一年生，羣馬縣人。

一八九一年京都同志社大學畢業，後留學美國耶魯大學。初由德富猪一郎之介，任國民新聞記者；旋任大藏大臣松方正義祕書。日俄戰爭時，隨高橋是清赴倫敦募集外債，深爲高橋所器重。後入日本銀行，歷任祕書、文書科長，及營業局長，於一九二八年任副總裁，一九三二年升任總裁，至

廣田內閣時辭職。氏好學深思，著有「通貨調節論」，稱爲一時名著。高橋於其所主張之通貨健全理論，最爲心折；所謂「高橋財政」，實多出氏所運籌策劃。此外又曾任巴黎和會、華盛頓軍縮會議、及日內瓦經濟會議之日本全權代表隨員，掌理關於財政經濟問題。一九三三年任倫敦經濟會議之日本代表，故在國際間，亦有相當信譽。一九三八年十二月由貴族院議員升爲樞密院顧問，係該院唯一之經濟專家。

深屋隆太郎 (Fukao, Ryutarō)

男爵，前南洋拓殖會社社長，一八七七年生，高知縣人。

祖先爲近江源氏後裔，父某以効力明治維新，賜封男爵。氏於一八九九年東京高等商業學校畢業後，即入大阪商船會社，歷任近海科長、東京支店長、及專務董事，至一九二五年擢爲副社長。一九二〇年以政府代表資格，出席國際經濟會議；一九二一年復任國際商會出席代表，一九二八年選爲貴族院議員，爲該院中正會領袖。內閣調查局成立後，任參與官，兼臨時產業合理局販賣管理委員。夙唱南進政策，一九三六年經其同鄉前海相永野修身之推挽，出任第一任南洋拓殖會社社長，一九四一年辭職。處事精細，兼好書畫古董。

淺沼稻次郎 (Asanuma, Inejirō)

衆議院議員，一八九七年生，東京府人。

氏生於小笠原羣島，幼時家境清寒，與苦學生十餘人共同販賣自來水筆，藉助膏火。嗣由東京府立第三中學於一九二三年畢業早稻田大學政治經濟科，在學時，即與同志和田巖等，發起建設者同盟，從事學生思想運動。畢業後，加入日本礦夫組合及日本農民組合，從事無產階級之解放運動。

一九二四年，以應援足尾銅山罷工事件，被逮入獄五月。一九二五年十二月任農民勞動黨書記長。後加入日本勞動黨及全國大衆黨，均居幹部要職。一九二九年當選爲東京市會議員。一九三二年社會大衆黨成立，被舉爲常務執行委員。氏在東京市工業地帶之本所深川兩區之勞動者方面，植有不拔之勢力，呼爲「我等之淺沼先生」，前此候選衆議員時，該區工人，均自動出資爲之援助，雖告落選，而一九三六年二月之總選舉，卒以最爲高點，如願以償。

淺原健川 (Asahara, Kenzo)

滿洲協和會幹事，一八九八年生，福岡縣人。日本大學夜學部法科畢業。一九一九年於其故鄉八幡市，以八幡製鐵所之勞動者爲基礎，組織「日本勞友會」。翌年，以指導該鐵工所之罷工，並將銻鐵爐熄滅，被拘入獄，判處懲役六個月。出獄後，組織「西部煤礦夫組合」；後任九州民憲黨黨首。迨社會大衆黨成立，被舉爲中央委員。一九二八年及一九三〇年兩次當選爲衆議員，後唱廢戰論落選；於是思想銳變，因片倉衷之介，得與十河信二相識，一九

三七年三月林銑十郎組閣時，借十河居中策劃，建議林氏引用板垣征四郎及末次信正爲陸海軍大臣，未成。後任滿洲國協和會幹事，年俸五萬圓云。

淺野辰川 (Asano, Ryozo)

實業家，一八八九年生，東京府人。淺野財閥總一郎之次子，慶應義塾理財科畢業後，復留學美國哈佛大學，一九一二年歸國，即隨父辦理實業。現任淺野水泥廠副社長，鶴見製鐵、大同洋灰、東洋汽船等數十公司董事。一九二九年曾以資本家代表名義，出席國際勞工會議。一九三六年以與羅斯福總統之弟，爲哈佛學友關係，曾赴美作親善游說。

堀 丈夫 (Hori, Takeo)

陸軍中將，一八八二年生，奈良縣人。士官學校第十三期騎兵科畢業。在校時，與建川美次並以成績優異見稱。日俄戰役時，二人各以小隊長從軍。後建川又畢業陸軍大學，而氏則謂陸大無人可爲吾師，故離一度入學，終乃轉入騎兵學校。氏能於馬上入睡，嘗任士官學校之兵學教官，其講義之精深及指導之有方，壓倒陸大教官，甚至陸大學生，亦有前往聽講者。後入平壤飛行隊任飛行隊長，於一九三三年晉級中將，兩年任陸軍航空本部長，一九三五年八月櫻柳川平助任第一師團長。至一九三六年其部下之麻布第三聯隊，突然造成二、二六事件，以責任關係辭職

是年七月調入預備役

堀 公一 (Hori, Koichi)

內閣情報局第三部長，一八九八年生，石川縣人。獨家之養子。一九二〇年東京帝大法科英文法學系畢業。經外交官領事官考試及第，入外務省。歷任青島候補領事、牛莊領事、天津領事及亞洲局科員，至一九三九年任南京總領事，兩年任情報部第二科長，一九四一年任駐華使館一等書記官，派駐上海。現內閣成立後，升任現職。該部掌管對外之政府發表及對外宣傳等事宜，故常代表政府發言。

堀 新 (Hori, Shin)

日清汽船會社社長，一八八三年生，兵庫縣人。小學畢業後，即入大阪商船會社，一九〇六年轉入日清汽船會社，派往上海支店，專司出口貨物事務。一九〇九年復轉入大阪商船會社，任香港支店長，翌年調神戶支店長，一九一二年調上海支店長，一九一四年派赴詩家谷任支店長，兩年回國，一九一七年重赴詩家谷。一九一九年後，任倫敦支店長兩十年之久，始調回升任總店遠洋科長，不久被選為日清汽船社長。此外尚兼任其他公司董事。一九三七年春，會隨兒玉謙次組織經濟考察團來華。

堀 義貴 (Hori, Yoshikazu)

同盟通信社董事，一八八三年生，鹿兒島縣人。一九〇八年東京高等商業學校畢業，經外交官領事官考

試及第，即入外務省。歷任外務省事務官、雲南領事官、外務大臣秘書官、海參崴派遣軍政務部特派員、駐華公使館一等秘書及參事、中國關稅會議代表、倫敦軍備會議隨員、以及高松官邸下聘英隨員，至一九三一年升任墨西哥全權公使，一九三四年辭職，不久，轉任現職。

堀 內十城 (Horinchi, Taisei)

上海總領事，一八八九年生，奈良縣人。原名龜太郎，上海同文書院及京都帝大政治科畢業。一九一六年入外務省，歷任香港候補領事、國際聯盟全權委員隨員、外務省調查部科員、及中國關稅會議代表，至一九二七年任駐倫敦大使館二等秘書，臨時調為日內瓦進出口禁止及撤廢討論委員會代表之隨員。其後經中國使館一等秘書、國聯滿洲調查團參預委員、駐華大使館一等秘書、雪特尼總領事及天津總領事等職，於一九三九年八月繼原正後，任東亞局長；一九四〇年八月以公使銜，任上海總領事。氏為日本外交官中，最通曉中國經濟情形之一，與近衛首相為京大之先後同學，近衛之中國知識，得力於彼之啓迪不尠云。

堀 內茂禮 (Horinchi, Shigetada)

海軍少將，一八九一年生，山梨縣人。一九一一年海軍兵學校畢業，曾任軍令部參謀、海軍大學教官、務島艦艦長、橫須賀防備隊司令官、及駐華艦隊參謀長等職，至一九四〇年十一月，任佐世保鎮守府參謀長。

堀江謙介 (Horinchi, Kensuke)

前駐美大使，一八八七年生，兵庫縣人。

氏爲士族堀內令順之次子。一九一〇年畢業東京帝國大學法科政治學系，在畢業前，已及第高等文官考試，一九一一年復及第外交官領事官考試。嗣後歷任外務省駐英大使秘書、歐美局第二科科長、青島總領事、駐華駐美使館參事、紐約總領事，以及外務省調查部長，至一九三四年任外務省美洲局長。氏與有田八郎在青年時代，同任巴黎和會日本全權代表隨員，便已意氣相投；後與齋藤博、重光葵、天羽英二等，主張革新外交機構，因有革新同志會之組織，遂一躍而成爲外務省新官僚之中心人物。一九三六年三月有田任外相時，擢升外務次官；一九三六年升駐美大使，一九四〇年辭職。氏駐美甚久，對於美國政情之熟悉，爲外務省中第一人。又爲 *Central Club* 會員，東方人之加入此會者，開現僅氏一人。與新聞界，尤有密切之聯絡。

堀田正昭 (Hotta, Masaaki)

前駐義大使，一八八三年生，東京府人。

一九〇九年東京帝國大學德文法學系畢業，經外交官領事官考試及格，歷任駐荷蘭公使館三等祕書、駐義大使館二等祕書、駐德大使館一等祕書、外務省大臣官房人事科科長、日內瓦軍縮會議全權委員隨員、及歐美局局長，於一九三四年升任駐瑞士公使，一九三六年又升駐義大利大使。日德

義防共協定，即由其斡旋訂立。一九三八年春調回外務省，任顧問之職，旋即辭退。

堀切善兵衛 (Horikiri, Zenbee)

駐義大使，一八八三年生，福島縣人。

一九〇四年畢業慶應義塾，復以校費留學劍橋、哈佛、柏林各大學，專攻財政經濟諸學。歸國後，歷任母校教授及時事新報記者。一九一二年以三十一歲之青年，當選爲衆議員，其後連續當選達十次之多，屬政友會籍；在該會內，不屬任何派系，超然獨立，與大口喜六，同稱爲政友會中財政通之雙璧。在議會之演說，娓娓動聽，最令人領悟。一九三〇年，被舉爲衆議院議長。在政界以受高橋是清之知遇，曾歷任大藏省勅任參事官，內閣總理大臣祕書官（一九二一—一九二二年）、農商務省參事官（一九二四—一九二五年）、大藏省政務次官（一九三一—一九三四年）等職。一九三四年齋藤內閣之文相鳩山一郎辭職，曾舉氏自代，未就。松岡洋右在政友會時，對氏已頗敬服。一九四〇年擢爲駐義大利大使，以迄於今。

堀切善次郎 (Horikiri, Zenjiro)

貴族院議員，一八八五年生，福島縣人。

堀切善兵衛之弟。由早稻田中學於一九〇九年畢業東京帝大法律學系。經文官高等考試合格，歷任岩手、廣島、京都各府縣事務官，內務省參事官，書記官，都市計劃局長，

十木局長，神奈川縣知事，及復興局長官等職。至一九二九年任東京市長，一九三二年任拓務省次官，一九三二年齋藤內閣時任法制局長，翌年轉內閣書記官長，後隨齋藤辭職，勅選為貴族院議員。一九三六年秋，該院議員有「華南考察團」之組織，由氏任團長，足跡遍閩、廈、汕、漢、滬、粵等處。氏又為東京帝大四十二年組（保明治四十二年畢業）官僚之代表，在政界中，頗有一部份勢力。一九三七年宇垣一成及林銑十郎組閣時，傳均遷任內務大臣未就。最近曾任國民精神動員會會長。

梅津美治郎 (Umezū, Yoshijirō)

關東軍司令兼駐滿大使，一八八三年生，大分縣人。士官學校第十五期步兵科畢業，後與第十六期之永田鐵山及小畑敏四郎，同時畢業陸軍大學。名次梅津第一，永田第二，小畑稍次，均獲軍刀賞。一九一三年任駐德副武官。歐戰時調任駐丹麥武官，視察大戰實況。回國後，歷任奧保亞元帥副官，參謀本部德國班長，歐美科長，陸大兵學教官及總務部長等要職。其間在陸軍省內，曾任兵器局科員，軍務局科員及軍事科長，故於軍政方面，亦積有相當經驗。此外先後又任步兵第三聯隊長及第一旅團長，一九三四年三月任天津駐屯軍司令官，官級中將，一九三五年任第二師團長。二・二六事變後，寺內壽一任陸軍大臣，擢升次官，至一九三八年五月，坂垣任陸相，始另調他職。何梅協定，即氏

在天津駐屯軍任內所簽訂。氏頭腦明敏，長於辯才，任陸軍省次官二年餘，軍部之一切計劃，胥出其驥劃。一九三九年冬，繼植田謙吉後，任關東事總司令兼駐滿大使，一九四〇年晉級大將。

荻洲立兵 (Ogizū, Ripppei)

陸軍中將，一八八五年生，愛知縣人。

士官學校第十七期步兵科及陸軍大學畢業，曾任參謀本部中國班班員，九江特務機關長，駐德使館武官，步兵學校教官，同校研究部部員，步兵第十六聯隊長，步兵第九旅團長，及拾遺軍參謀長等職，一九三七年晉級中將，升任第二師代理團長，不久真除師團長。

荷見 安 (Hasumi, Yasushi)

前農林次官，一八八一年生，茨城縣人。

一九一六年東京帝大英文法科畢業，即入農商務省，由山口縣事務官、農務局合作、農政、經濟、米穀等科科長，於一九三四年升任米穀局長，一九三八年調任馬政局長官，一九三九年十月又升農林次官，一九四〇年七月辭職。氏為日本有名之米穀專家，一九三二年之米穀統制法，一九三九年之米價限制會，皆為其一手主持訂定；在農林省官僚中，自成一系。

盛島角房 (Morishima, Sumitasa)

蒙古德王顧問，一八八七年生，鹿兒島縣人。

宮崎縣延岡中學畢業後，考入東京高等師範學校史地學系。在學時即留心蒙古問題。廿五歲時來華，初至京滬等地，後赴北方張家口等地。宣傳佛教，并任德王府之家庭教師，嗣充德王顧問。事變後，曾任張家口特務機關長。

笠 信太郎 (Ryu, Shintaro)

昭和塾幹事，一九〇〇年生，福岡縣人。

一九二五年東京帝大經濟科畢業，即入大原社會問題研究所，後任東京朝日新聞論說委員，時發表左傾論文，致被目為人民陣線派人物，而遭逮捕。釋放後，與佐佐弘雄等，同為近衛所羅致，入昭和塾担任研究經濟問題，唱導經濟上之東亞協同體論。氏在大原研究所時，以研究貨幣馳名，後致力於一般經濟，一九四〇年出版之日本經濟再編成一書，風行全國，幾乎人手一編。傳第二次近衛內閣之財政經濟政策，氏實為主要設計者云。

笠同果雄 (Kasama, Akiyo)

法學博士，一八八六年生，富山縣人。

一九〇九年東京帝大法科政治學系畢業，初入鐵道院任書記官，一九一八年轉入外務省。歷任巴黎和會隨員、情報部科長、駐義大利及羅馬尼亞使館一等秘書、駐法使館參事，以及國際聯盟日本事務所長等職，後升任駐波斯公使，一九三三年調駐葡萄牙公使，一九三六年辭職。氏為新渡戶稻造博士得意門生，通數國語言，並能漢詩，號存堂。著有回教

徒與其生活，國際法上河川航行權(法文)等書。會得法學博士學位，熟悉巴爾幹情形，現為讀賣新聞担任撰述社評。

船山信一 (Funayama, Nobuchichi)

昭和塾幹事。

一九二二年京都帝大文科哲學系畢業，即從事文筆生涯，鼓吹社會思想，以「蘇俄通」自命，其後思想轉變，担任水產雜誌編輯，並任國民新聞特約撰述，著有東亞協同體等論文多種，一九三九年入近衛主持之昭和塾。

船田 中 (Funada, Naka)

前內閣法制局長官，一八九六年生，栃木縣人。

前鐵道大臣元田巖之塔。一九一八年東京帝國大學德文法學系畢業，即及格高等文官考試。初任內務省事務官，千葉縣理事官、內閣書記官等職；嗣轉東京市政府，任市助役兼代市長。一九三〇年後，五次當選為衆議院議員，隸政友會籍，為中島知久平所器重。一九三四年游德，目擊國社黨總選舉情形，深為感動，乃與瀧正雄、風見章等，發起國社黨研究會，遂成為近衛手下之紅人。一九三七年第一次近衛內閣成立後，任外務省參與官，嗣升內閣法制局長官，一九三九年辭職。氏外貌風雅思想急進，實為一典型之革新政治家

船津辰一郎 (Funatsu, Tatsuchiro)
在華日本紡織聯合會會長，一八九九年生，佐賀縣人。

北平東亞書院畢業，初以通譯名義，奉職日本駐華使館，漸由主事升至南京領事（張勳復辟時）、天津領事及奉天總領事等職。至一九二六年轉入實業界，任在華日本紡織會會長兼上海工部局董事，年俸三萬圓。氏深悉我國政治經濟情形，其一舉一動，頗足以左右僑滬日本官民之勢力，曾迭受我國政府勳章。

細川護立 (Hosokawa, Moritatsu)

侯爵，貴族院議員，一八八三年生，東京府人。

東京帝大文科畢業，一九一四年襲侯爵，任貴族院議員，為該院火燭會之要角。此外更兼任日華學會會長、東京地產協會會長、及東亞調查會顧問等職。氏與近衛文麿為兒女姻家（近衛之女，嫁氏子護貞為婦）。第一次近衛內閣時，兼以貴族院議長一席讓之，未就。

細薮戊子郎 (Hosokawa, Ichiro)

海軍中將，一八八七年生，長野縣人。

一九〇八年海軍兵學校畢業，歷任夕張日向等艦副艦長、島海艦艦長、海軍省軍需部第一科科长、海軍技術會議議長、陸奧艦艦長、通信學校校長、第一航空戰隊司令官、及旅順要塞司令官等職，一九四〇年十二月繼谷本馬太郎後，任華中海軍最高指揮官，翌年七月調回軍令部任事。

野口 蓮 (Noguchi, Jun)

大實業家，一八七八年生，廣島縣人。

一八九六年東京帝國大學工科電氣學系畢業，即入鎌倉電氣會社任技師。日俄戰爭時，任東京電燈會社職員，赴英募集公司債，不久歸國。一九〇八年買收德國法倫克福之石灰窰業法特許權，創立日本窰業火藥會社，而自任社長。近數年來，因軍備擴張之故，業務大振，歲獲巨利一千萬圓以上者，多至八九次。現除該窰業火藥會社社長外，尙兼日本窰業肥料會社、旭絹絲會社、朝鮮鴨綠江水力發電會社、朝鮮石灰工業會社、長津江水電會社、朝鮮送電會社、及日本水電會社等社長，宇治川電氣會社、出雲電氣會社、朝鮮石油會社、及東洋工業會社等董事，故有電氣化學工業王之稱。其事業大部在朝鮮，昔常出入宇垣一成門下，為宇垣政權之熱心支持者。

野中徹也 (Nonaka, Teisuya)

衆議院議員，一八九三年生，埼玉縣人。

一九一九年東京帝大法科政治學系畢業，曾任高千穗高等商業學校講師、及東京時事新報記者，後以研究最近世界政治狀況，赴德留學。一九二八年以來，五次當選為衆議員，前隸中野正剛之國民同盟系。

野田謙吾 (Noda, Kengo)

陸軍少將，一八九一年生，熊本縣人。

與河邊虎四郎、酒井康等，同畢業士官學校第廿四期步兵科。曾任陸軍省教育總監部科員、大隊長、及師團參謀長

等職。中日事變發生後，任第十六師團第三十三聯隊長，首先佔領滿洲紫金山。歸後任士官學校教育長，一九三九年七月任教育總監部第二部長。畑俊六任陸相時，繼飯沼守後，任陸軍省人事局長，一九四一年三月他調。

野村吉三郎 (Nomura, Kichisaburo)

海軍大將，駐美大使，二七七年生，和歌山縣人。

一八九八年海軍兵學校畢業，歷任駐奧地利及德國大使館副武官、駐美大使館武官、音羽艦副艦長。海軍軍務局科員、海軍省副官、海軍大臣秘書、八雲艦長、巴黎和會及華盛頓會議全權委員隨員、軍令部參謀、海軍教育局長、練習艦隊司令官、吳鎮守府司令官、及第一艦隊司令官等職。一、二八戰役時，以第三艦隊司令官，機靈澤幸一後，担任指揮，事後在虹口公園舉行閱兵典禮，被鮮人尹奉吉投彈，受損一目。嗣任橫須賀鎮守府司令長官，一九三三年晉級大將，一九三七年被舉為學習院院長（貴胄學校）。一九三九年調任阿部內閣之外務大臣，翌年冬，繼堀內謙吉後，出任駐美大使。氏為日本海軍中之美國通，與美國羅斯福總統及其他海軍要人，多為舊交云。

野村直邦 (Nomura, Naokuni)

海軍中將，一八八五年生，熊本縣人。

一九〇七年海軍兵學校畢業，歷任艦政部部員、駐德使館武官、迅鯨羽黑加賀等艦艦長、潛水學校校長、某潛水戰

隊司令官、聯合艦隊參謀長、艦政本部部長、及軍令部部長等職，於一九三九年四月，充任臨時中國方面艦隊司令部附，十一月官級中將，十二月任駐華北最高海軍指揮官，一九四〇年十月調為海軍省出仕。平素專門研究潛水及水雷戰術。

野原大輔 (Nohara Daisuke)

橫濱正金銀行理事，一八八五年生，東京府人。

一九〇七年東京帝大法科畢業，即入正金銀行，歷任該行青島、哈爾濱、北平等分行行長，一九二七年調倫敦分行行長，充任達八年之久。後經神戶分行及東京分行行長，於一九三八年三月升為理事。對於白銀問題，積有研究。

鳥居龍藏 (Torii Ryuzo)

人類學家，一八七一年生，東京府人。

氏為鳥居新次郎之次子，早歲即留學法國，專從事於人類學及東亞細亞古代文化之研究。曾任東京帝大助教，担任文學部及理學部人類學講座，一九二二年得文學部博士學位。現任上智大學教授兼文學部部長、國學院大學教授、世界聯盟人類學會會員、巴黎美國各人類學會會員，並主辦鳥居人類研究所，自任所長，率其全家研究「人類史前學」。氏通蒙古語及滿洲語，數來我國。一九〇四年曾應內蒙喀喇沁王貢桑諾爾布之聘，與河原操子，同任崇正及毓正兩學校教師。著書甚多，以外國文字發表者亦不少。其與滿蒙苗民有關者，有蒙古紀行、滿蒙古蹟記、苗民調查等書。

十二畫

喜多社一郎 (Kikua, Sochiro)

前大政翼贊會部長，一八九四年生，石川縣人。

一九一七年早稻田大學法科畢業，後留學美國北卡羅萊納布林斯頓及約翰霍布根等大學。歸後任母校新聞學教授，一九二四年又赴歐留學瑞士邱立希大學，曾三次當選為衆議院議員，前隸民政黨籍，一九三六年由該黨推若，任商工省參與，不久辭職。氏善於講演，生平最服膺其鄉先輩永井柳太郎，故人亦以永井第二稱之。一九四〇年十月以永井之推搡，任大政翼贊會國民生活指導部長，未幾該部改組，氏亦去職。

喜多長雄 (Kikua, Nagao)

前廣州總領事，一八九五年生，德島縣人。

一九二〇年東京帝大經濟學部畢業，經外交官領事官考試及第，即入外務省，歷任福州副領事，駐英大使館三等秘書，外務省情報部第三科科長，內閣情報官，駐上海總領事館情報部長，及廈門連絡部政治部長等職，至一九四〇年一月升任廣州總領事，是年十二月調火奴魯魯總領事，翌年又他調。

喜多誠一 (Kikua, Seichi)

陸軍中將，一八八六年生，滋賀縣人。

士官學校第十九期步兵科及陸軍大學畢業。於中尉時，即立志研究中國問題。歷任廣東、北平、上海、南京各地駐在武官，陸軍大學兵學教官，步兵第三十七聯隊長，參謀本部中國班班員及班長等職；九、一八事變之後，任關東軍第二科科長。迨一、二八戰役發生，臨時調為派遣軍情報部長。長城戰役時，復任關東軍高級參謀，一九三六年三月由參謀本部中國科長，升為駐華大使館武官，翌年十月任華北第一任之特務部長，一九三九年三月升任興亞院華北連絡部長官，一九四〇年春辭職。氏處事圓到，善藏詞鋒。

堤 康次郎 (Tsumumi, Yasujiro)

衆議院議員，一八八九年生，滋賀縣人。

一九一四年早稻田大學政治經濟科畢業，出校後，初投身實業界，經營地產，任東京土地會社董事及箱根土地會社社長，頗獲厚利，因性情豪邁，此種事業未能滿其志，遂投身政界。一九二〇年後，當選衆議院議員，已達六次，隸前民政黨籍，曾任該黨幹事顧問，與永井柳太郎同為早稻田政客之重要人物。永井之政治資金，大都仰給於氏，一九三三年永井任岡田內閣之拓相時，選任政務次官。氏在另一方面，與伊澤多喜男、宇垣一成，亦有相當聯絡。又不時出入東京證券交易所，在羅津方面，購有不少地產云。

富井 周 (Tomii, Shu)

駐阿根廷大使，一八九〇年生，東京府人。

法界進宿男爵富井政章博士之長子，一九一五年東京帝大法科政治學系畢業，經外交官領事官考試及第，即派任紐約總領事館候補領事，不久調充駐美使館三等祕書。其後歷任華盛頓會議全權委員隨員，外務省書記官，駐英使館二等祕書、一等祕書，鄂太瓦(Ottawa)在加拿大)總領事，加拿大公使館一等祕書，外務省大臣官房文書科長，及紐約總領事；至一九三五年襲授男爵，閱一年任駐美使館參事。一九三九年升駐加拿大公使，一九四一年一月又升駐阿根廷大使。

富田幸次郎 (Tomita, Kojiro)

前特別議會議長，一八七二年生，高知縣人。

早歲入藝陽學舍習政治學，會主土陽新聞筆政，後創辦高知新聞，自任主筆兼社長。又為日本國民黨老黨員，曾任該黨總幹事，後由立憲同志會而加入民政黨前身之憲政會，皆任幹事長要職。一九二〇年及一九二四年兩次選舉，均不幸落選，至一九二五年因高知縣之補選當選，乃重入政界活動。若槻第二次內閣辭職後，唱議政黨聯合，冀使政治走向政黨政治之軌道，會當安達謙藏同時脫離民政黨，然不久仍復回黨，一九三六年五月之特別議會，被舉為議長。氏又從事於實業，擁資甚厚；現任對馬石坂會社經理、朝鮮新聞及帝國紙器會社董事；有土佐資本家之稱；與宇垣一成頗相

得，故世又稱為前民政黨中之宇垣派。

富田勇太郎 (Tomita, Yutaro)

前滿洲興業銀行總裁，一八八五年生，福岡縣人。

一九〇八年以第一名畢業東京帝大法科政治學系，翌年入大藏省，任專賣局書記官。嗣後歷任稅務監督局監督官、理財局國債及國庫科長，至一九二四年任理財局長兼存款部長。一九三四年繼津島壽一後，任駐倫敦財務官。一九三七年一月日本與滿洲，合資設立滿洲興業銀行，出任第一任總裁，一九四〇年辭職，轉任拓務省囑託。氏在大藏省，幾近三十年；其任理財局長，前後達十一年之久。就其經歷言，早應由次官而升大臣，然以派別關係，終不得不讓之後輩賀屋、石渡諸人。又曾任華盛頓會議日本全權代表隨員，對於國際金融情形之通曉，與津島壽一齊名。

富田健治 (Tomita, Kenji)

前內閣書記官長，一八九四年生，京都府人。

古董商富田熊作之子，與近衛家為世交。一九二一年京都帝大政治科畢業，即入內務省，歷任靜岡岐阜等縣警視、神奈川縣事務官、福井縣書記官、拓務省書記官、石川縣警察部警保局長、及內務省圖書科長等職，至一九三五年安井英二任大阪府知事時，攝任該府警察部長。第一次近衛內閣時，經安井推挽，任內務省警保局長。在任時，極力逮捕人民陣線分子，頗為各方所注目。一九三八年中溝摩吉等，假

防共護國團名義，搗毀政友會本部，以事前未能防範，負責辭職，不久出為長野縣知事。一九四〇年七月，第二次近衛內閣成立，書記官長一席，原擬屬之風見章，以安井關係，遂邀氏充任；明年七月近衛第三次組閣，仍蟬聯；十月隨近衛辭職，救選為貴族院議員。

富須森次 (Tomimasa, Kyoji)

陸軍少將，一八九一年生，長崎縣人。

士官學校第二十五期步兵科及陸軍大學畢業。歷任駐俄大使館副武官、日內瓦軍縮會議隨員、關東軍參謀、參謀本部科長部長、及駐滿族團長等職，一九三九年晉級少將，一九四一年三月繼野田謙吾後，任陸軍省人事局長。

須野潤吉郎 (Suma, Yukihiro)

駐西班牙公使，一八九二年生，秋田縣人。

上海東西同文書院及東京中央大學法科畢業，(一九一七年曾入東京帝國大學文科，明年退學。)獲傳高等文官考試行政科及外交科後，歷任外務省事務官、條約局第一科歐美局第二科科員、大使館三等秘書、公使館二等秘書，廈門領事、台灣總督府事務官、及公使館一等秘書、至一九三三年由廣東總領事調任南京總領事，一九三七年三月任駐美大使館參事，一九三九年秋調回外務省，任情報部長，一九四〇年十一月升駐西班牙公使，以迄今日。氏通中英德三國語言，性好美術戲劇，搜集我國古玩佛像甚多。

森喬 (Mori, Takashi)

駐巴西大使館參事，一八九六年生，千葉縣人。

一九二〇年東京帝大德文法學系畢業，經外交官領事官考試及第，即入外務省。歷任駐法及駐英大使館三等秘書、上海領事、暹羅公使館一等秘書、外務省情報部第一科(主管中國事務)科長及官房文書科科長，與亞院成立後，任華中連絡部文化局長兼自然科學研究所長，一九四〇年十二月調現職。

森田久 (Morita, Hisashi)

評論家，一八九五年生，神奈川縣人。

早稻田大學政治經濟科專門部畢業。初任福岡日日新聞記者，後在東京朝日新聞以「財界風土記」一文，馳名於世，因受池田成彬之青睞，派赴歐美視察。不久，轉入東京時事新報，由經濟部長升任編輯局長；時事新報之合併於東京日日新聞，即由氏斡旋之力所致。嗣一度轉入九州日報，九一八後，任滿洲通訊社社長兼關東軍經濟顧問，與高橋龜吉、小島精一等齊名。

森田二郎 (Moritaka, Jiro)

前台灣總督總務長官，一八八七年生，奈良縣人。

一九一一年東京帝大德文法學系畢業，即獲傳高等文官考試，由兵庫縣警部、郡長、事務官，轉青森、神奈川各縣警察部長，而升為東京警視廳刑事部長及京都府內務部長。

田中、濱口、若槻各內閣時，歷充島根、青森、茨城、栃木各縣知事。兒玉秀雄任朝鮮總督府政務總監時，邀為警務局長。一九三一年，大隈內閣成立，轉任內務省警保局長，翌年受五、一五事變影響，掛冠隱居，至一九三六年小林濟造任台灣總督，復出為總務長官。氏在學生時代，以游泳術見長，一九二三年關東大地震時，適任神奈川警務部長，駐橫濱港，其時陸上交通機關，已全破壞，外間對於京（東京）函（橫濱）被災情形，隔膜殊甚，氏於驚濤駭浪中，游抵高麗丸，以無線電報告真相於大阪各報館，世恆以此稱之。性情外剛內柔，於殖民行政，頗積經驗，故為兒玉秀雄及大谷等由所器重。其出任台灣總督府總務長官，聞即由兒玉所推薦，一九四〇年十二月辭職。

森昭正平 (Morioke, Shobei)

前蒙疆不動產股份公司副理事長。

上海同文書院第二期畢業，即以書記生服務於天津總領事館。嗣後歷任上海、前東、漢口、重慶、吉林、奉天、南京等領事，及張家口總領事職務；至一九三九年轉任蒙疆不動產股份公司副理事長，旋又他調。氏一生除四年服務駐美使領館外，在華達三十七年之久，對於中國情形之熟悉，鮮有出其右者。

森田 粂 (Morioke, Ko)

陸軍中將，一八八九年生，廣島縣人。

亦寫作守岡泉。士官學校第二十四期步兵科畢業，曾任參謀本部中國班班員、駐重慶宜昌武官、北平陸軍大學教育、立教大學教育、關東軍司令部附、及近衛師團附等職，至一九三八年任漢口特務部長，一九三九年七月任興亞院華北連絡部次長，一九四〇年三月晉級中將。

森島守人 (Morishima, Morio)

外交官，一八九六年生，石川縣人。

一九一八年東京帝大德文法學系畢業。經外交官領事官考試及格，翌年與須磨彌吉郎同入外務省。由瀋陽領事、哈爾濱總領事、駐德大使館一等祕書，於一九三六年八月隨須磨彌吉郎充駐蘇大使館一等祕書，翌年五月調回外務省任東亞局長，一九三八年春任駐華使館參事，一九三九年七月繼須磨彌吉郎後，任駐美使館參事，一九四一年繼若杉要後，調任紐約總領事。

植木壽雄 (Ueki, Hisao)

前滿洲政府顧問，一八八九年生，鳥取縣人。

中央大學法科畢業，經高等文官考試及第，入內閣法制局任參事。一九二二年京濱大地震後，調任復興局橫濱派出所長，一九二八年任北海道廳土木局長，九，一八後，以小磯國昭之汲引，任關東軍顧問。嗣入滿洲法制局，任最高顧問，一九三八年轉任東京市電氣局長。

植田捷雄 (Ueda, Katsuo)

同文書院教授

東京帝大法科畢業後，即任大阪每日新聞東亞部編輯。
一九二九年被聘為上海同文書院教授，復利用假期，入大東
文化學院研究。著有中國外交史、中國之租界、歷史上之在
華外國人、列國在華之權益等書，一九三九年兼任外務省囑
託。

植田謙吉 (Ueda, Kenkichi)

陸軍大將，一八七六年生，大阪府人。

氏為植田謙八之次子，初就學東京高等商業學校，嗣畢
業士官學校第十期騎兵科及陸軍大學（一九〇九年）。歷任
騎兵第九聯隊附、第十六師團參謀、陸軍省軍務局科員、參
謀本部中國班班員、騎兵監部員、騎兵第三旅團長、軍馬補
充部附及部長等職，一九二八年升中將，是年八月調任天津
駐屯軍司令。一九三〇年十一月，轉任金澤第九師團長（一
九三二年），一、二八滬戰時担任總司令。是年四月二十九
日慶祝天長節，在虹口公園猝被韓人尹奉吉擲放炸彈，白川
大將以下，傷亡甚多，氏亦以彈片入膝，截去左足。一九三
三年六月繼真崎甚三郎後，任參謀次長。一九三四年八月任
朝鮮軍司令官，是年十一月晉級大將，一九三五年十二月任
軍事參議官。一九三六年寺內壽一任陸相後，任關東軍司令
官兼駐滿大使，一九三九年冬辭職。氏為純粹武人，性情沉
默，平生未嘗婚娶，故世多號為童貞將軍。

植原悅二郎 (Uehara, Etsujiro)

參議院議員，一八七八年生，長野縣人，

一九〇七年一九一〇年先後畢業美國華盛頓州立大學及
英國倫敦大學經濟科。課外曾任美國西北新報記者、日美商
報社長、華盛頓日本人同鄉會副會長、英日博覽會及巴拿馬
博覽會事務顧問。歸國後歷任東京高等工業學校講師（一九
一一年至一四年）、明治大學教授（一九一二年至一八年）
、及立教大學教授（一九一八年至二〇年）。一九一七年以
來，繼續當選為參議院議員，已達八次，並曾任副議長多年
。氏為大變教之直系人物，自國民黨而革新俱樂部，而政友
會，均追隨大變，若影隨形。在田中內閣時代，因大變之介
，曾任外務省參與官。性情誠摯，著有日本民權發達史、日
本明治時代之政治發展、日本之民主政治制度、憲法研究、
日本之建設等書。

椎名悅三郎 (Shiina, Etsuhuro)

商工省次官，一八九一年生，岩手縣人。

故後藤新平伯爵之外甥，一九二三年東京帝大法科經濟
學系畢業，經高等文官考試及第，即任商工省產業合理局專
務官。九。一八以後，任滿洲產業部官房文書科長，及工務
司長，草擬統制各種重要產業設立特殊公司之法規。一九
三九年歸國任商工省總務科長，一九四〇年岸信介任次官後
，擢為總務局長，翌年十月東條大將組閣，岸氏升任商工大

臣，氏亦升任次官。與神田遷，同稱為岸氏之左右手。

湯河元成 (Yukawa, Motohide)

食糧管理局長官，一八九七年生，東京府人。

故遞信次官湯河元臣之子。一九二一年東京帝大法文法學系畢業，經高等文官考試及格，即入農林省，充任農務局事務官、農政科長；前數年公布之農地調整法，即由斯時屬草。嗣經大宦官房文書科長、經濟更生部副科長及東京營林局長，於一九三八年春，來華任臨時政府農業顧問。一九三九年三月調任興亞院調查官，一九四〇年任農林省米穀局長，後該局擴為食糧管理局，擢為第一任長官。氏係農林大臣井野碩哉心腹，善能採納衆見，而得下屬之擁戴。

湯澤川千男 (Yasawa, Michio)

內務大臣，一八八九年生，栃木縣人。

神官某之子。一九二二年東京帝國大學法科經濟學系畢業，經高等文官考試合格，即入內務省。歷任福井縣理事官、內務省書記官、衛生局事務官、保健科長及調查科長，至一九二一年派赴歐美視察，歸國後，仍任內務省書記官，旋轉任社會局社會部長、保險部長及勞動部長。一九二九年外調官城縣知事，一九三一年轉任內務省土木局長，嗣又外調廣島縣及兵庫縣知事；一九三六年二六事件後廣田內閣成立，湖惠之輔入閣，擢為內務次官。為內務省新官僚中之有數人物，性格與湖惠之輔相反，即湖則處事縝密，而氏則大

刀闕斧，頗有氣魄，一九三七年二月辭職。翌年來華任臨時政府行政顧問，一九四〇年秋，回國任產業報國會理事長，後轉任大政翼贊會總務，東條內閣成立，重任內務次官，未幾即升大臣。

朝比奈策太郎 (Asahina, Sakuraro)

大日本青年團副團長，一八八九年生，靜岡縣人。

一九一六年廣島高等師範學校畢業，由樺太廳所屬各地方事務官，歷任文部省青年教育科長、普通學務局科長及大宦官房文書科長，至一九三八年以日德青少年團日本團長名義，赴德考察，歸國後任興亞院書記官，一九四〇年任文部省教育局企劃部長，翌年一月任大日本青少年團副團長，兼該團事務局長。

朝澤浩一郎 (Asakari, Koichiro)

內閣情報局科長，一九〇六年生，栃木縣人。

前外務次官出淵勝次之婿。東京商科大學畢業後，即及第外交官領事官考試。一九二九年派赴英國愛丁堡大學留學，一九三二年畢業，任駐英大使館翻譯，一九三四年調任駐華大使館三等祕書。一九三六年以後，歸任外務省東亞局及條約局科員，及日英東京談判時隨員，一九四〇年十月升任內閣情報局第三部第二科長，專司對外宣傳事宜。

渡田千冬 (Watanabe, Chitayu)

大阪每日新聞社理事，一八七二年生，長野縣人。

氏爲渡邊千秋之第三子，後入繼其叔渡邊國武，國武三任宰相，晉封子爵。氏自一九〇〇年，畢業東京帝大法科法文學系後，復留學法、德、美諸國，初任日本製鋼所、北海道炭礦及汽船各會社專務理事，後入日本興業銀行任理事兼東京分行行長。一九〇八年由長野縣當選爲衆議院議員，一九一九年襲授子爵，同年當選爲貴族院議員。一九二九年任濱口內閣之司法大臣，至一九三一年冬大隈內閣成立後辭職。現任宗秩奏審議官、兼大阪每日新聞社理事。氏在貴族院內，尚與松平賴壽、青木信元，同稱爲研究會之三巨頭，凡研究會出身之任政務次官，大抵由彼等所推薦，惟一九三九年來，以對於革新潮流，不甚接近，已辭去該院職務。前又曾任滿東國粹會總裁。能歌曲，信佛教。

渡邊彌幸 (Watanabe, Yasaki)

前朝鮮殖產銀行副行長，一八八九年生，靜岡縣人。

一九一五年京都帝大法科畢業，即供職朝鮮銀行，升至大連分行行長。一九一八年三島太郎創辦朝鮮殖產銀行，邀任秘書，後由文書科長、商業金融科長、產業金融科長、公共金融科長，及東京派出所主任，於一九二九年升任理事，後又升副行長，一九四一年他就。曾赴歐洲考察金融狀況，曾研究心，實爲日人在朝鮮實業界中之有數人物。

筒井 潔 (Tsuutsui, Kiyoshi)

駐羅馬尼亞公使，一八九六年生，三重縣人。一九二〇年東京帝大法科德文法學系畢業，經外交官領事官考試及第，即入外務省，由駐比使館隨員、日內瓦倫敦軍縮會議隨員、駐比使館二等秘書、情報部第二科科長、及第三科科長，於一九三三年轉駐滿使館二等秘書，一九三五年任滿洲外交部之局長，一九三七年任駐法使館一等秘書，一九四〇年十月升現職，與栗原正、松宮順，同稱爲白鳥系之三健將。

勝 正憲 (Katsu, Masanori)

前逕信大臣，一八八〇年生，福岡縣人。

前陸軍大臣杉山元之中學好友。一九〇五年畢業東京帝大法科，即入大藏省，歷任大藏省書記官兼參事官、駐外財務官、仙臺與東京稅務監督局長、大藏省參事官、及東京市助役等職，迨一九三四年岡田內閣時代，町田忠治出任商工大臣，擢爲政務次官，二・二六事件後，隨町田辭職。米內內閣成立，任逕信大臣。由福岡縣當選爲衆議員，已達六次，與川崎克、工藤鐵男等，同稱爲前民政黨之財政通。

勝田玉計 (Shoda, Kazuo)

前國務大臣，一八七〇年生，愛媛縣人。

一九〇五年東京帝大法科政治系畢業，即入大藏省服務，歷任海關檢查官、稅務監督官、函館海關長兼函館稅務管理局長、海關事務官、大藏省書記官、文書科長、國債科長

、國債整理局長、及理財局長等職，至一九一〇年第三次桂太郎內閣成立，任大藏次官；一九一三年第一次山本權兵衛內閣時，仍連任，明年勅選爲貴族院議員，旋任朝鮮銀行總裁。一九一六年十月寺內正毅內閣成立，又擢爲大藏次官，是年十二月升任大藏大臣，迨一九一八年九月隨寺內內閣辭職。其後：一九二四年清浦奎吾內閣成立，復入掌度支；一九二八年田中義一內閣時，出任文部大臣，翌年辭職。年來專任貴族院議員，屬研究會系。日本對華關係，自大隈內閣以後，氏獨能別開生面，進勸寺內，貸巨款於前北京政府，該款因由西原龜三出面接洽，故名「西原借款」，事後著有「菊之分根」一小冊子，中述「關於對華經濟問題，爲國家繁榮及確保東亞計，當稱窮靈萃，以貫澈目的」。氏又爲國本社發起人，意志堅強，自信認爲正當者，則不問手段如何，向所定之目的邁進，一般之毀譽褒貶，均不足以稍動其心。對於新智識之吸收，雖在今日，猶拳拳不息，故時有出任藏相等重要職之說。

勝田貞次 (Katsuda, Teiji)

評論家，一八九三年生，大阪府人。

一九一七年慶應大學理財科畢業後，即任三井銀行泗水分行行員。嗣由野村銀行派赴各國留學，一九二二年歸任野村證券會社調查部長，常以日本之 *Reform* 自命，對於世界經濟恐慌，過抱悲觀，致爲野村所不滿，乃辭職赴德，一九

三四年自設景氣研究所於東京，著書甚多。與高橋龜吉、小島精一、石橋滿山、小汀利得等，同稱爲名經濟學者，較富於自由主義色彩。

菊池良一 (Kikuchi, Ryoichi)

前 國父之祕書，一八七九年生，青森縣人。

氏爲己故菊池九郎（九郎素從事自由民權運動，曾任衆議院議員）之長子，山田良政（第一次惠州起義時陣亡，國父手書墓碑，稱爲興亞之先登）之從弟。一九〇八年畢業京都帝大法科，初任新聞記者，旋轉入商界，今擔任山口商會社代表理事。一九二〇年以後，屢次當選衆議員，爲出道兼一手下之健將，其黨籍由民政黨而國民同盟，復由國民而重歸民政黨，悉隨山道爲轉移，素抱大亞洲主義，任國父之祕書多年，對國內問題，極力主張革新。

菊池武夫 (Kikuchi, Takeo)

陸軍中將，一八七六年生，宮崎縣人。

熊本縣勳王家菊池武時之孫，世襲男爵，列於華族。士官學校第七期步兵科及陸軍大學畢業後，又留學歐洲。歷任參謀本部中國班班員、第十六師團參謀、第六十四聯隊長、陸軍大學兵教官、駐華公使館武官、第十一旅團長、張作霖軍事顧問等職，至一九二六年晉級中將，明年自請編入預備役。一九三一年以男爵五選爲貴族院議員，現除任東京淀橋

區會議長外，兼任國本社社員、神社社社員、在鄉軍人會幹事等職。與平沼騏一郎及安達謙藏，最稱莫逆，嘗欲擁之組閣。一九三五年二月六十七次議會開會時，曾痛詆提倡天皇機關說之美濃部為消極之叛逆學匪。

菊池 寬 (Kikuchi, Kan)

評論家，一八八八年生，香川縣人。

高松中學畢業後，曾入東京高等師範、明治大學、正則英語、及第一高等等學校肄業，均因事中途退學，一九一六年畢業京都帝國大學文科英文學系，即入時事新報，從事著述藤十郎之戀愛、恩仇之彼方、無名作家日記等翻作，文學雜起，後陸續翻刊新潮、話、文藝春秋等文藝雜誌，並不時發表各種作品，遂執文藝界之牛耳；人謂其著作之收入，平均一字達數千金，足見讀者之多，而銷行之廣。近年除任文藝春秋社社長外，兼任文藝家協會會長、及帝國藝術院會員等職。一九四一年三月曾以國民使節資格來華。

菊池豐三郎 (Kikuchi, Toyosaburo)

文部次官，一八九二年生，愛知縣人。

一九一六年東京帝大法科政治學系畢業，初任京都府警廳、及文部省宗教局第一科科長，一九三四年派赴歐美考察。歸後歷任普通學務局學務科長、大臣官房文書科長、秘書科長、實業及普通學務局長等職，至一九四〇年七月橋田上台後，升現職。

菱刈 隆 (Hishikari, Takashi)

陸軍大將，一八六四年生，鹿兒島縣人。

出身士族，士官學校第六期步兵科及陸軍大學（一九〇二年）畢業。日俄戰爭時，以梅澤旅團之參謀從軍。其後歷任第四聯隊長、第二師團參謀長、步兵第二十三旅團長、陸軍戶山學校校長、山良要藥司令官及第八第四各師團長。其任四師團長時，以在日本舉行首次防空演習，博得好評，乃升台灣軍司令，并晉級大將。關東英太郎後，任關東軍司令官。一九三一年八月歸任軍事參議官，一九三三年八月繼武藤信義後，重任關東軍司令官兼駐滿大使及關東長官，一九三四年辭職回國，仍任軍事參議官之職。二、二六事變後，編入預備役，在陸軍中為中間派人物，對於部屬，從不厲聲叱責，故人多樂就之。

菱沼 勇 (Hishinuma, Isamu)

商工省機械局長，一八九八年生，東京府人。

一九二三年東京帝大法科政治學系畢業，在學時已及高等文考試。歷任商工省大臣、官房文書秘書、統計等科科長、鋼鐵局第二部部长、及貿易局局長等職，一九四〇年六月調任商工省機械局長，明年他就，為竹內可吉之直系人物。

菅 健次郎 (Suga, Kenjiro)

名古屋電氣局長，一八九五年生，滋賀縣人。

一九二一年東京帝大法科德文法學系畢業，即入鐵道省

，一九二七年派赴歐美留學，一九二九年歸任參事。嗣由名古屋鐵道局庶務科長、轉運輸科長、汽車科長、及關東軍司令部交通處長，於一九四〇年八月任名古屋電氣局長。

菅 晴次 (Suga, Seiji)

陸軍少將，一八九一年生，東京府人。

士官學校第二十五期砲兵科及東京帝國大學造兵科畢業後，又留學英法二國。歷任築城本部部长、兵器本廠附、陸軍省兵器局科員、陸軍造兵廠十條兵器製造所長、東京工廠精器製造所長、及兵器局槍砲科長，於一九三九年三月，繼木村兵太郎後，以少將升任兵器局長。

菅波椿事 (Suganami, Shoji)

前臨時政府商工顧問，一八九九年生，福島縣人。

一九二四年東京帝大法科政治學系畢業，經高文考試及第，即入商工省。歷任該省礦山局科員、貿易局科員、礦山監督、秋田縣礦山監督局科長，及北京臨時政府商工顧問，一九四〇年八月歸任商工省鋼鐵局製鋼科科長，翌年他就。為吉野信次系之人物。

結城豐太郎 (Yuki, Toyotaro)

日本銀行總裁，一八七七年生，山形縣人。

一九〇三年東京帝大法科政治學系畢業，即入日本銀行，由普通行員累升海外監督、理事兼大阪分行行長。一九二二年十一月安田善次郎被刺後，因高橋是清之推薦，轉任安

田財閥之保善社理事及安田銀行副行長。在職時極力錄用學校畢業生(安田善次郎出身寒微，以開兌換店起家，其前時所經營事業之職員，學校出身者甚詳)，並合併安田系之多數小銀行；安田銀行遂一躍而擁有資本一億五千萬圓，列於大銀行之林矣。後以不嫌於安田之舊派人物，以考察金融事業之名，出國遊歷，歸後經前藏相井上準之助之拔擢，就任日本興業銀行總裁。一九二七年日本金融界發生空前恐慌，氏受日本銀行及大藏省存款部之特別援助，竟放出七千萬圓，各種垂危之事業，因得漸趨復興，於是名聲鵲起，遂譽為理財能手。廣田內閣時曾選任首相辭未就，其後受林銑十郎之邀，繼任藏相。氏受任後，改編豫算，將馬場狹一時代新增之稅，稍加減輕，並遣兒玉謙次來華考察，希圖兩國在經濟上共同攜手，以防止軍事行動，後隨林內閣辭職。不久，繼池田成彬，就任現職。氏於一九二三年與池田成彬同加入國本社。為小磯國昭、藤山愛一郎之腹孀親。

猪野毛利榮 (Inose, Toshie)

衆議院議員，一八八六年生，福井縣人。

日本大學法科畢業，曾任新聞記者、東京順天中學教師、日本大學理事及經國社社長。一九二四年後，繼續當選為衆議院議員，隸政友會籍。一九三二年，鈴木喜三郎為政友會總裁時，任隨從秘書，常攜手槍護衛鈴木。一九三五年協助山本悌二郎擁護國體明徵問題，山本介紹於其弟有田八

郎：前外相，曾選任外務省政務次官，一九三七年辭職。平居好研究漢藥，能自開方治病，宗教心亦至熱烈，誦經若經已達二十六年云。

賀屋典宣 (Kaga, Okinobu)

大藏大臣，一八八九年生，廣島縣人。

氏原為山口縣藤井積威之子，後入繼廣島縣神職賀屋花室，故改今姓。東京帝大法科政治學系畢業，經高等文官考試及格，即入大藏省任財務書記，派駐美國，後轉歐歸國，歷任大藏省主計官、財務官、書記官、主計局司計科長、及預算決算科長，於一九三三年升任主計局長（在主計局任職達十七年）。其間曾代表大藏省出席華盛頓會議、日內瓦及倫敦軍縮會議。對於軍縮情形之熟悉，並世無二。夙與石渡善太郎、青木一男等同稱為故藏相藤井真信幕下之三健將。

呂場煥一任藏相時，被左遷為理財局長，結城豐太郎上台，升任次官，不久近衛內閣成立，以兒玉謙次遜辭，一躍而為大藏大臣。氏就任後，宣布國際收支之適合、生產力之擴充、以及物資需給之調整三大理財方針，并編成戰事發生後之兩大特別預算，一九三八年五月辭職；勅選為貴族院議員，榮大藏省顧問。一九三九年七月出任華北開發會社總裁，一九一四年十月東條內閣成立，重膺藏相之職。

進藤誠一 (Shindo, Seichichi)

前厚生省保險局長官，一八八九年生，岡山縣人。

彫刻匠進藤彌太郎之子，幼時家貧，以受同鄉富豪太原孫三郎之補助，得入第三高等學校，於一九一五年畢業東京帝大法科政治學系。經高等文官考試及格，即入選信省，歷任京都府伏見郵仲局長、廣島東京兩選信局科員、選省保險局運用規格經理各科科長、經理局需品科長，及熊本選信局長，迨一九三四年床次竹二郎任選相時，擢充電務局長，後歷經理局長及郵務局長，於一九三八年一月就任厚生省之第一任保險院長官，一九四〇年他就。氏在簡易保險局運用科長時代，即着手研究郵政年金制度與地震保險等問題，簡易保險積存金之規定應運用於自作農，以及開辦公立市場等，即由其一手擘劃。七七事變發生時，趕赴平津籌設戰事郵政。著有真存物品經濟論、地震保險論等書。

飯田貞固 (Iida, Sadakata)

陸軍中將，一八八四年生，新潟縣人。

士官學校第十七期騎兵科第一名畢業，即以少尉參加日俄戰爭，其後又畢業陸軍大學，獲軍刀賞。歷任青島守備軍參謀、陸軍大臣秘書官、駐義大使館武官、陸軍大學兵學教官、近衛師團騎兵隊長、陸軍省軍務局馬政科長、陸軍省副官、騎兵第三旅團長、騎兵學校校長及參謀本部總務部長等職。其一九三四年陸軍大演習時，任南軍總指揮阿部信行之參謀長，其戰術與小畑敏四郎並稱，極見賞於其同鄉鈴木莊六及建川美次。一九三七年十二月晉級中將，同時繼續召

番後，任騎兵監；八月轉任近衛師團長。氏頭腦冷靜，容止風雅，號為陸軍中之「西園寺公爵」。

飯田清三 (Iida, Seizo)

評論家，一八九四年生，鹿兒島縣人。

一九二〇年與安岡正篤同期畢業於東京帝大法科政治學系。初入任友會社，後轉任野村財閥之證券調查部長。時往歐美游歷，熟悉美國經濟情形，為國策研究會之重要分子。著有日本之主要產業起債市場論、放資與投資等書，與野崎龍七並名。

飯沼守 (Iinuma, Mamoru)

陸軍中將，一八八九年生，愛知縣人。

士官學校第二十一期步兵科及陸軍大學畢業。歷任步兵學校陸軍大學兵學教官、第二師團參謀長、及近衛步兵第二聯隊長，八一三戰役時，任松井石根之參謀長，因晝夜策劃，不數月鬚髮皆白，歸時舊知，幾愕不相識。一九三八年五月，調任士官學校豫科幹事，同年十二月繼阿南惟幾後，任陸軍省人事局長，一九四〇年晉級中將，並升任師團長。

飯村 穰 (Iinura, Jo)

陸軍中將，一八八八年生，茨城縣人。

士官學校第二十一期步兵科第一名畢業，後又畢業東京外國語及陸軍大學。歷任滿洲里、綏芬河（第一次）等特務機關長，駐土耳其大使館武官，和歌山聯隊長，參謀本部作

戰科長，陸軍大學校兵學校教官、幹事、校長等職。一九三九年十月磯谷廉介後，任關東軍參謀長，一九四〇年十一月任總力戰研究所所長。

飯田幡司 (Iijima, Hataji)

評論家，一八八八年生，兵庫縣人。

一九一三年東京高等商業學校專攻部畢業，翌年任母校神戸高等商業學校講師，一九一六年升教授。一九一八年辭教職，入久原商會社，後經日本汽船會社常務董事、大阪商船會社及大阪鐵工所專務董事，於一九三二年九月，入大阪朝日新聞。初任編輯局論說委員，嗣任出版局長，一九四〇年舉為董事。此外並兼任日本出版文化協會會長，著有貨幣金融等書多種。

飯野浩次 (Ino, Koji)

商工省顧問，一八九二年生，埼玉縣人。

一九一七年東京帝大經濟學部畢業，即入三菱合資會社，閏一年派赴柏林三菱商會社支店，至一九三五年回國任總公司機械部大阪支店長。一九三七年以外務省囑託名義，偕前商工大臣佐草雄赴德，歸後，聘為陸軍省及企畫院第五部囑託，一九三九年任該總公司機械部長，翌年調業務部長，一九四二年又兼任商工省貿易局顧問。

黑田長和 (Kuroda, Nagatoshi)

貴族院議員，一八八一年生，東京府人。

筑前藩主後裔，近衛文麿之襟兄。一九〇四年東京帝大
法科英文法學系畢業後，復留學英國劍橋大學。一九一一年
起屢次互選為貴族院議員，屬公正會系。此外更任社會政策
黨議會、選舉法改正會議會、及法制黨議會委員。平時於網
球、高而夫、打彈子、及謠曲等，頗備興趣。二、二六事變
時，曾有出任文相之說。

黑田英雄 (Kuroda, Hideo)

前大藏次官，一八七九年生，岡山縣人。

一九〇五年東京帝大英法科畢業，即入大藏省。歷任大
臣隨從祕書、文書科科长、銀行局局長及主稅局局長等職，
迨一九三二年大藏內閣時，升大藏次官。後以台灣銀行人造
絲賄索事件免職，一九三八年勅選為貴族院員。此外更兼任

大東京鐵道會社社長，一時曾有繼安田雄之助後，任東洋拓
殖會社總裁之說。

黑崎定川 (Kurosaki, Teizo)

前內閣法制局長官，一八八五年生，京都府人。

故和田彥次郎之婿，一九一一年東京帝國大學法科德文
法學系畢業，即入逓信省。不二年，轉入內閣法制局，歷任
該局參與官及恩給局審查官。一九三三年奉派赴歐美考察，
歸後由內閣書記官，升任法制局第二部長。一九三四年齋藤
內閣時，繼堀切善次郎後，任法制局長官；文官保障法，即
由氏起草，不久隨齋藤辭職，勅選為貴族院議員。與其時內
閣書記官長田邊治通，最為莫逆，故平沼內閣成立，即復任
此職。在議會中對於法案之解剖說明，面面周到，談者多引
與前法制局長官金森德次郎並稱。

溝 義井 (Hanawa, Yoshii)

前漢口總領事

一九二三年東京帝大法科畢業，經外交官領事官考試及第，即入外務省。歷任廣州候補領事、駐滿大使館秘書、天津領事及泗水領事等職，至一九三八年春任南京總領事，是年十一月調任漢口總領事，現又他調。

塚田 政 (Tsukada, Osamu)

陸軍中將，一八八六年生，茨城縣人。

士官學校第十九期步兵科及陸軍大學畢業。曾任步兵第六十八聯隊附、參謀本部部員、軍令部參謀、台灣步兵第二師隊長、陸軍省軍務局兵務科長、關東軍參謀、及參謀本部第四部長等職。一九三七年八一三戰役時，任松井石根之幕僚長，翌年晉級中將，並升任陸軍大學校長。一九三九年八月任師團長，一九四〇年十一月繼澤田茂後，任參謀本部參謀次長，以迄今日。

塚原 四四 (Tsukahara, Nishizo)

海軍中將，一八八九年生，山梨縣人。

海軍兵學校及海軍大學校畢業。歷任軍令部參謀、鳳翔艦副艦長、大井艦艦長、軍務局科員、日內瓦軍縮會議全權代表隨員、海軍航空廠總務部長、赤城艦艦長、及航空本部總務部長等職。一九四〇年十月以中將任鎮海要港部司令官

，未幾他調。

奥田新川 (Okuda, Shinzo)

商工省貿易局部長，一九〇二年生，宮城縣人。

一九二五年東京帝大法科畢業，即入商工省任東京鑛山監督局科員，一九三〇年調任貿易局事務官，一九三四年任爪哇之日荷經濟談判隨員，一九三六年一月派赴歐美考察，是年十一月任貿易局檢查科長，翌年任該局第二部輸出科長，一九三八年任華中派遣軍囑託，一九三九年六月任貿易局總務科長兼第一部市場科長，八月調任大臣官房秘書科長，一九四〇年八月借小林商工大臣出席日荷經濟談判。歸國後升任商工省貿易局第二部部長。

奥村喜初男 (Okumura, Kiwao)

內閣情報局長，一九〇〇年生，福岡縣人。

父設染肆於柳鎮。豐津中學畢業後，以家境清貧，任村公所書記，後得師友資助，一九二三年畢業東京帝大經濟學部。初供職遞信省，一九三四年派任內閣調查局調查官，一九三七年派赴德義研究統制經濟，一九三八年重入遞信省任無線電科長，翌年任企畫科長兼內閣企畫院調查官，嗣專任該省大臣官房監察官兼監察科長，最近轉任現職。氏在內閣調查官時代，即草定中日滿經濟建設要綱、及勞動新體制兩方案，贊助鈴木貞一力主電力國營；與美濃部洋次、迫水久

常、毛里英於蒐等，同稱為鈴木手下之四大金剛。大東亞戰事發生後，日本以遠東二字，為英帝國主義，自命雄據天下之中而定是名，通令一律禁用，即係氏在次官會議所提議。

團田島之助 (Sonoda, Seinosuke)

陸軍大佐，一八九五年生，兵庫縣人。

士官學校第二十九期步兵科及陸軍大學畢業。歷任參謀本部中國班班員、地誌班班員、關東軍司令部附、駐華公使館副武官、滿蒙班班員班長。至一九三七年三月調任陸軍省軍務局附兼兵器本廠附，專司研究對華外交事務，一九三八年七月又調任兵器局機械科長。

團庄和一郎 (Sonobe, Waichiro)

陸軍中將，一八八四年生，熊本縣人。

士官學校第十六期步兵科及陸軍大學（一九一三年）軍刀組畢業。歷任駐法大使館副武官、川村元帥副官、參謀本部部員、陸大兵學教官、教育總監本部第一科科長、步兵第八旅第一旅旅團長、步兵學校教育長及校長等職，一九三六年晉級中將，翌年八月升任第七師團長，一九三九年調任中部防衛司令官，一九四〇年三月出任某方面之總指揮，一九四一年四月回國任軍事參議官。

暉崎義等 (Teruoka, Gito)

國民體力審議會專門委員，一八九〇年生，兵庫縣人。

一九一七年東京帝大醫學部生理學科畢業，即任警視廳保健調查科技師，以研究民族衛生起見，移居於深川及日暮里等貧民窟。後入大原社會問題研究所，一九二一年委為倉敷勞動科學研究所長，是年派赴歐美考察，一九二四年歸國，得醫學博士學位。一九三一年奉派出席國際醫學會議，一九三六至三九年任日本勞動科學研究所長，並兼大日本青年團理事；現任國民體力審議會專門委員。時於報章雜誌，發表論著。

新田政一 (Arinu, Seichi)

海軍中將，一八八七年生，廣島縣人。

一九〇八年海軍兵學校畢業。歷任駐英使館副武官、橫須賀鎮守府參謀、大井八雲那摩等艦艦長、吳鎮守府及第二艦隊參謀長、海軍省教育局長、海軍兵學校校長等職，至一九四一年四月，任駐華南方面海軍最高指揮官。

楠本實隆 (Kusunoto, Sanetaka)

陸軍少將，一八九二年生，東京府人。

士官學校二十四期步兵科及陸軍大學畢業，歷任參謀本部中國班班員，瀋陽、南京、北平特務機關職員，駐華公使館副武官，北平陸軍大學教育，參謀本部中國班班長，及陸大兵學教官。一九三四年調部任事，旋派赴歐美視察，翌年回國。一九三六年任上海特務機關長。一九三八年以少將任興亞院華中連絡部代理次長，一九四〇年辭職。

福本柳一 (Fukunoto, Ryūichi)

內閣情報局第四部長，一八九六年生，神奈川縣人。

一九二二年東京帝大經濟學部畢業，經高文考試及第，三任復興興務官、神奈川縣郡長、宮崎縣警察部長、內務省社會秘書、厚生省秘書、內務省土木局道路科長、及警保局圖書檢查科長，至一九四〇年十月升現職，專司檢查電影、留聲片、戲劇、報章、雜誌及編纂週報等刊物。

萱垣庫藏 (Kayaiba, Gunzo)

前內務次官，一八九三年生，宮城縣人。

一九一九年東京帝國大學英文法學系畢業。歷任栃木、福島、神奈川等縣理事，兵庫縣事務官，復興局書記官，島根縣學務局長，秋田、岡山、愛知等縣警察部長，內務省警保局保安科及高等科科長，至一九三四年升任栃木縣知事。一九三六年湖惠之輔任內相時，調為警保局長，處理二、二六事變善後事宜，頗具手腕。一九三七年五月，又出任岡山縣知事，一九三九年木戶幸一任內務大臣時，攝為警視總監，後在內相田邊治通之下，任內務次官，追東條內閣成立辭職。氏在中學時代，家離校十八華里，早晚往返，四年之間，未曾請假，校友往往資為談助。

萬生能久 (Kizuno, Yoshihisa)

大政翼贊會總務，一八八一年生，千葉縣人。

小學畢業後，於十九歲時，借內田良平組織天佑快，赴韓扶助東學黨領袖金瑋準，作獨立運動。嗣又在韓創辦釜山日報，極力鼓吹日韓合邦。歸國後，與內田組織黑龍會，自任理事，迨內田逝世，由氏繼任會長。一九四〇年七月選任新體制籌備委員會委員，後改任現職。

遠藤喜一 (Endo, Kichi)

海軍少將，一八九二年生，東京府人。

一九一一年及一九二一年先後畢業海軍兵學校及海軍大學校，一九二二年派赴德國留學。歸後歷任駐德使館武官（一九二七年、一九三一年、一九三八年、前後共計三次）、長良副艦長、海軍大學教育、艦政本部造船監督官、造兵監督官，軍事參議院幹事，鬼怒艦艦長，皇室侍從武官，及軍事參議院幹事等職，嗣以少將編入預備役；一九四〇年十二月升任廣須賀鎮守府參謀長。

遠藤柳作 (Endo, Ryūsaku)

前內閣書記官長，一八八七年生，埼玉縣人。

一九一〇年畢業東京帝國大學法科。歷任朝鮮總督府事務官秘書官、千葉縣內務部長、東京府產業部長、青森縣三重縣知事等職，於一九二八年當選為衆議院議員，隸政友會籍，兼營律師職務。一九三一年後，復出任愛知及神奈川縣知事。一九三三年繼駒井德三後，任滿洲國務院總務長官，一九三五年四月辭職，勅選為貴族院議員。一九三九年任阿

都内閣之書記官長，翌年一月隨阿部辭職。最近發起東亞研究會，自任理事。

鄉 鈴之助 (Go, Seinosuke)

大實業家，一八六六年生，東京府人。

男爵鄉純造之次子。純造本岐阜縣鄉農，初奉職幕府，明治維新後，入仕大藏省，以長於理財術，深得松方正義信任，升至大藏次官，又被舉為貴族院議員，封授男爵，遺產達二三百萬元。氏初學於同志社大學及東京帝大選科，後留學德國習經濟及哲學，得哲學博士學位。歸國後，曾服務於農商務省，不久即轉實業界，經營運輸事業，並任東京證券交易所理事長。一九一一年以來，屢被選為貴族院議員，屬公正會。日本財界有所謂「世話役」者，介乎官民之間，內則以第三者之地位，處理實業界各種問題，外則以工商業領袖資格，接待游歷日本之外國考察團，主其事者，大都為實業家中寄宿，而又恬淡無私聲譽昭著者；自澁澤榮一逝世後，氏以長於交際，頗有繼承餘緒之勢，堪稱為目下財界中「世話役」之領袖。其所任職務，除日本商工會議所及東京商工會議所會長外，更兼東京電燈會社、昭和肥料會社及日本團體生命保險會社理事長，第三銀行及日本製鐵會社理事，中日實業公司、東京證券交易所、國際通運會社、日本郵船會社、東亞絲紡織會社及川崎造船所顧問，日本銀行參與，日本鉛管製造所股東代表人，臨時產業會議會、米穀統制

會及中央職業介紹委員，中日貿易協會顧問，日本經濟聯盟，全國產業聯合會及日滿實業協會會長等職；其中尤與川崎造船所之關係，最為密切，故有人目為川崎町閨之代表人物。氏十六歲時曾戀一女，約為婚嫁，因女之伯父思想頑固，將女幽閉鄉間，強令轉字他人，致女遺書自盡，氏遭此刺激，遂遠赴德國。居德時，曾涉足花叢，以抒抑鬱。歸國後，雖以眷懷舊人，未謀婚娶，而映麗女侍，老來猶時有二三人不離左右，曾笑謂：「予在日本實業界，為一風流才子」。其養子卯雄，現任西尾水泥會社專務董事。(氏於本書付印時逝世)

鈴木九萬 (Suzuki, Takakazu)

駐埃及公使，一八九五年生，茨城縣人。

一九二一年東京帝大法文法學系畢業。經外交領事館考試及第，入外務省。由國際聯盟日本事務局事務官、該省歐美局事務官、駐法大使館三等、二等、一等秘書，於一九三六年調任駐埃及公使館一等秘書兼代公使。是年調回外務省，任文化事業部第三科科长，一九三七年秋任大臣官房儀典科長，一九四〇年十月升任現職。好讀書，信佛教。

鈴木文治 (Suzuki, Bunji)

前日本勞動總同盟會長，一八八八年生，宮城縣人。

一九〇九年東京帝大法科政治學系畢業。少時家寒，在學生時代，曾任本鄉教會機關雜誌新人之編輯，以補膏火，

而與基督教之發生關係，亦自此始。出校後，入秀英舍印刷所，後轉任東京朝日新聞記者，兼之既教會社會事業部主任，專力指導勞動者之學術講演會。一九一二年組織友愛會，自任會長。一九一五年渡美，欲圖緩和美國之排日風潮。一九二〇年友愛會改組為日本勞動總同盟，仍任會長。一九二六年被推為社會民衆黨中央執行委員，直至一九三〇年，同時辭去此二職。曾出席國際勞動會議，任日本勞方代表，先後達五次之多。一九二八年、三六年及三十七年，三次當選為衆議員，著有勞動運動二十年等書。

鈴木貞一 (Suzuki, Teichu)

無任所大臣兼企畫院總裁，一八八九年生，千葉縣人。

士官學校第二十二期步兵科及陸軍大學軍刀組畢業，初任參謀本部英國班班員、中國班班員，駐上海武官、及駐華使館副武官。至一九三二年荒木貞夫陸相時代，任陸軍省新聞班班長，力與谷正之、白鳥敏夫等，促成日本之退出國聯。迫林銑十郎任陸相時，以小冊子間頗辭職，後任陸軍大臣研究部主事。一九三四年岡田內閣設置調查局時，氏被派為陸軍代表，以「兵器本廠附」資格，任調查官。一九三五年八月轉任陸軍步兵第十四聯隊長。一九三八年冬，以少將任興亞院政務部長。翌年晉級中將。一九四〇年七月柳川平助出任法相，代理興亞院總務長官。未幾繼星野直樹後，任企

畫院總裁，並兼無任所大臣，同時編入預備役。翌年七月近衛第三次組閣，十月東條組閣，均仍留任。氏畢業陸大後，曾奉陸軍省令，在大瀾省、日本銀行、及東京證券交易所等處實習研究，故能洞悉世界經濟問題。

鈴木莊六 (Suzuki, Soroku)

陸軍大將，一八六六年生，新潟縣人。

米商鈴木高次之第三子。幼年曾任長岡警察署副役，後由小學校代用教員，考入陸軍教導團，學習期滿，升入士官學校，於一八八九年第一期畢業，即任職少尉，旋又入陸軍大學，因成績優異，賜軍刀賞。日俄戰爭時，以中佐任第二軍參謀。其後歷任參謀本部科員科長、海軍軍令部參謀、及陸大兵學教育，尤以教官時間，為最長久。升少將後，充騎兵第三旅團長，騎兵學校校長、及騎兵監。一九一九年以第五師團長，與赤軍戰於俄境，繼調第四師團長、台灣軍司令官、及朝鮮軍司令官等職，一九二四年晉級大將，一九二六年升參謀總長，一九三〇年退入預備役，一九三二至四〇年任樞密院顧問。前曾任在擲軍人會會長；并曾派駐歐美及西伯利亞等地。好乘馬，信佛教中之日蓮宗教。

鈴木茂三郎 (Suzuki, Mosaburo)

前全岡大衆黨中央執行委員，一八九四年生，愛知縣人。

幼時家寒，以苦學於一九一五年畢業早稻田大學政治經

濟新專門部。初任報知新聞記者，一九二〇至二三年漫遊歐美，經由蘇聯歸國，担任東京日日新聞記者，并參與各種社會運動。一九二四年創立政治研究會，任常務幹事，與同志大山、大森等發行「大眾」雜誌，與共產黨相對峙（該雜誌後合併於勞農）。一九二六年脫離日日新聞，從事實踐運動，加入勞動農民黨。該黨解散後，發起無產大眾黨，任祕書長。一九三〇年併入全國勞農大眾黨，被選為中央執行委員。一九三二年設立東京經濟研究所，屢在報章雜誌，發表關於經濟之論文，謂：「日本經濟力，祇能發行二百五十萬萬元公債」。一九三七年曾被捕入獄。著作甚多，最著名者，為「日本獨占資本主義之展望」。

鈴木宗作 (Suzuki, Sozakur)

陸軍中將，一八九〇年生，愛知縣人。

士官學校第二十一期及陸軍大學畢業，為石原莞爾在陸大時之同學。名次石原第一，氏為第二。曾任士官學校及陸軍大學兵學教官、及警務局警備科長，至一九三六年繼石原後，任仙台第二師團聯隊長；一九三七年三月調教育總監部第二科長；一九三八年五月，以少將升任教育總監部部長，經調參謀本部長。任陸大教官時，適因倫敦條約而發生統帥權問題，陸大學生同聲附和，意氣激昂，氏厲聲曰：「海軍少專，海軍任之，設因此惹起爭端，將若何？爾曹其靜心同三，毋妄動！」此一席訓話，學生果見馴服。氏富於組織力

，對於軍隊之編制，尤稱特長，與石原莞爾，並稱為士官二十一期之領袖人物。

鈴木英通 (Suzuki, Yoshimichi)

陸軍中將，一八八二年生，山形縣人。

士官學校第十四期步兵科及陸軍大學畢業。曾任參謀本部中國班班員班長、上海特派員、吉林督軍署軍事顧問、及奉天特務機關長（土肥原之前任），至一九三三年升任駐華公使館武官，一九三五年歸國，升任第十九師團長，並晉級中將。一九三七年三月編入預備役。

鈴木貞太郎 (Suzuki, Kantaro)

樞密院副議長，一八六七年生，千葉縣人。

父為士族，一八八七年海軍兵學校畢業。歷任海軍大學教官，陸軍大學兵學教官，海軍教育本部駐德部員，明石、宗谷、敷島、筑波等艦艦長，水雷學校校長，海軍省人事局長，軍務局長，第一、第二、第三各艦隊司令官長，海軍次長，海軍將官會議議員，軍事參議官，軍令部長等職。一九二三年晉級大將，一九二九年繼田捨已後，任侍從長兼樞密院顧問，一九三六年十二月辭侍從長之職，以功授男爵，列於貴族，翌年任議定官。二二六事變時，被襲擊受傷，一九四〇年六月任樞密院副議長。氏之任現職，為米內前首相所推舉，而岡田啓介、牧野伸顯及湯淺倉平諸氏所支持，蓋新院長原嘉道，嘗目為革新派之代表，現狀維持派為表示合

作起見，故特舉氏以副之。平居頗愛園藝，好讀書，尤好法華經。

鈴木清秀 (Suzuki, Kiyohide)

鐵道次官，一八九三年生，東京府人。

一九一九年東京帝大德文法科畢業，即入鐵道省。由東京鐵道局庶務科文書股股長及水戶運輸事務所長，於一九二五年派赴英德各國考察，一九二九年歸國。嗣後歷任大阪鐵道局運輸科長、庶務科長，仙台鐵道局運輸科長，鐵道省運輸局旅客科長、鐵道大臣秘書、官房文書科長，大阪鐵道局長及鐵道省監督局長，至一九四〇年七月升現職。在該省中，深負期望。

鈴木率道 (Suzuki, Yominichi)

陸軍中將，一八九〇年生，秋田縣人。

士官學校第二十二期砲兵科及陸軍大學畢業。曾任陸軍大學兵學教官、參謀本部俄國班班員及作戰科科員，其時小畑敏四郎任作戰科長，與鈴木貞一同隸該科，貞一主管對英作戰計劃，率道主管對俄作戰計劃，世人稱為雙鎗將。荒木貞夫任陸相時，升為作戰科長。一九三六年轉天津駐屯軍野砲兵聯隊長，轉戰華北各地，一九三八年五月晉級中將。航空總監部成立後，調充總務部長，並兼航空本部總務部長。

鈴木重康 (Suzuki, Shigeo)

陸軍中將，一八八六年生，石川縣人。

士官學校第十七期步兵科及陸軍大學畢業。曾任參謀本部部員、第一師團參謀、陸軍大學教官、參謀本部科長、近衛步兵第一聯隊長、陸軍大學研究部主事、參謀本部第一及第四部部長等職，至一九三七年晉級中將，未幾，升任師團長。

鳩山一郎 (Hatojama, Ichiro)

前文部大臣，一八八三年生，東京府人。

故衆議院議長法學博士鳩山和夫長子，母奉子爲明治維新後最著名之女教育家，氏於一九一一年畢業東京帝大法科，即業律師，曾被舉爲東京市議會議長，及臨時大都市制度調查會委員。一九一五年以後，繼續當選爲衆議院議員，已達九次，隸政友會籍，一九二七年田中義一內閣成立後，任內閣書記官長。田中彌留之際，以一書遺氏，謂此係甚關重要之密件，日後當有助於君，請珍藏之；有傳爲此乃田中與中樞要人之談話紀錄，即其政策之進行方針者。一九三一年犬養毅內閣成立，出任文部大臣，翌年五一五事件發生，齋藤繼起組閣，氏仍留任。一九三三年政友會與齋藤內閣絕緣，乃辭職。政友會自犬養逝世後，總裁一席，雖由鈴木喜三郎氏繼任，而因內部意見不一，鈴木憤而辭職，氏與鈴木有葭李親（鈴木之妻爲氏胞妹），論資格，論地位，亦頗有繼任總裁之望，然以思想關係，未果。一九三七年秋，曾出遊歐美，以自翰晦。

十五畫

增田次郎 (Masuda, Jiro)

價格形成委員會委員，一八七〇年生，靜岡縣人。

少時曾為本縣駿東郡學務所書記，因努力自修，得以及第普通文官考試。後藤新平任台灣民政長官時，借該郡郡長游歷台灣，見之深為器重，即委為私人秘書。嗣後後藤由滿鐵總裁而任遞相內相，無時不追隨左右者，達二十年之久。既而，入福澤桃介之大同電力會社任理事，專意經營電氣，除大同會社外，並担任立川水電、天龍川電力、神岡水電、南海水力、關西火力、共同發電會社社長董事，及全國電氣協會會長等職。一九三九年春，議會通過電力國營法案後，創立發達電力會社，任為社長。一九四一年辭職，現兼任價格形成中央委員會臨時委員。

增田義一 (Masuda, Giichi)

實業之日本社社長，一八六九年生，新潟縣人。

一八九三年以第一名畢業於早稻田大學前身之東京專門學校政治科。一八九五年任讀賣新聞經濟欄主任，一九〇〇年創立「實業之日本」社，發行雜誌「實業之日本」及其他書籍。曾數次游歷歐美，七次當選為眾議員。現除實業之日本社長及眾議員外，於實業方面，兼任大日本印刷會社總理，馬來橡皮公司理事長，日清生命保險、東京地下鐵道、婆羅洲橡皮各會社理事，及錦華紡織會社董事等職。於政治社

會方面，兼任文政審議會委員、國語審議會委員、仲長調查會委員，價格形成中央委員會委員，早稻田大學及跡見女學校校董，一九三一年曾被選為眾議院副議長，隸民政黨籍，平時好讀書旅行。

廣田弘毅 (Hirota, Koki)

前內閣總理大臣，一八七八年生，福岡縣人。

石工廣田德平（本姓林，以入贅廣田家，故改姓。）之子。原名文太郎，後改今名，福岡中學畢業時，本欲投考士官學校，因憤慨三國干涉遼東半島問題，改考高等學校，一九〇五年以第一名畢業於東京帝大法科政治學系。畢業前一年，會上書外務大臣，領取若干旅費，潛入中俄邊界，刺探俄情，作極精密之報告，時論已以大器目之。旋應外交官領事官考試不第，由山座圓次郎之介，充當朝鮮漢城領事館書記，翌年獲售外交官考試，派北京駐華使館辦事。嗣後歷任駐歐美大使館三等秘書、外務省事務官、大使館參事、外務省情報局長、歐美局局長、及駐荷公使，至一九三〇年升駐俄大使，一九三三年九月，齋藤內閣成立，繼內田康哉為外務大臣。翌年岡田組閣，仍留任。二二六事變後，應西園寺公之推薦，出而組閣，初以總理大臣兼攝外相，後辭外相兼職，擢有田八郎專任之，一九三七年三月辭職。是年六月，近衛內閣成立，復出任外相，於一九三八年五月辭職，賜

國務大臣禮遇。氏在中學時代，已加入其同鄉頭山滿所組織之文洋社，及登仕版，受知於小村壽太郎及山座圓次郎，譽為後起之英。其後復蒙林權助、加藤高明、幣原喜重郎、出淵勝次之薰陶，廣積經驗。任外相時，力唱一元多邊之協調外交，與德國訂結防共協定，使國際情勢，為之改變。對我國當局所提出之中日交涉三原則，即（一）中國須放棄以夷制夷政策，（二）中國須承認滿洲國之獨立，（三）共同防共，世亦稱為廣田三原則。

廣瀨久忠 (Hirose, Hisatada)

前厚生大臣，一八八九年生，山梨縣人。

氏為甲州財閥廣瀨久正之長子。一九一四年東京帝大法科政治學系畢業，經高等文官考試合格，歷任千葉縣屬員、岐阜縣警視及理事官、警視廳理事及警視、滋賀縣警察部長、內務省社會局事務官、福井縣內務部長、復興局書記官、內務省官房文書科長，迨一九二九年五月，堀切善次郎任東京市長時，擢為助役，對於解決東京市電車罷工案，發揮手腕，頗為人稱頌。閱一年半，調內務省社會局長，其後經東京府內務部長、三重縣知事、埼玉縣知事、內務省土木局長，至一九三六年三月潮惠之輔任內相後，復任社會局長。退職公積金法、商店法、及國民健康保險等法，皆為氏在此任內所手訂。近衛內閣成立，升任內務次官，不久厚生省成立，轉厚生次官，傷兵院、防空計劃局、職業局等官制，

亦其一手策劃。平沼內閣成立，經田邊治通及木戶幸一兩氏推薦，升任厚生大臣，後隨平沼辭職。喜打高而夫球、壘球、網球等。

德川好敏 (Tokugawa, Yoshioshi)

陸軍中將，一八八四年生，東京府人。

生於舊清水家，清水家為德川三卿之一，始自家康之第九代將軍家重之次子重好，故為德川家康之後裔，父篤守，曾授伯爵，後以故辭，氏於一九二八年列於華族，封授男爵。早歲畢業於東京陸軍幼年學校及士官學校第十五期。一九〇四年以工兵少尉參加日俄戰役，後轉入氣球隊。一九一〇年派赴法國學習航空，歸國後，歷任關於航空方面之職務，由航空隊中隊長、航空本部檢查官、陸軍航空學校教官兼大學校兵學教官、飛行第二大隊長、所澤飛行學校研究部主事兼教官、飛行第一聯隊長、所澤飛行學校教育長、明野飛行學校校長，至一九三四年轉任所澤飛行學校校長。一九三五年八月晉級中將。一九三六年八月日本陸軍為強化空軍，新成立航空兵團，以氏任航空兵團長。蘆溝橋事件發生後，來華指揮空戰。

德川家正 (Tokugawa, Iyemasa)

前駐土耳其大使，一八八四年生，東京府人。

氏為前貴族院議長公爵德川家達之長子，由學習院高等科於一九〇九年畢業東京帝國大學法科政治學系，同年及第

外交官領事官考試，派赴駐英大使館服務。嗣後歷任外務省參事官、外務大臣秘書官、外務省書記官、駐華公使館秘書、駐英大使館秘書參事、及雪特尼總領事等職，至一九二九年升任駐加拿大公使，一九三三年又升駐土耳其大使，一九三六年駐華大使更迭時，曾擬為繼任人選之一，一九三七年回國。年來又選為貴族院議員，屬火曜會。氏雖出身貴介，而頗通下情。妻正子，為公爵島津忠承之姊。

德川義親 (Tokugawa, Yoshichika)

貴族院議員，一八八六年生，東京府人。

松平慶永之第五子，後入嗣德川義禮家，故改今姓。一九〇八年獲侯爵，一九一一年及一九一四年先後畢業東京帝大文學部歷史科及理學部植物科。一九二〇年以後，歷任學習院教授、官內省主權官、及教育審議會委員，並以自費設立一生物學研究所。會游歷歐美各國及南洋羣島，傳為貴族中少壯派之領袖。阿部內閣時，有繼酒井忠正後，出任帝國農會會長之說。現為貴族院議員，屬火曜會。并兼公立八雲高等國民學校校長，係東京府之多額納稅者。

鹽澤榮 (Takumasa, Sake)

海軍少將，一八九一年生，熊本縣人。

一九一三年海軍兵學校畢業。歷任陸奧艦砲術長兼分隊長、軍令部參謀兼技術會議委員、軍令部及海軍省出仕、海軍省人事局第一科科长、長門艦艦長等職。至一九四一年繼

草鹿任一後，以少將任海軍省教育局長。

影佐禎昭 (Kagee, Sadaaki)

國府軍事顧問，陸軍少將，一八九四年生，廣島縣人。

士官學校第二十五期砲兵科第一名及陸軍大學優等畢業。歷任參謀本部中國班班員、中國班班長、北平上海駐在武官、滿蒙班長、仙台野戰重砲兵聯隊附、參謀本部情報科長、及陸軍省軍務局科長，年來於中日和平運動，頗著功績；一九四〇年以少將任我國國府軍事顧問。氏性情圓到，與人融洽無間。前於陸大畢業後，復派入東京帝國大學經濟學部肄業，並游學歐美，研究廣義國防，故對各種經濟問題及社會問題，均頗有研究。

澄田暎四郎 (Sumida, Raishiro)

陸軍少將，一八九二年生，羣馬縣人。

士官學校第二十四期砲兵科及陸軍大學一九二二年軍刀組畢業後，又留法國陸軍大學三年。歸國後，歷任軍務局科員、陸軍大學教官、參謀本部科員、軍令部參謀、任駐法大使館武官、駐比大使館武官、參謀本部科長、野戰重砲兵聯隊長、及砲兵旅團長，至一九三九年三月任陸軍重砲兵學校校長，一九四〇年十月繼西原一節後，任駐裁運華貨物監視委員長，於日越關係改善，頗著勞績。

潮惠之輔 (Ushio, Keinosuke)

樞密院顧問，一八七九年生，島根縣人。

一九〇七年東京帝國大學法科畢業，經高等文官考試合格，即入內務省，歷任事務官、書記官、參事官、衛生局長、地方局長等職；迨一九二八年五月田中內閣時代，升任內務次官，一九三二年勅選為貴族院議員，一九三三年五月齋藤內閣成立後，復出任內務次官，一九三四年七月辭職。一九三六年廣田弘毅組閣，遷任內務大臣，並一度兼任文部大臣，後隨廣田辭職。氏任職內務省，前後達三十年，除一度出任長野縣事務官外，餘均居中樞，故於省內一切政務，纖細備知。平居好學不倦，熟諳典章制度，一九二八之普選法案，即由氏所起草。近年除樞密院顧問外，兼任國民體力審議會委員、及日本小兒保健研究會會長等職。

熊谷憲一 (Kumagai, Kenichi)

翼贊會總務局長，一八九五年生，福岡縣人。

一九二〇年東京帝大德文法科畢業，經高等文官考試及第一，即入農務省。後由內務省社會局事務官書記官，於一九三六年升任官房庶務科長，一九三八年厚生省成立，任職業部長，翌年九月轉岡山縣知事，不久任內閣情報局長，一九四〇年八月復入厚生省任社會局長，一九四一年四月任翼贊會總務局長。氏研究社會問題及勞動政策，達二十年，近年公布之健康保險法、及退職公積金法案，大抵由氏起草，為廣瀬久忠之心腹，將來當有升任次官之希望。

樋口香一郎 (Higuchi, Kichiro)

陸軍中將，一八八八年生，岐阜縣人。

士官學校第二十一期步兵科及陸軍大學畢業。櫻會發起人。歷任參謀本部部員、陸大兵學教官、駐蘇大使館武官、駐海參崴特務機關長、東京警備司令部參謀、第三師團參謀長、參謀本部第二部長等職。一九三九年冬任第九師團長。

樋口詮三 (Higasi, Senzo)

保險院長官。一八八九年生，山梨縣人。

一九一三年中央大學法科畢業後，復入京都帝大英文法科，一九一八年以優秀成績畢業（其畢業分數，為該校創立以來最多之一人），即入逕信省，後以金森德太郎之選，晉入內閣法制局，積資升至該局第二部長。此外並會兼任內閣恩給局書記官、行政裁判所評定官等職。平沼內閣成立後，有任內閣法制局長官之說。氏在法制局二十餘年，對於檔案之熟悉，稱為內閣中第一人。一九四〇年轉入厚生省，繼進藤誠一之後，任現職。

稻田昌植 (Inada, Masane)

貴族院議員，一八九〇年生，東京府人。

有馬賴常伯爵之妹婿，男爵，東北帝大農科及東京帝大法科畢業。一九二五年當選為貴族院議員，屬公正會。一九三六年廣田內閣時，曾任拓務省次官。一九三九年曾於議會提出設立國策蠶絲會社法案，現任全國蠶絲聯合會會長，生

平研究農村經濟，著有農民農村之研究一書。

稻垣征夫 (Inagaki, Yukio)

滿洲興農部次長，一八九七年生，長野縣人。

一九二一年東京帝大法科畢業，經高等文官考試及第，即入農商務省。由特許局科員，登錄科科長，拓務省殖產局科長，至一九三二年任朝鮮總督府事務官。一九三八年任關東廳事務官，是年轉任滿洲拓務委員會事務局長，一九四〇年七月任滿洲興農部開拓局長，最近繼結城清太郎之後，升任現職。

緒方竹虎 (Ogata, Takeora)

東京朝日新聞社董事代表，一八八八年生，福

岡縣人。

祖為漢學家，父任某銀行經理。氏與大西齋，同期畢業於早稻田大學政治經濟科。經中野正剛（較緒方早一期畢業早大）之介，入東京朝日新聞社。一九二〇年派任英國探訪員，并入倫敦大學肄業。歸後升任通信部整理部長。京濱大地震時，任政治部長，嗣先後任編輯委員、及編輯局長，一九三八年升為主筆，一九四〇年五月兼為董事代表，十月又兼任大政翼贊會理事。氏為日本新聞界有力份子，政治見解，能隨時代進化，五一五事變後，尙微帶自由主義色彩，及五一二六事變發生，乃進而贊同革新理論矣。

蓮沼 蕃 (Hasunuma, Shigeru)

陸軍大將，一八八二年生，石川縣人。

士官學校第十五期騎兵科及陸軍大學一九一一年畢業。歷任第十一師團副官、參謀本部員、騎兵學校及陸軍大學校教官、駐德及駐英大使館武官、（第一次歐戰發生時，奉派駐德，後調駐英國觀戰）騎兵第九聯隊長、東宮武官、騎兵學校教育長、騎兵第三旅團長、騎兵監等職，至一九三六年任第九師團長。中日戰事發生後，即以師團長在華北指揮戰事。歸後任中部防衛司令官，一九三九年九月繼畑俊六大將後，任侍從武官府武官長，翌年十二月晉級大將，仍任原職。士官十五期之現役大將，僅梅津美治郎與氏二人而已。

駒井德三 (Komai, Tokuzo)

前滿洲國務院總務長官，一八八六年生，滋賀

縣人。

明治大學法科畢業後，復入北海道帝大農科，其畢業論文，題為「滿洲大豆」。出校後，即入南滿鐵道會社，服務於該社地方部，達十三年之久，對於中國各地產業資源，調查至為明晰。一九二〇年芳澤謙吉任外務省亞細亞局長時代，邀入外部。九、一八事變後，任滿洲尙書府祕書長及國務院總務長官，一九三四年辭職歸國，於兵庫縣之良元村實塚南口，設立「康德學院」，自任院長，著有大滿洲國一書。

十六畫

澤田 茂 (Sawada, Shigeru)

陸軍中將，一八八七年生，高知縣人。

士官學校第十八期憲兵科及陸軍大學畢業。歷任海參崴派遣軍司令部附、駐哈爾濱武官、駐希臘波蘭羅馬尼亞等使館武官、近衛師團參謀長、野戰重砲兵隊隊長旅團長、及駐北滿師團團長，一九三九年九月以中將任參謀次長。一九四〇年十二月，繼藤田進後，任華中陸軍最高指揮官。

澤田 廉三 (Sawada, Renzo)

前駐法大使，一八九〇年生，鳥取縣人。

澤田節藏之弟。一九二三年東京帝國大學法科政治學系畢業，即合格外交部領事官考試。曾任駐法大使館三等秘書、外務省電信科長、駐英大使館參事、及紐約總領事，一九三六年五月調回本省，秋季派任駐滿大使館參事。嘗言「日本必須保有蒙古、新疆之路線，然後可以不戰而屈服蘇俄。」一九三八年三月，由寺內壽一擢為臨時政府外交顧問兼華北派遣軍外交代表，十月任外務省次官，一九三九年升任駐法大使，一九四一年辭歸。氏深通英法兩國語言，英語之流暢，在日本外交界中，僅次於齋藤博，并擅長交際。妻美喜子，為三菱財閥岩崎久彌之幼女，與前外務大臣幣原喜重郎為襟兄弟。美喜子係基督教徒，曾以五十萬圓隨嫁云。

澤田節藏 (Sawada, Setarō)

前駐巴西大使，一八八五年生，鳥取縣人。

澤田廉三之兄。一九〇九年畢業東京帝國大學法科政治學系。歷任外務省事務官，駐法大使館三等秘書，大臣官房電報科長、文書科長、兼翻譯科長，駐美大使館參事官，紐約總領事，及國際事務局局長等職；至一九三〇年升任駐瑞士全權公使。一九三三年充任日印會議首席代表，一九三四年任駐巴西大使，一九三八年十一月辭歸。任內努力於移民問題之交涉，處處穩健，態度大方，世多稱其有英國紳士風度。妹雲子，嫁平生飢三郎為長媳，弟廉三與退藏，均係三菱財閥姻婭。

澤本賴雄 (Sawanoto, Yorio)

海軍中將，一八八七年生，山口縣人。

一九〇八年海軍兵學校畢業。曾任五十鈴副艦長、天龍高雄日向等艦艦長、駐英使館武官、軍務局第一科長、海軍大學教育長及校長、第七戰隊司令官、艦政本部總務部長，至一九三八年十一月晉級中將。一九四〇年三月任練習艦隊司令官，會率八雲磐手等艦，赴爪哇演習。是年十一月任華南海軍最高指揮官，一九四一年四月調任海軍次官。

梶 孝三郎 (Tachibana, Kosaburo)

前愛鄉塾塾長，一八九三年生，茨城縣人。

會肄業第一高等學校，因病輟學回鄉。後率其兄弟輩五家三十餘人，於水戶市新原町建設兄弟村，經營農場；至一九三〇年竟成模範村，受縣當局之表彰，並獲得補助，於是農村附近青年，從者日衆。是年歲暮，得當時內閣書記官長武見章之援助，成立「自覺之農村勸勞學校愛鄉塾」，即普通稱謂「愛鄉塾」者是。崇奉三位一體之精神主義，三位者即大地主義、兄弟主義、勤勞主義。學生分爲少年部、青年部。經二三月畢業後，即各歸本鄉指導，該塾原爲一種烏托邦之組織，然氏因痛感農村之疲弊，政黨之腐敗，遂與國家主義者發生關係。一九三二年之五一五事件，氏與一部分學生（即農民革命隊），担任襲擊電器廠之任務，事敗亡命滿洲，後歸國自首，判處無期徒刑，旋因大赦，減輕爲十五年有期徒刑。著有農村學、日本愛國革新主義、皇道國家與本建國論、農業本質論等書。愛鄉塾現尚存在，塾長（日稱塾頭）由橋鐵太郎担任。

橋 橫 (Tachibana, Boku)

評論家

東京拓殖大學畢業。原爲革新團體行地社社員，民國初元即來中國，與笠木良明、野田蘭藏諸人，組織滿洲青年聯盟，後受知於近衛，任昭和塾理事。氏研究滿洲問題，垂三十年，深悉該地社會情形，著有中國社會之研究、中國思想之研究等書。日人譽爲滿洲之長谷川如是閉。

橫山助成 (Yokoyama, Sukenari)

前東北興業會社總裁，一八八四年生，秋田縣人。一九〇九年東京帝國大學法政科政治系畢業，經高等文官考試合格，歷任大分縣警察部長、內務省土木局書記官、石川廣島各縣知事、內務省警保局長、及京都府東京府知事，至一九三七年河原田稼吉任內長時，本擬擢爲內務次官，氏遂從原英太郎自代，而就任警視總監，八月辭職，三人皆爲前內相水野鏗太郎系人物，其中尤以氏係水野同鄉，處事圓到，水野無不肯聽計從，因有「建策居士」之別號。一九三八年十一月八日嘉明出廣拓相後，氏以出身東北關係，邀任東北興業會社總裁，一九四〇年辭職。

橫山 顯明 (Yokoyama, Shunaki)

陸軍少將，一八八八年生，福岡縣人。士官學校第二十三期步兵科及陸軍大學一九一九年畢業，歷任第四師團參謀、陸軍省整備局科員、第十師團司令部附、久留米聯隊長等職，至一九三八年晉級少將，一九四一年三月任廣島聯隊區司令官。

橫尾惣三郎 (Yokoi, Sosaburo)

農民講道館館長，一八九一年生，長野縣人。東京高等師範英語科畢業後，任芝區南海小學校教師，兼山川健次郎之家庭教師，後及第高等文官考試，任愛知縣農務科長。一九三〇年派赴丹麥研究農業問題，以濱口內閣

採取緊縮政策，不久即回國。大養內閣時，任香川埼玉等縣內務部長，齋藤內閣時主書樞密院，主張移民南洋，以復興農村，近年担任現職。

橋爪明男 (Hashizume, Haruo)

東京帝大教授，一八九九年生，三重縣人。

一九二三年東京帝大經濟學部畢業，即任母校助教，一九二八年派赴英德諸國留學，一九三四年升任教授。氏在學生時代，即加入上杉慎吉主持之七生社，後被選為國策研究會及新經濟政策研究會會員，對於幣制管理問題，頗有精深研究。

橋本欣五郎 (Hashimoto, Kingoro)

大日本赤忱會領袖，一八九一年生，福岡縣人。

士官學校第二十一期砲兵科及陸軍大學畢業。歷任陸軍省軍務局科員、駐土耳其武官、駐俄大使館副武官、哈爾濱特務機關長、參謀本部俄國班長、關東軍司令部附、野戰重砲兵第二聯隊長、姫路師團司令部附(林銑十郎任陸相時左遷此職)等職，一九三一年時，參加十月事件。一九三六年三月，寺內壽一任陸相後，編入預備役，乃組織大日本青年黨，自任黨首，並發表皇道政治皇道經濟等主張。會謂：「前線率運生命，後方應奉還經濟」，所謂率運者，以之貢獻於國家之意。一九四〇年倡行新體制時，該黨改組為思想團體，取名大日本赤忱會，仍任領袖。氏親著文苑，在軍界二

十餘年，屢有獨特之行動，同輩多呼為橋欣(Hashin)。。

橋本虎之助 (Hashimoto, Toranosuke)

滿洲祭祀府總裁兼參議府副議長，一八八六年生，石川縣人。

士官學校第十四期騎兵科及陸軍大學一九〇二年畢業，歷任駐蘇大使館武官、騎兵第二十五聯隊長、參謀本部俄國班班長等職。九、一八事變發生時，適任關東軍憲兵司令官，遂一躍成名，而為軍部之中心人物。不久調任參謀本部第一部長。一九三五年八月由其同鄉統治派領袖林銑十郎推舉，擢升近衛師團長。二二六事變後，因責任關係辭職，是年七月以中將編入預備役。一九三七年八月，入滿洲任參議府副議長兼協和會中央本部長，一九四〇年七月新設祭祀府，奉祀天照大神，由氏兼任該府第一任總裁。

橋本清吉 (Hashimoto, Kyokichi)

前內務省警保局長，一八九八年生，三重縣人。

一九二二年東京帝大法科畢業，經高等文官考試及第，即入內務省。初任大阪府及兵庫縣警視，二二六事變時，適任靜岡縣警察部長，馳赴興津護衛西園寺公室，因此著名。一九三八年安藤狂四郎任警保局長時，邀任團警科長，一九三八年秋，出任福島縣知事，一九四〇年平沼獻一郎上台後，升任警保局長，東條內閣成立後辭職。

橋本 羣 (Hashimoto, Gun)

陸軍中將，一八八七年生，廣島縣人。

士官學校第二十期砲兵科及陸軍大學第一名畢業，歷任陸軍省軍務科員、陸軍通訊學校研究部主事、軍需審議會委員、近衛師團隊長、及壕海要塞司令官等職。迨林銑十郎任陸相時，調任軍務局軍事科長，最為局長永田鐵山所器重。一九三六年八月升任天津駐屯軍參謀長。在宇垣陸相時代，革命草擬裁減二師團案，因此不逞其志者多年。一九三九年五月繼石原莞爾後，調任參謀本部作戰部部長，傳為陸軍中有數之戰術家。

橋田邦彦 (Hashida, Kunikiko)

文部大臣，一八八一年生，鳥取縣人。

東京帝大醫科畢業，即任大學助教，嗣又留學歐洲四年，回國後，任東京帝大副教授，至一九二二年曾任教授，翌年任第一高等學校校長。一九四〇年第二次近衛內閣成立，擢任文部大臣，第三次近衛內閣及現內閣，均留任。

巽津良郎 (Okitsu, Yoshio)

前石家莊領事，一八八七年生，東京府人。

十九歲時來華，與滄橫川(日俄戰爭時，喬裝蒙古人炸燬中東鐵路，被捕就義。)兩人同期畢業於北京之東文學舍。日俄戰爭時，在遼西一帶擔任特務，後入保定軍官學校，並於前清宣統末年，畢業中國陸軍學校。一九二一年入外務省，不時往來漢口、瀋陽等地。一九三八年前後，曾任石家

莊領事。

磯谷廉介 (Isogai, Rensuke)

陸軍中將，一八八三年生，兵庫縣人。

亦寫作磯貝廉介，士官學校第十六期步兵科及陸軍大學畢業。二十二歲時，以少尉參加日俄戰役。嗣後歷任參謀本部中國班班員、步兵第十三聯隊大隊長、步兵第七聯隊長、駐廣東武官、陸軍省人事局科長、教育總監部第二科科長、第一師團參謀長，至一九三三年以少將升參謀本部第二部長，一九三五年三月任駐華大使館武官。二、二六事變後，寺內壽一任陸相，擢為軍務局長，遂一躍而為一中心人物。一九三七年三月升任姫路第十師團長，至東條氏就任陸軍次官後，繼任關東軍參謀長，一九四〇年春辭職，一九四一年十二月下旬，香港為日軍佔領，擢任該地第一任總督。氏與板垣征四郎、土肥原賢二同稱為第十六期中中國通之三傑。

篠原英太郎 (Shinohara, Eitaro)

前內務次官，一八八五年生，長野縣人。

一九一一年東京帝大德文法學系畢業，經高等文官考試及格，即供職山梨縣署。後歷任長崎縣警視、大阪府理事官、朝鮮總督府事務官、內務省文書科長及會計科長、山形縣知事、文部省普通學務局長、岡山縣知事、及愛知縣知事，迨一九三七年二月林內閣成立，擢任內務次官，後隨林內閣辭職。在內務省官僚系統上，與河原田稼吉，橫山助成，同

爲水野鍊太郎系之健將。

篠原陸郎 (Shinohara, Rikuro)

衆議院議員，一八八三年生，千壽縣人。

一九〇九年東京帝大德文法學系畢業，經高等文官考試及格，任職司法界，後入大藏省。歷任稅務監督局、事務官，札幌、丸根、大阪各稅務監督局直接稅部長，大藏省主計官、警備官，長崎稅務局長，大藏省理財局國債科長，及熊本稅務監督局局長。至一九三〇年辭去官職。其後屢次當選爲衆議員，前隸民政黨籍。氏以供職度支甚久，且職務多關於稅務方面，故在前民政黨中，關於租稅之實際智識，除勝止憲外，殆亦爲可數之人物。

篠家義男 (Shinozuka, Yoshio)

陸軍中將，一八八五年，東京府人。

士官學校第十七期步兵科及陸軍大學畢業。曾任陸軍省軍務局科員，駐奧地利公使館武官，近衛步兵第三聯隊附，參謀本部科長，步兵第一聯隊長，步兵學校教育長，陸軍兵器本廠附，近衛步兵第一旅團長，至一九三六年晉級中將。一九三七年春，繼山田乙三後，任士官學校校長，翌年調升師團長，一九四一年六月任軍事參議官，同時復繼土肥原之後，兼任士官學校校長，最近辭去校長兼職。

膳 桂之助 (Zen, Keinosuke)

日本工業俱樂部理事，一八八七年生，羣馬縣人。

一九一四年東京帝大德文法學系畢業。歷任製鐵所參事、農商務書記官、及農林書記官等，後脫離政界，於一九二三年以團琢磨之介，任日本工業俱樂部主事，折衝於勞資兩方，一九三一年升任理事。此外更兼任全國產業團體聯合會常務理事及日本團體生命保險會社等理事及監事。會於一九一六年及二七年兩次派赴歐美，一九三七年以資方代表，出席日內瓦舉行之第二十三屆國際勞動會議。

賴母木桂吉 (Tanimogi, Keikichi)

前遞信大臣，一八六七年生，大阪府人。

原姓富田，因入嗣賴母木源七家，故改今姓。早歲畢業高等中學校，曾任東京市會議員，報知新聞營業部長，每日新聞社長，早稻田大學講師，及筑豐炭礦日本打字機等各公司董事等職，於一九一三年入民政黨。自一九一五年以來，連續當選爲衆議員。一九二五加藤（高明）內閣時，任安達謙藏內相之政務次長；二人後因總裁問題，意見相左。廣田內閣時，代表民政黨任遞信大臣，力主電力國營，致一時與全國電氣公司，形成莫大之對峙。一九三九年春被選爲東京市長，一九四〇年辭職。

頭山 滿 (Toyama, Mitsuru)

在野名流，一八五五年生，靜岡縣人。

氏爲日本在野之有力份子，日本國家主義運動之鼻祖，名滿三島，婦孺皆知，人多以頭山翁稱之。早歲於其故鄉福

岡，糾合同志組織支洋社，以修習知識、鍛鍊身體爲宗旨，期能有事之秋，獻身國家。在其門下，人才輩出。當甲午、日俄兩戰役時，活動甚力。後在東京創立浪人會，此爲支洋社社員中，非福岡出身者所結合之團體，由氏總理其事。氏體軀魁偉，性情慷慨，嘗囑其在北海道之煤礦，得款八十萬圓，除一部分清理債務，餘悉分與左右親近之人。其在今日所以集有多數門徒，而得爲各方崇敬之在野名流者，蓋職此故。一九二四年嘗奉旨入宮，特賜御前侍宴，以一布衣，獲此恩寵，談者每謂開未有之先例。氏與我國父及革命先進，頗多往還，時來我國。間亦於報章雜誌，發表論著。

館 哲二 (Tase, Fozuji)

前內務次官，一八八九年生，富山縣人。

原姓木津，後入贅館宅，改今姓。東京帝大法科政治學系畢業後，又及第高等文官考試。歷任香川、兵庫、廣島等縣警視，內閣書記官，法制局參事官，鳥取石川兩縣知事，及內務省神社局長等職；至一九三七年二月升東京府知事。兩年六月末次信正就任內相後，以水野鍊太郎及潮惠之輔之

介，擢爲內務次官，一九三九年辭職。

龜井貫一郎 (Kamei, Kanichiro)

衆議院議員，一八九三年生，神奈川縣人。

一九一七年東京帝國大學法科政治學系畢業，即留學美國福達姆大學，歸國後，考取外交官領事官考試，入外務省供職。曾任天津紐約領事及外務省事務官。一九二四年辭去官職，改任電報通信社（即前之電通社，現併入同盟社）記者暨慶應大學講師，自是遂參加社會運動。一九二五年任勞動總同盟所主辦之三田勞動學校講師，努力於勞動方面之教育。一九二六年加入社會民衆黨，後轉社會大衆黨任中央執行委員。一九二八年以來，屢由福岡區選爲衆議員。氏不惟富於政治經濟智識，對於數理、化學、攝影、開汽車及家具設計等項，無所不能，衣冠楚楚，彷彿摩登公子。近年頗主張企業政治，岡田內閣時，內閣調查局之設置，即由氏與永田鐵山、吉田茂、瀧正雄、風見章等所提議。後更從事新體制運動，翼贊會成立，任東亞部長，一九四一年辭職。現除議席外，兼任國民體力審議會委員。

霜山精一 (Shimoyama, Seichi)

東京控訴院長，一八八四年生，岡山縣人。

氏為橫田秀雄之婿，一九一〇年東京帝大德文法學系畢業，翌年及第司法官考試。歷任東京區裁判所推事、司法省參事官、大審院推事、札幌廣島等控訴院院長，至一九三八年升大審院民事部長，一九三九年繼水村尚達後任現職，以親任待遇。

齋藤長衛 (Saito, Ryoe)

法學博士，一八八〇年生，廣島縣人。

一九〇八年東京帝大法科政治學系畢業，即入外務省。歷任天津、漢口、福州、哇太華等地領事，駐美使館二等祕書，駐華使館二等祕書，外務省通商局第一科科長及局長等職，一九二七年任南滿鐵道公司理事。九一八後，兼任關東軍經濟顧問，一九三六年春會傳將出任駐華大使。一九四〇年秋，松岡任外相後，選任外務省顧問，未幾辭退。氏一生曾三次被人襲擊，第一次在蒙古，第二次在福州，第三次在通商局科長任內。以中國國際私法論一文，得法學博士。

齋藤吉次 (Saito, Gochi)

外務省南洋局局長，一八九五年生，大阪府人。

一九二〇年東京帝大法科政治學系畢業，經外交官領事

官考試及第，即入外務省。歷任埃及副領事、天津領事、外務省文書科科員，土耳其使館埃及使館二等祕書、捷克斯拉夫領事、巴達維亞總領事。(會輔佐小林特使，與荷印談判經濟)、及駐泰大使館參事官。氏熟悉南洋情形，素受知於白鳥敏夫及松宮順，一九四〇年十月擢膺第一任南洋局長。

齋藤茂一郎 (Saito, Moichiro)

朝鮮銀行天津支店經理，一八八一年生，茨城縣人。

慶應大學理財科畢業後，即入三井物產會社。一九〇九年創辦南昌洋行，自任大連分行支店長，不久升任社長。此外並會兼本棉花會社經理、東洋石炭會社董事長、及天津商工會議所所長等職。現任朝鮮銀行天津支店兼天津旭街辦事處之經理，滿洲製糖會社董事、日滿製鋁會社及大和染料會社監事。朝鮮銀行券之得流通華北，關係出於氏所建議。積資甚鉅，與前法相風見章為同鄉好友，曾以寬隙之住宅，讓諸風見氏云。

齋藤隆夫 (Saito, Takao)

前衆議院議員，一八七二年生，兵庫縣人。

一八九四年畢業早稻田大學前身之東京專門學校行政科，旋留學美國耶魯大學，得碩士學位，歸國後初業律師。一九一二年以來，九次當選為衆議員，隸前民政黨。曾出席黨

國議會同盟會議及國際商業會議，並任法制局長及內務次官（一九二九年濱口內閣及一九三二年齋藤內閣時）。一九四〇年在七十五屆議會作反對國策之演說，致被開除議席。生平對於憲法，尤其關於選舉法，有獨特之研究。著有帝國憲法論、比較國會議論、憲法及政治論集、夢想之政治制度論等書。

齋藤 樹 (Saito, Tsuneki)

台灣總督府總務長官，一八八八年生，千葉縣人。氏為政友會巨頭前法相小川平吉之婿。一九一七年東京帝大法科畢業，即入內務省。初任東京府科員、宮崎羣馬等縣警察部長、內務省警保局警務科長，一九三一年後出任奈良埼玉靜岡等縣知事。林內閣時代，任警視總監，一九三八

年十二月任海軍囑託，留駐上海，致力中日和平運動，並創設東亞研究所，自任常務理事；一九四一年十一月，應長谷川清之邀，任現職。

齋藤 彌平太 (Saito, Yanehira)

陸軍中將，一八八五年生，香川縣人。

士官學校第十九期步兵科及陸軍大學畢業。歷任參謀本部部員、駐德武官、陸軍大學兵學教官、關東軍高級參謀（九一八事變前後）、陸軍省統制科長、步兵第六聯隊長、步兵第二十八旅團長等職。至一九三八年秋，升任第一師團長，一九四〇年以中將任兵器本部長，以迄於今。前在陸軍大學畢業後，曾派赴德國陸軍大學，研究資源及動員計劃問題。

濱田吉治郎 (Hamada, Kichijiro)

海軍中將，一八八四年生，愛媛縣人。

海軍兵學校畢業。歷任東鄉元帥副官、海軍省人事局第二科科長、木會長門等艦艦長、海軍大學教官、橫須賀鎮守府參謀長、第七戰隊司令官、旅順要港部司令官、及駐滿海軍武官等職，一九三五年晉級中將，一九三七年編入預備役。後任台灣殖產會社顧問，以研究戰史馳名。

濱本喜三郎 (Hamamoto, Kisaburo)

陸軍中將，一八八四年生，京都府人。

士官學校第十八期步兵科及陸軍大學畢業。曾任陸軍省人事局科員、大隊長、聯隊長、師團參謀長、步兵十八旅團長、熊本教導學校校長等職，至一九三八年升任師團長駐滿，一九三九年參加兩粵戰役，一九四〇年十一月任日本本土北部軍管區司令官。

織田信恒 (Oda, Nobutsune)

貴族院議員，一八八九年生，東京府人。

舊羽前國天皇藩主織田信敏之養子，襲受子爵。一九一五年東京帝大法科政治學系畢業，即入日本銀行，不久漫遊中國及歐洲各地，視察商工業，歸後任東京朝日新聞社員，一九二六年任鐵道大臣井上匡四郎祕書，後當選為貴族院議

員。在貴族院內，與酒井忠正等，同為研究會之新進人物。一九二九年任外務省參與官，一九三〇年任農林省政務次官，兩年辭職。此外又任磯安販賣會社董事長，及其他會社社長。

豐田利三郎 (Toyoda, Risaburo)

大實業家，一八八四年生，滋賀縣人。

原姓兒玉，入贅豐田佐吉家，故改姓。佐吉係靜岡縣之木工，以發明豐田式織機得專利權，一躍而馳名世界，成為巨富。氏於一九一〇年畢業東京高等商業學校，即入東洋棉花株式會社，一九一八年繼父任豐田紡織廠、豐田紡織會社、中央紡織會社、及庄內人造絲會社諸社長，豐田自動紡織機械製作所所長，中央毛絲紡織、綾羽織機、德山曹達、名古屋觀光放社、不二越鋼材工業、吳羽紡績、共同信託諸會社董事，及昭和人造絲、東邦電力、福壽生命保險諸會社監事，此外復任名古屋商工會議所副所長，及中部產業聯盟委員長，為名古屋財閥領袖及軍需工業家之一。

豐田貞次郎 (Toyoda, Teijiro)

海軍大將，一八八五年生，和歌山縣人。

一九〇六年海軍兵學校畢業，後又畢業海軍大學校。曾任第一艦隊參謀、駐英使館武官、雲裳日向艦艦長、日內瓦軍縮會議監員、橫須賀鎮守府參謀長、海軍省軍務局長局

長、艦政本部特派員、吳海軍工廠廠長、及艦政本部總務部長，至一九三六年升任佐世保鎮守府長官，一九三八年十一月調充海軍航空本部長，一九四〇年任海軍次官，翌年四月於第二次近衛內閣時代，繼小林一三後任商工大臣，同時晉級大將，編入預備役。一九四一年七月第三次近衛內閣成立，調任外務大臣兼拓務大臣，是年七月辭退。

豐田副武 (Toyoda, Soetake)

海軍大將，一八八五年生，東京府人。

與豐田前外相同期海軍兵學校畢業後，又畢業海軍大學。歷任軍事參議官副官、橫須賀鎮守府附、軍務局料員兼艦政本部技術會議議員、軍令部出仕兼海軍大學兵學教育、球磨副艦長、由良艦長、軍令部英國班班長、聯合艦隊參謀長兼第一艦隊參謀長、海軍省教育局長、軍務長兼將官會議議員，至一九三五年晉級中將。中日事變發生後，升第二艦隊副司令官，偕加藤蔭隆襲襲擊金山衛，轉戰長江上下游。一九三九年調任艦政本部長，一九四一年又升大將，任吳鎮守府司令官。前曾派駐英德兩國，賦性豪直，博覽強記，明於數學，通曉軍令軍政，傳係海軍中排英之最激烈分子。

豐保福次 (Toyoyasu, Fukuji)

前翼贊會監察部長，一九〇一年生，福岡縣人。

日本大學社會科畢業。曾任產業組合中央會主事、秘書、及科長，第一次近衛內閣時，任農林大臣有馬賴壽隨從秘書，

後以有馬之汲引，任國策會社之肥料會社理事，一九四〇年有馬任大政翼贊會總務局長後，就該局監察部長，一九四一年辭職。

豐島房太郎 (Toyoshima, Fusataro)

陸軍少將，一八八九年生，山口縣人。

士官學校第二十一期步兵科畢業。後又與本多政村、鈴木貞一、鈴木率道等，同期畢業陸軍大學。曾任朝鮮軍司令部參謀、關東軍憲兵隊附等職。一九三七年晉級少將，翌年參加徐州會戰，後調為曹州警備司令，一九三九年五月在豫省作戰受傷，不久調為憲兵司令部總務部長，一九四〇年十月繼平林盛一中將後，任東京憲兵司令官。

豐島愛明 (Toyoshima, Aikari)

大上海瓦斯會社社長，一八七八年生，佐賀縣人。

早歲會入川上操主辦之札幌(露支)學校，思赴俄偵探軍情，以家庭不容，乃轉考早稻大學文科，畢業後，就職東虜瓦斯會社，於晚間通學築地工科學校，習應用化學。一九一五年會來中國，圖在北平天津青島烟台等處，經營自來火公司未成。歸後陸續在橫濱、門司、若松、戶籍等處設立瓦斯會社十二所，遂成巨富，而被農商務省聘為囑託，起草瓦斯法案。一九三八年奉派來華計劃經營瓦斯事業。現除大上海瓦斯會社社長，及日本瓦斯協會理事長外，並兼任廣島、釧路、鹿兒島、宮崎、米崎、舞鶴、奈良、靜岡、沼津等各瓦斯會社顧問。

十九畫

寶菜市松 (Horai, Ichimatsu)

前日本興業銀行總裁，一八八一年生，大阪府人。一九〇七年東京帝大法科政治學系畢業，即入住友銀行，以精勵恪勤，見知於立志鐵次郎。一九一三年立志由住友轉任興業銀行總裁，選任興業會計科副科長，翌年派赴英美實習銀行信託業務，一九一六年歸國。後經鑑定科長及放款科長，於一九二四年升理事。一九二七年金融恐慌後，任大阪分行長，時結城豐太郎任安田銀行副社長，激賞氏之手腕，選氏轉入安田以爲己助，未果。一九三〇年結城升爲興業總裁，當時日本產業界，因受井上（準之助）緊縮政策關係，金融窘緊，無從告貸，結城獨不顧一切，處處予商家以融通之便利，世恆以此多之；而贊助結城者，即係氏也。一九三五年升任該行副總裁，一九三七年二月結城任職相後，乃繼任總裁，一九四一年春辭職。

櫛淵道一 (Kushibuchi, Senichi)

陸軍少將，一八九〇年生，東京府人。

士官學校第二十四期騎兵科及陸軍大學畢業，歷任陸軍省軍務局科員、駐英美使館武官、陸相南次郎隨從祕書、賀陽宮武官（會隨赴歐美各國考察）、騎兵第二聯隊長、及陸軍省高級副官，至一九四〇年二月任馬政局次長，一九四一年三月升任軍馬補充部本部長。

藤山愛一郎 (Fujiyama, Aichiro)

東京商工會議所會長，一八八七年生，佐賀縣人。故貴族院議員糖業巨頭藤山雷太之長子，前大藏大臣結城豐太郎之婿。一九一八年慶應大學理財科畢業，一九二三年留學英國，回國後，即繼承父業，入糖業界服務。現除任大日本製糖會社社長外，並担任糖業聯合會會長，東京證券交易所理事，日華生命保險，共同信託，千代田信託，朝鮮農事等各會社董事。一九三七年春會偕兒玉謙次率領之遺產經濟團，來我國考察。一九四〇年當選爲東京商工會議所（即商會）會長。氏爲日本少壯實業家之領袖人物，嘗謂「日本現在之狀態，不論金融界與實業界，其支配者與指導者，一旦逝世，至第二代，輒流於退守無能，毫無發揚光大之雄心，其實權將落入掌櫃者手中，而形成無精彩狀態」。父歿後，以其遺產之三百萬，分贈於慶應大學、工業試驗所及傷兵保護院，故能爲人愛戴。

藤井啓之助 (Fuji, Keinosuke)

前駐捷克公使，一八八八年生，羣馬縣人。

一九一二年東京帝國大學法科政治學系畢業，翌年及第外交官領事官考試，即派爲新嘉坡總領事館候補領事，嗣後歷任外務省文書科科長、人事科科長、翻譯科科長、駐英大使館一等祕書、駐德及駐美大使館參事，至一九三五年五月

嗣任駐英大使館參事，一九三六年十二月升任駐捷克公使，一九三九年辭職歸國。

藤井崇治 (Fuji, Soji)

遞信省電氣廳長官，一八九四年生，廣島縣人。

由第三高等學校於一九二一年畢業京都帝國大學經濟學部，經高等文官考試及格，即入遞信省。一九三〇年派赴歐美考察，一九三二年歸國後，以奧村喜和男之介，擢為關東廳遞信局長。在任時創立滿洲電力公司，極力促成該地遞信行政之統一，遂深為軍部所器重。一九三五年調任遞信省電氣局監理局科長，與奧村二人，向遞相賴母木桂吉，建議電力國營案，於是遂一躍而為新官僚中之最前進者。一九三七年轉任企畫廳調查官，一九三九年春電氣廳設立，任該廳第一部長，一九四一年繼田村謙治郎後，升任該廳長官。

藤田尚德 (Fujiita, Hisanori)

海軍大將，一八八〇年生，青森縣人。

一九〇二年及一九一二年先後畢業海軍學校與海軍大學，一九一五年派赴英國留學。歸後歷任第五戰隊參謀、須磨巡洋艦長、霧島戰鬥艦長、海軍省人事局長、第三戰隊司令官、橫須賀海軍工廠長、海軍艦政本部長，至一九三二年於大角岑生海相之下，升任海軍次官，一九三四年調任吳鎮守府司令長官，一九三六年以大將調軍事參議官，一九三九年三月編入預備役。氏常勤豐富，善處事務，事母甚孝，有軍

人孝子之稱。

藤田利三郎 (Fujiita, Rissaburo)

海軍少將，一八九二年生。大阪府人。

一九一二年及一九二二年先後畢業海軍兵學校及海軍大學。歷任駐英使館副武官、軍令部參謀兼海軍教育、日內瓦軍縮會議全權代表隨員、及駐英使館武官，迨一九三七年任上海陸戰隊參謀長，參加八一三之戰役。一九三八年任樺名艦長，一九三九年任聯習艦隊參謀長，一九四〇年十二月任駐華使館海軍武官。

藤田進 (Fujiita, Susumu)

陸軍中將，一八八四年生，石川縣人。

士官學校第十六期步兵科及陸軍大學校畢業。歷任駐智利公使館武官、步兵學校教官、鹿兒島聯隊大隊長、第五〇聯隊長、第十九師團參謀長、步兵第三十二旅團長、及兵器本廠附，一九三五—三六年時，駐紮滿洲，至一九三七年八月升任第三師團長，一九三九年任華中陸軍總指揮。一九四〇年十二月他調。

藤田榮介 (Fujiita, Eisuke)

前駐羅馬尼亞公使，一八八三年生，鹿兒島縣人。

一九〇八年東京帝大法科德文法學系畢業，翌年及第外交官領事官考試。歷任安東牛莊鐵嶺廈門諸地領事、駐西班牙公使館三等二等祕書、外務省情報部第一科科长、及廣州

濟南總領事，至一九三〇年調升駐羅馬尼亞公使，一九三六年十二月辭職。

藤江惠輔 (Fujiie, Keisuke)

陸軍中將，一八八六年生，兵庫縣人。

士官學校第十八期砲兵科及陸軍大學軍刀組畢業。歷任駐法大使館副武官、陸軍大學兵學教官、朝鮮京城帝國大學軍事教官、兵器本廠附、野戰重砲兵第二聯隊長、野戰砲兵學校幹事、日內瓦軍縮會議全權代表隨員、關東軍總務部長及憲兵司令官，至一九三八年五月晉級中將，並升第六師團長。一九三九年調參謀本部附，一九四一年四月任西部軍司令官。爲日本陸軍中富有常識之高級將校，性好交際，酒量甚宏。

藤沼庄平 (Fujinuma, Shōhei)

貴族院議員，一八八四年生，栃木縣人。

一九〇九年畢業東京帝大法科政治學系，經高等文官考試合格，歷任北海道廳事務官，奈良、京都、大阪各府縣警察部長，茨城縣知事。在京都警察部長任內，以檢舉大本致馳名。一九二四年清浦奎吾內閣時代，任警保局長，後轉新潟縣知事。一九二八年以栃木縣第二區政友系候選人，當選爲衆議員。一九三二年任東京府知事，同年五月轉齋藤實內閣之警視總監。一九三四年辭職，勅選爲貴族院議員，以迄於今。一九三六年，廣田內閣時代，擢爲內閣書記官長，後

隨廣田辭職。氏與前陸相寺內壽一爲摯友，與潮惠之輔、吉田茂同爲內務省中新官僚之有數人物。

藤原銀次郎 (Fujiwara, Ginjirō)

前商工大臣，一八六二年生，長野縣人。

一八九一年畢業慶應大學理財科，初獨力創刊松江日報，後入三井銀行，以整理三井工業部之富岡製紙所，頗具手腕，遂調入三井物產會社，升爲台北分社經理，並被舉爲該社木材部部长。一九一一年應王子製紙會社之聘，轉任常務董事，一九二〇年被舉爲總經理，以迄於今。近年除貴族院議員及全國產業聯合會委員長外，兼任王子製紙、共同洋製、雨龍電力、樺太電氣、九州水力、共榮企業、南樺鐵道、北海水電各會社總經理，三池實業、樺太鐵道各會社理事，日俄木材、台灣製紙、電氣化學工業、黑部川電力、梓川電力、中井商店各會社顧問。王子製紙會社以三井財閥爲背景，係於一九三二年合併舊王子製紙、樺太工業與富士製紙三大會社而成。年來日本新聞用紙，幾盡採用本國產品，而此本國產品百分之九十左右，則爲王子所製造，遂形成日本紙界之獨佔局面。氏於廠中事務，近已悉委副經理高島菊次郎處理，而已則以貴族院及全國產業聯合會爲舞臺，而從事政治活動。一九四〇年任米內內閣之商工大臣，後隨米內辭職。近年兼任國家總動員審議會委員。

藤野 惠 (Fujino, Megumu)

文部省教育局長，一八九四年生，廣島縣人。

一九一九年東京帝大法科畢業，即入內務省。由羣馬縣事務官、內務省社會局科員、國勞會議政府代表顧問、及香川縣知事，於一九三五年轉入文部省，先後担任實業教育局長及普通學務局長，一九三九年轉鹿兒島縣知事，一九四〇年八月復回文部省任現職。

藤澤親雄 (Fujisawa, Chikao)

評論家，一八九三年生，東京府人。

前貴族院議員數學家藤澤利三之子。由第一高等學校畢業東京帝大法文法學系，即入農商務省。後入南滿鐵道會社調查部，派赴美國哈佛大學研究殖民政策。在學時受知於前駐法大使澤田廉介，乃赴日內瓦大學研究外交問題。歸後任九州帝國大學外交史教授，專與左傾教授鬥爭。一九三八年任華北新民會顧問。生平專事鼓吹皇道思想，數赴德國。現除實業會東亞局部長、大東文化學院講師、國民精神文化研究所所員外，兼任報知新聞論說委員。

藤懸末松 (Fujitake, Suetatsu)

實業會東亞局連絡部長，一八八五年生，石川縣人。

士官學校第十八期步兵科畢業。歷任陸軍省新聞班班員、西伯利亞派遣軍參謀、近衛師團大隊長、名古屋聯隊司令官、及東部軍防衛司令部附等職。在大佐時代，編入豫備役

。後任至誠會(青年訓練會會名)會長，一九四一年四月任現職。

鮎川義介 (Ayukawa, Gintke)

新興軍需工業家之一，一八七九年生，山口縣人。

氏家世代為山口縣藩士，祿三百石，父彌八亦頗有名於時。氏於一九〇三年畢業東京帝國大學工科機械學系，後入芝浦製作所任職工，潛心於鑄物之研究。二年後，渡美入鋼管工廠實習，一九〇九年得久原房之助及井上侯爵之助，設立戶畑鑄物會社於九州，是為氏一生事業之起點。及歐戰發生，戶畑基礎日固，資本由設立當初之三十萬圓，增為一千五百萬圓，其後逐漸合併各小公司，成立日本產業會社(簡稱日產，為一種特殊公司，公稱資本共為二萬萬二千五百萬圓，其下子分公司十八，公稱資本五萬萬二千九十五萬圓，公司一百三十，公稱資本十一萬萬八千六百萬圓)。現除任日產總經理外，兼任日立電力及日產自動車會社經理，日立製作所、大阪鐵工所、日本炭礦、日本捕鯨、共同漁業等各會社董事長，中央火災、傷害保險及自動工業會社理事，共立企業、宇部窒素工業、戶畑鑄物各會社顧問。近年日產軍需工業發展之潮流，獲利倍蓰，氏遂一躍而登新興財閥之王座，被稱為「日本之商品王」。日產與石原廣一郎之石原礦業會社，頗有類似之點。第一，同為產業資本閥，有反金

融資本之傾向；第二，向以重工業，尤其以軍需工業為主體；第三，向注意於海外之發展，故與革新勢力，深相連結。一九三六年初，曾到唐山考察，一時盛傳將購買開滦煤礦公司。近年來，關東軍舉所有之新興事業，委氏一手經營，目下滿洲之特殊會社，由氏主持者，有重工業開發會社、滿洲自動車會社、及飛行機製造會社，因之遂與松岡洋右、岸信介，並稱為經營滿洲之三傑；三人名字均讀作 *Sano*，故亦

稱為 *Sano*。氏母為明治元勳井上馨侯爵之姪女，其姊為三菱財閥總帥木村久壽彌木之夫人，妹三人則嫁於前政友會正統派總裁久原房之助、貝島合名會社代表社員貝島太市、及日本證券保有會社社長近藤眞一，弟政輔、出嗣於大阪富家藤田小太郎，妻為百貨商店高島屋常務董事飯田藤二郎之女，姻婭盡為縉紳富有之家。

二十畫

瀧正雄 (Taki, Masao)

豐實會總務，一八八六年生，鹿兒島縣人。

東京帝大法科畢業，曾任京都帝大法學部政治學助教授，近衛文麿，即受業其門。一九一八年原敬內閣時，任內務大臣床次竹二郎之隨從秘書，時近衛以牧野伸顯內府之介，供職該省，即由氏任督導之責。床次之夫人，為近衛之弟水谷男爵之姑，瀧氏既追隨床次，故私人間，與近衛之關係，亦非常密切。氏自一九一九年以來，當選為眾議員，已達七次，初隸政友會籍，後隨床次脫黨。一九三二年齋藤內閣時，任外務省次官，不久辭職。與永田鐵山最稱莫逆，平素主張企畫政治，岡田內閣時，內閣調查局之官制，即由氏與永田兩人所共同起草。近衛任首相後，初任法制局長官，嗣內閣調查局擴大為企畫廳，出任第一屆總裁，不久調任現職。

櫻內幸雄 (Sakuranchi, Yukio)

前國務大臣，一八八〇年生，島根縣人。

父設豆腐肆於鄉間，幼時家境貧寒，曾以苦學生，就讀於早稻田大學政治經濟科，中途退學，任電報通信社及東京朝日新聞記者，後以雨宮敬次郎之介，得安田善次郎之助，創辦琴川電氣會社，遂由此兼事實業。一九二〇年以來，繼續當選為眾議院議員，初隸政友本黨，一九二七年憲政會與

政友本黨合併而成民政黨，舉為民政黨幹事長。一九三一年若槻禮次郎第二次組閣時，出任商工大臣，不久隨若槻辭職。平沼內閣時，代表民政黨任農林大臣，米內內閣時又被選為大藏大臣，一九四〇年七月辭職。氏在前民政黨中，其地位與島田俊雄之於政友會相似，二人均長於辯才，富有智慧，為黨中各派層，居間調停，聞其十餘年間為黨務而賺出之資金，達二百餘萬圓。於實業方面，又兼任出雲電氣鐵道會社社長等職。

權藤成卿 (Gondo, Seikyo)

制度學家，一八六八年生，福岡縣人。

氏自幼未嘗奉師就教，因累代為制度學者，乃繼續祖業，專事研究日本古代之習俗及制度。中年以後，以著述為業，據氏研究所得之結論，謂：「日本固有之本體，為『生民之自治』，即政治為自然之自治組織，經濟為農本之自治組織」。一九三一年與風見章、長野朗等，創立日本村治派同盟，一九三五年改為農本聯盟。氏初無赫赫名，而其門下，不乏革新分子。一九三二年五一五事件發生後，因與愛鄉塾頭橋孝三郎交往（一九三一年十月血盟團事件之僧侶井上日昭，亦曾投拜其門下），致被捕入獄，後未獲實據得釋，自是以後，遂一躍而聞名全國。著有自治民範、入鄰通聘考、

日本震災凶饑考、君民共治論等書，而自治民範一書，尤爲青年將校所愛讀。

蘆野 弘 (Ashino, Hiroshi)

外交官，一八九四年生，東京府人。

一九二〇年東京帝大法科畢業，經外交官領事官考試及格，歷任紐約總領事館主事、外務省通商局第一科科員、駐波蘭公使館及駐德大使館三等祕書、香港領事、駐華大使館情報部長，至一九三六年五月回省任通商局第一科長兼第二科長。是年十月，代表外務省供職內閣調查局（企畫廳之前身）。一九三八年春升外務省官房文書科科長兼翻譯科長。

蘆田 均 (Ashida, Hiroyoshi)

日本泰晤士報社長，一八八八年生，京都府人。

一九一二年外交官及領事官考試及第，翌年畢業東京帝國大學法科，即充俄國補外交官，派赴俄國服務。其後歷任駐俄駐法二國大使館三等二等祕書，外務省祕書、及駐土耳其大使館一等祕書參事，至一九三二年脫離外務省，同時當選爲衆議員，隸政友會之鳩山（一郎）系，翌年任英文日本泰晤士報（Japan Times）社長，兼任發明興業會社理事。若有世界大戰後之歐洲、海峽通航制度史、最近外交史等書。曾得法學博士學位，與清澤潤同號爲新式之自由主義者，並同兼報知新聞之論說委員。

蠟山政道 (Royama, Masamichi)

評論家，一八九五年生，羣馬縣人。

氏家世在羣馬縣前橋市業酷，一九二〇年畢業東京帝大法科政治學系，即留任助手，一九二二年升助教，派赴英法德諸國研究，一九二八年升爲教授，一九三四年又隨近衛文磨渡美。嗣後除任東大行政學教授外，即聘爲近衛之私人政治顧問，參與政治活動。氏對政治學之見解，謂：「政治雖可左右行政，而行政亦常影響政治，二者之關係雖甚密切，但各有其領域，尤其行政在技術上，具有獨立之性質。因而其組織上，自有與政治組織相異之處，而可單獨成一學科」。氏性情溫和，處世待人，異常慇懃。一九三九年平賀讓升東大校長後，氏隨河合榮治郎後，辭東大教職而任昭和塾之幹事。若有政治學之任務與對象、國際政治與國際行政、行政組織論、日滿關係之研究、日本政治動向論、現代之社會思想等書，并時在雜誌報章，發表時論。

關 桂三 (Seki, Keizo)

東洋紡織會社董事，一八八六年生，奈良縣人。

一九〇八年東京帝大德文法學系畢業，即入大阪紡織會社。後大阪紡織合併於三重紡織，改稱東洋紡織會社（簡稱東紡），被選爲專務董事，遂成爲東紡事實上之支配者。氏於購買棉花，富有特殊技術。一九三四年會借平生凱三郎，以經濟調節名義，考察巴西，欲利用該國之日本移民，大事植棉，以替代美棉，現又爲棉業統制委員會之中心人物。

二十一畫

鶴見祐輔 (Tsurumi, Yusuke)

衆議院議員，一八八六年生，岡山縣人。氏爲前滿鐵總裁後藤新平之婿。一九一〇年畢業於東京帝大法科政治學系，經高等文官考試合格，入鐵道省，歷任書記官、參事官等職。一九一九年派赴歐美各國，研究交通行政，歸國後，任該省運輸局總務科長，一九二四年辭職，是年美國制定限制日本移民法案，氏膺朝野之命，赴美游說。一九二七年出席爪哇舉行之泛太平洋會議；一九二八年以衆，當選爲衆議員，已達三次，隸前民政黨，曾任該黨青年部長。氏雖久居政界，然以著述家演說家聞名，文筆生動，富吸引力，爲一般青年所愛讀。著有南洋游記、歐美名士之

印象、英雄待望論、母親、膨脹之日本等書。

額綱彌三 (Koketsu, Yazo)

普通學務局長，一八九三年生，岐阜縣人。由第一高等學校畢業京都帝大經濟學部。歷任愛知縣公署科員、北海道警視、兵庫縣外事科長、外務省事務官、上海總領事、及京城兵庫等縣警察部長，一九三九年秋升任大分縣知事，近年轉入文部省，由社會教育局長而任現職。氏以逮捕共黨聞名，尤以供職神戶時，將該黨主要人物，悉數下獄判罪，致被上官激賞，斯丹林亦習聞其名云。又能劍道，愛打高而夫球。

二十四畫

鹽澤清宣 (Shiono, Suehiko)

前司法大臣，一八八一年生，長野縣人。

山寺常山(與佐久間象山鑲厚桐山同為國粹主義學者)之孫，鹽野信炳(因出嗣鹽野家，故改姓)之子，一九〇六年畢業東京帝國大學法科。自一九〇八年起，歷任大阪東京區裁判所檢察官、司法省書記官、東京地方裁判所檢察官、控訴院檢察長、司法省監獄局長等職，一九二七年，派赴歐美調查司法制度，一九三四年升名古屋控訴院長。一九三六年十二月調充大審院檢事局次長，以舉發小川法相疑獄、勳章疑獄、山梨上將賄索、小橋一太郎事件及三木武吉輩之東京市疑獄等，所謂昭和五大疑獄(均在東京地方裁判所檢察官任內)及逮捕左傾份子，聞名於世。與平沼騏一郎同為國本社之發起人。林銑十郎內閣時，就任法相，後經第一次近衛內閣平沼內閣，於一九三九年八月阿部氏組閣時辭職。

鹽澤英一 (Shiozawa, Koichi)

海軍大將，一八八三年生，長野縣人。

家世業酷，以售發命酒聞名。一九〇四年海軍兵學校畢業，即參加是年之日俄戰役。其後歷任海軍省軍務局第一科科長、古鷹艦長、駐英大使館武官、第一艦隊兼聯合艦隊參謀長、第一遣外艦隊司令官、海軍軍令部出仕、鎮海要港部司令官、航空本部長、舞鶴要港部司令官、佐世保要港部司

令官等職。一九三一年任第一遣外艦隊司令官時，兼駐滬特別陸戰隊司令官，參加上海戰役。一九三八年十月任華南方面海軍最高指揮官，一九三九年十一月晉級大將，調任軍事參議官，旋兼任橫須賀鎮守府司令官，一九四一年九月辭司令官職。與島田繁太郎古賀峯一兩大將為同僚。

鹽澤清宣 (Shiozawa, Kiyonobu)

陸軍少將，一八九二年生，東京府人。

士官學校第二十六期工兵科及陸軍大學畢業。曾任參謀本部中國班班員、陸軍省政策班班員、北平陸軍大學教官、天津駐屯軍參謀及關東軍調查班長。中日事變發生後，任松井石根及畑俊六兩大將之參謀，轉戰各地。興亞院成立，以大佐調充總務部第二科科長，一九四〇年晉級少將，調升華北連絡部次長，嗣該部長官森岡卓少將他調，由氏代理。

鹽谷清松 (Bekkuya, Kiyomatsu)

華北開發公司理事，一八九六年生，石川縣人。

生長石川縣之金澤市，一九二〇年東京帝大法科畢業，初入三菱造船所研究勞動問題及福利設施，旋轉三菱商會社，創設三菱經濟研究所，擔任資料科主任。一九三九年升任總務部業務科長，即在社內，發起設一對華問題研究會，極力鼓吹大陸發展之理論。故共同事間，稱之為三菱之石原莞爾，後任關東軍囑託，華北開發公司成立後，任現職。

中央電訊社叢書一覽

- 一、鄂贛實地視察記
- 二、今日之華北
- 三、國府還都後之政治情勢
- 四、越南問題
- 五、主席訪日隨行記
- 六、太平洋問題
- 七、日本觀光記
- 八、東亞新聞記者大會特輯

每冊定價五角

國府組織人名錄

定價一元二角

中央電訊社
發行所
南京路
中山路
東路
五二一號

日本時人辭典補遺

二畫

入澤文明 (Irisawa, Fumitaki)

翼贊會宣傳部副部長，一九〇三年生，新潟縣人。

氏爲入澤達醫學博士之次子，由東高師附中、一高而入東京帝大教育科，後又入法科，一九三〇年畢業。翌年入朝

日新聞社，任政治部記者，直至一九四一年，出任現職。在帝大時，以足球隊隊員關係，與今日該部之久富部長本領副部長，卽有極深之交誼。說者謂氏與本領副部長，時皆球隊之前衛，今則又同爲宣傳戰之前衛。

三畫

三谷 清 (Mitani, Kiyoshi)

牡丹江省長，一八八七年生，東京府人。

氏爲三谷伸之助次男，一九〇九年卒業於陸軍士官學校，即任步兵少尉，後轉調憲兵隊。歷任姬路、東京、赤坂、橫濱及名古屋等憲兵分隊長。一九二七年轉任奉天憲兵分隊長，一九三一年昇任奉天憲兵隊長兼奉天省政府顧問，一九四〇年晉級憲兵中佐，編入預備役，是年由滿洲政府聘任奉天省公署參務廳長，後經該省次長，而調升現職。

三谷隆信 (Mitani, Takao)

駐法大使，一八九二年生，京都府人。

三谷宗兵衛之次子，一九一七年東京帝國大德文法科畢業。前一年，已及格高等文官考試。初入內務省，任廣島縣沼隈郡郡長，一九二〇年轉入外務省，歷任該省人事科長、大使館三等書記官、國際聯盟日本事務局事務官、大使館二等書記官、該省書記官、條約局第三課長、及駐法大使隨參事等職，於一九三七年回省任條約局局長。一九四〇年松岡外相時代，升任駐瑞士公使，最近以駐法大使加藤外松卒於巴黎任內，乃調氏充任。氏以久駐日內瓦及巴黎，爲有數之國語通及法國通，尤於條約問題，爲外務省內之權威。

三浦武美 (Mura, Takemi)

滿洲外務局次長，一八九二年生，青森縣人。

一九一七年卒業東大法科，即入外務省，歷任駐英大使館三等書記官、外務省事務官、書記官、亞洲局第二課長及駐義大使館一等書記官，至一九三三年任駐滿大使館一等書記官，兼新京總領事。最近繼田代重德後，升任現職。

上村松園 (Uemura, Shoen)

女畫師，一八七五年生，京都府人。

女史生後一歲，即遭父喪，時其母僅二十六歲，以經營茶舖，撫養度日。十二三歲時，入府立畫學校，嗣入鈴木松年塾，始取名松園。不久師事幸野梅嶺，梅嶺死，又師事竹內栖鳳。一八九〇年，時年十六歲，所作之「四季美人圖」，已得一等獎，爲英國皇族康諾特購去，一九〇〇年所作之「養花」，又受銀賞，從此地位日高。女史作品中，常有母性愛，流露其間。一九四一年舉爲帝國藝術院會員。

久米精一 (Kume, Seichi)

陸軍降落傘部隊長，香川縣人。

陸軍士官學校及陸軍大學畢業後，歷任陸軍技術本部附、陸軍省軍務局課員、兵器本廠附、兵務局課員、西部防衛司令部幕僚及航空總監部附等職。大東亞戰爭發生後，調任陸軍降落傘部隊長，當進攻新加坡時，率隊於蘇門答臘要衝

巨港(地名)降落，將馬來與爪哇間之聯絡切斷，以功績甚大，會得嘉賞。

土田 顯 (Dohi, Tadashi)

滿洲民生部次長，一八九二年生，關井縣人。

一九二〇年卒業東京帝大法科，即供職南滿鐵道會社，歷任該會社開原・長春地方事務所長，參事，地方部庶務課長及人事課長等職。會社歐美調查人事制度。一九三五年任上海事務所長，一九三七年退社而任奉天副市長，嗣由錦州省次長而轉任現職。

大谷 光暢 (Ogani, Kocho)

眞宗大谷派管長，一九〇六年生，京都府人。

親鸞上人之後裔。由眞宗京都中學畢業於大谷大學。一九二五年襲受伯爵，繼承其父而爲東本願寺第廿四代法王。中日事變發生後，即偕其夫人大谷智子來華，慰問各地傷兵，大東亞戰爭發生前，又會同赴南方一帶。號愚郊，好書文，善繪畫。夫人智子，京都府立第一女高出身，爲久邇宮故邦彥王第三公主，今皇后之妹，一九二四年嫁於大谷，一九二九年以來，任北京學生女學名譽校長。

大志摩 孫四郎 (Oshima, Magoshiro)

南洋拓殖會社社長，一八九〇年生，東京府人。

一九一八年畢業於東大法科，初入朝鮮銀行，一九二四年轉入東洋拓殖會社，嗣任該社理事，一九三九年五月轉任

日滿製粉會社社長。此外兼任日俄漁業、朝鮮無煙煤、天津紡織各會社董事，一九四一年就任現職。南洋拓殖會社與滿洲、東洋、台灣各拓殖會社等，同爲日本之特殊會社。

大和田 佛二 (Owada, Foji)

日本曹達會社社長，一八八八年生，大分縣人。

一九一五年京都帝國大學英文法科畢業後，執業律師，一九一七年入逕信省，担任船舶方面之管理事務，後遞升而爲經理局長、電氣局長及逕信次官；一九四一年轉任日本曹達會社社長。氏性格極純真，富進取性，善辯論，處理事務之才能，亦超乎尋常。

大迫 幸男 (Ogaki, Yukio)

滿洲新京副市長，一九〇一年生，鹿兒島縣人。

一九二二年卒業東京帝大法科。在學時已及格高考，嗣入滿鐵服務七年。帝變後，歷任滿洲國務院總務廳事務官、外交部事務官、及國道局總務處長等職。至一九二六年任關島省署總務廳長，翌年轉與安北省事務官，八月升任哈爾濱副市長，最近繼關屋悌藏後，任現職。

大淵 伸 (Otsui, Nobu)

日義交換教授，一八八四年生，東京府人。

一九〇六年畢業於東京帝大史學系；一九一五年三十二歲時以「封建時代之城廓與社會之關係」一文，得文學博士學位。同時更專攻羅馬之文藝復興史；主持日本史學界之名

雜誌「史學雜誌」中之西洋史研究部份。一九四一年秋，以東北帝大教授及帝國學士院會員資格，任日義交換教授赴義。氏對學術研究之真摯精神，於其過去十年間，常居仙台某公寓之一室，度其學究生活，即可知之。

小竹 茂 (Kotake, Shigeru)

協同證券會社長，一八八二年生，愛媛縣人。

一九〇七年日本大學法科畢業。初供職大藏省，後轉入日本銀行為行員，嗣又轉入日本興業銀行，由出納課長、營業部長、而升任理事。極得結城、寶來前總裁之信任，故又擢為首席理事。嗣轉任日本曹達會社副社長，於新興之化學工業，貢獻甚多，後該社改組乃辭職。一九四一年四月，日政府為安定證券市價，新設日本協同證券會社，為國策會社之一，資本金凡五千萬圓，由大藏商工兩省及興業銀行會商，擢氏任該社第一任社長之職。

小川貞賢 (Ogawa, Kanji)

大本營海軍報道部長，一八九三年生，廣島縣人。

一九一五年畢業海軍兵學校，期年以少尉任官，一九二五年又畢業海軍大學。嗣經駐美大使館武官輔佐官、事務局員、及軍令部參謀等，於一九三六年晉級大佐，旋升駐泰大使館武官，一九四〇年調任軍令部課長，於最近，繼前田稔之後，擢任現職。

小住德三郎 (Ozumi, Tokusaburo)

海軍少將，一八九一年生，福岡縣人。

一九一一年海軍兵學校卒業，經橫須賀軍需部第一科長、金澤地方海軍人事部長、及舞鶴海軍人事部長，至一九四一年九月充任佐世保鎮守府軍需部長。

小林六郎 (Kobayashi, Jiro)

貴族院書記官長，一八九二年生，長野縣人。

一九一七年畢業東京帝大。初以候補司法官資格，入貴族院，嗣任守衛長、庶務課長、及議事課長等職，前後達二十年，在貴族院議員間之口碑頗佳。故能於一九四一年繼潮吉保次後，升任現職。

小泉信三 (Koizumi, Shinzo)

慶應義塾大學總長，一八八五年生，和歌山縣人。

前慶應義塾塾長小泉信吉氏之子，一九〇一年以優等生畢業於慶大政治科，四十七歲（一九三二年）時，即由教授而升任該塾塾長兼大學總長，故有青年總長之稱。一九三四年得經濟博士學位，現兼任任交詢社長及議員等職。近年文部省為實施學界新體制起見，召集日本最初之「私立大學校長會議」，當時代表慶應義塾大學（簡稱慶大）及藤原工業大學者，即小泉博士，其對慶大內部之新體制，於一九四一年十月，舉行全體教職員會議時，有謂：「今後教授之職責，已不限於學問，更須擔負學生生活刷新之責」。博士雖為一比較缺乏獨創性之學者，然其所著之社會主義價值論，學

說穩健，於經濟學界，亦自成一家。

小原正樹 (Obara, Masaki)

大藏省駐華財務官，一八九六年生，石川縣人。

一九一九年畢業東京帝大法科。在學時已及格高等文官考試。歷任大藏省司稅官、書記官、及國債科長等職，嗣以交易所改組問題，退出大藏省。於一九一九年六月，任東京市財務局局長，一九四〇年任東京地方專賣局局長，一九四一年九月以財務官奉派駐華。關於對華之財務問題，得代表大藏省行使一部之職權。

小森七郎 (Komori, Shichiro)

日本放送協會會長，一八七三年生，栃木縣人

一九〇二年東京帝大法科法文法學系畢業，經文官高等考試及格，歷任通信事務官，大阪郵便局監理課長，青森、仙臺郵便局長，遞信省秘書官，及大阪、東京各地遞信局長；至一九二六年，轉任日本放送協會常務理事，後升任該會會長之職。

山內靜吾 (Yamanouchi, Seigo)

日本銀行副總裁，一八八五年生，三重縣人。

一九一一年東京帝大英文法學系畢業後，即入日本銀行，經熊本、神戶分行長及倫敦分行監祭等，於一九三三年任總行營業局長，一九三五年任該行理事，一九三七年轉橫濱正金銀行副總理，次年任大藏省匯兌顧問，一九四一年升現

職。氏身材瘦長，不善修飾，一望而知其非社交家，與其前之津島氏，適為相反。但辦事負責，樂而不倦，故能見信於人，担負此國家銀行之重任。

山田純三郎 (Yamada, Junzaburo)

中國革命日本烈士編纂委員會委員，青森縣人。

山田良政、良士之弟，良政為援助中國革命之烈士，國父會為手書傳記，稱為興亞之先覺，今其碑文尚在。一九四一年秋，純三郎氏有意調查數十年來，援助中國革命之日本烈士史跡，編纂中國革命日本烈士傳，預定三年成書，以中日文兩種版本印行。我駐日大使館，嘉其美意，特設編纂委員會，聘氏與柴田麟次郎、金子克等為委員，聞日本援助中國革命之志士，達一百五十餘人之多云。

山田良秀 (Yamada, Yoshitake)

航空局長官，一八九三年生，佐賀縣人。

一九二〇年東京帝大法科畢業後，即入遞信省，先後担任名古屋、東京地方遞信局局長，一九三八年升任管理局局長，一九四〇年任經理局局長，一九四一年十月任現職。

山住克巳 (Yamazumi, Katsumi)

大藏省會社部長

一九二二年東京帝大畢業，即追隨木內氏致力於國民貯蓄獎勵運動。入大藏省後，任會計課長等職，此次關於理財局會社經理統制令之施行，即由氏主持。一九四一年七月轉

任現職。

山岡萬之助 (Yamaoka, Mannosuke)

日本大學總長，一八七六年生，長野縣人。

氏本姓小坂，以入嗣山岡家，故改今姓。日本法律學校畢業後，及格判檢事登用考試暨辯護士考試，派任東京土浦各區及東京地方各裁判所檢事，一九〇五年辭職，赴德留學。回國後歷任東京地方裁判所、東京控訴院等檢事，暨司法省參事官；一九一九年獲法學博士學位。其後累升司法省監獄行刑刑事各局長、內務省警保局長及關東長官，至一九二九年，勅選為貴族院議員，一九三一年，舉為東京辯護士會長。最近大日本與亞同盟改組，新總裁林銑十郎大將，又選任為理事長。氏於從政及執行律師外，尤致力於教育事業，現兼任日本大學總長。該大學規模宏大，學科齊全，近年學生數，已達萬餘，當由氏熱心主持所致。著有刑法原理、刑法政策學、檢事論等書。

山崎 巖(續) (Yamasaki, Iwao)

內務省次官。(生年籍貫見正編37頁)

與實業軍藏同屬內務省之一九一九年組人物。一九三八年十二月會出任靜岡縣知事。一九四〇年一月米內閣時代，在兒玉內相下，任警保局局長，於警察事務，初無甚經驗，而能獲得極佳之批評。故不久升任警視總監，負日本首都治安之重任。一九四一年十月東條內閣成立後，內務次官湯澤三千男升任內務大臣，調氏充任現職。

山崎 章 (Yamaji, Akira)

駐保加利亞公使，一八九九年生，鹿兒島縣人。

一九二〇年東京帝大法科卒業。初派赴駐德駐美諸使領館服務，嗣後歷任歐亞局第二科長、通商局長官、及維也納總領事兼大使館參事官等職，一九四〇年秋，以巴爾幹局勢嚴重，擢氏任現職。

四畫

中永太郎 (Nakanaga, Taro)

陸軍少將，一八九三年生，東京市人。

士官學校第二十六期畢業，一九一四年以步兵少尉任官，一九二四年復畢業陸軍大學。期年任士官學校教官，一九三一年任陸軍大學兵學教官，一九三三年任陸軍省人事局科長，一九三六年奉派赴歐，歸國後歷任聯隊長、及師團參謀長，至一九三九年任士官學校教授部長，并晉級少將，一九四一年七月調任陸軍步兵學校校長。

中村撰一 (Nakamura, Senichi)

與安西省次長，一八九八年生，神奈川縣人。

一九一九年東京帝大獸醫科畢業，即供職南滿鐵道會社，一九三二年，由滿洲政府聘為參與官，一九三七年七月調任與安南省參與官，後升與安西省次長。

中村榮次 (Nakamura, Eiji)

覽資會訓練部副部長

一九二二年由一高而畢業於東京帝大法科。初入文部省，後轉入實業界，為日本石油株式會社社員，嗣即獨自經營。此次事變勃發後，即應召以陸軍主計伍長而轉戰於華北、華中、華南各地，直至一九四一年九月回國任現職，與該會久富宣傳部長係義兄弟。

五島慶太 (Goto, Keita)

東橫電氣鐵道會社社長，一八八二年生，長野縣人。

一九一〇年東京帝大法科畢業後，初供職農商務省，後轉任鐵道省監督局總務課長，至一九二〇年乃轉入實業界，供職日黑蒲田電鐵會社，現為該社社長，此外又兼東京橫濱電鐵會社社長，參宮急行電鐵會社董事，東京高速鐵道會社常務，京濱地下鐵道會社及大阪電氣鐵道會社監查等職。氏手腕過人，故於私有鐵道之經營，能收良好之成績。所好娛樂頗多，尤好讀書，對人亦極誠懇。

井上匡四郎 (Inouye, Tadashiro)

技術院總裁，一八七六年生，熊本縣人。

父毅，字梧蔭，舊熊本縣藩士，於一八七〇年入東京為大學生會長，後任法制局長、樞密顧問官及文部大臣，於明治法制史上，頗著功績，一八九五年列於華族，封授子爵。氏本為熊本縣領備岡松麩谷之第四子，以入嗣於井上家，故改今姓，一八九五年襲爵。一八九九年於東京帝大工學院續治系畢業後，復入大學院，一九〇一年赴歐美留學。回國後得工學博士學位，即任京都帝大及東京帝大等校教授。一九一〇年選為貴族院議員，屬研究會，一九二五年任海軍政務

次官，次年升鐵道大臣。一九三〇年會代表日本出席美國議員同盟會議及國聯十一次總會等。一九三四年日本製鐵會社成立，任常務董事，此外復兼鐵道會議議員、日滿製鋁會社顧問及帝國鐵道協會會長等職。大東亞戰爭發生後，新設技術院，擔任第一屆總裁。

井上愷也 (Inoue, Takaya)

滿洲大同學院院長，一八七九年生，熊本縣人。

一九〇〇年卒業士官學校，一九一一年又卒業陸軍大學。自一九〇一年以步兵少尉任官，累進至陸軍中將。其間歷任各中隊長大隊長、台灣總督府參謀、十九師團參謀長、下關要塞司令官、獨立守備隊司令官及參謀本部附等職，後編入預備役。一九三五年入滿洲，由協和會中央本部長，調任現職。

井野英一 (Ino, Eichi)

滿洲最高法院次長，一八八四年生，三重縣人。

一九〇八年卒業東京帝大法科，一九一一年任東京地方裁判所判事，翌年留學德國，至一九一四年回國，任東京帝大法學部講師，兼東京地方裁判所檢事及判事，後昇任東京地方裁判所部長，任內又兼國際混合裁判所事務官，曾駐英國。一九二三年任國際聯盟日本代表隨員，一九二五年歸國，任大審院判事兼東京帝大教授，一九三五年入滿洲任最高法院次長，以迄今日。

內山右太郎 (Uchiyama, Iwataro)

駐越公使，一八九〇年生，羣馬縣人。

氏與駐加拿大吉澤公使、駐美若杉無任所公使，同稱爲一九一七年份以外交官考試及第而入外務省者，實則氏早於一九〇九年以外務省留學生資格，一度入外務省，後經外交官考試及第，遂以此著稱。自任外交官後，大半派在南美之巴西、阿根廷等，任書記官、總領事及參事官等，其間亦曾赴西班牙法蘭西等地，一九三七年升任阿根廷兼巴拉圭烏拉圭三國公使，至一九四〇年八月因松岡外相任內人事風潮發生，告退歸國，一九四一年九月，以無任所公使，隨芳澤大使駐越。

今井五介 (Imai, Gosuke)

日本蠶絲會社社長，一八五九年生，長野縣人。

本姓片倉，以入嗣今井家，故改今姓。少時曾渡美研究生絲之貿易。回國後，即與其兄片倉兼太郎，設片倉製絲會社於松本，自任社長。六十餘年來，專致力於此，卒使業務蒸蒸日上；一九四一年辭去該社社長名義，就任國策會社之日本蠶絲會社社長。氏亦爲貴族院議員，係長野縣之多額納稅者。

今吉敏雄 (Imayoshi, Toshio)

拓北局局長，一八九八年生，大分縣人。

氏初入內務省後，任岩手縣警察部長；後轉入拓務省，

歷任朝鮮部第一部長、管理局企畫課長、該省新京特派員、本省管理課長、祕書課長及調查課長等職，一九三八年以後，出任關東局司政部長，最近調任現職。

牛塚虎太郎 (Ushizuka Torataro)

衆議院議員，一八七九年生，富山縣人。

一九〇五年東京帝大法科政治學系畢業後，即入遞信省任遞信書記官。後歷任內閣書記官、內閣統計局局長、國務院部長、及岩手、羣馬、宮城各縣知事，至一九二九年任東京府知事。一九三三年任東京市市長，一九三七年辭職。最近當選爲衆議院議員。

犬養 健 (Inukai, Ken)

經濟委員會顧問，一八九六年生，東京府人。

國父摯友前首相犬養毅氏之子，一九一七年由學習院高

等科，入東京帝大文科哲學系肄業，長於戲曲之創作。一九三〇年以來，三次當選衆議院議員，前隸政友會。曾任內閣總理大臣祕書及遞信省參與官等職，國府遷都後，與青木一男等同聘爲我國經濟委員會顧問。

太田正孝 (續) (Ota, Masataka)

經濟學博士。(生年籍貫見正編15頁)

在供職報知新聞時代，即以保租倉庫論一文，得經濟博士學位。政治頭腦，亦極清楚，當久原中島二派相爭時，與犬養健、船田中諸氏，俱能置身事外。迨值行新體制，又在近衛文麿、風見章、前田米藏諸氏之間，極力斡旋，近衛軍行組閣之際，曾有擬昇予樞要職位之說。(正編太田正孝之「大」係「太」字之誤。)

五畫

平賀 讓 (Hiraga, Yuzuru)

東京帝國大學總長，海軍造船中將，一八七八年生，廣島縣人。

平賀左右衛門之次子，一九〇一年畢業東京帝大造船科，即入海軍供職，至一九二六年累進為海軍中將。其間曾任東京帝大工科講師教授，橫須賀海軍工廠造船部員、海軍技術本部部員、技術會議議員、技術研究所長兼造船研究部部長、艦政本部技術會議議員等職，并曾於一九〇五年留學英國，一九一九年得工學博士學位。嗣於一九三三年選為帝國學士院會員，一九三四年榮獲英國造船學會金牌，一九三五年任東京帝大工學部長，迨一九三八年三月乃升任第十六任之總長，以迄於今。此外於倡行新體制時，又為新體制準備委員之一，及翼實會成立，兼任該會總務。當其兼新體制準備委員時，為先行確立校內新體制起見，曾將各學友會合併而成一新團體。東大學生，本頗囂張，經氏加以整頓，居然風氣丕變，世稱為：「平賀肅學」，並譽為「果敢之人」。氏十六歲，即喪慈父，而孝思不置，前年放暑假時，曾出一破格之布告曰：「諸生回家，務宜孝事父母」，可為我國提倡「非孝」之教授，當頭棒喝。日本軍艦製造，大多由氏設計，是為學界海軍方面所深知，故又有「軍艦之父」之稱。

本領信治郎 (Honryo, Shinjiro)

翼實會宣傳部副部長，一九〇二年生，京都府人。由京都第一商業學校而入早稻田大學政經部，一九二八年畢業後，又入大學院專攻財政經濟。嗣任母校專門部經濟學講師，及第二早高教授。其間曾留學歐洲，與中野正剛氏交誼極篤，故回國後，曾入東方會，任該會常務幹事兼青年部長，致力於青年運動，一九四一年就現職。

片岡 安 (Kataoka, Yasushi)

大阪商工會議所會頭，一八七六年生，京都府人。氏本加州前田藩士細野直重之次子，一八九八年入替於片岡直溫，故改今姓。一八九七年於東京帝大工學院建築系畢業，即入日本銀行為技師，後自設日本電梯會社，一九二〇年得工學博士學位，一九三一年以資方代表出席國際勞動會議。一九四一年四月任訪義經濟使節團副團長，歸後舉任現職。氏係一建築家，故尚担任日本建築學會會長、關西工學理事長等職。

片桐英吉 (Katagiri, Eikichi)

海軍中將，一八八七年生，米澤市人。一九〇六年海軍兵學校畢業。於海軍省，僅一度任教育局第一科長，此外常在戰地供職。歷任青葉，榛名兩艦艦長

、佐世保鎮守府參謀長、航空戰隊司令官、霞浦航空隊司令官、及第三戰隊司令官等職，至一九三九年十一月由舞鶴要港部司令，轉任戰地某要職，一九四一年九月歸國，充任海軍航空本部長。

片野重修 (Katano, Jushu)

帝國農會副會長，一八九一年生，秋田縣人。

東京帝大政治系畢業後，即入農界，担任縣農會會長及麻山木會會長，一九三〇年當選為衆議員，前隸政友系。一九四一年十月任現職。此外又兼中央物價統制協會常任委員及帝國農政協會委員。

田中禮積 (Tanaka, Hozumi)

前衆議院議長，一八八一年生，岩手縣人。

士族田子勘詔之次子。一九〇八年畢業於東京帝大法律政治學系。歷任山口縣警察局長，內務省警保局警務、保安、圖書等課長，地方局市町村、府縣、社會等課長，社會局第一第二課長，社會局長及三重縣知事等職。曾五次當選為衆議院議員，至一九三六年四月升任鐵道省政務次長，一九三九年十二月舉為衆議院副議長，一九四一年十二月又舉為正議長。氏苦學力行，態度溫文，政治頭腦，亦甚細密清晰，在政界上以無政敵無派別，故為人所愛戴。一九四二年五月該議院改選時辭職。

田中禮積 (Tanaka, Hozumi)

早稻田大學總長，一八七六年生，長野縣人。東京專門學校畢業，曾赴歐美留學，回國後，初入新聞界，後乃主辦早稻田大學(簡稱早大)，早大於近幾年來，校舍逐年擴張，學生數亦年有增加，投考者之多，更不能數計，此不能不謂為氏之功績。氏頗好客，故總長室內，常常滿座，其颯爽之性情，每使人感到如一新青年云。

田中耕太郎 (Tanaka, Kotaro)

學士院會員，一八八九年，佐賀縣人。

一九一五年以最優等之成績，畢業於東京帝大(簡稱東大)，嗣入內務省實習一年，即回母校任助教，担任商法講座。後升為教授。「田中商法」，至今為日本學術界所稱道。一九三六年以日義交換教授資格，赴義講學，一九四〇年春，平沼總長實行贖學時，東大一部分教授，羣起反對，氏則始終輔佐平沼總長，使完成此舉。後又赴南美考察二年之久，一九四一年十一月任為學士院會員。

田邊秀雄 (Tanabe, Hideo)

熱河省次長，一八九七年生，岡山縣人。

一九二三年京師帝大法律科英文法學系畢業，同時及格高等文官考試。初任職熊本縣，其後歷任關東廳警視、關東廳官房文書課長，臨時國勢調查課長、內務局學務課長，至一九二八年，任滿洲吉林鐵道警衛本隊隊長，旋升現職。

田邊盛武 (Tanabe, Moritake)

參謀本部次長，一八八九年生，千葉縣人。

自陸軍大學畢業後，歷任參謀本部部員、及陸軍大學兵學教官。旋一度派赴法國。歸國後，任整備局課員、勳員課長、聯隊長、及士官學校幹事等職，至一九三九年晉級中將，並充任師團長，最近升任參謀本部現職。

矢田七太郎 (Yata, Shichitaro)

上海同文書院大學總長，一八七九年生，東京府人。

氏原爲外交官，所任職務，大半與大陸有關，尤以担任上海總領事及滿洲政府參議時代，活躍甚力。回國後，充任東亞同文會常務理事；該會會長，係近衛文麿，而實際上，一切事務，卽由氏負責處理，故能出任現職。同文書院於一九四一年四月，由專門學校而昇格爲大學，其責職更形重要。氏雖非教育家，而於其溫厚之風采中，實有銳利之理智與勇氣，較諸普通外交官，確乎不同。曾二次舉爲上海民團長，未就。

矢吹省三 (Yabuki, Shozo)

貴族院議員，一八八三年生，東京府人。

氏父矢吹秀一於一八九四年中日之役及一九〇五年日俄之役，累樹巨勳，一九〇七年封授男爵，列於貴族。氏係其三子，於一九〇九年襲爵。前一年，已畢業東京帝國大學政治科，供職於橫濱正金銀行，旋任富士生命保險會社董事，一九三六年就任該社社長，其於政界，當若槻第一次內閣時，任外務省政務次長；第二次內閣時，任海軍省政務次長；一九三一年再任外務省政務次長；一九三四年岡田內閣時，任大藏省政務次長。早歲卽選爲貴族院議員，以迄於今。

矢野仁一 (Yano, Jintichi)

京都帝大名譽教授，一八七二年生，山形縣人。

一八九九年東京帝大文學院史學系畢業，復入大學院研究。一九〇五年任東京帝大助教，是年受清廷之聘渡華，任京師法政學堂歷史與地教官。一九一二年民國肇興，該校停閉，乃歸國任京都帝大文學院助教。一九二〇年昇任教授，並獲文學博士學位，一九一六年及一九三一年兩次派赴歐美中國等地考察，一九三二年以停年制之規定，辭京大教職，然以學術崇高及對京大貢獻甚多，聘爲名譽教授。氏爲日本東洋史之權威，著作等身。

六畫

伊藤與三郎 (Ito, Yosakuro)

三井物產總會常務，一八八七年生，三重縣人。

伊藤辰次郎之弟，幼時在名古屋某商店爲學徒，一九〇五年入三井物產本店營業部供職，嗣經倫敦大阪各分店而歷任漢堡等地之分店長，德國物產公司經理，大阪代理分店長，營木材部部長、小樽分店長、及倫敦分店長等職，至一九三八年任大阪分店長，翌年五月兼任水泥部長，一九四一年舉任現職。

龜田 晃 (Tada, Akira)

龍江省次長，一八九四年生，岡山縣人。

一九二〇年卒業東京帝大德文法科，卽入南滿鐵道會社供職，一九二六年昇任該會社地方課主任。一九二七年後，游歷歐美凡二年，歸後任地方部人事系主任，旋任安東地方事務所長，一九三二年任地方部長，一九三六年兼任地方行政調整委員會委員長，明年再任安東地方事務所所長，未幾轉任現職。

吉嶺正雄 (Yoshizumi, Masao)

陸軍少將，一八九四年生，廣島縣人。

陸軍大學畢業後，初任陸軍省軍務局課員、參謀本部部員、及陸軍大學教官等職，一九三八年三月以來，在滿洲任

職，一九四一年歸國，任內閣情報局第二部部长，該部掌管全國報紙、出版、及廣播等事宜，爲該局局務之樞紐。性情穩健，每可於其風采中見之云。

守島五郎 (Morishima, Goro)

駐蘇公使，一八九〇年生，福岡縣人。

一九一六年畢業東京帝大法科，閱一年及格外交官考試。一九一五年以候補外交官駐上海；一九二六年任美國大使館二等書記官。一九三〇年任駐華公使館一等書記官，是年十一月回國任亞細亞局第一課長。一九三六年任駐華大使館參事官。是年十二月以後，專擔負外務省東亞局與中國間商折之任。游歷前後，對中國問題之處理，頗費苦心。一九三〇年二月後，又派駐台灣及香港及我國等地，回國未久，以松岡人事大更動去職。嗣任世界經濟調查會理事、外務省事務囑託及企畫院外情研究評議會委員等職。於一九四一年以公使銜，繼西春彥之後，駐蘇協助大使建川美次。

安田文助 (Yasuda, Josuke)

管船局長官，一八九九年生，山梨縣人。

一九二二年高等文官考試及格，次年畢業東京帝大德文法科。卽入逕信省管船局，歷任該局海軍部長、庶務課長、監理課長、逕信監察官兼大臣官房文書課長、及札幌逕信局

長，至一九三九年四月任熊本遞信局長，一九四一年十月轉現職，為人極豪放，亦極緻細。

安藤紀二郎 (Ando, Kisaburo)

國務大臣，一八七九年生，兵庫縣人。

一九〇〇年任陸軍步兵少尉，至一九三二年晉級中將。其間初在陸軍省人事局恩賞科任事，既游美國，達十數年。歸後歷任步兵第三十旅團長及第一師團司令附等職，至一九三二年升旅團要塞司令官，一九三四年，編入預備役。其後一度會傳將任在擲軍人會宣傳部長，一九四〇年來華任華北新民會副會長，明年十月東條內閣成立後，歸國任翼贊會副總裁兼事務總長，一九四二年六月升任現職。好讀書，信佛教中之淨土宗。

寺尾 進 (Terao, Susumu)

帝國石油株式會社副總裁，一八九〇年生，福

岡縣人。

寺尾亨博士之子。一九一五年畢業於東京帝大德文法科後，直至一九三九年，均服務於商工省。一九三九年時，任商工省第一任之貿易局長官，對日印、日荷印、日埃之貿易交涉，均著極大功績。辭職後，即任帝國石油資源開發會社社長，迨該社合併於帝國石油株式會社，改任該社副總裁。為人清白廉潔，毫無私心。

寺師我信 (Terashi, Yoshinobu)

醫學博士，陸軍軍醫中將，一八八三年生，鹿

兒島縣人。

一九一〇年畢業於京都帝國大學。副歷任陸軍航空本部部員，所澤陸軍飛行學校研究部員，軍醫學校校官，第一、第二師團各軍醫部長及軍醫學校校長。其間又曾留學義大利，一九二四年得日本航空方面最早之醫學博士，嗣又晉級陸軍軍醫中將。二十年前，飛行方面之發生疾病，數見不鮮，而學者之間，無一人出而提倡航空醫藥。博士乃首倡製作「安全設備機」，時舉國人士，鮮有贊助者，惟淺草(地名)之某女士，反寄予同情，而慨助三十元，此位同情者，後即成為博士夫人，一九三一年，第一架之「安全設備機」，成功問世，當各界舉行祝賀會時，博士悄然退席，赴夫人墓前大哭一場，語見博士自著之「亡妻記」。

寺島 健 (Terashima, Takeshi)

通信大臣，一八八二年生，東京府人。

氏與台灣總督長谷川清，同期畢業於海軍兵學校，曾任練習艦隊司令及海軍省軍務局長，一九三四年以中將調入預備役後，即任浦賀造船所社長。一九四一年十月東條內閣成立，擢任現職。據東報稱，氏於政治上，經歷較淺，此次一躍而登大臣之席，殊屬破格云。

池田 清 (Ikeda, Kiyoshi)

海軍司政長官，一八八五年生，鹿兒島縣人。

一九一三年東京帝大德文法科畢業，即入警視廳，曾任各縣警察部長、內務部長、內務省紳社局長、及台灣總督府警務局長，一九三六年四月任北海道長官，翌年任大阪府知事。一九三九年阿部內閣時，任警視總監，翌年一月辭職，最近任現職。氏爲一典型之鹿兒島人，自信極強，對於警察行政，經驗甚富。

有馬武夫 (Ariga, Takeo)

海軍大佐，一八九三年生，長野縣人。

一九一七年兵學校畢業，一九三七年晉級大佐，嗣又於航空學校畢業，曾任潛水學校教官，名取艦長，早勳特務艦長等職，至一九四一年九月轉任水路部總務部長。

羽田亨 (Haneda, Tohru)

京都帝國大學總長，一八八二年生，京都人。

一九〇七年東京帝大文學部史學系畢業後，復入大學院研究，一九一三年任京都帝大(簡稱京大)文學部助教，次年派赴蘇聯觀察，一九二五年任京大教授，嗣升文學部長。一九三八年十一月京大發生河上肇事件後，法經兩學部教授

，以「學術神聖」爲標榜而全體辭職後，乃由氏升任總長，會於一九二三年以西域史之研究一文，得文學博士學位，爲日本有數之中國學者。

西園寺八郎 (Saionji, Hachiro)

宮內省御用掛，一八八一年生，東京府人。

故元老西園寺公望之養子。本爲故公爵毛利元德之第八子，公爵毛利元昭及男爵小早川四郎之弟，男爵毛利元良及子爵大村泰敏之叔。早歲自學習院中等科畢業後，留學德國，習法律經濟學。回國後，一九〇九年任內閣總理大臣秘書兼大藏大臣秘書，一九一四年任式部官。一九一八年其嗣父公望以日本全權代表委員赴歐，氏亦隨往。一九二〇年侍奉皇儲，遊歷海外。嗣經式部職、庶務科長及式部次官，於一九二六年任主馬頭，旋即就任宮內省御用掛(相當於祕書長)，以迄於今。公餘好騎馬，駕快艇，滑雪橇，兼信佛教。其長子公一，一九〇六年生，英國牛津大學出身。次子二郎，一九〇七年生，住友合資會社社員，經濟學士。三子不二男，一九一〇年生，日本銀行行員，東京帝大經濟學部出身。次女春子，嫁男爵住友吉左衛門。

七畫

佐藤秀三 (Sato, Shuzo)

上海自然科學研究所所長，一八九〇年生，新潟縣人。

一九一六年東京帝大醫藥部畢業後，留校任衛生學教室橫手千代之助博士之助手，同時更入大學院研究。一九一九年任傳染病研究所技師，一九二一年後，赴法國研究細菌學及血清學。二年，回國後又入傳染病研究所，專攻結核病，卒成爲今日日本結核研究之權威。一九三八年以來，任上海自然科學研究所所長，兼東京帝大醫藥部教授及傳染病研究員。氏與我國發生關係，始於派赴廣東調查麻瘋病時，以久留我國，對我國事情，亦極熟悉。與與亞院文化部長松村博士，爲第一高等學校時代之至友，曾得醫學博士學位。性剛直，愛園茶，兼好油畫。

谷萩那華雄 (Tanihagi, Nakao)

大本營陸軍報道部長，陸軍大佐。

氏與有末精三、佐藤賢了兩少將，於士官學校同期畢業。在報道部前身之陸軍省新聞班時代，曾於當時班長本間雅

晴中時之下，任發表主任之職。後歷任中國各地特務機關長，近年任國府軍事委員會最高顧問影佐禎昭少將之輔佐官，始終擔任報道方面事宜，故報道經驗，甚爲豐富。大東亞戰爭勃發，乃繼大平秀雄之後，調回任現職。

村山長舉 (Murayama, Chokyo)

朝日新聞社社長，一八九四年生，大阪府人。

子傳四部長景之弟，一九一九年入嗣村山龍平爲養子，故改今姓。是年畢業京都帝大法科政治學系後，即入朝日新聞社，歷任該社印刷局長兼航空部部长、社會事業團理事長、事務局董事兼董事長，於一九四〇年升任現職。氏嗣父龍平，於一八七一年由三重縣移居大阪，當初經營西洋雜貨商，於一八七九年承辦木村平八發行之日刊「朝日」，而改稱大阪朝日新聞，至一八八九年復收買東京日覺新聞，改稱東京朝日新聞，兼營並務，卒成爲日本言論界之重鎮，因其有功於國家，曾敘勳二等，並於一九三〇年，勅選爲貴族院議員，對於公共慈善事業，亦頗多貢獻，一九三三年十一月謝世，追贈勳一等，晉階從四位。

八畫

和田專山 (Wada, Senzo)

海軍中將，一八八三年生，山口縣人。

一九〇六年畢業於海軍兵學校；初以少尉任官，後經堂戶特務艦艦長，長良、川內、比叡各艦艦長，又畢業海軍大學。以德衛聞名於時，曾創新兵之速成法，添變前，任佐世保海兵團長時，即採用此法訓練。嗣任佐世保鎮守府警備隊司令官及馬公要港司令官，於一九三七年晉級中將，一九三九年十二月，入軍令部供職，同時編入預備役。為入沈默剛直，好旅行及調查。

河相達夫 (Kawai, Tatsuo)

駐澳公使，一八八九年生，廣島縣人。

東京帝國大學政治科畢業後，入北海炭礦汽船會社，供職二年，嗣在松岡洋行主考之下，及第外交官考試，派駐我國甚久。事變發生後，二年半間，擔負外務省情報部長之重任，後以無任所公使名義，派赴歐美各國，未及一年，調為第一任之駐澳公使。氏於三年前，著「日本發展之目標」一書，將全世界，以政治之見地，分為歐洲、美洲、亞洲三大部，以澳洲劃入亞洲範圍之內，而亞洲以日本為中心，世實為今日東亞共榮圈理論之雛型。

岩倉道俱 (Iwakura, Michitomo)

貴族院議員，一八八一年生，京都府人。

故右大臣岩倉具視之四子，一八九六年分居時，與受男爵。東京帝大文科大學（文理科大學前身）畢業，後又留學歐美，一九一一年當選為貴族院議員，以迄於今。此外尙兼任川崎造船所及千代田火災保險公司常務董事。

岩崎民男 (Iwasaki, Tamiyo)

蒙疆連絡部長官 山口縣人。

陸軍大學卒業後，以參謀本部軍事調查員，派駐歐洲，旋任朝鮮軍幕僚。事變後，調任某部隊長，來華作戰。一九四一年十一月繼竹下義階中將之後，轉任現職。

岡本一策 (Okamoto, Issaku)

上海市參事會副議長，一八八八年生。

氏自一九一〇年以來，向在外交界服務，尤以中國美國為最久，去年冬，辭新加坡總領事歸國，途經上海，值租界問題糾紛正甚，當時日本方面之參事僅二人，經氏與工部局折衝，得增為三人，旋即留滬任現職。氏常謂「正確之主張，必得最後勝利」，故其言行，皆根據此一觀念出發，世論如何，能不為所動。

松本龜次郎 (Matsumoto, Kamejirō)

東亞學校名譽校長，一八六六年生，靜岡縣人。

少時家寒，靜岡縣立師範畢業後，即服務於該縣教育界。後及第中等學校教師考試，任三重、佐賀各縣立師範教員。一九〇二年以服務公立學校滿十五年，循例領得恩俸，乃赴東京，探求深造，當由嘉納治五郎氏選任為其時中國留學生唯一教育機關之宏文學院教授，一九〇八年應清廷之聘請，渡華擔任北京法政學堂教員。一九一二年因民國肇興，該校解散而回國。一九一三年夏，斥資在東京設立東亞高等預備學校，仍致力於中國留學生之教育。一九二三年九月一日關東大震災時，校舍被燬，然氏僅以四十日之時間，即行復課。一九二五年該校歸日華學會經辦，一九三一年氏以年邁退職，該校當局，念其功勳，聘為名譽校長。此外更編有日語教本多種行世。

松田令輔 (Matsuda, Reisuke)

奉天省次長，一九〇〇年四月生，山口縣人。

一九二三年卒業東京大法科，任職大藏省，經廣島、橫濱、東橋各稅務署署長，於一九二六年任釀造試驗所事務官，兼大藏事務官，同年七月退職。後入滿洲任總務廳生計處長，一九三五年升任國務院總務廳企畫處長。

松阪廣政 (Matsuzaka, Hiromasa)

司法省檢事總長，一八八四年生，京都府人。

一九〇九年東京帝大法科英文法學系畢業。一九一二年以來，歷任水戶、橫濱、東京各地方法院檢察官，一九三一

年派赴歐美觀察，回國後任最高法院檢察官，一九三七年任司法省刑事局長，嗣任東京高等法院首席檢察官，一九四一年任現職。三十年間，始終從事於檢察之生涯，舉凡三、一五、四、一六之三大共產案件，以及鐵道、勳章等昭和時代之大疑獄，均在其手中檢舉判決，以其鐵面無私，世人稱之為「鐵的檢察」。

松村謙三 (Matsumura, Kenzo)

衆議院議員，一八八三年生，富山縣人。

松村和一郎之長子，一九〇六年早稻田大學政治經濟科畢業，初入報知新聞社為記者，後轉入農林省，一九二九年任農林大臣祕書，一九三二年任農林省參事官，一九三九年任農林省政務次長。此外又曾任日本毛皮會社董事及金澤貯蓄銀行監事等。一九三八年以來，當選為衆議院議員，已達五次。

松崎重義 (Matsuzaki, Shigeo)

逕信省科長，一九〇二年生，熊本縣人。

氏為有名之電氣學界泰斗，其貢獻最大者為：「無線裝置之長距離通信回路」及「無線電之有線連絡」，曾得東日之第一次通信印刷賞金。迨大政翼贊會成立，出任幹部要職，現轉任逕信省工務局調查課長。以一科學家，而供職中樞，足證近年日本之政治新體制，頗尊重技術人才。

東海實 (Togo, Minoru)

衆議院議員，一八八一年生，鹿兒島縣人。

東鄉實彥之長子。札幌農業學校本科畢業，復留學德國；入柏林大學。歸國後，歷任彰化廳技師、南投廳技師、斗六廳技師、台灣總督府中央研究所技師等職，曾數度派赴歐美各國公幹。一九一九年，獲農學博士學位。當選衆議院議員，已達五次，前隸立憲政友會。一九三二年任選信參與官，旋任文部省政務次官。現任拓殖大學講師，著有關於農政及殖民書籍多種。

武井善嗣 (Takei, Gunji)

厚生省次官，一八八九年生，鞍馬縣人。

氏於厚生省人口局設立時，由山口縣知事而轉任該局局長，未及三月，即登次官之位，榮晉之速，出乎尋常。自小衆厚相就任以後，頗致力於體育團體之合併，而斡旋於文部省及各體育團體之間者，即爲武井氏。氏由高師而畢業京都市帝大；入政界後，屢經變革，故其經驗，已甚豐富。

牧田覺三郎 (Makita, Kakusaburo)

海軍少將，一八八九年生，靜岡縣人。

一九一一年海軍大學校卒業。歷任聯合艦隊參謀、駐美使館副官、海軍大學校教官、五十鈴艦長、海軍通信學校教務長、及霧島艦長等職，至一九三七年晉級少將，同時升任海軍通信學校校長，後派赴戰地供職，一九四一年九月擢任

上海特別陸戰隊司令官。

牧野 元 (Makino, Moto)

國際汽船會社社長，一八八六年生，東京府人。

一九〇八年慶應義塾會計系畢業，翌年入大阪商船會社，嗣累昇爲新加坡、台北、橫濱、神戶等地之分店長，至一九三七年以國際汽船會社與大阪商船會社間之債務關係，入國際汽船會社任常務董事，當一九一四年，大阪商船會社擬開設南美航路，氏即協助其時之遠洋課長村田省藏（後任遞相），極力策劃，使得實現。入國際汽船會社後，又見信於黑川社長，故能代黑川而繼任該社社長。爲人玲瓏灑脫，外表如一文化人。

直木倫太郎 (Naoki, Rintaro)

大陸科學院院長，一八七六年生，兵庫縣人。

一八九九年畢業於東京帝大工科，初任東京市技師，嗣後歷任大藏省臨時建築部技師、內務技師、大阪市港灣部長兼都市計劃部長、復興院技監、復興局長官等職，曾由東京市及大阪市，派往海外調查築港及都市計劃。於一九二四年得工學博士學位，轉任大林組合管理兼技師長、及日本地盤會 (Asphalt) 工業會社管理，後應滿洲政府之聘，任國務院國道局長兼大陸科學院長，一九三七年七月調該政府交通部技監兼水力電氣建設局長，嗣經參議府參議而復任現職。

青木 實 (Aoki, Minoru)

滿洲經濟部次長，一八九五年生，東京府人。

一九二四年畢業於東京帝大政治科，經高等行政官考試

九 畫

前野 茂 (Maeno, Shigeru)

滿洲司法部次長，一八九九年生，岡山縣人。

一九二三年及高等文官考試，同年卒業東大法學部。

嗣後歷任東京地方裁判所判事、司法部事務官、民事司第三科長，至一九三九年四月入滿洲政府，任總務廳人事科長，旋即升現職。

室伏高信 (Murofushi, Takahobu)

評論家，一八九二年生，神奈川縣人。

早歲肄業明治大學，一九一四年入時事新報社，一九一六年轉入東京朝日新聞社，一九二二年由改造社派赴歐美視察，一九三〇年曾游我國，現任日本評論社編輯顧問。氏為現代社會評論家，唯物主義之批評者，並為生命主義與東方主義之主張者，亦頗關心中國問題，時在報章雜誌，與我國當代名流，公開交換意見。著有日本論、文明之沒落等書，文筆雄健，為斯界所重。

及格，任和歌山西神田橋等稅務署長及銀行稽核。一九三五年後轉入滿洲政府，歷任財政部國有財產科科長、國務院總務廳參事、經濟部金融司長。最近繼古海忠之之後，升任現職。

津野 隆一 (Tsunohira, Ryūichi)

華北開發會社總裁，一八八八年生，香川縣人。

氏少時即有神童之名，一九一二年以第一名畢業於東京帝大政治科。畢業後，即入大藏省服務，曾數度派往歐洲，一九三四年由理財局長而升為大藏次官，至一九三六年二月高橋藏相遭難後，退職。次年二月，任日本銀行副總裁，此後五年間，以各種政府委員，担任各種對外交涉。其中尤以與賈屋(興宣)、高橋(龜吉)二氏所同任之中央物價委員，對日本戰時物價政策之制定，貢獻甚大。一九四一年冬繼賈屋興宣氏之後，來華任現職。

神田 正一 (Kamijoshi, Shoichi)

關島省長，一八九七年生，東京府人。

一九二〇年卒業於東京帝大法科，經高等行政考試及格，歷任外務省事務官、奉天領事、駐英大使館附、第八次國際聯盟隨員、外務省亞洲局第一課代理課長等職。一九三

二年後入滿洲政府，初任外交部理事及政務司司長等職。一九三七年，任國務院總務廳次長，並兼外務局局長，一九三九年任民生部次長，旋弱任現職。

神岡大春 (Kamio, Ichiharu)

滿洲參議府祕書局長，一八九三年生，廣島縣人。

一九一七年高等文官考試及格，翌年畢業於東京帝大德文法科。歷任福岡暨東京等各縣府理事官、朝鮮全羅南道警察部長、朝鮮總督府事務官、內務局社會課長及學務課長等職。一九三二年應滿洲政府之聘，任國務院總務廳祕書官。一九三四年升任祕書處長兼法制局參事官。一九三五年二月調任文教部學務司長，嗣由龍江省次長及金融合作社副理事

長，而轉任現職。

秋月左都夫 (Akizuki, Satoo)

國際法學家，一八五九年生，官崎縣人。

一八八四年司法省法政學校畢業，翌年以官費派往比利時留學，一八九三年又留學德國，次年回國應外交官考試及格，入外務省。歷任參事官、釜山一等領事、前韓國法國及俄國公使館一等書記官，至一九〇四年升為駐瑞典及挪威公使，一九〇八年調任駐比利時公使，一九〇九年又升為駐奧大使。一九一四年以後，脫離外交官生活。當凡爾賽和會時，會派為顧問。為日本有數之國際法學家。

八畫 臨時增補

松井太久郎 (Matsui, Takuro)

國府軍事委員會最高顧問，一八八七年生，福

岡縣人。

士官學校第二十二期及陸軍大學畢業，久駐華北滿洲，

此次事變時，以部隊長轉戰華中華南各地，積功升中將。大東亞戰爭發生，調赴南方作戰，一九四二年六月繼影佐少將(禎昭)後，應國府之聘，就任現職。氏富有政治才能，適踴我國國情。

十畫

栗山茂二 (Kuriyama, Shigei)

通化省次長，一八九八年生，石川縣人。

一九二〇年卒業於東京帝大法科，一九二七年任朝鮮總督府推事及京城地方法院推事，後任京城高等法院推事，一九三二年應滿洲政府之聘，任司法部法務司長，嗣任滿洲特區高等法院檢察官，熱河省高等檢察廳檢察官，及龍江省警務廳長，一九三七年就現職。

浮田秀彦 (Ukita, Hideniko)

海軍中將，一八八九年生，東京市人。

一九〇九年兵學校卒業，後復由砲術學校、水雷學校，於一九二二年卒業海軍大學。歷任軍令部參謀、第七水雷隊司令、妙高艦長及潛水學校校長等職。七七事變勃發之年，充任海軍總政本部部長，一九四〇年十一月晉級中將，翌年七月升任旅順要港部司令官。

荒井靜雄 (Arai, Shizuo)

滿洲審計局長官，一八九四年生，新潟縣人。

父賢太郎曾任農商務大臣，氏卒業東京帝大法學部政治學科，近年入滿洲，由參議府秘書局長，轉任現職。

留岡清男 (Tomooka, Kiyoo)

翼贊會訓練部副部長，一八九九年生，東京府人。

氏為有名之社會事業家留岡幸助氏之子，內務省地方局長留岡幸男之弟。東京帝大心理學系畢業，曾在法政大學及東京農業大學，擔任心理學講座。後至北海道，繼承其父致力於少年感化事業約三年。後又回東京執教於法政大學，一九四一年任翼贊會現職。

馬奈木敬信 (Manaki, Yoshinobu)

陸軍大佐，福岡縣人。

潘變時曾以擊破馬占山軍而得金鷄勳章。此次事變發生，又以部隊長，作戰前線，一九四一年泰越劃境時，担任日本陸軍方面之委員。

馬場元治 (Eaba, Motoharu)

翼贊會總務部副部長，一九〇一年生，長崎縣人。

東京帝大法科畢業，高等文官考試司法科及第。初執業律師，嗣任長崎市議會議員及縣議會議員，并二次當選為眾議員。私淑中野正剛氏，本屬東方會，後以對社大黨合併問題退出，一九四一年就現職。

馬淵逸雄 (Mabuchi, Hayao)

陸軍大佐，一八九七年生，愛知縣人。

士官學校第三十期步兵科及陸軍大學畢業。曾供職中國派遣軍報道部，旋升任該部部長，嗣於一九四一年調回本國，先後任大本營陸軍報道部部長，及陸軍省參謀本部部附等職。資性厚重，處事果敢，常於雜誌報端，發表時論。

堀内 雄 (Horiuchi, Kazuo)

安東省次長，一八九三年生，山梨縣人。

氏爲堀内良平之長男，陸軍士官學校卒業後，以步兵少尉任官，嗣又先後畢業陸軍戶山學校、陸軍大學。歷任參謀本部部附、關東軍司令部參謀等職，於一九三二年，晉級少佐，編入預備役。是年應滿洲政府之聘，任該政府治下之陸軍少將，專司整頓軍備，一九三四年任第一軍管區司令部部附，一九三五年任同區之參謀長，一九三七年任國務院弘報廳廳長，一九三八年轉任現職。

清水重夫 (Shimizu, Shigeo)

翼贊會組織部副部長，一八九五年生，埼玉縣人。

明治大學法科專門部畢業後，於一九二一年及格高等文官試驗，卽入內務省，任京都府保安課長，嗣復赴歐美留學，回國後，歷任朝鮮總督府圖書科長，及內務省防犯、外事、保安、經濟各料科長。一九三八年升任和歌山縣知事。一九四一年以富田書記官長之推薦，轉任現職。

淺野總一郎 (Asano, Soichiro)

淺野財閥主持人，一八八四年生，東京府人。

早稻田大學商科畢業，淺野財閥之事業，係其一手創辦主持。現任自辦之日本水泥會社、土佐水泥會社、淺野水泥會社、日東水泥會社、關東水力電氣會社、磐城炭礦會社、小倉製鋼會社、沖電氣會社、伏木板紙會社、淺野物產會社、淺野同族商會社、東京灣埋立(建築)會社、台灣地所建築、及尼崎築港等會社社長。此外又兼青梅電氣鐵道會社監查，日本密業俱樂部理事，淺野密業會社、大日本鑛業會社、鶴見製鐵造船會社、及秩父水泥會社董事，關東禮券會社、淺野火藥會社、小倉鐵道會社、及淺野雨龍炭礦會社顧問。自日本政府發表同盟合併統制以來，卽與小野田水泥會社之笠井眞三，互爭日本水泥同業會會長之職，但結果爲氏所獲。其夫人係板垣退助之四女。

鹿兒島虎雄 (Kagoshima, Torao)

滿洲宮內府次長，一八八六年生，長崎縣人。

一九一〇年畢業於東京帝大法科政治學系。歷任宮內省書記官兼宮內事務官、內匠寮監理科長、大臣官房總務科長等職，至一九三四年任式部次長。一九三九年五月，入滿洲任現職。

十二畫

斯波孝四郎 (Shiba, Koshiro)

三菱重工業會長。

東京帝大工學部畢業後，即入長崎造船所服務。數十年來，始終服務於造船界，故得出膺三菱重工業會長及造船聯合會長之重任。為人極儉樸，其會長室內，打破過去之傳統，無一祕書及僕役。

渡正監 (Watarai, Masami)

上海工部局警察處總監，一八九七年生，東京府人。

渡正元之第九子，入嗣於伯父平城家。一九二一年東京帝大法科政治學系畢業，並及格高等文官考試之行政科及外交科。歷任社會局屬員，大阪府警視警察講習所教授，和歌山縣警察部長，靜岡縣學務部長，福島縣警察部長，青森縣總務部長，東京府經濟部長等職，至一九三九年任千葉縣總務部長，一九四一年調滬，補赤木副總監遺缺，最近經工部局董事會議決，昇任現職。前以辦事有功，晉階五位，敘勳五等。著有警察之理論與實際一書。

森德治 (Mori, Tokuji)

海軍大佐，一八九一年生，福島縣人。

一九一一年海軍兵學校畢業。事變當初，在軍事普及部任職報告工作，婦孺皆知其名，後經大鯨艦長而升任揚子

江湖北部隊指揮官，以攻漢口有功，會獲嘉賞。歸國後，任大湊要港參謀長，一九四〇年十一月調攝津特務艦長，一九四一年九月就舞鶴鎮守府人事部長。按鎮守府人事部長，為鎮守府長官之最高幕僚，向以少將階級充任，今氏以大佐登用，殊屬破格。

森山親一 (Moriyama, Eiichi)

法制局長官，一八九四年生，三重縣人。

伊藤右衛門之子，生後二歲，即入嗣於森山兵介家，故改今姓。一九一九年畢業於東京帝大之法科德文法學系，經高等文官考試及格，歷任內務廳員、警察講習所教授及埼玉縣理事官。一九二三年關東大震災後，任帝都復興院事務官及法制局參事。一九三四年任法制局第一部長，嗣調第二部長。一九四一年十二月東條內閣成立，擢任現職。

森重千夫 (Morishige, Tatsu)

關東局司政部長，一九〇一年生，東京府人。

東京帝大法科英文法學系畢業。曾任拓務省會計課長。嗣以與今吉敏雄關係甚深，乃繼今吉氏之後而任現職。當駐滿機構改革問題發生時，與議員三田村武夫，同為現地拓務官吏之首腦，活躍頗力。

森部隆 (Moribe, Takashi)

拓南局長，一八九四年生，福岡縣人。

一九三〇年畢業東京帝大德文法學系後，久任地方官員。迫前小磯首相刷新人事時，由島根縣知事轉入拓務省。入拓務省後，即留意大陸及南洋方面之行政，故能於最近派任現職。氏極重人情，無官僚習氣。

森田川郎 (Morita, Saburo)

馬來語辭書著者，一八八三年生，青森縣人。

氏自幼即志在南方，青年時代，經海軍檢驗合格，以練習艦隊船員，得歷游暹羅、馬來、印度、爪哇、婆羅洲等地，嗣由海軍派為委託生，專攻馬來語三年，期滿復隨軍艦歷游南方各地，一九一七年以少佐退役，隻身赴柔佛（在馬來半島），經營橡皮園，至一九二二年歸國，自後潛心研究馬來情事，並發明馬來方面實用小件機械十數種，均得專利權，一九四〇年山海軍方面推薦，任橫濱某青年學校首席教授。大東亞戰爭發生後，乃着手編著是書，據稱馬來語中，雜有華語英語，頗不單純。

植田貢太郎 (Takeda, Kotaro)

吉林省次長，一八九三年生，香川縣人。

高松商業學校卒業後，於一九一二年入南滿鐵道會社任職，一九三一年升任該會社參事兼監理部計劃課主任，專司傍系五十餘會社之統制事務。一九三二年以關東軍司令官之

推轂，入滿洲任監察院代理審計部長，一九三五年任新京特別市公署總務處長。一九三七年七月任總務廳監察官，嗣經治安部警務司長而任現職。

菅原達郎 (Sugahara, Tatsuro)

滿洲協和會中央本部總務部長，一九〇一年生，宮城縣人。

一九三五年卒業東京帝大法科，同時及格高等文官考試，一九三七年任法院推事，後入滿洲經司法部轉任現職。

結城清太郎 (Yuki, Seiichiro)

滿洲農產公社理事長，一八九四年生，山形縣人。

一九一九年卒業京都帝大法科，即供職南滿鐵道會社，閏二年，派赴歐美留學，一九二八年升參事，一九三二年入滿洲政府，歷任監察院秘書官、總務所長、代理國都建設局長、國務院密山辦事處長、協和會中央本部專任委員、及濱江省次長。至一九三八年轉任產業部開拓總局長，後升興農部次長，一九四一年七月，滿洲政府為圖食糧飼料油料等農產物及其加工品之集中配給，將原有之滿洲糧穀株式會社、滿洲特產專管會社、及滿洲穀粉管理株式會社，三者合併而改設為滿洲農產公社，資本凡七千萬圓，其理事長一席，即攝氏充任。

飯田祥二郎 (Iida, Shojiro)

陸軍中將，一八八八年生，東京府人。
 一九〇七年畢業陸軍士官學校。初以少尉任官，至一九三七年晉級少將，其間曾任陸軍兵器本廠附、陸軍省軍務局長及兵務局長等職，一九四一年七月，以中將任越南增派部隊最高指揮官。大東亞戰事發生後，調任緬甸方面陸軍最高指揮官。

十三畫

源田松川 (Genda, Matsuzo)

濱江省次長，一八九九年生，廣島縣人。
 氏為源田春七之長子，一九二三年卒業於東京帝大法科，初供職札幌市稅務署，一九二七年任關東廳財務局財務科長，一九三二年轉入滿洲，任財政部稅務司長，一九三九年辭現職。

鈴木久武 (Suzuki, Hisatake)

海軍少將，一八八九年生。金澤市人。
 一九一一年海軍機關學校卒業。歷任古鷹、高雄各機關長，軍務局第三科長，佐世保鎮守府機關長，及聯合艦隊機關長等職。一九三八年十一月以來，任海軍技術研究所部長，至一九四一年九月調任海軍工機學校校長。

鈴木祥枝 (Suzuki, Sakae)

飯野毅夫 (Ino, Takeo)
 滿洲交通部次長，一八九七年生，奈良縣人。
 一九二〇年高考及格，翌年卒業專修大學法科，即入遞信省，歷任通信事務官及遞信書記官，至一九三五年任通信局長，一九三九年後，轉任滿洲政府現職。曾於一九三二年赴歐美考察。

日本損害保險協會會長，一八九五年生，香川縣人。

一九〇六年神戶高商畢業後，即供職東京海上火災保險會社，歷三十五年，由一普通社員而升至社長，一九四一年國策會社之日本損害保險協會成立時，轉任為該會會長。

鈴木梅太郎 (Suzuki, Umataro)

前大陸科學院院長，一八七四年，靜岡縣人。
 一八九六年於東京帝大農科卒業後，即任母校副教授及盛岡高等農林學校教授，旋升為母校教授，至一九三四年十二月任東京帝大名譽教授。一九三七年任滿洲大陸科學院院長，一九四一年辭職。曾於一九〇一年得博士學位。現為日本帝國學士院會員及理化研究所研究員。

十四畫

福田良三 (Fukuda, Ryozo)

與亞院廈門連絡部長，一八八九年生，熊本縣人。

一九一〇年海軍兵學校畢業，翌年以少尉任官，至一九二八年晉級少將。其間歷任海軍潛水學校教官、潛水戰隊參謀、驅逐艦艦長、海軍大學教官、那智艦長、委託官，臨時華南調查局參與、及台灣總督府特別委託官等職。一九四一年繼太田泰治少將之後，任現職。

窪田空穗 (Kubota, Kuho)

歌壇名家，一八七七年生，長野縣人。

一九〇四年早稻田大學畢業後，即入國木田獨步所經營之「獨步社」任記者，同時在女子美術學校任教師，其處女歌集「正午之野」，亦於此時出版。當時之作風，傾向於浪漫主義，但其後作風逐漸改變，至一九一八年第五歌集「土之遠眺」出版時，已能自成一派。一九二〇年應母校之聘担任講師，一九二六年升任教授，同時主辦「國民文學」雜誌。大正昭和二代之歌人，幾盡出其門下。一九四一年與上村松園女史，同舉為帝國藝術院會員。

十五畫

德川國順 (Tokugawa, Kuniyuki)

公爵，一八八六年生，東京府人。

氏係舊水戶藩主德川家達公之後，德川篤敬之子。一九一九年，因祖勳晉封公爵，旋舉為貴族院議員及日本紅十字會副會長，一九二七年榮獲紺綬褒章。現升任紅十字會會長，並為貴族院候補議長。

德富猪一郎 (Tokutomi, Ichiro)

貴族院議員，一八六三年生，熊本縣人。

士族德富一敬之長子，號蘇峯，曾就學於京都同志社。著成「將來之日本」一書，一舉而馳譽文壇。後創民友社，並發刊國民新聞，自任社長。一八九六年漫遊歐洲。回國後，任內務省勳任參事官，敍功正五位，嗣又勳選為貴族院議員，敍勳三等。一九一七年來華游歷。翌年，着手編撰「近世國民史」之大著，一九二三年脫稿，獲帝國學士院恩賜賞，並勳任為帝國學士院會員，一九二八年陞勳二等。是時辭去國民新聞社社長，任日日新聞社社實之職。一九三七年又勳任帝國藝術院會員。氏為日本新聞界之鼻祖，始終盡瘁於文化事業，議論透闢，為時代之先驅，今雖年邁，仍時在報章雜誌發揮宏論，大有老當益壯之概。著作數百卷，皆廣行於世。明治文壇耆宿故德富蘆花氏，為其胞弟。

澁谷川郎 (Shibuya, Saburo)

滿洲治安部次長，一八八八年生，宮崎縣人。

一九〇八年畢業陸軍士官學校，即任步兵少尉。一九二四年留學德國，旋又畢業陸軍大學。嗣後歷任第一師團司令部附、東京農業大學教官、關東軍司令部附、黑河特務機關長、及步兵第三聯隊長等職。一九三六年七月以大佐編入豫備役。同年八月，應滿洲國之聘，任濱江省公署警務廳長，嗣經治安部警務司長及牡丹江省長，而任現職。

幣原喜重郎 (Hiedehara, Kihiro)

前外務大臣，一八七二年生，大阪府人。

文學博士幣原坦之弟，男爵岩崎久彌之妹婿。一八九五年東京帝大英文法學系畢業，翌年及格外外交官領事官考試，以候補領事官派駐仁川、倫敦各地。其後累升為釜山領事、外務省書記官、外務省調查局長、駐美駐英各大使館參事官、駐荷蘭丹麥等國公使、外務省次官、及駐美大使；至一九二〇年以功賜列華族，封授男爵。次年以全權委員名義出席華盛頓會議；一九二二年任外務省顧問；一九二四年後，先後任加藤高明內閣、濱口雄幸內閣、及若槻禮次郎內閣之外務大臣，其間曾於濱口內閣一度任代理首相，迨九一八事變發生後辭職，賜前官禮遇。此外自一九二五年以來，又勳選為貴族院議員。

十六畫

橋本圭三郎 (Fashimoto, Keizaburo)

帝國石油會社總裁，一八六五年生，東京府人。

一八九〇年東京帝大法科畢業後，即入政界，初以法制局試補任用，後歷任樞密院書記官及大藏省主計局長，一九〇年任大藏次官，一九一三年任農商次官，一九一六年勅選爲貴族院議員。後乃轉入實業界，任寶田石油會社社長，成爲斯界之重鎮，故一九四一年各石油會社合併爲帝國石油會社後，即擔任總裁之要職。今日日本之香烟專賣局，亦爲氏所設計創立。

橋本清之助 (Fashimoto, Seinosuke)

翼贊政治會事務局長，一八九四年生，東京市人。

氏僅江戶（東京）日本橋十思小學畢業，但刻苦自修，造詣極深。曾任時事新報記者十年，一九二二年至二四年，以該報特派員，赴歐考察戰後德國國情，鉅細靡遺。歸國後，任新日本同盟（主辦者爲近衛、後藤、田澤、丸山諸氏）

調查部長，致力於青年運動，垂七八年之久；是時並與安岡正篤氏等，參與創立國維會。至一九三二年出任齋藤內閣中後藤農相（文夫）之祕書官，一九三四年後藤爲岡田內閣之內相，氏又任內相祕書官。嗣經農業報國聯盟理事等職，於最近衆議員總選舉時，任翼贊政治體制協議會事務局長，極力勵行推薦制，繼又參劃翼贊政治會創立事宜。該會成立，總裁阿部信行大將，即邀任現職。

澤村克人 (Sawamura, Katsuto)

翼贊會組織部副部長。

北海道帝國大學畢業後，即入朝日新聞社，任農政記者。一九三七年應召出征，一九四〇年夏回國，改任該社論說委員，未幾，轉任新體制準備會之常任幹事，一九四一年翼贊會組織部部長後藤隆之助，邀任現職。此外與昭和研究會，亦有關係。

十七畫

瀬古保次 (Seko, Yasuji)

當動局總裁，一八八七年生，神奈川縣人。

一九一五年畢業於東京帝大政治學科，一九二〇年由內務省而入晝族院，一九三七年十月繼長世吉氏之後，任該院書記官長，爲近衛、松平兩議長之股肱。當昔年近衛在北豐島郡受壯丁之適齡檢查時，氏適任該郡郡長，故與近衛之關係尤深。一九四〇年任現職。

簡牛凡夫 (Kangyu, Tsuneo)

衆議院議員，一八九四年生，福岡縣人。

早稻田大學政治經濟系畢業後，復留學德國，回國以來，二次當選爲衆議員。其議員生活，雖未甚久，然以其性格思想之獨特，頗引起世人之注目，日本政界香宿望月圭介會謂：「予爲一自信極強之人，而簡牛亦不弱於予」，由此可知其一斑。

鶴見左吉雄 (Tsurumi, Sakio)

羊毛工業會會長，一八七三年生，石川縣人。

一八九九年東京帝大法科畢業。經高等文官考試及第，入內務省，任岩手、兵庫各縣參事官，及三重、兵庫各縣之內務部長。嗣轉任農商書記官兼外務書記官，及農商省水產

局長等，至一九二四年升任農務省次官。此後即脫離政界，從事實業，現除大東紡織會社社長外，尚兼日本石油董事，帝國發明協會副會長，及日滿緬羊協會理事長等職。一九四一年經營羊毛企業之九集團，合併成功，即舉氏任會長。氏對於貿易史，頗有研究，著有日宋貿易史等書。

二十四畫

鹽田廣重 (Shioda, Hiroshige)

日本醫科大學學長，一八七三年生，京都府人。

一八九七年畢業於東京帝大醫科後，復入大學院研究，並出任助手，一九〇二年任助教，明年以私費留學海外，一九一一年得醫學博士學位，一九二二年升任教授。氏於大學卒業後，即與長與氏協力研究瘧病，卒成爲日本斯界之權威。一九一四年第一次世界大戰時，曾由日本紅十字會派往法國，對各國之戰地醫藥知識，吸收頗多，因又成爲戰地外科之專家。當濱口首相在東京站被刺，氏聞訊後，曾趕往輸血營救。現除該大學學長外，尙兼任東京帝大名譽教授，內閣恩給局顧問等職。

鹽谷 溫 (Shionoya, Yutaka)

東京帝國大學名譽教授，一八七八年生，東京府人。

氏爲幕末鴻儒鹽谷宕陰之孫，前一高教授鹽谷時敏之子，家學淵源，一九〇二年東京帝大文學院漢學系畢業後，又入大學院研究。一九〇五年任學院教授，次年任東京帝大文學院教授，同年爲欲專攻中國文學，留學中德二國，回國後任東京帝大教授及斯文會理事長，一九二〇年獲文學博士學位，一九三一年任順宮(日皇之第四公主)教讀師傅，次年任東大名譽教授。氏爲日本漢學之權威，提倡孔教不遺餘力，漢詩亦甚工。

(終)

日本時人辭典英文拼音索引

英文拼音	姓名	頁次	姓名	頁次
A				
(兼之前爲姓、兼之後爲名)				
Abi; Fusejiro	阿部房次郎	153	Akinaga, Tarkizo	169
Abi; Genki	安倍源基	89	Akita, Kiyoshi	169
Abi; Isao	安倍磯雄	89	Akiyama, Iruki	169
Abi; Katsuo	阿部勝雄	153	Akiyama, Kunio	168
Abi; Kenichi	阿部賢一	153	Akiyama, Teisuke	169
Abi; Nobuyuki	阿部信行	153	Akizuki, Satoo	補 21
Abi; Yoobishige	安倍能成	89	Amakasu, Masahiko	71
Abi; Kiyokaru	安泉清徳	89	Amanu, Eiji	53
Adachi, Kenzo	安達謙藏	90	Ameniya, Tatsumi	157
Adachi, Kenzo	安達堅造	90	Ameya, Kikuo	157
Aida, Twaoo	相田岩夫	163	Anami, Koroehika	152
Aizagi, Ohikayuki	赤木毅之	115	Ando, Kishuro	補 14
Aizaike, No	赤池 渡	118	Ando, Kyoshiro	補 31
Akimastsu, Katsumaro	赤松克麿	116	Ando, Masarumi	91
Akimastsu, Eioora	赤松小寅	116	Ando, Rihichiu	91
Akashi, Toruo	明石照男	132	Aoki, Kazuo	157
			Aoki, Jusei	158
			Aoki, Minoru	補 20
			Aoki, Yasushi	158
			秋永月三	
			秋田 清	
			秋山 昱鏡	
			秋山邦雄	
			秋山定輔	
			秋月左都夫	
			甘粕正彦	
			天羽英二	
			雨宮 巽	
			雨谷菊夫	
			阿南惟幾	
			安藤紀三郎	
			安藤任四郎	
			安藤正純	
			安藤利吉	
			青木一男	
			青木重誠	
			青木 實	
			青木 泰	

Endo, Ryusaku	遠藤柳作	217	Funayama, Nobuichi	船山信一	199
Etō, Genkuro	江藤源九郎	92	Furuno, Inosuke	古野伊之助	62
	F		Futami, Jūro	二見遊郎	2
Fujie, Keisuke	藤江憲輔	239	Futara, Yoshinori	二荒芳徳	2
Fuji, Keinosuke	藤井啓之助	237			
Fuji, Soji	藤井宗治	238	Genda, Matuzo	源田松三	補 36
Fujikake, Suematsu	藤懸末松	240	Go, Seinosuke	郷 誠之助	218
Fujino, Megumu	藤野 恵	239	Godo, Takuo	伍堂卓雄	83
Fujinuma, Shinobu	藤沼庄平	239	Gondo, Seikyū	權藤政卿	242
Fujisawa, Chikao	藤澤親雄	240	Goto, Asataro	後藤朝太郎	162
Fujita, Eisuke	藤田榮介	233	Goto, Fumio	後藤文夫	161
Fujita, Risaburo	藤田利三郎	238	Goto, Keita	後藤文夫	補 7
Fujita, Hisaonri	藤田尚徳	238	Goto, Kunihiko	五島隆太	162
Fujita, Susumu	藤田 進	238	Goto, Takanosuke	後藤國彦	162
Fujiwara, Ginjiro	藤原銀次郎	239	Goto, Teiji	後藤徳次	162
Fujiyama, Aichiro	藤山愛一郎	237			
Fukui, Eiigo	深井英五	194	H		
Fukao, Ryutaro	深尾隆太郎	194	Hada, Shigekazu	波田重一	149
Fukuda, Ryozo	福田良三	補 27	Hadano, Kenichi	波多野乾一	149
Fukunoto, Ryuichi	福本勇一	217	Habu, Masarori	羽生雅則	103
Funada, Naka	船田 中	199	Hamada, Kichijiro	濱田吉治郎	235
Funatsu, Tatsuzōchiro	船津辰一郎	199	Hamamoto, Kinsaburo	濱本喜三郎	235
			Hanajima, Koichi	花島孝一	150

Harakami, Tadashi	花谷 正	150	Hashizume, Haruo	橋爪明男	229
Hanawa, Yoshii	境 義井	215	Hasumi, Yasushi	祐見 安	198
Haneda, Tohru	羽田 亨	15	Hasunuma, Shigeru	蓮沼 蕃	226
Hara, Kuninichi	原 邦道	176	Hata, Hikosaburo	秦 彦三郎	185
Hara, Mamoru	原 守	176	Hata, Shinji	秦 眞次	185
Hara, Sobei	原 惣兵衛	176	Hata, Shunroku	畑 俊六	167
Hara, Yoshinichi	原 嘉道	176	Hatoyama, Ichiro	鳩山一郎	221
Harada, Ken	原田 健	177	Hatta, Yoshiaki	八田嘉明	3
Harada, Kunakichi	原田熊吉	177	Hayakawa, Saburo	早川三郎	99
Harada, Seichi	原田清一	177	Hayashi, Hirotaro	林 博太郎	133
Haraguchi, Takao	原口武夫	177	Hayashi, Katsura	林 桂	133
Haragawa, Ki	長谷川 基	155	Hayashi, Kyujiro	林 久治郎	133
Hasegawa, Kiyoshi	長谷川 清	155	Hayashi, Nariyuki	林 仙之	133
Hasegawa, Myozekan	長谷川如是閑	155	Hayashi, Raissaburo	林 頼三郎	134
Hasegawa, Toru	長谷川 透	156	Hayashi, Seijuro	林 鉄十郎	134
Haraida, Kunihiko	橋田邦彦	230	Hayashi, Yamakichi	林 彌三吉	135
Hashimoto, Gun	橋本 繁	229	Hayashi, Yoshihide	林 義秀	133
Hashimoto, Keizaburo	橋本圭三郎	29	Hazama, Shigeru	抜間 茂	180
Hashimoto, Kingoro	橋本成五郎	229	Hibino, Masuharu	日比野正治	53
Hashimoto, Seikichi	橋本清吉	229	Hidaka, Shirrokuro	日高信六郎	53
Hashimoto, Seinosuke	橋本清之助	29	Higai, Setzo	樋貝銕三	225
Hashimoto, Toranosuke	橋本虎之助	229	Higuchi, Kiichiro	樋口季一郎	225

Hijiwata, Shugemi	土方成美	40	Honda, Tadao	本田忠雄	66
Hirafte, Hideo	平出英夫	64	Honden, Yoshio	本位田健男	66
Hira sa, Yuzuru	平賀 譲	10	Honjo, Shigeru	本庄 繁	67
Hirafte, Teizo	平井出貞三	63	Honma, Masaharu	本間雅晴	67
Hira no, Rikizo	平野力三	64	Honma, Sei	本間 精	67
Hirano, Yoshitaro	平野藏太郎	65	Honryo, Shinjiro	本領信治郎	10
Hiranuma, Kichiro	平沼駿一郎	64	Horai, Ichimatsu	實来市松	237
Hira o, Hechinaburo	平生凱三郎	63	Hori, Kyoichi	堀 公一	196
Hirafte, Yoshio	平瀬登雄	65	Hori, Shin	堀 新	196
Hirawa, Seizan	平田正判	63	Hori, Takeo	堀 丈夫	195
Hirawa, Noboru	平田 昇	63	Hori, Yoshiatsu	堀 義貴	196
Hirawa, Hiroyo	平塚廣藏	65	Horikiri, Zenbee	堀切善兵衛	197
Hirayama, Kiname	平澤 翠	65	Horikiri, Zenjiro	堀切善次郎	197
Hirose, Hisatada	廣瀬久忠	223	Horiuchi, Kazuo	堀内一雄	23
Hirota, Koki	廣田弘毅	222	Horiuchi, Kensuke	堀内謙介	197
Hisamura, Taneaki	久村種樹	11	Horiuchi, Shigetada	堀内茂禮	196
Hisei, Tomi, Tatsuo	久富總夫	12	Horiuchi, Tareki	堀内干城	196
Hisikari, Takashi	菱刈 隆	210	Hoshino, Naoki	星野直樹	163
Hishinuma, Jisamu	菱沼 勇	210	Hosokawa, Moritatsu	細川隆立	200
Honda, Kunataro	本多熊太郎	65	Hosokawa, Toshiro	細萱茂子郎	200
Honda, Masaki	本多政村	66	Hotta, Masaaki	堀田正昭	197
Honda, Masuzo	本田増藏	66	Hyakutake, Gengo	百武源吾	101

Hyalutake, Saburo	百武三郎	101	Ikedai, Tadataka	池田忠孝	93
Hyalutake, Seichichi	百武清吉	101	Ikeo, Yoshizo	池尻芳藏	93
	I		Ikeji, Kitokuro	一木喜徳郎	1
Ichiji, Sanetaka	一條賢孝	1	Imada, Shintaro	今田新太郎	50
Ichihara, Hihotaro	市河彦太郎	59	Imai, Gosuke	今井五介	8
Ichimiyama, Fusaiiro	一宮房治郎	1	Imai, Takeo	今井武夫	50
Ide, Iwakusu	井田整箱	48	Imamatsu, Jiro	今松治郎	51
Ide, Nobutoki	井出宣時	49	Imamura, Hitoshi	今村均	50
Ide, Tetsuzo	井出鐵藏	49	Imamura, Hitoshi	今村等	50
Iguchi, Sadao	井口貞夫	48	Imamura, Shintaro	今村新太郎	50
Iida, Sadakata	飯田貞因	212	Imayoshi, Toshio	今吉敏雄	8
Iida, Seizo	飯田清三	213	Inada, Masaane	稲田昌敏	225
Iida, Shojiro	飯田祥二郎	補	Inagaki, Yukiō	稻垣征夫	226
Iijima, Hatajii	飯島樺司	213	Iino, Eichichi	井野英一	補
Iinuma, Jo	飯村 稔	213	Iino, Hirova	井野碩哉	49
Iino, Koji	飯野浩次	213	Inoue, Toshie	荻野毛利葵	211
Iino, Takeo	飯野毅夫	補	Inouye, Kenichii	井上謙吉	48
Iinuma, Manoru	飯沼 守	213	Inouye, Kōbei	井上紅梅	48
Ikawa, Tadao	井川忠雄	47	Inouye, Shigeyoshi	井上成英	47
Ikedai, Kiyoshi	池田 清	補	Inouye, Tadashiro	井上屋四郎	補
Ikedai, Seihin	池田成彬	92	Inouye, Tadayā	井上忠也	補
Ikedai, Sunjissa	池田純久	93	Inukai, Ken	犬養 健	補

Irisawa, Fumihaki	入澤文明	補	1	Ito, Eizozo	伊藤秀三	84
Iriya, Kariichi	入江賢一		4	Ito, Kenzo	伊藤賢三	84
Iriya, Kō	入江 昂		4	Ito, Masaki	伊藤政孝	83
Iriya, Tanenori	入江鶴矩		4	Ito, Masanori	伊藤正徳	84
Irunano, Takeo	入原野武雄		5	Ito, Nobuharu	伊藤延史	84
Iseha, Takashi	井坂 孝		49	Ito, Yosaburo	伊藤與三郎	補
Iseki, Takarasa	井藤隆昌		49	Iwagoe, Tsuretechi	岩越碩一	129
Ishibashi, Tanzan	石橋湛山		82	Iwahaze, Takeo	岩崎宗雄	129
Ishida, Kaoru	石田 馨		79	Iwai, Jutarō	岩井重太郎	128
Ishijuro, Hideohiko	石黒英彦		80	Iyamura, Michiyo	岩村通世	129
Ishijuro, Tadaasu	石黒忠篤		80	Iyamura, Michitomo	岩倉道俱	補
Ishii, Taro	石須猪太郎		80	Iyanura, Seichi	岩村清一	128
Ishii, Ko	石井 康		79	Iyanura, Seiin	岩村成允	128
Ishikawa, Junjuro	石川淳十郎		78	Iyanura, Yoshio	岩村義雄	129
Ishisaka, Hiroshi	石坂 弘		80	Iyasaki, Zairio	岩崎民男	補
Ishiyama, Hirochiro	石原廣一郎		81	Iyata, Ainosuke	岩田愛之助	128
Ishiyama, Kinji	石原莞爾		81	Iyata, Tomio	岩田富美夫	128
Ishiwatari, Sotaro	石渡莊太郎		81	Izawa, Takie	伊澤多喜男	83
Ishizawa, Yutaka	石澤 豊		82			
Isozaki, Rensuke	磯谷廉介		230			
Ito, Seishiro	板垣征四郎		145			
Ito, Bunichi	伊藤文吉		84			
				Kada, Tetsuji	加田哲二	60
				Kadono, Chokkyuro	門野重九郎	157
				Kagesa, Sadaaki	影佐貞昭	224

Kagoshima, Torao	鹿兒島虎雄	補	23	Kataoka, Yarusshi	片岡 安	補	10
Kanbei, Kan'ichiro	龜井實一郎	232		Katayama, Tetsu	片山 哲	70	
Kan'inoura, Setaro	上村清太郎	9		Kato, Denjin	加藤傳次郎	62	
Kan'imura, Shinichi	上村伸一	9		Kato, Kani	加藤完治	60	
Kar'io, Ichiharu	摩尾式泰	補	21	Kato, Kanju	加藤勘十	61	
Kamiyoshi, Shoichi	神吉正一	補	20	Kato, Sotomatsu	加藤外松	60	
Karai, Shoji	金井章次	154		Kato, Takayoshi	加藤隆義	61	
Karazawa, Nassao	金澤正夫	154		Kato, Takeo	加藤武男	61	
Karida, Masao	神田正雄	168		Katsu, Masanori	勝 正憲	208	
Karida, Masetane	神田正種	168		Katsuda, Teiji	勝田貞次	209	
Kataniitsu, Tsuneo	金光勝夫	154		Kawabe, Shozo	河邊正三	148	
Katayu, Tsuneo	鷹牛凡夫	補	30	Kawabe, Torashiro	河邊虎四郎	149	
Kerjo, Yoshisaburo	加納芳三郎	80		Kawada, Isao	河田 烈	146	
Kanokogi, Kazunobu	鹿子木昌信	192		Kawagishi, Munzaburo	川岸文三郎	38	
Karasaawa, Toshiki	廣澤俊樹	180		Kawagoe, Shigeru	川越 茂	39	
Kasaka, Masayasu	香坂昌康	170		Kawagoe, Takeo	川越文雄	39.	
Kasama, Akio	笠間栄雄	199		Kawai, Eihiro	河合榮治郎	147	
Kasahi, Kohai	香椎浩平	170		Kawai, Misao	河合 操	147	
Kashiwagi, Hideo	柏木秀雄	163		Kawai, Tatsuo	河相達夫	補	17
Katagiri, Eitochi	片桐英吉	補	10	Kawai, Yoshinari	河合良成	146	
Katakura, Makoto	片倉 真	71		Kawakami, Jotaro	河上文太郎	145	
Katano, Jushu	片野重彦	補	11	Kawakami, Koichi	河上弘一	145	

Kawamoto, Daisaku	河本大作	146	Kimura, Eitichi	木村銳市	55
Kawamoto, Kunio	川本邦雄	37	Kimura, Heitaro	木村兵太郎	55
Kawamoto, Yoshitaro	川本芳太郎	37	Kimura, Masutarō	木村増太郎	55
Kawamura, Kyosuke	河村恭輔	147	Kimura, Shiroshichi	木村四郎七	55
Kawamura, Saburo	河村參郎	147	Kimura, Shotatsu	木村尚達	55
Kawamishi, Seiji	川西清司	38	Kinoshita, Bin	木下 敏	54
Kawarada, Kaikichi	河原田鎌吉	147	Kinoshita, Eianji	木下牛治	54
Kawasaki, Katsu	川崎 克	39	Kishi, Nobunake	岸 信介	129
Kawashima, Shintaro	川島信太郎	38	Kishida, Kunio	岸田國士	130
Kawashima, Yoshiyuki	川島義之	38	Kishimoto, Ayao	岸本綾夫	130
Kawazura, Ryuzo	川面隆三	38	Kita, Katsutarō	北勝太郎	59
Kaya, Okinobu	賀屋興宣	212	Kita, Nagao	喜多長雄	202
Kayaba, Gunzo	萱場軍藏	217	Kita, Reikichi	北 玲吉	59
Kazami, Akira	風見 章	174	Kita, Seichi	喜多誠一	202
Kazuki, Kiyoshi	春日清司	170	Kita, Seichiro	喜多哲一郎	202
Kido, Koichi	木戸幸一	54	Kitajima, Kenjiro	北島謙次郎	59
Kikuchi, Kan	菊池 寛	210	Kitachi, Shiro	木内四郎	54
Kikuchi, Ryotchi	菊池良一	209	Kiyose, Ichiro	清瀬一郎	193
Kikuchi, Takao	菊池武夫	209	Kiyozawa, Tetsu	清澤 洵	193
Kiluchi, Toyosaburo	菊池豊三郎	210	Ko, Shiyoku	洪 恩翊	165
Kimimori, Taro	公森太郎	51	Kobayashi, Ichizo	小林一三	25
Kimishima, Seikichi	君島清吉	110	Kobayashi, Jiro	小林次郎	4

Kobayashi, Junichiro	小林順一郎	26	Komatsu, Teruhisa	小松輝久	27
Kobayashi, Mitsunasa	小林光政	25	Komiyama, Kyozo	小見山恭造	24
Kobayashi, Seizo	小林謙造	26	Komori, Shinichiro	小森七郎	5
Kobayashi, Shosaburo	小林省三郎	26	Kondo, Eijiro	近藤英次郎	151
Kobayashi, Sonosuke	小林宗之助	25	Kondo, Eizo	近藤榮藏	152
Kodaira, Gonjichi	小平權一	24	Kondo, Jotarō	近藤塚太郎	152
Kodama, Hidio	児玉秀雄	122	Kendo, Nobutake	近藤信竹	152
Kodama, Kenji	児玉謙次	122	Keno, Ichiro	河野一郎	148
Kodama, Toruro	児玉友雄	122	Keno, Mitsu	河野 密	148
Kogei, Mineichi	古賀峯一	62	Konoye, Fuminaro	近衛文麿	150
Koguchi, Gorō	小口五郎	23	Kosuda, Katsuzo	小須田勝造	30
Kohiyama, Naoto	小日山直登	23	Kotake, Shigeru	小竹 茂	4
Kohjō, Shiro	小池四郎	24	Kotani, Setsuo	小谷節夫	25
Koiso, Kuniaki	小磯國昭	30	Kotsuki, Yoshio	上月良夫	9
Koizumi, Chi-sahiko	小泉親彦	27	Koyama, Shoju	小山松壽	23
Koizumi, Goro	小泉悟郎	27	Kubota, Hisaharu	久保田久晴	12
Koizumi, Matajirō	小泉又次郎	27	Kubota, Kubo	窪田空穂	27
Koizumi, Shinzo	小泉信三	4	Kudo, Chu	工藤 忠	39
Kojima, Seichi	小島 浩一	29	Kudo, Tetsuo	工藤鐵男	40
Kojima, Shinichi	小島新一	29	Kuhara, Fusanosuke	久原房之助	11
Kokusan, Yazo	榑嶺彌三	244	Kumagai, Kenichi	熊谷 憲一	225
Komai, Tokuro	駒井徳三	226	Kume, Seichi	久米 精一	2

Kurihara, Minoru	栗原美能留	182	Maeda, Tachitane	前田利爲	159
Kurihara, Sho	栗原 正	181	Maeda, Yonezo	前田米藏	159
Kurimoto, Yunosuke	栗本勇之助	181	Maeno, Shigeru	前野 茂	補
Kuriyama, Shigeji	栗山茂二	補 22	Makata, Kin	眞方 勲	184
Kuriyama, Shigeru	栗山 茂	181	Makino, Masamichi	牧野正迪	149
Kuroda, Hideo	黒田英雄	214	Makino, Moto	牧野 元	補
Kuroda, Naगतoshi	黒田長和	213	Makino, Ryojo	牧野良三	150
Kurosaki, Teizo,	黒崎定三	214	Matita, Kakusaburo	牧田寛三郎	補
Kurusu Saburo	來栖三郎	122	Manaki, Yoshinobu	馬奈水敏信	補
Kusaka, Ninchi	草鹿任一	187	Mariyama, Tsurukichi	丸山鶴吉	22
Kushibuchi, Seichi	柿淵鎧一	237	Masuda, Giichi	増田義一	11
Kushida, Manzo	串田萬藏	111	Masuda, Jiro	増田次郎	222
Kusunoto, Sanetaka	楠本實隆	216	Masuda, Jisuke	松田令輔	補
Kuwabera, Shigeharu	桑原重遠	182	Matsudairi, Tadahisa	松平忠久	138
Kuwajima, Kazue	桑島主計	182	Matsudairi, Tsuneo	松平恆雄	139
Kuwaki, Takaki	桑木崇明	182	Matsudairi, Yasunasa	松平康昌	139
Kizuo, Yoshihisa	荻生能久	217	Matsudairi, Yorinaga	松平順徳	139
M			Matsue, Haruji	松江春次	141
Maebuchi, Hayao	馬淵逸雄	補 22	Matsui, Gannosuke	松井源之助	133
Machida, Chuji	町田忠治	120	Matsui, Haruo	松井春生	138
Machijiri, Kazumoto	町尻重基	120	Matsui, Iwane	松井石根	137
Maeda, Minoru	前田 稔	160	Matsui, Makoto	松井 命	137

Matsui, Takuro	松井太久郎	137, 増21	Matsuoka, Yosuke	松岡洋右	142
Matsukata, Kojiro	松元幸次郎	136	Matsushita, Gen	松下元	136
Matsukuma, Hideo	松隈秀康	145	Matsurii, Chunjiro	松浦續次郎	144
Matsunae, Shigeoyoshi	松前重雄	補 18	Matsura, Junsa kuro	松浦淳次郎	144
Matsunoya, Hajime	松宮 順	143	Matsuzaka, Jironassa	松阪廣政	補 18
Matsumoto, Jūchiro	松本治一郎	140	Mazaki, Jimzaburo	眞崎藏三郎	184
Matsumoto, Jōji	松本潔治	141	Mazaki, Katsuji	眞崎勝次	183
Matsumoto, Jūji	松本勇治	140	Mike, Kazuo	三毛一夫	6
Matsumoto, Kanefiro	松本龜次郎	補 17	Miki, Bunkichi	三木武吉	6
Matsumoto, Kenji	松本健兒	140	Miki, Kiyoshi	三木清	6
Matsumoto, Manabu	松本 學	141	Miki, Morihiko	三木森彦	6
Matsumoto, Tadao	松本忠康	140	Mimuroto, Keiko	三望戸敬光	7
Matsumoto, Yūbei	松本勇平	140	Mingawa, Koji	皆川廣治	167
Matsumura, Hidesugu	松村秀逸	142	Mingawa, Toyōji	皆川豊治	168
Matsumura, Hisayoshi	松村久義	142	Minami, Jiro	南 次郎	160
Matsumura, Kenzo	松村謙三	補 18	Minobe, Tatsukichi	美濃部達吉	173
Matsumura, Susumu	松村 盛	142	Minobe, Yōji	美濃部洋次	172
Matsunaga, Takaoyoshi	松室孝良	144	Mitani, Kiyoshi	三谷 清	2
Matsunaga, Sei	松永 村	138	Mitani, Takunobu	三谷隆信	補 2
Matsunobu, Shigeji	松延繁次	143	Mito, Haruzo	水戸春造	56
Matsuno, Tsurubei	松野鶴平	144	Mitsuchi, Chuzo	三土忠造	6
Matsuka, Kōnakichi	松野駒吉	143	Mitsuhashi, Koichiro	三橋孝一郎	8

Mitsuyuki, Jiro	光行次郎	83	箱	24	24	徳治
Miura, Takemi	三浦武美	2	箱	24	24	隆
Miura, Yoshinaki	三浦義秋	8	箱	204	204	二郎
Miya, Jusho	三輪義莊	8	箱	205	205	景
Miyata, Mitsu	宮田光雄	178	箱	205	205	正平
Miyagawa, Fumao	宮川船夫	177	箱	24	24	重平
Miyagawa, Hyakutarō	三宅川百太郎	7	箱	13	13	五郎
Miyajima, Seisiro	宮島清次郎	178	箱	205	205	守人
Miyake, Keji	三宅光治	7	箱	198	198	盛角
Miyamoto, Takemonuke	宮本武之輔	177	箱	204	204	久
Miyawaki, Chokichi	宮脇長吉	178	箱	23	23	三郎
Miyazaki, Katsutarō	宮崎勝太郎	179	箱	24	24	一
Miyazaki, Masayoshi	宮崎正義	178	箱	165	165	新
Miyazaki, Hyusuke	宮崎龍介	179	箱	67	67	盛一
Miyazaki, Shigesaburo	宮崎繁三郎	179	箱	117	117	倉松
Miyazaki, Shinro	宮崎申郎	178	箱	117	117	龍太郎
Mizu, Yakichi	水津彌吉	56	箱	117	117	上知行
Mizuno, Rantaro	水野彌太郎	57	箱	118	118	阿典彌
Mizuno, Umeaki	水野梅麿	56	箱	118	118	頼麿
Mizutani, Chozaburo	水谷長三郎	56	箱	117	117	五郎
Mori, Eoto	毛里英於菴	56	箱	117	117	茂郎
Mori, Takushi	森 徳	204	箱	118	118	田省藏
Mori, Tokuji	森部 隆	24	箱	24	24	徳治
Moribe, Takashi	森岡二郎	204	箱	204	204	二郎
Morioka, Jiro	森岡 景	205	箱	205	205	正平
Morioka, Ko	森岡正平	205	箱	24	24	重平
Morioka, Shohci	森重平夫	24	箱	13	13	五郎
Morishige, Tateo	守島五郎	13	箱	205	205	守人
Morishima, Goro	盛島守人	205	箱	198	198	盛角
Morishima, Morito	森島角房	198	箱	204	204	久
Morishima, Sunifusa	森田 久	204	箱	23	23	三郎
Morita, Hisashi	森田 三郎	23	箱	24	24	一
Morita, Saburo	森山 一	24	箱	165	165	新
Moriyama, Ejichi	泉二新	165	箱	67	67	盛一
Motoji, Akekuma	本野盛一	67	箱	117	117	倉松
Motono, Seichi	村井倉松	117	箱	117	117	龍太郎
Murai, Kunamatsu	村上龍太郎	117	箱	117	117	上知行
Murakami, Ryutarō	村上知行	117	箱	118	118	阿典彌
Murakami, Tomoyuki	村岡典彌	118	箱	118	118	頼麿
Muraoka, Tsunetsugu	村頼直麿	118	箱	117	117	五郎
Murase, Chokuyo	村田五郎	117	箱	117	117	茂郎
Murata, Goro	村田茂郎	117	箱	118	118	田省藏
Murata, Shiro	村田省藏	118	箱			
Murata, Shozo						

Murayama, Chokyo	村山長舉	補	16	Nakai, Masutarō	中井増太郎	42
Murofushi, Takarobu	室伏滿信	補	20	Nakajima, Chikubei	中島知久平	45
Murahakoji, Kitotomo	武者小路公共		131	Nakajima, Kesago	中島今彌吾	45
Mitaguchi, Kadoya	牟田口廉也		101	Nakajima, Saburo	中島三郎	45
Mito, Akiya	武藏 葦		132	Nakajima, Tetsuzo	中島鐵藏	46
N						
Nagai, Matsuzo	永井松三		68	Nakamura, Akito	中村明人	44
Nagai, Ryutarō	永井柳太郎		69	Nakamura, Eiji	中村榮次	7
Nagakubo, Toshio	長久保俊夫		154	Nakamura, Katsuhira	中村勝平	44
Nagami, Toshihori	永見俊徳		69	Nakamura, Kotarō	中村孝太郎	43
Nagamochi, Genji	永持源次		70	Nakamura, Ryoza	中村良三	43
Nagano, Aikira	長野 朗		153	Nakamura, Senichi	中村操一	7
Nagano, Otsami	永野修身		70	Nakamura, Toyochi	中村豊一	44
Nagaoaka, Iyuchiro	長岡隆一郎		156	Nakamura, Yasujiro	中村安次郎	43
Nagashima, Harutsu	長島 毅		156	Nakanaka, Taro	中永太郎	7
Nagata, Hideoiro	永田秀次郎		69	Nakane, Naosuke	中根直介	47
Nagata, Tsunekiyo	長田常清		155	Nakane, Sadahiko	中根貞彦	44
Nagatsu, Sabie	永津佐比重		70	Nakanishi, Toshihori	中西敏彦	43
Naito, Kunaki	内藤熊吉		51	Nakano, Hirono	中野金次郎	47
Nakayama, Kenzo	中川健藏		42	Nakano, Seigoh	中野正剛	46
Nakahara, Kinji	中原謹司		45	Nakano, Tomio	中野登美雄	47
Nakahara, Yoshinasa	中原義正		45	Nakai, Kiyoshi	半井 清	80

Nakatani, Takeyo	中谷武世	44	Nomura, Eichisaburo	野村吉三郎	201
Nakayama, Masaru	中山 優	42	Nomura, Naokuni	野村盛邦	201
Nakayama, Ryuji	中山龍次	42	Nomaka, Tetsuya	野中徹也	200
Nakayama, Shigeru	中山 蕃	42			
Nakayama, Yasuo	中山隼人	42			
Nangumo, Chutich	南雲忠一	160	Oasa, Taduo	大蔵雄男	20
Nario, Kaneo	南條金雄	160	Obara, Masaki	小原正樹	5
Naoki, Rintaro	直木倫太郎	19	Obara, Naoshi	小原 直	補
Nara, Takeji	奈良武次	127	Obata, Tadayoshi	小畑忠良	28
Narita, Ichiro	成田一郎	98	Obata, Torikichi	小幡盛吉	30
Nasu, Shinoshi	那須 皓	105	Obata, Toshishiro	小畑敏四郎	28
Nemoto, Hiroshi	根本 博	183	Obuchi, Miki	大淵三樹	21
Ninomiya, Harushige	二宮治重	2	Ocho, Tosinoku	小汀利得	24
Nishi, Haruhiko	西 春彦	104	Oda, Nobutsune	織田信恆	235
Nishihara, Issaku	西原一策	105	Odate, Shigeo	大邊茂雄	21
Nishimoto, Takashi	西本 喬	104	Ofuji, Kaseo	尾藤加勢士	113
Nishio, Juzo	西尾彌造	104	Ogaki, Ken	大垣 研	18
Nishioka, Takejiro	西岡竹次郎	105	Ogata, Taketora	緒方竹虎	226
Nishiyama, Tsutomu	西山 勉	104	Ogawa, Gotaro	小川郷太郎	23
Noda, Kenko	野田謙吾	200	Ogawa, Hakichi	小川平吉	22
Noguchi, Jun	野口 進	200	Ogawa, Kanji	小川貫麿	補
Nohara, Dausuke	野原大輔	201	Ogusu, Rihpei	荻洲立兵	198
			Oguchi, Kiroku	大口繁六	14

Okura, Masatsune	小倉正恒	28	Okubo, Sanji	大城戸三治	19
Oguri, Kazuo	小栗一雄	29	Ohitsu, Yoshiro	興津良郎	230
Ohanishi, Chuishi	大橋忠一	22	Ohochi, Denchichi	大川内傳七	18
Ohanishi, Hachiro	大橋八郎	22	Ohochi, Kiho	大川内輝辨	18
Oikawa, Koachiro	及川古志郎	52	Oiochi, Masatoshi	大河内正敏	17
Oikawa, Tsunetsuda	及川恆忠	52	Ohubo, Teiji	大久保信夫	15
Oka, Yoshizumi	岡 敬純	123	Ohubo, Tomesiro	大久保留次郎	14
Okabe, Nagakage	岡部長景	126	Ohubo, Toshikata	大久保利麿	15
Okabe, Naosaburo	岡部直三郎	126	Ohubo, Toshihaka	大久保利隆	14
Okabe, Fumihide	岡田文秀	124	Ohuda, Shinzo	奥田新三	215
Okabe, Keisuke	岡田啓介	125	Okuma, Masakichi	大熊正吉	21
Okabe, Kenichi	岡田象一	124	Okumura, Kiwao	奥村萬和男	215
Okabe, Seichi	岡田才一	124	Okura, Kinnochi	大藏公室	22
Okada, Tadahiko	岡田忠彦	124	Okura, Kishichiro	大倉喜七郎	19
Okamoto, Issaku	岡本一策	17	Omori, Gitaro	大森義太郎	21
Okamoto, Seifuku	岡本清福	123	Omori, Kote	大森洪太	21
Okamoto, Suemasa	岡本孝正	123	Omura, Seichi	大村清一	17
Okamura, Yasuji	岡村善次	125	Omura, Takuichi	大村卓一	17
Okano, Masajiro	岡野増次郎	125	Onish, Sai	大西 齋	16
Okawa, Shinmei	大川周明	13	Ono, Ryokuchiro	大野縁一郎	20
Okazaki, Seizaburo	岡崎清三郎	125	Ono, Ryuta	大野龍太	20
Okii, Yoshio	大木良敏	15	Ono, Takeshi	小野 猛	29

Orui, Nobu	大類 伸	補 3	Ryu, Shintaro	笙 信太郎	139
Osahh, Yukio	大迫孝男	補 3			
Oshima, Hiroshi	大島 浩	19	S	三枝茂智	7
Oshima, Mageshiro	大志摩孫四郎	補 3	Saeki, Seiichi	佐伯清一	108
Ota, Kohiro	太田一郎	52	Satonji, Hachiro	西園寺八郎	補 15
Ota, Kozo	太田耕造	53	Sato, Isanji	齋藤 樹	234
Ota, Masataka	太田正孝	15, 補9	Sato, Moichiro	齋藤茂一郎	233
Ota, Tamekichi	太田篤吉	16	Sato, Otoji	齋藤喜次	233
Ota, Tomotane	太田知庸	52	Sato, Ryos	齋藤良衛	233
Ota, Yasuji	太田泰治	52	Sato, Takao	齋藤隆夫	233
Orami, Kocho	大谷光暢	3	Saito, Yabata	齋藤彌平太	234
Orami, Kozui	大谷光瑞	16	Sakai, Kishi	酒井喜四	184
Orami, Noboru	大谷 登	17	Sakai, Koji	酒井篤次	184
Orambo, Yisuo	大坪保雄	18	Sakai, Tadamasu	酒井忠正	183
Oruchi, Chozo	大内暢三	15	Sakai, Takashi	酒井 隆	184
Oruda, Teiji	大和田悦二	補 3	Sakai, Yasushi	酒井 康	184
Orie, Hanjiro	大矢半次郎	15	Sakamoto, Masemon	坂本政右衛門	114
Oriski, Hiemi	尾崎秀實	113	Sakamoto, Mizuo	坂本瑞男	114
Oriski, Yuzio	尾崎行雄	112	Sakamoto, Tatsuki	坂本龍起	114
Oruimi, Tekusaburo	小住徳三郎	補 4	Sakata, Shigeaki	佐方繁木	107
	R		Sakataji, Kiichi	阪谷希一	115
Ryama, Masamichi	羅山政道	243	Sakataji, Yoshiro	阪谷芳郎	115

Sakaya, Tadauchi	樽谷 忠	132	Sawamoto, Yorio	澤本頼雄	227
Sakurii, Masuzo	左近前政三	65	Sawamura, Katsuro	澤村克人	29
Sakoi, Shuichi	酒勺秀一	183	Seki, Keizo	關 桂三	243
Sakuda, Shouchi	作田莊一	110	Seko, Yasuji	瀬古保次	30
Sakura, Shin	佐久間 信	147	Senami, Hisatsune	迫水久常	130
Sakurauchi, Yukio	櫻内幸雄	242	Sengoku, Kotaro	千石興太郎	12
Sano, Mitsunabu	佐野光信	108	Shiba, Koshiro	斯波孝四郎	24
Sasahi, Kenichiro	佐佐木謙一郎	108	Shibayama, Kaneshiro	柴山兼四郎	182
Sasahi, Teichi	佐佐木到一	107	Shibuya, Saburo	澁谷三郎	28
Sasahi, Yukitada	佐佐木行忠	107	Shichida, Hachiro	七田八郎	2
Sasaki, Hiroo	佐佐弘雄	108	Shidehara, Kijuro	幣原喜重郎	28
Sasaki, Shinnosuke	佐佐眞之助	108	Shidei, Kosei	四手井綱正	82
Sato, Ichiro	佐藤市郎	109	Shi efuji, Ohaki	重藤千秋	174
Sato, Kenryo	佐藤賢了	109	Shigematsu, Nobuo	重松宣雄	174
Sato, Naotake	佐藤尚武	109	Shigemitsu, Mamoru	重光 葵	173
Sato, Ojiro	佐藤藤次郎	110	Shigemori, Tadashi	茂森雄士	172
Sato, Osamu	佐藤 修	109	Shiina, Eisusaburo	椎名恆三郎	206
Sato Shozo	佐藤秀三	補 16	Shimada, Shigetaro	島田繁太郎	180
Sato, Yaunnosuke	佐藤 友之助	109	Shimada, Teshio	島田俊雄	179
Sawada, Reizo	澤田廉三	227	Shinai, Shozo	島居庄藏	180
Sawada, Setsuzo	澤田節藏	227	Shimizu, Kiku	清水親矩	193
Sawada, Shigen	澤田 茂	227	Shimizu, Konosuke	清水行之助	192

Shimizu, Mitsuyoshi	清水光美	192	Shiratschi, Kozaburo	白石幸三郎	76
Shinkzu, Moraki	清水盛明	193	Shiratschi, Motojiro	白石元治郎	76
Shindzu, Shigeo	清水重夫	補 23	Shirane, Takeauke	白根竹介	76
Shindzu, Yasuzo	清水安三	192	Shiratori, Toshio	白鳥敏夫	77
Shinoda, Fumichi	下田文一	10	Shishido, Yoshinobu	突戸好信	112
Shinoda, Takezo	下田武三	10	Shoda, Kazue	勝田圭計	208
Shinomoto, Kumaya	下元健彌	9	Shoji, Otokichi	庄司乙吉	92
Shinomura, Hiroshi	下村 宏	11	Shoriki, Matsutaro	正力松太郎	68
Shinomura, Shosuke	下村正助	10	Soeda, Keichiro	添田敬一郎	194
Shinonaga, Noriji	下永憲次	10	Soemi, Takao	副見篤雄	192
Shinonaka, Yasaburo	下中彌三郎	9	Soma, Toshio	相馬敏夫	164
Shinoyama, Seichi	霧山精一	233	Sonobe, Waichiro	園部和一郎	216
Shinoyama, Takumaro	下山琢磨	9	Sonoda, Seinosuke	園田盛之助	216
Shindo, Seichi	進藤誠一	212	Suetaka, Kamazo	尾高鶴藏	113
Shinohara, Eitaro	篠原英太郎	230	Suetsugu, Nobumasa	末次信正	68
Shinohara, Rikuro	篠原陸朗	231	Suga, Kenjiro	菅 健次郎	210
Shinnozuka, Yoshio	篠塚義男	231	Suga, Seiji	菅 晴次	211
Shinda, Hiroshige	鹽田廣重	32	Sugahara, Tatsuro	菅原達郎	補 25
Shimae, Suehiko	鹽野孝彦	245	Suganami, Shoji	菅波柳事	211
Shimonoya, Yutaka	鹽谷 温	補 32	Sugihara, Arata	杉原荒太郎	119
Shiozawa, Kiyonobu	鹽澤清宜	245	Sugimori, Kojiro	杉森孝次郎	119
Shozawa, Koichi	鹽澤幸一	245	Sugimura, Hirozo	杉村廣藏	119

Takamatsu, Norisuge	高松順茂	188	Tanabe, Harumichi	田邊浩通	75
Takashima, Seichi	高島誠一	189	Tanabe, Hideo	田邊秀雄	11
Takasu, Shiro	高須四郎	189	Tanabe, Moritake	田邊盛武	11
Takatsu, Tomio	高津富雄	188	Tanabe, Suichiroku	田邊七六	75
Takayama, Kyuzo	高山久藏	187	Tanabe, Tadao	田邊忠男	75
Takebe, Jemon	武部治右衛門	132	Tanaka, Eiozumi	田中耀敬	11
Takebe, Rokuzo	武部六藏	131	Tanaka, Kiyoshi	田中清	72
Takeda, Tokusaburo	武田徳三郎	131	Tanaka, Kiotaro	田中耕太郎	11
Takei, Daisuko	武井大助	131	Tanaka, Osamu	田中收	72
Takei, Gunki	武井翼嗣	19	Tanaka, Eiyukichi	田中隆吉	73
Takenaka, Masaechi	竹中政一	102	Tanaka, Seichi	田中靜邊	73
Takeo, Hajime	竹尾 弑	103	Tanaka, Shigeoyuki	田中重之	72
Takeshita, Yoshiharu	竹下義晴	102	Tanaka, Takeo	田中武雄	72
Taketomi, Toshiniko	武富敏彦	131	Tanaka, Tetsusaburo	田中鐵三郎	73
Takeuchi Bunpin	武内文彬	130	Hanaka, Tokichi	田中郡吉	73
Takeuchi, Kakichi	竹内可吉	102	Tanaka, Yutaka	田中豊	74
Takeuchi, Kakuji	竹内賀久治	102	Tani, Hisao	谷 壽夫	111
Takeuchi, Shinpei	竹内新平	103	Tani, Masayuki	谷 正之	111
Takuchi, Toshjiro	武内俊二郎	130	Taniguchi, Kichiniko	谷口吉彦	112
Taki, Masao	瀧 正雄	242	Taniguchi, Motojiro	谷口元治郎	111
Tamura, Kenjiro	田村謙治郎	75	Taniguchi, Tsuneji	谷口恆二	112
Tamura, Kosaku	田村幸策	74	Taniguchi, Nakao	谷口那雄	16

Tanikawa, Tetsuzo	谷川徹三	112	Togoh, Shinji	十河信二	4
Taninoto, Umataro	谷本馬太郎	112	Tojo, Eiji	東條英機	135
Tanomogji, Keikichi	頼母木桂吉	231	Tokei, Kahai	土岐嘉平	40
Tashiro, Shigenori	田代重徳	74	Tokugawa, Iyemasa	徳川家正	223
Tate, Tetsuji	館 哲二	232	Tokugawa, Kuniyuki	徳川國順	補 28
Tatekawa, Yoshitsugu	越川美次	161	Tokugawa, Yoshichika	徳川義親	224
Tatsumi, Toyomaru	立見豊丸	82	Tokugawa, Yoshitoshi	徳川好敏	223
Tawa, Magochi	佐 孫一	176	Tokunaga, Sakae	徳永 榮	224
Tryui, Yutaka	田 結 稜	75	Tokutomi, Ichiro	徳富猪一郎	補 28
Tsuranishi, Hidesuke	寺西秀助	94	Tomabechi, Shiro	苦米地四郎	172
Tsura, Susumu	寺尾 進	14	Tomoeoka, Kiyoo	留岡清男	補 22
Tsuraoka, Kohei	寺岡洪平	95	Tomoi, Shu	富井 周	203
Terasaki, Hidenari	寺崎英成	95	Tomimaga, Kyoji	富永恭次	204
Teraeaki, Hideo	寺崎英雄	95	Tomita, Kenji	富田健治	203
Terasaki, Taro	寺崎太郎	95	Tomita, Kojiro	富田孝次郎	203
Terasahi, Yoshinobu	寺師義信	補 14	Tomita, Yutaro	富田勇太郎	203
Terasuhime, Takeshi	寺島 健	補 14	Tomonatsu, Entei	友松圓諦	52
Terauchi, Juchi	寺内壽一	94	Torii, Ryuzo	鳥居龍藏	201
Tenaka, Gito	暉岐義等	216	Toyama, Mitsuru	頭山 滿	231
Teshima, Sakaye	手島 榮	58	Toyoda, Mitsuru	豊田利三郎	235
Togo, Minoru	東郷 實	補 18	Toyoda, Soetake	豊田副武	236
Togo, Shigenori	東郷茂徳	136	Toyoshime, Aiaki	豊島愛明	236

Toyoshima, Fusataro	豊島房太郎	236	Uchiyama, Iwataro	内山岩太郎	補	8
Toyoyasu, Fukuji	豊保晴次	236	Ueda, Katsuo	植田景雄		205
Tsubogami, Teiji	坪上貞二	127	Ueda, Kenkichi	植田謙吉		206
Tsuchida, Yutaka	土田 豊	40	Ueda, Kotaro	植田貞太郎	補	25
Tsuchihashi, Yuitsu	土橋勇逸	41	Uehara, Etsujiro	植原悦二郎		206
Tsuchiya, Keizo	土屋計左右	41	Ueki, Hisuo	植木壽雄		205
Tsuda, Shingo	津田信吾	166	Uemura, Shoem	上村松園	補	2
Tsuda, Suizue	津田靜枝	166	Ugaki, Kazushige	宇垣一成		86
Tsugata, Daisaburo	次田大三郎	85	Ugaki, Matomu	宇垣 纏		86
Tsugunoo, Kunioshi	津雲國利	167	Ukita, Hidehiko	浮田秀彦	補	22
Tsuji, Kunisuke	辻 邦助	105	Umezui, Yoshijiro	梅津義治郎		198
Tsukada, Osamu	塚田 攻	215	Usami, Kianji	宇佐美寛爾		85
Tsukahara, Nishizo	塚原二四三	215	Usami, Okite	宇佐美興屋		85
Tsakui, Tatsuo	津久井龍雄	166	Ushijima, Mitsuru	牛島 満		57
Tsurumi, Sakio	鶴見左吉雄	補	Ushio, Kasukeno	潮 鹿之助		224
Tsurumi, Yusuke	鶴見祐輔	244	Ushirogu, Jun	後宮 淳		163
Tsushima, Juichi	津島壽一	補	Ushizima, Minotsune	牛島茂常		57
Tsutsui, Kiyoshi	筒井 潔	208	Ushizuka, Torataro	牛塚虎太郎	補	9
Tsutsumi, Yasujiro	埜 康次郎	202	Usuda, Kanzo	臼田寛三		104
	U		Utsunomiya, Ngokata	宇都宮直賢		87
Uchida, Goro	内田五郎	51		V		
Uchigasaki, Sakusaburo	内久崎作三郎	51	Wachi, Takaji	和知隆二		127

Wada, Hideoyoshi	和田日出吉	127	Yamada, Yoshihide	山田良秀	補 5
Wada, Koroku	和田小六	126	Yamagata, Kiyoshi	山形 清	35
Wada, Senzo	和田專三	補 17	Yamaji, Akira	山路 篤	補 6
Wakabayashi, Han	若林 半	171	Yamakawa, Ken	山川 健	30
Wakamiya, Sadao	若宮貞夫	171	Yamakawa, Tadao	山川端夫	31
Wakao, Shohechi	若尾瑞八	171	Yamanoto, Eisuke	山本英輔	33
Wakasugi, Kianame	若杉 実	171	Yamanoto, Isoroku	山本五十六	33
Wakatsuki, Reijiro	若槻龍太郎	172	Yamanoto, Koki	山本弘毅	33
Wakayama, Zentarō	若山善太郎	170	Yamamoto, Kozo	山本厚三	34
Waluda, Tetsuo	和久田鐵雄	136	Yamamoto, Kumachi	山本健一	34
Watanabe, Chifuyu	渡邊千冬	207	Yamamoto, Tatsuo	山本達雄	34
Watanabe, Yasaki	渡邊彌幸	208	Yanamoto, Tsuruchi	山本鶴一	34
Wetari, Masami	渡 正監	補 24	Yanamoto, Yoshiharu	山本善治	34
Y			Yanamuro, Munetake	山室宗武	35
Yabuki, Shozo	矢吹省三	補 12	Yamanashi, Takeo	山梨武夫	37
Yada, Shichitaro	矢田七太郎	補 12	Yamanishi, Tsunero	山西恆郎	35
Yabata, Hakudo	八幡博堂	3	Yamanouchi, Seiſo	山内静吾	補 5
Yamada, Jinzaburo	山田精三郎	補 5	Yamanouchi, Shizuo	山内静夫	32
Yamada, Kunitaro	山田國太郎	33	Yamaoka, Mannosuke	山岡實之助	補 6
Yamada, Otozo	山田乙三	32	Yamaoka, Shigeatsu	山岡重厚	35
Yamada, Saburo	山田三良	32	Yamasaki, Iwao	山崎 巖	37, 補 8
Yamada, Tatsuo	山田龍雄	33	Yamasaki, Seijun	山崎 清純	38

Yamasaki, Tatunosuke	山崎蓮之輔	36	Yasue, Norihito	安江伸弘	88
Yamashita, Tomihiko	山下知彦	31	Yasui, Eiji	安井英二	87
Yamashita, Gihachiro	山下桃八郎	32	Yasui, Seichiro	安井誠一郎	87
Yamashita, Hobun	山下奉文	31	Yasu, Toji	安井藤治	88
Yamashita, Kamesaburo	山下鶴三郎	31	Yasukawa, Yunosuke	安川雄之助	87
Yamaura, Kanichi	山浦貫一	36	Yasumi, Saburo	八角三郎	3
Yamawaki, Masataka	山脇正隆	37	Yasuoka, Masatsun	安岡正篤	88
Yamazumi, Kotsuni	山住克巳	補	Yasushina, Zenshiro	保科善四郎	159
Yamagawa, Heisuke	柳川平助	164	Yatabe, Yasukichi	矢田部保吉	77
Yamagisawa, Kuratosuke	柳澤藏之助	165	Yatsunami, Takeji	八並武治	3
Yamagisawa, Ken	柳澤 健	165	Yatsushiro, Norihiko	八代則彦	2
Yamagisawa, Denko	柳原傳光	165	Yokoo, Sosaburo	横尾惣三郎	228
Yamai, Tsuneo	柳井傳夫	164	Yokoyama, Shizaki	横山穰明	228
Yanabara, Tadao	矢内原忠雄	77	Yokoyama, Sukenari	横山助成	228
Yano, Jinichi	矢野仁一	補	Yonai, Mitsumasa	米内光政	103
Yano, Makoto	矢野 真	78	Yonaiyama, Tsuneo	米内山庸夫	103
Yano, Otsaburo	矢野晋三郎	78	Yoshida, Masaji	吉田政治	95
Yano, Seiki	矢野重記	78	Yoshida, Masuzo	吉田益三	96
Yano, Tsuneta	矢野恆太	78	Yoshida, Shigeru	吉田 茂	96
Yasuda, Jiro	保田次郎	159	Yoshida, Shigeru	吉田 茂	96
Yasuda, Jusuke	安田丈助	補	Yoshida, Shin	吉田 眞	97
Yasuda, Takeo	安田武雄	88	Yoshida, Tanichiro	吉田丹一郎	95

Yoshida, Teyohiko	吉田豊彦	96	Yukawa, Mototake	湯河元威	207
Yoshida, Zengo	吉田善吾	97	Yuki, Seitaro	結城清太郎	補 25
Yoshino, Hiroyuki	吉野弘之	97	Yuki, Toyotaro	結城豊太郎	211
Yoshino, Shinji	吉野信次	97	Yusawa, Michio	湯澤三千男	207
Yoshizawa, Kenkichi	芳澤謙吉	150	Yutani, Kyochi	浦谷恭一	149
Yoshizawa, Seijiro	吉澤清次郎	98			
Yoshizumi, Masao	吉敷正雄	補 13	Zen, Keinosuke	Z 醇 桂之助	231

日本時人辭典日文拼音索引

日文拼音

姓 名 頁次

ア (點之上爲姓，點之下爲名)

アカイケ・ノウ	赤池・濃	一一六	アサハラ・ケンザウ	淺原・健三	一九五
アカギ・チカユキ	赤木・親之	一一五	アサヒナ・サクタラウ	朝比奈・策太郎	二〇七
アカシ・タルヲ	明石・照男	一三二	アシダ・ヒトシ	蘆田・均	二四三
アカマジ・カツマロ	赤松・克麿	一一六	アタカ・ヤキチ	蘆野・弘	二四三
アカマン・コトラ	赤松・小寅	一一六	アダチ・ケンザウ	安宅・爾吉	八八
アキタ・キヨシ	秋田・清	一六九	アダチ・ケンザウ	安達・堅造	九〇
アキヅ・サトヲ	秋月・左都夫	補二一	アヅマ・エイジ	安達・謙藏	九〇
アキナガ・ツキザウ	秋永・月三	一六九	アヅマ・タケシ	東・榮二	一三五
アキヤマ・イクキ	秋山・昱禧	一六九	アナミ・コレチカ	東・武	一三五
アキヤマ・クニツ	秋山・邦雄	一六八	アヒダ・イハヲ	阿南・惟幾	一五二
アキヤマ・テイスケ	秋山・定輔	一六九	アベ・イソヲ	相田・岩夫	一六三
アツカイ・カウイチラウ	朝海・清一郎	二〇七	アベ・カツヲ	安部・磯雄	八九
アツスマ・イネジラウ	淺沼・稻次郎	一九四	アベ・ケンイチ	阿部・勝雄	一五三
アサノ・ソウイチラウ	淺野・總一郎	補二三	アベ・ゲンキ	阿部・賢一	一五三
アサノ・リヤウザウ	淺野・良三	一九五	アベ・ノブユキ	安倍・源基	八九
			アベ・フサジラウ	阿部・信行	一五三
				阿部・房次郎	一五三

アベ・ヨシシゲ
 アボ・キヨカズ
 アマウ・エイジ
 アマカス・マサヒコ
 アメミヤ・タツミ
 アメヤ・キクヲ
 アユカハ・ギスケ
 アラカハ・シヤウジ
 アラキ・サグヲ
 アラキ・シヅヲ
 アラキ・セイイチラウ
 アリガ・タケツ
 アリスエ・セイザウ
 アリタ・ハチラウ
 アリチ・シフゴロウ
 アリマ・チャウタラウ
 アリマ・ヒロシ
 アリマ・ヨリヤス
 アリミ・セイイチ
 アツキ・カズヲ

安倍・能成 八九
 安保・清種 八九
 天羽・英二 五三
 甘粕・正彦 七一
 雨宮・巽 一五七
 雨谷・菊夫 一五七
 鮎川・義介 二四〇
 荒川・昌二 一八六
 荒木・貞夫 一八六
 荒井・静雄 補二二
 荒井・誠一郎 一八六
 有賀・武夫 補一五
 有末・精三 九九
 有田・八郎 九九
 有地・十五郎 一〇〇
 有馬・長太郎 一〇〇
 有馬・寛 一〇〇
 有馬・頼富 一〇〇
 新見・政一 二一六
 青木・一男 一五七

アツキ・デユウセイ
 アツキ・ミノル
 アヲキ・ヤスシ
 アヲヤキ・アツツネ
 アンドウ・キサブラウ
 アンドウ・キヤウシラウ
 アンドウ・マサズミ
 アンドウ・リキチ

イ

青木・重誠 一五八
 青木・實 補二〇
 青木・泰 一五八
 青柳・篤恆 一五八
 安藤・紀三郎 補一四
 安藤・狂四郎 九一
 安藤・正純 九一
 安藤・利吉 九一
 池田・清 補一四
 池田・純久 九三
 池田・成彬 九二
 池田・忠孝 九三
 池尾・芳藏 九三
 伊澤・多喜男 八三
 石射・猪太郎 八〇
 石川・準十郎 七八
 石黒・忠篤 八〇
 石黒・英彦 八〇
 石坂・弘 八〇

イシザハ・ユタカ	石澤・豊	八二	イトウ・ヨサブラウ	伊藤・與三郎	補一三
イシダ・カヲル	石田・馨	七九	イナガキ・ユキヲ	稻垣・征夫	二二六
イシバシ・タンザン	石橋・湛山	八二	イナダ・マサウエ	稻田・昌植	二二五
イシハラ・クワンジ	石原・莞爾	八一	イスカヒ・ケン	犬養・健	補九
イシハラ・ヒロイチラウ	石原・廣一郎	八一	イハゴエ・ツネイチ	岩越・恆一	一二九
イシツタリ・サウタラウ	石渡・莊太郎	八一	イハサキ・タミヲ	岩崎・民男	補一七
イシキ・カウ	石井・康	七九	イハクラ・ミチトモ	岩倉・道俱	補一七
イシキ・キクジラウ	石井・菊次郎	七九	イハタ・アイノスケ	岩田・愛之助	一二八
イソガイ・レンスケ	磯谷・廉介	二三〇	イハタ・トミヲ	岩田・富美夫	一二八
イタガキ・セイシラウ	板垣・征四郎	一四五	イハハセ・タケヲ	岩畔・豪雄	一二九
イチカハ・ヒコタラウ	市河・彦太郎	五九	イハムラ・セイイチ	岩村・清一	一二八
イチデウ・サネタカ	一條・實孝	一	イハムラ・セイイン	岩村・成允	一二八
イツキ・キトクラウ	一木・喜徳郎	一	イハムラ・ミチヨ	岩村・通世	一二九
イチノミヤ・フサヂラウ	一宮・房治郎	一	イハムラ・ヨシヲ	岩村・義雄	一二九
イトウ・ケンザウ	伊藤・賢三	八四	イハキ・ヂユウタラウ	岩井・重太郎	一二八
イトウ・ノブプミ	伊藤・述史	八四	イヒシマ・ハタジ	飯島・悟司	二二三
イトウ・ヒデザウ	伊藤・秀三	八四	イヒダ・サダカタ	飯田・貞固	二二二
イトウ・ブンキチ	伊藤・文吉	八四	イヒダ・シヤウジラウ	飯田・祥二郎	補二五
イトウ・マサキ	伊東・政喜	八三	イヒダ・セイザウ	飯田・清三	二二三
イトウ・マサノリ	伊藤・正徳	八四	イヒスマ・マモル	飯沼・守	二二三

イヒノ・カウジ	飯野・浩次	二一三	ウサミ・オキイヘ	宇佐美・興屋	八五
イヒノ・タケヲ	飯野・毅夫	補二六	ウサミ・クワシジ	宇佐美・寛爾	八五
イヒムラ・ジャウ	飯村・穰	二一三	ウシジマ・ミツル	牛島・滿	五七
イマダ・シンタラウ	今田・新太郎	五〇	ウシジマ・ミノツネ	牛島・實常	五七
イママツ・ヂラウ	今松・治郎	五一	ウシヅカ・トラタラウ	牛塚・虎太郎	補九
イママムラ・シンタラジ	今村・新太郎	五〇	ウシホ・ケイノスケ	潮・惠之輔	二二四
イママムラ・ヒトシ	今村・均	五〇	ウシログウ・ジュン	後宮・淳	一六三
イマキ・ヒトシ	今村・等	五〇	ウスダ・タリンザウ	白田・寛三	一〇四
イマキ・ゴスケ	今井・五介	補八	ウチガサキ・サクサブラウ	内ヶ崎・作三郎	五一
イマキ・タケヲ	今井・武夫	五〇	ウチダ・ゴラウ	内田・五郎	五一
イマヨシ・トシゾ	今吉・敏雄	補八	ウチャヤマ・イハタラウ	内山・岩太郎	補八
イリエ・クワンイチ	入江・貫一	四	ウツノミヤ・ナホカタ	宇都宮・直賢	八七
イリエ・コウ	入江・昂	四	ウヘムラ・シヨウエン	上村・松園	補二
イリエ・タネノリ	入江・種矩	四	ウメヅ・ヨシヂラウ	梅津・美治郎	一九八
イラサハ・フミアキ	入澤・文明	補一	ウエキ・ヒサヲ	植木・壽雄	二〇五
イルマノ・タケヲ	入間野・武雄	五	ウエダ・カツヲ	植田・捷雄	二〇五
ウ			ウエダ・ケンキチ	植田・謙吉	二〇六
ウガキ・カズシゲ	宇垣・一成	八六	ウエダ・コウタラウ	植田・貢太郎	補二五
ウガキ・マトム	宇垣・纏	八六	ウエハラ・モツジラウ	植原・悦二郎	二〇六
ウキダ・ヒデヒコ	浮田・秀彦	補二二			
			工		

エグチ・ジュンイチ	江口・順一	九二	オホグチ・キロク	大口・喜六	一四
エトウ・ゲンクラウ	江藤・源九郎	九二	オホクボ・ライジ	大久保・偵次	一五
ニトウ・ナツヲ	江藤・夏雄	九二	オホクボ・トシカタ	大久保・利賢	一五
オキツ・ヨシラウ	興津・良郎	二三〇	オホクボ・トシタカ	大久保・利隆	一四
オクダ・シンザウ	奥田・新三	二一五	オホクマ・トメジラウ	大久保・留次郎	一四
オクムラ・キソヲ	奥村・喜和男	二一五	オホクマ・マサキチ	大熊・正吉	二一
オダ・ノブツネ	織田・信恆	二三五	オホクラ・キンモチ	大倉・喜七郎	一九
オヒカハ・ゲンシチ	及川・源七	一三	オホクラ・キンモチ	大藏・公望	二二
オヒカハ・コシラウ	及川・古志郎	五二	オホサコ・ユキツ	大迫・幸男	補三
オヒカハ・ツネタダ	及川・恆忠	五二	オホシマ・ヒロシ	大迫・幸男	補三
オホアサ・タダヲ	大内・暢三	二〇	オホシマ・マゴシラウ	大島・浩	一九
オホウチ・チャウザウ	大内・暢三	一五	オホタ・イチラウ	大志摩・孫四郎	補三
オホカウチ・キカウ	大川内・輝耕	一八	オホタ・カウザウ	太田・一郎	五二
オホカウチ・デンシチ	大川内・傳七	一三	オホタ・タメキチ	太田・耕造	五三
オホガキ・ケン	大河内・正敏	一七	オホタ・トモツネ	太田・爲吉	一六
オホカハ・シウメイ	大垣・研	一八	オホタ・マサタカ	太田・知庸	五二
オホキ・ヨシエ	大川・周明	一三	オホタ・ヤスヂ	太田・正孝	一五補九
オホキド・サンヂ	大木・良枝	一五	オホダテ・シゲヲ	太田・泰治	五二
	大城戸・三治	一九	オホタニ・クソウズキ	大谷・茂雄	二一
			オホタニ・クソウチヤウ	大谷・光瑞	一六
				大谷・光暢	補三

オホダニ・ノボル	大谷・登	一七
オホツボ・ヤスツ	大坪・保雄	一八
オホニシ・サイ	大西・齋	一六
オホノ・リエウタ	大野・龍太	二〇
オホノ・リヨクイチラウ	大野・縁一郎	二〇
オホハシ・チユウイチ	大橋・忠一	二二
オホハシ・ハチラウ	大橋・八郎	二二
オホプチ・ミキ	大淵・三樹	二一
オホムラ・セイイチ	大村・清一	一七
オホムラ・タクイチ	大村・卓一	一七
オホモリ・ギタラウ	大森・義太郎	二一
オホモリ・コウタ	大森・洪太	二一
オホヤ・ハンジラウ	大矢・半次郎	一五
オホルキ・ノブ	大類・伸	補三
オホワグ・テイジ	大和田・悝二	補三
カ		
カアヒ・タツツ	河相・達夫	補一七
ガウ・セイノスケ	郷・誠之助	二一八
カウツキ・ヨシヲ	上月・良夫	九
カウノ・イチラウ	河野・一郎	一四八

カウノ・ミツ	河野・密	一四八
カゲサ・サダアキ	影佐・禎昭	二二四
カゴシマ・トラヲ	鹿兒島・虎雄	補二三
カサカ・マサヤス	香阪・昌康	一七〇
カサマ・アキヲ	笠間・果雄	一九九
カザミ・アキラ	風見・章	一七四
カシハギ・ヒデヲ	柏木・秀雄	一六三
カシヒ・友ウヘイ	香椎・浩平	一七〇
カダ・テツジ	加田・哲二	六〇
カタギリ・エイキチ	片桐・英吉	補一〇
カタクラ・マコト	片倉・衷	七一
カタノ・チユウシウ	片野・重修	補一一
カタヤマ・テツ	片山・哲	七〇
カタツカ・ヤスシ	片岡・安	補一〇
カツ・マサノリ	勝・正憲	二〇八
カヅキ・キヨシ	香月・清司	一七〇
カツダ・テイジ	勝田・貞次	二〇九
カトウ・カンジフ	加藤・勘十	六一
カトウ・クワンヂ	加藤・完治	六〇
カトウ・ソトマツ	加藤・外松	六〇

カトウ・タカヨシ	加藤・隆義	カハダ・イサヲ	河田・烈	一四六
カトウ・タケツ	加藤・武男	カハヅラ・リュウザウ	川面・隆三	三八
カトウ・デンジラウ	加藤・傳次郎	カハニシ・セイジ	川西・清司	三八
カドノ・チヨウキウフウ	門野・重九郎	カハベ・シヤウザウ	河邊・正三	一四八
カナザハ・マサヲ	金澤・正夫	カハベ・トラシラウ	河邊・虎四郎	一四九
カナフ・ヨシサブラウ	加納・芳三郎	カハムラ・キヨウスケ	河村・恭輔	一四七
カナキ・シヤウジ	金井・章次	カハムラ・サブラウ	河村・參郎	一四七
カネミツ・ツネヲ	金光・庸夫	カハモト・クニヲ	川本・邦雄	三七
カノコギ・カズノブ	鹿子木・員信	カハモト・ダイサク	河本・大作	一四六
カハイ・エイチラウ	河合・榮治郎	カハモト・ヨシタラウ	川本・芳太郎	三七
カハイ・ミサヲ	河合・操	カハラダ・カキチ	河原田・稼吉	一四七
カハイ・ヨシナリ	河合・良成	カミムラ・シンイチ	上村・伸一	九
カハカミ・コウイチ	河上・弘一	カミムラ・セイタラウ	上村・清太郎	九
カハカミ・チャウタラウ	河上・丈太郎	カミヨシ・シヤウイチ	神吉・正一	補二〇
カハギシ・ブンザブラウ	川岸・文三郎	カミツ・イチハル	神尾・式春	補二一
カハゴエ・シゲル	川越・茂	カメキ・クソンイチラウ	龜井・貫一郎	二二三
カハサキ・カツ	川越・丈雄	カヤ・オキノブ	賀屋・興宣	二二二
カハシマ・シンタラウ	川崎・克	カヤバ・グンザウ	萱場・軍藏	二一七
カハシマ・ヨシユキ	川島・信太郎	カラサハ・トシキ	唐澤・俊樹	一八〇
	川島・義之	カンギウ・ツネヲ	簡牛・凡夫	補三〇

カシダ・マサタネ	神田・正種	一六八	キミシマ・セイキチ	君島・清吉	一一〇
カシダ・マサヲ	神田・正雄	一六八	キミモリ・タラウ	公森・太郎	五一
キ			キムラ・エイイチ	木村・銳市	五五
キウチ・シラウ	木内・四郎	五四	キムラ・シヤウタツ	木村・尙達	五五
キクチ・シロン	菊池・寛	二一〇	キムラ・シラウシチ	木村・四郎七	五五
キクチ・タケツ	菊池・武夫	二〇九	キムラ・ヘイタラウ	木村・兵太郎	五五
キクチ・トヨサブラウ	菊池・豊三郎	二一〇	キムラ・マスタラウ	木村・増太郎	五五
キクチ・リヤウイチ	菊池・良一	二〇九	キヨザハ・レツ	清澤・列	一九三
キシ・ノブスケ	岸・信介	一二九	キヨセ・イチラウ	清瀬・一郎	一九三
キシダ・クニツ	岸田・國士	一三〇	ク		
キシモト・アヤツ	岸本・綾夫	一三〇	クサカ・ニンイチ	草鹿・任一	一八七
キタ・カツタラウ	北・勝太郎	五九	クシダ・マンザウ	串田・萬藏	一一一
キタ・サウイチラウ	喜多・壯一郎	二〇二	クシブチ・センイチ	榑淵・鎭一	二三七
キタ・セイイチ	喜多・誠一	二〇二	クスモト・サネタカ	楠本・實隆	二一六
キタ・ナガヲ	喜多・長雄	二〇二	クスツ・ヨシヒサ	葛生・能久	二一七
キタ・レイキチ	北・聆吉	五九	クドウ・テユツ	工藤・忠	三九
キタジマ・ケンシラウ	北島・謙次郎	五九	クドウ・テツツ	工藤・鐵男	四〇
キド・カウイチ	木戸・幸一	五四	クハキ・タカアキ	桑木・崇明	一八二
キノシタ・ハンヂ	木下・半治	五四	クハシマ・カズヘ	桑島・主計	一八二
キノシタ・ビン	木下・敏	五四	クハバラ・シゲハル	桑原・重遠	一八二

クハラ・フサノスケ	久原・房之助	一	コイツミ・シンザウ	小泉・信三	補四
クボタ・クウホ	窪田・空穂	補二七	コイツミ・チカヒコ	小泉・親彦	二七
クボタ・ヒサハル	久保田・久晴	二二	コイツミ・マタジラウ	小泉・又次郎	二七
クマガイ・ケンイチ	熊谷・憲一	二二五	コウ・シヨク	洪・思翊	一六五
クメ・セイイチ	久米・精一	補二	コガ・ミネイチ	古賀・峯一	六二
クリハラ・シヤウ	栗原・正	一八一	コグチ・ゴラウ	小口・五郎	二三
クリハラ・ミノル	栗原・美能留	一八二	コケツ・ヤザウ	額續・彌三	二四四
クリモト・ユウノスケ	栗本・勇之助	一八一	コジマ・シンイチ	小島・新一	二九
クリヤマ・シゲジ	栗山・茂二	補二二	コジマ・セイイチ	小島・精一	二九
クリヤマ・シゲル	栗山・茂	一八一	コスグ・カツザウ	小須田・勝造	三〇
クルス・サブラウ	來栖・三郎	一二二	ゴタウ・ケイタ	五島・慶太	補七
クロサキ・テイザウ	黒崎・定三	二一四	ゴダウ・タクヲ	伍堂・卓雄	八三
クロダ・ナガトシ	黒田・長和	二一三	コタケ・シゲル	小竹・茂	補四
クロダ・ヒデヲ	黒田・英雄	二一四	コタニ・セツヲ	小谷・節夫	二五
ケ			コダヒラ・ゴンイチ	小平・權一	二四
ゲンダ・マツザウ	源田・松三	補二六	コダマ・ケンシ	兒玉・謙次	一二二
コ			コダマ・トモヲ	兒玉・友雄	一二二
コイケ・シラウ	小池・四郎	二四	コダマ・ヒデヲ	兒玉・秀雄	一二二
コイツ・クニアキ	小磯・國昭	三〇	ゴトウ・アサタラウ	後藤・朝太郎	一六二
コイツミ・ゴラウ	小泉・悟郎	二七	ゴトウ・クニヒコ	後藤・國彦	一六二

ゴトウ・タカノスケ	後藤・隆之助	一六二	ゴンドウ・ノブタケ	近藤・信竹	一五二
ゴトウ・テイジ	後藤・悌次	一六二	ゴンドウ・セイキヤウ	權藤・成卿	二四二
ゴトウ・フミツ	後藤・文夫	一六一			
ゴノエ・フミマロ	近衛・文麿	一五〇			
コバヤシ・イチザウ	小林・一三	二五	サイトウ・イツキ	齋藤・樹	二三四
コバヤシ・シヤウサブラウ	小林・省三郎	二六	サイトウ・オトジ	齋藤・音次	二二三
コバヤシ・ジラウ	小林・次郎	補四	サイトウ・タカヲ	齋藤・隆夫	二二三
コバヤシ・ジュンイチラウ	小林・順一郎	二六	サイトウ・モイチラウ	齋藤・茂一郎	二二三
コバヤシ・セイザウ	小林・躋造	二六	サイトウ・リヤウエ	齋藤・彌平太	二三四
コバヤシ・ミツマサ	小林・宗之助	二五	サイツンジ・ハチラウ	齋藤・良衛	二二三
コヒヤマ・ナホト	小林・光政	二五	サウマ・トシヲ	西園寺・八郎	補一五
コマツ・テルヒサ	小日山・直登	二三	サエグサ・シゲトモ	相馬・敏夫	一六四
コマチ・トクザウ	小松・輝久	二七	サカウ・ジウイチ	三枝・茂智	七
コミヤマ・キヨウザウ	駒井・徳三	二二六	サカタ・シゲキ	酒匂・秀一	一八三
コモリ・シヂラウ	小見山・恭造	二四	サカタニ・キイチ	佐方・繁木	一〇七
コヤマ・シヨウジュ	小森・七郎	補五	サカタニ・ヨシラウ	坂谷・希一	一一五
コソドウ・モイザウ	小山・松壽	二三	サカモト・タツキ	坂谷・芳郎	一一五
コソドウ・エイシラウ	近藤・榮藏	一五二	サカモト・マサエモン	坂本・龍起	一一四
コソドウ・シヤウタラウ	近藤・英次郎	一五一		坂本・政右衛門	一一四
	近藤・壤太郎	一五二	サカヤ・タダシ	坂本・瑞男	一一四
				昌谷・忠	一三二

サ

サカキ・カウジ
 サカキ・キシ
 サカキ・タカシ
 サカキ・タダマサ
 サカキ・ヤスシ
 サグダ・シヤウイチ
 サクマ・シン
 サクラウチ・ユキヲ
 サコンジ・マサザウ
 ササキ・ケンイチラウ
 ササキ・タウイチ
 ササキ・ニキタダ
 サツサ・シンノスケ
 サツサ・ヒロヲ
 サトウ・イチラウ
 サトウ・オウジラウ
 サトウ・ケンレウ
 サトウ・シウザウ
 サトウ・ナホタケ
 サトウ・ヤスノスケ

酒井・鎬次 一八四
 酒井・喜四 一八四
 酒井・隆 一八四
 酒井・忠正 一八三
 酒井・康 一八四
 作田・莊一 一〇七
 佐久間・信 一〇七
 櫻内・幸雄 二四二
 左近司・政三 六五
 佐佐木・謙一郎 一〇八
 佐佐木・到一 一〇七
 佐佐木・行忠 一〇七
 佐佐・眞之助 一〇八
 佐佐・弘雄 一〇八
 佐藤・市郎 一〇九
 佐藤・應次郎 一〇九
 佐藤・賢了 一〇九
 佐藤・秀三 補一六
 佐藤・尙武 一〇九
 佐藤・安之助 一〇九

サトウ・フサム
 サノ・ミヅノブ
 サハダ・シゲル
 サハダ・セツザウ
 サハダ・レンザウ
 サハムラ・カツト
 サハモト・ヨリヲ
 サヘキ・セイイチ
 シ
 シゲフデ・チアキ
 シゲマツ・ノブヲ
 シゲミツ・マモル
 シゲモリ・タダシ
 シシド・ヨシノブ
 シナダ・ハチラウ
 シデハラ・キヂユウラウ
 シデキ・カウセイ
 シノヅカ・ヨシヲ
 シノハラ・エイタラウ
 シノハラ・リクラウ

佐藤・修 一〇九
 佐野・光信 一〇八
 澤田・茂 二二七
 澤田・節藏 二二七
 澤田・廉三 二二七
 澤村・克人 補二九
 澤本・頼雄 二二七
 佐伯・清一 一〇八
 重藤・千秋 一七四
 重松・宣雄 一七四
 重光・葵 一七三
 茂森・唯士 一七二
 宍戸・好信 一一二
 七田・八郎 二
 幣原・喜重郎 補二八
 四手井・綱正 八二
 篠塚・義男 二三一
 篠原・英太郎 二三〇
 篠原・陸郎 二三一

シバ・カウシラウ	斯波・孝四郎	補二四	シモナカ・ヤサブラウ	下中・彌三郎	九
シバヤマ・カネシラウ	柴山・兼四郎	一八二	シモナガ・ノリジ	下永・憲次	一〇
シヒナ・エツサブラウ	椎名・悦三郎	二〇六	シモムラ・シヤウスケ	下村・正助	一〇
シブヤ・サブラウ	澁谷・三郎	二二八	シモムラ・ヒロシ	下村・宏	一一
シホザハ・カウイチ	鹽澤・幸一	二四五	シモモト・クマヤ	下元・熊彌	九
シホザハ・キヨノブ	鹽澤・清宣	二四五	シモヤマ・セイイチ	霜山・精一	二三三
シホダ・ヒロシゲ	鹽田・廣重	補三二	シモヤマ・タクマロ	下山・琢磨	九
シホノ・スエヒコ	鹽野・季彦	二四五	シヤウジ・オトキチ	庄司・乙吉	九二
シボノヤ・ユタカ	鹽谷・温	補三二	シヤウリキ・マツタラウ	正力・松太郎	六八
シマダ・シゲタラウ	島田・繁太郎	一八〇	シヨウダ・カズヘ	勝田・主計	二〇八
シマダ・トシヲ	島田・俊雄	一七九	シライシ・カウザブラウ	白石・幸三郎	七六
シマキ・シヤウザウ	島居・庄藏	一八〇	シライシ・モトデラウ	白石・元治郎	七六
シミヅ・カウノスケ	清水・行之助	一九二	シラトリ・トシヲ	白鳥・敏夫	七七
シミヅ・キク	清水・規矩	一九三	シラネ・タケスケ	白根・竹介	七六
シミヅ・シゲヲ	清水・重夫	補二三	シンドウ・セイイチ	進藤・誠一	二一二
シミヅ・ミツヨシ	清水・光美	一九二	ス		
シミヅ・モリアキ	清水・威明	一九三	スガ・ケンジラウ	菅・健次郎	二一〇
シミヅ・ヤスザウ	清水・安三	一九二	スガ・セイジ	菅・晴次	二一一
シモダ・タケザウ	下田・武三	一〇	スガナミ・ショウジ	菅波・稱事	二一一
シモダ・フミイチ	下田・文一	一〇	スガハラ・タツラウ	菅原・達郎	補二五

スギハラ・アラタ
 スギムラ・ヒロザウ
 スギモリ・カウジラウ
 スギヤマ・ゲン
 スギヤマ・モトヂラウ
 スズキ・ウメタラウ
 スズキ・キヨヒデ
 スズキ・クソントアラウ
 スズキ・サウロク
 スズキ・サカエ
 スズキ・シゲヤス
 スズキ・ソウサク
 スズキ・タダカウ
 スズキ・テイイチ
 スズキ・ヒサタケ
 スズキ・ブンヂ
 スズキ・モサブラウ
 スズキ・ヨシミチ
 スズキ・ヨリミチ
 ストウ・ヒデヲ

杉原・荒太 一一九
 杉村・廣藏 一一九
 杉森・孝次郎 一一九
 杉山・元 一一八
 杉山・元治郎 一一九
 鈴木・梅太郎 補二六
 鈴木・清秀 二二一
 鈴木・貫太郎 二二〇
 鈴木・莊六 二一九
 鈴木・祥枝 補二六
 鈴木・重康 二二一
 鈴木・宗作 二二〇
 鈴木・九萬 二一八
 鈴木・貞一 二一九
 鈴木・久武 補二六
 鈴木・文治 二一八
 鈴木・茂三郎 二一九
 鈴木・美通 二二〇
 鈴木・率道 二二一
 周東・秀雄 一二三

スナダ・シゲマサ
 スマ・ヤキチラウ
 スミダ・ライシラウ
 スミヤマ・トクタラウ
 スヤマ・マンザウ
 スエタカ・カメザウ
 スエツグ・ノブマサ
 セキ・ケイザウ
 セコ・ヤスジ
 セマミ・ヒサツネ
 セン・ケイノスケ
 センゴク・コウタラウ
 ソ
 ソノダ・セイノスケ
 ソノベ・ワイチラウ
 ソヘダ・ケイイチラウ
 ソヘミ・タカヲ
 タカイシ・シンゴラウ

砂田・重政 一六八
 須磨・彌吉郎 二〇四
 澄田・暎四郎 二二四
 住山・徳太郎 一〇七
 周山・満藏 一二三
 尾高・龜藏 一一三
 末次・信正 六八
 一關・桂三 二四三
 瀬古・保次 補三〇
 迫水・久常 一三〇
 膳・桂之助 二三一
 千石・興太郎 一二
 園田・辰之助 二一六
 園部・和一郎 二一六
 添田・敬一郎 一九四
 副見・喬雄 一九二
 高石・眞五郎 一八八

タカツキ・ノブザウ	高垣・信造	一八九	タケシタ、ヨシハル	竹下・義晴	一〇二
タカギ・トモサブラウ	高木・友三郎	一八七	タケダ、トクサブラウ	武田・徳三郎	一三一
タカシマ・セイイチ	高木・陸郎	一八八	タケトミ、トシヒコ	武富・敏彦	一三一
タカス・シラウ	高島・誠一	一八九	タケナカ、マサイチ	竹中・政一	一〇二
タカツ・トミヲ	高須・四郎	一八九	タケベ、デユモン	武部・治右衛門	一三二
タカハ・ダイキチラウ	高津・富雄	一八八	タケベ、ロクザウ	武部・六藏	一三一
タカハシ・カウシユン	田川・大吉郎	七一	タケキ、グンシ	武井・羣嗣	補一九
タカハシ・カメキチ	高橋・康順	一九〇	タケキ、グイスケ	武井・大助	一三一
タカハシ・サンキチ	高橋・龜吉	一九〇	タケツ、ハジメ	竹尾・式	一〇三
タカハシ・タン	高橋・三吉	一八九	タゴ、イチミン	田子・一民	補一一
タカハシ・テイイチ	高橋・坦	一九〇	タジマ、エイジラウ	田島・榮次郎	七五
タカマツ・ノリシゲ	高橋・定一	一八九	タジリ・アキヨシ	田尻・愛義	七四
タカヤマ・キウザウ	高松・順茂	一八八	タシロ、シゲハリ	田代・重徳	七四
タキ、マサヲ	高山・久藏	一八七	タダ、アキラ	多田・晃	補一三
タケウチ・カキチ	瀧・正雄	二四二	タダ、ハヤツ	多田・駿	九八
タケウチ・カクデ	竹内・可吉	一〇二	タダ、レイキチ	多田・禮吉	九八
タケウチ・シンペイ	竹内・賀久治	一〇二	タチ、サタタラウ	立・作太郎	八二
タケウチ・トシジラウ	竹内・新平	一〇三	タチバナ、カウサブラウ	橋・孝三郎	二二七
タケウチ、ブンビン	武内・俊二郎	一三〇	タチバナ、シンリヤウ	田知花・信量	七四
	武内・文彬	一三〇	タチバナ、ボク	橋・樸	二二八

タツミ・トヨマル	立見・豊丸	八二	タニ・マザユキ	谷・正之	一一一
タナ、テツシ	館・哲二	二三二	タニカハ、テツザウ	谷川・徹三	一一二
タナカハ、ヨシツグ	建川・美次	一六一	タニグチ、キチヒコ	谷口・吉彦	一一二
タナカ、カウタラウ	田中・耕太郎	補一一	タニグチ、ツネシ	谷口・恆二	一一二
タナカ、キヨシ	田中・清	七二	タニグチ、モトデラウ	谷口・元治郎	一一一
タナカ、シグユキ	田中・重之	七二	タニハギ、ナカフ	谷萩・那華雄	補一六
タナカ、セイイチ	田中・静壹	七三	タニモト、ウマタラウ	谷本・馬太郎	一一二
タナカ、タケヲ	田中・武雄	七二	タノモギ、ケイキチ	頼母木・桂吉	二三一
タナカ、テツサブラウ	田中・鐵三郎	七三	タハラ、マゴイチ	俵・孫一	一七六
タナカ・トキチ	田中・都吉	七三	タヒラ、チイザウ	平・貞藏	六二
タナカ、ホヅミ	田中・穂積	補一一	タムラ、カウサク	田村・幸策	七四
タナカ、ユダカ	田中・豊	七四	タムラ、ケンデラウ	田村・謙治郎	七五
タナカ、リュウキチ	田中・隆吉	七三	タユヒ、ユダカ	田結・穰	七五
タナカ・フサム	田中・收	七二	チ		
タナベ、シチロク	田邊・七六	七五	チバ、シンイチ	千葉・葵一	一三
タナベ・タダヲ	田邊・忠男	七五	チヤウ、イサム	長・勇	一五六
タナベ、ハルミチ	田邊・治通	七五	ツ		
タナベ、ヒデヲ	田邊・秀雄	補一一	ツカダ、フサム	塚田・攻	二一五
タナベ、モリダケ	田邊・威武	補一一	ツカハラ、ニシザウ	塚原・二四三	二一五
タニ・ヒサヲ	谷・壽夫	一一一	ツギタ、ダイサブラウ	次田・大三郎	八五

ツグモ・クニトシ	津雲・國利	一六七	テラサキ・タラウ	寺崎・太郎	九五
ツクホ・ダツシ	津久井・龍雄	一六六	テラサキ・ヒデナリ	寺崎・英成	九五
ツシ・クニスケ	辻・邦助	一〇五	テラサキ・ヒデヲ	寺崎・英雄	九五
ツシマ・ジュイテ	津島・壽一	補二〇	テラシ・ヨシノブ	寺師・義信	補一四
ツダ・シヅエ	津田・静枝	一六六	テラシマ・タケシ	寺島・健	補一四
ツダ・シンゴ	津田・信吾	一六六	テラニシ・ヒデスケ	寺西・秀助	九四
ツチダ・ユタカ	土田・豊	四〇	テラヲ・ススム	寺尾・進	補一四
ツチハシ・ユウイツ	土橋・勇逸	四一	テラヲカ・コウヘイ	寺岡・洪平	九五
ツチヤ・ケイザウ	土屋・計左右	四一	テルヲカ・ギトウ	寺峻・義等	二一六
ツツミ・ヤスシラウ	堤・康次郎	二〇二	デン・マコト	田・誠	七一
ツツホ・キヨシ	筒井・潔	二〇八			
ツノダ・マツノスケ	角田・政之助	一一一	トウガウ・シゲノリ	東郷・茂徳	一三六
ツノヲ・シン	角尾・晋	一一一	トウガウ・ミノル	東郷・實	補一八
ツボガミ・テイジ	坪上・貞二	一二七	トウデウ・エイキ	東條・英機	一三五
ツルミ・イウスケ	鶴見・裕輔	二四四	トウヤマ・ミツル	頭山・滿	二三一
ツルミ・サキヲ	鶴見・左吉雄	補三一	トガウ・シンジ	十河・信二	四
テ			トギ・カヘイ	土岐・嘉平	四〇
テシマ・サカエ	手島・榮	五八	トクガハ・イヘマサ	徳川・家正	二二三
デブチ・カツジ	出淵・勝次	六二	トクガハ・クニユキ	徳川・圀順	補二八
テラウチ・ジュイテ	寺内・壽一	九四	トクガハ・ヨシチカ	徳川・義親	二二四

トクガハ・ヨントシ	徳川・好敏	二二三	ナイトウ・クマキ	内藤・熊喜	五一
トクトミ・キイチラウ	徳富・猪一郎	補二八	ナカガハ・ケンザウ	中川・饒藏	四二
トタナガ・サカエ	徳永・榮	二二四	ナガクボ・トシヲ	長久保・俊夫	一五四
トヒ・タダシ	土肥・頼	補三	ナカジマ・ケサゴ	中島・今朝吾	四四
トヒハラ・ケンジ	土肥原・賢二	四一	ナカジマ・サブラウ	中島・三郎	四五
トマベチ・シラウ	苦米地・四郎	一七二	ナカジマ・テクヘイ	中島・知久平	四五
トミタ・カウジラウ	富田・幸次郎	二〇三	ナカジマ・テツザウ	中島・鐵藏	四六
トミタ・ケンヂ	富田・健治	二〇三	ナカシマ・ヤダシ	中島・彌團次	四六
トミタ・ユウタラウ	富田・勇太郎	二〇三	ナガシマ・ハタス	長島・毅	一五六
トミナガ・キヨウジ	富永・恭次	二〇四	ナガタ・ツネキヨ	長田・常清	一五五
トミキ・シウ	富井・周	二〇三	ナガタ・ヒデジラウ	永田・秀次郎	六九
トメヲカ・キヨソ	留岡・清男	補二二	ナカタニ・タケヨ	中谷・武世	四四
トモマツ・エンテイ	友松・團諦	五二	ナガツ・サヒエ	永津・佐比重	七〇
トヨシマ・フサタラウ	豊島・房太郎	二二六	ナカナガ・タラウ	中永・太郎	補七
トヨダ・ソヘタケ	豊田・副武	二二六	ナカニシ・トシノリ	中西・敏憲	四三
トヨダ・テイジラウ	豊田・貞次郎	二三五	ナカネ・サダヒロ	中根・貞彦	四四
トヨダ・リサブラウ	豊田・利三郎	二三五	ナカネ・ナホスケ	中根・直介	四七
トヨヤス・フクジ	豊保・福次	二二六	ナカノ・キンジラウ	中野・金次郎	四七
トリキ・リユウザウ	鳥居・龍藏	二〇一	ナカノ・セイガウ	中野・正剛	四六
ナ			ナガノ・トミツ	中野・登美雄	四七

ナガノ・キラ	長野・朗	一五六	ナガキ・マツザウ	永井・松三	六八
ナガノ・ツサミ	永野・修身	七〇	ナガキ・リウタラウ	永井・柳太郎	六九
ナカハラ・キンシ	中原・謹司	四五	ナガツカ・リュウイチラウ	長岡・隆一郎	一五六
ナカハラ・ヨシマサ	中原・義正	四五	ナス・シロシ	那須・皓	一〇五
ナガミ・トシノリ	永見・俊徳	六九	ナホキ・リンタラウ	那須・倫太郎	補一九
ナカムラ・アキト	中村・明人	四四	ナラ・タケシ	奈良・武次	一二七
ナカムラ・エイジ	中村・榮次	補七	ナリタ・イチラウ	成田・一郎	九八
ナカムラ・カウタラウ	中村・孝太郎	四三	ナンダモ・チュウイチ	南雲・忠一	一六〇
ナカムラ・カツヒラ	中村・勝平	四四	ナンテウ・カネフ	南條・金雄	一六〇
ナカムラ・センイチ	中村・撰一	補七			
ナカムラ・トヨイチ	中村・豊一	四四	ニシ・ハルヒコ	西・春彦	一〇四
ナカムラ・ヤスシラウ	中村・安次郎	四三	ニシハラ・イツサク	西原・一策	一〇五
ナカムラ・リヤウザウ	中村・良三	四三	ニシモト・タカシ	西本・喬	一〇四
ナガモチ・ゲンシ	永持・源次	七〇	ニシヤマ・ツトム	西山・勉	一〇四
ナカヤマ・シゲル	中山・蕃	四二	ニシフ・ジュザウ	西尾・壽造	一〇四
ナカヤマ・マサル	中山・優	四二	ニシフカ・タケシラウ	西岡・竹次郎	一〇五
ナカヤマ・ヤスフ	中山・甯人	四二	ニノミヤ・ハルシゲ	二宮・治重	二
ナカヤマ・リュウシ	中山・龍次	四二	ネ		
ナカキ・キヨシ	半井・清	六〇	ネモト・ヒロシ	根本・博	一八三
ナカキ・マスタラウ	中井・増太郎	四二	ノ		

ノグチ・シユン	野口・遼	二〇〇	ハセガハ・トホル	長谷川・透	一五六
ノダ・ケンゴ	野田・謙吾	二〇〇	ハセガハ・ニヨゼカン	長谷川・如是閑	一五五
ノナカ・テツヤ	野中・徹也	二〇〇	ハタ・シユンロク	畑・俊六	一六七
ノハラ・ダイスケ	野原・大輔	二〇一	ハタ・シンジ	秦・眞次	一八五
ノムラ・チサブラウ	野村・吉三郎	二〇一	ハタ・ヒコサブラウ	秦・彦三郎	一八五
ノムラ・ナホクニ	野村・直邦	二〇一	ハダ・シダカズ	波田・重一	一四九
ハ			ハダノミケンイチ	波多野・乾一	一四九
ハザマ・シゲル	挾間・茂	一八〇	ハツタ・ヨシアキ	八田・嘉明	三
ハシダ・クニヒコ	橋田・邦彦	二二〇	ハトヤマ・イチラウ	鳩山・一郎	二二一
ハシヅメ・ハルヲ	橋爪・明男	二二九	ハナジマ・カウイチ	花島・孝一	一五〇
ハシモト・キンゴラウ	橋本・欣五郎	二二九	ハナタニ・タダシ	花谷・正	一五〇
ハシモト・グン	橋本・羣	二二九	ハナハ・ヨシキ	槇・義井	二一五
ハシモト・ケイザブラウ	橋本・圭三郎	補二九	ハネダ・トホル	羽田・亨	補一五
ハシモト・セイキチ	橋本・清吉	二二九	ババ・ツネゴ	馬場・恆吾	一九〇
ハシモト・セイノスケ	橋本・清之助	補二九	ババ・モトハル	馬場・元治	補二二
ハシモト・トラノスケ	橋本・虎之助	二二九	ハフ・マサノリ	羽生・雅則	一〇三
ハスヌマ・シゲル	蓮沼・蕃	二二六	ハマダ・キチデラウ	濱田・吉治郎	二三五
ハスミ・ヤスシ	荷見・安	一九八	ハマモト・キサブラウ	濱本・喜三郎	二三五
ハセガハ・キ	長谷川・基	一五五	ハヤカハ・サブラウ	早川・三郎	九九
ハセガハ・キヨシ	長谷川・清	一五五	ハヤシ・カツラ	林・桂	一三三

ハヤシ・キウデラウ	林・久治郎	一三三	ヒグチ・キイチラウ	樋口・季一郎	二二五
ハヤシ・センジフヲウ	林・銃十郎	一三四	ヒサトミ・タツヲ	久富・達夫	一一二
ハヤシ・ナリユキ	林・仙之	一三三	ヒサムラ・タネキ	久村・種樹	一一一
ハヤシ・ヒロタラウ	林・博太郎	一三三	ヒシカタ・シゲミ	土方・成美	四〇
ハヤシ・ヤミキチ	林・彌三吉	一三五	ヒシカリ・タカシ	菱刈・隆	二一〇
ハヤシ・ヨシヒデ	林・義秀	一三三	ヒシヌマ・イサム	菱沼・勇	二一〇
ハヤシ・ライサブラウ	林・頼三郎	一三四	ヒダカ・シンロクラウ	日高・信六郎	五三
ハラ・クニミチ	原・邦道	一七六	ヒビノ・マサハル	日比野・正治	五三
ハラ・クウベス	原・惣兵衛	一七六	ヒヤクタク・ゲンゴ	百武・源吾	一〇一
ハラ・マモル	原・守	一七六	ヒヤクタク・サブラウ	百武・三郎	一〇一
ハラ・ヨシミチ	原・嘉道	一七六	ヒヤクタク・セイキチ	百武・晴吉	一〇一
ハラグチ・タケヲ	原口・武夫	一七七	ヒラガ・ユヅル	百武・要	一〇一
ハラダ・クマキチ	原田・熊吉	一七七	ヒラザハ・カナヌ	平賀・讓	補一〇
ハラダ・ケン	原田・健	一七七	ヒラセ・ヨシツ	平澤・要	六五
ハラダ・セイイチ	原田・清一	一七七	ヒラタ・セイハン	平瀬・愛雄	六五
バン・サウイチラウ	伴・莊一郎	一一〇	ヒラタ・ノボル	平田・正判	六三
バンザイ・イチリヤウ	坂西・一良	一一四	ヒラツカ・ヒロザウ	平田・昇	六三
バンザイ・リハチヲウ	坂西・利八郎	一一四	ヒラデ・ヒデツ	平塚・廣藏	六五
ヒガヒ・センザウ	樋貝・詮三	二二五	ヒラヌマ・キイチラウ	平沼・騏一郎	六四
			ヒラノ・ヨシタラウ	平野・義太郎	六五

ヒラノ・リキザウ	平野・力三	六四	フデノ・メグム	藤野・惠	二三九
ヒフキデ・テイザウ	平井出・貞三	六三	フヂハラ・ギンジラウ	藤原・銀次郎	二三九
ヒラフ・ハチサブラウ	平生・鈆三郎	六三	フヂヤマ・アイイチラウ	藤山・愛一郎	二三七
ヒロセ・タダヒサ	廣瀬・久忠	二二三	フヂキ・ケイノスケ	藤井・啓之助	二三七
ヒロタ・コウキ	廣田・弘毅	二二二	フヂキ・ソウヂ	藤井・崇治	二三八
フ			フナダ・ナカ	船田・中	一九九
フカキ・エイゴ	深井・英五	一九四	フナツ・タツイチラウ	船津・辰一郎	一九九
フカヲ・リネウタラウ	深尾・隆太郎	一九四	フナヤマ・ノブイチ	船山・信一	一九九
フクダ・リヤウザウ	福田・良三	補二七	フルノ・イノスケ	古野・伊之助	六二
フクモト・リウイチ	福本・柳一	二一七	ベツクヤ・キヨマツ	巖宮谷・清松	二四五
フタミ・ジンラウ	二見・甚郎	二			
フタラ・白シノリ	二荒・芳徳	二	ホウライ・イチマツ	寶來・市松	二三七
フヂエ・ケイスケ	藤江・惠輔	二三九	ホシノ・ナホキ	星野・直樹	一六三
フヂカケ・スエマツ	藤懸・末松	二四〇	ホツカハ・セリタツ	細川・護立	二〇〇
フヂサハ・チカヲ	藤澤・親雄	二四〇	ホツカヤ・イシラウ	細萱・戊子郎	二〇〇
フヂタ・エイスケ	藤田・榮介	二三八	ホツタ・マテアキ	堀田・正昭	一九七
フヂタ・ススム	藤田・進	二三八	ホリ・コウイチ	堀・公一	一九六
フヂタ・ヒサノリ	藤田・尙徳	二三八	ホリ・シン	堀・新	一九六
フヂタ・リサブラウ	藤田・利三郎	二三八	ホリ・タケヲ	堀・丈夫	一九五
フヂスマ・シヤウヘノ	藤沼・庄平	二三九			

ホリ・ヨシアツ	堀・義貴	一九六	マキノ・モト	牧野・元	補一九
ホリウチ・カズヲ	堀内・一雄	補二三	マキノ・リヤウザウ	牧野・良三	一五〇
ホリウチ・ケンスケ	堀内・謙介	一九七	マガキ・カツジ	眞崎・勝次	一八五
ホリウチ・シゲタダ	堀内・茂禮	一九六	マガキ・シンザブラウ	眞崎・甚三郎	一八四
ホリウチ・タテキ	堀内・干城	一九六	マズダ・ギイチ	増田・義一	二二二
ホリキリ・ゼンジラウ	堀切・善次郎	一九七	マズダ・ジラウ	増田・次郎	二二二
ホリキリ・ゼンベエ	堀切・善兵衛	一九七	マチジリ・カズモト	町尻・量基	一二〇
ホンジャウ・シゲル	本莊・繁	六七	マチダ・チュウヂ	町田・忠治	一二〇
ホンダ・タマタラウ	本多・熊太郎	六六	マツウラ・ジュンロク	松浦・淳六郎	一四四
ホンダ・タダヲ	本田・忠雄	六六	マツウラ・チンジラウ	松浦・鎮次郎	一四四
ホンダ・マサキ	本多・政材	六六	マツエ・ハルジ	松江・春次	一四一
ホンダ・マズザウ	本田・増藏	六六	マツカタ・カウジラウ	松方・幸次郎	一三六
ホンマ・セイ	本間・精	六七	マツクマ・ヒデヲ	松隈・秀雄	一四五
ホンマ・マサハル	本間・雅晴	六七	マツザカ・ヒロマサ	松阪・廣政	補一八
ホンリヤウ・シ(チ)ラウ	本領・信治郎	補一〇	マツシタ・ゲン	松下・元	一三六
ホンキデン・ヨシヲ	本位田・祥男	六六	マツダ・レイスケ	松田・令輔	補一八
マ			マツダヒラ・タダヒサ	松平・忠久	一三八
マカタ・クン	眞方・勳	一八四	マツダヒラ・ツネヲ	松平・恆雄	一三九
トマキタ・カクサブラウ	牧田・覺三郎	補一九	マツダヒラ・ヤスマサ	松平・康昌	一三九
マキノ・マサミチ	牧野・正迪	一四九	マツダヒラ・ヨリナガ	松平・頼壽	一三九

マツナガ・サイ	松永・材	一三八	マツキ・ハルヲ	松井・春生	一三八
マツノ・ツルヘイ	松野・鶴平	一四四	マツキ・タクラウ	松井・太久郎	一三七補廿一
マツノブ・シゲジ	松延・繁次	一四三	マツキ・マコト	松井・命	一三七
マツマヘ・シゲヨシ	松前・重義	補一八	マツヲカ・コマキチ	松岡・駒吉	一四三
マツミキ・ハジメ	松宮・順	一四三	マツヲカ・ヤウスケ	松岡・洋右	一四二
マツムラ・ケンゾウ	松村・謙三	補一八	マナキ・ヨシノブ	馬奈木・敬信	補二二
マツムラ・ススム	松村・晝	一四二	マブチ・ハヤヲ	馬淵逸雄	補二二
マツムラ・ヒサヨシ	松村・久義	一四二	マヘダ・トシタメ	前田・利爲	一五九
マツムラ・ヒデスグ	松村・秀逸	一四二	マヘダ・ミノル	前田・稔	一六〇
マツムロ・タカヨシ	松室・孝良	一四四	マヘダ・ヨネザウ	前田・米藏	一五九
マツモト・カネシラウ	松本・龜次郎	補一七	マヘノ・シゲル	前野・茂	補二〇
マツモト・ケンジ	松本・健兒	一四〇	マルヤマ・ツルキチ	丸山・鶴吉	一一
マツモト・シヨウヂ	松本・蒸治	一四一			
マツモト・タダヲ	松本・忠雄	一四〇			
マツモト・ヂイチラウ	松本・治一郎	一四〇	ミウラ・タケミ	三浦・武美	補二
マツモト・ヂユウヂ	松本・重治	一四〇	ミウラ・ヨシアキ	三浦・義秋	八
マツモト・マナブ	松本・學	一四一	ミキ・キヨシ	三木・清	六
マツモト・ユウヘイ	松本・勇平	一四〇	ミキ・ブキチ	三木・武吉	六
マツキ・イハネ	松井・石根	一三七	ミキ・モヲヒコ	三木・森彦	六
マツキ・ゲンノスケ	松井・源之助	一三八	ミケ・カズヲ	三毛・一夫	六
			ミタニ・キヨシ	三谷・清	補二

ミタニ・タカノブ	三谷・隆信	補二	ミヤザキ・マサヨシ	宮崎・正義	一七八
ミヅ・ヤキチ	水津・彌吉	五六	ミヤザキ・リュウスケ	宮崎・龍介	一七九
ミヅタニ・チヤウザブラウ	水谷・長三郎	五六	ミムロト・ケイクワウ	三室戸・敬光	七
ミツチ・チユウザウ	三土・忠造	六	ミヤジマ・セイジラウ	宮島・清次郎	一七八
ミヅノ・ウメアキ	水野・梅曉	五六	ミヤタ・ミツツ	宮田・光雄	一七八
ミヅノ・レンタラウ	水野・鍊太郎	五七	ミヤモト・タケノスケ	宮本・武之輔	一七七
ミツハシ・カウイチラウ	三橋・孝一郎	八	ミヤワキ・チヤウキチ	宮脇・長吉	一七八
ミツユキ・ジラウ	光行・次郎	八五	ミワ・ジュンシャウ	三輪・壽莊	八
ミト・ハルザウ	水戸・春造	五六	ム		
ミナガハ・クワウヂ	皆川・廣治	一六七	ムシヤコウヂ・キントモ武者小路・公共		一三一
ミナガハ・トヨヂ	皆川・豐治	一六八	ムタグチ・カドヤ	牟田口・廉也	一〇一
ミナミ・ジラウ	南・次郎	一六〇	ムトウ・アキラ	武藤・章	一三二
ミノベ・タツキチ	美濃部・達吉	一七三	ムラカミ・トモエキ	村上・知行	一一七
ミノベ・ヤウジ	美濃部・洋次	一七二	ムラカミ・リュウタラウ	村上・龍太郎	一一七
ミヤガハ・ヒヤクタラウ	三宅川・百太郎	七	ムラセ・チヨクヤウ	村瀬・直養	一一八
ミヤガハ・フナツ	宮川・船夫	一七七	ムラタ・ゴラウ	村田・五郎	一一七
ミヤケ・クワウヂ	三宅・光治	七	ムラタ・シャウザウ	村田・省藏	一一八
ミヤザキ・カツタラウ	宮崎・勝太郎	一七九	ムラタ・シラウ	村田・孜郎	一一七
ミヤザキ・シダサブラウ	宮崎・繁三郎	一七九	ムラヤマ・チヤウキヨ	村山・長舉	補一六
ミヤザキ・シンラウ	宮崎・申郎	一七八	ムラキ・クラマツ	村井・倉松	一一七

ムラヲカ・フネコダ
ムロフシ・タカノブ

村岡・典嗣 一一八
室伏・高信 補二〇

毛

モウリ・エオト

毛里・英於菟 五六

モトジ・アラクマ

泉二・新熊 一六五

モトノ・セイイチ

本野・威一 六七

モリ・タカシ

森・喬 二〇四

モリ・トクデ

森・徳治 補二四

モリシダ・タラヲ

森重・干夫 補二四

モリシマ・ゴラウ

守島・五郎 補一三

モリシマ・スミフサ

威島・角房 一九八

モリシマ・モリト

森島・守人 二〇五

モリダ・ヒサシ

森田・三郎 補二五

モリベ・タカシ

森田・久 二〇四

モリツカ・カウ

森部・隆 補二四

モリヤマ・エイイチ

森岡・皋 二〇五

モリツカ・ヤシウヘイ

森山・鋭一 補二四

モリヲカ・シラウ

森岡・正平 二〇五

ヤ

森岡・二郎 二〇四

ヤスエ・ノリヒロ

安江・仙弘 八八

ヤスカハ・ユウノスケ

安川・雄之助 八七

ヤスシナ・ゼンシラウ

保科・善四郎 一五九

ヤスタ・ジラウ

保田・次郎 一五九

ヤスグ・ヂヤウスケ

安田・丈助 補一三

ヤスタ・タケヲ

安田・武雄 八八

ヤスミ・サブラウ

八角・三郎 三

ヤスキ・エイジ

安井・英二 八七

ヤスキ・セイイチラウ

安井・誠一郎 八七

ヤスキ・トウデ

安井・藤治 八八

ヤスツカ・マサアツ

安岡・正篤 八八

ヤグ・シチタラウ

安岡・正篤 八八

ヤタベ・ヤスキチ

矢田・七太郎 補一二

ヤツシロ・ノリヒコ

矢田部・保吉 七七

ヤツナミ・タケヂ

八代・則彦 二

ヤナイバラ・タダヲ

八並・武治 三

ヤナガハ・ヘイスケ

矢内原・忠雄 七七

ヤナギサハ・ケン

柳川・平助 一六四

ヤナギハラ・デンクワウ

柳澤・藏之助 一六五

ヤナギハハ・ケン

柳澤・健 一六五

ヤナギハラ・デンクワウ

柳原・傳光 一六五

ヤナキ・ツネヲ	柳井・恆夫	一六四	ヤマダ・オトザウ	山田・乙三	三二
ヤノ・オトサブラウ	矢野・音三郎	七八	ヤマダ・クニタラウ	山田・國太郎	三三
ヤノ・ジンイチ	矢野・仁一	補一二	ヤマダ・ナブラウ	山田・三良	三二
ヤノ・セイキ	矢野・征紀	七八	ヤマダ・ジュンザブラウ	山田・純三郎	補五
ヤノ・ツネタ	矢野・恆太	七八	ヤマダ・スツヲ	山田・龍雄	三三
ヤノ・マコト	矢野・眞	七八	ヤマダ・ヨシヒデ	山田・良秀	補五
ヤハタ・ハクダウ	八幡・博堂	三	ヤマヂ・ノキラ	山路・章	補六
ヤブキ・シヨウゾウ	矢吹・省三	補一二	ヤマナシ・タケヲ	山梨・武夫	三七
ヤマウラ・クソソイチ	山浦・貫一	三六	ヤマニシ・ツネラウ	山西・恆郎	三五
ヤマガタ・キヨシ	山形・清	三五	ヤマノウチ・シヅヲ	山内・靜夫	三二
ヤマカハ・ケン	山川・健	三〇	ヤマノウチ・セイゴ	山内・靜香	補五
ヤマカハ・タダヲ	山川・端夫	三一	ヤマムロ・ムネタケ	山室・宗武	三五
ヤマサキ・イハホ	山崎・巖	三七、補六	ヤマモト・イソロク	山本・五十六	三三
ヤマサキ・セイジュン	山崎・靖純	三六	ヤマモト・エイスケ	山本・英輔	三三
ヤマサキ・タツノスケ	山崎・達之輔	三六	ヤマモト・クマイチ	山本・熊一	三四
ヤマシタ・カメサブラウ	山下・龜三郎	三一	ヤマモト・コウキ	山本・弘毅	三三
ヤマシタ・ギハチラウ	山下・巍八郎	三二	ヤマモト・コウザウ	山本・厚三	三四
ヤマシタ・トモヒコ	山下・知彦	三一	ヤマモト・タツヲ	山本・達雄	三四
ヤマシタ・ホウブン	山下・奉文	三一	ヤマモト・ツルイチ	山本・鶴一	三五
ヤマズミ・カツミ	山住・克己	補五	ヤマモト・ヨシハル	山本・善治	三四

ヤマワキ・マサタカ	山脇・正隆	三七	ヨシダ・トヨヒコ	吉田・豊彦	九六
ヤマブカ・シゲアツ	山岡・重厚	三五	ヨシダ・マサヂ	吉田・政治	九五
ヤマブカ・マシノスケ	山岡・萬之助	補六	ヨシダ・マスザウ	吉田・益三	九六
ユ			ヨシヅミ・マナヲ	吉積・正雄	補一三
ユカハ・モトタケ	湯河・元威	二〇七	ヨシノ・シンジ	吉野・信次	九七
ユサハ・ミチヲ	湯澤・三千男	二〇七	ヨシノ・ヒロユキ	吉野・弘之	九七
ユタニ・キヨウイチ	油谷・恭一	一四九	ヨナイ・ミツマサ	米内・光政	一〇三
ユフキ・セイタラウ	結城・清太郎	補二五	ヨナイヤマ・ツネヲ	米内山・庸夫	一〇三
ユフキ・ト・タラウ	結城・豊太郎	二一一	ラ		
ヨ			ラフヤマ・マサミチ	蠟山・政道	二四三
ヨコヤマ・シヅアキ	横山・鎮明	二二八	リ		
ヨコヤマ・ステナリ	横山・助成	二二八	リフ・シンタラウ	笠・信太郎	一九九
ヨコヲ・ソウサブラウ	横尾・惣三郎	二二八	ワ		
ヨシザハ・ケンキチ	芳澤・謙吉	一五〇	ワカスギ・カナメ	若杉・要	一七一
ヨシザハ・セイジラウ	吉澤・清次郎	九八	ワカツキ・レイジラウ	若槻・禮次郎	一七二
ヨシダ・シゲル	吉田・茂	九六	ワカバヤシ・ハン	若林・半	一七一
ヨシダ・シゲル	吉田・茂	九六	ワカミヤ・サダヲ	若宮・貞夫	一七一
ヨシダ・シン	吉田・憲	九七	ワカヤマ・ゼンタラウ	若山・善太郎	一七〇
ヨシダ・ゼンゴ	吉田・善吾	九七	ワカヲ・シヤウハチ	若尾・璋八	一七一
ヨシダ・タンイチラウ	吉田・丹一郎	九五	ワタダ・テツヲ	和久田・鐵雄	一二六

ワダ・コロダ	和田・小六	一二六	キノウヘ・タダシラウ	井上・匡四郎	補七
ワダ・センザウ	和田・専三	補一七	キノウヘ・タダヤ	井上・忠也	補八
ワダ・ヒデヨシ	和田・日出吉	一二七	キノダ・トシエ	猪野毛・利榮	二一一
ワタナベ・ナフユ	渡邊・千冬	二〇七	エ	遠藤・喜一	二二七
ワタナベ・ヤサキ	渡邊・彌幸	二〇八	エンドウ・キイチ	遠藤・柳作	二二七
ワタリ・マサミ	渡・正監	補二四	ヲカハ・ヘイキチ	岡部・長景	一二六
ワチ・タカシ	和知・鷹二	一二七	ヲカハ・ナガカゲ		
ヤ			ヲカベ・ナガカゲ		
キカハ・タダツ	井川・忠雄	四七	ヲカザキ・セイザラウ	岡・敬純	一二三
キダチ・サダツ	井口・貞夫	四八	ヲカダ・ケイスケ	岡崎・清三郎	一二五
キサカ・タカシ	井坂・孝	四八	ヲカダ・ケンイチ	岡田・啓介	一二五
キセキ・タカマサ	井關・隆昌	四九	ヲカダ・サイイチ	岡田・兼一	一二四
キダ・イハクス	井田・盤楠	四八	ヲカダ・タダヒコ	岡田・才一	一二四
キダ・テツザウ	井出・鐵藏	四九	ヲカタ・フミヒデ	岡田・忠彦	一二四
キダ・ノブトキ	井出・宣時	四九	ヲガタ・タケトラ	岡田・文秀	一二四
キノ・エイイチ	井野・英一	補八	ヲカノ・マスジラウ	緒方・竹虎	二二六
キノ・ヒロヤ	井野・碩哉	四九	ヲガハ・ガウタラウ	岡野・増次郎	一二五
キノウヘ・ケンキチ	井上・謙吉	四八	ヲガハ・クソンジ	小川・郷太郎	二三
キノウヘ・コウバイ	井上・紅梅	四八	ヲガハ・ヘイキチ	小川・貫蠶	補四
キノウヘ・シゲヨシ	井上・成美	四七	ヲカハ・ナガカゲ	小川・平吉	二二二

フカベ・ナホサブラウ
 フカムラ・ヤスジ
 フカモト・イツサク
 フカモト・セイフク
 フカモト・スエマサ
 フギス・リツペイ
 フグラ・マサツネ
 フグリ・カズヲ
 フザキ・ヒデミ
 フザキ・ユキヲ

岡部・直三郎 一二六
 岡村・甯次 一二五
 岡本・一策 補二七
 岡本・清福 一二三
 岡本・季正 一二三
 荻洲・立兵 一九八
 小倉・正恆 二八
 小栗・一雄 二九
 尾崎・秀實 一一三
 尾崎・行雄 一一二

フズミ・トクサブラウ
 フチヨウ・トシトク
 フノ・タケシ
 フバタ・タゲヨシ
 フバタ・トシシラウ
 フバタ・トリキチ
 フバラ・ナホシ
 フバラ・マサキ
 フフデ・カセフ

小佐・徳三郎 補四
 小汀・利得 二四
 小野・猛 二九
 小畑・忠良 二八
 小畑・敏四郎 二八
 小幡・酉吉 三〇
 小原・直 二八
 小原・正樹 補五
 尾藤・加勢士 一一三

中日職官異名對照表

(名稱相同或獨有者，本表從略)

日	本	中	國	備	註
文部省 大藏省 逕信省 某省某局 大臣、相 次官 國務大臣 參與 助役 課長 親任 勅任 奏任 判任 大審院 檢事長 控訴院	教育部 財政部 交通部 某部某司 部長 次長 中央政務委員 參事 督辦 科長 特任 簡任 薦任 委任 最高法院 首席檢察官 高等法院			其他各省均等於部。 即無任所大臣，亦為內閣大臣之總稱。 日本親任，為勅任中之最高一級。	
裁判所 判事 無任所公使、大使 大將 大佐 中佐 少佐 大尉 師團長 聯隊長 大隊長 中隊長 小隊長 分隊長 役場 心得、取扱	地方法院 推事 公使、大使銜 上將 上校 中校 少校 上尉 師長 旅長 團長 營長 連長 排長 公所 權署、代理			日軍編制，人數與我國略有不同。	

中日職官異名對照表

中日職官異名對照表

<p>出仕 三託 警視 警視補 警部 警部補 大學總長 某學部部长 教頭 助教授 講師 株式會社 合名會社</p>	<p>供職 諮議、專員 高等警察官 候補高等警察官 警佐 候補警佐 大學校長 某學院院長 首席教師 講師 助教 股份有限公司，株式亦 為股票。</p>
<p>合資會社 支配人 監査役 取締役 相談役 專務理事 為替系 預金課 出張所 放送局 組合 辯護士 計理士</p>	<p>股份兩合公司 經理 監事 理事 顧問 常務理事 匯兌系 存款科 辦事處 廣播電台 同業公會、合作 社 律師 會計師</p>
<p>負有限無限責任</p>	<p></p>

年份及歲數對照表

(民國31年)

公歷	中國年份	日本年份	歲數	公歷	中國年份	日本年份	歲數
1942	民國 31	昭和 17	1	1915	民國 4	大正 4	28
1941	民國 30	昭和 16	2	1914	民國 3	大正 3	29
1940	民國 29	昭和 15	3	1913	民國 2	大正 2	30
1939	民國 28	昭和 14	4	1912	民國 1	大正 1	31
1938	民國 27	昭和 13	5	1911	宣統 3	明治 44	32
1937	民國 26	昭和 12	6	1910	宣統 2	明治 43	33
1936	民國 25	昭和 11	7	1909	宣統 1	明治 42	34
1935	民國 24	昭和 10	8	1908	光緒 34	明治 41	35
1934	民國 23	昭和 9	9	1907	光緒 33	明治 40	36
1933	民國 22	昭和 8	10	1906	光緒 32	明治 39	37
1932	民國 21	昭和 7	11	1905	光緒 31	明治 38	38
1931	民國 20	昭和 6	12	1904	光緒 30	明治 37	39
1930	民國 19	昭和 5	13	1903	光緒 29	明治 36	40
1929	民國 18	昭和 4	14	1902	光緒 28	明治 35	41
1928	民國 17	昭和 3	15	1901	光緒 27	明治 34	42
1927	民國 16	昭和 2	16	1900	光緒 26	明治 33	43
1926	民國 15	昭和 1	17	1899	光緒 25	明治 32	44
1925	民國 14	大正 14	18	1898	光緒 24	明治 31	45
1924	民國 13	大正 13	19	1897	光緒 23	明治 30	46
1923	民國 12	大正 12	20	1896	光緒 22	明治 29	47
1922	民國 11	大正 11	21	1895	光緒 21	明治 28	48
1921	民國 10	大正 10	22	1894	光緒 20	明治 27	49
1920	民國 9	大正 9	23	1893	光緒 19	明治 26	50
1919	民國 8	大正 8	24	1892	光緒 18	明治 25	61
1918	民國 7	大正 7	25	1891	光緒 17	明治 24	52
1917	民國 6	大正 6	26	1890	光緒 16	明治 23	53
1916	民國 5	大正 5	27	1889	光緒 15	明治 22	54

年份及歲數對照表

(續)

公歷	中國年份	日本年份	歲數	公歷	中國年份	日本年份	歲數
1888	光緒 14	明治 21	55	1861	咸豐 11	文久 1	82
1887	光緒 13	明治 20	56	1860	咸豐 10	萬延 1	83
1886	光緒 12	明治 19	57	1859	咸豐 9	安政 6	84
1885	光緒 11	明治 18	58	1858	咸豐 8	安政 5	85
1884	光緒 10	明治 17	59	1857	咸豐 7	安政 4	86
1883	光緒 9	明治 16	60	1856	咸豐 6	安政 3	87
1882	光緒 8	明治 15	61	1855	咸豐 5	安政 2	88
1881	光緒 7	明治 14	62	1854	咸豐 4	安政 1	89
1880	光緒 6	明治 13	63	1853	咸豐 3	嘉永 6	90
1879	光緒 5	明治 12	64	1852	咸豐 2	嘉永 5	91
1878	光緒 4	明治 11	65	1851	咸豐 1	嘉永 4	92
1877	光緒 3	明治 10	66	1850	道光 30	嘉永 3	93
1876	光緒 2	明治 9	67	1849	道光 29	嘉永 2	94
1875	光緒 1	明治 8	68	1848	道光 28	嘉永 1	95
1874	同治 13	明治 7	69	1847	道光 27	弘化 4	96
1873	同治 12	明治 6	70	1846	道光 26	弘化 3	97
1872	同治 11	明治 5	71	1845	道光 25	弘化 2	98
1871	同治 10	明治 4	72	1844	道光 24	弘化 1	99
1870	同治 9	明治 3	73	1843	道光 23	天保 14	100
1869	同治 8	明治 2	74				
1868	同治 7	明治 1	75				
1867	同治 6	慶應 3	76				
1866	同治 5	慶應 2	77				
1865	同治 4	慶應 1	78				
1864	同治 3	元治 1	79				
1863	同治 2	文久 3	80				
1862	同治 1	文久 2	81				

日本時人辭典主要參考資料索引

<p>日本人名大系 人事興信錄 大陸會社便覽 日本官界年鑑 遺德顯彰故人年鑑 勳員錄 支那在留邦人人名錄 ホケツト會社職員錄 世人傳文庫 日本高僧傳 現代婦人傳 日本名將論 近世婦人傳 Pho's who in Japan 中外人名辭典 文化辭典 中華人名鑑 現代國際人名辭典 日本財閥論(二卷)</p>	<p>平凡社發行 人事興信所發行 東洋經濟新報社發行 日本官界情報社發行 大日本頌德會論(非賣品) 內閣印刷局編印 金風社發行 タイヤモンド社發行 大日本雄辯會講談社發行 全上 中央公論社發行 全上 朝日新聞社發行 フーズ・フーイン・ジャパン社發行 中華書局發行 商務印書館發行 日本外務省情報局發行 タイムス出版社發行 味燈書屋發行</p>	<p>興亞財界新入譜 思想家人名辭典 世界人名辭典 日本人名選 東亞先覺志士記傳(三冊) 出版年鑑 朝日年鑑 每日年鑑 大陸年鑑 滿洲年鑑 朝日新聞縮刷本 政界平帖 滿華職員錄 時代ヲ見人ヲ見ル 近衛時代の人物 日本歴史人名辭典 日本系譜綜覽 月旦(原名人の噂) 在滿朝鮮人通訊</p>	<p>投資經濟社論 春秋社論(非賣品) 非凡閣發行 大阪毎日新聞社發行 黑龍社出版部發行 東京堂發行 東京朝日新聞社發行 東京日日新聞社發行 大陸新報社發行 滿洲日日新聞社發行 朝日新聞社發行 政界往來社出版 滿蒙資料協會發行 昭和書房發行 高山書院發行 日置昌一著改造社出版 全上 月旦社發行 在滿朝鮮人通訊社發行</p>
--	---	---	--

日本時人辭典主要參考資料索引

戰時經濟指導者列傳

國際經濟週報雜誌

時の人・噂の人

現代雜誌

人物回覽版

全上

經濟時の人

實業の日本

興三人物譜

エノミスト

時の顔

政界往來

技師者小傳

科學主義工業

時の人・活版の人

雄辯

新人舊人

日本評論

現代名人五分鐘傳記

キング

時人彙誌

日本評論(中國出版)

東亞先人叢話

東亞聯盟

現代日本人名傳

華文大阪每日半月刊

人影・一週一人

讀寶新聞

東人西人

朝日新聞

官報

日本內閣印刷局

政府弘報

蒙古聯合自治政府總務廳

ポイント

新愛知

時人小誌

新申報

現地經濟人漫談

大陸新報

時の顔

日日新聞

人物檢討

報知新聞

今日の人

大阪每日新聞

本辭典人物內容統計表

甲、職業別

一、政府方面

- 1. 陸軍
- 2. 海軍
- 3. 外交
- 4. 其他各省

二、民間方面

- 1. 財界
- 2. 政黨
- 3. 新聞界
- 4. 學界
- 5. 宗教

三、大政翼贊會方面

- 1. 貴族院
- 2. 衆議院

乙、學歷別

一、帝國大學

- 1. 東京帝國大學
- 2. 京都帝國大學
- 3. 其他帝國大學

二、私立大學

三、高等學校專門學校

四、留學

六三、四三%

二〇、四八%

九、一〇%

一〇、六五%

二三、二〇%

二四、六〇%

二〇、一〇%

二、二三%

六、一二%

五、〇〇%

一、一五%

二、五〇%

九、四七%

四、六二%

四、八五%

四五、〇〇%

四〇、五〇%

四、一二%

〇、三八%

一〇、三〇%

五、〇〇%

四、七〇%

丙、年齡別

一、八〇—八八歲

二、七〇—七九歲

三、六〇—六九歲

四、五〇—五九歲

五、四〇—四九歲

六、三〇—三九歲

七、不明

丁、籍貫別

一、關東地方

2. 東京府以外

二、近畿地方

三、中部地方

四、奥羽地方

五、四國地方

六、九州地方

七、北海道

八、不明

五、陸軍士官學校

六、海軍兵學校

七、中等學校

八、其他

九、不明

二〇、九〇%

九、一〇%

一、九〇%

一、一〇%

二、〇〇%

〇、五六%

七、八三%

二三、一二%

四六、四五%

一八、〇五%

一、一一%

二、八八%

二三、二四%

一四、一四%

九、一〇%

一四、一〇%

三〇、三五%

九、一〇%

四、五二%

一五、〇七%

〇、九一%

二、七一%

編後記

昔人之輯尙友錄，以古人爲範圍，本室之輯是書，以時人爲對象。古人之事跡，無復變化，而時人之動態，時有更易，往往過去行動如彼，現在行動如此，甚則今日尙供職中樞，異日已效命疆場，故是書所述，雖力求適合現實，而一轉瞬間，或已化爲陳迹。况關於人物之研究，恆多另設機關，專司其事；茲以日本一國之時人，由本室少數同仁，於日常公務之餘，蒐集編纂；欲期完善，固亦難能之事。

雖然，本室同仁，深感國家之強盛，必由當時人物之優異。認識他國，應認識乎此；取法他國，亦應取法乎此。日本強盛，世所公認，則於日本時人，自當輯有專書，以供國人參考。是以還都之後，即勉就力之所及，隨時採集，創爲是編。掛漏秕謬之處，倘得大雅教正，不惟本室之幸已也。

民國三十一年六月 日

張南山謹識

